兵庫県文化財調査報告　第135-2冊

神戸市西区

玉津田中遺跡

— 第2分冊 —

（黒岡・亀ノ郷・下町・西ケ市・池ノ内地区の調査）

— 田中特定土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財調査報告書Ⅱ —

1994.3

兵庫県教育委員会

神戸市西区

玉津田中遺跡

— 第2分冊 —

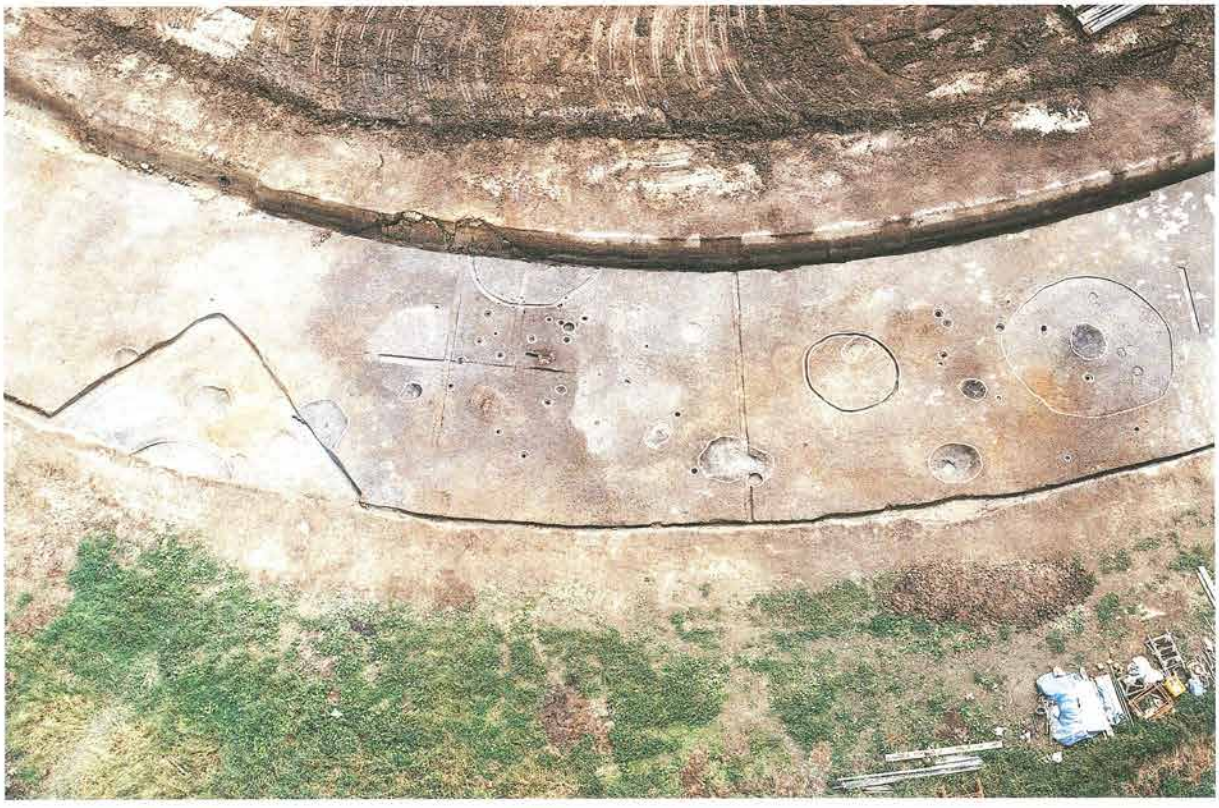
（黒岡・亀ノ郷・下町・西ケ市・池ノ内地区の調査）

調査区空中写真

SD72001　遺物出土状況（亀ノ郷 7 区）

組み合わせ木製品出土状況（亀ノ郷 3 区）

SD72007　遺物出土状況（西ケ市 6 区）



弥生時代前期面（亀ノ郷１区）

弥生時代前期の土器

弥生時代後期の土器

古墳時代前期の土器

古墳時代中期の土器

弥生時代前期の石器

玉・石製模造品

ふいごの羽口

3463

3465

二種の胎土を用いた土器

3463

熱によって変形した土器

例　　言

1．本書は住宅・都市整備公団による田中特定土地区画整理事業に伴って発掘調査を行った兵庫県神戸市西区玉津町田中に所在する玉津田中遺跡の発掘調査報告書である。

2．田中特定土地区画整理事業に伴う玉津田中遺跡の発掘調査報告書は、地区別に第１分冊～５分冊にわけて刊行し、これに第６分冊として総括編が附属する。

3．本書はそのうちの第２分冊にあたり、黒岡地区の一部と亀ノ郷地区・下町地区・西ケ市地区・池ノ内地区の調査を扱う。

4．発掘調査は住宅・都市整備公団の依頼を受けて、兵庫県教育委員会が実施した。

5．玉津田中遺跡の発掘調査は昭和57年度から平成３年度まで実施したが、このうち本書の対象地区については昭和61年度から平成３年度にわたって実施した。

6．本書報告分の整理作業は平成４年度から５年度まで、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所で実施した。

7．遺跡の測量は調査対象範囲全域をおおう座標系を設定し、これに基づいて行った。遺構平面図中の方位は磁北である。標高は東京湾標準海水面(T.P)を使用した。

8．本書の執筆は大平茂、深井明比古、岸本一宏、村上賢治、山下史郎、久保弘幸、中川渉、山田清朝、藤田淳、甲斐昭光、篠宮正、多賀茂治、鈴木敬二、三原慎吾が担当し、編集は菱田淳子が担当した。各執筆分担は目次に示した。

9．発掘調査および報告書作成にあたり、以下の方々の助力を得た。記して感謝の意を表します。
工楽善通・上原真人・村上隆(国立奈良文化財研究所)・亀田修一(岡山理科大学)・定森秀夫(京都文化博物館)・次山淳(京都大学)（所属はいずれも当時、敬称略）

凡　　例

1．遺　　構

本分冊に使用する遺構番号は５桁である。第１桁(１～８)は遺構の時期を示し、第２桁(２)は本分冊に固有の番号である。また遺構は種類ごとに以下の略号を用いた。

（１）遺構の略号

竪穴住居	ＳＨ
掘立柱建物	ＳＢ
土　　坑	ＳＫ
溝	ＳＤ
墓	ＳＸ
旧河道	ＳＲ
柱　　穴	Ｐ

（２）第１桁の示す時期

12001～	縄文時代後期以降
22001～	縄文時代晩期～弥生時代前期
32001～	弥生時代中期前半
42001～	弥生時代中期後半
52001～	弥生時代後期
62001～	弥生時代終末期～古墳時代前期
72001～	古墳時代中期
82001～	古代・中世

2．遺　　物

本分冊に使用する遺物番号は４桁である。第１桁は本分冊に固有の番号である。土器・石器・木器・土製品・金属器その他それぞれについて4001から始めている。また土器の断面は須恵器・土師器・陶磁器を問わず黒塗りを基本としている。

3．座　　標

本分冊に使用している座標は玉津田中遺跡の調査のために兵庫県教育委員会が任意に設定したものである。この座標と国土座標系との関係は第１分冊で説明している。

本 文 目 次

第Ⅰ部　はじめに

第１章　調査の経過　（菱田）……1

第１節　調査に至る経緯

第２節　調査の方法

第３節　調査の経過

第４節　整 理 作 業

第２章　第２分冊該当地区の調査　（菱田）……3

第１節　調査地の概要

第２節　各年度の調査

第３節　整 理 作 業

第Ⅱ部　調査の概要

第１章　調査の成果……6

第１節　黒 岡 地 区　（鈴木）

第２節　亀ノ郷地区　（菱田・篠宮）

第３節　下 町 地 区　（菱田・甲斐・村上）

第４節　西ケ市地区　（藤田・中川）

第５節　池ノ内地区　（中川・久保・岸本）

第Ⅲ部　遺　　構

第１章　縄文時代の遺構……19

第１節　土　　坑　（中川）

第２章　弥生時代前期の遺構……19

第１節　住 居 跡　（山下・菱田・鈴木）

第２節　墓　　（大平・鈴木）

第３節　土　　坑　（山下・菱田・鈴木）

第４節　溝　　（菱田）

第３章　弥生時代中期の遺構……30

第１節　住 居 跡　（久保）

第２節　土　　坑　（久保・菱田）

第３節　溝　　（菱田）

第４章　弥生時代後期～古墳時代前期の遺構……33

第１節　住 居 跡　（中川・久保）

第２節　旧河道・溝　（中川・甲斐・岸本）

第３節　土　　坑　（菱田）

第５章　古墳時代中期の遺構……36

第１節　住 居 跡　（中川・久保）

第２節　掘立柱建物　（菱田）
第３節　土　　坑　（菱田）
第４節　柱　　穴　（菱田）
第５節　水路・溝　（篠宮・菱田）
第６章　古代・中世の遺構……41
第１節　掘立柱建物　（菱田）
第２節　土　　坑　（菱田）
第３節　溝　　（菱田）

第Ⅳ部　遺　　物

第１章　土　　器……45
第１節　縄文時代　（深井）
第２節　弥生時代前期　（深井）
第３節　弥生時代中期　（篠宮）
第４節　弥生時代後期～古墳時代前期　（甲斐）
第５節　古墳時代中期　（菱田）
第６節　歴史時代　（鈴木）
第２章　石　　器　（藤田・三原・久保）……81
第３章　木　　器　（鈴木）……89
第４章　そ　の　他……97
第１節　土製品ほか　（篠宮）
第２節　玉　　類　（大平・菱田）
第３節　金　属　器　（菱田）

第Ⅴ部　自然科学的方法による調査

石器一覧表……100
木器の樹種同定一覧表……104

終わりに……110

挿　図　目　次

挿図１　石　器　20……82

図　版　目　次

巻首図版目次

巻首図版１　調査区空中写真
SD72001 遺物出土状況(亀ノ郷７区)
巻首図版２　組み合わせ木製品出土状況(亀ノ郷３区)
SD72007 遺物出土状況(西ケ市６区)
巻首図版３　弥生時代前期面(亀ノ郷１区)
弥生時代前期の土器
巻首図版４　弥生時代後期の土器
古墳時代前期の土器
巻首図版５　古墳時代中期の土器
巻首図版６　弥生時代前期の石器
巻首図版７　玉・石製模造品
ふいごの羽口
巻首図版８　二種の胎土を用いた土器
熱によって変形した土器

遺 構 図 面

図版１　調査区配置図
図版２　土層断面図(南北)
図版３　黒岡・亀ノ郷・下町地区
弥生時代前期遺構配置図
図版４　黒岡・亀ノ郷・下町地区
遺構配置図　その２
図版５　黒岡・亀ノ郷・下町地区
遺構配置図　その３・４
図版６　亀ノ郷・下町・西ケ市地区　遺構配置図
図版７　亀ノ郷・下町・西ケ市地区
遺構配置図　その２
図版８　池ノ内地区　遺構配置図
図版９　縄文時代　土坑１
(SK12001～12006)
図版10　縄文時代　土坑２
(SK22045)
図版11　弥生時代前期　住居跡１
(SH22001/22002/22007)
図版12　弥生時代前期　住居跡２
(SH22003/22004)
図版13　弥生時代前期　住居跡３
(SH22005/22006)
図版14　弥生時代前期　掘立柱建物
(SB22001)
図版15　弥生時代前期　土器棺墓
(ST22001/22002)
図版16　弥生時代前期　方形周溝墓
(SX22001/22002/ST22007)
図版17　弥生時代前期　土坑墓・木棺墓
(ST22003～22006)
図版18　弥生時代前期　土坑１
(SK22002/22004/22007/22010)
図版19　弥生時代前期　土坑２
(SK22001/22003/22005/22006/
22008/22009/22011/22017)
図版20　弥生時代前期　土坑３
(SK22012～22016/22018～22020)
図版21　弥生時代前期　土坑４
(SK22021/22025～2027/22030/
22034)
図版22　弥生時代前期　土坑５
(SK22022～22024/2028/22029/
22032)
図版23　弥生時代前期　土坑６
(SK22031/22033/22035～22044)
図版24　弥生時代前期　溝
(SD22007/22008/22011)
図版25　弥生時代前期　溝・柱穴
(SD22001/22002/22004/22005/
22009/22010/P22001)
図版26　弥生時代中期　住居跡１
(SH42001/42002)

図版27　弥生時代中期　住居跡２
（SH42003/42004）
図版28　弥生時代中期　土坑１
（SK42001～42004）
図版29　弥生時代後期　住居跡１
（SH52001/52002）
図版30　弥生時代後期　住居跡２
（SH52003/52004）
図版31　古墳時代　住居跡１
（SH62001/72001）
図版32　古墳時代　住居跡２
（SH72002/72003）
図版33　古墳時代　住居跡３
（SH72004/72005）
図版34　池ノ内９区　旧河道
（SR62002）
図版35　池ノ内９区　井堰
（SR62002）
図版36　池ノ内８区　旧河道
（SR62002）
図版37　亀ノ郷地区　水路・溝 変遷図
（SD72001～72004）
図版38　亀ノ郷３区　水路遺物出土状況図
（SD72001）
図版39　亀ノ郷８区　水路遺物出土状況図
（SD72001）
図版40　亀ノ郷７区　水路遺物出土状況図
（SD72001）
図版41　亀ノ郷７区　水路断面図
（SD72001）
図版42　西ケ市７区　水路遺物出土状況
（SD72007）
図版43　掘立柱建物
（SB72001～72003/82001～82003）
図版44　古代・中世　土坑１
（SK82002～82004）
図版45　古代・中世　土坑２・溝
（SK82001/SD82001～82004）
図版46　弥生時代前期　全体図
（縄文時代の遺構を含む）
図版47　弥生時代中期　全体図
図版48　弥生時代後期～古墳時代前期　全体図
図版49　古墳時代中期　全体図
図版50　古代・中世　全体図

遺物図面

図版51　縄文時代土器・弥生時代前期の土器１
（2001～2015）
図版52　弥生時代前期の土器２
（2016～2025）
図版53　弥生時代前期の土器３
（2026～2039）
図版54　弥生時代前期の土器４
（2040～2056）
図版55　弥生時代前期の土器５
（2057～2065）
図版56　弥生時代前期の土器６
（2066～2085）
図版57　弥生時代前期の土器７
（2086～2104）
図版58　弥生時代前期の土器８
（2105～2127）
図版59　弥生時代前期の土器9
（2128～2147）
図版60　弥生時代前期の土器10
（2148～2164）
図版61　弥生時代前期の土器11
（2165～2169）
図版62　弥生時代前期の土器12
（2170～2184）
図版63　弥生時代前期の土器13
（2185～2193）
図版64　弥生時代前期の土器14
（2194～2208）
図版65　弥生時代前期の土器15
（2209～2218）
図版66　弥生時代前期の土器16
（2219～2227）

図版67　弥生時代前期の土器17
（2228～2238）
図版68　弥生時代前期の土器18
（2239～2252）
図版69　弥生時代前期の土器19
（2253～2263）
図版70　弥生時代中期の土器１
（2264～2279）
図版71　弥生時代中期の土器２
（2280～2298）
図版72　弥生時代後期～古墳時代前期の土器１
（2299～2316）
図版73　弥生時代後期～古墳時代前期の土器２
（2317～2329）
図版74　弥生時代後期～古墳時代前期の土器３
（2330～2347）
図版75　弥生時代後期～古墳時代前期の土器４
（2348～2372）
図版76　弥生時代後期～古墳時代前期の土器５
（2373～2395）
図版77　弥生時代後期～古墳時代前期の土器６
（2396～2410）
図版78　弥生時代後期～古墳時代前期の土器７
（2411～2428）
図版79　弥生時代後期～古墳時代前期の土器８
（2429～2441）
図版80　弥生時代後期～古墳時代前期の土器９
（2442～2453）
図版81　弥生時代後期～古墳時代前期の土器10
（2454～2464）
図版82　弥生時代後期～古墳時代前期の土器11
（2465～2497）
図版83　弥生時代後期～古墳時代前期の土器12
（2498～2523）
図版84　弥生時代後期～古墳時代前期の土器13
（2524～2534）
図版85　弥生時代後期～古墳時代前期の土器14
（2535～2554）
図版86　弥生時代後期～古墳時代前期の土器15
（2555～2569）
図版87　弥生時代後期～古墳時代前期の土器16
（2570～2582）
図版88　弥生時代後期～古墳時代前期の土器17
（2583～2621）
図版89　弥生時代後期～古墳時代前期の土器18
（2622～2646）
図版90　古墳時代中期の土器１
（2647～2698）
図版91　古墳時代中期の土器２
（2699～2722）
図版92　古墳時代中期の土器３
（2723～2741）
図版93　古墳時代中期の土器４
（2742～2785）
図版94　古墳時代中期の土器５
（2786～2824）
図版95　古墳時代中期の土器６
（2825～2856）
図版96　古墳時代中期の土器７
（2857～2877）
図版97　古墳時代中期の土器８
（2878～2895）
図版98　古墳時代中期の土器９
（2896～2908）
図版99　古墳時代中期の土器10
（2909～2926）
図版100　古墳時代中期の土器11
（2927～2934）
図版101　古墳時代中期の土器12
（2935～2945）
図版102　古墳時代中期の土器13
（2946～2953）
図版103　古墳時代中期の土器14
（2954～2959）
図版104　古墳時代中期の土器15
（2960～2966）
図版105　古墳時代中期の土器16
（2967～2972）
図版106　古墳時代中期の土器17
（2973～2978）

図版107　古墳時代中期の土器18
(2979～2984)
図版108　古墳時代中期の土器19
(2985～2991)
図版109　古墳時代中期の土器20
(2992～2998)
図版110　古墳時代中期の土器21
(2999～3005)
図版111　古墳時代中期の土器22
(3006～3008)
図版112　古墳時代中期の土器23
(3009～3014)
図版113　古墳時代中期の土器24
(3015～3047)
図版114　古墳時代中期の土器25
(3048～3059)
図版115　古墳時代中期の土器26
(3060～3073)
図版116　古墳時代中期の土器27
(3074～3080)
図版117　古墳時代中期の土器28
(3081～3114)
図版118　古墳時代中期の土器29
(3115～3127)
図版119　古墳時代中期の土器30
(3128～3135)
図版120　古墳時代中期の土器31
(3136～3160)
図版121　古墳時代中期の土器32
(3161～3186)
図版122　古墳時代中期の土器33
(3187～3220)
図版123　古墳時代中期の土器34
(3221～3244)
図版124　古墳時代中期の土器35
(3245～3251)
図版125　古墳時代中期の土器36
(3252～3284)
図版126　古墳時代中期の土器37
(3285～3309)
図版127　古墳時代中期の土器38
(3310～3333)
図版128　古墳時代中期の土器39
(3334～3342)
図版129　古墳時代中期の土器40
(3343～3375)
図版130　古墳時代中期の土器41
(3376～3400)
図版131　古墳時代中期の土器42
(3401～3411)
図版132　古墳時代中期の土器43
(3412～3416)
図版133　古墳時代中期の土器44
(3114/3417～3425)
図版134　古代・中世の土器
(3426～3445)
図版135　石器1
(2001～2027)
図版136　石器2
(2028～2036)
図版137　石器3
(2037)
図版138　石器4
(2037・2038)
図版139　石器5
(2039・2040)
図版140　石器6
(2041)
図版141　石器7
(2042)
図版142　石器8
(2043)
図版143　石器9
(2044・2045)
図版144　石器10
(2046・2047)
図版145　石器11
(2048)
図版146　石器12
(2049～2054)

図版147　石器13
(2055～2063)
図版148　石器14
(2064～2067)
図版149　石器15
(2068～2075)
図版150　石器16
(2076～2082)
図版151　石器17
(2083～2088)
図版152　石器18
(2089～2105)
図版153　石器19
(2106～2111)
図版154　石器20
(2112～2123)
図版155　石器21
(2124～2130)
図版156　玉・石製模造品
(2131～2247)
図版157　木器1
(2001～2003)
図版158　木器2
(2004～2006)
図版159　木器3
(2007～2013)
図版160　木器4
(2014～2018)
図版161　木器5
(2019～2025)
図版162　木器6
(2026～2031)
図版163　木器7
(2032～2034)
図版164　木器8
(2035～2040)
図版165　木器9
(2041～2052)
図版166　木器10
(2053～2062)
図版167　木器11
(2063～2069)
図版168　木器12
(2070～2074)
図版169　木器13
(2075～2080)
図版170　木器14
(2070・2071・2075～2080)
図版171　木器15
(2081～2083)
図版172　木器16
(2084～2086)
図版173　木器16
(2087～2090)
図版174　木器18
(2091～2093)
図版175　木器19
(2094～2098)
図版176　木器20
(2099～2104)
図版177　木器21
(2105～2107)
図版178　木器22
(2108～2121)
図版179　木器23
(2122～2135)
図版180　木器24
(2136～2139)
図版181　木器25
(2140～2144)
図版182　木器26
(2145～2164)
図版183　木器27
(2165～2173)
図版184　木器28
(2174～2182)
図版185　木器29
(2183～2187)
図版186　木器30
(2188～2194)

図版187　木器31
(2195～2200)
図版188　木器32
(2201～2205)
図版189　木器33
(2206～2210)
図版190　木器34
(2211～2216)
図版191　木器35
(2217～2221)
図版192　土製品・鉄器ほか
(3446～3458)

写真図版目次

遺構写真

図版193　黒岡地区
1．1区　第1面(南東から)
2．1区　SH52003(南西から)
図版194　黒岡地区
1．1・4・11区　第2面(南東から)
2．4区　SH52001(北東から)
3．1区　SH52002(東から)
図版195　黒岡・亀ノ郷地区
1．2区　北部全景(南西から)
2．2区　南部全景(南西から)
3．亀ノ郷9区　全景(北西から)
4．2区　SK22002(東から)
図版196　黒岡地区　弥生前期 土坑
1．1区　SK22020(南東から)
2．2区　SK22001(東から)
3．2区　SK22006(東から)
図版197　黒岡・亀ノ郷地区
1．亀ノ郷9区　SD22004 遺物出土状況
2．亀ノ郷9区　SD22004 断面
3．KM7区　SK22021
4．KM7区　SK22021 遺物出土状況
図版198　黒岡地区
1．1区　ST22002(南から)
2．1区　ST22002 断面
3．2区　ST22003(西から)
図版199　黒岡地区
1．2区　ST22001(西から)
2．2区　ST22001 断面
3．2区　SK82001(西から)
図版200　亀ノ郷地区
1．1区　上層水田(西から)
2．1区　中層水田(北から)
3．1区　下層水田(南から)
図版201　亀ノ郷地区
1．1区　下層水田全景
2．1区　弥生時代前期面全景
図版202　亀ノ郷地区
1．1区　SH22006(南東から)
2．1区　SH22006 上層遺物出土状況
3．1区　SH22005(北から)
図版203　亀ノ郷地区
1．D3-2G区　SH22004(南西から)
2．D3-2G区　SH22004 中央土坑
(北西から)
3．1区　SH22005 中央土坑断面(北から)
4．1区　SK22037(北東から)
図版204　亀ノ郷地区
1．1区　SB22001(南西から)
2．1区　SB22001 上層遺物出土状況
3．1区　SB22001 焼土1(西から)
図版205　亀ノ郷地区
1．D3区　全景(南西から)
2．D3-2G区　SK22032(北東から)
3．D3-2G区　SK22024(南から)
図版206　亀ノ郷地区
1．1区　SD22007・22008(東から)
2．1区　SD22005(南東から)
3　D3区　SD22004(北東から)

図版207　亀ノ郷地区
1．11区　遺物出土状況
2．13区　弥生時代前期 遺構検出状況
図版208　亀ノ郷地区
1．2区　第1水田面(南から)
2．2区　第2水田面 (南から)
3．2区　第3水田面(南西から)
図版209　亀ノ郷地区
1．4区　第3水田面(北西から)
2．4区　弥生時代前期 水田面(北西から)
3．4区　弥生時代前期 水田面(南東から)
図版210　亀ノ郷地区
1．3区　SD72001 上層(東から)
2．3区　SD72001(東から)
3．3区　SD72001 断面(南東から)
4．3区　SD72001(南東から)
5．3区　SD72001 完掘状況(南東から)
図版211　亀ノ郷地区
1．3区　SD72001 遺物出土状況(南東から)
2．3区　木製品出土状況(北西から)
3．3区　木製品出土状況(南西から)
図版212　亀ノ郷地区
1．3区　組み合わせ木製品出土状況(南から)
2．3区　組み合わせ木製品出土状況(北から)
3．3区　組み合わせ木製品出土状況(西から)
図版213　亀ノ郷地区
1．6区　SD72001 上層(北西から)
2．6区　SD72001(北西から)
3．6区　SD72001 断面(北西から)
4．6区　SD72001 最下層(南東から)
図版214　亀ノ郷地区
1．6区　水田面(北西から)
2．5区　SD42001(南から)
3．5区　SD22012(南東から)
図版215　亀ノ郷地区
1．7区　作業風景(南から)
2．7区　SD72001 遺物出土状況(南から)
3．7区　全景(南東から)
図版216　亀ノ郷地区
1．7区　SD72001 遺物出土状況(南から)
2．7区　SD72001 土器群Ⅲ(南西から)
3．7区　SD72001 土器群Ⅰ(東から)
図版217　亀ノ郷地区
1．7区　SD72001 完掘状況(南から)
2．7区　弥生時代 水路完掘状況(南から)
3．7区　東端旧河道(南東から)
図版218　亀ノ郷地区
1．8区　全景(東から)
2．8区　SD72001 完掘状況(南東から)
3．8区　SD72001 上層(東から)
4．8区　SB72001(北から)
図版219　亀ノ郷地区
1．8区　SD72001 遺物出土状況(東から)
2．8区　西部遺物出土状況(北から)
3．8区　東部遺物出土状況(西から)
図版220　下町地区
1．1区　古墳時代 水田面(北西から)
2．1区　第2遺構面(北西から)
3．1区　水口(北から)
4．1区　大畦畔(北西から)
図版221　下町地区
1．2区　古墳時代 水田面(南西から)
2．2区　SR62001(南西から)
3．2区　弥生時代前期 遺構面(北東から)
図版222　下町地区
1．4区　南部古墳時代 水田面(南西から)
2．4区　南部弥生時代後期 水田面(南西から)
3．4区　弥生時代中期 旧河道(南西から)
4．4区　北部水田面(南西から)
図版223　下町地区
1．4・6区　全景(北西から)
2．6区　SK52002(北東から)
3．4区　SD52005(南西から)
4．7区　SD82001(北東から)
図版224　下町地区
1．6区　弥生時代前期 水田面(南東から)
2．6区　弥生時代前期 全景(北西から)
3．5区　全景(南東から)
図版225　下町地区
1．8区　SD42001(南西から)

２．８区　SD42001 断面(南西から)
３．８区　上層水田面(北西から)
図版226　下町地区
１．８区　下層水田面(北西から)
２．９区　水田面(南西から)
３．８区　水田面(北東から)
図版227　西ケ市地区
１．１区　中世 水田面 (南から)
２．１区　SD62001(北から)
３．１区　SD62001 下層遺物
出土状況(東から)
４．１区　SD62001 下層遺物
付近断面(南から)
図版228　西ケ市地区
１．１区　全景(南から)
２．１区　SH52004・SD52004(西から)
３．１区　SD52004 遺物出土状況(北東から)
図版229　西ケ市地区
１．２区　古墳時代 水田面(北東から)
２．２区　水田畦畔と溝 (北西から)
３．２区　水田畦畔と溝(北西から)
図版230　西ケ市地区
１．２区　全景(航空写真)
２．２区　北半全景(北から)
３．２区　南半全景(北東から)
４．２区　南半全景(南西から)
図版231　西ケ市地区
１．２区　SD72008(北西から)
２．２区　方形周溝墓全景(北東から)
３．２区　SD72008 断面 (南東から)
４．２区　SX22001 北溝断面(南西から)
図版232　西ケ市地区
１．２区　SX22001(北から)
２．２区　ST22005 断面(南西から)
３．２区　ST22006 断面(西から)
４．２区　ST22007(東から)
図版233　西ケ市地区
１．２区　中世 土器溜り(南から)
２．２区　SB72003(西から)
３．２区　SR62002(南東から)
図版234　西ケ市地区
１．１・３・４区　全景(北から)
２．３区　全景(東から)
３．３区　砂礫層遺物出土状況
４．４区　SR62002(北から)
図版235　西ケ市地区
１．６区　古墳時代 面(西から)
２．２・６区　全景(西から)
３．６区　古墳時代 水田面(南西から)
図版236　西ケ市地区
１　２・６区　SB82001(北西から)
２　６区　SD72001 遺物出土状況(北から)
３　６区　SD72001(北から)
図版237　西ケ市地区
１．７区　第２面(南から)
２．７区　第３面(南から)
３．７区　SB72002(南から)
図版238　西ケ市地区
１．７区　SD72007 遺物出土状況(北東から)
２．７区　SD72007 砂礫除去後(北東から)
３．７区　SD72007 完掘状況(北東から)
４．７区　SD72007 遺物出土状況(南西から)
５．７区　SD72007 遺物出土状況(北東から)
図版239　西ケ市地区
１．ＫＭ７区　遺物出土状況(西から)
２．ＫＭ７区　遺物出土状況(北から)
３．ＫＭ７区　遺物出土状況(北から)
図版240　西ケ市地区
１．６区　足跡検出状況
２．ＫＭ12区　足跡検出状況
３．９区　SH22007
図版241　池ノ内地区
１．１区　全景(航空写真)
２．１区　SR62002 付近(北東から)
３．１区　SD72010(北東から)
図版242　池ノ内地区
１．１区　扉出土状況(西から)
２．１区　木器出土状況
３．１区　木器出土状況
図版243　池ノ内地区

1．1区　住居跡周辺(航空写真)
2．1区　SH72001(北から)
3．1区　SH72004(東から)
図版244　池ノ内地区
1．1区　SH72005(南東から)
2．1区　SH72005 カマド(北西から)
3．1区　SH42003(南東から)
図版245　池ノ内地区
1．1区　SH42001(南東から)
2．1区　SH42001 土器出土状況(南から)
3．1区　SH42004(南東から)
図版246　池ノ内地区
1．8区　全景(南東から)
2．8区　SR62002(北西から)
3．8区　SR62002 遺物出土状況(北東から)
4．8区　SR62002 東岸断面(北から)
図版247　池ノ内地区
1．8区　臼出土状況(南西から)
2．9区　全景(南東から)
3．9区　SH42002(北東から)
図版248　池ノ内地区
1．9区　木組遺構(北から)
2．9区　井堰(東から)
3．9区　井堰(北から)
図版249　池ノ内地区
1．10区　全景(東から)
2．10区　SR62002 東岸杭列(北から)
3．10区　杭列(南から)
図版250　池ノ内地区
1．12区　古墳時代 水田面(北西から)
2．11区　古墳時代 面(南から)
3．12区　SR62002(南から)
図版251　池ノ内地区
1．14区　西部全景(北西から)
2．14区　西部完掘状況(北西から)
3．14区　住居跡群完掘状況(北西から)
図版252　池ノ内地区
1．14区　SH72003(北から)
2．14区　SH72003(北から)
3．14区　SH72003　南辺土坑(北から)
図版253　池ノ内地区
1．16区　西部全景(北西から)
2．16区　SH62001(北西から)
3．16区　SB82003(北西から)
4．16区　SB82002(北東から)
図版254　池ノ内地区
1．14～16区　(航空写真)
2．15区　北部(南西から)
図版255　池ノ内地区
1．14区　SK22045(南西から)
2．15区　柱列(南西から)
3．17区　西部全景(北西から)
図版256　池ノ内地区
1．17区　東部全景(北西から)
2．17区　SK12005 断面(南西から)
3．17区　SK12005・12006(南西から)

遺物写真

図版257　縄文土器・弥生時代前期の土器1
図版258　弥生時代前期の土器2
図版259　弥生時代前期の土器3
図版260　弥生時代前期の土器4
図版261　弥生時代前期の土器5
図版262　弥生時代前期の土器6
図版263　弥生時代前期の土器7
図版264　弥生時代前期の土器8
図版265　弥生時代前期の土器9
図版266　弥生時代前期の土器10
図版267　弥生時代前期の土器11
図版268　弥生時代前期の土器12
図版269　弥生時代前期の土器13
図版270　弥生時代前期の土器14
図版271　弥生時代前期の土器15
図版272　弥生時代前期の土器16
図版273　弥生時代中期の土器1
図版274　弥生時代中期の土器2
図版275　弥生時代後期～古墳時代前期の土器1
図版276　弥生時代後期～古墳時代前期の土器2

図版277　弥生時代後期～古墳時代前期の土器３
図版278　弥生時代後期～古墳時代前期の土器４
図版279　弥生時代後期～古墳時代前期の土器５
図版280　弥生時代後期～古墳時代前期の土器６
図版281　弥生時代後期～古墳時代前期の土器７
図版282　弥生時代後期～古墳時代前期の土器８
図版283　弥生時代後期～古墳時代前期の土器９
図版284　弥生時代後期～古墳時代前期の土器10
図版285　弥生時代後期～古墳時代前期の土器11
図版286　古墳時代中期の土器１
図版287　古墳時代中期の土器２
図版288　古墳時代中期の土器３
図版289　古墳時代中期の土器４
図版290　古墳時代中期の土器５
図版291　古墳時代中期の土器６
図版292　古墳時代中期の土器７
図版293　古墳時代中期の土器８
図版294　古墳時代中期の土器９
図版295　古墳時代中期の土器10
図版296　古墳時代中期の土器11
図版297　古墳時代中期の土器12
図版298　古墳時代中期の土器13
図版299　古墳時代中期の土器14
図版300　古墳時代中期の土器15
図版301　古墳時代中期の土器16
図版302　古墳時代中期の土器17
図版303　古墳時代中期の土器18
図版304　古墳時代中期の土器19
図版305　古墳時代中期の土器20
図版306　古墳時代中期の土器21
図版307　古墳時代中期の土器22
図版308　古墳時代中期の土器23
図版309　古墳時代中期の土器24
図版310　古墳時代中期の土器25
図版311　古墳時代中期の土器26
図版312　古墳時代中期の土器27
図版313　古墳時代中期の土器28
図版314　古墳時代中期の土器29
図版315　古墳時代中期の土器30
図版316　古墳時代中期の土器31
図版317　古墳時代中期の土器32
図版318　古墳時代中期の土器33
図版319　古墳時代中期の土器34
図版320　古墳時代中期の土器35
図版321　古墳時代中期の土器36
図版322　古墳時代中期の土器37
図版323　古墳時代中期の土器38
図版324　古墳時代中期の土器39
図版325　古墳時代中期の土器40
図版326　古代・中世の土器
図版327　石器１
図版328　石器２
図版329　石器３
図版330　石器４
図版331　石器５
図版332　石器６
図版333　石器７
図版334　石器８
図版335　石器９
図版336　石器10
図版337　石器11
図版338　石器12
図版339　石器13
図版340　石器14
図版341　石器15
図版342　石器16
図版343　石器17
図版344　石器18
図版345　石器19
図版346　木器１
図版347　木器２
図版348　木器３
図版349　木器４
図版350　木器５
図版351　木器６
図版352　木器７
図版353　木器８
図版354　木器９
図版355　木器10
図版356　木器11

図版357　木器12
図版358　木器13
図版359　木器14
図版360　木器15
図版361　木器16
図版362　木器17
図版363　土製品・鉄器ほか

第Ⅰ部　はじめに

第１章　調査の経過

第１節　調査に至る経緯

昭和48年３月、神戸市垂水区(現西区)玉津町田中において地元住民主体の開発計画がたてられ、玉津地区土地区画整理事業の事前調査と設計事務が始まった。地元と神戸市の協議を経て、昭和53年３月に事業は日本住宅公団(現住宅・都市整備公団)に移管され、総面積約31haの大規模開発事業として、用地買収から着手されることとなった。

一方、昭和53年度に神戸市教育委員会が事業対象地域の埋蔵文化財包蔵地の分布調査を行ったところ、遺物の散布が全域にみとめられ、事業計画地全域にわたり事前の確認調査の必要性があるという結論に至った。

種々の事情により、昭和57年４月から兵庫県教育委員会が確認調査を開始した。以上の調査に至る経過については、第１分冊に詳しく述べられているので参照されたい。

第２節　調査の方法

前節に述べたように田中特定地区区画整理事業は総面積約31haに及ぶ大規模な事業であり、しかもその対象地域は昭和53年度の神戸市教育委員会の分布調査から、遺物の散布がほぼ全域に認められる大規模な遺跡であることが予想されていた。

昭和57年、各水田に２ｍ×２ｍのグリッドを掘削する方法で確認調査が始まったが、やがて重機による幅２～４ｍの長いトレンチ(ＫＭトレンチ)を掘削する調査方法に変更した。トレンチ調査は微地形の形成と変遷をさぐる目的で行い、断面の観察及び土層図の作成は地理学専攻の高橋学・前葉和子が行った。その結果、旧河道・微高地・埋没段丘崖の範囲を予め想定した上での全面調査が可能となった。

各種図面実測の際の基本座標系は、玉津田中遺跡の調査の為に任意に設定した。それをそのまま本報告でも採用している。その南北方向の基線は真北からは21°43′37″東へふれている。座標系は50mグリッドで設定しており、東西軸は西からＡ・Ｂ・Ｃ…とアルファベットで示し、南北軸は北から０・１・２…とアラビア数字で示している。なお、各グリッド内の10mメッシュは東西はａｂｃｄｅの小文字で、南北はⅠⅡⅢⅣⅤとローマ数字で示している。また、各50mグリッドの名称はその北西隅で交差する座標軸の名称を用いてＣ６グリッドというふうに示している。

第３節　調査の経過

確認調査　初年度の昭和57年度は、調査の対象地のほぼ南半分にあたる地区の確認調査を春と冬の二度に分けて実施した。字名では二ノ郷・池ノ内・徳政・竹添・辻ケ内に相当する。春の第１次確認調査は兵庫県教育委員会の大平茂・山下史郎が行い、冬の第２次確認調査には

上記の２名に県教育委員会の井守徳男が加わり、地理学専攻の高橋学・前葉和子(当時立命館大学大学院)も調査に参加した。

昭和58年度の第３次確認調査は、調査対象地のほぼ北半分、字名では黒岡・亀ノ郷・下町・西ケ市・狭間・唐土に相当する部分について調査を実施している。調査は山本三郎・山下史郎が担当し、高橋学・前葉和子も参加し、ＫＭ１～３トレンチを掘削した。

全面調査 昭和59年度からトレンチによる確認調査(ＫＭ４～12トレンチ)と並行して、盛土を行う宅地予定部分を除き、地下深く埋設物を設置する道路部分の全面調査が始まる。竹添地区・辻ケ内地区の一部の全面調査である。これらの全面調査地区は帯状に長い形をしており、調査時にはトレンチと呼んでいた。

昭和60年度から本格的に全面調査が展開し、調査担当者も年度当初は山本三郎・甲斐明光の２名であったが、途中より深井明比古・村上泰樹・別府洋二・藤田淳・篠宮正の５名が加わり大きく増員された。弥生時代の水田・方形周溝墓のある沖積地の徳政・二ノ郷地区や、弥生時代の遺構・遺物の集中する竹添地区の一部の全面調査を行った。

それ以降、国道175号線から分岐して事業対象地を一周する幅12mの幹線道路用地を優先し、次いで各区画を分かつ６m幅の道路用地へと本体工事の進捗状況に応じて調査を行った。昭和61年度は深井明比古・村上賢治・藤村淳子・篠宮正の４名に大平茂・中川渉・久保弘幸が加わり、二ノ郷地区の方形周溝墓群や竹添地区・徳政地区といった沖積地ばかりでなく、段丘上の池ノ内地区の調査も行った。この年度から調査担当者が各分担のトレンチを平行して調査する体制が明確になった。続く昭和62年度は深井明比古・岸本一宏・中川渉・藤村淳子・篠宮正で亀ノ郷地区・下町地区の弥生時代前期の遺構の調査と池ノ内地区などの調査を行った。

昭和63年度及び平成元年度は大平茂を頭として、中川渉・山田清朝・藤田淳・甲斐昭光・菱田淳子・篠宮正らのメンバーで亀ノ郷地区・池ノ内地区・下町地区・西ケ市地区・辻ケ内地区・竹添地区・二ノ郷地区などで主に６m幅の道路用地の調査を続けた。

平成２年から買収の遅れていた狭間・唐土地区の確認調査と全面調査が始まる。調査担当者も大幅に入れ替わり、山下史郎・中川渉・多賀茂治・鈴木敬二・広野誠ら５名を中心に山上雅弘・三原慎吾らが協力した。また、黒岡地区もこの年度の調査である。そして平成３年度に狭間・唐土地区および辻ケ内地区の調査を終え、10年に及ぶ調査を終了した。

第４節　整理作業

１．整理作業に至る経緯

出土遺物 整理作業は、発掘調査と並行して、現場事務所での作業を開始した。すなわち遺物の水洗い、土器・石器のネーミング作業を行った。木器については35ミリネガカラーによるメモ写真を撮影し、簡単な計測を行って遺物カードを作成した。また、写真・遺構実測図の一次的な整理を行い、１/100の遺構配置図面を作成した。

玉津田中遺跡の調査は上記のように多年度にわたり、調査の面積も広範囲に及び、土器約4000箱・石器約13000点(内製品は3300点)・木器2100点余りと、出土した遺物の量も莫大な量であり、１冊の報告書にまとめあげる限界を越えていた。また、調査年度ごとの調査

区の位置や遺構の時期もばらばらで、年度単位で報告書をまとめる方法は遺跡としてのつながりをとらえるのに困難で不適当であった。かといって、遺跡全体を時期ごとに分けて報告する方法も、調査担当者が上記のように多数であり、圧倒的な量の弥生時代の遺物の量を考えると現実的でないと思われた。また、整理に要する多くの人員や多額の費用の確保が問題となり、調査の進展とはうらはらに、報告書作成に向けての整理作業は長らく棚あげとなっていた。

整理の方針　しかし平成２年度に各担当者の合議のもと、玉津田中遺跡全体をいくつかの地区に分け報告を行う方針を決定した。具体的には、方形周溝墓・水田といった弥生の沖積地の遺構を中心とする二ノ郷・徳政・黒岡地区、弥生前期の微高地から段丘にかけての黒岡・亀ノ郷・下町・西ケ市・池ノ内地区、段丘上の狭間・唐土地区、中世の遺構の集中する辻ケ内地区、弥生時代の居住域にあたる竹添地区の５つに大きく分け、５分冊の報告を行う計画を立てた。この方法をとっても調査担当者は各分冊で多数に及ぶが、各分冊ごとに別の編集者をおき、編集者に全権を委任することとなった。これ以降、整理の方針が確定したことにより、整理費用の要求や整理体制の確保に向けて動き始めた。

玉津田中遺跡全体の調査最終年度の平成３年度から、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所において、遺物の接合以下の作業が開始した。初年度には篠宮を中心に第１分冊の土器の接合・補強、土器・石器・木器の実測と、大量の遺物のある第５分冊の作業の一部を行った。第２分冊については、続く平成４年度から行われることとなった。

第２章　第２分冊該当地区の調査

第１節　調査地の概要

この第２分冊で報告する調査区は、小字名では黒岡・亀ノ郷・下町・西ケ市・池ノ内地区に及ぶ。黒岡地区の一部は既に第１分冊に報告されているが、ここでは、亀ノ郷地区に続く弥生前期の微高地にあたる部分、具体的には黒岡１区の一部と黒岡２・４・11区を報告する。この微高地の周辺は水田地帯で、おそらく弥生前期にまで遡る水田面が数枚重なっている地区である。

池ノ内地区及び西ケ市地区は埋没段丘上にあたり、一つの遺構面に各時期の遺構が混在している。また、段丘崖沿いには旧河道がはしり、それに流れ込む大きな水路が流れている。この旧河道および水路中からは弥生時代後期から古墳時代中頃の大量の土器・木器が出土した。

第２節　各年度の調査

１．第３次確認調査（遺跡調査番号：830042）

担 当 者　山本三郎・山下史郎

昭和58年、亀ノ郷地区にあたるＤ３地区において、一部のグリッドの拡張をおこない弥生前期の住居跡・土壙・溝などを確認している。また、ＫＭ１・３トレンチで水路を確認

している。

2．第５次調査（遺跡調査番号：840016）

担 当 者　山本三郎・加古千恵子・中川渉

また、昭和59年にはＫＭ７トレンチを拡張して古墳時代の水路を調査している。

3．第７次調査（遺跡調査番号：860011）

担 当 者　深井明比古・村上賢治・藤村淳子・篠宮正・大平茂・中川渉・久保弘幸

昭和61年度は、下町１区と池ノ内１区の調査を行った。また、宅地をめぐる水路の立会調査で西ケ市９区を調査している。

4．第８次調査（遺跡調査番号：870011）

担 当 者　深井明比古・岸本一宏・中川渉・藤村淳子・篠宮正

昭和62年度は、亀ノ郷１・７区・下町２区及び池ノ内８～10区を調査した。

5．第９次調査（遺跡調査番号：880011）

担 当 者　大平茂・中川渉・山田清朝・藤田淳・甲斐昭光・菱田淳子・篠宮正

昭和63年度は亀ノ郷３・５・６・８区と西ケ市地区、下町８・９区を調査している。

6．第11次調査（遺跡調査番号：890011）

担 当 者　大平茂・中川渉・藤田淳・甲斐昭光・菱田淳子・篠宮正

平成元年は亀ノ郷２・４区・下町４～７区・池ノ内11・12・14～17区および亀ノ郷10区（仮水路）を調査している。

7．第13次調査（遺跡調査番号：900009）

担 当 者　山下史郎・中川渉・多賀茂治・鈴木敬二・広野誠・山上雅弘・三原慎吾

平成２年度は黒岡１・２・４・11区・亀ノ郷９区・池ノ内17区の一部分、および亀ノ郷12・13区を調査している。

8．第14次調査（遺跡調査番号：910029）

担 当 者　中川渉・多賀茂治・鈴木敬二・広野誠・深江英憲

平成３年度は西ケ市８区・池ノ内18区を調査した。

第３節　整理作業

遺物量　この第２分冊で報告する黒岡・亀ノ郷・下町・西ケ市・池ノ内地区から出土した遺物の量は土器612箱、木器590点、石器2608点（製品は打製品80点、磨製品27点）である。

平成４年度　この年の前半に菱田を中心に土器の接合・補強・実測を行った。後半は３分冊及び５分冊関連の接合・補強作業を行っている。また、石器の実測及び木器の実測や樹種同定や保存処理も並行して行った。

作業は以下の職員が担当した。また、遺物の実測図のチェックは後に述べる各執筆者が行っている。

平成５年度　この年度には、復元・写真撮影・トレース・レイアウト作業を行った。写真撮影は委託による。

また、遺物のレイアウト案の作成は各執筆者が担当し、遺構図補正及び遺構トレース原図作成は調査担当者及び菱田が行った。

これらの作業に関わったものは以下のとおりである。

整理普及班

技術職員	菱田淳子
主任	村上賢治(木器保存処理担当)
主査	加古千恵子(金属器保存処理担当)
主任技術員	山口卓也・古谷章子・小川美奈・宮田麻子・蜜谷美音
図化技術員	石野照代・二階堂康・木村淑子・中田明美・茨木恵美子・前田千栄子・松村馨・水谷幸子・飯田章子・吉田優子・布施英子・佐伯純子・早川亜紀子・吉田優子・横山麻子
図化補助技術員	木場裕美・蓬莱洋子・蔵幾子
日々雇用職員	真田美恵子・喜多山好子・船木昌美・赤松千鶴・小山みゆき・鈴木まき子・佐藤裕子

第Ⅱ部　調査の概要

第1章　調査の成果

第1節　黒岡地区

概要（図版3・5）

平成元年度に調査した二ノ郷地区の北側、昭和62年度に調査した亀ノ郷地区の西側にある。この地区の北東部(黒岡1・2・11区と、4区の東部)は亀ノ郷地区から続く弥生時代前期の微高地で、一部後期の遺構が重複している。この微高地の西裾を北から南に流れる旧河道をはさんだ西側は弥生時代中期の水田などで、二ノ郷地区から続くものである。本報告は黒岡地区北東部の微高地の部分について報告するものである。

次に各調査区について概要を説明する。

1．黒岡1・11区・4区の東端部（図版193・194）

亀ノ郷地区から続く微高地の西南端にあたる。検出した遺構面は弥生時代後期、弥生時代前期上層、弥生時代前期下層の3面である。ただし弥生時代前期の上層・下層は検出面の差異であり、層位の違いを認識して掘り分けたものではない。

弥生時代後期　竪穴住居(SH52001・52002・52003)、溝、土坑などが検出され、微高地の南端は旧河道により切られている。竪穴住居SH52003は埋土中に炭化材・焼土を多量に含むことから焼失住居と考えられる。竪穴住居SH52001・52002は一面下の弥生時代前期の面で検出されたが、埋土中に含まれる土器から、時期が弥生時代後期のものと推定される。

前期上層　壺棺墓SX22002、土坑が検出された。壺棺墓は口縁部が欠けた壺を、口縁部が西を向くように寝かせて埋葬したものである。

前期下層　竪穴住居SH22003、土坑が検出された。土坑SK22020には多量の弥生時代前期の土器が廃棄されていた。

2．黒岡2区（図版195）

黒岡1区とおなじく、亀ノ郷地区から続く微高地の西端にあたり、弥生時代前期の遺構が主体となる。微高地の西端は弥生時代中期以降の旧河道によって浸食されている。遺構面はほぼ1面であるが、南端部では2面検出されている。遺構は竪穴住居、土坑が多量に検出されたほか、壺棺墓が1基検出されている。壺棺墓SX22001は弥生時代前期のもので、器高約40cmの完形の壺を胴部に穿孔し、立位で埋葬している。

また黒岡2区の北部(亀ノ郷9区との交差点付近)で検出された土坑SK82001は、内部に板材や丸太、杭などが埋められていたものであるが、時期は不明である。

第2節　亀ノ郷地区

概要（図版3・4・6）

亀の郷地区は弥生時代前期の微高地に住居跡などの遺構がみられるほかは、複数の水田

面と溝・水路・旧河道の調査が中心となった地区である。古墳時代の水路ではまとまった遺物が出土しているが、それ以外の溝・水田では遺物が極めて少なく、各面のつながりの判断や時期の特定が困難であった。

1．亀ノ郷１区（図版200・201）

亀ノ郷１区は玉津田中遺跡をめぐる12m道路の北西のコーナー部分に当たり、その大部分は弥生時代前期以前に形成されたと考えられる微高地に立地しており、中世以前の水田面３面の下に弥生時代前期の居住地区の遺構面とそのさらに下層の遺構が確認された。

水田　３面の水田のうち、上層水田はもっとも残りが悪く、５本の畦畔を検出したのみで、水田の一区画が明瞭になった部分はない。中層水田は短辺2.5～３ｍの細長い小区画の水田が長辺を北東から南西方向に向けて揃えて列をなして並ぶ。水田のレベルは北西が高く、南東にいくにつれて低くなっている。下層水田は中層水田と同じように北東から南西にかけて小区画の水田が並ぶが、この列が中層水田では直線的であるのに対して、下層水田では南西方向に張り出す弧状にならぶ点が異なる。一区画の水田の短辺は2.5～３ｍと比較的揃っているが、長辺は4.5～９ｍとばらつきがあることや、水田の高さが南東へいくほど低い点は中層水田と同様である。これらの水田面を覆う洪水砂からは、時期を明瞭に決定できるような遺物は出土しなかった。ただ、下層水田の水田土壌から弥生時代前期の土器がややまとまって出土している。

弥生時代前期　下町１区に続く南部では、弥生時代前期の遺構は土坑７基と３本の溝を検出したが、いずれも顕著な遺物は出土していない。３本の溝のうち、SD22007では溝の両脇に掘削時の排土を積みあげたと思われる土塁状の高まりが認められた。

調査区北方では、包含層中の遺物量も多く、炭などを多量に含んでいた。円形住居２棟SH22005・22006と掘立柱建物１棟SB22001と土坑・柱穴を検出している。SD22005・22006は上記の住居跡などの遺構群より位置１枚下の面で検出している。SD22006からは時期を確定できる遺物は全く出土しなかった。

これらの遺構を完掘した後、重機による断ち割りを行ったところ、弥生時代前期の遺構面の下の青灰色の砂礫の下に厚さ１ｍ弱のシルトの層があり、さらにその下に青灰色のシルトがほぼ水平に堆積している状況が観察された。なお、この黒色シルト中から詳細な時期は不明であるが、縄文土器の小片が数点発見されており、この地域の地形の形成された時期を考える上で注目される。

2．亀ノ郷２・４区（図版208・209）

亀ノ郷２区は亀ノ郷１区の東側の６ｍ幅道路のカーブする部分で、亀ノ郷４区はそこから枝分かれして東西方向にのびている。ここでは、中世の土坑SK82002や南北の条里方向の畦畔と溝SD82005、中世以前の水田が３面とそれに伴う溝SD72002・72003・52003、および弥生時代前期の水田や水路や溝などを調査した。

水田　この調査区の３枚の水田面を覆う洪水砂は薄く、畦畔の検出は困難であった。上から第１、第２、第３とした中で、第２水田面の畦畔が最もよく残っていた。亀ノ郷１区と同様に長方形に近い形の小区画の水田が長辺の北東から南西に向けて円弧を描くように並んでいる。調査区の北東と中央部で検出されているSD52003はこの円弧にほぼ沿って流れてお

り、各水田に伴って溝も埋没し、掘削しなおされている状況が明らかであった。水田からの遺物はほとんどみられなかったが、SD52003からは弥生時代後期の土器2622が出土している。なお、亀ノ郷４区においては第２水田面に対応する１面しか明確な水田面を検出することができなかった。

弥生時代前期　また、この調査区は弥生時代前期以前に形成された微高地の東の縁辺部に当たり、亀ノ郷１区で確認された弥生時代前期の居住地はここまで広がっていないらしく亀ノ郷２区の中央部（３～５区）で若干の土器が出土しているものの、住居跡・土坑などの遺構は検出されず、SD22005の続きが検出されているのみである。

亀ノ郷４区において、微高地から一段落ちた後背湿地にあたる部分で水田面と畦畔を検出している。ほぼ東西方向に伸びる大きな畦畔とその南の際を浅い溝状に残して平行に伸びるちいさな畦畔、そしてそれらにほぼ直交する方向の３本の畦畔である。東西方向の畦畔は調査区域外へも続いており、水田の範囲はさらに広がるものと思われる。

亀ノ郷２・４区の交点付近では、亀ノ郷１区から続く溝SD22007を検出している。亀ノ郷１区で確認されたと同様に掘削時の排土を両脇に土塁状に積み上げており、その部分は大畦畔として機能していたと考えられる。また、溝SD22007の下層を流れる溝SD22006は亀ノ郷１区の東をかすめて蛇行して流れ、下流は下町４・６区で確認しているが、上流については確認できず、SD22005と重なっている可能性がある。これらの溝・旧河道からは遺物は出土していない。

３．亀ノ郷３区（図版210）

亀ノ郷３区は亀ノ郷２区の東に続くほぼ東西方向の調査区で、亀ノ郷７区の南側に位置している。確認した遺構は中世（鎌倉時代）の条里の坪境溝SD82006・82007と古墳時代中期の水路SD72001とその上層を流れる３本の溝である。

中世の溝は調査区を直交して横断するが、古墳時代の水路や溝はおおむね北西から南東方向に斜交する。

水路SD72001を完掘した後、重機掘削により調査区の東端において水路より古い旧河道を確認した。旧河道は北から南に向かって流れており、その幅はおおよそ20mほどで、底は湧水が激しく確認することができなかった。遺物が出土していないためその時期は不明である。

４．亀ノ郷５区（図版214）

亀ノ郷５区は、亀ノ郷３区の東に位置し、東西に延びる調査区である。検出した遺構は中世以降の水田面、弥生時代中期の水田面と水路SD42001、同じく弥生時代前期の溝SD21012である。

中世以降　調査区全域にわたって水田土壌層を検出し、南北に走る畦畔１条を確認した。畦畔は幅約30cm、水田面からの高さ12cmを測る。

弥生時代中期の水田　確認した水田土壌層は当調査区の東半部に限られる。当水田に伴う畦畔は確認できなかった。ただし、当調査区のほぼ中央部において、水田面に約５cmの段差が認められた。この段差は、ほぼ北西から南東方向に延びている。

水路SD42001はこの水田に伴う水路と考えられる。

5．亀ノ郷６区（図版６・37・213・214）

亀ノ郷６区は亀ノ郷３区の東に位置する南北方向に長い調査区である。古墳時代の水路SD72001とそこから分岐する溝SD72004、弥生時代中期の水田、弥生時代前期の溝を調査した。

古墳時代　古墳時代の遺構はいずれも亀ノ郷３区より続くもので、調査区を北西から南東に向けて斜めに横切って流れている。また、この面で浅い不定型の土坑を４基検出した。

水田　水路を完掘した後、調査区の南において洪水砂を除去すると、北西から南東に向かう大畦畔１本と北東から南西に向かう小畦畔２本とを検出した。大畦畔より北は並行する浅い溝があるだけで畦畔を検出できず、水田はこれより北には広がってゆかないものと思われる。この大畦畔と溝の方向は、水路SD72001とほぼ同じであり、古墳時代の水路の掘削に先立ってここに何らかの流れがあった可能性もある。なお、この水田の時期は下町地区の状況などから判断して、弥生時代中期かと思われる。

旧河道　さらに、調査区全体に重機による断ち割りを行った際、調査区の北のほうで北西から南東にかけて流れる幅40cmくらいの流れを検出した。断面はU字形で、埋土は炭化物・有機物を含む淡い黒色土であった。この溝の時期は弥生時代前期と思われる。また、亀ノ郷３区から続く旧河道も確認している。

6．亀ノ郷７区（図版215～217）

亀ノ郷１区の東に位置する東西に長い調査区である。調査時には、西から東に10mごとに１～９区に分けて調査を行った。

西部では古墳時代の水路SD72001とその上層を流れる溝SD72001-a～dを検出している。東の６・７区では北から南に流れる旧河道を確認している。幅は10m前後で、遺物は出土していないが、層位的にみて、弥生時代前期の可能性がある。

また、調査区東端には水田が存在する。後世の削平のため水田面は１枚しか検出していない。この水田面は砂が覆っていた。出土遺物はなかったが、層位的にみて古墳時代の水田と考えられる。

7．亀ノ郷８区（図版６・７・37・218・219）

亀ノ郷６区の東、西ケ市４区の西に位置する東西に長い調査区である。調査時には、西から東に10mごとに１～７区に分けて調査を行った。確認した遺構面は、中世以降の面、古墳時代中期の面２面、弥生時代の面の４面である。

中世以降　中世以降の面では水田を検出した。調査区の中程の現在の畦畔のほぼ下で調査区に直交する畦畔を２本検出した。畦畔の幅は約0.5mあり、高さは10cmである。水田土壌から、中世の土器・陶器・磁器が出土した。

古墳時代　西部において亀ノ郷６区から続く水路SD72001を検出している。埋土のシルト～砂層からは多量の古墳時代中期の土器・木器のほか鉄斧も出土している。下層は礫が主体となっており、弥生時代前期・中期・後期の土器が出土している。ほかに掘立柱建物跡SB72001を検出している。

弥生時代　後世の遺構により削平されている部分以外の全面に、亀ノ郷６区から続く水田面を検出している。畦畔はいずれも調査区に直交しており、３本検出している。畦畔の幅40cm、高

さ20cm程度である。遺物は弥生土器が出土している。

8．亀ノ郷９区（図版195）

黒岡１・２区と一連の微高地上にある。遺構面はほぼ１面で、弥生時代前期の住居跡・土坑・溝が検出されている。

9．亀ノ郷10区

防火水槽設置のために掘削、調査を行った。亀ノ郷１区の北に接している。古墳時代後期の水路を１条検出したのみで、弥生時代前期の微高地が後背湿地に変わる部分にあたり弥生時代前期の遺構はここまで広がらないことが判明した。

10．亀ノ郷11区（図版207）

擁壁工事のための掘削に伴って調査を行った。亀ノ郷１区の北に接しており、亀ノ郷10区の東にあたる。SD72001から古墳時代の土器などがまとまって出土している。

11．亀ノ郷12区

亀ノ郷９区の北東にあたる地区で、放水路の建設に伴って調査を行い、弥生時代前期の土坑などの遺構を検出している。

12．亀ノ郷13区（図版207）

亀ノ郷１区の北東にあたる地区で、水路の建設に伴って、弥生時代前期の竪穴住居跡などの遺構を検出している。

13．Ｄ３区（図版205・206）

亀ノ郷１区の北にあり、確認調査で弥生時代前期の溝SD22004と土坑SK22022・22023を検出している。

14．Ｄ３－２Ｇ区（図版203・205）

亀ノ郷１区の北に接し、亀ノ郷10区の西にあたる。確認調査で弥生時代前期の竪穴住居跡SH22004とそれをとりまくSK22024～22033など一連の土坑を検出している。

第３節　下町地区

概　　要（図版３～７）

亀ノ郷地区の南、西ケ市地区の西に位置し、全体が沖積地にある。この分冊では１・２・４～９区を扱っている。この地区は各時代を通じて、もっぱら水田として利用されていたらしく、検出された遺構は水田・溝・旧河道である。

１．下町１区（図版５・220）

下町地区の西南に位置する南北方向の調査区で、二ノ郷地区の方形周溝群の北に接している。古墳時代の水田面と弥生時代後期の遺構面を調査している。

水　田　面　古墳時代の水田跡は、上面が中世に行われた整地のため削平されており、全てが遺存しているわけではない。しかし大畦畔・水口を２箇所、水田を３筆検出した。水田面では明確な足跡はみとめられなかった。

弥生時代の遺構面の北半で溝SD52005と16個の柱穴を検出している。溝からは弥生時代後期の土器が出土している。この遺構面の下には遺構はみとめられず、重機の深掘りによって旧河道を確認している。弥生時代中期の壺2264が出土している。

2．下町２区（図版5・50・221）

下町２区は下町１区の北側に位置し、そのさらに北は亀ノ郷１区である。南から10mごとに１～９区に分けて調査した。確認した遺構面は中世・古墳時代中期・古墳時代前期・弥生時代後期・弥生時代前期の各面と弥生時代後期以前の旧河道である。

中世　亀ノ郷１区に接する北端において、現在の溝に切られている３条の溝SD82002～82004を検出した。いずれも調査区に直交しており、字の境に位置する条里の坪界溝と思われる。鎌倉時代の須恵器など少量の遺物が出土している。

古墳時代中期　南の１～３区において水路SD72006と水田を検出した。４区以北については後世の削平により遺構は存在しなかった。SD72006はＳ字状に屈曲して北から南に流れている。水田面は水路SD72006の両側に伴う大畦畔によって形成されている。大畦畔は小畦畔により区切られている。一筆の水田形態は不定形であり、区画は小区画である。これは水路の形態あるいは地形によるものと考えられる。SD72005は水田面の一部を破壊する最終段階のミズミチで、この洪水により水田面が砂で覆われたと考えられる。

古墳時代前期　南の１～３区において旧河道SR62001とその両側に広がる微高地を検出した。SR62001は北から南へ向かって大きく蛇行している。微高地上では溝を検出した。旧河道・微高地から古墳時代前期の土師器が出土した。

弥生時代後期　旧河道SR52001を検出した。調査区に直交して流れているが、下町４区へ向かって南寄りに蛇行している。弥生時代後期の壺・甕・高杯・器台などがある。

なお、旧河道SR52001の下層にも旧河道が存在し、北から南に向かって流れるが、遺物は出土しておらず時期は不明である。

弥生時代前期　亀ノ郷地区よりの北部の微高地では弥生時代前期の溝・土坑27基・柱穴を検出した。弥生時代前期中段階の土器とサヌカイト製の石鏃などが出土した。

3．下町４区（図版4・5・50・222・223）

下町４区は亀ノ郷２区の南に位置する南北方向の幅６ｍの調査区である。中世面及び、弥生時代後期と弥生時代前期と思われる水田２面の調査を行っている。南部ではさらに古墳時代後期と弥生時代中期の調査も行っている。

中世　調査区の南部及び下町７区との交点で、鎌倉時代の遺物を含む南北の条里方向の溝SD82001を検出した。

古墳時代　同じく調査区南には西側の下町２区から続く古墳時代後期の溝SD72005と水路SD72006がある。水路SD72006の両肩には土手(大畦畔)があり、その南側では４筆の水田が確認できた。この水路からは６世紀中頃の須恵器杯身3167や弥生時代後期の土器など少量の遺物が出ている。溝SD72005からは曲物の蓋2093が出土している。

さらに下層で下町２区から流れてくる旧河道SR52001と下町１区から続く溝SD52005を検出している。この旧河道の埋土からは弥生中期中頃の土器も出土している。

また、調査区北部を流れる溝SD52004は亀ノ郷２区から続くものと思われる。この溝に対応する水田面では２本の畦畔の痕跡を辛うじて検出したのみである。

4．下町５区（図版224）

下町４区に直交して東にのびる。直交する確認調査のＫＭ２区などでかなりの部分が失

われている。明瞭な遺構面・水田面は確認できなかった。

5．下町６区（図版３～５・223・224）

下町５区と同様に、下町４区に直交して東方向にのびる調査区で、下町５区の北側に位置している。

調査区の南に半分かかった形で土坑SK52002を検出している。同じ面で弥生時代前期中段階の甕2218がかなり大きな破片でまとまって出土した。この遺構面は厚さ50cm程度の洪水砂が土壌化した上に載っていた。

その洪水砂を除去し、水田面とSD22006を検出した。SD22006は亀ノ郷１区から亀ノ郷２区を経て流れてくるもので、下町４区との交点付近のやや北から調査区を斜めに横切っておおよそ西から東へ向かって流れており、水田面を切っている。この方向は残っている水田の畦畔とほぼ同じであり、この水田と旧河道が同時に存在し、洪水時のオーバーフロウによって水路際の大畦畔が決壊した考えられる。また、この水田も調査区外へさらに東へ続いているものと思われる。

6．下町７区（図版223）

下町４区に直交して西方向にのびる下町７区では、確認調査のＫＭ５区と攪乱で調査可能な範囲はごくわずかであった。下町４区との交点付近で鎌倉時代の遺物を含む南北の条里方向の溝SD82001を確認した。これは下町４区の南部に続いているものと思われる。また、そのより下の面で平安時代の遺物をともなう柱穴を６個検出した。ただし、この柱穴を検出中に若干の弥生時代前期の土器が出土している。それよりさらに下の面で僅かに方向を変えつつ切り合う２本の溝を確認した。おそらく弥生時代後期に属するものと思われる。

7．下町８・９区（図版225・226）

鎌倉時代以降　下町８・９区全面にわたって、中世の所産と考えられる水田土壌が確認できる。ただし畦畔の残存状況は良くなく、９区の中央部で東西方向の畦畔を１条確認したのみである。畦畔は幅60cm、高さ10cmを測る。遺物は出土していない。

下町８区北東端の中世水田土壌直下において、２個の柱穴が確認された。柱痕は確認されなかった。なお、遺物は出土していない。

最上層水田　下町８区西半部にて３本の畦畔を検出した。この畦畔周辺には上面を覆う洪水砂が比較的明瞭に残存していたためで、他の箇所については畦畔の検出にはいたらなかった。上の堆積層から土器の出土をみなかったため、時期は不明とせざるをえない。

上層水田　最上層水田の直下で検出された水田である。水田土壌は両調査区の全域で認められ、30筆近くの区画が確認された。ただし、区画の規模や形状が正確に判明するものは少ない。復元できる区画の形状からは、一筆の面積が大小さまざまであるといえ、最も狭いものでは短辺1.0～2.5m、長辺が3.5m程度である。下町８・９区の交点よりやや東の広い区画が最も高く、漸次東西および南方向に低くなる。低くなる８区西端および９区南半では畦畔が確認されなかった。

第４節　西ケ市地区

概　　要（図版６・７）

西ケ市地区では、１～４区、６～９区の８箇所の調査区について、発掘調査を行った。欠番が生じているのは、道路予定地が変更するなどして調査を行わなかったためである。

西ケ市地区は玉津田中遺跡の東側中央部を占め、現在の田中集落から田中川を挟んだ西側にあたる。

地形は東半部が埋没段丘面で、地区の中央を段丘崖に沿って蛇行する旧河道より西側が沖積地となっている。旧河道の周辺ではやや堆積が厚く、多い所では中世水田面・古墳時代中期水田面・段丘面の３面を検出することができる。

１．西ケ市１区（図版６・７・227・228・234）

埋没段丘上に位置する調査区で、南北方向に長い調査区とこれと直交して西へ延びる２本の調査区からなる。中世、古墳時代、弥生時代後期の３面の遺構面を検出した。

中世の遺構面では水田面を確認した。水田に伴う遺構としては東西方向の畦畔４本を痕跡的に確認したにすぎない。畦畔の位置は現在の畦畔とほぼ重なる。

弥生時代後期の遺構面では竪穴住居址SH52004、溝SD52004、ピットおよび旧河道SR62002から分岐する溝SD62001を検出した。旧河道は埋没段丘上を北東から南西に流れている。

２．西ケ市２区（図版７・229～233）

Ｉ＋20m付近を南北に縦断する調査区で、北端は５ライン付近で６区に接し、南端は７ライン付近で池ノ内12区に接する。調査区内は段丘上で、南端に旧河道SR62002がかかる。調査は中世水田面・古墳時代中期水田面・段丘面の３面について行った。

中世水田面では、ほぼ東西方向の畦畔を検出し、条里制地割に伴う畦畔が現代にいたるまで踏襲されていることを確認した。また、調査区の中央部で中世と古墳時代の土器片が混在して廃棄された土器溜まりSK82005を検出している。

古墳時代中期水田面では、水田に伴う水路２本を検出した。ただし水田土壌が残存する範囲は調査区の南半部のみである。検出できた畦畔は南北方向のみで、東西方向は見つからなかった。また水田面の下層にも、もう１本同方向の水路があるが、出土遺物からみてあまり大きな年代差は認められない。

段丘面の北部では掘立柱建物跡SB72003や溝・土坑などを検出しており、南部では二基の弥生時代前期方形周溝墓SX22001・22002とそれに伴う土坑墓・土器棺墓などを検出している。これらの遺構の北側では、SX22002の主体部ST22005と方位を同じくする舟底形の土坑を５基検出しているが、これらも同時期の土坑墓であるとすれば、この地区は弥生時代前期新段階の墓域であったと考えられる。

３．西ケ市３区（図版６・７・234）

西ケ市１区の北端から西にわずかに延びる短い調査区で、その大部分を確認調査のＫＭ３区に切られている。埋没段丘上を流れる旧河道SR62002を検出している。

４．西ケ市４区（図版７・234）

西ケ市１区と亀ノ郷８区の間にある調査区で、旧河道SR62002を検出している。幅は６

m、深さは1.5mである。土器の出土量は少なく、木製品についても加工木はほとんど出土していない。また、旧河道の西側で、弥生時代後期の土器が数点出土する不整形な土坑を確認している。

5．西ケ市６区（図版７・235・236）

５＋０～10m付近を東西に横断する調査区で、東端はＩ＋35m付近、西端はＨ＋15m付近である。調査区内は段丘上で、Ｈ＋15m付近に旧河道SR62002(上層はSD72007)が通っている。調査は古墳時代中期水田面と段丘面の２面について行った。

古墳時代中期の水田面はSD72007より西側にのみ遺存する。水田面は洪水砂に覆われており、水口を伴った小区画の畦畔を検出した。調査区の西端には水田に伴う水路SD72001が存在し、SD72007とSD72001からは多量の土器が出土している。またSD72007の東岸からは新たな水路SD72008が分かれ出ており、これが７・２区に続くものと考えられる。

段丘面では掘立柱建物SB82001と、不整形な土坑・溝などを検出した。掘立柱建物は、付近の遺物の出土状況からみて、奈良時代のものと考えられる。地区の東端は低湿になっており、池ノ内14・15区の流路によく似た状況である。また地区西端では、縄文時代後期の土坑SK12001が見つかり、土器の細片数点が出土した。この遺構は玉津田中遺跡で最も古いものの一つである。

6．西ケ市７区（図版７・50・237・238）

東西方向の調査区で、大半は埋没段丘上に位置するが、調査区西端から約20mの位置に段丘崖が位置し、これより西側は段丘崖下となることが断ち割りの結果明らかとなった。３遺構面５時期にわたる遺構が検出された。

中世の遺構面では、南北方向の溝SD82009を平面で検出し、SD82008を断面で確認した。遺物は出土していない。またこれと同じ遺構面で水田土壌層を断面で確認した。

古墳時代の遺構面は２面ある。上層では水田と溝SD72009などを検出した。いずれも西ケ市２区につながるものであるが、畦畔の隆起はさほど明瞭ではない。

下層では弥生時代前期と思われる土坑・溝、弥生時代末～古墳時代初頭の旧河道、古墳時代前期～中期の溝SD72007・72008、掘立柱建物SB72002など各時期の遺構を検出した。

7．西ケ市８区

西ケ市地区の西北端にある調査区である。西ケ市１区から西側に延びる。調査の結果、調査区全域で河道SR52001を検出した。深さは現地表から約1.5mあり、上層は灰色のシルト質土で、下層は灰色の砂礫層で埋没していた。調査区の西端では河道の西肩を検出している。この河道は段丘崖に沿って走るものであり、北側は狭間地区のSR54001、南側は辻ケ内地区のSR55002と一連のものである。

河道の底は明黄褐色のシルトあるいは砂礫層であり、これは段丘を構成する大阪層群の堆積物である。なお河道からは遺物は出土していない。

8．西ケ市９区（図版240）

西ケ市１・２区の東に平行して細長くのびる調査区で、11号水路の工事にともなって簡略化した形で調査を行った。古墳時代の溝SD62002、弥生時代前期の住居跡SH22007などを検出している。

9．ＫＭ７区（図版239）

西ケ市７区の北側に平行している確認調査区で、古墳時代の水路・溝であるSD72007・72008などを検出しており、木製品・土師器・須恵器・韓式土器・製塩土器など多数の遺物が出土している。

10．ＫＭ12区（図版239）

西ケ市７区の南側に平行している確認調査区で、一部西ケ市２区と重なっている。水田面とその表面に残る足跡を検出している。

第５節　池ノ内地区

概要（図版７・８）

池ノ内地区では、１区、６～12区、14～18区の13箇所の調査区について、発掘調査を行った。欠番が生じているのは、道路予定地が変更するなどして、調査を行わなかったためである。また、このうちの６・７区は第Ⅴ分冊で報告するため、ここでは11箇所の調査区についての概要を述べる。

池ノ内地区は玉津田中遺跡の東側中央部を占め、現在の田中集落から田中川を挟んだ西側にあたる。

地形は東半部が埋没段丘面となっている。段丘部分の堆積は浅く、地表下50cmほどで縄文時代～中世の各時期の遺構をほぼ同一面で検出することができる。地区の中央には、段丘の落ち際に沿って、旧河道が南北方向に流れている。この旧河道は竹添地区の直前で急に東へ向きを変え、辻ケ内地区方面に流れ去っている。旧河道を境にして、西半部は後背湿地となっており、シルトと砂が堆積するのみである。旧河道から、二ノ郷・竹添微高地の堆積がおよぶまでの間の後背湿地には、顕著な遺構・遺物は認められないものと考えられる。

１．池ノ内１区（図版８・241～245）

池ノ内１区は、調査対象地の東部に位置する幅６～７m、延長120mの南北方向に設定された調査区である。南北方向はＩ＋20mライン付近を通り、北端は７＋10mライン付近で池ノ内11区に、南端は10ラインで池ノ内６区に接する。

その位置は、調査対象地区の東側に広がる段丘面の西端に相当している。このため調査区北半では、段丘面を被覆する黄褐色シルト上面が遺構検出面となり、南半では、沖積平地の堆積層中に生活面が存在する。

なお調査区は調査の便宜上、北側より10m単位に区割りして１～12区と呼称した。

検出された遺構は、弥生時代中期から古墳時代にわたるものである。全般に遺物包含層が薄いうえ、中世以降に開墾を受けているため、一部を除いては同一面上で検出されている。遺構の密度は、調査区全体にわたって極めて高く、切り合っている遺構も多い。

検出された遺構には、弥生時代中期や古墳時代の竪穴住居跡SH42001～42004・72001・72004・72005、SK42003・42004ほか多数の土坑、SD72010・72010などの溝のほか多数の柱穴がある。

また、調査区北部の１～３区と南端の12区は、弥生時代から古墳時代の旧河道となって

いる。これらの旧河道は、段丘崖下を流れる本流性の旧河道で、池ノ内８～10区を経由してつながっている。北端の旧河道SR62002(SR72001)からは、古墳時代前期～中期の土器とともに扉材を含む多量の木器が出土した。また河道の中からは杭列や堰状の遺構も見つかった。南端の旧河道では遺物は少なく、洪水性の砂礫とシルトの互層で埋没していた。

２．池ノ内８区（図版８・246・247）

１区から西へ延びる調査区で、東西方向は７＋45mライン付近を通り、G＋40m付近で西端に至る。調査区は現水路を挟んで、東西２つに分かれる。

東調査区の東側15mの範囲は段丘上で、池ノ内１区と同様、弥生時代中期～古墳時代後期の遺構を同一面で検出した。見つかった遺構には弥生時代中期の土坑SK42001や、古墳時代の柱穴・溝SD72011などがある。

東調査区の中央は幅13mほどの旧河道SR62002となっており、弥生時代後期末～古墳時代前期と古墳時代後期の２時期の遺物が多数出土した。特に弥生時代後期末～古墳時代前期の土器は河道東岸から集中的に投棄された状況が看て取れた。また古墳時代後期の木器としては、２個体の臼2039・2228・容器(槽)2088・鍬2017・横槌2052・木錘2045などが出土している。

旧河道の西肩から西調査区にかけては後背湿地となっており、数面の水田土壌を確認したが、顕著な遺構・遺物は認められなかった。

３．池ノ内９区（図版８・247・248）

１区から西へ延びる調査区で、東西方向は８＋35mライン付近を通り、H＋20m付近で西端に至る。

調査区の東側25mの範囲は段丘上で、弥生時代中期～古墳時代後期の柱穴・土坑などを同一面で検出した。見つかった遺構には弥生時代中期末の竪穴住居跡SH42002などがある。

調査区の西半部では弥生時代中期～古墳時代の旧河道SR62002を検出した。弥生時代中期の河道は幅17mほどで、砂礫で埋まっており、遺物はごく僅かであった。弥生時代後期には前後２回の河道が認められ、先の河道からは多数の材を乱雑に組んだ木組遺構が見つかり、後の河道からは木錘・ヒョウタンなどが出土した。弥生時代後期末～古墳時代前期の河道では多数の材を組み合わせて作った井堰が見つかった。井堰は２回の架構が認められ、修築されているものとみられる。井堰の横木には、梯子・二又鋤などが転用されていた。

旧河道の西肩は後背湿地となっており、顕著な遺構・遺物は認められなかった。

４．池ノ内10区（図版８・249）

１区から西へ延びる調査区で、東西方向は９＋20mライン付近を通り、H＋20m付近で西端に至る。

調査区の東側20mの範囲は段丘上であるが、湿地性の黒色シルトが堆積しており、遺構は認められなかった。

調査区の西半部は弥生時代中期～古墳時代後期の旧河道SR62002となっていた。弥生時代中期の河道は砂礫で埋まっており、遺物は僅かであった。弥生時代後期～古墳時代前期には上・下層併せて５本以上の河道を検出しており、頻繁に流れを変えている状況が看て取れた。河道からは護岸の杭列や、多量の土器が出土した。旧河道全体の西肩は、調査範

囲の中では確認できなかった。

5．池ノ内11・12区（図版7・250）

11区は南端が1区に、北端が12区に接する、延長10mに満たない小さな調査区である。12区は池ノ内地区と西ケ市地区の字界となる農道上に設定された調査区で、東西方向が7ラインを通り、西端がH＋40m付近、東端がI＋35m付近である。調査は中世・古墳時代後期・弥生時代～古墳時代の3面について行った。

中世面では字界の大畦畔と水田面・土坑を検出し、中世から現代にわたって条里制地割が踏襲されている状況が観察できた。遺構面は近現代の水路や土取り穴でいたるところ攪乱されていた。

古墳時代後期の面では西ケ市2区から続く水田面を調査した。しかし水田面の遺存状況が悪く、畦畔1本と溝2本を検出したのみである。

弥生時代～古墳時代の面では段丘上から旧河道SR62002にかけての調査を行った。段丘面は12区の東隅にわずかにかかっており、土坑・柱穴を検出した。SR62002は西ケ市地区からの延長で、池ノ内1区付近で西へ屈曲し、池ノ内8～10区方面に南流するものである。河道の幅は10～20mほどで、下層では砂礫がラミナ状に複雑に堆積しており、度重なる洪水で堆積したことが判る。上層のシルト層からは、古墳時代の土器が完形の状態で散発的に出土した。

6．池ノ内14～16区（図版8・251～255）

14～16区は1区の東側をコの字形につなぐ調査区である。14区は7＋40mライン付近で1区と15区を東西に結ぶ。15区はJ＋20～30m付近で14区と16区を南北に結ぶ。16区は8＋30mライン付近で15区と1区を東西に結ぶ。14・16区は現水路を挟んで、東西2つの調査区に分かれている。調査区内はすべて段丘上で、弥生時代前期～中世の遺構を同一面で検出した。

弥生時代前期の遺構にはサヌカイト集積遺構SK22045、土坑SK22046、柱穴SP22001などがある。

古墳時代前期の遺構には16区西調査区の竪穴住居跡SH62001がある。平面形は隅丸方形を呈する。

古墳時代中期の遺構には14区西調査区の竪穴住居跡SH72001～72003がある。いずれも方形で、互いに切り合っており、連続的に建て替えられていた。SH72001は1区からの延長で、ベッド状遺構をもつ。

奈良時代の遺構には16区東調査区の土坑SK82001があり、西調査区の掘立柱建物SB82002・82003も同時期かと考えられるが、確実な遺物が伴出していない。

地区のほぼ中央には14区から15区方向に流れる流路SD82002があり、下層から弥生時代中期～後期、上層から中世の遺物が出土した。また古墳時代の溜まり状遺構SK72001からは、馬の歯などが出土した。

その他、不定形の土坑や溝が多数見つかったが、その多くは時期不明で、風倒木のような自然の穴も含まれているようである。

7．池ノ内17区（図版8・255・256）

1区から東へ延びる調査区で、東西方向は9＋20mライン付近を通り、J＋30m付近で東端に至る。調査区は現水路を挟んで、東西2つに分かれる。調査区内はすべて段丘上で同一面で遺構を検出した。

見つかった遺構には不定形の土坑SK12003～12006があり、調査区の西端では旧河道に向かって落ちかかる地形が認められた。出土遺物はチャート製の石鏃1点のみで、遺構の時期は不明であるが、おそらく縄文時代の風倒木であろう。

8．池ノ内18区（図版8）

防火水槽の設置に伴う調査区で、9＋40mラインのJ＋20m付近に位置する。

調査区内は段丘崖下の旧河道にあたり、盛土地盤から5m掘り下げても、河道底に至らなかった。河道はシルトと砂が堆積しており、遺物は少量であった。

第Ⅲ部　遺　　構

第１章　縄文時代の遺構

第１節　土　　坑

SK12001（図版９）

西ケ市６区の西端に位置し、北半部は調査区外である。平面円形で、規模は直径1.0m、深さ0.5mである。出土した遺物は縄文時代後期中葉の北白川上層式の土器2004～2007である。

SK12002（図版９）

池ノ内14区の西側に位置し、南半部は側溝に切られている。平面円形で、規模は直径1.5m、深さ0.6mである。出土遺物には縄文時代後期中葉北白川上層式の土器2002・2003がある。

SK12003～12006（図版９・256）

池ノ内17区で検出されたこれらの土坑は、いずれも平面不整形で、埋土の中心に大きなブロック状の土塊が落ち込んでいるところから、人為的な掘り込みとは言えず、いわゆる風倒木の痕跡と考えられる。ただし埋土からは縄文時代後期の遺物が若干出土しているため、このステージで報告する。

SK12003は規模が長軸2.5m、短軸2.1m、深さ0.6mである。縄文土器片およびサヌカイトの剥片が出土している。

SK12004は規模が長軸2.4m、短軸2.1m、深さ0.6mである。チャート製の石鏃2112が出土している。

SK12005はSK12006を切っており、規模はSK12005が長軸3.4m、短軸2.4m、深さ0.4m、SK12006が長軸3.0m、短軸2.6m、深さ0.6mである。SK12005からは敲石2130が、SK12006からは縄文土器片が出土している。

第２章　弥生時代前期の遺構

第１節　住　居　跡

SH22001（図版11）

黒岡２区と亀ノ郷９区との交差点に位置する円形住居である。住居の大半の部分が調査区外にはみ出しているため柱穴や中央土坑などは検出されていないが、直径およそ6.8mか。また周壁溝が掘られた痕跡も認められない。埋土中から弥生時代前期の土器2188～2192およびサヌカイトの剥片が多数出土している。この剥片の一部は金山産と同定されている。

SH22002（図版11）

黒岡２区の南半、ＫＭ１区との交点付近に位置する直径約６ｍの円形住居である。この住居も大半の部分が調査区外にはみ出しているため柱穴や中央土坑などは検出されていない。埋土中からは弥生時代前期の壺2049や甕2154などが出土している。壺の中には、図化されていないものの、貼付け突帯のものや、生駒山西麓産と考えられる暗褐色の胎土のものも含まれている。

SH22003（図版12）

黒岡１・４区交点付近で検出した直径およそ7.0ｍの円形住居である。西半分の周壁溝は削平されたためか検出されていない。柱穴も検出できなかったため、柱の数・配置は不明である。

SH22004（図版12・203）

確認調査時にＤ３-２Ｇ区で検出した竪穴住居跡である。平面形態は円形で、直径は東西方向で4.9m、南北方向で4.75mである。主柱穴は４本を確認した。柱穴の深さは、それぞれ25cm前後まで確認できたが、基盤層が砂層であるために底の部分が不明確であった。本来の深さはもう10数cm程度深かったものと考えられる。

床面の中央には長軸約80cm、短軸約70cm、深さ約30cmのほぼ円形の中央土坑がある。この中央土坑には厚さ５cmの炭層が堆積しており、中央土坑周辺の直径1.5mの範囲にわたって炭の層が広がっている。検出面から床面までの深さは約15cmで、床面の標高は17.95mである。周壁溝は認められなかった。床面積は18.3㎡である。

床面からは、弥生時代前期の壺2122や甕2128～2131など土器の他、緑色片岩製の石包丁2025、小型柱状片刃石斧１点、石鏃が13点、石錐が４点ほかにサヌカイトのチップが多数出土している。

なお、中央土坑埋土の土壌を採取し、水洗選別を実施したところ、炭化米が４点と朱塗りの木製櫛の破片を検出している。

SH22005（図版13・202・203）

亀ノ郷１区の３＋30m、Ｄ＋30mライン交点付近の側溝断面で中央土坑を検出し、調査区の拡張を行い完掘した住居跡である。平面形は直径5.3mの円形で、検出面からの深さは８cm程度であった。周壁溝は一部途切れている。主柱穴は４本又は５本であるが、いずれもあまり深いものではない。

中央土坑は側溝でその一部が失われているが、元の平面形は長方形に近い楕円形であったと考えられ、その長軸は1.6m、住居床面からの深さは28cmであった。土坑の底付近には炭が多く堆積しており、この住居跡に伴う主要な遺物はこの炭層から出土している。図化した土器のうち、壺・甕・高杯(2156～2159)がこの炭層からの出土であり、壺(2155)は中央土坑の中層からの出土である。ほかにも壺や甕、サヌカイト製の石鏃2008や剥片が出土している。なお、一部の剥片は金山産と同定されている。

SH22006（図版13・202）

亀ノ郷１区の３＋40m、Ｄ＋20mラインの交点付近の調査区中央に位置する住居跡である。平面形は直径5.9～6.2mのややいびつな円形で、検出面からの深さは３cm程度と極め

て浅かった。周壁溝はみとめられなかった。中央に直径1.3mの円形の炭が集中的に分布している部分を少し掘り下げると、中心よりはずれた位置に直径0.9～1.0m、深さ15cmの浅い皿状中央土坑を検出した。

遺物は床面から14～20cm浮いたレベルで3つの群にまとまって出土している。図化した土器には2148～2152の木の葉文などを施された壺、極く大型の生駒西麓産と思われる壺2169、鉢2153などがある。また、柱状石斧2027、サヌカイトの剥片(金山産)も出土している。

SH22007（図版11・240）

西ケ市9区で検出した住居跡である。ほとんどが調査区外にあり、柱穴・中央土坑などは検出していない。調査した部分の円弧から推定して、直径8.8mくらいのやや大型の円形住居が復元できる。埋土は紫黒色のシルト質極細砂で、土器や炭を多く含んでいた。2256の壺、2257の甕が出土している。

SB22001（図版14・204）

亀ノ郷1区のSH22005の北西に位置する掘立柱建物跡である。N23°Eに棟軸方向をとる2×1間の掘立柱建物跡であるが、南の梁行は1.56m、北は1.35m、また西桁方向は2.15m、東桁方向は2.3mと向かい合う2辺の長さに差があり互いに平行しない歪な形をしている。

柱穴はいずれも円形で、掘り方の直径は13～20cm、柱根は6～8cm。検出面からの深さは10～15cm程度であった。この検出面から若干盛り上がるような形で土器群と炭や焼土を検出している。土器群は図示したように完形品を含む5個体の壺蓋2160～2164と壺2165・2166・2169、甕2167・2168・2170からなり、焼土や炭を伴っていた。この土器群が掘立柱建物に伴うものか、廃絶後のものかは判断に苦しむところである。他にも鉢2132などの土器や叩き石、サヌカイト剥片(金山産)が出土している。

第2節　墓

1．方形周溝墓

SX22001（図版15・231・232）

西ケ市1区南半に位置する周溝墓SX22001は、北溝と西溝の合流部、すなわち北西コーナーの台上部を確認できた。現状では約5m×5mの直角三角形を呈する。SX22002との間にある北溝は幅約2.2m、深さ約40cmを測り、最下層から弥生時代前期新段階の壺2253や底部2255が出土している。西溝は幅約2.7m、深さ約40cmを測り、ほぼ同じ方向に流れる古墳時代の溝SD72008に切られている。

埋葬主体は、コーナー部分に楕円形土坑ST22004を検出している。

SX22002（図版15・231・232）

周溝墓SX22002は周溝墓SX22001の北に位置し、この北溝を南溝として共有している。これに東溝と西溝の一部を確認した。現状では、約4m×5mのコの字形台状部を呈する。東溝は推定幅2.5m、深さ約60cmを測る。

埋葬主体は、南辺の中央部に、ほぼ東西を主軸にする舟底形の土坑墓ST22005を検出した。これより北約4mにも土坑の一部ST22006が確認でき、これも主体部とすれば台上部の平面規模は約7m×5mの長方形となろう。

2．木棺墓

ST22003（図版16・198）

黒岡２区の北端部に位置する長方形の土坑で、木棺材は遺存していない。主軸はほぼ南北方向である。長軸1.4m、短軸は北側が68cm・南側が64cmで４cm北側の長さがまさっている。したがって埋葬頭位も北向きと考えられる。南側の木口部分は内側に傾斜がつくように斜めに掘られている点が特徴的である。検出面からの深さは0.25cmである。打製石包丁2026や楔形石器2029などの石器が出土している。

3．壺棺墓

ST22001（図版17・199）

黒岡２区南端付近に位置している。長径0.68cm・短径0.47cmで平底の楕円形の掘形に、弥生時代前期の壺2055が立つように置かれている。壺は頚部に３条と肩部に２条の削り出しの突帯が巡らされ、突帯の下に横長の楕円形の穿孔がある。この壺内には蓋2056が落ち込んでいる。

ST22002（図版17・198）

黒岡１区と11区の交点付近に位置する。直径65cm前後で平底の円形の掘形に、弥生時代前期の壺2040が横に寝かせるように置かれている。壺棺の主軸はほぼ東西で、口縁部を西側に向けている。壺は口縁部が欠落している。頚部に６条と肩部に３条のヘラ描き沈線が巡らされている。穿孔は施されていない。

4．土坑墓

ST22004（図版15・16）

西ケ市２区の周溝墓SX22001のコーナー部分に位置する。長軸約1.5m、短軸約1.2m、深さ約20cmである。中心の主体部ではないと考えられる。木棺などの痕跡は認められなかった。埋土中には、弥生時代前期新段階の土器片を発見している。

ST22005（図版15・16・232）

西ケ市２区の周溝墓SX22002の南の中央部に位置する。ほぼ東西を主軸にする長軸1.8m、短軸1.1m、深さ約60cmの舟底形の土坑である。

ST22006（図版15・16・232）

西ケ市２区の周溝墓SX22002内に位置するが、調査区の端にあたり、全体の規模・形状などは不明である。

ST22007（図版15・232）

西ケ市２区の方形周溝墓SX22002の北に位置にする土器棺である。後世の削平が大きく、現状で掘り方は径約40cmの円形、深さ12cmを測る。土器2254は底部のみであるが、墓坑底部より浮いた状態で、直立して埋置されていた。

第３節　土　　坑

SK22001（図版19・196）

黒岡２区の北端部に位置する楕円形の土坑である。西端は調査区外に延びているものの、長径２m・短径0.5mに復元できる。図化した甕2062・2063の他、貼り付け突帯を施した壺、

削り出し突帯を施した壺、甕、および生駒山西麓産と考えられる甕および楔形石器2033も出土している。

SK22002（図版18・195）

黒岡２区と亀ノ郷９区の交点北側に位置する楕円形の土坑である。一部側溝で失われているものの、長径3.6m・短径2.2mに復元できる。深さは14cm程度である。最初は住居跡と考えていた。出土した遺物のうち図化したものは、2040～2048の壺・甕・蓋である。また、埋土の水洗により炭化米151点以上とサヌカイトなどを検出している。

SK22003（図版19）

黒岡２区のSH22001の西側に位置する隅円三角形の土坑で、最大幅は2.3mである。溝SD22002と切りあっている。断面図の１・２層のシルト質の部分がSK22003の埋土、３層以下の砂礫の部分がSD22002の埋土である。このことからSD22002の埋没後にSK22003が掘られたと考えられる。土坑の埋土中から弥生時代前期の壺2060や甕2061が出土している。

SK22004（図版18）

亀ノ郷９区のSH22001の南東に位置する楕円形の土坑である。土坑の約半分が調査区外に延びているため長径は不明で、短径はおよそ2.1mである。溝SD22003と切りあっており、SK22009はSD22003の埋没後に掘られている。出土遺物は弥生時代前期の壺2186、鉢2187、甕などである。鉢は口縁部付近に把手がつくタイプである。

SK22005（図版19）

黒岡２区の旧河道東肩に位置する土坑で、一部を河道で失っているがもとの形態は楕円形であったと思われる。残存している部分では短径1.6m程度である。検出面からの深さは約20cmである。木の葉文の壺2051が出土している。

SK22006（図版19・196）

黒岡２区の旧河道東岸に位置する楕円形の土坑で、長径1.6m・短径1.2mである。検出面からの深さは約35cmで底部は舟底形である。埋土中から弥生時代前期の壺2050・甕が出土している。

SK22007（図版18）

黒岡２区のSH22002の北東に位置する楕円形の土坑で、長径2.8m・短径1.8mである。検出面からの深さは約30cmで、底部は舟底形である。埋土中からは弥生時代前期の甕2058・鉢2059・壺が出土している。

SK22008（図版19）

黒岡２区の南半で検出された直径１m足らずの円形の土坑である。検出面からの深さは10cm足らずで、やや丸みのある平底である。埋土中から弥生時代前期の頚部にヘラ描き沈線が施された壺や甕2052、楔形石器2028が出土している。

SK22009（図版19）

黒岡２区のSH22002の北東に位置する楕円形の土坑である。長径2.1m・短径1.5mで、検出面からの深さは30cmで、底部は円錐形である。埋土中から弥生時代前期の、頚部にヘラ描き沈線が施された甕2053・壺・ミニチュア土器の底部が出土している。

SK22010（図版18）

黒岡２区のSH22002の北東に位置する不定形の土坑である。長径2.2m・短径2.0mで、検出面からの深さは20cmである。下層には炭層と焼土が堆積していた。出土遺物は2054の土器である。埋土を水洗したところ炭化米、炭化物、サヌカイト、土器片などが出土している。

SK22011（図版19）

黒岡２区南端部で、他の遺構より１面上の、壺棺SX22001などとおなじ面で検出された。楕円形の土坑で、長径1.3m・短径0.53mである。検出面からの深さは約20cmの舟底形の土坑である。埋土中から弥生時代前期の甕・壺、最下層からドングリが出土している。甕は頚部に３条の沈線が施されており、壺2057は頚部と肩部に削り出し突帯が１条ずつ施されている。

SK22012（図版20）

黒岡４区北壁際に位置する楕円形の土坑である。土坑の北半分は調査区外にはみ出しているため長径は不明である。短径2.5mである。検出面から底面までの深さは約30cmで、底は平らである。土坑の埋土中から弥生時代前期の頚部に１条の沈線を巡らした甕2083、および壺が出土している。

SK22013（図版20）

黒岡１区と11区の交点付近、SH52002の南東隣に位置する楕円形の土坑である。長径1.4m・短径1.2mである。検出面からの深さは約45cmで底部は舟底形である。土坑の埋土中から弥生時代前期の削り出し突帯を施された壺、弥生時代後期の壺および土製紡錘車3447が出土している。

SK22014（図版20）

黒岡１区と11区の交点北側に位置する短径2.8mの楕円形の土坑である。検出面からの深さは約30cmで底は平らである。埋土中から弥生時代前期の蓋2032・壺2033・甕2034などが出土している。甕・壺とも２条から５条のヘラ描き沈線が施されたものを含んでいる。壺2033には木葉文が施されている。

SK22015（図版20）

黒岡１・11区の交点付近に位置する直径２m足らずの円形土坑である。検出面からの深さは約20cmで、底はほぼ平らである。埋土には炭を含み、中から弥生時代前期の壺2084・甕が出土している。

SK22016（図版20）

黒岡11区北壁際に位置する楕円形の土坑で短径1.3mである。検出面からの深さは約20cmで、底は平らである。埋土中から、頚部に２条のヘラ描き沈線を施された弥生時代前期の甕2085が出土している。

SK22017（図版19）

黒岡11区北壁際に位置するほぼ円形の土坑で直径0.9mである。検出面からの深さは約14cmで、底は平らである。埋土中から、頚部に２条のヘラ描き沈線？を施した弥生時代前期の甕2035が出土している。

SK22018（図版20）

黒岡１区と11区の交点に位置するほぼ円形の土坑で直径1.4～1.5mである。検出面から

の深さは約20cmで、底は平らである。埋土中から、2009の底面に「×」のヘラ描きを施した弥生時代前期の壺が出土している。また、水洗の結果炭化米や珪化木、石錐2022などが出土した。

SK22019（図版20）

黒岡４区のSH22003内で検出された長円形の土坑で、規模は長径1.2m・短径0.8mである。検出面からの深さは約15cmで、やや丸みのある底である。埋土には炭を含み、中から弥生時代前期の壺、甕2030・2031が出土している。甕はいずれも口縁部に刻みを施しており、頚部には沈線を２条巡らせるものと巡らせないものがある。

SK22020（図版20・196）

黒岡１区のSH22003の周壁溝を切って掘られた楕円形の土坑である。規模は長径2.1m・短径1.8cmで、検出面からの深さは48cmである。埋土には炭・焼土を含み、土器が多量に廃棄されていた(2018～2029)。器種は甕・壺・鉢・高杯・蓋がある。甕は沈線を１条か４条巡らされている。壺は頚部に沈線(１条から４条)を施すもの、削り出し突帯を施すもの、貼り付け突帯を施すものが混在している。また沈線を４条以上巡らせるものの中には木葉文が施されるものもある。ほかに磨石2034や石製の紡錘車3446なども出土している。

SK22021（図版21・197）

確認調査時にＫＭ７区で検出した土坑である。土層観察のための確認トレンチで一部削平されているため、全体の規模・形状は不明であるが、長径3.8m程度の楕円形の土坑であったと推測される。埋土には炭・焼土を含み、多量の土器が出土している(2219～2242)。

SK22022（図版22・205）

Ｄ３区で検出した土坑である。調査区の端にあるために断定はできないが、平面はほぼ円形である。直径2.2mである。坑底は皿状を呈しており、検出面からの深さは40cmである。

土坑内からは、炭化米24点と、甕2091、無軸の木葉文土器片2108と有軸の木葉文土器片が出土している。

SK22023（図版22・205）

Ｄ３区で検出した不定型な土坑である。規模は長軸が２m、短軸が1.4mである。断面形は浅い皿状で、検出面からの深さは28cmである。

埋土から口頸部界に段を残す古い様相を示す壺2086が出土している。

SK22024（図版22・205）

Ｄ3-２Ｇ区で検出した長楕円形の土坑である。規模は長軸が1.5m以上、短軸が1.2mである。断面形は椀形で、検出面からの深さは35cmである。

土坑内からは、壺2123、甕2096、高杯2136が出土している。

SK22025（図版21）

Ｄ3-２Ｇ区で検出した長楕円形の土坑である。規模は長軸が2.1m、短軸が0.7mである。断面形は皿状で、検出面からの深さは15cmである。

土坑内からは、壺2134、甕2126・2135、石鏃2002などが出土している。

SK22026（図版21）

Ｄ3-２Ｇ区で検出した不整形な土坑である。規模は長軸が2.6m、短軸が2.2mである。

断面形は浅い皿状で、検出面からの深さは20cmである。

SK22027（図版21）

Ｄ３－２Ｇ区で検出した不整形の土坑である。規模は長軸が1.7m、短軸が1.2mである。断面形も不整形で、検出面からの深さは20cmである。

SK22028（図版22）

Ｄ３－２Ｇ区で検出した土坑である。規模は長軸が60cm、短軸が50cmである。断面形は浅い皿状で、検出面からの深さは10cmである。

土坑内からは、礫とともに穿孔のある底部2133が出土している。

SK22029（図版22）

Ｄ３－２Ｇ区で検出した土坑である。規模は長軸が1.9m、短軸が1.5mである。断面形は皿状で、検出面からの深さは30cmである。

土坑内からは、炭化米が８点出土している。

SK22030（図版21）

Ｄ３－２Ｇ区で検出した楕円形の土坑である。規模は長軸が1.9m、短軸が1.5mである。断面形は皿状で、検出面からの深さは30cmである。壺の小片2110・2111・石鏃2003が出土している。

SK22031（図版23）

亀ノ郷１区とＤ３－２Ｇ区の東壁の接する部分に位置する土坑である。側溝のため全体の形状は不明であるが、直径1.15m程度の円形の土坑を復元できる。検出面からの深さは10cmと浅く、灰色の埋土を水洗したが土器片が出土したのみである。

SK22032（図版22・205）

Ｄ３－２Ｇ区で検出した楕円形の土坑である。規模は長軸が1.5m、短軸が1.2mである。断面形は皿状で、検出面からの深さは25cmである。

SK22033（図版23）

Ｄ３－２Ｇ拡張区で検出した不整形な土坑である。規模は長軸が2.6m、短軸が2.2mである。断面形は浅い皿状で、検出面からの深さは20cmである。

SK22034（図版21）

亀ノ郷１区のSB22001の西に位置する土坑である。全体の形状は楕円形で、中央が円形にさらに一段深くなっている。長軸は1.2m、短軸は0.8mで、検出面からの深さは最も深い部分で18cmである。土坑の東肩北寄りに木葉文のある壺の肩部の破片2173が出土している。なお、この土坑の北よりの周辺は一段低く窪んでいた。

SK22035（図版23）

亀ノ郷１区のSK22034の西に位置する土坑である。全体の形状は不定形で、長軸は2.8m、短軸は1.9mで、検出面からの深さは28cmである。弥生時代前期の壺の破片が出土しており、埋土を水洗した結果、土器と炭化米１点を得た。

SK22036（図版23）

亀ノ郷１区のSH22006の北東に位置する土坑である。全体の形状は不定形で、長軸は1.9m、短軸は1.6mで、検出面からの深さは50cmである。弥生時代前期のはりつけ突帯のある

壺2172や壺蓋、生駒西麓産の甕などの土器の破片やサヌカイトの剥片(金山産)が出土している。埋土は炭を含んでおり水洗を行ったが、土器片が出土したのみである。

SK22037（図版23・203）

亀ノ郷1区のSH22006の北東に位置する土坑である。全体の形状はややいびつな卵形で、長軸は1.05m、短軸は0.85mで、検出面からの深さは13cmである。断面形は浅い皿状で埋土は多量の炭を含んでいた。この土坑の南で土坑検出面より若干浮いたレベルで2154の甕の破片が集中して出土している。他にも壺や生駒西麓産と思われる甕などが出土している。この土坑の形状や周辺の土器の出土状況はSH22006の中央土坑周辺と非常に似ているため、この土坑を中央土坑とする住居跡の存在が考えられたが、その全体のプランやこれに伴う柱穴を検出することはできなかった。

SK22038（図版23）

亀ノ郷1区のSH22005のある拡張部分の東角に位置する。側溝のため全体の形状は不明であるが、短軸は0.85m。長軸は1.05m程度の楕円形が考えられる。側溝近くが一段深くなっており、検出面からの深さは最大28cmである。図化した2171の甕のほかにも煤の付着した甕の破片が出土している。埋土を水洗した結果、炭化米を検出した。

SK22039（図版23）

下町2区のSD22009の南側に位置している。SK22040に切られている。平面形は円形で、規模は直径0.9m、深さ25cmを測る。埋土は2層である。

SK22040（図版23）

下町2区のSK22039の南側に位置している。SK22039・SK22041・SK22044を切っている。平面形は円形で、規模は直径1.1m、深さ32cmを測る。埋土は2層である。弥生時代前期の甕2210～2212が出土している。

SK22041（図版23）

下町2区のSK22040の南側に位置している。SK22040・SK22042に切られている。平面形は円形で、規模は直径1.0m、深さ26cmを測る。埋土は2層である。

SK22042（図版23）

下町2区のSK22041の南側に位置している。SK22041・SK22043を切っている。平面形はほぼ円形で、規模は直径0.6m、深さ30cmを測る。埋土は2層である。

SK22043（図版23）

下町2区のSK22042の南側に位置している。SK22042に切られている。平面形は円形で、規模は直径0.7m、深さ20cmを測る。埋土は1層である。

SK22044（図版23）

下町2区のSK22040の東側に位置している。SK22040に切られている。平面形はおそらく円形で、規模は直径0.7m、深さ15cmを測る。

SK22045（図版10・255）

池ノ内14区の東側に池ノ内15区の交点付近に位置する土坑である。遺構検出面上で、サヌカイトの石核・剥片が多数、重なり合って一括に出土した(2037～2088)。出土状況は大きく上下2層に分けることができる。下層のものは床面から約1cm浮いており、中には立

った状態のものもみられた。上層のものは最も大きい石核2037-①を中央にしており、ほとんどが横に寝ている状態のものであった。

周囲の掘り方はごく浅く、あまりはっきりした掘り込みとはなっていない。平面の形状は楕円形で、長軸は1.15m、短軸は0.9mで、検出面からの深さは10cmである。埋土を水洗した結果、若干の剥片を検出したが、チップは無く、この場で石を割ったのではなく、剥片の集積地であったと考えられる。なお、周辺に弥生時代の遺物は後期と前期がほとんどであったため弥生時代前期の遺構として、遺構番号を決定したが、石材が産地同定の結果金山産の１点を除き岩屋産と判定されたこと、および石の剥離技法から考えて縄文時代に属する遺構である可能性が高いと考えられる。

SK22046（図版８）

池ノ内16区と池ノ内15区の交点の南壁断面で検出された土坑である。遺構の大部分が調査区外にあるため、形状や規模は不明であり、図化していない。この土坑のU字形の底付近に、2261の壺底部が底面がわずかに傾いた状態で座っており、その下にずり落ちたような状態で2261の壺口縁部の破片が口を下に向けて出土している。この２点の土器の胎土はよく似ているが、別個体と思われる。いずれも比較的大型の土器であり、上部を削平された土器棺の可能性が考えられる。埋土は黒褐色の細砂質シルトであった。

SK22047（図版３）

下町２区のSD22009とSD22010の間に位置する円形の土坑である。直径45cm、深さ25cm。下層に炭を含んでいる。石錐2021が出土している。

SK22048（図版３）

下町２区の南端近くに位置する円形の土坑である。直径1.44m、深さ14cm。石鏃2018が出土している。

SK22049（図版３）

黒岡２区の北端近くのSK22001の南に位置する隅円三角形の土坑である。楔形石器2032が出土している。

SP22001（図版25）

池ノ内15区の中央に位置する。これを含めて５本の柱穴が１列に並んだが、建物跡は復元できなかった。掘り方の直径0.55m、柱痕の直径0.25m、深さ0.25mである。出土土器には弥生時代前期の無文の甕2263がある。

第４節　溝

SD22001（図版25）

黒岡２区の北端部付近で検出された、東西方向に走る溝である。幅は東半部が0.75cm、西半部はSK22001などに切られているため溝幅は不明である。検出面からの深さは10cmで、底は丸底である。溝の埋土中から、壺の頸部2074、頚部に４条のヘラ描き沈線を巡らせた弥生時代前期の甕2065が出土している。

SD22002（図版25）

黒岡２区と亀ノ郷９区との交差点の南側で検出された東西方向の溝である。SH22001（亀

ノ郷９区）およびSK22003（黒岡２区）にはさまれた範囲でのみ確認されている。SH22001との切り合い関係は不明である。SK22003との切り合い関係は、先述のとおりSD22002が埋没した後SK22003が掘られている。埋土中から弥生時代前期の口縁部に刻み目のある甕2064が出土している。

SD22003（図版25）

黒岡２区の北半部で検出されたほぼ東西方向に走る溝である。溝というよりむしろ長楕円形の土坑である可能性もある。壺2074が出土している。

SD22004（図版197・206）

亀ノ郷９区の中央付近を、調査区を南北方向に横切る形で伸びている。また、その続きはＤ３区でも検出されている。幅2.2m、検出面からの深さ約30cmの浅い溝である。遺構内の土層の堆積は上・中・下の３層に分けられる。出土した遺物は弥生時代前期の壺2193・2194、甕2195・2196、蓋2197などがある。上層から出土した壺はヘラ描き沈線を１条ないし２条巡らせるものである。甕は図化された無文の甕の他、削り出し突帯を施すもの、生駒山西麓産のものと思われる暗褐色のものなどが含まれる。中層から出土した壺2194はヘラ描きの連弧文が施されている。下層からは壺の底部片が出土している。

SD22005（図版25・206）

亀ノ郷１区のSH2006の南で検出している。ただし、住居跡や土坑などの弥生時代前期の遺構群を検出した面よりさらに下の面で検出している。

幅4.2～60m、深さ0.6～1.3m。幅広く二段に落ち込む浅い溝で、北西から南東に向かって流れており、亀ノ郷２区に続くものと考えている。

埋土には炭化物ないし植物遺体がラミナ状に含まれており、溝というより淀み状の堆積を示している。亀ノ郷２区での埋土は灰色のシルトである。遺物は弥生時代前期の壺・甕の小片が出土している。

SD22006（図版３）

亀ノ郷１区の南部の東壁際に屈曲部がかかる形で検出している。SD22005と同様、住居跡や土坑などの弥生時代前期の遺構群を検出した面よりさらに下の面で検出している。南はおそらく下町４区に続くものと考えられるが、北東方向については、亀ノ郷２区のSD22005と合流しているものかどうかは、決めてに欠ける。

亀ノ郷１区での検出幅13m、深さ1.2mで、上層は青灰色のラミナ、下層は炭化物ないし植物遺体が多く黒色土を主体とするラミナで、淀み状の堆積を示している。遺物は１点も検出されなかった。下町４・６区での幅は６m、深さは約1.6mである。

SD22007（図版24・206）

亀ノ郷１区のSD22006の上層を流れる溝である。北西から南東方向に流れており、亀ノ郷２・４区の交点付近に続くものと考えている。

亀ノ郷１区での検出幅約1.5m、深さ約0.7mで、断面形は比較的鋭いV字状である。溝の底は亀ノ郷微高地の基盤である礫層にまで掘削が及んでいる。この溝の両脇には、掘削時の排土を積み上げたと思われる礫を多くふくむ幅１m前後の土塁状の高まりがみとめられた。

亀ノ郷２区では検出幅2.3m、深さ約0.9mであり、やや幅広くなっている。溝の脇にあ

る土手の幅は約１ｍで、遺構検出面からの高さは20㎝程度である。SD22011から分岐した流れが合流している。

埋土から遺物は１点も検出されなかった。

SD22008（図版24・206）

亀ノ郷１区のSD22007を切る溝で、ほぼ東西方向に流れている。検出幅約2.5m、深さ約0.8mで、断面形は台形を呈している。ほかの調査区ではこの溝の続きは確認できていない。

埋土から弥生時代前期の壺2179などが出土している。

SD22009（図版25）

下町２区の北端に位置し、調査区に直交する溝である。調査区内ではほぼ直線であり、N-65°-Wを指している。幅は約1.35m、深さ0.42mを測る。断面形は逆台形を呈する。

遺物は弥生時代前期土器壺が出土している。

SD22010（図版25）

下町２区のSD22009の南方約８ｍに位置する溝である。平面形は南西方向が開く「コ」の字形を呈している。幅は約0.9m、深さ0.3mを測る。断面形は逆台形を呈する。性格は不明である。

遺物は弥生時代前期の壺2209が出土している。

SD22011（図版24）

亀ノ郷２区のSD22007の北側に沿って流れる溝で、途中で分岐してSD22007に合流する。検出幅0.9m、深さ0.55mで、断面形は比較的鋭いＶ字状である。分岐した溝の幅は1.1m、深さ0.35mである。

SD22012（図版６・214）

SD22012は亀ノ郷５区のほぼ中央部で検出した。北西から南東に流れる。断面形は皿形を呈し、検出面における幅約1.4m、検出面からの深さ約20㎝を測る。埋土は３層に細分できるが、基本的にはほぼ同質のシルト層からなる。

この溝の埋土内からは土器は出土していない。しかし、亀ノ郷５区の西側において、下層遺構の確認を行った際、遺構ではないがSD22012の埋土と同じシルト層を確認し、この層から弥生時代前期の土器片が出土している。したがって、SD22012についても、ほぼ同じ時期が考えられる。

第３章　弥生時代中期の遺構

第１節　住　居　跡

SH42001（図版26・245）

SH42001は、ほぼ半分が調査区南側に広がっているうえ、周壁溝も全周の1/6程度が残存しているにすぎない。このため全体の規模は明確にしがたいが、概ね直径７～7.5mの円形ないしはやや歪んだ円形の住居と考えられる。主柱穴の数は不明であるが、６本であった可能性があろう。

中央土坑も約半分が調査区外に延びる。楕円形を呈する土坑で、検出面からの深度は約30cmをはかる。２段に掘り下げられており、土坑底には炭の堆積がみられる。土坑は自然埋没しており、土坑下底からはⅣ様式期に相当する高坏の坏部2284・壺2283・甕2285・台状土器2286が出土している。

SH42002（図版26）

池ノ内９区の東側に位置する。遺物包含層の上面から土器が集中していたため、住居跡の存在が予想されたが、プランを検出することができなかったため、段丘面まで下げて検出した。見つかった遺構は中央土坑および柱穴などで、周壁溝は検出できなかった。

住居跡の平面形は不明だが、柱穴の並びからみて、直径６～７m程の円形になると考えられる。中央土坑は平面楕円形で、長軸0.8m、短軸0.55m、深さ0.3mである。埋土には炭層が充満していた。中央土坑の長軸側の両脇には１対の柱穴があり、棟持柱と考えられる。

主柱穴は６本分が検出でき、全体では７本柱になるものとみられる。主柱穴間の距離は概ね２mで揃っているが、北側のみ2.7mと広くなっている。主柱穴のさらに外側にも柱穴の並びが認められるが、これが住居跡の拡張によるものかどうかは不明である。

SH42003（図版27・244）

SH42003-bは調査区のほぼ中央に位置し、周壁溝の東側・西側が調査区外に延びている。また南側の周壁溝は遺存していなかったため、住居跡の正確な規模は不明瞭である。ほぼ円形のプランをもつSH42003-aは、ほぼ同心円状に重複しているところから、建て替えが行われたものと思われる。直接重複関係を確認できる部分はなかったが、一般的な理解によるならば、規模が小さい42003-aから42003-bへの拡張が行われたとして大過ないであろう。主柱穴の数は、ともに６本と思われる。各々の規模は、42003-aが直径６m前後、42003-bが直径７m前後であろう。

中央土坑は、やや歪んだ楕円形の土坑である。検出面からの深度は36cmを図る。この土坑の縁からは西に向かって、浅い溝が緩やかに蛇行しながら調査区外へ延びており、排水溝と考えられる。中央土坑からは、Ⅳ様式期の壺の口縁部2280が出土しており、42003-bの周壁溝からはミニチュア土器2281が出土している。

SH42004（図版27・245）

SH42004はSH42003の南に隣接している。円形の住居跡と思われるが、周壁溝が全体の1/8程度しか遺存していないため、住居跡の正確な平面形態は不明である。規模は、直径６～７mであろうか。主柱穴は６本である。中央土坑は、やや歪んだ円形を呈する。細砂を主体とする土坑で自然埋没しており、最下層には炭の堆積がみとめられた。高坏坏部2287が出土している。

第２節　土　　坑

SK42002（図版28）

池ノ内８区の東端付近に所在する。長軸1.1m、短軸0.8mの不定型の土坑で、検出面からの深さはおよそ40cmである。2288～2290の高坏口縁部の破片が３点、2291の脚部の破片が１点出土している。

SK42002（図版28）

池ノ内14区の西端付近に位置し、SH72003に切られている。長軸4.6m、短軸1.9mの細長い土坑で、中央部が一段深くなる。最深部の深さは1.1mである。弥生時代中期の土器・縄文土器の深鉢・サヌカイトの剥片などが出土している。

SK42003（図版28）

池ノ内１区の池ノ内９区・16区の交点よりやや南に位置している。長さ4.6m、幅0.8mをはかる長大な土坑である。検出面からの深度は約20cmをはかる。土坑はシルト質をおびた細砂～中砂で自然埋没している。埋土中からは弥生時代Ⅳ様式期に相当する、壺の口縁部2292・2293、把手付きの壺(水差し)2294、台状土器2295などが出土している。

SK42004（図版28）

池ノ内１区の南部に位置し、SH42003に切られている。直径約60cm、深さ約20cmをはかる円形の土坑である。土坑中央のやや東寄りに、直径25cmの円形の柱穴状の落ち込みが見られ、当該部分のみ深さ35cmをはかる。土坑内からはⅣ様式期の壺の口縁部2282が出土している。

SK42004は、その規模と形状が竪穴住居跡の中央土坑に近似しており、あるいはこの土坑を中心とした竪穴住居跡が存在したものかもしれない。

第３節　溝

SD42001（図版６・214・225）

亀ノ郷５区の弥生時代中期の水田面の東端部で検出した水路である。水田に伴う水路と考えられ、水田面で認められた段差の方向とほぼ同じである。水路の断面は基本的には逆台形を呈するが、西側はわずかに２段掘りになっている。また東側のほうが立ち上がりが急である。最深部における検出面からの深さは30cmである。埋土は３層からなるが、上から灰色細砂～極細砂質シルト、灰色細砂混じりシルト、灰色極細砂質シルトとほぼ同質である。このなかで、最下層の水路面との境には厚さ約１cmの炭層が認められた。

当水路の埋土内から、弥生時代中期の土器2297・2298が出土している。確認できた器種は、甕に限られる。量的にはわずかで、埋土の上層から下層にわたって出土している。

下町８区東端でも、この続きを確認している。溝は南北方向をとり、やや南が低くなるようである。この溝の西に広がる水田との関わりは不明である。埋土は４層に分かれる。最下層の粗砂中には遺物は含まれないが、下層のシルト質極細砂層からは、弥生時代中期の甕2296、および弥生時代前期の土器小片、木片などが出土している。

第４章　弥生時代後期～古墳時代前期の遺構

第１節　住　居　跡

SH52001（図版29・194）

黒岡１区に位置する直径6.5mの円形の住居跡である。弥生時代前期上層遺構面で検出されたため当初は弥生時代前期の遺構かと考えられたが、2310など埋土中の土器の大半が弥生時代後期の土器であることから、この住居の時期も弥生時代後期まで下がるものと考えられる。中央土坑は円形で直径約80cm、柱は４本柱である。

SH52002（図版29・94）

黒岡１区でSH52001と同じ面で検出している。平面プランは検出されなかったが、中央土坑らしき遺構とその周辺に配置された柱穴の位置関係から住居跡と推測されたものである。中央土坑は円形に近い隅円方形で、直径およそ1.2mである。住居の規模および平面プランは不明であるが、中央土坑と柱穴の配置がSB52001と類似していることから、SB52002の規模・プランもSB52001と同様のものであると考えられる。

SH52003（図版30・193）

黒岡１区の最上面で検出された一辺が7.4mの隅円方形の住居である。埋土中には炭・炭化材等が多量に含まれていた。中央土坑は楕円形で、長径2.4m、短径1.5mである。また周壁溝上の二点から中央土坑に向かって底が深くなるように幅20cmの溝が掘られている。柱は４本で、それぞれのコーナーを結んだ対角線上に配置されている。一度建て替えた後に住居は焼失したらしく、炭化材および焼土が多量に遺存していた。遺物は弥生時代後期の土器が中心である。埋土中や柱穴の中から後期の甕2315・壺2314・高坏2316などが多く出ているほか、柱穴７からは細頸壺が出土している。

SH52004（図版30・228）

西ケ市１区の東壁に接して検出された。１辺2.4m以上(2.4m以下)の方形の竪穴住居址の北隅を含む全体の約1/4の部分に相当すると考えられる。ただし、主柱穴、中央土坑、周壁溝など内部施設は不明瞭である。壁の立ち上がりは低く10cm程に過ぎず、住居跡とするならばかなり削平されているものと思われる。柱穴は２基確認したが主柱穴とするには位置と深さに問題を残す。周壁溝であろう浅い溝状のものは北辺でのみ確認できた。

遺物は少なく、弥生時代後期の特徴を示す土器片が散見されるのみである。

SH62001（図版31・253）

池ノ内16区の西側に位置する。平面形は隅丸方形で、北東部の約1/4のみを検出した。検出した範囲での規模は、東西3.6m、南北3.9m、深さ0.2mである。

床面で検出した遺構は、中央土坑・周壁溝・柱穴である。中央土坑は平面不整形で、検出した範囲の規模は長軸1.3m、短軸1.0m、床面からの深さ0.4mである。埋土には炭が含まれており、中央土坑の北側には長さ2.1m、幅1.4mほどの範囲で、床面から0.1m低い部分が設けられていた。

住居跡の床面および埋土からは多量の土師器(2641～2646・3179～3183)が出土した。

第２節　旧河道・溝

SD52001（図版30）

黒岡１区は遺構面を３面検出しているが、その最上層（第１面）で検出した。東西方向に走る溝で、幅は約１ｍ、検出面からの深さは40cmである。東の黒岡11区側は東北方向から流れ込み、黒岡１区の部分を東西方向に走り、西側の黒岡４区側は北西方向に抜けていく。断面形はＶ字形に近い。ただし土層断面図を見る限りでは、溝が一度埋まった後もう一度掘りなおしているようである。出土した遺物は図版72の2299～2308で、弥生時代後期の甕、鉢の他、細頸壺がある。

SD52002（図版30）

同じく黒岡１区の第１面で検出した。竪穴住居SH52003を取り囲むように掘られた溝で、住居の排水もしくは区画のためのものと考えられる。幅は約1.3m、検出面からの深さは35cmで、底はほぼ平らである。出土遺物は比較的浅い位置で検出された。出土した遺物は図版72の2309～2313で、弥生時代後期の壺・甕・鉢などである。

SD52003（図版４・５）

亀ノ郷２区の第２水田面を流れる溝である。水田畦畔の向きと平行して、東から西へゆるい弧状に流れている。上層の第１水田面を流れるSD72003とほぼ重複している。幅は1.5ｍ、検出面からの深さは50cmである。弥生時代後期の壺の胴部2622、甕の底部などが出土している。

SD52004（図版４・223）

亀ノ郷２・４区の第２・３水田面、SD52003の南側をほぼ同じ向きに流れる溝である。下町４区の弥生時代水田面でも検出されている。亀ノ郷２区での幅は２～３ｍ、深さは40cmで、SD52003よりやや規模の大きな溝である。下町４区での検出幅は0.8～1.1m、深さ35cm程度である。

SD52005（図版５・223）

下町１区から４区にかけて、旧河道SR52001の西側をほぼ同じ向きに流れる細い溝である。下町１区での幅は約1.8～3.0m、深さは30cmで弥生時代後期の甕などが出土している。下町４区では0.7～0.9m、深さ45cmである。

SD52006（図版30・228）

西ケ市１区のSH52004から西へ約２ｍ離れた位置にあり、あたかもSB0001を取り巻くように緩やかな弧を描いているが、確認トレンチを挟んだ南側では西へ逃げてゆく。幅50cm、深さ40cmほどの小規模な溝であるが古墳時代前期の甕2624・脚付き鉢2623が完形に近い状態で出土している。

SD62001（図版７・227）

西ケ市１区の北部をSR62002から分岐して流れている。幅2.6～６ｍで、尻すぼみ的に細くなり、調査区外へ蛇行しながら流れてゆく。SR62002との分岐点には不整形のくぼみがあり、杭や流木がまとまって出土しており、SD62001下層として報告しているが人為的な遺構であるとは考えにくい。（図版227）

SD62002（図版７）

西ケ市９区の北部で検出された。調査範囲が狭いため、規模などは不明である。2632～2635、3172の土師器が出土している。

SR52001（図版５）

下町２区から４区にかけて、やや蛇行しながら北から南へ流れる旧河道である。下町２区での幅はおよそ６ｍ。検出面からの深さは85cmであり、下町４区での幅はおよそ13m。検出面からの深さは2.4mである。下町４区では弥生時代後期の甕2331が出土している。（図版５・221）

SR62001（図版５）

下町２区の南端を北東から南東へ屈曲しながら流れる旧河道である。幅2.7～４ｍ、深さ約70cmである。

SR62002（図版７・35・36・233・234・241・249・250）

西ケ市１・２・３・４・６・７区、池ノ内１・８～12区をおおよそ北から南へ向かって流れている。その東側は段丘であり、西の沖積地の境を流れる旧河道である。

西ケ市１・３区では埋没後に堆積した砂礫層が盛り上がるようにみられ、多量の土器が出土した。西ケ市７区では古墳時代の水路SD72007の下層を流れている。また、KM３区では弥生後期の土器が出土しており、SR62001下層（SR52002）出土として図化している。（2373～2381）

池ノ内８区では、南東肩で土器がまとまって出土している。（図版34・246）

a．井堰（図版35）

池ノ内９区西端では、北東－南西方向に流れる旧河道SR62002に対して、直交する形で井堰が設けられている。南端は調査区外に延びており、検出した範囲での延長は3.7mである。井堰には２回の架構が認められ、１回目の架構は前後の幅約２ｍ、高さ約30m、２回目の架構は前後の幅約1.5m、高さ約10mである。井堰の構造は長さ２～３ｍの横木に対して、長さ１ｍ前後の材を直角方向に多数組み合わせるものであった。横木には梯子・二股鋤といった道具を転用したものがあった。井堰の下からは完形の土器数点（2386・2387など）が出土した。

また、同じ池ノ内９区で別の木組遺構も検出されている。

池ノ内10区では東岸に杭列が検出されている。（図版249）

第３節　土　　坑

SK52001（図版５）

下町２区の北部に所在する。直径0.7mの円形の土坑である。弥生時代前期の遺構と同じ面で検出している。

SK52002（図版４・223）

下町６区の下町４区との交点近くに位置する。調査区の端に位置するため、全体の規模や形状は不明であるが、直径４ｍ程度の円形の土坑か。深さは40cmである。埋土の最下部には薄い層状の炭の堆積がみられる。埋土から遺物は出土しなかったので時期の特定は困難であるが、検出面から考えて、弥生時代後期以前と考えられる。

第５章　古墳時代中期の遺構

第１節　住居跡

SH72001（図版31・243）

池ノ内14区西端と、一部池ノ内１区にかけての範囲で検出したSH72001～72003は、いずれも形態がほぼ方形・４本柱で、周壁溝をめぐらし、中央付近に焼けた小さな土坑、南辺の中央に炭を含んだ大きな土坑をもつものである。この３軒は形態的な類似性からみて、連続的に建てられたものと考えられ、切り合い関係によって72001→72002→72003の築造順が認められる。

SH72001は西半部を池ノ内１区、東半部を池ノ内14区で検出し、東辺の一部は調査区外である。規模は、東西6.7m、南北6.3m、柱間3.4～3.6m、検出面からの深さ0.2mである。壁際には幅0.2mの周壁溝がめぐり、その内側には床面から約10cm高いベッド状遺構が設けられている。住居跡の東半分の床面はSH72002に切られて失われているが、４本の柱がベッド状遺構の内側の四隅に配置されたものとみなされるため、周壁溝およびベッド状遺構は全周していたものと予想できる。中央付近の小土坑は径0.7m、深さ0.1mの浅いものである。南辺中央の土坑は長軸0.9m、短軸0.7m、深さ0.3mである。柱穴は径0.25～0.35m、深さ0.2mである。図化できるような遺物は出土しなかった。

SH72002（図版32）

池ノ内14区の西端で検出し、北半部は調査区外である。また西半部ではSH72001との切り合いのため床面の遺存状況が悪く、周壁溝などを検出できなかった。また周壁溝の拡張や、一部に認められる貼り床の痕跡から、住居は一度建て替えられていることが判る。

当初の住居跡の規模は、東西4.8m、柱間2.0m、検出面からの深さ0.15mである。周壁溝は南東部分のみ検出できたが、他は不明である。中央付近の小土坑は径0.4m、深さ0.1mである。南辺中央の土坑は建て替え後の住居と共有しているものの、周壁溝からはみ出しているところからみて、建て替え時の拡張が考えられる。柱穴は径0.3m、深さ0.3～0.4mである。

建て替え後の住居跡は、南・西側にわずかずつ拡張されたことが判るが、西・北側については不明である。規模は東西5.0m、柱間2.7m、検出面からの深さ0.15mである。周壁溝は南辺の一部でのみ検出できた。中央付近の小土坑は径0.45m、深さ0.1mである。南辺中央の土坑は長軸1.0m、短軸0.9m、深さ0.25mである。中央付近の小土坑と南辺中央の土坑の間の床面に、焼土の痕跡が認められた。柱穴は径0.3～0.35m、深さ0.3～0.4mである。出土土器には壺2640がある。

SH72003（図版32・252）

池ノ内14区の西端で検出し、南西隅のみ調査区外である。床面の遺存状況は良好で、周壁溝の拡張や、貼り床の痕跡から、住居は一度建て替えられていることが判る。貼り床には黄色粘土を用いており、下層の遺構を覆っている。

当初の住居跡の規模は、東西4.1m、南北4.2m、柱間1.9～2.4m、検出面からの深さ0.15

mである。周壁溝は全周していると思われるが、南辺は建て替え後の住居と共有しているため、不明である。南辺中央の土坑の東脇に、周壁溝より浅い溝で長方形の仕切りが設けられている。内法は長軸0.8m、短軸0.45mで、性格は不明である。中央付近の小土坑は径0.25m、深さ0.1mである。南辺中央の土坑は建て替え後の住居と共有している。柱穴は径0.25～0.3m、深さ0.15mである。

建て替え後の住居跡の規模は、東西4.9m、南北5.0m、柱間2.1～2.3m、検出面からの深さ0.1mである。周壁溝は全周している。中央付近の小土坑は径0.4m、深さ0.15mである。南辺中央の土坑は長軸1.0m、短軸0.9m、深さ0.4mで、土坑の縁の床面には炭層の広がりが認められた。土坑の埋土上層の壁際からは、黄色粘土塊が出土した。柱穴は径0.3m、深さ0.4～0.45mである。

SH72004（図版33・243）

池ノ内1区の中央部付近に所在する一辺が約6mをはかる方形の住居跡である。

住居の方位は、ほぼ南北に合致している。住居跡の西半分は調査区外へ延びるため、全体の状況は不明である。4本柱を基本とするものであろうが、住居の隅に接する柱穴の他にやや内側に寄った柱穴もみられる。住居南辺は、多数の土坑が重複することで破壊されている。

住居跡中央付近の床がわずかに窪んでおり、その中心に中央土坑が位置している。中央土坑は歪んだ楕円形を呈し、自然埋没していた。中央土坑内より土師器の甕3175が出土している。

SH72005（図版33・244）

池ノ内1区の池ノ内9・16区との交点付近に所在する一辺が約4.8～5.6mをはかる歪んだ隅円方形の住居跡である。

住居の長辺の方位は、北東～南西に合致している。2基の住居跡が重複しており、先行する72005-aから約1m程度東に移動して、72005-bが作られている。72005-bの東側の一部が調査区外に延びるため、全体の状況は不明であるが、ともに4本柱を基本とするものであろう。

72005-aの住居南辺に接して、焼土の厚い堆積がみとめられ、その上面および焼土内から高坏3173など多数の土師器が出土した。こうしたことから72005-aは南辺に竈を設置していたものと判断される。

第2節　掘立柱建物

SB72001（図版43・218）

掘立柱建物跡SB72001は亀ノ郷8区の中程、SD72001-aの東側に位置している。南側は調査区外に広がっているため建物の全容はつかめない。現状では2間(3.0m)×2間(3.8m)の総柱である。柱間は0.9～1.5mである。柱掘形は円形で、直径0.3～0.4mを測る。建物の主軸方向は、N32°Wである。遺物は出土していないが、検出面から考えて古墳時代に属するものと思われる。

SB72002（図版43・237）

西ケ市７区の流路SD72007の東に約３ｍの位置にある。東西２間、南北２間以上の総柱建物で、柱間は1.4～1.9m、柱穴の堀方は径約35㎝、柱痕は径約13㎝である。遺物は出土していないが、南北ラインがほぼ磁北と一致し、西ケ市２区のSB72003とそろうことからこれと同時期と考えておきたい。

SB72003（図版43・233）

西ケ市２区の中央部のＫＭ７区との交点付近に位置している。２間×２間の総柱建物である。柱間は1.0～1.4mである。柱掘形は円形で、直径0.2～0.4mを測る。建物の主軸方向は、ほぼ磁北と一致する。検出面および柱穴の断ち割り調査時に出土した遺物から判断して、古墳時代のものと考えた。

第３節　土　　坑

SK72001（図版８・254）

池ノ内15区の池ノ内16区との交点の東の北壁際に位置する溜まり状の遺構である。調査区の端にかかっているため、全体の規模・形状は不明であるが、一辺5.5mの隅円方形に近い形状が推定できる。埋土より馬の骨が出土している。

SK72002（図版33・244）

池ノ内１区のSH72005に切られている土坑である。調査区の端にかかっているため、全体の規模・形状は不明であるが、長軸2.6m、短軸1.7m程度の楕円形に近い形状が推定できる。深さは60㎝である。埋土より６世紀初頭の須恵器が出土している。

第４節　柱　　穴

SP72001（図版８）

池ノ内14区のSH72001の南西コーナーにある柱穴で、須恵器の高坏坏部が出土している。

第５節　水路・溝

SD72001（図版37～41）

溝SD72001は北端に位置する亀ノ郷７・11区から亀ノ郷３区、亀ノ郷６区、亀ノ郷８区と亀ノ郷地区を北から南へ向かって蛇行しながら流れ、西ケ市６区の西端を通り、ＫＭ７区・西ケ市７区あたりでSD72007と合流するものと思われる。図版37に示したように、最上層では幅１ｍ前後の比較的細い何本かの溝を検出しているが、掘り下げていくと１本の溝となった。

最上層を流れる最も大きな溝SD72001-aは、北端に位置する亀ノ郷７・11区から亀ノ郷３区、亀ノ郷６区、亀ノ郷８区で確認している。

ａ．亀ノ郷７・11区（図版39・40・215～217）

亀ノ郷７・11区では溝SD72001は調査区西部で北から南へ向かって流れている。幅は水路自体が蛇行しているため一定ではないが、2.8～5.6mを測る。遺物が多量に出土する場所は、ほぼ４か所にまとまっている。このため、各まとまりを第Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ群と呼称した。

第Ⅰ群はSD72001の南端の右岸にまとまって出土している。土師器壺・甕・椀・高坏・手づくね土器が出土している。個体数は少ないが土師器の完形の甕がまとまって出土している。

第Ⅱ群は第Ⅳ群の東側に位置し、本流に合流する細い溝で、延長５ｍほどの間でまとまって出土している。土師器壺・甕・高坏・手づくね土器、須恵器高坏蓋が出土している。他のまとまりに比べて粗密であり、まとまりの特質がない。木製品は又鍬2019などが出土している。

第Ⅲ群は左岸の溝が屈曲した攻撃面に位置し、東側の微高地から置かれた状態で出土している。土師器壺・甕・甑・椀・高坏・手づくね土器、須恵器坏身・坏蓋・把手付椀・ハソウが出土している。土師器の割合が非常に高く、椀・高坏の比率が少なく甕の比率が非常に高い。また手づくね土器もまとまって置かれた状態で出土している。木製品は馬鍬？・エブリ2004・2005・又鍬2024などの農耕具や台座2107・用材2175などが出土している。石製の勾玉・剣形・臼玉の多くもここから出土している。土師器甕の中から石製の臼玉が出土したものもある。

第Ⅳ群は上流にあたり、延長10ｍの範囲でまとまって出土している。土師器壺・甕・甑・椀・高坏・手づくね土器、須恵器甕・瑞・樽形瑞が出土している。土師器の割合が非常に高く、完形の椀の比率が高い。木製品は有頭の部材2054や2202などやや大型のもの、刀や剣形の祭祀具2119・2116などが出土している。

ｂ．亀ノ郷３区（図版38・210～212）

水路SD72001は亀ノ郷７区から続いており、北西から南東に若干蛇行しながら調査区を斜めに横切って流れている。遺物が最も多く出土している層で、幅は６ｍ程度である。その堆積は下から青灰色の砂礫層・シルトから粗砂のラミナ層・黒色のシルト層の３層に大きく分けることができる。最上層は３本の溝に分かれる。そのうちSD72001-aは幅2.7m、深さ50cmで最も規模が大きく、須恵器の坏3033が出土している。

土器は黒色シルト層から、木器・流木などはラミナ層の最下部、青灰色砂礫層の直上でまとまって出土している。木器・流木は調査区の北壁際に集中し、直径５cmほどの細い丸太材が流れの方向及びそれに直交する方向にかなり密に並んで重なりあっていた。その下層から竹などの植物繊維を挟みこんだ枠状の木器2070・2071・2075～2080の組み合わせ木器が出土した(図版212)。この木器の集中している地点のすぐ下流にあたる部分は肩・底もえぐれており、水路の決壊状況がうかがえる。調査区南壁付近では矢板2033・2034が間に部材2188をはさむ形で打ち込まれた状態で検出されている。この層で出土した土器は須恵器3034・3035、土師器3060～3064で、上層72001-aの須恵器の坏3033との時期差はほとんどない。青灰色の砂礫層から遺物は出土しなかった。

ｃ．亀ノ郷６区（図版213）

水路SD72001は亀ノ郷３区と同様に、調査区を北西から南東に向けて斜めに横切る。堆積状況も亀ノ郷３区と同様で、下から青灰色砂礫層・シルトから粗砂のラミナ層・黒色シルト層の３つに大きく分けられる。上層の黒色シルト層からは土器と木器2087などが出土しており、ラミナ層の最下部、青灰色砂礫層の直上からも若干の土器と木器がみられた。

いずれも遺物の量はかなり少ない。

最上層では幅1.2m、深さ40cmのSD72001-aと、幅60cmで深さ10cmのSD72001-bの２本の流れであり、SD72001-aからは土師器の甕3077、須恵器の甕が出土している。

ラミナ層を除去した段階で、幅は６m程度であり、西肩には10本の杭が杓子形に並んでいた。水路を横断するものでなく、護岸のためのものでもなく、その性格は不明である。また、溝SD72004がこの水路から分岐して流れている。

d．亀ノ郷８区（図版41・218・219）

亀ノ郷８区では溝SD72001は調査区西部で北から南へ向かって流れている。護岸には部分的に杭が打ち込まれていた。幅は水路が大きく蛇行しているため一定ではないが、３～17mを測る。北端では水路中に立木の株(2251ヤナギ属)が見つかった。遺物は亀ノ郷７区に比べて疎らではあるが、同様に完形の土器が出土する割合は高い。遺物が多量に出土する場所は、ほぼ２か所にまとまっている。第Ⅰ群は北端の立木の株の周辺であり、第Ⅱ群は南端の流れが屈曲している部分である。

第Ⅰ群は木の株に引っ掛かるような状況で土師器の壺・甕・椀・高坏・手づくね土器、木製の臼2040・杵2038・腰掛脚板2098・机天板2095・建築部材2189などが出土している。

第Ⅱ群は土師器の壺・甕・椀・高坏、木製の容器2090・2091・建築部材2081・腰掛脚板2099などが出土している。このまとまりは完形の高坏の比率が高く、高坏3118～3120の脚部にはヘラ記号「∧」が記されており注目される。

他に須恵器坏・甕、土師器器台、韓式土器鉢、製塩土器、鉄斧3450が出土している。

e．西ケ市６区（図版236）

西ケ市６区の西端で、東肩を検出している。ここでも土器が若干出土している。

SD72002（図版５・37）

亀ノ郷２区の第１水田面の東端を流れる溝である。幅約１m、深さ28cmで、中世の溝SD82005とほぼ重なっている。

SD72003（図版５・37）

亀ノ郷２区の第１水田面の東端付近から中央部にかけて、北東から南西に向かってゆるく円弧をえがきながら流れる溝である。幅は1.0～1.4m、深さは35cmである。下層の第２水田面を流れるSD52003とほぼ重なっている。土師器の甕などが出土している。

SD72004（図版37）

亀ノ郷６区の溝は水路SD72001から分岐している。幅は１m、深さ35cmである。ほとんど溝を塞ぐようにして、完形の土師器の二個体の甕3074・3079が口縁部を上にして据えられていた。他に甕の肩部3076が出土している。

SD72005（図版５・221・222）

下町２区から下町４区にかけて、古墳時代の水田面を北西から南東に流れる溝である。下町２区での幅は約７m、下町４区での幅は約９m、深さ70cmである。下町４区では曲物2093が出土している。

SD72006（図版５・221・222）

下町２区から下町４区にかけて、古墳時代の水田面を屈曲しながら流れる水路である。

下町２区での幅は2.3mで両側に大畦畔が伴っていた。下町４区での幅は約2.5m、深さは1.1mで断面形は比較的鋭いV字状である。北側の畦畔の残存状況はよくなかったが、南側では明瞭な大畦畔が検出され、その畦畔中には須恵器が含まれていた。また、下町４区では須恵器の坏身3167が出土している。

SD72007（図版７・42・235・238）

西ケ市６・７区、ＫＭ７区を北東から南へゆるく円弧を描きながら流れる水路である。

ａ．西ケ市７区（図版238）

西ケ市７区では旧河道SR62002と重なり、その西肩を切っている。幅8.3m、深さ約２ｍを測る。水路の断面形は不整形で特に東肩側の法面勾配は緩やかである。水路の底近くからは古墳時代中期の土器と木製品が多量に出土している。土器には完形のものが多く、木製品は曲柄鍬、木錘、琴、椅子、梯子など多種多様である。

ｂ．ＫＭ７区（図版239）

確認調査ＫＭ７区でもこの水路が確認されており、須恵器・土師器・韓式土器・製塩土器・木器など多くの遺物が出土している。

SD72008（図版７・231・237）

西ケ市６区でSD72007と分岐し、ＫＭ７区を通り西ケ市２・７区を流れる溝である。幅は2.3m程度である。西ケ市２区では方形周溝墓SX22001の西溝を切っており、幅2.15m、深さ50cmである。古墳時代中期の須恵器坏蓋・把手付き椀や土師器甕・鉢・てづくね土器などが出土している(3194～3204)。弥生時代後期の土器も出土している。

SD72009（図版７・237）

西ケ市７区の上層を流れる溝である。幅は約1.2m。須恵器ハソウ3171やふいごの羽口などが出土している。

SD72010（図版８・241）

池ノ内１区北端の旧河道上面で検出された古墳時代の溝である。概ね南北方向に延びている。幅は0.4～0.8m。溝の掘り込みのベースとなる面は、シルト質極細砂を主体とする低湿で脆弱な水田土壌であり、SD72010も水田に伴う溝であった可能性が高い。

SD72011（図版８）

池ノ内１区北端の段丘面上で検出された古墳時代の溝で、池ノ内８区にも続いている。概ね東西方向に延びており、SH72001を切って掘削されている。幅は0.6～1.0m。SD72010とはほぼ直交するため、やはり耕作に伴う溝であった可能性があろう。

第６章　古代・中世の遺構

第１節　掘立柱建物

SB82001（図版43・236）

西ケ市６区と２区の交点付近に位置し、南東隅は調査区外である。桁行３間、梁行３間で、内側に柱はもたない。柱間は桁行が1.5m、梁行が1.1～1.3mで、桁行方向はＮ14°Ｅ、

面積は16.2㎡である。柱穴は径0.2～0.3m、検出面からの深さ0.1～0.2mである。柱穴から出土した須恵器・土師器の時期は不明であるが、周辺の土坑から奈良時代の坏Bが出土している。

SB82002（図版43・253）

池ノ内16区の西端に位置し、南西側に接するSB82003と建物の向きをほぼ同じくする。北側と東側の延長部分は調査区外のため全体の規模は不明であるが、南北方向３間分、東西方向１間分を検出した。柱間は南北方向が1.4～1.5m、東西方向が1.5～1.7mで、南北方向の方位はN17°Eである。柱穴は径0.4～0.5m、検出面からの深さ0.2～0.4mである。出土遺物は土器の細片のみであるが、東側のSK82004からは奈良時代の須恵器が出土している。

SB82003（図版43・253）

池ノ内16区の西端に位置し、古墳時代の竪穴住居跡SH62001を切っている。南側と西側の延長部分は調査区外のため全体の規模は不明であるが、南北方向１間分、東西方向４間分を検出した。柱間は南北方向が1.4m、東西方向が1.3～1.7mで、東西方向の方位はW15°Nである。柱穴は径0.3～0.4m、検出面からの深さ0.2～0.5mである。

第２節　土　　坑

SK82001（図版45・199）

黒岡２区にある楕円形の土坑で、長径3.2m、検出面からの深さは70cm弱で、暗灰色のシルト質の土が堆積している。調査区壁面をみると、検出面よりかなり上方の中世水田層から掘り込まれているようである。

土坑底には板材が数枚、および杭、半裁された丸太などが埋められていた。板材は細かい破片が土坑内に入り乱れているが、大きくは３枚に分けられる。うち２枚は幅およそ1.5mで、北東－南西方向に平行して置かれている。もう１枚は全幅約50cm・全長約２mで、前記２枚の板材の下に南北方向に置かれている。

SK82002（図版44）

亀ノ郷２区の中世水田面の東端付近に位置する隅円方形の土坑である。規模は長径約0.7m、短径約0.6mで、深さは約７cmの浅い断面形が皿状の土坑である。ほぼ完形の須恵器の椀3440が底よりやや浮いた高さで正位置で出土している。またほかに須恵器の椀3441や甕、土師器の皿や瓦器の椀などの破片も出土している。

SK82003（図版44）

池ノ内14区の西寄りに位置し、北半部を流路SD82002に切られ、古墳時代前期の溝SD62003を切っている。平面不整形で、現存長の長軸1.65m、短軸1.6m、深さ0.2mである。中世の須恵器・土師器、奈良時代の須恵器坏3433、弥生土器などが出土している。

SK82004（図版44）

池ノ内16区の西寄りに位置し、北端を側溝に切られている。平面不整形で、現存長の長軸2.4m、短軸1.6m、深さ1.0mである。埋土の最上層から奈良時代の須恵器長頸壺3426などが出土している。

第３節　溝

SD82001（図版45・50・223）

下町４・７区の中世面の交点及び４区南西部の西端付近を流れる溝である。溝の方向は南北からやや東に振った条里の方向に一致しており、坪境の溝と考えられる。

幅は1.0～1.5m、検出面からの深さは22～40cmで、断面形は台形である。埋土は灰黄色の洪水砂である。須恵器の椀・甕や土師器の小皿や羽釜、白磁の椀といった中世の遺物が出土している。

SD82002（図版45・50）

下町２区の中世面を流れる溝である。溝の方向は東西からやや南に振った条里の方向に一致しており、坪境の溝と考えられる。幅は0.7mほどで、深さは12cmである。

SD82003（図版45・50）

下町２区の中世面を流れる溝である。溝の方向は東西からやや南に振った条里の方向に一致しており、坪境の溝と考えられる。SD82002の北を流れている。幅はおよそ２mで深さは26cmある。中世の須恵器の椀やこね鉢が出土している。

SD82004（図版50）

下町２区の中世面を流れる溝である。溝の方向は東西からやや南に振った条里の方向に一致しており、坪境の溝と考えられる。SD82003の北側に接し、南肩はSD82003に切られているため幅は不明である。深さは28cmである。

SD82005（図版50）

亀ノ郷２区の中世水田面の東端を流れる溝である。溝の方向は南北からやや東に振った条里の方向に一致している。

幅は約1.2m、検出面からの深さは25cmで、断面形は浅い皿形である。埋土は灰白色の洪水砂である。

SD82006（図版50）

亀ノ郷３区の中世面の西端を流れる溝で、SD82005とほぼ平行する流れである。調査区の端に位置しており、東肩を検出したのみで幅は不明である。深さは20cmで、埋土は灰白色の洪水砂である。

SD82007（図版50）

亀ノ郷３区の中世面のSD82006の東を２mほど離れて平行に流れる溝である。幅は約1.2mで、深さは25cmである。

SD82008（図版50）

西ケ市７区の西端を流れる溝である。溝の方向は南北からやや東に振った条里の方向に一致している。平面調査は行っておらず、断面から推定した幅はおよそ１mで、深さは15cmである。

SD82009（図版50）

西ケ市７区のSD82008の東側７mほど離れたところを流れる溝である。溝の方向はSD82008よりやや西に振れ、磁北に近い。幅は0.3～0.5mで、深さは24cmである。

SD82010（図版50）

西ケ市９区の北半の調査区西端付近を流れる溝である。溝の方向は南北で調査区の方向に近い。幅は0.5m前後である。

SD82011（図版50）

西ケ市９区のほぼ中央、西ケ市６区との交点の少し南を調査区を横断して流れる溝である。幅は約0.3mである。

SD82012（図版45・50）

池ノ内14区の中央から16区の中央にかけて、調査区を斜行する流路状の遺構である。幅や深さは一定せず、広い所で6.5m、狭い所で2.5m、深い所で0.35m、浅い所で0.25mである。上中層では弥生時代後期～中世の土器が入り混じっており、下層からは弥生時代中期の土器が出土した。図化した出土遺物には土製品3431、蛸壺2511・2513～2515などがある。

SD82013（図版８・45）

池ノ内14区の東側を東西からやや南に振った方向に延びる溝である。幅1.1m、深さ15cmほどの浅い溝で、底は平らである。埋土は黄灰色の洪水砂で、中世の鍋などが出土している。

SD82014（図版８・45）

池ノ内14区の東側を南北からやや東に振った方向に延びる溝で、直交する溝SD82003を切っている。幅1.5m前後、深さ25cmの浅い溝で、底は平らである。埋土は粘質で、中世の須恵器杯などが出土している。

第Ⅳ部　遺　　物

第１章　土　　器

第1節　縄文時代

（図版51・257）

この分冊で報告する地区においては、池ノ内１・14区と西ケ市６区から縄文土器が出土しているが、図化できた土器は７点のみである。土器はいずれも後期のもので、埋没段丘から出土したものとしては残存状況は良好と言えよう。

池ノ内地区　2001は池ノ内１区の旧河道SR42002から出土した深鉢で、口縁部を欠くものの、胴部上半が残存している。口縁部文様帯を区画するように沈線が水平に施され、上部に縄文ＬＲがあり下半には条痕がみられる。後期中葉のものである。

2002・2003は池ノ内14区の土坑SK12002から出土した平縁の鉢で、体部はゆるやかに内湾している。文様は口縁部とほぼ平行に２条単位の沈線と縄文ＲＬが施されている。後期中葉北白川上層式Ⅲ期のものであろう。

西ケ市地区　2004～2007は西ケ市６区の土坑SK12001から一括出土したものである。2004は深鉢胴部の破片で、横方向の沈線と縄文ＲＬで文様構成されている。2005は横方向の沈線および条痕が施されている。2006は内傾する深鉢の破片で、文様はみえない。2007は表裏に条痕が施された粗製土器である。時期としては後期中葉北白川上層式Ⅲ期と考えられる。

第２節　弥生時代前期

玉津田中遺跡の出土遺物の中でも最も多いのは弥生時代のものである。その数５千箱におよび、全国的にも屈指の遺物量をほこる。第二分冊掲載の全ての地区から弥生時代前期の遺物が出土しているが、黒岡地区及び亀ノ郷地区の弥生時代前期微高地上の住居跡や土壙などの遺構群および包含層からの出土が多い。今回掲載した地区から出土し、図化できたものは弥生前期土器は211点である。

次に対象地区の各トレンチ出土の遺物を説明する。

１．黒岡地区出土の土器（図版51～56・257～262）

黒岡１区　黒岡１区から出土した土器のうち図化できたものは27点になり、多くは土坑出土のものである。

SK22020からは蓋、壺、甕、鉢がある。

蓋には壺と甕用のものがある。偏平で縁辺が僅かに湾曲し面取りされ、内面の一部に赤色顔料が残る2016は壺の蓋である。口縁にかけて大きく開く2017は甕の蓋である。

壺には復元完形品があり、形状全体を知るうえで重要な資料である。口縁部が短く開くもの2019～2022と、頸部から口縁部にかけてやや直線的に開くもの2018に分かれる。

2019は、頸部文様帯と胴部文様帯が段により区画され、段の上位や下位にヘラガキ沈線

や重弧文を加飾している。この壺は胎土に角閃石と黒雲母が顕著にみられることから生駒西麓産のものであろう。また頸部に狭い削出凸帯文を施し、胴部が段＋沈線による施文のもの2020・2021がある。さらに頸部に削出凸帯＋ヘラガキ沈線２条の文様が施されたもの2018がある。

甕は５点図化でき、いずれもヘラガキ沈線文が施されている。ヘラガキ沈線文１条のものには2024・2026・2027があり、2026には沈線ぎわにモミ痕がみとめられた。(図版259)ヘラガキ沈線文が２条のもの2028は大型品で、小型品として2029がある。全体の形がやや偏平でヘラガキ沈線文３条を施すものには2023がある。

鉢には口縁部が屈曲する2025がある。

SK22014では壺の蓋である2032や、頸部文様帯に削出凸帯文上にヘラガキ沈線文３条とヘラガキ沈線文３条を描き、その間にX状有軸の木の葉紋を施す壺2033がある。また胴部文様帯として段＋ヘラガキ沈線文１条の上に格子目紋を施すもの2010や、胴部文様帯に段＋ヘラガキ沈線文２条＋αをもち頸胴部間に３本の重弧文を施すもの2008がある。甕にはヘラガキ沈線文２条のもの2029や５条＋αの2034がある。

SK22018では壺底部底面にヘラによる×印がみられる2009がある。

SK22019では底部穿孔され３条のヘラガキ沈線文をもつ甕2031がある。

SK22017からは段＋ヘラガキ沈線文２条をもち、口縁端部に刻みをもたない甕2035がある。

壺棺ST22002は、頸部に６条、胴部に３条のヘラガキ沈線文をもつ中型の壺2036であり、わずかに口縁部端部が打ち欠かれている。

包含層から出土した土器には、小型で頂上中央部が穿孔されている壺の蓋2037や、頸部に幅広の削出凸帯文をもつ壺2038、胴部に細いヘラにより十字に描かれた有軸の木の葉文の壺2012がある。また把手をもつ鉢2039も出土した。

黒岡２区　黒岡２区からは、数々の遺構と共に遺物も豊富に出土した。土器については49点が図化できた。

竪穴住居跡SH22002からは、削出凸帯Ｉ種少条＋ヘラガキ沈線文２条の文様を頸部にもつ壺2049がある。

壺棺ST22001は蓋2055と壺2056がセットで出土した。蓋はゆるやかな円錐状になるもので、中央部に穿孔がみられる。壺は最大径が器高中央に位置するもので、口縁部は小さく開く。文様は頸部に削出凸帯文＋ヘラガキ沈線文２条と胴部に段＋ヘラガキ沈線文２条がある。口縁部には径６㎜と胴部中央には3.6㎝×1.6㎝の穿孔がある。頸部文様帯の上下に押さえている以外は丁寧な横方向のヘラミガキがみられる。

土坑出土の遺物は全体的に数が少なく、各遺構から１～２点の出土である。

土坑SK22002では壺の蓋2047のほか、甕の蓋2048が出土した。いずれも中央部のつまみ部分が欠損する資料である。壺としては頸部にヘラガキ沈線文３条が施された2040・2041がある。甕としては２条のヘラガキ沈線文が施された2042がある。ヘラガキ沈線文３条のものとしては2043・2044・2045の３点があり、いずれも口縁端部に刻み目がみられる。また底部が穿孔された甕2046がある。

SK22006では胴部文様に段＋ヘラガキ沈線文２条を施し、胴部下半にヘラガキ沈線文２条をもつ壺2050がある。

SK22005からは、胴部文様が削出凸帯文Ⅱ種少条で、胴部に巡らされたヘラガキ沈線文２条の間に有軸の木の葉紋により文様を加えた壺2051がある。

SK22008からは体部にヘラガキ沈線文１条の甕2052が出土した。

SK22009からは体部上半と胴部最大径部分に１条のヘラガキ沈線文がみられる甕2053が出土した。

SK22010からは口縁がラッパ状に開き、口縁部下端に貼付突帯紋が巡る壺2054が出土している。

SK22011では頸部および胴部に削出突帯Ⅰ種のある大型壺2057がある。口縁部はやや直立ぎみで端部は丸みを帯び、胴部は横から斜め方向にヘラミガキがみられる。

SK22007では口縁端部にヘラガキ沈線１条を巡らす鉢2059がある。また体部文様に上が削られた段をもち、直下にヘラガキ沈線１条を施した甕2058が出土した。

SK22003からは頸部に段をもつ壺2060がある。また甕では体部にヘラガキ沈線文３条が巡らされるもの2061がある。

SK22001では体部が無紋の甕2063や段が施されるもの2062がある。

溝からの遺物については、土坑と同様でその量は少ない。

SD22002では口縁端部に刻みをもち体部が無紋の甕2064がある。

SD22001では体部に段＋ヘラガキ沈線３条を施した甕2065がある。2062同様、段はヘラ状工具で削った状態がよくみられるものである。

SD22003からは頸部に２条のヘラガキ沈線文を施し、その間を斜めに刻みを巡らした壺2074がある。

黒岡２区では土器溜まりが検出された。これらは包含層として扱っているが、その下部から掘立柱建物跡が検出されており、その関連について考慮すべき資料である。壺には口縁部が漏斗状に開き、頸部に削出突帯紋＋ヘラガキ沈線１条を施した2073がある。鉢は３点出土し、口縁部に３条のヘラガキ沈線をめぐらすもの2080・2082がある。そのほか口縁部をつまみあげることによって小刻みな波状口縁を呈し、ヘラガキ沈線２条によって飾られた2081がある。

包含層からは壺蓋・甕蓋・壺・甕が出土した。

壺には頸部に段をもつもの2070や、段＋ヘラガキ沈線２条をもつもの2076がある。また頸部に削出突帯紋＋ヘラガキ沈線２条をもち、口縁部にかけて大きく開くもの2072や、口縁部内面に貼付突帯紋１条を巡らす2071がある。壺の頸部にヘラガキ沈線文２条を施し、胴部にかけて３本単位のヘラによる斜線紋がはいるもの2013がある。壺の破片2014は、胴部上半に２本の細線が巡り、縦方向に区画線を施し、その区画内の斜めに２或いは３本の木の葉紋が描かれている。胴部に描かれた文様として細線で有軸の木の葉文をもつもの2012や５＋α条の斜線文をもつもの2015や、削出突帯紋＋１条の上に格子目状にヘラで刻むもの2011がある。

甕には段をもつもの2077や、３条のヘラガキ沈線をもち棒状工具で刺突したもの2078、

無文で口縁部にかけて鈍く屈曲するもの2079がある。

壺蓋には端部が内湾し天井が穿孔されているもの2066や、やや外反し中央部が穿孔されるもの2067や端部にヘラガキ沈線３条を施すもの2068がある。甕蓋としては口縁部にかけて大きく開くもの2069がある。

黒岡４区　黒岡４区の土坑SK22012からは、口縁の一部が欠くものの体部にヘラガキ沈線１条を施した甕2083がある。内外面とも丁寧なヘラミガキがみられる。

同じく黒岡４区の土坑SK22015からは削出突帯？上にヘラガキ沈線２＋αを施した壺2084がある。

黒岡11区　黒岡11区のSK22016からはヘラガキ沈線２条をもつ甕2085が出土した。

Ｄ３拡張区（Ｄ３区）（図版57・58・263）

確認調査時のＤ３拡張区（Ｄ３区）から出土した土器のうち、図化できたものは35点であり、土壙や溝出土のもの以外に包含層出土のものが多い。

SK22022からは、胴部に×状の有軸木の葉文をもつ壺2108がある。また口縁端部に刻み目をもち体部は無文の甕2091がある。

SK22023からは短く開く口縁と大きくふくらむ胴部からなる壺2086が出土し、頸部に段、胴部に削出突帯Ｉ種をもち、丁寧なヘラミガキが施される。このほか胴部にヘラガキ沈線と棒状の刺突による文様をもつもの2110・2111がある。

下層シルト溝SD22004内からはヘラによる流水文が施された壺2114が出土し、体部が無文の甕2095がある。また壺の底部底面に赤色顔料が残るもの2099がある。

その他は包含層からの出土で蓋、壺、甕がある。

蓋には口縁が大きく開くもの2089がある。

壺には胴部上半の文様として段＋ヘラガキ沈線10条を施した2115・2116がある。頸部にヘラガキ沈線２条＋αの上に細かな布棒圧痕が巡らされた2087ものや、頸部に貼付突帯紋２条に布棒を押しあてた圧痕が残るもの2088がある。壺胴部の文様には木の葉文が多く、ヘラによる２条の沈線によって区画された中に有軸の木の葉文がＸ状に描かれたも2105・2106がある。また区画は不明であるがおそらくＸ状になると思われるもの2107がある。その他、細線による重弧文を描いたもの2109もある。削出突帯上にヘラによる刻みを入れたもの2112・2113がある。

小型土器として口径7.4cm、器高4.0cmの手づくね土器2090が包含層から出土した。

甕には体部の文様が無文のもの2097・2098があり、ヘラガキ沈線文２条のものには2092がある。その他３条のものとしてはヘラガキ沈線３条を沈線内に竹状の竹管文を体部文様帯に巡らせるもの2120・2127が２点ある。これは沈線を施したのち口縁部寄り部分を削り、段＋ヘラガキ沈線２条を巡らしたものがある。底部としては壺のものと思われるもの2100や底部中央部が穿孔されているもの2103・2104・2101・2102がある。

Ｄ３－２Ｇ拡張区（Ｄ３－２Ｇ区）（図版57～59・264）

確認調査のＤ３－２Ｇ区では、出土した土器のうち図化できたものは21点になり、竪穴住居跡や土坑出土以外に包含層出土のものも含まれる。

竪穴住居跡SH22004からはヘラガキ４条による木の葉文をもつ壺の胴部破片2122がある。

また甕には口縁端部に刻み目をもち体部にヘラガキ沈線２条を施すもの2128や口縁端部を刻むもの2129がある。その他、ヘラガキ沈線４条を施し口縁端部がやや屈曲する甕2130がある。

土坑SK22028では細いヘラミガキを施し底面を穿孔した甕2133が出土した。

SK22025では壺の頸部に削出突帯Ｉ種をもち、口縁部に穿孔があるもの2134がある。またヘラガキ沈線１条が施された甕2135やヘラガキ沈線３条の下方に竹管文を巡らした甕2126も出土した。

SK22024では壺の胴部にヘラガキ沈線と棒状の刺突文をもつ2123がある。また短く開く脚部と杯部との接合面に断面三角形の貼付突帯をもつ高杯2136や、口縁部が角張り、丁寧なヘラミガキがみられる鉢2096がある。

包含層出土のものは壺・甕がある。

壺には胴部があまり張らず、頸部に段をもつもの2138や口縁部が短く開くもの2139もある。一方、段かヘラガキ沈線文かわからないもの2140もある。頸部に削出突帯文Ｉ種をもち、突帯上は棒状による刺突が巡らされる壺2141がある。胎土中に金雲母や角閃石が入ることから生駒西麓産と考えられる。文様のある破片としては４条単位の木の葉文をもつ2121や胴部上半に削出突帯下にやや曲線で描かれた格子目文を施すもの2124がある。

甕には段＋ヘラガキ沈線１条をもつもの2143やヘラガキ沈線２条をもつ2137、３条のヘラガキ沈線をもつもの2142・2144があり、無文のもの2145がある。文様をもつものにはヘラガキ沈線４条にかかるようにヘラによる垂線をかいたもの2125や２条のヘラガキの下に竹管文を施すもの2127がある。甕の底部にモミ痕が残存するもの2146や底面にヘラによる×印がかかれたもの2147がある。

２．亀ノ郷地区出土の土器（図版60～64・265～268）

亀ノ郷１区　亀ノ郷１区から出土した土器のうち図化できたものは89点になり、その多くは竪穴住居跡SH22001・22006や掘立柱建物跡SB22001上層土器群出土のものである。

SH22006からは壺、無頸壺、甕が出土した。壺には頸部にヘラガキ沈線１条を巡らした2148や頸部に２条、胴部に１＋αのヘラガキ沈線文をもつもの2149がある。文様をもつ破片としては３本単位のＸ状の木の葉文をもつもの2151や５本単位の木の葉文をもつ2150がある。また胴部上半にヘラガキ沈線４条＋αの下半に斜線を巡らしたもの2152がある。最大径が胴部上半にあり、口縁部は僅かに内湾する無頸壺2153がある。

SH22002からはヘラガキ沈線４条を巡らした大型の甕2154が出土した。

SH22001からは壺、甕、高杯が出土した。壺には頸部にヘラガキ沈線２条を施し、その間に棒状の刺突を巡らしたもの2155がある。甕には口縁端部に刻み目をもち体部は無文のもの2156・2157がある。その他、２点の高杯片がある。この２点は形態等が類似するものの、同一個体である確証がつかめず別個に報告する。2158は口縁端部を内側に拡張し、上端に３条のヘラによる沈線を描いている。2159は杯部と脚部を接合する脚部上部で、外面には縦方向のヘラ調整があり、脚部内面にはケズリがみられる。

SB22001上層土器群１からは壺蓋、壺、甕、鉢が出土した。壺の蓋はいずれも６～７㎝の径をはかる。形態としては中央部にかけて僅かに尖るもの2160や、口縁部から中央部にか

けて直線的に山なりになるもの2161、中央部に凹みをもつつまみを有するもの2162・2163・2164の3種類に分かれる。壺は頸部に細く偏平な貼付突帯を1条施し、胴部は段＋ヘラガキ沈線3条を巡らすもの2165がある。口縁端部と頸部にヘラガキ沈線1条、胴部に段を施した大型の壺2169がある。この壺はその大きさに比べて器壁が薄く、胎土中に黒雲母や角閃石を含む生駒西麓産の土器と考えられる。甕には口縁端部に刻みがあり、体部は無文のもの2167がある。また口唇部に刻みをもち体部に2条のヘラガキ沈線をもつもの2168がある。鉢は体部にヘラガキ沈線2条を巡らしたもので口径に対し器高が低いもの2170がある。

SK22036からは壺胴部に貼付突帯1条を巡らし、棒状工具を押しあてた刻みを有する2172があり、横方向のヘラミガキが顕著にみられる。

SK22034では胴部上半に段＋ヘラガキ沈線2条、胴部最大径付近にヘラガキ沈線2条を施し、その間に縦に2～3本の沈線で区画し、その区画内に3～4本単位のX状を呈する木の葉文を描く2173がある。

SK22038から出土した甕2171は、無文で横方向の丁寧なヘラミガキを施し、体部の内湾が著しいものである。

SD22008からは、胴部にヘラガキ沈線4条の下方に削り込んだ段をもつもの2179がある。

包含層や遺構面からの遺物には壺、甕、鉢がある。

壺には口縁が短く、頸部に段を有するもの2174や無文ではあるが口縁部の下に穿孔を有したもの2175がある。また口縁部を一部を欠き、頸部にヘラガキ沈線3条、胴部に段＋ヘラガキ沈線2条を施す壺2176がある。文様のある破片としては胴部最大径付近にヘラによって区画しその中に3本単位の有軸木の葉文を巡らした資料2177がある。また段＋ヘラガキ沈線3条を描き、ヘラガキ沈線間に斜線文を巡らすもの2178も出土した。

甕としてはヘラガキ沈線1条のもの2180がある。2条＋αのもの2181や3条のヘラガキ沈線を巡らす2182の2点はいずれも生駒西麓産の土器である。甕には口縁部と体部の接合が屈曲するタイプでいわゆる逆L字口縁のもの2183がある。鉢には口縁が僅かに外反し無文のもの2184がある。

亀ノ郷7区　亀ノ郷7区では古墳時代の土器群に混在して甕が出土した。口唇部に刻みをもち、体部に多条化したヘラガキ沈線6条を施したもの2185がある。

亀ノ郷9区　亀ノ郷9区では壺、無頸壺、甕蓋、甕が出土した。

SH22001では壺には頸部に削出突帯＋ヘラガキ沈線1条を施したもの2189や頸部に削出突帯a種をもつもの2190がある。また胴部上半に段を施し下部に3条の重弧を巡らす壺2188がある。甕には体部にヘラガキ沈線3条を施すもの2191がある。鉢には無文でヨコ方向のヘラミガキが顕著にみられるもの2192がある。

SK22004では頸部にヘラガキ沈線2条をもつ壺2186がある。また口縁部直下に把手を持つ鉢2187が出土した。

SD22004では壺、無頸壺、甕蓋、甕がある。壺には大型で口唇部にヘラガキ沈線1条を巡らし、頸部および胴部に段を有する2193がある。また胴部にヘラ3条による重弧文が施されたもの2194がある。無頸壺には口縁部がやや直立し、上部に削出突帯＋ヘラガキ沈線2条を施した2195がある。甕蓋には口縁端部はシャープに屈曲し、外面はヘラによるヨコ

ナデがあり、内面には外周にススの付着がみられる2197がある。甕には無文のもの2196がある。

亀ノ郷11区　亀ノ郷11区では壺の胴部破片で刻み目貼付突帯１条をもつもの2200がある。

亀ノ郷12区　亀ノ郷12区では壺蓋、壺、甕蓋、甕、土製円盤が出土した。

亀ノ郷13区　亀ノ郷13区土坑１からは頸部に段、胴部に削出突帯を施す壺2201がある。甕蓋にはつまみが欠失するが内外面とも丁寧なヨコ方向のヘラミガキが施されるもの2202がある。甕には無文で底部に穿孔があるもの2203がある。また口唇部に刻みをもち、ヘラガキ沈線２条を施す完形品2205がある。また体部に３条のヘラガキ沈線を施すもの2204がある。放水路の包含層からは段＋ヘラガキ沈線３条を施すもの2206がある。壺蓋として直線的に蓋中央部に傾くもの2207がある。土製円盤として甕の体部にヘラガキ沈線２条＋αの破片を転用したもの2208がある。

３．下町地区出土の土器（図版65・269）

下 町 2 区　下町２区からは土坑、溝、包含層等から土器が出土した。

SK22040では甕３点が出土した。口唇部に刻みをつけ、体部は無文でやや膨らみをもつもの2210や底部にかけてわずかな膨らみをもちながらすぼまるもの2211がある。また体部にヘラガキ沈線４条を施すもの2212が出土した。

SD22009では口縁がラッパ状に開く壺2209がある。頸部に削出突帯＋ヘラガキ沈線２条があり、口縁部との間には段が巡らされる。また胴部上半には削出しによる段がみられる。この土器は口縁下の段の箇所や段の形成についても上を削り出していることから特異なものと言えよう。

その他、包含層や古墳時代の旧河道等から出土したものとして頸部と胴部に２条の刻目貼付突帯紋を巡らす壺2214がある。甕には体部に４条のヘラガキ沈線を施すもの2216・2212があり、６条のもの2215もある。また２条単位のヘラガキ沈線の間に２列の竹管紋を配列し口唇部に棒状工具で押し、小さな凹凸をつけているもの2213がある。

下 町 6 区　下町６区では包含層から体部にヘラガキ沈線３条をもつ甕2218が出土した。

４．確認調査トレンチ出土の土器（図版66～68・269～271）

確認調査のＫＭ１区では、土坑から口縁端部に刻み目をもち、体部にヘラガキ沈線２条を施した甕2251が出土した。

ＫＭ３区ではＫＭ７区の古墳時代の水路の続きと考えられるところから体部にヘラガキ沈線５条＋αが施された甕2252が出土した。

ＫＭ７区では壺蓋、壺、甕蓋、甕、鉢が出土し、図化しえたものは31点ある。土器の多くはSK22021から出土し、その他の土壙や包含層から出土したものも僅かにある。

SK22021では前述の各器種が出土し、その状態は一括性が究めて高い。

壺の蓋には中央部が山なりに膨らみ、頂部に穿孔があるもの2228やつまみ部分が作られているもの2229がある。

頸部と胴部に段のみで構成される壺は2219のみである。削出突帯により文様構成されているものには、頸部に削出突帯Ⅰ種をもち胴部に段＋ヘラガキ沈線１条をもつもの2220がある。その他削出突帯Ⅱ種により文様構成されているものには、頸部に削出突帯Ⅱ種＋ヘ

ラガキ沈線３条と胴部に削出突帯Ⅱ種＋ヘラガキ沈線４条を施す2221や、頸部に削出突帯Ⅱ種＋ヘラガキ沈線２条で胴部に削出突帯Ⅱ種＋ヘラガキ沈線２条をもつもの2222・2223・2224がある。2224の口縁端部にはヘラガキ沈線１条が巡る。頸部に削出突帯Ⅱ種＋ヘラガキ沈線２条を施すもの2225・2226がある。貼付突帯により文様構成されているものには、頸部に断面三角形の貼付突帯１条を巡らすもの2227がある。壺の胴部にヘラガキ２条による重弧文が施されたもの2242がある。

甕の蓋には口縁部からつまみ部分に立ち上がるもの2230がある。

甕には口縁端部に刻みをもつものの体部は無文のもの2231がある。その他はヘラガキ沈線文により文様構成されているものである。ヘラガキ沈線１条のもの2232や２条のもの2236・2237・2233・2234がある。ヘラガキ沈線２条＋αをもち口縁端部に刻みがないものに2235がある。この土器は器壁が厚く口縁部のくびれもゆるやかなことから口縁の広い壺になる可能性もある。ヘラガキ沈線３条によるものに2238がある。

鉢には無文で中型のもの2239や2240があり、大型のものに2241がある。

包含層からは、頸部に削出突帯とその下に２条のヘラガキによる重弧文を施すもの2243がある。胴部文様としては段＋ヘラガキ沈線２条を施し下部にヘラガキ２条による重弧文を巡らすもの2244・2245・2247があり、同一個体の可能性がある。胴部に削出突帯＋ヘラガキ沈線２条を施すもの2248・2249がある。その他、削出突帯＋ヘラガキ沈線３条を施すもの2246がある。

５．西ケ市地区出土の土器（図版69・272）

西ケ市２区　西ケ市２区では壺と底部の破片が僅かに図化できたのみである。

方形周溝墓SX22001から出土した遺物には、口縁端部にヘラガキ沈線１条を巡らし頸部に段を有する壺2253や、甕の底部の可能性がある2255がある。

2254の底部は土器棺ST22007の一部として利用されたものである。

西ケ市９区　西ケ市９区では、SH22007から壺や甕が出土した。壺には頸部に削出突帯＋ヘラガキ沈線１条？を施す2258や、頸部に段＋ヘラガキ沈線２条を施す2256がある。甕では体部にヘラガキ沈線１条を施す2257や、口縁端部に刻みがなく体部にヘラガキ沈線３条を施すもの2258が出土した。

６．池ノ内地区出土の土器（図版69・272）

池ノ内10区　池ノ内10区の弥生時代中期の旧河道SR42002から頸部に段＋ヘラガキ沈線３条を施す大型の壺2260や2259の甕が出土した。

池ノ内15区　池ノ内15区の土坑SK22046からは、頸部にヘラガキ沈線１条を施し口縁部の開きが少ない大型の壺2261と大型の底部2262が出土した。これらは同一個体の可能性は強いものの確証がなく別個に報告した。

柱穴SP22001からは、口縁端部にヘラガキ沈線１条を施し、体部は無文で、体部が直線的に底部にいたる甕2263が出土した。

第３節　弥生時代中期

弥生時代中期の土器は住居跡、土坑、溝、旧河道、包含層などから出土している。

1．住居跡出土の土器

池ノ内1区　SH42003（図版71）

壺　SH42003内の土坑からは壺が出土している。壺は広口壺(2280)で、頸部最下端には指頭圧痕突帯をめぐらしている。口縁部にはクシ描の波状文を施している。

池ノ内1区　SH42001（図版71・274）

SH42001内の土坑からは壺、高坏、台形土器、タコ壺などが出土している。

壺　壺(2283)は太頸広口壺で、頸部はクシ描直線文を施している。口縁部は下方に拡張し、凹線文を4条めぐらしており、円形浮文を貼り付けている。口縁部内面にはクシ描波状文を施している。

高坏　高坏(2284)は、水平口縁のタイプで口縁内端突帯がわずかに突出し、口縁部外面端が下方に垂下している。脚部との接合は円盤充填法で行っている。内外とも丁寧なヘラミガキで仕上げている。

マダコ壺　マダコ壺(2285)は底部の破片で、平底の中央部に焼成前の穿孔を外側から穿つ。内面は縦方向のハケ、外面は指頭痕を残す。

台形土器　台形土器(2286)は台部がやや張り出し、脚部が付いている。脚上部に記号様のヘラ描がある。

池ノ内1区　SH42004（図版71）

壺　SH42004内の土坑からは台付無頸壺(2287)が出土している。内彎する口縁部をもち、脚台部との接合は円盤充填法を用いている。なお、脚は欠いている。

2．土坑出土の土器

池ノ内1区　SK42004（図版71）

壺　SK42004からは壺が出土している。壺は広口壺(2282)で、頸部最下端には断面三角形の貼付突帯を付けている。口縁部は下方に拡張し、凹線文を3条めぐらしている。

池ノ内8区　SK42001（図版71）

高坏　SK42001からは高坏が出土している。

高坏は水平口縁のもの(2288)と、腰部で屈曲気味に立ち上がるもの(2289)と、浅い皿状のもの(2290)とがある。2288は口縁部が水平にのびて口縁内端突帯が突出し、口縁部外面端が下方に垂下している。2289は口縁端部を拡張させ、口縁部外面に4条の凹線文をめぐらしている。2290は口縁端部を拡張させ、口縁直下に1条の凹線文をめぐらす。外面は縦方向のヘラミガキを行っている。2291は脚部の破片で、脚端部は上方に拡張している。外面は縦方向のヘラミガキ、内面は横方向のヘラケズリを行っている。

池ノ内1区　SK42003（図版71・274）

SK42003からは壺、水差、台形土器が出土している。

壺　壺(2292・2293)は広口壺口縁部の破片である。2292は拡張した口縁部に凹線紋をめぐらし、2293は上下に拡張した口縁部に棒状浮文を貼り付けている。

水差　水差(2294)は算盤玉形の胴部に直立する口縁部が付く。口縁部には3条の凹線をめぐらしている。胴上部には半環状の把手が付されている。胴上半はハケ調整を施し、2列の列点文をめぐらしている。胴下半は最大径部をヨコヘラミガキの後、下方をタテヘラミガキ

している。

台形土器　台形土器(2295)は台部が張り出し、脚部が付いている。台面上は丁寧にヘラミガキ調整されている。

3．溝出土の土器

下町8区　SD42001（図版71）

甕　甕(2296)が出土している。小型の甕で胴の中央部分を欠く。口縁部は上方に拡張している。胴部の調整は磨滅のため不明である。

亀ノ郷5区　SD42001（図版71・273）

甕　甕(2297・2298)が出土している。小型のもの(2297)と大型のもの(2298)とがある。いずれも口縁は上方に拡張し、凹線をめぐらす。2297は凹線の上から部分的に刻みを、2298は口縁下端にヘラによる刻みをめぐらす。胴部は2297は横方向のタタキメが残り、2298は横方向のタタキの後縦方向のハケメを施し、2列の列点文をめぐらしている。

4．旧河道出土の遺物

旧河道　SR42001（図版70・274）

下町地区を流れる旧河道SR42001からは壺が出土している。壺には広口壺、無頸壺がある。

広口壺(2264)は無飾で、胴部最大径に列点文をめぐらしている。無頸壺(2265)は段状口縁に縦位の棒状浮文を付けている。生駒西麓の胎土である。

黒岡2区の旧河道（図版70）

黒岡2区を流れる旧河道からは無頸壺が出土している。この旧河道はSR42001とつながる可能性が高い。

2266は内彎した口縁部直下に凹線紋をめぐらす。内外とも丁寧なヘラミガキ調整を行っている。脚が付くものと思われる。2267は無頸壺の脚台と思われる。

旧河道　SR42002（図版70・273・274）

池ノ内地区を流れる旧河道SR42002からは壺、壺蓋、脚などが出土している。

壺　壺には短頸壺、直口壺、有段口縁広口壺、無頸壺がある。短頸壺(2268)は口頸部の破片で、わずかに外方に開き、頸部下端に指頭圧痕突帯をめぐらしている。口縁部やや下方には凹縁文が2条めぐっている。直口壺(2269)は胴部から屈曲し、やや外方に開く直立した口頸部が付く。外面はタテハケを施し、口縁部にヨコナデを施している。頸部下端には指頭圧痕突帯をめぐらしている。

有段口縁広口壺(2270)は口頸部が胴部から一旦外反したのち屈折して立ち上がり、口縁部をつくる。胴部から頸部にかけては、外面はタテハケを施し、内面はタテハケの後ヨコハケをしてナナメハケを施している。口縁部はヨコナデで仕上げている。頸部下端には2段の指頭圧痕突帯をめぐらしている。

無頸壺(2272)は内傾する口縁部にヘラ描による鋸歯文と直線文で飾っている。鋸歯文は上向で、左下がりの斜線で埋めている。鋸歯文の直下には3条の直線文がめぐっている。

壺胴部破片(2274)は生駒西麓胎土で、クシ描直線文の後円形浮文を2列以上めぐらしている。

壺蓋　壺蓋(2271)は笠形の蓋で、周縁に2孔1対の紐孔をあけている。内面は横方向、外面は縦方向の丁寧なヘラミガキを施している。

脚　脚(2273)は裾端部を拡張しており、内面はヘラケズリを施している。

5．包含層出土の土器（図版70・274）

池ノ内9区の微高地上のSH42002周辺の包含層からは壺、鉢、台形土器、甕がまとまって出土している。

壺　壺(2275)は太頸広口壺で、口縁端部は上方に拡張し、凹線紋をめぐらしており、部分的に棒状浮文を張り付けている。頸部にはクシ描直線文を施している。鉢は把手付のもの(2278)と台付のもの(2279)とがある。

鉢　2278は上外方に直線的に開く小形の鉢に把手を付けたもので、内外ともヘラケズリの痕跡を残す。2279は上外方に大きく開き、口縁端部を拡張させて外面に1条の凹線紋をめぐらしている。内外面ともヘラミガキで調整している。脚台は、端部を若干拡張させ、内面はヘラケズリ、外面はヘラミガキ調整している。

台形土器　台形土器(2276)は台部がやや張り出し、脚部が付いている。台面上は丁寧なナデにより調整されている。

甕　2277は小形の甕で「く」の字状に屈曲した口縁部の上方に拡張した口縁端部をもつ。

第4節　弥生時代後期～古墳時代前期

黒岡1区　SD52001出土の土器（図版72）

出土遺物は弥生時代後期の土器を中心とし、蓋、壺、甕、鉢などが挙げられる。

蓋　1点が出土している。2299の外面にはヨコハケののち、密に縦方向のヘラミガキを施している。身との固定のために穿った2個1対の円孔の一部が認められる。

壺　図化できた壺は細頸壺、長頸壺各1個体である。

2300は細頸壺の口頸部である。比較的薄いつくりで、内面には粘土帯の接合痕跡が明瞭に認められる。2301は長頸壺の体部であり、扁球形の体部に小さく突出する底部をもつ。いずれも磨滅が激しいため、内外面の調整手法などは観察できない。

甕　甕には、中型のもの(2302・2303・2305)とやや大型のもの(2304)の二者がある。前者の体部最大径が肩部付近にあるのに対して、後者は体部中央よりやや上位にある。2304は比較的長胴である。

底部の形状には、平底を呈するもの(2304)と、ドーナツ状のもの(2305)の二者がある。口縁部の成形は、貼り付けによっており、端部には面をもつものが多い。

体部外面の調整は右上がり方向のタタキを基本とし、その上にタテハケを施すものが多い。体部内面は、横および縦方向のハケで仕上げるものが多い。

鉢　各種の鉢が存在するが、図化したのは外反(2306・2307)ないしわずかに外傾(2308)する口縁部をもつものに限られる。体部の調整は、外面に右上がり方向のタタキを施し、内面にはタテハケを施すもの(2306)、ヨコハケを施すもの(2308)、ナデ仕上げのもの(2307)の各種がある。

黒岡1区　SD52002出土の土器（図版72）

出土遺物は少なく、弥生時代後期の土器が主である。器種には壺、甕、鉢などがある。

壺　図化できた壺は広口壺2個体のみである。

体部と頸部の境に明瞭な稜をもつもの(2309)と、なだらかに移行するもの(2310)に分かれる。広口壺は他の壺に比して加飾する傾向が強く、2310は体部と頸部の境に板状工具による列点文をもつ。

甕　2311のみを図化したが、傾きの復元には不安が残る。外面にはタタキを残し、内面はナデ仕上げである。

鉢　逆円錐台形のもの(2312)と、外傾する口縁部をもつもの(2313)を図化した。いずれも磨滅が激しいが、2313の体部外面には右上がり方向のタタキののち、縦方向のヘラミガキが施されている。2313は器高が低い点で特徴的である。

黒岡1区　SH52003出土の土器（図版72）

出土遺物は少なく、弥生時代後期の土器が主である。器種には壺、甕、鉢などがある。

壺　2314は口縁部が大きく開く細頸壺である。口縁部には3条の凹線が巡っている。

甕　2315のみを図化している。磨滅が激しいが、体部外面にはタタキの痕跡が確認される。

高坏　脚部(2316)のみを図化している。大きく開く裾部をもち、そこに4箇所の円孔を穿っている。

SR52001出土の土器（図版73・74・275・276）

下町2・4区を流れるSR52001は第1分冊で報告した旧河道SR50002とつながり、出土遺物も弥生時代後期を中心とした時期に限定される。壺、甕、鉢、ミニチュア土器などが出土している。

壺　広口壺、広口長頸壺、長頸壺、細頸壺などが出土している。

広口壺は以下の三者に分類される。①頸部が直立し、小さく開く口縁部にいたるもの(2317・2319)、②「く」の字に外反する口縁部をもつもの(2318)、③直立した頸部から水平に近く大きく広がる口縁部をもつもの(2320・2321)である。

②を除き、いずれも加飾傾向の強いことが指摘でき、口縁端部および肩部には円形浮文や凹線、列点文などが施される。2319は頸部に山形に連続するヘラミガキを暗文風に施している。また、体部外面にタタキ痕跡を明瞭に残すものは少なく、いずれも縦方向のヘラミガキによって丁寧に消している点が特徴的である。

広口長頸壺を2点図化している。長い頸部が内傾するもの(2322)と、外傾するもの(2323)の二者がある。いずれも口縁部端からわずかに垂下する程度に粘土帯を付加し、櫛描き波状文を配するための端面を形成している。頸部は、外面を縦方向のヘラミガキ、内面をハケおよびヘラミガキで仕上げている。

長頸壺は1点を図化している。2325は頸部長が器高の1/2程度のもので、口縁部には端面をもつ。外面には、体部下半と頸部に縦方向、体部上半に横方向のヘラミガキを施している。

2324は細頸壺の体部の破片である。扁球形の体部にやや突出した底部をもつ。外面はヘラミガキで仕上げている。肩部には刺突文を施し、わずかに残る頸部下端には1条の沈線が巡っている。

甕　小型の甕を含まないため、図化した甕はいずれも口縁径が体部最大径より小さいものばかりである。また、体部最大径はいずれも上半に位置している。口縁端部は、丸くおさめるもの(2328・2329)、面をもつもの(2330・2331・2332)、斜め外方につまみ上げるもの(2326)、上方につまみ上げるもの(2327)などさまざまである。

体部外面の調整は、右上がりのタタキを基本とするが、左上がりのもの(2327)も存在する。タタキののちにタテハケを施すものが多い。体部内面に、ヘラケズリあるいはヘラナデを用いるものが多い。

鉢　鉢には、外反する口縁部をもつもの(2333)、逆円錐台形のもの(2335)、直線的に外傾する体部をもつもの(2347)などがある。大型の鉢は、外反する口縁部をもつことを通例とするようである。2334は、体部がなだらかにすぼまって、穿孔した底部へ連続するものであり、このタイプに煤が付くことはない。

高坏　高坏には椀形の坏部をもつもの(2336・2337)と、皿形の坏部をもつもの(2338～2341)の二者がある。

椀形坏部をもつ高坏は、坏部の調整に縦ないしは横方向のヘラミガキを用いる。脚部の調整は、縦方向のヘラミガキであり、内面はナデあるいはハケ仕上げのものが多い。脚部の円孔は1段であり、3孔のものと4孔のものがみられる。坏部と脚部の接合にはすべて円板充填法を用いている。

皿形の坏部をもつものをやや仔細にみれば、口縁部が直立気味に外傾するタイプ(2338)と、外反するタイプ(2339～2341)に分かれ、前者は小型の高坏に、後者は大型の高坏に限定されるようである。

皿形坏部をもつ高坏には、口縁部外面に波状文や連続山形の暗文風のヘラミガキ、擬凹線などで加飾する傾向がある。さらに2340は、坏部内面に放射状の暗文風のヘラミガキがみられる。坏部の調整はヘラミガキを基本とし、その方向は、外面は縦、内面は体部を縦、口縁部を横とするものが多いようである。脚部は、ゆるやかに広がりながら、大きく外反して裾部にいたるものが多いが、小型高坏(2338)のように、屈曲点をもつものもあり、これは沈線や列点文で加飾されている。外面の調整は、縦方向のヘラミガキを施すものがほとんどであり、内面はナデあるいはハケ仕上げのものが多い。脚部の円孔は1段であり、3孔ないし4孔のものが多い。

器台　小型の器台の良好な資料がなく、大型の器台2個体を図化した。

受部、筒部、裾部の区別が比較的明瞭なもの(2342)と、それぞれがなだらかに移行するもの(2343)の二者がある。いずれも外面の調整には、タテハケののち縦方向のヘラミガキを用い、内面はナデ仕上げを基本とし、口縁部にはヘラミガキを施すものも存在する。受部端面に円形の竹管文を施すものがあるほかは加飾がみられない。円孔は不規則に穿たれているもの(2343)がある。

ミニチュア　2345・2346はミニチュア土器である。2346は鉢を模したものであろうが、2345については不明である。2345は下膨れの体部から口縁部にかけてすぼまるもので、口縁部には粘土の付加によって段がついている。

古墳時代中期の水路に混入した弥生時代後期～古墳時代前期の土器（図版75・277）

SD72001は、『概報Ⅰ』で「ＫＭ１・３トレンチの水路Ⅲ」とされたもので、亀ノ郷３・６・７・８区、池ノ内１区へ延長することが確認された。ここからは、古墳時代中期の土器が多量に出土したが、弥生時代後期～古墳時代前期の土器が混入しているため、この項でとりあげる。また、良好な出土状態ではないことから、時期の異なるものを一括して報告する。

出土器種は、壺、甕、鉢、高坏およびミニチュア土器である。

壺　広口壺および長頸壺が出土している。

2348は扁球形の体部に外傾気味に立ち上がる頸部をもち、さらに外方に開く口縁部を有する壺である。広口長頸壺とすべきかもしれないが、広口長頸壺に特有の口縁端部の加飾がみられないことから、長頸壺に分類する。調整手法は比較的丁寧で、外面には密にヘラミガキを施している。体部中央は横方向、それ以外は縦方向である。内面の調整は体部に斜め方向のハケ、口縁部には縦および横方向のナデである。

2351は口縁部の小片であるが、広口壺と思われる。口縁端部には面を形成し、そこに縦方向の刻みを施す。また、口縁内面には竹管文と竹管円形浮文を配している。

この他に写真のみを掲載した資料がある。3461は比較的大型の壺である。外面にハケのちヘラミガキを施し、内面はハケ仕上げである。肩部にヘラによる記号文がみられる。3462は、壺あるいは鉢の底部の破片である。外面はハケ仕上げで、内面にはヘラミガキを丁寧に施している。突出した底部外面には木の葉の圧痕がみられる。葉脈のみが残る資料は多いが、この土器は葉の側縁の圧痕をとどめる稀有な例である。葉の最大幅は2.6cmを測る。

ミニチュア　2349は鉢を、2350は台付鉢を模したミニチュア土器である。いずれもユビオサエの痕跡が顕著に残る粗雑なつくりである。

甕　Ｖ様式系の甕(2352～2356)と庄内式・布留式併行のもの(2357～2361)に分けて説明する。

Ｖ様式系の甕は２分割成形によるものが多い。2354を除き、すべて体部外面に右上がり方向のタタキを施している。小型の甕(2355)は、口径が体部最大径を凌駕するが、大型のもの(2356)は中位にくる体部最大径の方が大きい。口縁部の成形には貼り付け手法を用い、口縁端部のつくりは、丸くおさめるもの(2354・2355)、上方につまみ上げるもの(2352・2353)、端面を形成するもの(2356)などさまざまである。

調整手法については、いずれも体部外面はタタキのみ、内面はハケ仕上げという点で一致している。

Ｖ様式系以外の甕は、いずれも球形の体部をもっているが、底部は丸底のもののほか、やや尖り気味のもの(2361)を含む。口縁端部は、上方につまみ上げるもの(2359・2360)のほか、肥厚して内面に小さな平坦面をもつもの(2358)も存在する。

体部外面にはタタキ痕跡を残すものがあるが、広い範囲を細かいハケで仕上げるものが多いようである。体部内面の調整にはヘラケズリを用いるものが多く、2357のように器壁の薄いものも存在する。

鉢　鉢には、外反する口縁部をもつものは認められず、逆円錐台形のもの(2365)が存在する。有孔鉢を２点図化しているが、2362のような直線的に外傾する体部をもつものと、2363の

ような尖り気味の丸底のものの二者があり、時期差を示していると思われる。

また2366のような台付鉢も出土している。体部外面下半にはヘラケズリが施されている。外面には煤が付着しているため、煮沸に用いられた可能性が高い。

小型丸底鉢　2364は口径が器高を上回るもので小型丸底鉢に分類される。口縁部の高さと体部の高さの比率は１：４程度である。体部外面はナデ仕上げで、内面にはハケののちナデで仕上げている。

高坏　Ｖ様式のものと思われる高坏には椀形の坏部をもつもの(2367)と、脚部の破片のみが知られる。2367は内外面とも丁寧な横方向のヘラミガキを施している。2368・2369は脚部の破片であるが、坏部の形態については不明とせざるをえない。2368は脚端部に強い横方向のナデを施しているため、内外面に段を有している。

皿形坏部をもつ高坏(2371・2372)と脚部の破片(2370)はいずれも庄内式以降のものと思われる。2371・2372は口縁部が長くなり、口縁部長と体部長の比率は、いずれも１：0.5程度である。仕上げ調整にはヘラミガキをあまり用いず、ハケを多用している。

2370には小さな椀形の坏部が付くものと思われ、脚部内外面には丁寧なヘラミガキが施されている。

SR62002出土の土器（図版76・277）

SR62002は、『概報Ⅰ』で一部が「ＫＭ３トレンチ水路Ⅱ」として報告されているものだが、西ケ市３区・池ノ内９区などで、この河道の延長が検出された。このうち西ケ市３区では、河道の最上層からの出土土器が比較的まとまって出土した。また、池ノ内９区では井堰が確認され、その周囲で多くの土器が出土している。

下層　ＫＭ３区を中心とするSR62002下層の弥生時代後期の土器には、壺、甕、鉢、高坏などがある。

壺　壺では広口壺と無頸壺を図化している。

2373は底部を欠損する広口壺であり、ほぼ直立する頸部から強く外方に開く口縁部をもつ。外面は縦方向のハケで仕上げ、内面はハケあるいはナデ仕上げである。内面には粘土帯の継ぎ目が顕著にみられ、その単位ごとに調整が異なっていることから、分割成形手法によったことが分かる。2374は口縁部に３条の浅い沈線を巡らせる無頸壺である。沈線の直下には蓋を固定するための２個１対の円孔が穿たれている。外面の調整はタテハケののち縦方向のヘラミガキにより、内面にはユビオサエの痕跡が明瞭に残っている。底部には脚台が付く可能性がある。

甕　全形のうかがえる資料はなく、口縁部および底部の破片を図化している。

2375・2376は口縁端部を上下に拡張して面を形成する意識があり、そこに数条の擬凹線を巡らせている。体部外面の調整は他の資料をみてもタタキの残存している例が少なく、タタキののちハケで仕上げているようである。内面の調整は体部のかなり上方まで時計廻りのヘラケズリを施している。底部の破片は、円板充填手法が明瞭に観察される2377のみを図化している。体部下半に縦方向のヘラミガキがみられることから壺の可能性も考えられる。

鉢　鉢には、外反する口縁部をもつもの(『概報Ⅰ』第51図の９)もあるが、ここでは突出する

底部をもち、体部が直線的に開くもの(2378)のみを掲載した。体部外面は縦方向のハケ仕上げである。

高坏　椀形の坏部をもつものは確認できておらず、皿形のもの(2379・2380)と脚部のみを図化した。2379は内湾しながら外へ開く口縁部をもつもので、調整は丁寧である。体部外面には縦方向、体部内面に放射状、口縁部内面には横方向のヘラミガキが密に施されている。また、口縁部外面全体には擬凹線が巡っている。2380は2379よりも口縁部と体部の境が明瞭で、口縁部の外反の程度も大きい。調整は2379とほぼ同様だが、口縁部内面は横方向のナデで仕上げている。口縁部長と体部長の比率は1：2.5程度である。

2381は体部以下の破片である。調整は縦方向のヘラミガキを基本とし、脚部内面はナデおよび横方向のハケで仕上げる。脚部と坏部の接合には2380同様、円板充填法を用いる。

最上層　西ケ市3区で出土したSR62002最上層の土器には、壺、甕、小型器台などがある。

壺　図化した3点は直口壺である(2382～2384)。球形の体部と直線的に外方にのびる口縁部をもつもので、容量や細部のつくりには差異が認められる。

最も大きなものは2382であり、口縁部直下の外面には1条の沈線を巡らせている。外面の調整は、肩部以外は縦方向の細かいハケ仕上げであり、体部と口縁部の接合部付近および口縁部付近にはハケを施したあとに仕上げナデを施す。内面の調整は、体部下半にヘラケズリ、口縁部には細かいハケを用いる。

小型の2383は口縁部と体部がなだらかに連続するようである。磨滅が激しいが、調整手法は2383と同様であろう。

中型の2384は丁寧な仕上げがなされており、外面全体および口縁部内面の一部にはヘラミガキが施される。体部内面はヘラケズリである。

小型器台　1点のみを図化している(2385)。内湾する受部と緩く外反する脚部からなる。磨滅のため、調整の観察は不可能である。

井堰　池ノ内9区では河道SR62002内に井堰が検出された。厳密には一括資料とはいいがたいが、この井堰の直下および井堰の周辺から比較的まとまった状態で土器が出土したので、各々について説明する。

井堰の直下　井堰の直下から出土した土器は比較的少なく、甕2点を図化したのみである。

甕　2386・2387は容量の差はあるものの、器形や調整手法の特徴は類似している。体部は球形であるが、底部はわずかに平底をとどめている。屈曲して斜め上方にのびる口縁の端部は上方あるいは外方にわずかにつまみ出す。体部外面の調整は細かいハケによっており、口縁部に施すヨコナデは、体部との境より下方まで及んでいる。体部内面はヘラケズリあるいはハケ仕上げである。

井堰の周辺　2388～2395は井堰の周辺から出土した土器である。

甕　2388は底部がわずかに残存している点、口縁部のヨコナデの範囲などの点で2386・2387に類似している。2386・2387では観察されなかったが、2388では細かい縦方向のハケの下にタタキ痕跡が認められたため、成形にあたってはタタキを用いていたことが分かる。

ミニチュア　2389は鉢を模したミニチュア土器である。つくりは粗雑である。

鉢　2点を図化した。2390は突出した底部をもつもので、体部外面にはタタキ痕跡は認めら

れない。また、外面には煤が付着しているため、煮沸に使用されたことが分かる。2391は平底を呈するやや浅めの鉢である。

高坏　脚部の破片のみが１点出土している。2393の柱状部は中実であり、そこから内彎ぎみに広がる裾部をもつ。外面は縦方向のハケののちヘラミガキを施し、内面は横方向のハケで仕上げている。

小型丸底壺　2392はやや長めの体部をもつもので、口縁部高と体部高の比率は１：３程度である。

小型器台　２点を図化している。ともに受部の端をつまみあげている。受部と脚部の境部分の厚さが両者の間で異なっているが、製作方法の違いを反映している。2395は脚部から連続して受部を成形し、そののちに円板充填手法によって中央の円孔を埋めている。両者とも器壁の残存状況が悪いため、調整手法の観察は困難であるが、脚部外面は2394が縦方向のヘラミガキ、2395がナデ仕上げのようである。

弥生時代後期～古墳時代後期の河道SR62002出土の土器（図版77～88・278～284）

池ノ内８・９・10区、ＫＭ４・10区で検出された河道で、弥生時代後期から古墳時代後期までの土器を多量に出土した。ここでは、比較的多く出土した弥生時代後期から古墳時代前期の土器の概略を記すこととする。記述にあたっては、これらの土器を時期別に細分すべきであるが、個々の土器に正確な時期を与えることが困難なため、弥生時代後期のものと、それ以降のものの２つに分けることにしたい。ただし、時期的に混在している可能性が高いことを予め断っておきたい。

〔弥生時代後期〕　弥生時代後期に属する出土器種は壺、甕、鉢、高坏、飯蛸壺、ミニチュア土器などである。（図版77～83・278～281）

壺　広口壺、無頸壺、長頸壺、二重口縁壺などが出土している。（図版77・78・278）

口縁部の形状によって、広口壺はさらに細分され、①直線的に外方にのびるもの(2396)、②なだらかに外反するもの(2397～2401)、③直立する頸部から口縁部が水平に近くのびるもの(2402～2407)などに分けられる。

①は量的に少なく、１点を図化するにとどまった。体部内面の調整は逆時計廻りのヘラケズリである。

②は口縁端部に面を形成するものが多く、2400はそこに刻目文を施している。また、2398は頸部に列点文を施すなど、加飾する意識の強い器種だった可能性がある。2398は、底部にヘラ描きで「キ」状の記号を記している。体部外面の調整は、タタキののちにヘラミガキあるいはハケで仕上げるようである。内面の調整はヘラケズリあるいはハケである。

③は頸部と体部の境が明瞭なもの(2402～2404・2406)と、なだらかに移行するもの(2405・2407)に分けられる。口縁端部は丸くおさめず、拡張することなく面を形成するもの(2402・2403・2409)、上方に拡張するもの(2406)、上下に拡張するもの(2404・2405)などがみられ、そのいずれもが、形成した端面に加飾している。櫛描き波状文と竹管円形浮文を組合せるもの(2402・2404)、凹線を巡らせるもの(2403・2405～2407)などがある。さらに外面および口縁部の内面にはヘラミガキを施すものばかりで、頸部から体部にかけての内面をハケで仕上げるという点でも共通している。2402は口縁内面にも櫛描き波状文がみられる。さらに2404は頸部に暗文風の連続山形文を施している。

2408は無頸壺である。底部は平底である。口縁部はナデて直立させており、口縁直下には蓋を閉じるための円孔が2個1対穿たれている。外面には縦方向のヘラミガキ、内面には時計廻りのヘラケズリを施している。

2409は頸部以上を欠損するため器種の特定はできないが、長頸壺と思われる。外面はナデ仕上げで、内面下半はハケ仕上げである。

2410は台付きの壺と思われる。口縁部を欠損しており、体部は扁球形である。中実の柱状部をもち、安定性を考えればこの下に大きく広がる裾部がつくものと思われる。

広口長頸壺は3点を図化している。2411は口縁端部に凹線と刻目文による施文、頸部と体部の境に刻目をもつ貼付け突帯を施している。口縁部はヨコナデ、頸部はハケ仕上げ、体部外面はハケののちにヘラミガキ、体部内面は上半にユビオサエの痕跡が顕著である。2412は吉備系の土器である。肩の張らない体部から内傾する頸部および外反する口縁部をもつ。口縁端部を若干上方につまみ上げるなど、細部においては吉備地方のものとは様相を異にする。外面の調整は、体部には斜めおよび縦方向のハケ、頸部には縦方向のハケののち沈線を巡らせている。沈線の直下には列点文を施している。内面の調整は口縁部から頸部にかけてはナデ仕上げで、頸部と体部の接合部にユビオサエ、体部は逆時計廻りのヘラケズリのままである。岡山県南部の編年にいう、「上東・鬼川市Ⅱ式」頃に属するものであろう。2414は頸部上端から口縁部にかけての破片である。上下に拡張した口縁端面には2単位の櫛描き波状文のうえに2個1単位の竹管円形浮文を4単位配している。また、口縁内面には2単位の櫛描き波状文が逆時計廻り方向に施されている。外面の調整はヘラミガキ、内面はナデ仕上げである。

長頸壺(2413)は小型で、器高に対する口頸部高の比率も低い。体部外面下半には右上がり方向のタタキが残り、それ以上はナデ仕上げである。内面は口頸部がハケ仕上げである以外はナデによる。体部中央よりやや下には焼成後の穿孔が認められる。

二重口縁壺は6個体を図化している。2415は大型の土器である。頸部が短いため甕の可能性もある。器壁の残存状況が良くないが、二次口縁の内外面にはヘラミガキが施されているようである。2416・2417は小型の壺である。いずれも丁寧な調整でヘラミガキを基本とする。このうち2416は二次口縁の内外面に暗文風の連続山形文がみられる。2418は内外面ともナデ仕上げである。2419は他に比べて二次口縁の外反の度合いが弱い。調整手法の観察は困難である。胎土の色調は、明るいチョコレート色を呈していることから河内産の土器と考えてよい。2420は比較的長い頸部をもつ個体と思われ、二次口縁外面には下端に2条の沈線、その上に櫛描き波状文が施文されている。二次口縁の端部には面を形成している。口縁部の内外面はヘラミガキが施されている。

写真のみを掲載した資料として二重口縁壺(3465)の口縁部の小片がある。比較的大型のもので、1次口縁と2次口縁の境は内外面とも明瞭だが、外面に突出する段などは形成しない。肉眼観察によれば、1次口縁と2次口縁各々の色調が大きく異なり、それぞれ違う胎土を使用していることが推測される。

甕

甕には、口径に対して体部最大径が大きいもの、ほぼ等しいもの、小さいものといった三者が存在する(図版78～81・279～280)。この器形の違いは、容量の大小に応じたもので

あり、概して言えば、それぞれ、小型・中型・大型の甕に対応することは既に指摘されているとおりである。

底部の形状は平底のものが多い。小型の甕では、体部最大径が上半に位置するものが多い(2422～2424・2426～2428)。しかし、また同様に体部最大径が上半に位置するものは中・大型の甕のなかにも認められる(2431・2439～2441・2444・2459)。これは2分割成形手法の採用の結果、体部上半が大きくなったことによるようである。口縁部を丸くおさめるもののほか、端面をもつものがあり、そこに数条の凹線をめぐらせるもの(2427・2430・2440・2441・2453・2455)、刻目を施すもの(2433・2435・2437・2450)などが存在する。口縁部の成形には、貼り付けによるものが多いが、2422・2423・2428・2438・2440・2442・2446・2449・2453・2457・2459・2460・2461のように口縁部叩き出し手法によるものが、全体の約1/3の割合を占めている。

体部外面の調整は、右上がり方向のタタキを基本とするが、左上がり方向のものもわずかにみられる(2436・2449)。タタキの上にタテハケを施すものもあるが、その割合は少なく、またハケの及ぶ範囲も狭くなり、全面にわたるものは稀である。体部内面は、ハケ、ヘラケズリ、ナデの三者が存在するが、ハケ仕上げのものが圧倒的に多い。

鉢

2463は大型の土器で、口径が器高を上回る。内外面ともハケ仕上げである。2464は体部下半のみの破片であるため、甕とすべきかもしれないが、底部に焼成前の穿孔があるため有孔鉢とする。底部の平面形は円形ではなく卵形を呈している。体部もこれと同様にやや歪んでいるようである。内外面の調整はユビオサエあるいはナデである。(図版81・281)

これら特殊な鉢以外には、小・中・大型の鉢および台付きのものがある。(図版82～85・280・281)

小型の鉢には、逆円錐台形のもの(2465～2473・2475・2476・2489)と、内彎する体部をもつ丸底のもの(2474・2477)、外傾する口縁部をもつもの(2478～2483・2490)の三者がある。前二者には外面にタタキ痕跡を残すものはみられない。小型のものには、外面に煤が付着するものが若干含まれる。

中型の鉢も、口縁部と体部を明確に区別できないもの(2484～2488)と、境が明瞭なもの(2492・2494)の二者がある。

大型の鉢は、すべて外傾する口縁部をもつ。2491は外傾する口縁部をもち、器高が低いものである。2493は内彎する口縁部をもつもので、器高は高い。

台付きの鉢を2点図化している(2495・2496)。いずれも外反する口縁部をもつもので、中型品である。2497は、口縁部のみの破片のため全形をうかがうことができない。直下に沈線を巡らせている。口縁部内面の調整は横方向のヘラミガキである。

有孔鉢として7点を図化している(2498～2504)。いずれも口縁部をもたないもので、調整も粗い。いずれも煤の付着は認められない。

高坏

高坏には、椀形の坏部をもつもの(2505)と皿形の坏部をもつもの(2506・2507)の二者に分けられる。(図版83)

椀形坏部の高坏(2505)は、小型で坏部は浅い。口縁部直下に浅い沈線を1条巡らせ、また脚部上端部にも沈線が1条以上認められる。坏部の調整は、内外面ともヘラミガキである。

皿形坏部の高坏は、内彎もしくは外傾する体部に口縁部がつくものである。2506は口縁部の外反度が強く、口縁部長と体部長の比は約１：１である。脚部の器壁は厚く、内面にヘラケズリを施さない。全体にわたってハケののちにヘラミガキを行う。2507は2506ほど口縁部が長くない。口縁部の上下端には２条の凹線を巡らせている。調整の観察は困難だが、口縁部外面にはヘラケズリが認められる。

2508は高坏の脚部の破片であり、裾部中ほどに段を形成している。調整はハケを中心とし、ヘラミガキは裾部外面にわずかに認められるのみである。2509は円筒形の柱状部と強くひろがる裾部をもつ。柱状部の上下端には沈線を巡らせ、その間に円孔を３か所穿っている。裾部には貫通しない小円孔が等間隔に配されている。外面の調整はヘラミガキで、内面はナデ仕上げである。

ミニチュア　台付きの鉢を模したミニチュア土器(2510)と手焙形土器を模したもの(2523)を各１点図化している(図版83・281)。2510の体部外面は一部にハケが残存し、内面はナデ仕上げである。2523は覆部を欠損するが、残存する体部全面には施文がみられる。前面の口縁部の上面および前面には刺突文を巡らせ、体部前面には、太めの沈線による綾杉文が４単位、側面には細刻線による、斜めに傾く綾杉風の文様が巡る。

飯蛸壺　丸底のもの(2511～2516)と、平底のもの(2517～2522)の二者に分けられる(図版83・281)。器高には差があるものの、口径には大きな差が認められない。いずれも口縁直下に１つの円孔を穿ち、内面は丁寧にナデ仕上げを行う。外面の調整は、丸底のものは丁寧なナデであるが、平底のものは幅広のヘラナデを行うものが多く、わずかに右上がりのタタキを残すものが存在する。

〔庄内～布留期〕　図版84～88は、この河道のうち庄内～布留期に属すると思われるものを掲載している。

壺　細頸壺、広口短頸壺、広口壺、短頸壺、長頸壺、短頸直口壺、二重口縁壺などが出土している。(図版84・85・282・285)

2524は頸部を欠失する細頸壺である。丸底で扁球形の体部をもつ。

2525・2526は広口短頸壺である。丸みを帯びた体部から内傾する短い頸部につづき、水平に近くのびる短い口縁部へいたる。口縁端部を横方向にナデながら上方につまみ上げており、内傾する端面を形成している。調整は、頸部および体部の外面はハケ仕上げ、体部内面下半はヘラケズリ、上半はユビオサエが顕著であり、そののちナデで仕上げている。胎土に結晶片岩を含むこと、形態の特徴から、これらの土器は東阿波からの搬入品の可能性が高い。

2527～2529は広口壺である。体部はいずれも球形である。体部外面の調整には、広い範囲にわたってハケが用いられ、体部内面にはナデあるいはヘラケズリが施される。口縁部内面を横方向のハケで仕上げるものが多い。

2530～2534は短頸壺である。体部はやや長めで丸底である。口縁は広口壺ほど広がらない。体部外面の調整は、広い範囲にわたる細かいハケである。体部内面はヘラケズリあるいはハケ仕上げである。口縁部には、ハケが多用されるが2533・2534のようにナデ仕上げのものもある。

2535は長頸壺である。器高に対する口頸部の比率は低い。

2536は小型の壺である。器壁が厚く、平底である点で小型丸底壺と異なる。体部下半には焼成後に穿孔されている。

2537は短頸直口壺である。調整は比較的丁寧で、体部外面にはハケののち縦方向のヘラミガキを施している。体部内面は縦方向のユビナデ仕上げである。

2538～2544は二重口縁壺である。口頸部以下を欠くものが多いため全形を知ることが困難である。2538・2543・2544は無文であるが、それ以外は口縁部に施文がみられる。さらに2541は体部と頸部の境に刻目をもつ突帯を巡らせている。文様には、羽状の櫛目文(2539)、刻目文と竹管円形浮文の組み合わせ(2540)、櫛描波状文と竹管円形浮文の組み合わせ(2541・2542)などがある。1次口縁と2次口縁の接合部の境が内外面とも明瞭なもの(2538・2540・2542・2543・2544)と、外面のみ明瞭なもの(2539・2541)の二者に分けられる。2541は1次口縁が明瞭に観察できる。また、調整はいずれも丁寧で、ヘラミガキが多用されている。2539は、東海地方西部で盛行する柳ケ坪型壺であり、布留式に併行する「塔の越期」あるいは「西北出期」に属するものであろう。

甕　底部の形状は、尖底気味のもの(2556・2562・2569)、平底をわずかにとどめるもの(2561・2564・2568・2570・2572)を除けば丸底のものが多い(図版85～87・282～284・285)。底部が残るもののうち、内面にユビオサエの痕跡がみられるのは2553・2568・2570・2571・2574・2578などである。これらは丸底のものがほとんどであるが、わずかに平底をとどめるものも含まれる。体部の形状は、球形に近いものが多い。口縁端部を丸くおさめるものが多いが、内側に小さくつまみ上げるもの(2548・2554・2555・2556・2556・2560・2572～2580)も高い比率を占める。

体部外面の調整は、タタキののち縦方向のハケ仕上げのものが多い。タタキの方向は、右上がりのものが少なく、水平のものおよび左上がりのものが比較的多いようである。体部内面は、ハケ、ヘラケズリ、ナデの三者が存在するが、ヘラケズリを使用するものが過半数を占める。

2574・2575・2576のような典型的な布留型甕も出土している。この三点は、口縁端部のわずかな肥厚、体部外面のハケ仕上げ、体部内面のヘラケズリ、口縁部内面の横方向のハケなど調整手法も同一である。体部の厚さが他の甕に比べて薄い点が特徴的である。

2581は近江から搬入された受口状口縁を有する甕である(図版285)。口縁部の小片であるが、端部をわずかに外方へ水平に引き出し、上端を平坦に仕上げている。口縁端部に刻目を施している点は古い様相であるが、布留式期のものと考えてよいであろう。

2582は吉備系の土器である(図版285)。口縁部は上方へ拡張され、そこに3条の擬凹線を巡らせる。体部外面には右上がりのタタキを残し、内面にヘラケズリが見られない点で、吉備南部地方における一般的な甕の様相とは異なっているため、直接搬入されたものではない可能性がある。

小型丸底壺　口径が体部最大径より大きいもの(2583～2585)と、小さいもの(2586～2588)の二者に分けられる(図版88・284)。口縁部高と体部高との比率は、前者が1：1.5程度、後者が1：2～3である。調整にヘラミガキを用いるものはなく、器壁が極端に薄いものはない。

小型丸底鉢　形態などに大きな差がみられるが、口径が器高を上回るものを小型丸底鉢として一括して記述する(図版88・284)。内彎する体部上端から大きく外反する口縁部をもつもの(2589・2590)もあるが、体部と口縁部の境が明瞭でないもの(2596・2597)も含まれる。口縁部高と体部高との比率も、1：0.8(2590)、1：1(2589・2596)、1：2(2592・2593・2597)、1：2.6(2594)、1：3(2591・2599)、1：4(2598)、1：6(2595)とさまざまである。調整はハケを用いるものが多く、ヘラミガキを施すものは2598の1点のみである。

器台　小型器台と通常の器台が存在するが、圧倒的に前者が多い。(図版88・284・285)

2600～2610は小型器台である。調整は丁寧であり、ヘラミガキを多用する。やや大型の2610は、外傾するやや長い口縁部をもつものである。ヘラミガキの方向は縦方向・放射状に施すもの(2600～2602・2604・2607・2608・2610)と、横方向・同心円状に施すもの(2603・2606)の二者がある。2606の坏部内面には横方向のヘラミガキののち放射状の暗文風のヘラミガキがみられる。2603と2606は坏部と脚部の接合部外面の狭い範囲にヘラケズリを行うなど、調整手法も共通している。この、ヘラミガキの方向における二者の区別は、胎土の選別とも符合しているかどうかが問題となるところだが、肉眼観察によれば両者を区別することはできない。いずれの資料も、脚部と坏部の接合には付加法を採用している。2606の脚頂面にヘラによる刻みがあったかどうかは確認できない。

2611は器台の受部の破片である。外傾する口縁部にはヨコナデを、体部には放射状のヘラミガキを施す。2612・2613の坏部中央には、脚部から貫通する円孔がある。脚部、受部とも直線的である。

高坏　皿形の坏部をもつもの(2614・2615・2618・2619)と、椀形の坏部をもつもの(2617)、装飾性の強い口縁部をさらに付加するもの(2616)の三者がある。(図版88)

皿形の坏部をもつものは、口縁部が長く、口縁部長と体部長の比率は、2614が1：0.3、2615が1：0.5、2618が1：0.4である。調整は縦方向のヘラミガキが多い。

2617はきわめて短い柱状部と内彎気味に大きく開く裾部をもつ低脚高坏であり、小さな椀形の坏部をもつと思われる。

2616は体部から大きく開く口縁部をもち、その端部に直立する二次口縁を付加している。二次口縁外面には、細かい櫛描きの波状文を施文している。全体にヘラミガキを施す丁寧な調整が認められる。

ミニチュア　2620は尖底気味の鉢、2621は平底の鉢を模したと思われるミニチュア土器である(図版88)。両者ともユビオサエの痕跡を明瞭に残すが、2621の内面には丁寧なナデを施している。

亀ノ郷2区SD52003出土の土器（図版89）

2622は壺あるいは甕の体部以下の破片である。底部はやや突出している。

西ケ市1区SD52006出土の土器（図版89）

甕と台付き鉢を図化している。

2623は大きく広がる低い脚部をもつ鉢である。脚部内面は放射状のハケののちナデで仕げている。

2624は二分割成形でつくられた甕である。内面の調整はナデである。

西ケ市1区SD62001出土の土器（図版89）

小型丸底鉢、小型器台、甕、壺を図化している。

2625～2627は小型丸底鉢である。調整にヘラミガキを用いるものはなく、ナデ仕上げのものが多いようである。口縁部高と体部高の比率は、いずれも１：４程度である。

2628は小型器台の脚部である。磨滅のため、器壁の調整手法は観察できない。

2629・2630は丸底の小型甕である。2629は大きく開く口縁部をもつ。体部外面はハケのちナデ、体部内面はナデ仕上げである。2630の体部外面にはタタキののちナデを施し、体部内面の調整にはヘラケズリが用いられる。外面に煤が付着している。

2631は広口壺である。下方が膨らむ球形の体部に大きく開く口縁部をもつ。口縁部はナデ仕上げであり、体部外面は細かいハケが広い範囲に施され、体部内面はヘラケズリのままである。

西ケ市９区SD62002出土の土器（図版89）

小型丸底鉢、甕、短頸壺を図化している。

2632は小型丸底鉢である。調整にはヘラミガキを用いず、内外面とも縦方向のハケ仕上げである。体部高と口縁部高の比率は１：2.4である。

2633・2635は甕である。2633の口縁部は丸くおさめるもので、球形の体部中央付近には焼成後に１カ所の穿孔が認められる。体部の調整は、内外面とも細かいハケ仕上げである。2635は、内彎する口縁部の端が内側に小さく丸く肥厚し、水平な面を形成している。体部の調整は、外面にハケ、内面にヘラケズリを使用している。

2634は口縁部を欠失する。球形の体部と直立する頸部をもつ。頸部の調整は内外面ともナデ、体部の調整は外面にハケ、内面にユビナデを用いる。

西ケ市１区第３遺構面検出中出土の土器（図版89）

2636は包含層出土の弥生時代後期の鉢である。円錐台形の鉢であり、底部はやや突出する。外面には右上がりのタタキを残し、内面はハケののちナデ仕上げである。

池ノ内９区SP62001出土の土器（図版89）

小型丸底鉢、台付鉢を図化している。

2637は小型丸底鉢である。外面の調整は不明であるが、内面は口縁部にハケ、体部にナデを用いている。

2638は台付鉢である。調整の観察は不可能である。

池ノ内14区SD62003出土の土器（図版89）

短頸壺を１点(2639)図化している。底部は平底であり、体部最大径は肩部にある。

池ノ内14区SH72002南辺土坑出土の土器（図版89）

広口壺を１点(2640)図化している。体部は内外面ともハケ仕上げである。

池ノ内16区SH62001出土の土器（図版89）

小型丸底壺、小型器台、鉢、壺を図化している。

2641・2642は小型丸底壺である。2641は体部上半が直線的で、内傾する。体部下半に横方向のヘラケズリがみられる。2642の外面はナデ仕上げで、内面は口縁部にナデ、体部に横方向のヘラケズリを施す。

2643は小片のため器形の判断が困難であるが、小型器台としておく。外面はナデ仕上げ

である。坏部中央には、脚部から貫通する円孔がある。2644は坏部の破片である。調整は不明である。

2645は外反する口縁部をもつ鉢である。調整は不明である。

2646は二重口縁壺である。１次口縁と２次口縁の接合部の境が内外面とも明瞭である。調整にはヘラミガキを使用せず、ヨコナデを主に施している。

第５節　古墳時代中期

古墳時代中期の土器は、主に亀ノ郷地区を横切って流れる水路SD72001から出土しているが、中でも亀ノ郷７区からは大量の遺物が出土している。次いで西ケ市地区から池ノ内地区に向かって流れる水路SD72001及び池ノ内地区を流れる旧河道SR72001からもかなりの量の遺物が出土している。第２分冊に報告する地区から出土した遺物の中で、この時代の遺物がもっとも量的に多い。また、土器の大半を占めるのは土師器であり、須恵器の量はごくわずかである。

１．亀ノ郷７区出土の遺物

図版90～112までの土師器と図版113・114の須恵器の大半が亀ノ郷７調査区からの出土である。この地区からは大量の土器が出土しており、実測する個体はかなり選別した。水路中からの出土のため、遺物の残存状況は比較的良好であるが、二次的に火を受けているものが多く、煤の付着や器表の剥離のため調整が観察しにくいものも多かった。土師器にはてづくね土器・壺・甕・高杯・鉢・甑があり、須恵器は蓋杯・高杯・把手付椀・瑞・樽形瑞・壺・甕がある。

てづくね土器（図版90・286・287）

2647は極めて小さい土器で小指の先程度の大きさである。2648は椀ないし鉢のミニチュアであり、2650は平底の甕、2651・2652は壺のミニチュアと思われる。2652は底部に脚が剥離した痕跡が残る。

水路SD72001から大量に完形品が出土したてづくね土器(2653～2693)は、外面に指ナデ痕を残し、内面には粘土の継ぎ目を残す簡素なつくりであるが、胎土は比較的精良で、いわゆる祭祀用のてづくね土器のように粗雑なものではない。全体のプロポーションは2684～2687のように筒状のもの、くびれのあるもの、2670～2674のように口のすぼまるものの３つに大きく分けられる。大きさは口径４～５cm、器高は４～６cm程度である。

もともと器壁が薄い上に二次的に火を受けてほとんど還元状態になったために須恵器や製塩土器のように見える灰色を呈するものもある。

2694～2698はやや大きめのものである。2695は外面および頸部内面にハケメを施している。

壺（図版91・92・287～289）

2699～2710はてづくね土器より大きく、口縁部と胴部の境のくびれのある器種である。2703～2710は小型の甕とした方がよいものである。調整はさまざまで、てづくね土器に近い粘土の継ぎ目を残すようなものが多い。

2711～2737は小型ないし中型の壺である。調整はさまざまで、てづくね土器に近い無調

整のものや、ハケメをほどこすものや板状工具でなでたものもある。ヘラミガキを施すものは少なく、2718・2729ぐらいである。口径と胴部最大径の比率や、口縁部と胴部の高さの比率、胴部最大径の位置はさまざまである。いわゆる複合口縁の壺は2723・2727の2点だけである。口縁端部の処理は、丸くおさめるものが多いが、カットしてヨコナデするもの、肥厚するものもみられる。底部は丸底がほとんどであるが、2715や2717など平底に近いものもある。

2738はいわゆる小型丸底壺である。

2739～2741は短頸壺ともよぶべき器形で、2739はミニチュアである。2741は二次的焼成が著しい。

椀（図版93～95・290～292・325）

個体数のもっとも多いのはこの椀である。特殊なものを除きほぼ完形に近いものだけを実測した。やはり二次的に火を受けているものや、煤の付着するもの、口縁の一部を打ち欠いたものが多い。口径10～13cm、器高は2～3cm。調整や細部の作りにかなりの個体差がある。

全体の形は、2743～2759・2799～2809のように平底に近いもの、2766や2822に典型的にみられるように全体が半球形のもの、2778～2797のように口縁が短く外反するもの、2767～2769・2819～2821のように口径が胴部最大径より小さい口すぼみのものなどがある。また、口縁端部のおさめ方も、すなおに丸く終わるもの、薄く仕上げるもの、2779・2780・2801・2802のように玉縁状のもの、2765・2789のように端面をもつものなどがある。2770～2773は口径に対して器高の高い深目のものであり、2823・2824はやや大きめのものである。

調整として目立つのは内外面の極く粗いハケメであるが、2814のようにヘラミガキを施すものもある。板ナデのものも多い。図版325に特徴的なものをいくつか並べている。全体的に外面より内面のほうが調整が丁寧であり、粘土紐の継ぎ目や指頭圧痕が残るのは外面である。

ヘラ記号を施すものが最も多いのもこの器形である。2829～2836のように外面に縦に2本の平行線を引くものが一番多く、2838～2842のように内面に施すもの、2843・2844のように底部外面に施すものなどがある。2843はヘラ記号というよりむしろ何かの圧痕かもしれない。2845・2846は底部に木の葉の圧痕が残っている。

高杯（図版96～98・293～296）

高杯は杯部の形から、大きく2つに分けることが出来る。2884～2887・2896～2904のように杯部外面に稜があるものとないものとである。また、稜のないものは、2859～2871のように体部から口縁にかけて内湾するどちらかといえば椀状のものと、そして2872～2877のように口縁が外反するどちらかといえば浅いものと、2878～2883のように体部から口縁にかけて屈曲するものという3つのタイプがある。2857・2858は杯部の口径が8～9cmとごく小型のものである。

稜があるタイプには、2884～2887のように杯部の口径14cm、高さ4cm程度のものと、2896～2904のように口径17～22cm、高さ6～7cm程度のかなり大型のものとがある。このタイプの高杯の杯部は円板状の底部に口縁部を貼り足して作られており、その接合部分から剥

離しているものが多い。そうした個体を観察すると、2900・2907・2908のように円板の周縁の剥離面にハケメ原体ないし棒状工具による刺突が巡っていたり、暗文風の沈線が接合後には観察不能な部分に及んでいる状況がみられる。(図版296)

杯部の調整は、内外ともハケメあるいは板ナデが多いが、2889のようにヘラミガキを内外に施しているものもある(図版295)。ハケメはごく粗いものがめだつ(図版293)。また、口縁端部付近や、稜のあるタイプでは稜付近では回転を利用したヨコナデによってハケメが消されているものが多い。また、口縁端部は薄く仕上げるものや、玉縁状のものなどがあり、稜のあるタイプではカットした面を持つものが多い。

脚部は脚柱部と裾部の境が明瞭に屈曲するものが多いが、脚柱部がなだらかに広がって裾にいたるものもある。調整は外面はハケメないし板ナデが多いが、2879・2892のようにヘラミガキを施すものもある。また、2871・2905～2907のように脚柱部の面取り状の調整がめだつものもある。2885は外面にヘラケズリ痕が残る粗雑なつくりである。内面は脚柱部の粘土紐を巻き上げた痕跡が残るものと、ヘラ削りを施したりハケメ原体やヘラでかきならすものがある。また、絞り目のあるものもある。裾部は断続的なハケメを巡らすものが多い。脚裾の端部のおさめかたも各種みられるが、ヨコナデで終わるものが多く、端面をヘラ削りするものは見当たらない。

透かし孔はないものが多く、2892のように不整形のちいさな孔があるものや、2894のように中途まで刺突しているだけのもの、2895のように円孔を一つだけ穿つものがある。杯部と脚部の組み合わせは特定しにくいが、稜のあるタイプの大型の杯部には比較的頑丈な脚部が伴い、粘土紐の巻き上げ痕がよく残っている。少なくともヘラ削りは施さない。2904は杯部と脚部の接合部分に厚く無造作に粘土を巻き付け、指で押さえている(図版296)。同じ稜のあるタイプでも小型の2884・2885は脚柱部内面をヘラで削っている。

なお、2863は杯部内面にヘラ記号があり、2870は杯部下半外面に2条の平行線のヘラ記号があり、籾痕もみられた。2886の口縁部、2899の脚部にも2か所籾痕がある。また、2893の脚部には他に例のないヘラ記号ないし沈線文がみられる。

甕(図版99～109)

水路SD72001からは完形及び完形に近い甕が大量に出土している。その多くは二次的に火を受けており、中には煤・お焦げの付着したものも多いが、日常的に使用されていたものがそのまま投棄されたとは考えにくい。甕はもともと火にかけられる器形であり、煤が付着していたり二次焼成のため器表が剥離したりして調整の観察が困難な場合が多い。内外面ともハケメないし板ナデのものがほとんどで、内面をヘラ削りするものは少ない。ハケメは1㎝あたり10条程度のごく細かいものと1㎝あたり3条程度のごく粗いものとがある。外面のハケメは主に縦方向に施されている。口縁部内面は横ないし斜め方向の断続的にハケメがめぐるものがある。また、頸部内面は調整が及ばず、粘土紐の継ぎ目や指頭圧痕が残るものも多い。

図版99の2909～2914はやや古いタイプに属すると考えられるもので、中でも2912・2913は内湾しつつ立ち上がる典型的な布留式甕の口縁部である。内面は頸部の屈曲より一段下がった部位以下を横方向にヘラ削りし、外面は主に縦方向、胴部最大径から肩部にかけて

はその上に横方向のハケメが巡る。この横方向のハケメは比較的古い様相を示す調整技法である。2914は肩部内面に指頭圧痕がめぐるかわったタイプである。2910はむしろ庄内式に近い「く」の字形に開く口縁をもち、頸部内面はシャープな稜があり、内面はヘラで削られている。これらは時期的にさかのぼるものの混入である可能性もある。

甕には規格がいくつかある。2915～2926は小型の甕である。口径10～12cm、胴部最大径13～16cm、器高14～18cm。口縁部の形態は2917～2920にみられるように、頸部からいったん立ちあがってから外反するものがもっとも多く特徴的なタイプである。口縁端部は面をもつものが多い。2923の外面は幅の広いヘラミガキ状の調整が施されている。2922の口縁部内面には籾痕がある。(写真図版297)

図版100・101(2927～2945)は中型の甕である。口径14～15cm、胴部最大径17～20cm、器高17～20cm。2927～2603は外面にハケメを施すもので、2935～2627は板ナデを施すものである。前者の内面の調整はハケメと板ナデの両者があるが、後者は基本的には内面も板ナデである。2927・2929・2943のようにやや平底気味のものがある。2927・2930及び2969は3条の線からなるよく似たヘラ記号をもつ。

図版102以降は大型の甕である。図版102の2946～2953は図版101と同様の板ナデを施す大型の甕である。口径14cm前後、胴部最大径20cm前後、器高23～26cm。内面の調整も板ナデを主とするが、2951の底部付近の内面には一部ハケメがみられ、半球形の底部を作った後胴部を継ぎ足す成型方法が推測される。

図版103に並べた2954～2959は卵形の胴部を持ついわゆる長胴の甕のうち、図版101・102に並べたものと同様に調整が主に板ナデのタイプのものである。口径13～17cm、胴部最大径21～24cm、器高24～28cm。口縁部は頸部から直立気味に立ち上がる。全体に器壁は凹凸が著しく、2954・2957・2959の胴部は特に歪な形をしている。

図版104の2960～2966は外面にハケメを施す大型の甕である。2960は下膨れで頸の狭い特異な形で、甕というより壺に近い。底は平底気味で、底部外面には高台が剥離したような円形の剥離痕がある(図版301)。2964も胴部の張りに対して頸が狭く壺に近い形である。底部は粘土紐を巻きあげて作ったものらしい(図版306)。2965は頸部がきわめて広い。

図版105は長胴の甕である。ハケメが施され、図版103の長胴甕より胴部の凹凸が少なく、形も整っている。口縁部の形態もいったん立ち上がって外反するというより、「く」の字形に近いものである。口径13～16cm、胴部最大径21～24cm、器高26～28cm。また、2968～2971にみるように、口縁部内面に断続的な横方向のハケメが施されている。2971には胴部上半と下半で異なる二種のハケメが施されている。

図版106・107の2973～2984はより大型の長胴の甕である。口径14～18cm、胴部最大径24～26cm、器高28～32cm。2984以外はハケメが施されている。2978は平底に近く、胴部最大径に比べ頸部や口径が小さい口すぼまりの形である。2982～2984も口すぼまりの形である。2975・2981は底部の煤が付着している部分に支脚の痕跡が白く抜けて残っている。(図版305)

図版108の2985～2991は、球形に近い胴部から口縁部がほぼ直立する直口壺に近い形の甕である。2989・2990の調整は内外とも板ナデである。

図版109の2992～2998はいわゆる複合口縁をもつものである。2994・2995は山陰地方の古墳時代中期によくみられる形である。古墳時代前期のものに比べ口縁部の屈曲の稜が甘く、肩部はなで肩状になだらかで、胴部最大径の位置も低い。また2995の胴部内面にはハケメが施されている。2997・2998は狭い口縁に対して胴部が大きく張り出す器形で、胴部最大径の位置は高く肩が張っている。また、全体の大きさに対して器壁が薄い。調整は内外とも板ナデが施されている。

鉢（図版110・305）

2999～3002は小型の鉢である。口径17～21cm、器高９～13cm。2999は大型の椀ともいうべきもので、平底気味の底部から口縁がすなおに広がる。内面は板ナデ、外面は粘土紐の継ぎ目や指頭圧痕が残る。3000～3002は外反する短い口縁をもつ。3001は外面にかなり煤が付着している。

3003～3005は大型の鉢である。広口の浅い甕あるいは鍋ともいうべき器形であり、二次的に火を受けており、煤も付着している。3003の調整は内外ともハケメであるが、胴部内面には粗い原体を用いている。また、口縁部には注口が復元できる。3004は内外面とも板ナデを施している。3005は外面及び口縁部内面はハケメで、胴部内面は板ナデである。

甑（図版111・112・306）

3006～3008は大型の甑で、口縁端部に面をもつものである。いずれも断面が円形に近い角状の把手を器壁の円孔に挿入し、外面は把手の周囲に粘土を張り足している。3006の口縁部は直線的に開くが、3007・3008は丸みを帯びた胴部から口縁部が直立する。3006の外面と口縁部内面の調整はハケメが施されている。3007・3008は主に板ナデで仕上げている。

3009も3007・3008と同様の丸みを帯びた形であるが、口縁端部は丸くおさめている。把手の断面はやや偏平な楕円形で長さも3006～3008に比べて長い。胴部に挿入した把手の裏面にも粘土を張り足している。一方の把手より上にヘラ記号ないしヘラ傷があり、把手には籾痕もみられた。底部に把手方向に長軸をとる楕円形の二孔を切り込む。なお、全体を上からみた形も正円ではなく把手方向に長い楕円形をしている。

3010は3006と同様に口縁部が直線的に開くものである。底は円孔が一つのみである。予め底抜けの状態で作られたものと思われる。外面の調整は粗いハケメを施しているが、胴部下半にはハケメが及ばず粘土紐の継ぎ目が残る。3011の把手は先端を切ったような上向きの面がある。

3012～3014は甑の底部である。3012はおそらく円孔を中心にその周りにカマボコ形の４孔がめぐるタイプと推定される。3013・3014はカマボコ形の２孔が直線部を内側に向かい合うタイプであろう。

須恵器（図版113・114・307～309・324）

3015～3032・3048～3059が、亀ノ郷７区およびそれに隣接するＫＭ１区の確認調査時に出土した須恵器である。土師器に比べ量は極めて少ない。

3015～3020が杯蓋、3021～3029が杯身である。3027～3029の杯身の底部外面にはヘラ記号がみられた。

3015の杯身の口縁端部は直線的にカットされており、天井部は平らでカキメが施されてい

る(図版308)。3019・3020の杯蓋や3023の杯身の口縁端部も同様のつくりである。3021の杯身は口縁端部が分厚く丸く仕上げられている。3024の杯身の口縁部の立ち上がりは高く、ヘラケズリした部分では削りの方向に平行するハケメのような浅い条痕がみられる(図版308)。3025のケズリも同様である。こうした須恵器は陶邑などにはみられない特異なものである。総体に器壁が厚いせいか手に持つとずしりと重い点も特徴的である。

3030・3031は有蓋高杯の蓋である。3030は確認調査時に出土したものである。

3032は把手付椀であるが把手は剥離して失われている。把手の取りつく裏面にあたる部分には指頭圧痕が残る。胴部にやや雑な波状文がめぐる。底部は手持ちヘラ削り痕を残す。(図版309)

3048～3050は小型の瑞である。3048は文様が無く、頸が細く肩が張り底が尖り気味で比較的新しい形態をとる。3049は口縁部に細かい波状文、胴部には刺突文が施されている。3050は口縁部に細かい波状文を施す。底部付近にわずかに平行叩きが残る。いずれも胴部の高さが頸部以上より大きい。また、底部内面には直径約2㎝の親指で押したような当て具痕が残る。

3051～3053は大型の瑞である。3051は胴部に細かい波状文と刺突文を施す。胴部下半は平行叩きが施され、ヘラ記号らしきものがある。底部内面には直径3～4㎝の丸石を当て具にしたようなくぼみがある(図版308)。3052には円孔は残っていないが、胴部に波状文や刺突文があるこの壺ではなく瑞と考えた。頸部にもわずかに波状文の下端がみとめられる。3053も同様である。内面には同心円状の当て具痕が残る。

3054・3055は樽形瑞の一部である。3054は内面の板ナデ痕が明らかである。3055は一部剥離している。(図版324)

3056・3057は壺ないし小型の甕である。3056の口縁部は無文で頸部内面に細い幅の板ナデ痕が残る。3057は口縁部に二段の波状文があり胴部は平行叩きの上からカキメを施している。胴部内面の上半は同心円状の当て具痕が、下半は無文の当て具痕が残る。

3058・3059は大型の甕である。3059の口縁部には沈線が3条めぐる。肩には小さな瘤状の突起が少なくとも二個ついていた。内面にはごく浅い同心円状の当て具痕が部分的にみとめられた(図版308)。また、内外面ともヘラ傷のようなものがみとめられた。この甕にみられる瘤状の突起はごく古い須恵器あるいは朝鮮半島の陶質土器によくみられるものである。

2．亀ノ郷3区出土の遺物(図版113・115・310)

亀ノ郷3区では、水路SD72001の木器を多く出土した層から、3033・3060～3065の土器が出土している。てづくね土器・椀・大小の壺と甕と数は少ないが器種はそろっている。なお、須恵器杯3033はその上層の溝から出土している。

3062の小型の壺は胴部に焼成前に円孔が穿たれており、須恵器導入時によくみられる土師器の瑞ともいうべきものである。3064の甕は平底に近いずんぐりした胴部からいったん直立して開く口縁部がつくもので、3065の尖り気味の底と「く」の字にひらく口縁部という比較的古い要素をもつ甕とは全くことなるタイプに属している。

3．亀ノ郷6区出土の遺物(図版115・116・310)

亀ノ郷6区からも少量ではあるが古墳時代の遺物が出土している。3066～3080の土器の

うち、3074・3076・3079は水路SD72001から分岐するSD72004、3077はSD72001上層の溝から出土しており、それ以外はSD72001から出土している。

3066～3068の高杯にヘラミガキが施されている点や、3072の甕の内面がヘラケズリされていること、3071の大型の壺の肩部に横方向のハケメがみとめられること、3072・3076の甕の口縁部に布留式の甕の極めて退化した要素がみとめられることなどは古い様相としてあげておきたい。しかし、3073～3075・3077・3080の甕の口縁部の形態や、3077～3080の長胴甕の出現は新しい要素である。

3071の壺の肩部には刺突による記号文が施されている。

4．亀ノ郷８区及びＫＭ１区出土の遺物（図版113・117～120・307・311～314・320）

亀ノ郷８区においても水路SD72001内から土器・木器の良好な資料がまとまって出土している。この調査区に隣接する確認調査ＫＭ１区においても同様の遺物が出土しており、一部はすでに概報で報告している。

ここでは亀ノ郷８区出土の土器(3081～3135)を中心に報告し、確認調査ＫＭ１区の遺物(3136～3160)については補足的に取り扱う。

図版113の須恵器3035は亀ノ郷８区の中世面から出土している。3034は亀ノ郷８区の側溝からの出土である。3036～3047は確認調査ＫＭ１区の出土である。

3081～3089はてづくね土器およびミニチュアの祭祀用の土器である。3090もおそらくてづくね土器の脚部であろう。3083～3085・3091は壺のミニチュアであろう。3095の胴部外面はヘラでなでて仕上げてあり、比較的丁寧なつくりである。古墳時代前期の小型鉢の系譜をひくものか。

3093・3094は下膨れの胴部が特徴的な粗製の土器である。

3096の小型の壺は亀ノ郷３区の3062と同様の土師器の瑕として焼成前に穿孔している。3097は小型の甕に近い。

3099～3102は中型の壺である。いずれもハケメ・板ナデ痕などがみとめられないヨコナデで仕上げられた土器である。3100・3102は口縁部に若干の差異があるものの、胴部の形や調整、胴部と口縁部の長さの比率などがよく似ている。

3103～3113の杯のうち、3103は浅く底部と口縁部の境があいまいな形で、古墳時代前期によくみられるタイプである。他の3106～3110は口径に対して器高が高い比較的深いタイプである。3111は半球形に近い。3112と3113も深いタイプであり、また大きさ自体も普通のものより大きい。

3114は黒色の瓦質の韓式土器の鉢の一部と思われる(図版320)。体部に一辺５㎜程度のこまかい格子叩きを施し、口縁部はその上からヨコナデしている。

3115は器台である。他に類例はない。内外ともハケメをほぼ全面に施す。

3316の高杯は外面に雑な波状文が描かれている(図版312)。3117の高杯杯部は口径に対して深いタイプである。3118～3120の高杯の脚部には「人」字形のヘラ記号が施されている。これらは比較的隣接した地点でみつかっている。確認調査ＫＭ１区から出土した3143にも同様のヘラ記号がある。これらの脚部は脚柱部が太めで杯部との接合部で細く締まり、内面をヘラケズリするもののシボリメがよく残るという極めて良く似た特徴をもつ。また、

3119・3120の深い椀状の杯部も外面に指頭圧痕を多く残すという共通点をもつ。それに対して3118は外面に指頭圧痕を多く残すという共通点はあるものの、浅く直線的に開く杯部であり、形態は異なる。おそらく同一の製作者が違う器種として作ったものであろう。

3121・3122は屈曲して大きく直線的に開くタイプの高杯で、いずれも脚柱部に面取り状のナデないし板ナデ痕がある。

3123～3127は稜をもつタイプの高杯である。3124・3125は杯部が深く、3126・3127は浅いが広く開く口縁をもつ。杯部内面は横方向にハケメが施されている。後者の脚部には円孔があり、脚柱部はゆるやかに開き、内面にハケメを施すがヘラケズリしない。脚端部はヨコナデによる面をもつ。3124・3125の脚中部は裾部との境で屈曲し、内面はヘラケズリをしている。以上のように両者の製作技法はかなり明確に分離できる。

3128～3135に明確な長胴の甕は含まれていない。3128は小型の甕である。口縁端部は薄くなって終わる。3132は退化した二重口縁である。3121は退化した布留式の甕ともいうべきもので、肩部内面に器壁を掻きあげるように調整した際の工具の当たり痕がみられる。また、胴部外面下半にヘラ記号ともヘラキズともつかない沈線が2条みられる。3130・3131・3133・3134は直立して外反する口縁部をもつ。3131は最大径が肩部近くにあるいかり肩の胴部が特徴的である。3133・3134は胴部最大径が下寄りのナデ肩で下膨れの胴部で形態的には似ているが、胴部内面の調整は3133ではヘラケズリ、3134ではハケメと全く異なっている。3135はやや細長い胴部に「く」の字形に直線的に開く口縁部がつく。調整は内外面とも板ナデである。

確認調査時には杯・高杯・椀・甕のほかに3150の甑や3151・3152の二重口縁の大型の壺も出土している。甑は底部に梅の花状に円形の中心孔の回りに5つの円孔をめぐらす。3151・3152の二重口縁の稜は突帯を張りつけるようにして作り出したもので、極めて退化した型式である。また、3148・3149は高杯の脚部と杯部との接合面で剥離しており、製作技法を考える上で興味深い資料である。(図版313)

5．各遺構出土の遺物（図版121・315・324）

3161は須恵器の小壺である。胴部が最大に張り出す位置の少し上までヘラケズリをしている。底部は灰白色でやや生焼けである。黒岡2区の水田面をおおう洪水砂から出土している。

3162～3166は下町2区の旧河道SR72002からの出土である。高杯と甕、須恵器の甕の口縁が出土している。3164の高杯杯部は側溝からの出土で、遺構・層位の詳細は不明であるが、おそらく旧河道出土と思われる。内外ともヘラミガキを多用する点は古い様相を示すが、稜を持つ点や脚柱部との接合面の形状から古墳時代中期のものとした。3165の甕は内外面とも板ナデをほどこす。

3167の須恵器杯身は下町4区のSD72006からの出土である。

3168～3170は西ケ市3区の砂礫層からの出土である。てづくね土器と浅い椀で、古墳時代前期に近い特徴を示す。

3171の須恵器瑞は西ケ市7区の古墳時代水田面にともなう溝SD72009からの出土である。

3172の甕は西ケ市9区の溝SD62002からの出土である。ナデ肩気味の肩部から「く」の

字状に直線的にひらく口縁部の端部は薄くなって終わる。胴部外面と口縁部内面にやや細かいハケメが施されている。胴部内面は主に板ナデで一部にやや粗いハケメがみられる。古墳前期にさかのぼる可能性もある。

3173の高杯は池ノ内１区の住居跡SH72005のカマド付近からの出土である。全体に磨滅がひどく、調整は不明である。

3174の甕の口縁は池ノ内１区の溝SD72010から出土した。

3175の甕の口縁は池ノ内１区の住居跡SH72004内の土坑からの出土である。

3176の須恵器杯身は池ノ内１区の住居跡SH72005内に切られた土坑SK72002からの出土である。

3177の須恵器高杯杯部は池ノ内14区の住居跡SH72001付近の柱穴SP72001からの出土である。

3178の高杯杯部は池ノ内１・14区の住居跡SH72001内からの出土である。

3179～3183は池ノ内14区の住居跡SH62001内の出土である。

3184の須恵器甕の口縁部は池ノ内16区の土坑から出土している。

3185の須恵器把手杯椀は池ノ内16区の段丘面の包含層から出土している。

3186の須恵器の壺は西ケ市２区の中世水田面の土器溜まりより出土した。この土器溜まりは中世の土器と古墳時代の土器が混じっている。

６．西ケ市地区出土の遺物（図版122～129・315～321）

西ケ市地区では２・６・７区の遺構及び確認調査のＫＭ７区から古墳時代中期の遺物が出土している。

3187～3193は西ケ市６区のSD72007からの出土である。土師器の椀・甕・壺・鉢と須恵器の高杯脚部が出土している。

3194～3204は西ケ市２・６・７区のSD72008からの出土である。土師器の椀・甕・高杯・てづくね土器、須恵器の杯蓋・有蓋高杯・把手付椀が出土している。3196の土師器の甕はいわゆる布留式の口縁部を持つが、肩部内面に縦方向の指ナデがみられる点が新しい要素である。3201の須恵器の杯蓋は古墳時代後期に下るものである。

3205～3251は西ケ市６・７区のSD72001からの出土である。

3205～3212・3221～3225はミニチュア土器あるいはてづくね土器のたぐいである。3209・3222～3225は壺のミニチュアで、3222には円孔が穿たれている。3210・3211は粘土紐を粗雑に巻き上げただけの極めて粗製の土器である。3212は椀状の器形である。3221は典型的なてづくね土器である。

3213・3214・3229～3231は椀である。3187・3194と同様に亀ノ郷地区の椀に比べやや深い形状のものである。3229・3230の内面にはヘラ記号がみられる。

3215は器種不明の底部である。

3216～3218・3233～3235は高杯である。3233は椀状の杯部をもつタイプで、3216・3234の杯部は椀状に近いが3233に比べ口縁部が開くタイプである。3235の脚部にはヘラ記号がみられる。

3219・3220は須恵器の有蓋高杯である。２点とも脚部には３方向の長方形透しがあり、

カキメを施しているが、脚端部のつくりは異なっている。3232は須恵器の杯身である。口縁部の立ち上がりが極めて高い。

3226～3228はいわゆる小型丸底壺で、ハケメを多用する古墳時代中期に特徴的なタイプである。3236は甕に近い直口壺である。

3237～3251は甕である。3237・3239・3241・3243～3248・3250のように、頸部からいったん直立した後外反する口縁部のものが多い。調整は外面はハケメまたは板ナデであり、内面は板ナデが多いが3240・3241・3247・3249のように肩部ないし3251のように上半部をヘラケズリしているものもある。亀ノ郷地区とは異なり、典型的な長胴の甕はみられない。

3252～3375は確認調査のＫＭ７区から出土している。(図版125～129・318～321)

3252～3267はミニチュア土器あるいはてづくね土器のたぐいである。3258は上面からみた形が楕円形であるあまり例のない特殊な土器である。3264の平底の壺のミニチュアもこの遺跡ではこれ１点のみである。

3268の壺は外面及び口縁部内面にヘラミガキを施している。

3269～3281は椀である。口径10～14cm、器高５～７cm。3281だけはこれより大型である。また3281の底面には木の葉の圧痕がみられる。

3282は体部外面に格子目タタキを施した韓式土器である。

3283はきわめて小型の甕である。3284は甑である。

3285～3333は高杯である。この地区からはきわめて多量の高杯が出土しており、亀ノ郷地区では椀が主体であるのとは異なった様相を示している。3235～3312が杯部に稜をもたないタイプで、3316～3327が杯部に稜をもつタイプに大別したが、それぞれさらに細分することができる。稜のないタイプでは杯部の形状がいくつかに分かれ、口縁端部のつくりをみると3293・3294・3308・3309の玉縁状の端部は特徴的なものである。稜のあるタイプは3316～3320のように口径13～15cmの通常の大きさのものと、3321～3327のように口径17～22cmの大型のものがあり、後者はさらに3323・3324・3326・3327のように深いものとそれ以外の浅いものに分けることができる。脚部は脚柱部と裾部の区別が明瞭な屈曲するものが多く、ラッパ状に開くものもいくつかみられる。3320・3332・3333には円形の透し孔がある。脚端部は丸くおさめるものが多いが、3332・3333は面をもっている。

3324～3342は甕である。ここでも西ケ市６・７区と同様に典型的な長胴の甕はみられないが、3339・3342がやや長めの胴部を持つ。口縁部の形状は3337・3339～3342のように頸部から直立したのち外反するものが多い。3338はいわゆる布留式の甕で、時期的のは遡る可能性がある。調整は外面はハケメまたは板ナデ、内面は板ナデのものが多いが、3335・3336・3338のようにヘラケズリするもの、3334・3341のようにハケメのみられるものもある。

3343～3375は須恵器である。杯身・杯蓋・有蓋高杯・無蓋高杯・把手付椀・瑞・壺・甕などがある。3343～3350の杯身・杯蓋は、口縁部の立ち上がりなどの特徴が亀ノ郷地区のものより古い様相を示している。3349の底部は手持ちヘラケズリを行っている。3347の内面には粘土紐の巻き上げの痕跡らしいものがみとめられ、3350の回転ヘラケズリには回転の乱れが観察できる。(図版321)

有蓋高杯の3351・3352あるいは把手付椀3363はいわゆる初期須恵器に属する古い時期の形態のものである。

高杯の脚部では、通常にみられる3357の３方向の長方形透し孔のもの以外に、3359の４方向の円形透し孔、3361・3362の４方向の長方形透し孔のものがある。

3364～3370は瑞である。波状文が多用されている。3371・3372の壺の口縁部にも波状文が施されている。

3373は壺などの大型の器種の蓋であろうか。この3373と直口壺3374の胴部には刺突文が施されている。

7．池ノ内地区出土の遺物（図版130～132・322～324）

池ノ内地区の旧河道SR72001から3376～3416の土器が出土している。

3376～3380はてづくね土器あるいはミニチュア土器である。3380は3381の小型丸底壺に類した器形であるが、法量が小さい。

3381～3383は壺であるが、典型的な壺は3382のみで、3381はいわゆる粗製の小型丸底壺であり、3383は小型の甕に近いものである。3382の肩部内面では、粘土紐の巻き上げ痕がよく観察できる。（図版322）

3384・3385は椀であるが、亀ノ郷・西ケ市地区でみられるもののように定型化したものではない。

3386～3389が須恵器で、杯蓋と高杯の脚部である。3387・3388は古墳時代後期に下るものである。

3390～3400は高杯である。3390～3393が杯部に稜のないタイプで、3394・3395・3397・3398・3400が杯部に稜のあるタイプである。3397・3398のように大きく開く浅いタイプのものは他の地区ではみられなかったものである。3393の脚柱部には棒状のもので刺突した痕跡のような円孔がみられる。また3395には籾痕がみられた。（図版324）

3401～3413は甕である。3401～3403はいわゆる複合口縁をもつものである。3401・3402の胴部はやや肩が張るが球形に近いよく似た形状である。3403は肩部外面にヘラ記号があり、胴部内面にハケメが施されている。

3404～3413の甕の口縁部は、亀ノ郷・西ケ市地区でもよくみられた頸部からいったん直立した後外反するものが多いが、3407・3413のように単純な「く」の字状のものもみられる。

3404～3406は小型の甕である。3404の外面には平行タタキがみられ、内面はヘラケズリが施されており、このような調整は他に例がない。3405・3406は板ナデでしあげられている。

3407～3411は中型の甕である。全体の形状がわかるもののうち3407・3408は長胴の甕であり、内外面とも粗いハケメで仕上げている。3410の調整も同様である。3411の肩部外面には不明瞭ではあるがヘラ記号がみられる。

3412・3413は大型の甕で、長胴甕に分類すべきものであろうか。２点とも外面はハケメで仕上げられ、内面には指頭圧痕が残る。

3414は甑である。外面はハケメ、内面はハケメと板ナデが施されている。底部の透し孔

の形状は不明である。外面に籾がいくつか付いた稲穂の圧痕がみられた。(図版324)

3415・3416は大型の鉢で鍋に近いものである。内外面ともハケメがみられる。

8．韓式土器拓影（図版133・309・320）

3114はすでにのべた亀ノ郷８区出土のものである。3417と同じくＫＭ７区出土のものと同様の平底鉢の底部付近と思われる。

3418・3419は甕の肩部の破片である。いずれも特徴的な偏平な菱形の格子目の叩きであり、同一個体の可能性もある。3420はそれより厚みのある斜格子の叩きを施した甕の胴部の破片である。以上はいずれも軟質の土器である。

3421・3422は亀ノ郷８区出土のものである。

3423はＫＭ１区出土で以上の３点は同一個体の可能性もある。細かい格子の叩き目を施し、内面には指跡のような小さい無文当具痕がある。器壁は薄い。

3424は亀ノ郷７区の出土である。3425はＫＭ７区出土である。格子は粗く・器壁も厚い。

第６節　歴史時代

（図版134・326）

須恵器　3426は須恵器の細頸壺である。池ノ内16区のSK82004から出土した。体部の肩の部分は鋭い稜をなす。稜の部分には箆書きの沈線が巡らされる。底部の切り離しはヘラ切りで、後に強い回転ナデが施される。高台は外側に踏ん張るような大型のものが、底部の最も外寄りに貼り付けられている。頸部の上半部には二重の沈線が巡らされている。さらに頸部から肩部にかけて自然釉が付着している。

墨書土器　3427から3430は墨書土器である。いずれも須恵器の杯で、底部の切り離しはヘラ切りである。3427・3428は西ケ市４区の包含層から、3429は西ケ市４区の包含層から、3430は西ケ市７区の包含層からそれぞれ出土している。

3427は浅いめの杯Ａで、底部に「南」の字が書かれている。3428は3427と較べて口径はほぼ同じであるが、深さはやや深いめである。底部の墨書は「□井」の二文字である。3429は杯Ａの底部である。墨書は一文字で「豕」の字に似ているが判読不能である。3430も同様の杯の底部である。墨書は「中□」の二文字である。

土師器　3431は土師質の筒形土器である。池ノ内14区の流路SD82012から出土した。筒形といっても成形はおおまかで、やや「Ｓ」字形にねじれた筒形を呈している。筒の両端から最大径８㎜の細い穴が、丁度ちくわの穴のようにあけられているが、貫通はしていない。器表面は指押さえによる荒い調整しか施されておらず、特に両端部付近で指頭圧痕が多く残っている。

3432は土師器の杯である。池ノ内９区SR62002から出土した。時期は７世紀中頃のものである。底部から体部下半にかけて緩やかなカーブを描きつつ、体部は全体的に内弯気味である。表面調整は、外面は横ナデの後横方向のヘラミガキを施し、内面は横ナデ、さらに横方向のミガキを施した後放射状の暗文を施している。

須恵器　3433は須恵器の杯である。池ノ内14区のSK82003から出土した。底部はヘラで切り離したのち不定方向のナデで仕上げられている。体部は緩やかに内弯する。器表面の調整は回

転ナデで仕上げられる。時期は8世紀前半のものと考えられる。

3434は須恵器の皿である。おなじく黒岡1区包含層から出土した。底部の切離しはヘラ切りによるものと思われ、ヘラ切りの後ナデで仕上げられている。高台は底部と体部の境目部分に付けられており、その断面形は正方形に近い。

3435は須恵器の皿である。下町4区の包含層から出土した。底部の切離しはヘラ切りによる。体部は短く直線的に外反している。3436は須恵器の杯である。西ケ市6区の包含層から出土した。口径は3435の皿に近いが深さはほぼ倍である。3437・3438も須恵器の杯である。3437は亀ノ郷2区の包含層から、3438は亀ノ郷8区の包含層からそれぞれ出土した。口径はいずれも小さいが、器高はやや高いめである。底部の切離しはやはりヘラ切りによる。3439は須恵器の鉢で、西ケ市4区の包含層から出土した。体部は直線的であるものの緩やかに内弯する。形態的に須恵器の椀3440・3441に似ているものの、口径が19.8cmと一般的な椀に較べて大きいため鉢と判断した。

3440・3441は須恵器の椀である。いずれも亀ノ郷2区のSK82002から出土した。底部の切離しは回転糸切りによる。土器の成形段階で、底部上面の外縁部に体部となる粘土紐を積んでいるため、見込みの部分が落ち込んでいるように見える。3440は内弯する体部の上に緩やかに外弯する口縁部がつく。3441は体部下半が内弯し、さらに上方は直線的に外反している。山仲進氏の神出窯須恵器分類A1類にあたり、時期的には11世紀後半と考えられる。(妙見山麓遺跡調査会　1986年)

陶磁器　3442～3445は陶磁器類である。

3442は青磁の小皿である。池ノ内15区の包含層から出土している。釉は薄い黄色味がかった緑色である。体部の内外面は全体的に施釉されているが、底部は露胎である。器形は底部と体部の境目に稜をなす。体部はやや長めで緩やかに外弯している。見込みには櫛描きによるジグザグ文とヘラ描きの文様が施されている。以上の点からこの小皿は同安窯系のものと考えられる。(横田・森田　1978年)

3443は青磁の椀の体部の破片である。亀ノ郷2区の包含層から出土した。色調はやや黄味がかった薄い緑色である。体部の外面には鎬蓮弁の文様が描かれている点から、横田・森田両氏の分類による龍泉窯系青磁の椀I-5・b類にあたると考えられる。(横田・森田　1978年)

3444は濃い緑色を呈する磁器の皿で、体部上半部から口縁部にかけての破片である。器高はきわめて低く体部も強く外反しているが、口縁の端部はさらに強く外反している。西ケ市2区の包含層から出土した。

3445は天目椀の底部の破片である。西ケ市2区の包含層から出土した。釉の色は黒に近い褐色で、体部下半は施釉されず露胎である。胎土は粗く、直径1㎜～0.5㎜の礫を含んでいる。

【参考文献】

山仲　進　1986年「東播系中世須恵器の分類と編年試案」(『神出Ⅲ(神出古窯址群に関連する遺跡群の調査)』妙見山麓調査会)

横田賢次郎・森田　勉　1978年「太宰府出土の輸入中国陶磁器について－型式分類と編年を中心にして－」『九州歴史資料館研究論集4』

第2章　石　　器

本報告の対象となる黒岡・亀ノ郷・下町・西ケ市・池ノ内地区からは弥生時代前期を中心に縄文時代後期～古墳時代中期の遺構が検出されている。したがって、これらの地区から出土した石器にも様々な時期のものが含まれるが、大半は弥生時代前期の微高地上の遺構とそれを覆う遺物包含層から出土したものである。以下では遺構や遺物包含層の時期に沿って石器の記述を進めるが、遺物図版の完成後に時期などの誤りや、遺漏が判明したため、遺物の順序が前後してしまうこととなった。煩雑となって誠に申し訳ないが、ご容赦願いたい。

1．弥生時代前期の石器

弥生時代前期の石器は亀ノ郷・黒岡地区を中心に広がる弥生時代前期の微高地上の遺構と遺物包含層から出土している。また、段丘上の西ケ市２区で検出された方形周溝墓などにもわずかながらある。狩猟具の石鏃を中心に、農具では打製石庖丁と磨製石庖丁、工具では石錐と磨製石斧、砥石、調理具では磨石と敲石があり、この他に削器、楔形石器などがある。磨製石斧は柱状石斧と扁平片刃石斧のみである。石鏃と楔形石器がややまとまった数が出土しているものの、それ以外は少ない。

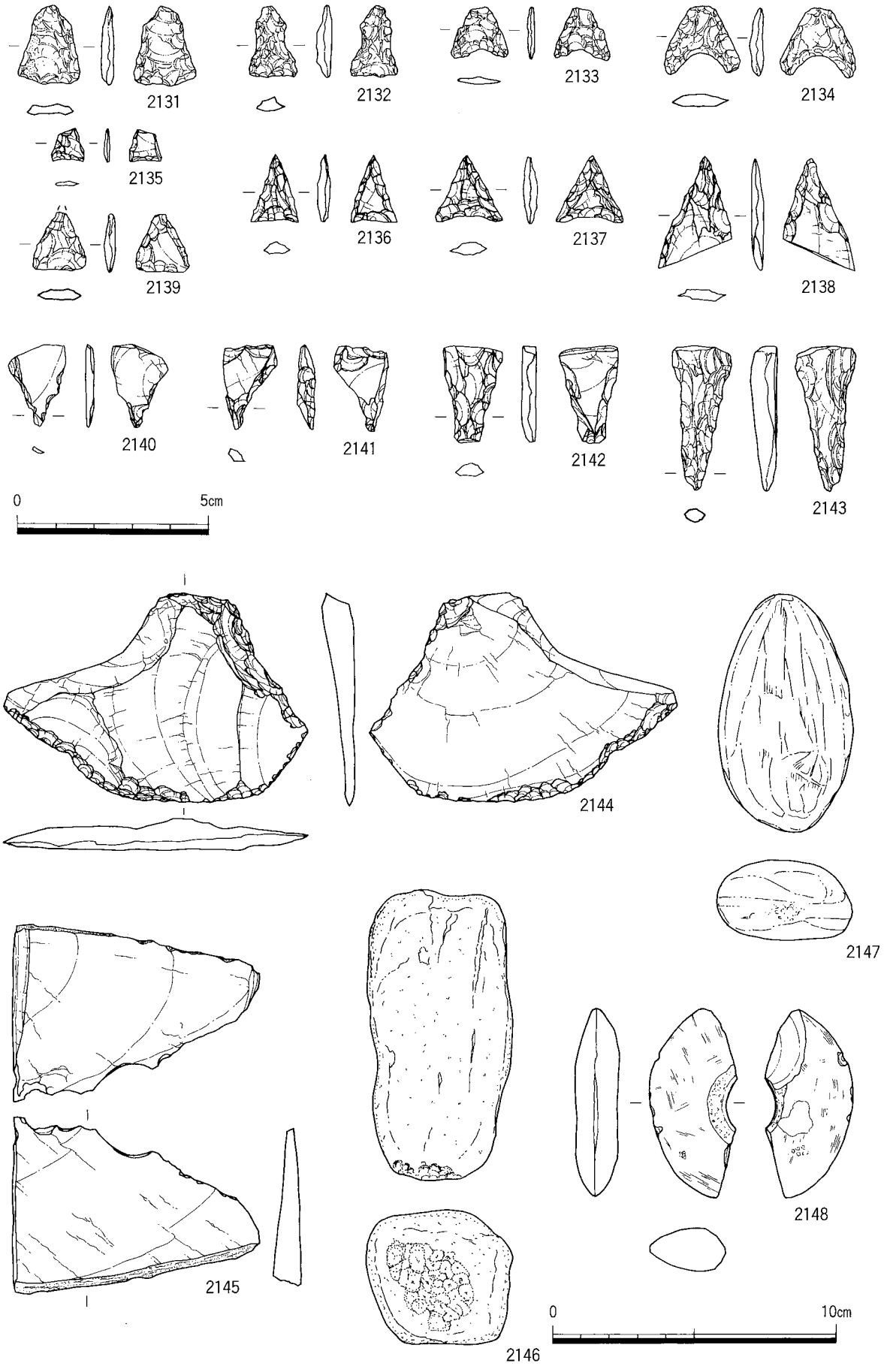
石鏃（2001～2019・2089～2094・2133～2139）

石鏃は破損品や若干の未成品と考えられるものを含め43点出土している。遺構から出土したもの36点に対して、遺物包含層からは７点にとどまるが、この差はおそらく発掘調査の精度に起因するのであろう。遺構のうちＤ３－２Ｇ区の竪穴住居跡SH22004からは23点が出土しており、際立った集中をみせる。また、SH22001にも４点あり、他の遺構に比べ竪穴住居跡に多いといえる。SH22004からは微細なチップも多量に出土しており、石器製作と関わっているのであろう。32点を図示する。基部が確認できるものは2134と2139を除くと、すべて抉りの浅い凹基式である。2134は凹基式でも抉りが深く、出土地区から考えて縄文時代後期のものが混入したのかもしれない。2139は唯一の平基式である。大きさでは長さ20㎜、重量１ｇ以下の小型のものが大半を占めるが、中には、2138のように30㎜を越えるものもわずかながら認められる。完形品の法量の平均は、長さ19㎜、幅14㎜、重量0.8ｇである。2001～2004は重量0.3～0.4ｇと特に小型である。2019は未成品であろう。

打製石庖丁（2026）

前期に属するサヌカイト製打製石庖丁は黒岡２区の木棺墓ST22003より出土したこの１点だけである。平面形態は直線刃半月形を成し、抉りを有する。横長剥片の打面側に背腹両面から鋸刃状の二次加工を施し、全体としては直線的な刃縁部を設けている。剥片の末端側は小剥離と研磨によって刃潰しを行い、弧状の背縁部を形成している。背縁部の両端には抉りが設けられているが、抉り部の縁辺は完全に叩き潰されて丸みを帯びている。使用痕はさほど明瞭ではないが、刃縁部の縁辺や剥離面のなす稜にはわずかな磨耗が認められる。剥片の打面側を刃部とすること、直線刃半月形ながら抉りをもつことなど、中期に盛行するものとは異なる点が多い。

磨製石庖丁（2025・2102～2104）



第1図　石器 20

亀ノ郷9区SH22001(2135～2138・2140～2142・2146)　亀ノ郷1区SH22006(2147)
KM7区SK22021(2139)　西ケ市6区SK12001(2131)　西ケ市2区SX22001(2133・2134)
D3-2G区黒岡2区弥生時代前期包含層(2143～2145)　KM10区SR62002(2148)　西ケ市9区(2132)

SH22004から１点(2025)、遺物包含層から２点(2102・2104)と未成品が２点(2103)出土している。

2025は緑色片岩製で、約1/2を欠損するが、刃縁部がやや外湾し背縁部は直線的であるから外湾刃半月形あるいは楕円形をしていたと思われる。刃部は両刃気味の片刃である。穿孔は欠損部にかかる１孔を含め３カ所ありすべて回転穿孔である。１孔は径２㎜と通例に比べ小さく、この小孔の両脇を含め、表裏両面に穿孔途中の窪みが４カ所ある。紐擦れの痕跡は不明瞭である。2102は直線刃半月形を呈し、刃部は片刃、刃縁はやや丸みをもつ。紐孔はやや下半に偏って回転穿孔で穿たれており、２孔の間には未貫通孔が１つある。紐擦れの痕跡は明瞭で左平面では紐孔間に、右平面では紐孔から背縁部にむかって斜めに磨耗部が認められる。淡灰色の凝灰質頁岩製で均質な石材である。2104は紐孔部分周辺のみが残る黒色泥板岩製の破損品である。

2103は砂岩製で成形加工段階の未成品と考えられるものである。左半を欠損するが平面形態は長方形となろう。図の下側が刃縁部になり両面からの剥離によって両刃の刃部が形成されている。弥生時代前期に属する砂岩製磨製石庖丁の完形品は今回の調査では出土していないが、未成品と考えられる資料が存在することから、中期に盛行する砂岩製磨製石庖丁の製作は前期まで遡る可能性がある。

石錐（2020～2024・2095・2096・2140～2143）

石錐は15点出土している。SH22001とSH22004に３点と４点あり、このほか土坑や遺物包含層から出土している。11点を図示する。頭部と錐部の区別が無い棒状錐(2022・2024・2095)、わずかに頭部が肥大するもの(2142・2143)、不定形な頭部に小さな錐部を作り出すのもの(2096・2140・2141)などが見られる。石鏃同様、小型品が目につく。錐部尖端を残すものは少ないが、いずれにも使用による磨耗は認められない。2021は両側面が折れ面よりなる剥片の一端に若干の調整剥離を加えたものである。折れ面の利用は2020や2141にも認められる。2023は側面が自然面と急角度に二次加工された面より成り断面が台形を呈する。両端が欠損する。2024は長さ16㎜の最小のものである。2095は比較的厚みがある棒状錐である。2096と2140は薄手の剥片の一端に短い錐部を作りだす。2142と2143は厚みがあり丁寧な作りである。

柱状両刃石斧（2027）

緑色片岩製の柱状石斧で、右側縁と表面側の上半分を欠損する。刃部は両刃である。表裏面および両側面はやや丸みがもたされており、断面形は隅丸長方形を呈する。刃部は良く研磨されているが体部側面には敲打痕がアバタ状に残る。SH22006から出土した。

扁平片刃石斧（2105）

遺物包含層からは扁平片刃石斧が１点出土している。結晶片岩製の完形品で刃縁は鋭い。両側縁の稜線も鋭く角がたつ。

磨石（2034）

2034はSK22020から出土したもので、小判形の偏平な礫に復元できると考えられる。研磨痕は極めて弱く判別は困難である。左側縁寄りの端部に敲打痕が認められる。磨石はこの他に遺物包含層から２点出土している。

敲石（2146）

2146はチャートの亜角礫で、一端に敲打痕が認められる。SH22001出土であるが、同じくチャート製の敲石がSD22003からも出土している。

削器（2099・2144）

削器とした石器はこの２点をあげるのみである。2099は抉状の二次加工を有する石器で左半を欠損する。2144は横長剥片の末端に弧状の刃部を設けた比較的大型の削器で、刃部加工は背腹両面から小さな平坦剥離を重ねて行われる。

楔形石器（2028～2030・2032・2033・2097・2098・2100・2101）

楔形石器はSH22004の他、いくつかの土坑や遺物包含層などから27点が出土している。分類基準が曖昧なため、もう少し多くが該当するかもしれない。相対する二方向からの加撃痕をもち、明確な形態はなさない。加撃の行われた縁辺は直線的か、やや抉れたような状況を呈する。2028・2029・2033・2097・2098・2102では側面に折面（剪断面）をもつ。2033では剥離はあまり進行しておらず、素材剥片の背面と腹面を大きく残すが、2032ではそれが判らなくなるまで剥離が進行している。2100はやや大型で加撃痕は上下と左右の２対に認められる。側面は上下左右とも自然面あるいは折れ面状の平坦な面をなし、割れ円錐の痕跡が残る。

剥片（2145）

遺物包含層から出土した板状の横長剥片で、打撃軸を中心に２つに割れている。比較的大きな剥片であるので実測図を示した。打面の自然面には流状構造が顕著で、石理に沿って剥離している。

磨製礫（2147）

軟質の凝灰岩礫の表面全体を削ったもので、幅の狭い削りの跡が残る。SH22006から出土した。

これ以外にサヌカイトや珪化木の剥片やチップがSH22004を中心に多数出土している。サヌカイトは住居内での石器製作の副産物であろうが、珪化木は一部に楔形石器様のものが認められる以外は、対応する石器が見当たらない。利器としては利用価値が低い石材だけに何に用いられたものか疑問が残る。

２．SK22045出土石器（図版137～151）

池ノ内14区のサヌカイト集積土坑（SK420045）から73点の石器の一括出土をみた。出土した石器は、剥片・石核で、明確な製品は含まれない。このうち70点を図示する。土器が出土していないことと、周辺に遺構が散漫であることから時期の比定がむずかしい。比較的近接する遺構としては縄文時代後期の土坑と弥生時代前期の方形周溝墓がある。

出土した遺物はいずれもサヌカイト製のもので、その石質の特徴から以下の４群に分け、接合作業を試みた。

Ⅰ群：礫面に爪痕状のクラックが顕著な資料で、その構造が非常に緻密なもの。2037～2043・2049～2067の39点が相当する。

Ⅱ群：流状構造をもつ資料。2044、2068～2078の13点が相当する。

Ⅲ群：流状構造をもつ一群で、Ⅱ群に比して風化の度合いが非常に進むもの。2045・2079

～2082の6点が相当する。

Ⅳ群：礫面に気泡が弾けたようなクラックをもち、緻密な構造をもつもの。2046～2048・2083～2088の12点が相当する。

接合作業の結果、12例29点の接合資料を得た。個々の接合数は少なく2～4点にとどまるが原石の大きさを推定しうるものもある。以下では、接合資料を中心として記述をすることにする。接合資料2037～2043はⅠ群、接合資料2044はⅡ群、2045はⅢ群、接合資料2046～2048はⅣ群の接合例である。

接合資料2037　剥片3点の接合例である。3個の剥片の剥離順序は①→②→③となる。①が剥離された後、その剥離面を打面として②が剥離され、ついで③が剥離されている。①は全73点中で最も大きな剥片であり、原石は径20cm以上の円礫と推定される。他の資料にこれに準ずるような大きさを示すものがないことから、打面準備のために剥離された資料であるかもしれない。①は1枚の大剥離面を打面として剥離されており、①の背面の剥離痕をみても、剥片剥離の初期の工程では①同様の大型剥片が剥離されたことがうかがえる。①と②③の間にはかなりの欠落部分があり工程の復元は困難であるが、②の段階では石核はかなり小型化していることがわかる。

接合資料2038　剥片4点の接合例である。打面から左側縁を経て底面にかけて弧状に礫面を残すことから原石は径5cm程度の小円礫と推定される。各資料の剥離順序は①→②→③→④となる。①が剥離された状態が2038B、②が剥離された状態が2038Cの図である。①～③の剥片は礫面上の打点をほぼ真後ろに後退させながら剥離されており、打点の移動は少ない。各資料の剥離方向はいずれも一定方向を示すが、①の資料の背面には多方向からの剥離を示す剥離痕をとどめる。また、ポジティブ様の剥離面が認められることから、円礫の分割が行われた可能性がある。

接合資料2039　剥片3点の接合例である。打面から両側縁にかけて弧状に礫面を残すことから原石は径10cm程度の小円礫と推定される。剥片の剥離順序は①→②→③となる。いずれの剥片も礫面を打面としている。各資料の剥離方向は一定方向を示し、2038と同様に打点をほぼ真後ろに後退させながら礫の幅一杯に剥離されており、打点の移動は少ない。

接合資料2040　剥片2点の接合例である。打面から右側縁を経て底面にかけて弧状に礫面を残すことから原石は径5cm程度の小円礫と推定される。剥片の背面には多方向からの剥離を示す剥離痕をとどめる。

接合資料2041　比較的大型な剥片2点の接合資料であるが、1点は2つに割れているため資料数は3点である。①＋②は両側縁の平行する石刃様の剥片であるが、剥離の連続性は認められない。③の右側面に弧状に礫面を残すことから素材は径20cm以上の円礫状であることがうかがえる。剥片剥離の工程はやや複雑で、①＋②の剥離以前にはこれと同一方向(つまり図では上から)と直交方向(左から)の剥離が交互に行われたことがわかる。①＋②の剥離方向に対して、③はやや斜め方向の剥離方向を示し、その間に打面と作業面の入れ換えを伴うような打面転移が行われたと想定される。

接合資料2042　剥片3点の接合例である。剥片の剥離順序は①→②→③となる。①・②は礫面を打面とし、③は先行する剥離面を打面とする。①・②は打点を横にずらして同一方向から剥離

される。③は②の剥離以後に形成された剥離面を打面として、ほぼ90°に打面を転移して剥離されている。なお、①の背面はポジティブな面が認められ、剥片素材の石核か礫の分割が想定できる。

接合資料2043　大型剥片２点の接合例である。②の左側面に礫面を残すが、素材の大きさはわからない。２点とも同一の剥離面を打面として連続して剥離されたものである。背面には多方向からの剥離を示す剥離痕をとどめる。

接合資料2044　剥片(①)と石核(②)各１点の接合例である。２点とも背面は礫面で覆われている。このことから握り拳大の亜角礫が素材であると考えられる。石核に残された剥離面は少なく、剥離の工程は良く判らない。

接合資料2045　礫面を打面とする剥片２点の接合資料で、打面部のみならず、側面や背面にも礫面を大きく残す。やや縦長の剥片が剥離されている。

接合資料2046　礫面を打面とする剥片２点の接合資料で、背面の剥離痕も同一の方向を示す。寸づまりの剥片が剥離されている。

接合資料2047　剥片２点の接合資料であるが②が大きく欠損しており、剥離の状況はつかみにくい。

接合資料2048　打面を欠損する剥片２点の接合資料である。側面から底面にかけて弧状に礫面を残すことから、径10～15cmの円礫状の素材が想定される。

剥片　2050～2063・2068～2077・2079～2089は接合しなかった剥片である。これらは接合資料のものと大差ないが、以下のような特徴を列挙できる。打面は礫面・剥離面打面が認められるが、礫面を打面とするものは13点ある。打面部がしっかりと残置しているものが多く、玉津田中遺跡で一般的に見られるような打面のハジケや線状打面は少ない。ほとんどの剥片で、発達した打瘤が観察される。背面に多方向からの剥離痕をとどめるものが多い。さらに、背面の一部に礫面を残すものも多い。剥片の正面形状としては、やや縦長のものも含まれるが多くは方形に近い。大きさは様々である。

石核　2049・2064～2067・2078は石核で、すべて剥片を素材とする。2064～2067はⅠ群に属する。2064・2066・2067は断面形態が板状となる。2064は右面に大きな剥離面を残し、左面が作業面と思われる。打面は礫面打面である。2065・2066は素材剥片の背面に残る礫面を打面とし、腹面側を作業面とする。2066は作業面の上下方向からの剥離作業が観察される。2067はやや大型で、表裏両面に作業面が存在する。表側が最終作業面で、その打面には打撃痕が顕著である。2078はⅡ群の石核である。裏面が礫面であり、断面形態は板状となる。

3．縄文時代後期の石器

池ノ内17区や西ケ市６区の土坑から出土した石鏃と敲石の３点である。

石鏃（2112・2131）

2112は赤色チャート製、小型の凹基式で深い抉りを有する。尖端部を欠損するものの、つくりは精巧である。2131は未成品であろう。

敲石（2130）

半分に割れた円礫を用いたもので、一端を中心につぶれ状の剥離痕が認められる。表面は礫面のままで研磨は見られない。

4．弥生時代中期の石器

池ノ内１区の土坑や同10区の旧河道、同８区の遺物包含層から数点が出土したにすぎない。

石鏃（2106）

大型の円基式石鏃である。全面におよぶ二次加工によって断面は凸レンズ状をなし、ほぼ左右対象に仕上げられている。

太型蛤刃石斧（2109）

基部側を欠損し全体の形態は不明であるが、側縁が平行するか中央部がやや幅広くなると推定される。表面は風化によって荒れ、アバタ状の窪みに覆われて研磨痕は残らない。刃部は鋭利な状態を保つ。

磨石（2129）

上下両端を平坦に仕上げた円柱状の磨石で、体部は良く磨かれている。端部平坦面の中央にＶ字状の筋が削りこまれ、表裏面のほぼ中央は浅い窪みがある。

５．弥生時代後期の石器

黒岡１区の竪穴住居跡と溝から楔形石器、磨石、砥石が４点出土している。

楔形石器（2031・2108）

2031は剥離はあまり進行しておらず、素材剥片の背面と腹面を大きく残す。2108はやや大型で縦長の楔形石器であるが左側縁に剪断面を有することから本来はもう少し幅があったことがわかる。上下と左右からの２対の加撃が行われているが、左面は剪断面によって切られている。

磨石（2035）

表面側はほぼ全面が研磨されているが、裏面は中央部付近のみ研磨痕が認められている。上下両端の小範囲には敲打痕がある。

砥石（2036）

凝灰質砂岩製の砥石である。表面側は良く使い込まれ平滑な面となるが、裏面側の研磨痕は弱い。他の面は自然面であろう。

６．遊離遺物

古墳時代以降の旧河道や包含層など、時期が限定できない遺物のうち主だったものを最後にまとめておく。中には出土地区や形態から時期が推定できるものもある。

石鏃（2113～2117・2132）

平基式(2132)、凹基式(2113)、円基式(2114)、尖基式(2115・2116)、有茎式(2117)の各形態がみられる。2132は５角形を呈し、2113は抉りが深い。出土地区から縄文時代後期か弥生時代前期のものであろう。他は比較的大型であることから弥生時代中期としうる。

環状石斧（2148）

復元径約８cmの環状石斧としては小型の部類に属する。刃部の断面は二等辺三角形で径に対して、厚みがある。柄孔の径は３cm弱となろう。

石錐（2118・2119）

素材剥片は縦長(2118)、横長(2119)と異なるものの、折れ面によって細身となった剥片の長軸方向の一端に錐部を作りだしたものである。錐部に磨耗は認められない。

磨製石庖丁（2120・2121）

2120は凝灰質砂岩製で、長方形の平面形態をもち、刃部は両刃である。穿孔は回転穿孔による。研磨は刃部と背縁部が中心で体部にはほとんど及んでいない。2121は泥板岩製で本来は直線刃半月形態であったものが、使用によって刃部が内湾するに至ったものと思われる。内湾の程度は比較的大きいが、刃部は鋭い。

削器（2107・2124～2127）

2107は剥片の１側縁のみに細かな二次加工を施しなめらかな弧状の刃部としているが、あるいは使用痕かもしれない。その他の部分は素材剥片の形態をそのまま残し、礫面打面を有する剥片であることがわかる。2124は厚みのある鋸刃状の刃部を有する。2124～2127は平坦あるいは微細な二次加工によって弧状の刃部を有する。このうち2127はおおむね台形状の比較的大きな剥片を素材とする。その幅広い末端部に微細な二次加工を表裏面から重ね弧状の刃部としたものである。

砥石（2110・2111・2122・2123）

2110は小型の直方体状で両端を欠損するが４面が研磨されている。2111は大型のものは山形の平面形をしており、表裏面と両側面および下面の５面が研磨され、それぞれの面が接するところは明確な稜線を成す。上端部から両側縁にかけては敲打によって平面、断面ともに丸みをもつように整形されており、厚みがある。2122は自然礫を用いたもので表裏の平坦面に軽い磨きが認められる。2123は直方体形に整形された砥石で上端部は敲打によって平坦に整形されている。４面ともに使用されているが、裏面の使用程度は低く敲打の整形痕があばた状に残る。2110・2111・2123は古墳時代中期の旧河道(SR72001)と溝(SD72007)から出土したものであるが、弥生時代の混入品の可能性もある。

磨石（2128）

上下両端に平坦面をもつ円柱状の磨石で、体部は良く磨かれている。

7．小結

亀ノ郷・黒岡地区を中心に弥生時代前期のまとまった資料を得ることができた。石器組成の中心には狩猟具としての小型の凹基式石鏃があり、大型化の兆候はまったくみられないと言ってよいだろう。農具(磨製石庖丁・打製石庖丁)や木工具(柱状片刃石斧・扁平片刃石斧)はいまだ少ないが、磨製石斧類よりは石庖丁のほうが安定している。また、石器の形態も中期に普遍化するものとは異なる点がみうけられる。これらの資料は弥生時代前期中葉を中心とする時期の播磨地域の一つの標準的な姿であろう。

サヌカイト製石器の製作技術の上では、二上山産サヌカイトが主流となる地域のような塊状の石核は、ここでは存在しない。楔形石器の一部を石核と考えなければ石核自体が存在しない状況は、その後の中期の様相と変わりがない。金山産サヌカイトと密接に結びついた石器製作技術であろう。ところがSK22045から一括して出土したサヌカイト製剥片の剥離技術は、これとは全くことなるものである。集積された剥片の大きさは、石鏃や石錐を作るには大きすぎ、尖頭器や打製石庖丁には小さいし、素材の形状も不向きである。これらは、現状では、玉津田中遺跡にみられる弥生時代前期の石器製作技術とは乖離しており、近接する遺構の時期からみて縄文時代後期に位置づけるほうが妥当と思われる。

第3章　木　　器

1．農　　具

鍬

a：直柄横鍬（図版158・159・347）

2001は、平面形が横長長方形のタイプの横鍬である。柄穴の周囲に舟形隆起が形成されている。2002は、身と柄が組み合わさった状態で検出された。刃はほぼ直線、背もほぼ直線であるが両端部の角を丸く収め、「エブリ」のような形を呈している。柄穴の周囲は、補強のためか、厚くなるように削り出されている。2003も横長の形の鍬である。全体的に薄く作られているため、鍬というより泥除けになるかも知れない。2007は柄を含めた全体形は不明である。身の部分だけ見ると「エブリ」のような形になる。2008・2009は破片のみの出土であるが、同じく横鍬の一部と考えられる。

b：曲柄又鍬（図版160・348）

従来「なすび形」と呼ばれる農具で、刃部が二股に分かれるタイプである。「なすび」の「笠」が発達しているものと、ほとんど認められないものとがある。2014・2016・2017が笠部の大きなタイプ、2018が笠部が形成されないタイプである。2015は笠部の形態が不明のものである。笠部の発達したタイプのうち2017は刃部が幅広なタイプで、他のものと較べて異様である。また笠部の認められない2018は刃部の先端が尖らされておらず、刃が形成されていない。

c：曲柄平鍬（図版161・348）

同じく「なすび形」と呼ばれる農具であるが、刃部が二股に分かれないタイプである。こちらも曲柄又鍬と同様、笠部が大きく発達したタイプと、ほとんど認められないタイプとがある。2019は笠部の発達したタイプの関係品である。2024は同様に笠部の発達したタイプと考えられる。先端を加工し、鉄製の刃先を装着可能にした痕跡が認められる。これに対し、2022と2025は、笠部が発達しないタイプである。

泥除け（図版157・346）

2004はほぼ完形で、刃の両端が丸味を帯びている。柄穴の横に、柄と泥除けを縛り付ける樹皮製の紐が残っている。2005は台形を呈する泥除である。柄穴から刃にかけての部分が欠落しており、全体のプロポーションは不明である。2006は舟形隆起のあるタイプである。隆起を持つ泥除けは、宮城県中在家南遺跡に出土例が見られる（工藤・荒井　1990年）。他の遺物と比較して厚さが非常に薄く仕上げられている。

鋤（図版159・348）

2010は鋤である。平鍬に多く見られるような、柄を固定するための舟形突起が発達している。ただし本体に柄を差し込む角度が鍬とは異なっている。すなわち鍬が柄と本体が鋭角になるように固定されるのに対して、2010はそれらが鈍角になるように固定されることが、本体の柄穴の角度から判断される。

その他の鋤・鍬類（図版159）

2011～2013は農具のなかでも掘削具と考えられるが、完形に復元するのは難しい。特に2012は杓子形を呈しており、棒状の柄に装着して用いたと考えられる。

田下駄(大足)（図版162・349）

2026は、枠型田下駄(大足)の足板の部分と考えられる。裏面の両側辺にそれぞれ3箇所ずつの凹みが残っており、その部分に紐をかけ、足を縛り付けて使用したものと考えられる。

2027：加工部材。中途で折れているため全長は不明である。断面形は長方形で、端部は細く削られている。組み合わせ式田下駄の部品(桟)と考えられる。

2028：加工部材。2027よりも薄い板材であるが、これも組み合わせ式田下駄の部品(桟)になる可能性がある。

穂摘具（図版162・348）

a：木製穂摘具

石包丁と同じ形の穂摘具を木を素材にして作ったものである。

2029は完形品である。刃部はやや湾曲している。穿孔は2箇所で、中央よりやや背側にあけられている。2030は刃部が直線的なタイプである。穿孔は2箇所と考えられ、中央より刃部よりにあけられている。穿孔のある部分には、刃に平行になる方向に溝が切られている。いずれも木取りは、木目が刃に対して垂直よりやや斜めになるように取られている。

b：手鎌の把手

2031は用途が不明な木器である。横長の長方形の板材の2箇所に穴があけられている。同様の形態の木器が福岡市所在の那珂君休遺跡の第3号井堰から出土し、『手鎌』と報告されている(小畑　1989年)。那珂君休例は鉄製の刃先を装着した痕跡や刃端部の圧痕が残っていると報告されるが、2031はこのような痕跡は観察されていないものの、那珂君休例との形態面での類似性から手鎌と判断した。

田舟・矢板（図版163・349）

2032は、2m強の丸太をくり抜いてつくられたもので、田舟と考えられる。2033・2034はいずれも穿孔された矢板である。いずれも3cm弱×5cm強の長方形の穴が穿たれているが、前者は根元の部分、後者は先端に近い部分に穿孔されている。

竪杵（図版164・350）

完形で出土したものはなく、いずれも、中央部の細い部分から先端にかけてのほぼ半分の部分しか残っていない。

竪杵の先端部の形態は、平らなものと、比較的丸くなったものの2種類がある。2035は先端部が平らに近い形のもの、2036・2037・2038は先端部がやや丸いものである。さらに2038は木取りが他の竪杵とは異なっている。すなわち、他の遺物が芯持材を用いているため、遺物の断面に見える木目が同心円を描くのに対し、2038は木取りが柾目取りであるため、遺物断面に見える木目が何本もの平行線に見えるのである。

臼（図版164・350）

2039は、体部(身)と脚部の境目がくびれているタイプ、2040は、くびれがあまり無くいわゆる寸胴形のものである。

木錘（図版165・351）

木錘は、次の５種類に分類される。

ａ．他の木錘と較べて、全長が長く、径の細いタイプ。(2041・2042)

ｂ．くびれ部の径がやや太い、いわゆる寸胴形を呈しているタイプ。(2043・2044)

ｃ．くびれ部の径が細くくびれており、華奢な外見を呈するタイプ。(2045・2048)

ｄ．両端部が平らに仕上げられているため、側面から見ると四角く角張って見えるタイプ。くびれ部はやや細く仕上げられている。(2046・2047)

ｅ．形態的に、他のタイプとはかけ離れた形態を呈するもので、実際に木錘として使われたかどうかはわからない(2049)。全長７cm、幅４cmの木の一辺の中央部を抉り取り、紐などを懸けられるようにしたもの。形態的な特徴から、木錘として使用することも可能と判断した。

横槌（図版165）

直径６cm、全長60cmの棒状品の根元の部分を、手で握り易くするように、細く削り出して作ったものである。いずれも芯持材を利用している。(2050・2051・2052)

２．有頭棒状木製品（図版166・351）

直径４cm前後の細い棒状品の先端を削って加工し、「頭部」を形成しているものを一括してまとめた(2053～2062)。全長20cm以上の細長い棒状品が多い。その中で2056は「頭部」の下部を手斧の類で抉り取り、他の部材と結合できるように細工されている。また2060・2061はいずれも全長20cm以下の小型品である。特に2061は頭部の下方の棒状の部分が、断面形が四角くなるよう丁寧に整形されている点が特徴的である。「栓」などとして使用されたのであろうか。

３．工具ほか（図版167・351）

鉤形木製品　2063は鉤型の木製品である。端部の幅が広く、基部の幅が狭い板状の柄に、直径６cm強の円形の鉤状の部分が付くものである。柄下端の最も幅広の部分には、直径２cmの穴があけられている。用途などは一切不明である。

鎌の柄　2064は鎌の柄である。断面円形の棒状品であるが、端部に近い部分は断面四角形を呈している。また端部には山形の突起が作られている。この山形突起は通常握りの部分につくられ、滑り止めとして機能するものである。ところがこの遺物の場合、山形突起にごく近接する部分に、刃を装着するのに適した穿孔があり、このことから、この山形突起は刃装着側につくられ、鎌を振り下ろす際の反動を付けるために設けられているものと考えた。ところが刃装着用と考えられる穿孔の付近に、装着した刃を固定するための留め釘が無く、実際柄を付けて使用できない可能性もある。そうした場合、この山形突起は、やはり柄を握った際の滑り止めとして機能するものであろう。

へら形木製品　2065は厚さ１cm弱の板材を削り出して作られている。幅約2.5cm、長さ約10cmの柄の先に、幅約８cm、長さ約６cmの台形の「へら先」が付く。用途は不明である。

2066・2067はいずれも幅広の先端部と、突起のある幅が狭い基部からなる。いずれも鍬などの農具の一部分かとも考えられる。

斧柄　2068は全長約28cmの小型品で、手斧の柄と考えられる。刃を装着する部分はまだ加工さ

れておらず、未製品である。

4．組み合わせ木器（図版168～170・353・354）

図版170のような、梯子状に組み合わされた木器である。２本一組の縦方向の枠木と、現状では三箇所であるが、おそらく四箇所になるであろう横方向の桟木からなる。

縦方向の枠木とは、図版169の2076・2071である。幅12cmの板材で、途中で欠損しているものの全長およそ140cm程になると推定される。この縦方向の枠木に、一辺５cm程の四角い穴が40cmおきにあけられており、この穴に横方向の桟木が差し込まれる。

桟木の個別の図は、図版169に掲げている。2075のような中央に四角いほぞ穴を持つタイプと2079のように全体的に幅広のものとがある。図版170の図中の３組の桟木は、いずれも１箇所の桟木が２本一組で構成されている。このうちいちばん上の桟木は、後の幅広のタイプを２本上下に重ねている。中央の桟木は前者のほぞ穴を持つものをそれぞれ背を向けて重ねており、下段の桟木は後者の幅広タイプの桟木の上に前者のほぞ穴タイプの桟木を重ねている。

また、上段の桟木では、二つ重ねられた幅広タイプの桟木の間には、樹皮状の植物質が一面に密に挟み込まれていた。（図版353）

京都府中郡峰山町に所在する古殿遺跡から出土した梯子状組合せ木製品がこれに類似している。（鍋田ほか　1988年）

5．建築部材（図版168・171・172・355）

扉（2074）

全長約125cm、全幅約40cm、厚さ約10cm以上の大きさのモミ材から削り出して作ったものである。扉本体の厚さは約３cmで、高さ７cmの把手が取り付いている。把手は「かんぬき」を通して使用されるためか、やや大型なものが作られている。把手のある側から見て右側に、扉が回転する軸の部分が形作られている。把手は扉の中心からやや右側に作られている。また把手の下部には、長さ７cm、幅２cmの隅円長方形の穴が二つ並列して開けられている。（写真図版355）

不明建築材　2081は全長1.50m以上の大型の部材である。縦横２方向から四角いほぞ穴を穿孔している。どちらの面もほぞ穴は約30cm間隔であけられている。また材の端部はやや薄く仕上げられている。2082もおなじく全長1.50m以上の大型部材である。断面長方形の部材を、樋のような形になるよう溝を掘り込み、この溝底には四角い穴を３箇所以上あけている。

階段・梯子（図版171・172）

本稿のなかで、階段状木製品は、１枚の板を削り出して成形したもので、その製品を他の部品と組み合わせることなく単独で使用するものとする。また梯子状木製品とは、棒状木製品に段が付くように加工した、「枠」の部分と、板材または短い棒状品を加工して作った「踏み板」の部分からなる、組み合わせ式のものをさす。

a：階段（図版171・172）

2083は全長1.87m、上端幅８cm、下端幅15cmで先端に近づくほど幅が狭くなっていく。階段１段毎の高さは30cmである。さらに、最上段よりさらに上の部分と、最下段のすぐ上の部分に四角形の穿孔があり、他の部材との結合・固定部分と考えられる。2084は芯持材

を加工して利用している。上下両端部が欠落していて、中途の２段分が残っている。段と段の間の距離は約35cm以上である。

b：梯子（図版172）

2085は直径約５cmの丸太を加工して作った梯子の枠部分である。15cmごとに刻みを入れ、梯子の踏み板をのせるための段を設けている。

6．容器類（図版172・173・74）

刳物（図版16）

2086は直径15cm、長さ60cmの芯持材を削り、加工したもの。材の中心付近で、材がやや細くなるように削り込まれている。そのやや細いほうの部分に幅８cm、深さ４cmの溝が、やや広いほうの部分に幅10cm、深さ８～９cmの溝の穴が刳り抜かれており、形態的には容器状の形を呈している。用途的には、容器として実際に使用されたかどうかは疑わしい。

槽・盤（図版173・174）

2087・2088は方形の大型の槽である。2088は、槽の短側辺に把手がついている。この把手の根元付近には、２箇所穿孔がみられる。穿孔は槽の底中央部に２箇所並列してみられる。ひび割れの補修の痕であろうか。2089は楕円形の槽である。縦に二つに割れたうちの半身である。長径62cm以上、器高７cm、深さ５cmである。幅は残存部分が約15cmであることから、約30cm前後と考えられる。2090は全長約36cmと、先述の三者とくらべてかなり小型である。平面形は、やや胴の張った長方形を呈している。2091は円形の盤であるが、相対する２箇所に把手状の突起がついてるようである。盤の裏面には脚が４箇所についている。脚の配置は、把手のある部分についてはやや外側寄りについている。2092は長方形の槽の一部と考えられる。

曲物（図版174）

2093は円形の曲物である。底板と、側板の一部(約四分の一)が残っている。また底板の上で、側板がかつて付いていた部分には、側板の圧痕が残っている。側板は底板と７箇所で、桜の樹皮を使って縛り付けられている。

7．家具類（図版175・176・358・359）

机（図版175）

2094・2095の２点出土している。いずれも長方形の天板である。両端付近に板状の脚を差し込むための浅い溝が彫り込まれている。

椅子(腰掛け)の上板（図版175・176）

2096は椅子(腰掛け)の上板で、ちょうど腰を下ろす部分の板材である。平面形は隅円の長方形を呈している。図の右端部分が若干欠落している。両端部付近に脚を差し込むための４cm×９cmの長方形の穴が開けられている。

椅子(腰掛け)の脚部（図版175・176）

形態は、平面的な脚部の上辺中央部に、上板のほぞ穴に差し込むほぞが削り出されている。ものによっては補強材の役目を果たす横桟をわたすためのほぞ穴が開けられているものもある。2097は両肩が丸みを帯びた長方形の板材で、上方にやや幅広のほぞが付くものである。ほぞ穴は２段に彫られており、１段目は幅10cm強と一般的なほぞ穴よりやや広く、

二段目(裏まで貫通する部分)は幅５cm弱である。このほぞ穴に合う横桟(補強材)は最大幅が約10cmと、かなり幅広のものになる。しかし、ほぞ穴の位置から、横桟が上板の真下に接する位置に付くこと。および脚の両肩が丸みを帯びているため、脚上端のほぞに通した天板は、他の補強なしではぐらついてしまうであろうこと。などを考えると、この椅脚の横桟は、単に補強材の役目のみならず、天板が前後に揺れないよう支持する役目を果たすものであろう。

2098は側辺がやや湾曲した台形状の脚である。上端部のほぞは折れて欠落している。中央部やや下よりに不整形のほぞ穴が開けられ、中に横桟の残片が残されている。

2099は鉞(まさかり)の上に横長の長方形が付いたような平面形を呈している。これも上端部のほぞは欠落している。2103もこれと同じタイプのものである。

2100は上辺がやや狭い縦長の台形を呈している。2101は縦長の台形の上に、小型で横長の台形が乗りかかったような平面形を呈している。上辺には半円形に近いほぞが付き、これを天板のほぞ穴に差し込むのであろう。横桟は幅５cmとやや幅広で、2097と同じく、上板の真下に接するように付けられる。

2102は二つの台形がそれぞれの短辺を接してできたような平面形である。ほぞ穴は開けられていない。2104もこれと似たタイプの椅脚である。

8．たたり（図版177・360）

Ｙ字形の軸木(2105)と、平面形が長方形の台座(2106)から成る組み合わせ木器で、いずれもＫＭ７区の水路SD72007から出土している。台座の中央部に長方形の穿孔がある。この穴が、軸木を差し込むにちょうど良いサイズであることから、台座の穴にＹ形の軸木を差し込んで使用したものと考えられる。この組み合わせ木器の用途としては「たたり」が考えられる。「たたり」とは紡績関係の道具で、紡ぎ終わった糸をかけておく道具である。

2107も同様の台座である。上記の台座(2106)と類似しているが、台座の中央部にあたる穴が貫通していないことから、未製品と考えられる。

9．剣形木製品・刀形木製品（図版178・361）

剣・刀形であるという判断がしやすいものを図版22の左上の部分におき、容易に判断し難いものを同じ図版の左下の部分に配置した。

2108は、剣の切っ先付近の破片である。表面の中央に鎬があり、鎬から刃の方にかけて薄くなっていく。裏面には鎬はなく、平坦もしくはやや抉れている。樹種はクリである。2109は切っ先が欠落した剣形である。剣身から茎にかけての破片である。仕上げは粗く、表面のみ中央部に鎬は認められるが、裏面は平面的である。剣身両側は薄く仕上げられておらず、刃がはっきりとは作り出されていない。樹種はモミである。2110は刀形である。丁寧に仕上げられており、外形的には切っ先から物打ちにかけて緩やかなカーブを描いている。厚さは均一で、棟と刃がはっきりと作り出されている。茎の部分は欠落しており、茎やまちの形態は不明である。2111も刀形であろうか。茎および刀身の基部にあたる部分である。

10．琴（図版178・361）

2120は、琴と考えられる。現状では縦に真二つに割れている他、琴頭付近も欠落してい

る。残存長は41.8cm、残存幅は6.7cmである。琴尾の突起は現状で2個残っている。琴尾のやや下方に穴が1個あけられている。共鳴槽を下部に取り付けるための細い樹皮を通す穴と考えられる。2121も槽作りの琴である。これも縦方向に真二つに割れている他、琴頭の部分も欠落している。残存幅11.8cm、残存長85.7cmである。琴尾の突起は現状で3本残っている。共鳴槽を固定するためのものと考えられる穴が琴尾付近に3箇所あけられている。これらの穴の周辺には細い樹皮が残されている。

11. 置台？（図版179・352）

2128は幅の狭い台形の板材である。短側辺は斜め方向に切り落とされている。台形の下辺にあたる部分は大きく円弧状にえぐられ、上辺にあたる部分は小さい長方形のえぐりが見られる。板材の両端付近に穿孔が5箇所、上下2段(上2箇所、下3箇所)に配置されている。この穴に、他の材と固定するための樹皮がのこされている。

この材の用途については、同様の材を4枚、短側辺の斜めにカットした部分同志を接合して四角形を作り、置台として利用したことが考えられる。このような材を組み合わせて箱をつくると、その形は、平面が正方形でも側面形が台形である。四方の側板が内側に傾斜するいわゆる「四方転びの箱」と同様の手法で作られたのであろう。(上原　1993年)

12. 竪櫛（図版179・352）

2135が一点、KM7区の古墳時代の水路SD72002から出土している。歯は欠落し、頭部のみ残っている。

13. 加工板（比較的小形のもの、図版179・352）

2122から2126はいずれも非常に小型の板材を加工したものである。2122・2125は板材を単に整形しただけのものである。2123は台形に整形した後、両端部にそれぞれ一箇所ずつ穿孔され、その他の部分は細い溝が何本も平行に彫られている。2124は蝶のような形の板の中央部に二箇所穴をあけている。2126は、四角形の一角が突出したような形である。突出した部分とちょうど対角線上の位置にある角付近に穴をあけている。

2127は厚さ約3cmの厚めの板材を使っている。一辺約4cmの四角形の頭部とその下に続く体部からなる。頭部直下の部分は、角を削って「首」状の部分を作り出している。

2131は直径約13cm、厚さ約4.5cmの分厚い円盤である。中央部が最も厚く、円周部分近づくほど薄くなっている。表面には手斧で削られた痕がみられる。円盤を四つの区画に分け、それぞれの区画を中央から外側に向けて削りだして整形している。

2132は用途不明の板材である。小さい頭部と短い脚部、およびそれにはさまれた幅広の体部から成る。体部の背面には浅い溝が彫り込まれているほか、おなじく体部表面下端部の中央には、三角形の切り込みがある。

2133は舟の形をした用途不明品である。「船首」は尖っているが「船尾」は丸くおさめられている。また船首と船尾の両端部が一段低くなっているため、小型ながらあたかも準構造船を思わせる形態になっている。

2134は用途不明の板材である。両端に較べて中央部がやや幅広になっている。また中央部は薄く削りとられている。

2129・2130も用途不明の板材である。大きさは異なるが、いずれも先端部付近を斜め方

向から切り込んだ跡が残されている。

14. 池ノ内９区SR62002井堰出土一括遺物（図版180・181）

池ノ内９区のSR62002井堰を構成する木器群である。一括性が高い良好な資料であるため、この遺構の資料をまとめてみた。

2136は加工材である。

2137は建築部材である。先端部付近を斜めに切り込んでおり、他の部材と結合させる部分であると考えられる。2138も同様の建築部材である。ただしこの遺物は直径が太い上、下端部が尖っている。杭として利用され、上端部付近が結合部として、他の部材を固定するのに使われたのであろう。

2139は、長さがある上、先端と中央部の２箇所に、他の部材を固定できる結合部があることから建築部材と考えられる。2140も同様の建築部材であろう。

2141は用途不明の棒状品である。先端が削り残されており、頭部状の形を成している。

2142は端部付近に穿孔のある加工板である。用途は不明である。

2143は加工材である。木のやや曲がった部分を使用している。基部に他の小型の部材を装着するためか、四角い穴があけられている。この穴は裏面まで貫通してはいない。

2144は椅子の脚部である。台形で板状の製品である。下の辺の中央部は、姫路市長越遺跡で同様の製品が出土している。（松下ほか　1978年）

15. 加工材（小片）（図版182・361）

図版182は、幅４cm以下の幅狭の板状品を集めたものである。単なる板材から鎬のあるものまで多岐にわたっている。

2146は先端部がやや尖っているものの、板の厚さが均一で、先端のやや尖った部分も分厚いことから、剣形品には分類しなかった。板材の両側は角をとるように斜めに落とされ、鈍い稜線がついている。2147にも同様の稜線がみられる。これら2146と2147は、樹種が同一である（モミ）ことから、直接接合はしないが、同一個体であると考えられる。

2152は、先端部が丸くおさめられ、頭のような部位を形成している点が特徴的である。

16. 加工材（図版184）

図版184は、用途不明の加工材のうち、比較的小型の棒状品などを集めている。

2174：平面形は長方形、断面形は薄い半円形で、細長いカマボコ形を呈している。両端近くに長方形のほぞ穴がそれぞれあけられている。穴は横長の長方形で、長辺３cm、短辺2.5cmである。

2175：これも同じようなカマボコ形である。長方形のほぞ穴を15個あけている。両端の穴と、両端から三つ目の穴は長方形の一角が飛び出したような形の穴になっている。

2176：断面長方形の棒状の材である。長方形のほぞ穴を多くあけており、現状で９個穿孔がみられる。

2177：幅がおよそ1.5cmの薄い台形の板材である。中央で折れ、半分だけ残っている。中央部に長円形の穴があけられている。

2180：断面形が隅円長方形の棒状の材である。四角形の穴があけられており、現状で３

個あけられている。

17. 加工材（図版185）

図版185は比較的小型の板材を集めた。

2183：全長27.2cm、全幅7.2cmの長方形の板材である。両端の中央部にそれぞれ1箇所ずつ、他に3箇所の、計5箇所の四角形の穿孔がある。

2184：全幅およそ14.5cmの板材である。途中で折れているため全長は不明である。端部に出っ張りがあり、その出っ張りの付け根の部分に、長方形の穿孔が1箇所ある。

2186：全幅が約18cmの板材である。これもおなじく全長は不明である。端部から約20cm内側に入った所に長さ4cm内、幅2cm内の穿孔がある。

？2187：全幅約24cm、全長約42cmの板材である。下端中央部付近に幅8cm、長さ14cmの穿孔がある。

18. 加工材（比較的大型の板材）（図版186～191）

図版186～191は加工痕のある材のなかでも比較的大型のものである。全体の形がよく残っているものと、そうでないものがある。

2196はほぼ完形の材である。両端が薄く、中央の穿孔のある部分周辺がやや厚くなっている。全長が約60cmある。

2202：直径約3cmの枝を利用した棒状品である。先端付近は両側から切り込みをいれ、「有頭棒」状の頭部を形成している。

2213は断面形が三角形で、年輪が縦に走っていることから、農具などの材料となるみかん割り材と考えられる。ちなみに三角形の短辺の部分には一部樹皮が残っている。樹種はアカガシ亜属である。

【参考文献】

工藤哲司・荒井　格　1990年「仙台市中在家南遺跡出土の木製品」『月刊考古学ジャーナル』No.323

小畑弘己　1989年『那珂君休遺跡（福岡市埋蔵文化財調査報告第208集）』福岡市教育委員会

鍋田　勇ほか　1988年『京都府遺跡調査報告書 第9冊 古殿遺跡』京都府埋蔵文化財調査研究センター

上原真人　1993年「四方転びの箱－古代技術史の変革（予察）－」『平安京歴史研究（杉山信三先生米寿記念論集）』

松下勝ほか　1978年『長越遺跡（兵庫県埋蔵文化財調査報告　第12集）』兵庫県教育委員会

第4章　その　他

第1節　土製品ほか

紡錘車　3446～3449は紡錘車である。（図版192・363）

3446は薄い円盤状で、もろい石製である。弥生時代前期の土坑SK22020（黒岡1区）から出土している。直径5.2cm、厚さ0.7cmである。

3447は3446に比べ厚みのある形状で、土製である。弥生時代前期の土坑SK22013（黒岡2区）から出土している。直径5.0cm、厚さ1.3cmである。

3448は土器片を利用したもので、古墳時代前期の旧河道SR62002(池ノ内10区)から出土しているが、弥生時代中期のものであろう。直径4.2cm、厚さ0.6cmである。

3449は断面が算盤玉状になるタイプの土製品である。古墳時代中期の水路SD72001(亀ノ郷7区)から出土している。直径5.4cm、厚さ2.5cmである。中央の穴は上下面に対して垂直ではなく、斜めに穿たれている。

土製品　3451・3452はいずれも古墳時代中期の水路SD72001(亀ノ郷7区)から出土した土製品である。(図版192・363)

3451は傘状の形をしており、鏡を模したものか。全体に指頭圧痕がみられる。復元される直径は11.8cm、高さは3.2cmである。

3452は厚さ4㎜の薄い板状をしており、両面に籾痕や植物繊維の圧痕がみられる。

3460は棒状の粘土塊を折り曲げ、そのまま焼いたような形状をしており、写真のみ掲載している。(図版363)

羽口　3453～3458はふいごの羽口である。(巻首図版7・図版192)

3453・3454は池ノ内1区SR72001、3455は西ケ市6区SD72001、3456は西ケ市7区のSD72007、3457・3458はKM7区のSD72007から出土している。図面でアミをかけている部分は変色していた部分である。

3453・3454は先端がすぼまって細くなるタイプで、3456は先端に向かってすぼまらないタイプである。

第2節　玉　　類

亀ノ郷7区の水路SD72001を中心に滑石製の玉・石製模造品が出土している。(巻首図版7・図版156)

有孔長方板　有孔長方板(2131)は隅丸長方形を呈し、法量は29.5㎜×13.5㎜、厚さ3㎜を測る。短辺の片側に径3.5㎜の穿孔がある。短冊形鉄斧を模したものと推測する。滑石製。色調は暗灰色。亀ノ郷7区の水路SD72001出土。

勾玉　2132・2133の長さはそれぞれ14㎜と13㎜である。断面形態はどちらも楕円形を呈し、最大値3㎜×4.8㎜を測る。整形はやや粗い。滑石製。色調は暗灰色。亀ノ郷7区の水路SD72001出土。

臼玉　勾玉(2134～2247)の法量は径4～5㎜、高さ3㎜前後のものが多い。径最大値は5.8㎜、径最小値は2.5㎜である。形態の特徴は、端面まで丁寧に整形し、側面中央に稜を有する算盤玉状のもの、稜がなく側面が丸味を持ち太鼓胴のものが大半である。滑石製で色調は暗灰色である。2246・2247のみ西ケ市7区出土で、他は亀ノ郷7区の水路SD72001出土である。

第3節　金　属　器

鉄斧　3450の鉄斧は亀ノ郷8区の水路SD72001より出土している。(図版192・363)

柄を差し込むための袋部をもつ有袋鉄斧で、肩部の張り出しの無肩鉄斧である。全体の長さは12.75cm。刃部の幅は3.6cm。袋部の長径は3.5cm、短径は2.8cmで、古墳の副葬品な

どでも比較的よくみられるタイプである。袋部には木質の残存はみとめられず、この鉄斧が出土した水路では木器が多数出土している状況から考えて、柄からはずした状態で水中に投棄されたものと思われる。

第Ⅴ部　自然科学的方法による調査

石　器　一　覧　表

報告番号		器　種	地　区	出土遺構・層	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	石　材	年　代
2001		石鏃	D3-2G区	SH22004	12.0	12.0	2.0	0.3	サヌカイト	弥生時代前期
2002		石鏃	D3-2G区	SK22025	13.5	13.0	2.0	0.3	サヌカイト	弥生時代前期
2003		石鏃	D3-2G区	SK22030	16.0	13.0	2.5	0.4	サヌカイト	弥生時代前期
2004		石鏃	D3-2G区	SH22004	13.0	12.0	2.0	0.4	サヌカイト	弥生時代前期
2005		石鏃	D3-2G区	SH22004	17.5	14.0	4.0	0.8	サヌカイト	弥生時代前期
2006		石鏃	D3-2G区	SH22004	18.5	13.5	3.0	0.8	サヌカイト	弥生時代前期
2007		石鏃	下町2区	SD22010	20.0	14.0	3.5	1.0	サヌカイト	弥生時代前期
2008		石鏃	亀ノ郷1区	SH22005	25.0	17.5	4.0	1.8	サヌカイト	弥生時代前期
2009		石鏃	D3-2G区	SH22004	24.5	17.0	3.0	1.1	サヌカイト	弥生時代前期
2010		石鏃	D3-2G区	SH22004	(9.5)	13.0	2.0	0.3	サヌカイト	弥生時代前期
2011		石鏃	D3-2G区	SH22004	(13.0)	13.0	4.0	0.6	サヌカイト	弥生時代前期
2012		石鏃	D3-2G区	SH22004	(14.0)	(10.0)	4.0	0.7	サヌカイト	弥生時代前期
2013		石鏃	D3-2G区	SH22004	(14.0)	(8.5)	2.5	0.3	サヌカイト	弥生時代前期
2014		石鏃	D3-2G区	SH22004	(17.5)	(14.0)	2.5	0.6	サヌカイト	弥生時代前期
2015		石鏃	D3-2G区	SH22004	(18.0)	(12.5)	3.0	0.5	サヌカイト	弥生時代前期
2016		石鏃	D3-2G区	SH22004	(17.5)	(13.5)	2.0	0.6	サヌカイト	弥生時代前期
2017		石鏃	D3-2G区	SH22004	(23.0)	(10.0)	5.0	0.8	サヌカイト	弥生時代前期
2018		石鏃	下町2区	SK22048	(25.0)	(15.0)	3.5	1.1	サヌカイト	弥生時代前期
2019		石鏃	D3-2G区	SH22004	21.0	9.0	3.0	0.7	サヌカイト	弥生時代前期
2020		石錐	D3-2G区	SH22004	27.0	11.0	3.0	2.2	サヌカイト	弥生時代前期
2021		石錐	下町2区	SK22047	34.0	10.0	4.0	1.5	サヌカイト	弥生時代前期
2022		石錐	黒岡1区	SK22018	25.5	7.0	2.5	0.8	サヌカイト	弥生時代前期
2023		石錐	D3-2G区	SH22004	(13.0)	9.0	2.5	0.4	サヌカイト	弥生時代前期
2024		石錐	D3-2G区	SH22004	16.5	7.0	3.0	0.5	サヌカイト	弥生時代前期
2025		磨製石庖丁	D3-2G区	SH22004	(73.0)	36.0	6.0	25.5	緑色片岩	弥生時代前期
2026		打製石庖丁	黒岡2区	ST22003	49.0	104.0	9.0	42.9	サヌカイト	弥生時代前期
2027		柱状両刃石斧	亀ノ郷1区	SH22006	156.0	(45.0)	36.0	376.0	緑色片岩	弥生時代前期
2028		楔形石器	黒岡2区	SK22008	23.0	9.0	4.0	1.0	サヌカイト	弥生時代前期
2029		楔形石器	黒岡2区	ST22003	29.0	25.0	6.0	5.3	サヌカイト	弥生時代前期
2030		楔形石器	黒岡2区	SK22001付近	24.0	18.0	5.0	2.4	サヌカイト	弥生時代前期
2031		楔形石器	黒岡1区	SH52003	60.0	30.0	7.0	13.7	サヌカイト	弥生時代後期
2032		楔形石器	黒岡2区	SK22049	69.0	37.0	0.9	21.2	サヌカイト	弥生時代前期
2033		楔形石器	黒岡2区	SK22001	43.0	52.0	6.5	17.7	サヌカイト	弥生時代前期
2034		磨石	黒岡1区	SK22020	(82.5)	77.0	39.0	386.0	安山岩？	弥生時代前期
2035		磨石	黒岡1区	SH52003	148.0	93.0	62.0	1310.0	閃緑岩	弥生時代後期
2036		砥石	黒岡1区	SH52001	171.0	120.0	48.0	1520.0	凝灰質砂岩	弥生時代後期
2037	①	剥片	池ノ内14区	SK22045	123.0	66.0	29.5	239.5	サヌカイト	縄文時代後期？
2037	②	剥片	池ノ内14区	SK22045	53.0	76.0	21.0	55.0	サヌカイト	縄文時代後期？
2037	③	剥片	池ノ内14区	SK22045	38.0	59.0	15.0	25.5	サヌカイト	縄文時代後期？
2038	①	剥片	池ノ内14区	SK22045	38.5	36.0	6.5	7.7	サヌカイト	縄文時代後期？
2038	②	剥片	池ノ内14区	SK22045	33.0	38.0	7.0	7.2	サヌカイト	縄文時代後期？
2038	③	剥片	池ノ内14区	SK22045	33.5	28.5	5.0	5.3	サヌカイト	縄文時代後期？

報告番号		器種	地区	出土遺構・層	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	石材	年代
2038	④	剥片	池ノ内14区	SK22045	(11.0)	(13.0)	3.5	0.4	サヌカイト	縄文時代後期？
2039	①	剥片	池ノ内14区	SK22045	63.0	36.5	8.0	17.4	サヌカイト	縄文時代後期？
2039	②	剥片	池ノ内14区	SK22045	(45.0)	60.0	6.0	24.5	サヌカイト	縄文時代後期？
2039	③	剥片	池ノ内14区	SK22045	(28.0)	52.0	12.5	21.7	サヌカイト	縄文時代後期？
2040	①	剥片	池ノ内14区	SK22045	(56.0)	41.0	8.5	13.9	サヌカイト	縄文時代後期？
2040	②	剥片	池ノ内14区	SK22045	42.0	43.0	10.5	20.4	サヌカイト	縄文時代後期？
2041	①	剥片	池ノ内14区	SK22045	(66.5)	39.5	11.0	33.7	サヌカイト	縄文時代後期？
2041	②	剥片	池ノ内14区	SK22045	(46.5)	49.0	11.5	21.9	サヌカイト	縄文時代後期？
2041	③	剥片	池ノ内14区	SK22045	(100.0)	43.0	25.5	135.0	サヌカイト	縄文時代後期？
2042	①	剥片	池ノ内14区	SK22045	43.0	57.0	9.0	16.2	サヌカイト	縄文時代後期？
2042	②	剥片	池ノ内14区	SK22045	33.0	38.0	11.0	9.4	サヌカイト	縄文時代後期？
2042	③	剥片	池ノ内14区	SK22045	43.0	36.5	12.0	19.5	サヌカイト	縄文時代後期？
2043	①	剥片	池ノ内14区	SK22045	58.0	55.0	12.5	36.4	サヌカイト	縄文時代後期？
2043	②	剥片	池ノ内14区	SK22045	72.5	77.0	16.0	94.0	サヌカイト	縄文時代後期？
2044	①	剥片	池ノ内14区	SK22045	24.0	57.5	11.0	12.6	サヌカイト	縄文時代後期？
2044	②	石核	池ノ内14区	SK22045	43.0	41.5	16.0	24.7	サヌカイト	縄文時代後期？
2045	①	剥片	池ノ内14区	SK22045	69.0	51.0	14.0	44.3	サヌカイト	縄文時代後期？
2045	②	剥片	池ノ内14区	SK22045	64.0	38.5	15.5	30.8	サヌカイト	縄文時代後期？
2046	①	剥片	池ノ内14区	SK22045	38.0	51.0	7.5	13.1	サヌカイト	縄文時代後期？
2046	②	剥片	池ノ内14区	SK22045	36.0	36.0	4.5	6.3	サヌカイト	縄文時代後期？
2047	①	剥片	池ノ内14区	SK22045	49.0	43.0	12.0	21.2	サヌカイト	縄文時代後期？
2047	②	剥片	池ノ内14区	SK22045	(53.5)	(62.0)	16.0	46.9	サヌカイト	縄文時代後期？
2048	①	剥片	池ノ内14区	SK22045	(54.0)	38.5	13.5	22.3	サヌカイト	縄文時代後期？
2048	②	剥片	池ノ内14区	SK22045	(70.5)	60.0	14.5	50.6	サヌカイト	縄文時代後期？
2049		石核	池ノ内14区	SK22045	32.0	49.0	13.5	16.1	サヌカイト	縄文時代後期？
2050		剥片	池ノ内14区	SK22045	57.0	60.0	11.5	42.1	サヌカイト	縄文時代後期？
2051		剥片	池ノ内14区	SK22045	37.5	55.0	11.0	19.1	サヌカイト	縄文時代後期？
2052		剥片	池ノ内14区	SK22045	75.0	(48.0)	15.5	51.5	サヌカイト	縄文時代後期？
2053		剥片	池ノ内14区	SK22045	25.0	46.0	8.5	10.1	サヌカイト	縄文時代後期？
2054		剥片	池ノ内14区	SK22045	45.0	52.5	12.5	33.9	サヌカイト	縄文時代後期？
2055		剥片	池ノ内14区	SK22045	64.5	(34.5)	12.5	20.8	サヌカイト	縄文時代後期？
2056		剥片	池ノ内14区	SK22045	45.0	61.0	11.0	30.4	サヌカイト	縄文時代後期？
2057		剥片	池ノ内14区	SK22045	53.0	49.0	13.5	25.7	サヌカイト	縄文時代後期？
2058		剥片	池ノ内14区	SK22045	36.0	47.0	11.0	13.9	サヌカイト	縄文時代後期？
2059		剥片	池ノ内14区	SK22045	31.0	38.5	12.0	16.8	サヌカイト	縄文時代後期？
2060		剥片	池ノ内14区	SK22045	33.5	(39.0)	13.0	16.9	サヌカイト	縄文時代後期？
2061		剥片	池ノ内14区	SK22045	(53.0)	32.5	11.5	15.0	サヌカイト	縄文時代後期？
2062		剥片	池ノ内14区	SK22045	(53.0)	43.5	13.0	22.7	サヌカイト	縄文時代後期？
2063		剥片	池ノ内14区	SK22045	(33.5)	41.0	12.0	13.8	サヌカイト	縄文時代後期？
2064		石核	池ノ内14区	SK22045	45.5	39.0	7.5	13.2	サヌカイト	縄文時代後期？
2065		石核	池ノ内14区	SK22045	66.0	40.5	20.5	38.8	サヌカイト	縄文時代後期？
2066		石核	池ノ内14区	SK22045	70.0	60.0	15.0	75.0	サヌカイト	縄文時代後期？
2067		石核	池ノ内14区	SK22045	85.0	86.0	25.5	185.0	サヌカイト	縄文時代後期？
2068		剥片	池ノ内14区	SK22045	30.5	64.0	10.0	18.2	サヌカイト	縄文時代後期？
2069		剥片	池ノ内14区	SK22045	30.5	57.5	12.5	24.3	サヌカイト	縄文時代後期？
2070		剥片	池ノ内14区	SK22045	34.5	(42.0)	8.5	16.3	サヌカイト	縄文時代後期？
2071		剥片	池ノ内14区	SK22045	29.0	28.0	8.5	5.1	サヌカイト	縄文時代後期？

報告番号		器種	地区	出土遺構・層	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	石材	年代
2072		剥片	池ノ内14区	SK22045	38.0	(42.5)	7.5	11.7	サヌカイト	縄文時代後期？
2073		剥片	池ノ内14区	SK22045	40.0	44.0	10.5	14.2	サヌカイト	縄文時代後期？
2074		剥片	池ノ内14区	SK22045	49.0	41.0	10.0	16.5	サヌカイト	縄文時代後期？
2075		剥片	池ノ内14区	SK22045	50.5	32.0	15.5	20.5	サヌカイト	縄文時代後期？
2076		剥片	池ノ内14区	SK22045	(26.0)	49.0	6.0	6.3	サヌカイト	縄文時代後期？
2077		剥片	池ノ内14区	SK22045	(39.0)	40.0	12.5	15.3	サヌカイト	縄文時代後期？
2078		剥片	池ノ内14区	SK22045	52.0	74.0	14.5	20.2	サヌカイト	縄文時代後期？
2079		剥片	池ノ内14区	SK22045	28.5	46.0	5.5	6.4	サヌカイト	縄文時代後期？
2080		剥片	池ノ内14区	SK22045	41.5	(34.5)	10.5	14.2	サヌカイト	縄文時代後期？
2081		剥片	池ノ内14区	SK22045	47.0	38.0	10.5	18.3	サヌカイト	縄文時代後期？
2082		剥片	池ノ内14区	SK22045	50.0	45.0	15.0	34.1	サヌカイト	縄文時代後期？
2083		剥片	池ノ内14区	SK22045	30.5	64.0	10.0	18.2	サヌカイト	縄文時代後期？
2084		剥片	池ノ内14区	SK22045	49.5	61.0	10.5	27.2	サヌカイト	縄文時代後期？
2085		剥片	池ノ内14区	SK22045	41.0	45.0	13.0	18.4	サヌカイト	縄文時代後期？
2086		剥片	池ノ内14区	SK22045	41.0	50.0	11.0	45.0	サヌカイト	縄文時代後期？
2087		剥片	池ノ内14区	SK22045	31.5	31.0	6.0	6.0	サヌカイト	縄文時代後期？
2088		剥片	池ノ内14区	SK22045	36.0	43.0	9.0	12.5	サヌカイト	縄文時代後期？
2089		石鏃	黒岡２区	弥生時代前期包含層	26.5	22.5	3.0	1.8	サヌカイト	弥生時代前期
2090		石鏃	黒岡２区	弥生時代前期包含層	23.0	17.0	3.0	1.2	サヌカイト	弥生時代前期
2091		石鏃	D３区	弥生時代前期包含層	21.0	(19.0)	3.0	1.1	サヌカイト	弥生時代前期
2092		石鏃	黒岡２区	弥生時代前期包含層	25.0	(18.0)	4.0	1.5	サヌカイト	弥生時代前期
2093		石鏃	黒岡２区	弥生時代前期包含層	(24.0)	(16.0)	3.0	1.0	サヌカイト	弥生時代前期
2094		石鏃	D３-２G区	弥生時代前期包含層	25.5	(9.0)	3.0	0.6	サヌカイト	弥生時代前期
2095		石錐	黒岡２区	弥生時代前期包含層	24.5	10.0	6.0	1.5	サヌカイト	弥生時代前期
2096		石錐	D３区	弥生時代前期包含層	22.0	19.0	3.0	1.3	サヌカイト	弥生時代前期
2097		楔形石器	黒岡１区	弥生時代前期包含層	21.5	17.0	8.5	2.7	サヌカイト	弥生時代前期
2098		楔形石器	黒岡２区	弥生時代前期包含層	26.0	37.0	6.0	3.0	サヌカイト	弥生時代前期
2099		削器	黒岡５区	弥生時代前期包含層	26.0	20.0	6.0	1.9	サヌカイト	弥生時代前期
2100		楔形石器	黒岡２区	弥生時代前期包含層	58.5	42.0	15.5	53.7	サヌカイト	弥生時代前期
2101		楔形石器	黒岡２区	弥生時代前期包含層	51.0	25.0	11.0	13.0	サヌカイト	弥生時代前期
2102		磨製石庖丁	D３区	弥生時代前期包含層	132.0	49.0	9.0	84.1	凝灰質頁岩	弥生時代前期
2103		磨製石庖丁未成品	亀ノ郷１区	弥生時代前期包含層	(49.0)	75.0	13.0	68.5	砂岩	弥生時代前期
2104		磨製石庖丁	黒岡１区	弥生時代前期包含層	(57.0)	(52.0)	6.0	17.4	泥板岩	弥生時代前期
2105		扁平片刃石斧	黒岡１区	弥生時代前期包含層	51.5	40.0	11.0	49.0	緑色片岩	弥生時代前期
2106		石鏃	池ノ内１区	SK42005	41.5	20.0	4.0	4.2	サヌカイト	弥生時代中期４
2107		削器	KM４区	SR62002	51.0	31.5	9.0	10.5	サヌカイト	
2108		楔形石器	黒岡１区	SD52002	72.5	35.0	7.0	17.5	サヌカイト	弥生時代後期
2109		太型蛤刃石斧	池ノ内８区	弥生時代中期後半包含層	(81.0)	79.0	54.0	440.0	安山岩？	弥生時代中期後半
2110		砥石	KM７区	SD72007	(80.0)	34.0	19.5	85.4	流紋岩質凝灰岩	
2111		砥石	池ノ内１区	SR72001	118.5	157.0	48.0	1300.0	閃緑岩？	
2112		石鏃	池ノ内17区	SK12004	(12.0)	14.0	2.0	0.5	赤色チャート	縄文時代後期
2113		石鏃	池ノ内９区	SR62002	17.0	(17.0)	3.5	0.9	サヌカイト	
2114		石鏃	亀ノ郷１区		23.0	17.0	3.0	1.4	サヌカイト	
2115		石鏃	亀ノ郷４区	中世包含層	34.0	18.0	4.5	2.5	サヌカイト	
2116		石鏃	D３-２G区		43.0	14.0	4.0	3.6	サヌカイト	
2117		石鏃	KM７区	SD72007	39.0	14.5	3.5	2.4	サヌカイト	
2118		石錐	黒岡２区		53.0	17.0	8.0	7.2	サヌカイト	

報告番号		器種	地区	出土遺構・層	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	石材	年代
2119		石錐	黒岡２区		34.5	14.0	4.0	2.7	サヌカイト	
2120		磨製石庖丁	亀ノ郷７区	SD72007	(62.0)	52.5	7.5	36.5	凝灰質砂岩	
2121		磨製石庖丁	ＫＭ７区	SD72007	119.0	45.0	7.0	43.4	泥板岩	
2122		砥石	池ノ内17区		(148.0)	96.0	62.0	1130.0	流紋岩質凝灰岩	
2123		砥石	亀ノ郷７区	SD72007	119.0	57.0	46.0	520.0	凝灰質砂岩	
2124		削器	亀ノ郷１区		51.0	42.0	11.5	26.0	サヌカイト	
2125		削器	下町２区		34.0	21.0	5.0	3.6	サヌカイト	
2126		削器	池ノ内10区		30.0	22.0	6.0	5.5	サヌカイト	
2127		削器	黒岡２区		93.0	98.0	28.0	191.0	サヌカイト	
2128		磨石	池ノ内１区		108.0	73.0	57.0	768.0	閃緑岩	
2129		磨石	池ノ内10区	SR42002	88.0	74.0	54.0	460.0	凝灰質砂岩	弥生時代中期４
2130		敲石	池ノ内17区	SK12005	48.0	76.0	51.0	225.0	安山岩	縄文時代後期
2131		石鏃未成品	西ケ市６区	SK12001	20.5	16.0	3.0	0.7	サヌカイト	縄文時代後期
2132		石鏃	西ケ市９区		18.5	13.0	3.5	0.8	サヌカイト	
2133		石鏃	西ケ市２区	SX22001	13.0	15.0	2.0	0.5	サヌカイト	弥生時代前期
2134		石鏃	西ケ市２区	SX22001	17.5	20.0	3.0	1.4	サヌカイト	弥生時代前期
2135		石鏃	亀ノ郷９区	SH22001	(9.0)	9.0	1.0	0.1	サヌカイト	弥生時代前期
2136		石鏃	亀ノ郷９区	SH22001	18.0	12.5	3.0	0.5	サヌカイト	弥生時代前期
2137		石鏃	亀ノ郷９区	SH22001	17.5	17.5	2.5	0.7	サヌカイト	弥生時代前期
2138		石鏃	亀ノ郷９区	SH22001	(29.5)	(19.0)	3.0	1.3	サヌカイト	弥生時代前期
2139		石鏃	ＫＭ７区	SK22021	(15.3)	14.0	3.0	0.7	サヌカイト	弥生時代前期
2140		石錐	亀ノ郷９区	SH22001	22.0	15.0	2.0	0.7	サヌカイト	弥生時代前期
2141		石錐	亀ノ郷９区	SH22001	22.0	14.0	3.0	1.4	サヌカイト	弥生時代前期
2142		石錐	亀ノ郷９区	SH22001	(25.0)	16.0	3.5	1.9	サヌカイト	弥生時代前期
2143		石錐	Ｄ３－２Ｇ区	弥生時代前期包含層	(38.0)	15.5	3.5	3.8	サヌカイト	弥生時代前期
2144		削器	黒岡２区	弥生時代前期包含層	73.5	107.0	11.5	52.5	サヌカイト	弥生時代前期
2145		剥片	黒岡２区	弥生時代前期包含層	86.0	(62.0)	1.0	45.8	サヌカイト	弥生時代前期
2146		叩石	亀ノ郷９区	SH22001？	101.0	51.0	47.0	398.0	チャート	弥生時代前期
2147		磨製礫	亀ノ郷１区	SH22006	83.0	47.5	28.0	58.6	凝灰岩？	弥生時代前期
2148		環状石斧	ＫＭ10区	SR62002	(65.0)	(31.0)	15.0		？	

木器の樹種同定一覧表

報告番号	分析番号	木器番号	地区	遺構	分類	器種	樹種	年代	備考
2000	a 112	KM7B-3	KM７トレ	SD72007	農具	鍬	アカガシ亜属	古墳時代中期	
2000	d 21	KOB1-1	黒岡１区	SH52002 pit-6	建築部材	礎板	コナラ節	弥生時代後期	
2001	c 85	KM1B-1	KM１トレ	SD72001	農具	鍬	アカガシ亜属	古墳時代？	
2002	c 149	KG7-32	亀ノ郷７区	SD72001	農具	鍬	シイ属	古墳時代	
2002	c 150	KG7-33	亀ノ郷７区	SD72001	農具	鍬(柄)	アカガシ亜属	古墳時代	
2003	c 113	KG7-50	亀ノ郷７区	SD72001	農具	鍬	アカガシ亜属	古墳時代	
2004	c 161	KG7-55	亀ノ郷７区	SD72001	農具	泥除	アカガシ亜属	古墳時代	
2005	c 159	KG7-51	亀ノ郷７区	SD72001	農具	泥除	クスノキ科	古墳時代	
2006	b 95	KO2B-01	黒岡２区	SR52001	農具	泥除？	アカガシ亜属	弥生時代後期	
2007	d 12	KM7B-6	KM７トレ	SD72007	農具	鍬	コウヤマキ	弥生時代後期～古墳時代	
2008	c 169	KG7-70	亀ノ郷７区	SD72001	農具	鍬	アカガシ亜属	古墳時代	
2009	c 231	KG7-56	亀ノ郷７区	SD72001	農具	鍬	アカガシ亜属	古墳時代	
2010	a 110	KM7B-1	KM７トレ	SD72007	農具	鋤	クスノキ科	弥生時代後期～古墳時代	
2011	a 111	KM7B-04	KM７トレ	SD72007	農具	鋤	アカガシ亜属	弥生時代後期～古墳時代	
2012	c 29	KG3-4	亀ノ郷３区	SD72001	その他	不明	アカガシ亜属	古墳時代	
2013	c 94	KG7-39	亀ノ郷７区	SD72001	その他	不明	アカガシ亜属	古墳時代	
2014	c 236	NI7-27	西ケ市７区	SD72007	農具	鍬	アカガシ亜属	古墳時代	
2015	c 228	IU1-17	池ノ内１区	SR72001	農具	鍬	アカガシ亜属	古墳時代	
2016	c 221	IU9-8	池ノ内９区	SR62002 井堰	農具	鍬	アカガシ亜属	古墳時代	
2017	c 214	IU8-2	池ノ内８区	SR62002	農具	鍬	アカガシ亜属	古墳時代	
2018	c 99	IU9-1	池ノ内９区	SR62002 井堰	農具	鍬	アカガシ亜属	古墳時代	
2019	c 138	KG7-16	亀ノ郷７区	SD72001	農具	鍬	アカガシ亜属	古墳時代	
2020	c 93	KM7B-42	KM７トレ	SD72007	農具	鍬	アカガシ亜属	弥生時代後期～古墳時代	
2021	c 30	KG3-10	亀ノ郷３区	SD72001	農具	鍬	アカガシ亜属	古墳時代	
2022	c 183	KG10-1	亀ノ郷10区	SD72001	農具	鍬	アカガシ亜属	古墳時代	
2024	c 37	KG7-6	亀ノ郷７区	SD72001	農具	鍬	アカガシ亜属	古墳時代	
2025	c 109	KG7-10	亀ノ郷７区	SD72001	農具	鍬	アカガシ亜属	古墳時代	
2026	c 174	KG7-76	亀ノ郷７区	SD72001	農具	田下駄	ヒノキ	古墳時代	
2027	d 10	KM1B-2	KM１トレ	SD72001	農具	田下駄	アカガシ亜属	古墳時代	
2028	c 130	KG7-4	亀ノ郷７区	SD72001	農具	田下駄	スギ	古墳時代	
2029		KM7B-05	KM７トレ	SD72007	農具	穂摘具	コナラ節(光谷氏)	弥生時代後期～古墳時代	
2030	c 212	IU1-29	池ノ内１区	SD72001	農具	穂摘具	環孔材	古墳時代	
2031	c 143	KG7-21	亀ノ郷７区	SD72001	農具	手鎌把手	アカガシ亜属	古墳時代	
2032	c 87	KM7B-13	KM７トレ	SD72007	農具	田舟？	クリ	弥生時代後期～古墳時代	
2033	c 119	KG3-12	亀ノ郷３区	SD72001	土木材	矢板	モミ	古墳時代	
2034	c 120	KG3-13	亀ノ郷３区	SD72001	土木材	矢板	モミ	古墳時代	
2035	c 133	KG7-8	亀ノ郷７区	SD72001	農具	竪杵	ヤブツバキ	古墳時代	
2036	c 64	NI2-2	西ケ市２区	SD72001	農具	竪杵	ヤブツバキ	古墳時代	
2037	c 173	KG7-75	亀ノ郷７区	SD72001	農具	竪杵	ヤブツバキ	古墳時代	
2038	c 181	KG8-9	亀ノ郷８区	SD72001	農具	竪杵	アカガシ亜属	古墳時代	
2039		IU08-18	池ノ内８区	SR62002	農具	臼	クスノキ科	古墳時代	
2040	c 54	KG8-8	亀ノ郷８区	SD72001	農具	臼	二葉マツ	古墳時代	
2041	c 117	KG3-9	亀ノ郷３区	SD72001	農具	木錘	クリ	古墳時代	
2042	c 98	KG7-24	亀ノ郷７区	SD72001	農具	木錘	アカガシ亜属	古墳時代	
2043	c 219	IU9-4	池ノ内９区	SR62002	農具	木錘	ツブラジイ	古墳時代	

報告番号	分析番号	木器番号	地　区	遺　構	分　類	器　種	樹　種	年　代	備　考
2044	c 191	NI7-3	西ケ市７区	SD72007	農具	木錘	アカガシ亜属	古墳時代	
2045	c 213	IU8-1	池ノ内８区	SR62002	農具	木錘	ヤブツバキ	古墳時代	
2046	c 218	IU9-3	池ノ内９区	SR62002	農具	木錘	アカガシ亜属	古墳時代	
2047	d 17	KM7B-16	KM７トレ	SD72007	農具	木錘	シキミ	弥生時代後期～古墳時代	
2048	c 226	IU12-2	池ノ内12区	SR72001	農具	木錘	ヤブツバキ	古墳時代	
2049	c 96	KM4B-1	KM１トレ	SR62002	農具	木錘	クリ	古墳時代	
2050	c 60	KG10-8	亀ノ郷10区	SD72001	農具	横槌	クヌギ節	古墳時代	
2051	c 62	NI1-1	西ケ市１区	SD62001 下層	農具	横槌	コナラ節	弥生時代後期	
2052	c 77	IU8-3	池ノ内８区	SR62002	農具	横槌	コナラ節	古墳時代	
2053	c 57	KG10-2	亀ノ郷10区	SD72001	部材	有頭棒状木製品	クリ	古墳時代	
2054	c 44	KG7-48	亀ノ郷７区	SD72001	部材	有頭棒状木製品	クヌギ節	古墳時代	
2055	c 40	KG7-25	亀ノ郷７区	SD72001	部材	有頭棒状木製品	モミ	古墳時代	
2056	c 58	KG10-3	亀ノ郷10区	SD72001	部材	有頭棒状木製品	モミ	古墳時代	
2057	c 97	KG3-8	亀ノ郷３区	SD72001	部材	有頭棒状木製品	ヒノキ	古墳時代	
2058	c 175	KG7-77	亀ノ郷７区	SD72001	部材	有頭棒状木製品	モミ	古墳時代	
2059	c 39	KG7-23	亀ノ郷７区	SD72001	部材	有頭棒状木製品	クヌギ節	古墳時代	
2060	c 230	KG7-47	亀ノ郷７区	SD72001	部材	有頭棒状木製品	クヌギ節	古墳時代	
2061	c 190	NI7-2	西ケ市７区	SD72007	部材	有頭棒状木製品	モミ	古墳時代	
2062	c 38	KG7-11	亀ノ郷７区	SD72001	部材	有頭棒状木製品	カヤ	古墳時代	
2063	c 192	NI7-4	西ケ市７区	SD72007	雑具	鈎形木製品	アカガシ亜属	古墳時代	
2064	c 72	IU1-13	池ノ内１区	SR72001	農具	鎌の柄	サカキ	古墳時代	
2065	c 209	IU1-7	池ノ内１区	SR72001	工具	へら形木製品	クリ	古墳時代	
2066	c 112	IU1-1	池ノ内１区	SR72001	農具	農具	アカガシ亜属	古墳時代	
2067	c 61	SM2-2	下町２区	SR62001	農具	農具	アカガシ亜属	弥生時代後期	
2068	c 211	IU1-16	池ノ内１区	SR72001	工具	斧柄	環孔材	古墳時代	
2069	c 59	KG10-6	亀ノ郷10区	SD72001	工具	斧柄	サカキ	古墳時代	
2070	c 124	KG3-20	亀ノ郷３区	SD72001	雑具	組み合わせ木器	モミ	古墳時代	
2071	c 122	KG3-18	亀ノ郷３区	SD72001	雑具	組み合わせ木器	モミ	古墳時代	
2072	c 114	KG3-5	亀ノ郷３区	SD72001	用材	加工材	モミ	古墳時代	
2073	c 115	KG3-6	亀ノ郷３区	SD72001	用材	加工材	モミ	古墳時代	
2074	d 1	IU1-21	池ノ内１区	SR72001	建築部材	扉	モミ	古墳時代	
2075	c 126	KG3-22	亀ノ郷３区	SD72001	雑具	組み合わせ木器	モミ	古墳時代	
2076	c 123	KG3-19	亀ノ郷３区	SD72001	雑具	組み合わせ木器	モミ	古墳時代	
2077	c 125	KG3-21	亀ノ郷３区	SD72001	雑具	組み合わせ木器	クリ	古墳時代	
2078	c 127	KG3-23b	亀ノ郷３区	SD72001	雑具	組み合わせ木器	モミ	古墳時代	
2079	c 32	KG3-23a	亀ノ郷３区	SD72001	雑具	組み合わせ木器	モミ	古墳時代	
2080	c 121	KG3-17	亀ノ郷３区	SD72001	雑具	組み合わせ木器	モミ	古墳時代	
2081	c 55	KG8-11	亀ノ郷８区	SD72001	建築部材	建築部材？	クヌギ節	古墳時代	
2082	d 6	KG3-1	亀ノ郷３区	SD72001	建築部材	建築部材？	モミ	古墳時代	
2083	d 3	IU9-5	池ノ内９区	SR62002 井堰	建築部材	階段	コウヤマキ	古墳時代	
2084	c 67	NI7-11	西ケ市７区	SD72007	建築部材	階段	二葉マツ	古墳時代	
2085	c 234	NI7-15	西ケ市７区	SD72007	建築部材	梯子	クヌギ節	古墳時代	
2086	c 116	KG3-7	亀ノ郷３区	SD72001	食事具	杓子未製品	クリ	古墳時代	
2087	c 34	KG6-1	亀ノ郷６区	SD72001	容器	槽	モミ	古墳時代	
2088	c 217	IU8-5	池ノ内８区	SR62002	容器	槽	ヒノキ	古墳時代	
2089	d 20	KM11B-1	KM11トレ	SR62002	容器	槽	ヒノキ	古墳時代	
2090	c 51	KG8-5	亀ノ郷８区	SD72001	容器	盤	ヒノキ	古墳時代	

報告番号	分析番号	木器番号	地区	遺構	分類	器種	樹種	年代	備考
2091	c 53	KG8-7	亀ノ郷８区	SD72001	容器	盤	ケヤキ	古墳時代	
2092	c 88	KM7B-14	KM７トレ	SD72007	容器	槽	クリ	弥生時代後期～古墳時代	
2093	c 187	SM4-1a	下町４区	SR72005	容器	曲物(側板)	ヒノキ	古墳時代～中世	
2093	c 188	SM4-1b	下町４区	SR72005	容器	曲物(底板)	ヒノキ	古墳時代～中世	
2094	c 76	IU1-27	池ノ内１区	SR72001	雑具	机	ヒノキ	古墳時代	
2095	c 182	KG8-10	亀ノ郷８区	SD72001	雑具	机	ヒノキ	古墳時代	
2096	c 202	NI7-12	西ケ市７区	SD72007	雑具	椅子	モミ	古墳時代	
2097	c 207	IU1-5	池ノ内１区	SR72001	雑具	椅子の脚	カヤ	古墳時代	
2098	c 178	KG8-1	亀ノ郷８区	SD72001	雑具	椅子の脚	モミ	古墳時代	
2099	c 179	KG8-2	亀ノ郷８区	SD72001	雑具	椅子の脚	モミ	古墳時代	
2100	c 148	KG7-31	亀ノ郷７区	SD72001	雑具	椅子の脚	モミ	古墳時代	
2101	c 131	KG7-5	亀ノ郷７区	SD72001	雑具	椅子の脚	モミ	古墳時代	
2102	c 141	KG7-19	亀ノ郷７区	SD72001	雑具	椅子の脚	モミ	古墳時代	
2103	c 66	NI7-9	西ケ市７区	SD72007	雑具	椅子の脚	モミ	古墳時代	
2104	c 65	NI6-1	西ケ市６区	SD72001	雑具	椅子の脚	ヒノキ	古墳時代	
2105	d 14	KM7B-9	KM７トレ	SD72007	紡織具	たたり	二葉マツ	弥生時代後期～古墳時代	
2106	d 13	KM7B-8	KM７トレ	SD72007	紡織具	たたり(台座)	クリ	弥生時代後期～古墳時代	
2107	c 145	KG7-26	亀ノ郷７区	SD72001	紡織具	たたり(台座)	二葉マツ	古墳時代	
2108	d 18	KM7B-18	KM７トレ	SD72007	祭祀具	剣形品？	クリ	弥生時代後期～古墳時代	
2109	d 16	KM7B-15	KM７トレ	SD72007	祭祀具	剣形品	モミ	弥生時代後期～古墳時代	
2110	c 176	KG7-90	亀ノ郷７区	SD72001	祭祀具	刀形品	ヒノキ	古墳時代	
2111	c 210	IU1-8	池ノ内１区	SR72001	農具	農具	アカガシ亜属	古墳時代	
2112	c 172	KG7-74	亀ノ郷７区	SD72001	祭祀具	刀形品	スギ	古墳時代	
2113	c 102	KG7-73	亀ノ郷７区	SD72001	祭祀具	刀形品	アカガシ亜属	古墳時代	
2114	c 166	KG7-62	亀ノ郷７区	SD72001	祭祀具	剣形品	ヒノキ	古墳時代	
2115	c 147	KG7-30	亀ノ郷７区	SD72001	祭祀具	刀形品	スギ	古墳時代	
2116	c 135	KG7-13	亀ノ郷７区	SD72001	祭祀具	剣形品	モミ	古墳時代	
2117	d 194	KM1B-6	KM１トレ	SD72001	祭祀具	剣形品	コウヤマキ	古墳時代	
2118	c 35	KG6-2	亀ノ郷６区	SD72001	祭祀具	剣形品？	モミ	古墳時代	
2119	c 152	KG7-35	亀ノ郷７区	SD72001	祭祀具	刀形品	コナラ節	古墳時代	
2120	c 134	KG7-12	亀ノ郷７区	SD72001	楽器具	琴	ヒノキ	古墳時代	
2121	c 201	NI7-10	西ケ市７区	SD72007	楽器具	琴	モミ	古墳時代	
2122	c 136	KG7-14	亀ノ郷７区	SD72001	用材	加工板	ヒノキ	古墳時代	
2123	c 180	KG8-4	亀ノ郷８区	SD72001	用材	加工板(線刻)	スギ	古墳時代	
2124	c 129	KG7-2	亀ノ郷７区	SD72001	用材	加工板(有孔)	モミ	古墳時代	
2125	c 146	KG7-28	亀ノ郷７区	SD72001	用材	加工板(刻み)	ヒノキ	古墳時代	
2126	c 108	KG7-9	亀ノ郷７区	SD72001	用材	加工板(有孔)	アカガシ亜属	古墳時代	
2127	c 189	NI2-1	西ケ市２区	SR72001	用材	加工板	カヤ	古墳時代	
2128	d 11	KM1B-3	KM１トレ	SD72001	雑具	置台(四方転びの箱)	ヒノキ	古墳時代	
2129	c 156	KG7-44	亀ノ郷７区	SD72001	用材	加工板	モミ	古墳時代	
2130	c 162	KG7-57	亀ノ郷７区	SD72001	用材	加工板	カヤ	古墳時代	
2131	c 154	KG7-38	亀ノ郷７区	SD72001	用材	加工円板	ヤブツバキ	古墳時代	
2132	c 139	KG7-17	亀ノ郷７区	SD72001	その他	用途不明品	モミ	古墳時代	
2133	c 144	KG7-22	亀ノ郷７区	SD72001	祭祀具	舟形品	ヒノキ	古墳時代	
2134	c 186	SM2-1	下町２区	SR52001	用材	加工板	二葉マツ	弥生時代後期	
2135		KM1B-5	KM１トレ	SD72001	服飾具	竪櫛		古墳時代	
2136	c 82	IU9—19	池ノ内９区	SR62002 井堰	用材	加工材	ヒノキ	古墳時代	

報告番号	分析番号	木器番号	地　区	遺　構	分　類	器　種	樹　種	年　代	備　考
2137	c 83	IU9-23	池ノ内９区	SR62002 井堰	部材	部材(有頭)	モミ	古墳時代	
2138	c 220	IU9-6	池ノ内９区	SR62002 井堰	用材	加工材	クリ	古墳時代	
2139	d 5	IU9-14	池ノ内９区	SR62002 井堰	用材	加工材	コナラ節	古墳時代	
2140	d 2	IU9-5	池ノ内９区	SR62002 井堰	用材	加工材	コナラ節	古墳時代	
2141	c 81	IU9-2	池ノ内９区	SR62002 井堰	部材	部材(有頭)	クヌギ節	古墳時代	
2142	c 224	IU9-12	池ノ内９区	SR62002	用材	加工材	コウヤマキ	古墳時代	
2143	c 223	IU9-11	池ノ内９区	SR62002 井堰	用材	加工材	クヌギ節	古墳時代	
2144	c 100	IU9-9	池ノ内９区	SR62002	雑具	椅子(机)の脚	ヒノキ	古墳時代	
2145	c 155	KG7-43	亀ノ郷７区	SD72001	祭祀具	剣形品？	モミ	古墳時代	
2146	c 164	KG7-60	亀ノ郷７区	SD72001	祭祀具	刀形品？	モミ	古墳時代	
2147	c 163	KG7-59	亀ノ郷７区	SD72001	用材	加工材	モミ	古墳時代	
2148	c 177	KG7-93	亀ノ郷７区	SD72001	用材	加工材	ヒノキ	古墳時代	
2149	c 157	KG7-45	亀ノ郷７区	SD72001	用材	加工材	ヒノキ	古墳時代	
2150	c 151	KG7-34	亀ノ郷７区	SD72001	用材	加工材	ヒノキ	古墳時代	
2151	c 194	NI7-7	西ケ市７区	SD72007	用材	加工材	アカガシ亜属	古墳時代	
2152	c 43	KG7-40	亀ノ郷７区	SD72001	用材	加工材	クヌギ節	古墳時代	
2153	c 167	KG7-65	亀ノ郷７区	SD72001	用材	加工材	ヒノキ	古墳時代	
2154	c 101	KG7-42	亀ノ郷７区	SD72001	用材	加工材	モミ	古墳時代	
2155	c 170	KG7-71	亀ノ郷７区	SD72001	用材	加工材	ヒノキ	古墳時代	
2156	c 104	KG7-94	亀ノ郷７区	SD72001	用材	加工材	モミ	古墳時代	
2157	c 106	KG7-3	亀ノ郷７区	SD72001	用材	加工材	ヒノキ	古墳時代	
2158	c 140	KG7-18	亀ノ郷７区	SD72001	用材	加工材	モミ	古墳時代	
2159	c 107	IU8-17	池ノ内８区	SR62002	用材	加工材	コウヤマキ	古墳時代	
2160	c 168	KG7-68	亀ノ郷７区	SD72001	用材	加工材	ヒノキ	古墳時代	
2161	c 142	KG7-20	亀ノ郷７区	SD72001	用材	加工材	スギ	古墳時代	
2162	c 49	KG7-69	亀ノ郷７区	SD72001	用材	加工材	モミ	古墳時代	
2163	c 111	KG7-64	亀ノ郷７区	SD72001	用材	加工材	アカガシ亜属	古墳時代	
2164	c 229	KG7-46	亀ノ郷７区	SD72001	用材	加工材	ヒノキ	古墳時代	
2165	c 203	NI7-13	西ケ市７区	SD72007	用材	加工材	クリ	古墳時代	
2166	c 36	KG6-4	亀ノ郷６区	SD72001	用材	加工材	モミ	古墳時代	
2167	c 79	IU8-7	池ノ内８区	SR62002	用材	加工材	ヒノキ	古墳時代	
2168	c 46	KG7-63	亀ノ郷７区	SD72001	用材	加工材	モミ	古墳時代	
2169	c 103	KG7-52	亀ノ郷７区	SD72001	用材	加工材	ヒノキ	古墳時代	
2170	c 41	KG7-29	亀ノ郷７区	SD72001	用材	加工材	モミ	古墳時代	
2171	c 28	KG3-3	亀ノ郷３区	SD72001	用材	加工材	ヒノキ	古墳時代	
2172	c 208	IU1-6	池ノ内１区	SR72001	用材	加工材	コウヤマキ	古墳時代	
2173	c 86	KMB1-4	KM１トレ	SD72001	用材	加工材	アカガシ亜属	古墳時代	
2174		KG7-92	亀ノ郷７区	SD72001	用材	加工材		古墳時代	
2175	c 158	KG7-49	亀ノ郷７区	SD72001	用材	加工材	ヒノキ	古墳時代	
2176	c 118	KG3-11	亀ノ郷３区	SD72001	用材	加工材	カヤ	古墳時代	
2177	c 171	KG7-72	亀ノ郷７区	SD72001	用材	加工材	カヤ	古墳時代	
2178	c 105	KG7-27	亀ノ郷７区	SD72001	用材	加工材	モミ	古墳時代	
2179	c 47	KG7-66	亀ノ郷７区	SD72001	用材	加工材	モミ	古墳時代	
2180	c 215	IU8-4	池ノ内８区	SR62002	用材	加工材	スギ	古墳時代	
2181	c 92	KMB7-41	KM７トレ	SD72007	用材	加工材	ヒノキ	弥生時代後期～古墳時代	
2182	c 50	KG8-3	亀ノ郷８区	SD72001	用材	加工材	ヒノキ	古墳時代	
2183	c 193	NI7-6	西ケ市７区	SD72007	用材	加工材	モミ	古墳時代	

報告番号	分析番号	木器番号	地区	遺構	分類	器種	樹種	年代	備考
2184	c 195	NI7-8	西ケ市７区	SD72007	用材	加工材	モミ	古墳時代	
2185	c 160	KG7-54	亀ノ郷７区	SD72001	用材	加工材	スギ	古墳時代	
2186	c 84	IU10-1	池ノ内10区	SR62002	用材	加工材	コウヤマキ	古墳時代	
2187	c 225	IU12-1	池ノ内12区	SR72001	用材	加工材	モミ	古墳時代	
2188	d 7	KG3-16	亀ノ郷３区	SD72001	用材	加工材	モミ	古墳時代	
2189	c 56	KG8-13	亀ノ郷８区	SD72001	用材	加工材	二葉マツ	古墳時代	
2190	c 90	KM7B-32	KM７トレ	SD72007	用材	加工材	コウヤマキ	弥生時代後期～古墳時代	
2191	c 73	IU1-14	池ノ内１区	SR72001	用材	加工材	モミ	古墳時代	
2192	d 9	KM1B-7	KM７トレ	不明	用材	加工材	モミ	時期不明	
2193	c 165	KG7-61	亀ノ郷７区	SD72001	用材	加工材	モミ	古墳時代	
2194	c 232	NI7-1	西ケ市７区	SD72007	用材	加工材	アカガシ亜属	古墳時代	
2195	c 206	IU1-4	池ノ内１区	SR72001	用材	加工材	モミ	古墳時代	
2196	c 216	IU8-8	池ノ内８区	SR62002	用材	加工材	モミ	古墳時代	
2197	c 31	KG3-14	亀ノ郷３区	SD72001	用材	加工材	モミ	古墳時代	
2198	c 205	IU1-3	池ノ内１区	SR72001	用材	加工材	モミ	古墳時代	
2199	d 19	KM7B-23	KM７トレ	SR62001	用材	加工材	アカガシ亜属	古墳時代	
2200	c 91	KM7B-33	KM７トレ	SD72007	用材	加工材	モミ	弥生時代後期～古墳時代	
2201	c 153	KG7-36	亀ノ郷７区	SD72001	用材	加工材	モミ	古墳時代	
2202	c 128	KG7-1	亀ノ郷７区	SD72001	用材	加工材	モミ	古墳時代	
2203	c 42	KG7-37	亀ノ郷７区	SD72001	用材	加工材	二葉マツ	古墳時代	
2204	c 132	KG7-7	亀ノ郷７区	SD72001	用材	加工材	二葉マツ	古墳時代	
2205	c 204	IU1-2	池ノ内１区	SR72001	用材	加工材	シイ属	古墳時代	
2206		KM7B-40	KM７トレ	SD72007	用材	加工材		弥生時代後期～古墳時代	
2207	c 80	IU8-14	池ノ内８区	SR62002	用材	加工材	クリ	古墳時代	
2208	c 233	NI7-14	西ケ市７区	SD72007	用材	加工材	コナラ節	古墳時代	
2209	d 15	KM7B-12	KM７トレ	SD72007	用材	加工材	モミ	弥生時代後期～古墳時代	
2210	c 63	NI1-2	西ケ市１区	SD62001 下層	用材	加工材	コウヤマキ	弥生時代後期	
2211	c 68	NI9-1	西ケ市９区	SH22007	用材	加工材	アカガシ亜属	弥生時代前期	
2212	c 235	NI7-16	西ケ市７区	SD72007	用材	加工材	モミ	古墳時代	
2213	c 89	KMB7-20	KM７トレ	SD72007	用材	加工材	アカガシ亜属	弥生時代後期～古墳時代	
2214	c 184	KG10-4	亀ノ郷10区	SD72001	用材	加工材	モミ	古墳時代	
2215	c 185	KG10-5	亀ノ郷10区	SD72001	用材	加工材	モミ	古墳時代	
2216		KG10-56	亀ノ郷10区	SD72001	用材	加工材		古墳時代	
2217	c 33	KG3-24	亀ノ郷３区	SD72001	用材	加工材	コナラ節	古墳時代	
2218	c 78	IU8-6	池ノ内８区	SR62002	用材	加工材	コナラ節	古墳時代	
2219	d 28	SM8-1	下町８区	SD42001	用材	加工材	ヤマグワ	弥生時代中期	
2220	c 75	IU1-24	池ノ内１区	SR72001	用材	加工材	モミ	古墳時代	
2221	c 227	IU1-12	池ノ内１区	SR72001	用材	加工材	クヌギ節	古墳時代	
2222	c 69	IU1-9	池ノ内１区	SR72001	農具	臼	クスノキ科	古墳時代	
2223	c 70	IU1-10	池ノ内１区	SR72001	用材	加工板	モミ	古墳時代	
2224	c 71	IU1-11	池ノ内１区	SR72001	部材	有頭棒	二葉マツ	古墳時代	
2225	c 74	IU1-15	池ノ内１区	SR72001	農具	臼	クスノキ科	古墳時代	
2226	d 250	IU10-10	池ノ内10区	SR62002 杭列	土木材	杭	コウヤマキ	古墳時代	
2227	d 249	IU10-2	池ノ内10区	SR62002 杭列	土木材	杭	コナラ節	古墳時代	
2228	d 237	IU8-19	池ノ内８区	SR62002	農具	臼	タブノキ	古墳時代	
2229	d 4	IU9-13	池ノ内９区	SR62002 井堰	用材	加工材	二葉マツ	古墳時代	
2230	d 238	IU9-15	池ノ内９区	SR62002 井堰	用材	加工材	コウヤマキ	古墳時代	

報告番号	分析番号	木器番号	地　区	遺　構	分　類	器　種	樹　種	年　代	備　考
2231	d 239	IU9-16	池ノ内 9 区	SR62002 井堰	用材	加工材	リョウブ	古墳時代	
2232	d 240	IU9-18	池ノ内 9 区	SR62002 井堰	用材	加工材	ヒノキ	古墳時代	
2233	d 241	IU9-22	池ノ内 9 区	SR62002 井堰	用材	加工材	モミ	古墳時代	
2234	d 242	IU9-25	池ノ内 9 区	SR62002 井堰	用材	加工材	モミ	古墳時代	
2235	d 243	IU9-31	池ノ内 9 区	SR62002 井堰	用材	加工材	二葉マツ	古墳時代	
2236	d 244	IU9-33	池ノ内 9 区	SR62002 井堰	用材	加工材	クヌギ節	古墳時代	
2237	d 245	IU9-38	池ノ内 9 区	SR62002 井堰	用材	板材	ヒノキ	古墳時代	
2238	d 246	IU9-39	池ノ内 9 区	SR62002 井堰	用材	加工材	コウヤマキ	古墳時代	
2239	d 247	IU9-40	池ノ内 9 区	SR62002 井堰	用材	加工材	コウヤマキ	古墳時代	
2240	d 248	IU9-42	池ノ内 9 区	SR62002 井堰	用材	加工材	モミ	古墳時代	
2241	d 255	KG3-25	亀ノ郷 3 区	SD72001	用材	板材	モミ	古墳時代	
2242	d 256	KG3-28	亀ノ郷 3 区	SD72001	土木材	抉りのある杭	クヌギ節	古墳時代	
2243	d 257	KG3-35	亀ノ郷 3 区	SD72001	土木材	抉りのある杭	クリ	古墳時代	
2244	d 258	KG3-36	亀ノ郷 3 区	SD72001	用材	加工材	コナラ節	古墳時代	
2245	c 95	KG6-3	亀ノ郷 6 区	SD72001	用材	加工板	コウヤマキ	古墳時代	
2246	c 137	KG7-15	亀ノ郷 7 区	SD72001	農具	鎌の柄	ヒノキ	古墳時代	
2247	c 110	KG7-41	亀ノ郷 7 区	SD72001	祭祀具	刀形？	アカガシ亜属	古墳時代	
2248	c 45	KG7-53	亀ノ郷 7 区	SD72001	農具	臼	クスノキ科	古墳時代	
2249	c 48	KG7-67	亀ノ郷 7 区	SD72001	農具	臼	クスノキ科	古墳時代	
2250	c 52	KG8-6	亀ノ郷 8 区	SD72001	用材	加工板	モミ	古墳時代	
2251	d 8	KG8-14	亀ノ郷 8 区	SD72001	その他	自然木	ヤナギ属	古墳時代	図なし
2252	c 24	KO4B-1	黒 岡 4 区	pit-1	建築部材	柱根	コナラ節	弥生時代後期 5	
2253	c 25	KO4B-2	黒 岡 4 区	SH52003 pit-10	建築部材	柱根	二葉マツ	弥生時代後期 5	
2254	c 26	KO4B-3	黒 岡 4 区	pit-5	建築部材	柱根	コウヤマキ	弥生時代後期 5	
2255	c 27	KO4B-4	黒 岡 4 区	pit-13	建築部材	柱根	クヌギ節	弥生時代後期 5	
2256	d 22	KOB2-2	黒 岡 2 区	SK82001	用材	加工板	二葉マツ	中世	
2257	d 23	KOB2-3	黒 岡 2 区	SK82001	土木材	杭	クリ	中世	
2258	d 24	KOB2-4	黒 岡 2 区	SK82001	土木材	杭	二葉マツ	中世	
2259	d 25	KOB2-5	黒 岡 2 区	SK82001	部材	加工棒	二葉マツ	中世	
2260	d 26	KOB2-6	黒 岡 2 区	SK82001	用材	加工板	モミ	中世	
2261	d 251	NI1-3	西ケ市 1 区	SD62001 下層	土木材	杭	コナラ節	弥生時代後期 5	
2262	d 252	NI1-6	西ケ市 1 区	SD62001 下層	用材	板材	コウヤマキ	弥生時代後期 5	
2263	d 27	NI7-18	西ケ市 7 区	SD72007	部材	加工棒	コウヤマキ	古墳時代	
2264	d 253	NI7-28	西ケ市 7 区	SD72007	土木材	杭	二葉マツ	古墳時代	
2265	d 254	NI7-29	西ケ市 7 区	SD72007	土木材	杭？	クヌギ節	古墳時代	

終わりに

この第２分冊で報告した調査区は、小字名では黒岡・亀ノ郷・下町・西ケ市・池ノ内地区にあたる。黒岡地区の一部は既に第１分冊に報告されているが、ここでは、亀ノ郷地区に続く弥生時代前期の微高地にあたる部分、具体的には黒岡１区の一部と黒岡２・４・11区を報告した。この黒岡・亀ノ郷地区の弥生時代前期微高地をとりまく低湿地は、おそらく弥生時代前期にまで遡る水田面が複数重なっている水田地帯である。検出した遺構は水田畦畔・水路・溝・旧河道などで、水路・溝からは古墳時代中期の土器や木器がまとまって出土している地区がある。

池ノ内地区及び西ケ市地区は埋没段丘上にあたり、一つの遺構面に各時期の遺構が混在している。また、段丘崖沿いには旧河道がはしり、それに流れ込む大きな水路が流れている。この旧河道および水路中からも弥生時代後期から古墳時代中頃の大量の土器・木器が出土した。

本報告においては、多年度にわたる複数面の調査成果を限られた頁数にまとめるため、かなり簡略化した記述となった。また、各調査区の成果を各時期の遺構面にまとめる作業の中で、調査者の見解と異なる時期にまとめた部分もいくつかある。

特に問題となった点は、旧河道・水路・溝といった遺構の性格や範囲・時期の認識が調査者間で齟齬をきたし、年度を違えて調査を行った近接する調査区間で調査成果が矛盾している部分が多々みられることである。旧河道の埋没過程についての見解の相違が特に顕著であった。

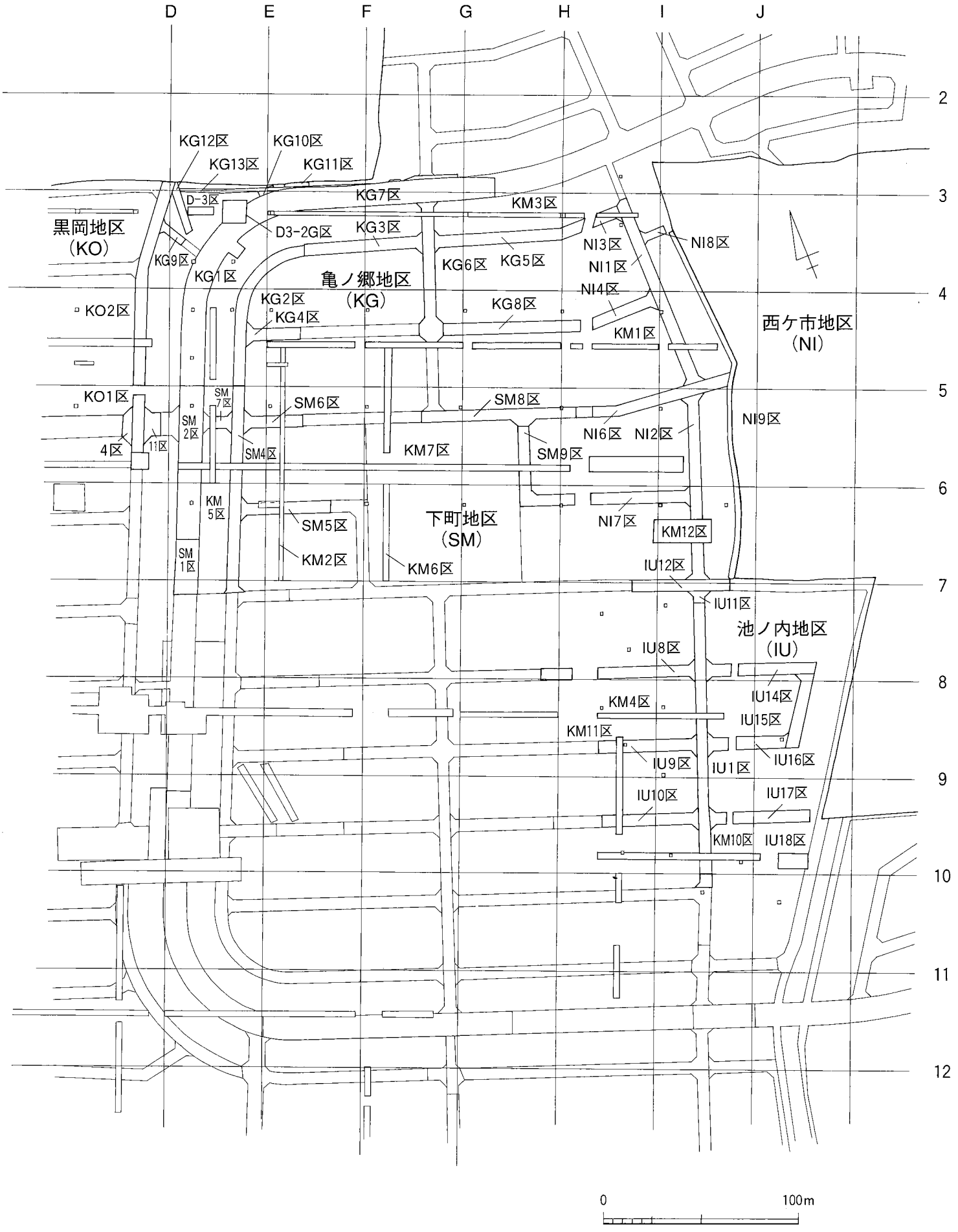
今後、沖積地の大規模な遺跡を多年次にわたって調査を行う際には、調査者間で遺跡の層位の把握・時期の決定について十分な討議を行う時間や場を設定する必要があろう。

各調査担当者が執筆した原稿を頂きながら、報告書としてまとめていく過程で必ずしもそのままの形で掲載することはできなかった。全体の統一は不可能であるとしても、ある程度の整合性を持たせるための編集作業が十分できなかった点も合わせて、編集者として関係者各位に深くお詫び申し上げる。

ここに報告された資料を活用して、さまざまな研究・普及の試みが今後行われることを祈ります。

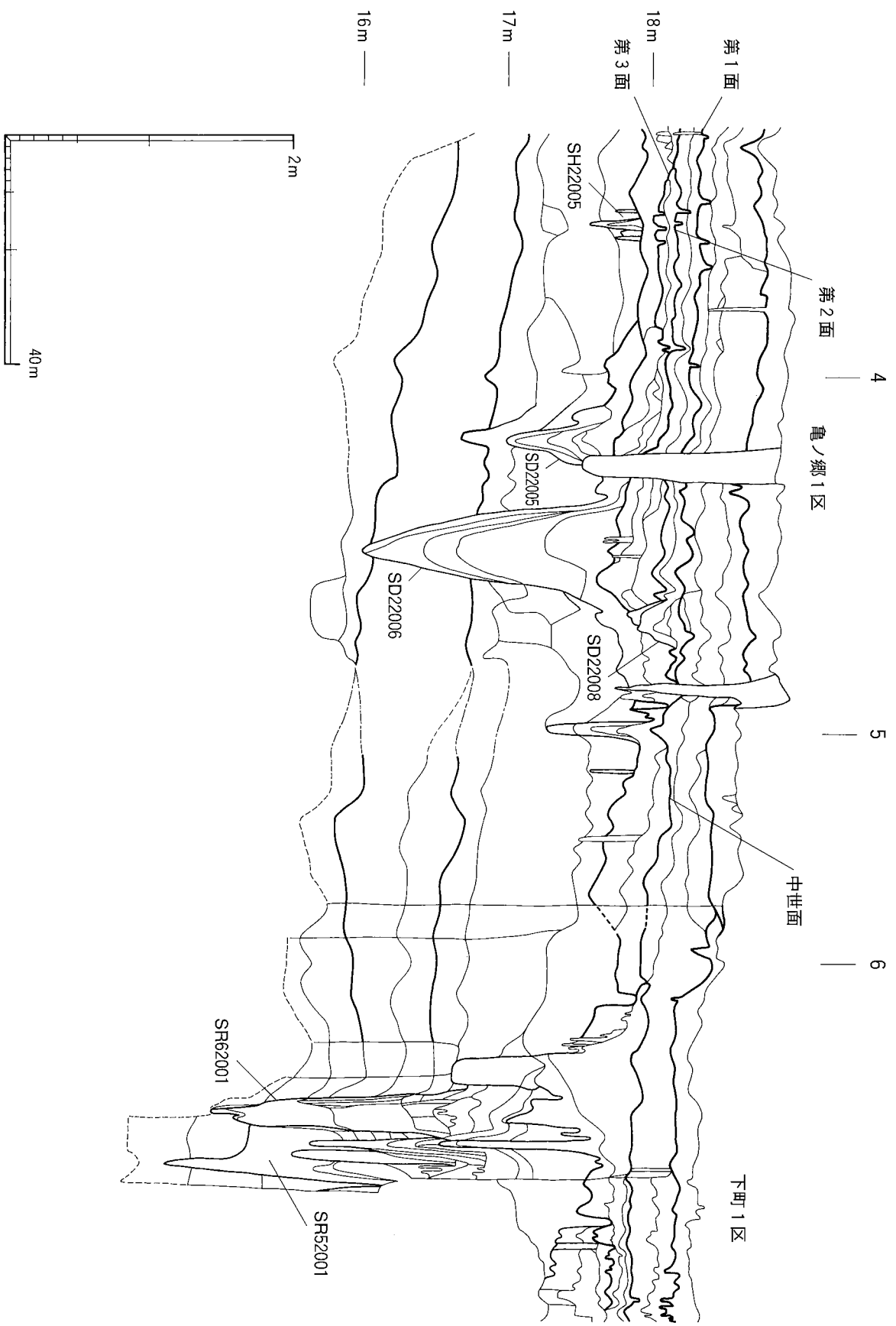
図　版

調査区配置図

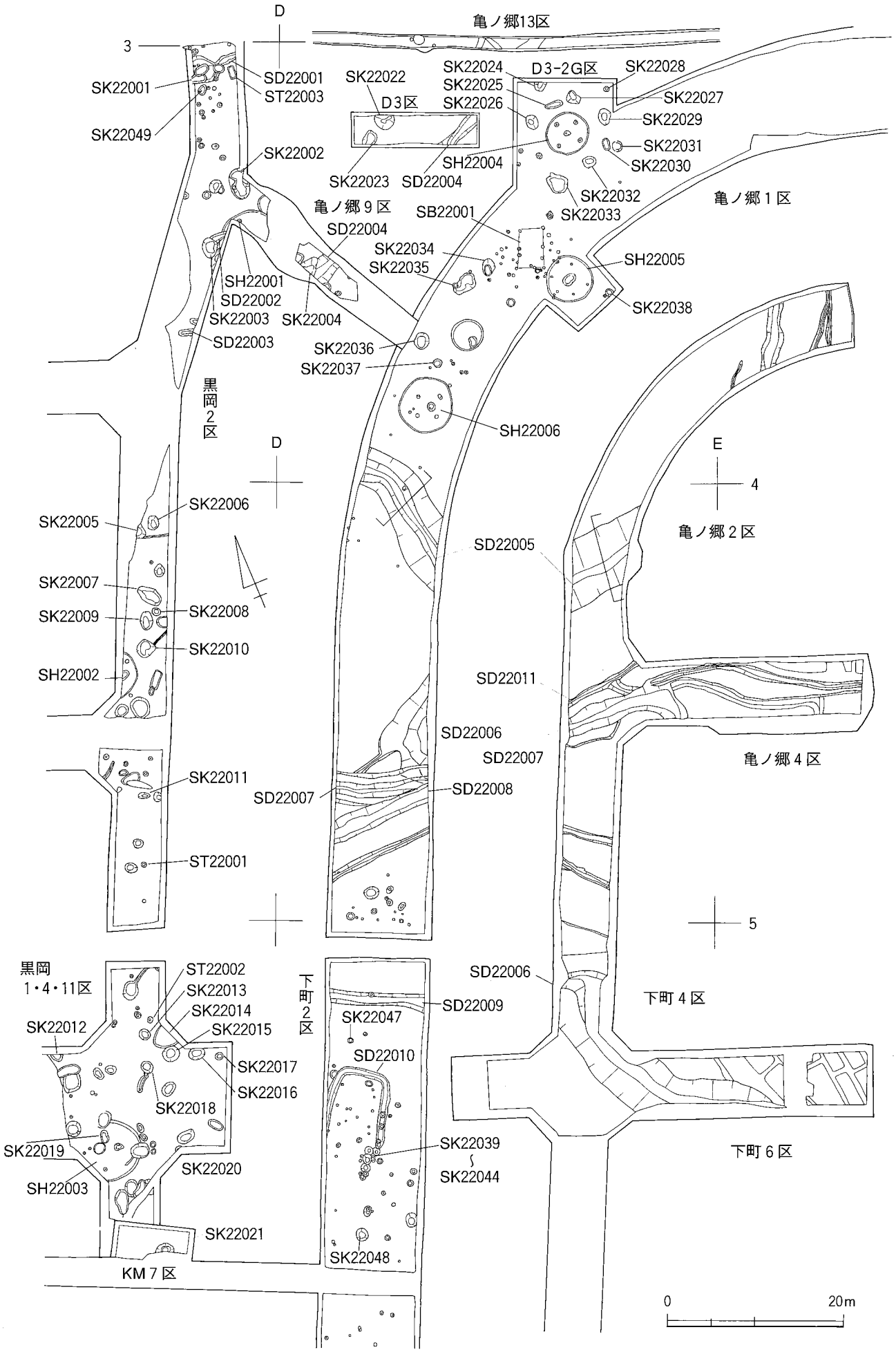

D
E
F
G
H
I
J
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
黒岡地区
(KO)
亀ノ郷地区
(KG)
下町地区
(SM)
西ケ市地区
(NI)
池ノ内地区
(IU)
KG12区
KG13区
KG10区
KG11区
D-3区
KG7区
KM3区
D3-2G区
KG3区
KG9区
KG1区
KG2区
KG4区
KG6区
KG5区
KG8区
NI3区
NI8区
NI1区
NI4区
KM1区
KO2区
KO1区
SM 7区
SM 2区
SM6区
SM8区
NI9区
NI6区
NI2区
4区
11区
SM4区
KM7区
SM9区
KM 5区
SM5区
NI7区
KM12区
SM 1区
KM2区
KM6区
IU12区
IU11区
IU8区
KM4区
IU14区
IU15区
KM11区
IU9区
IU1区
IU16区
IU10区
IU17区
KM10区
IU18区
0
100m

図版 2

土層断面図（南北）

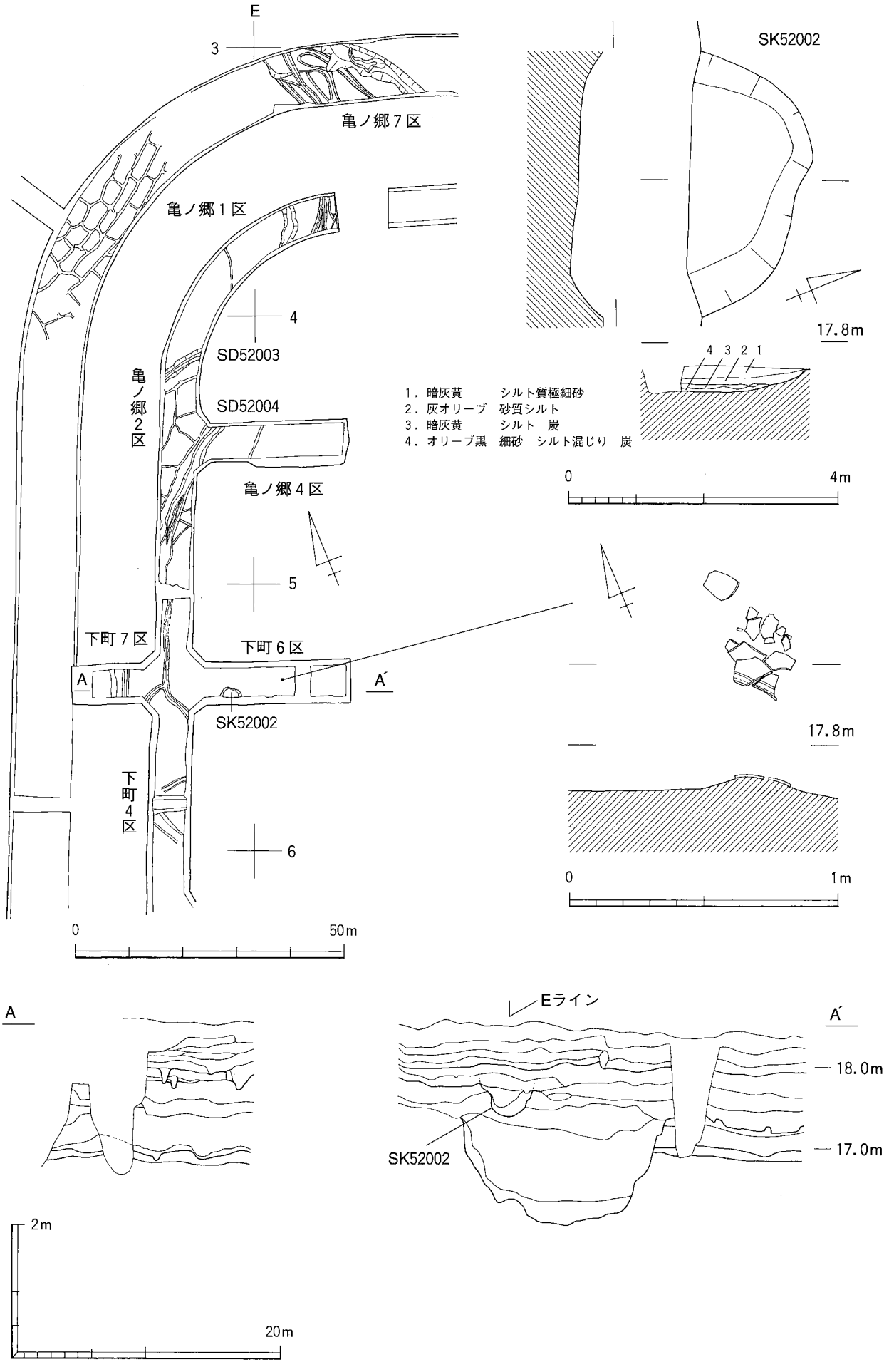

第1面
第3面
第2面
18m
17m
16m
SH22005
SD22005
SD22006
SD22008
SR62001
SR52001
中世面
4
亀ノ郷1区
5
6
下町1区
2m
40m

黒岡・亀ノ郷・下町地区　弥生時代前期遺構配置図

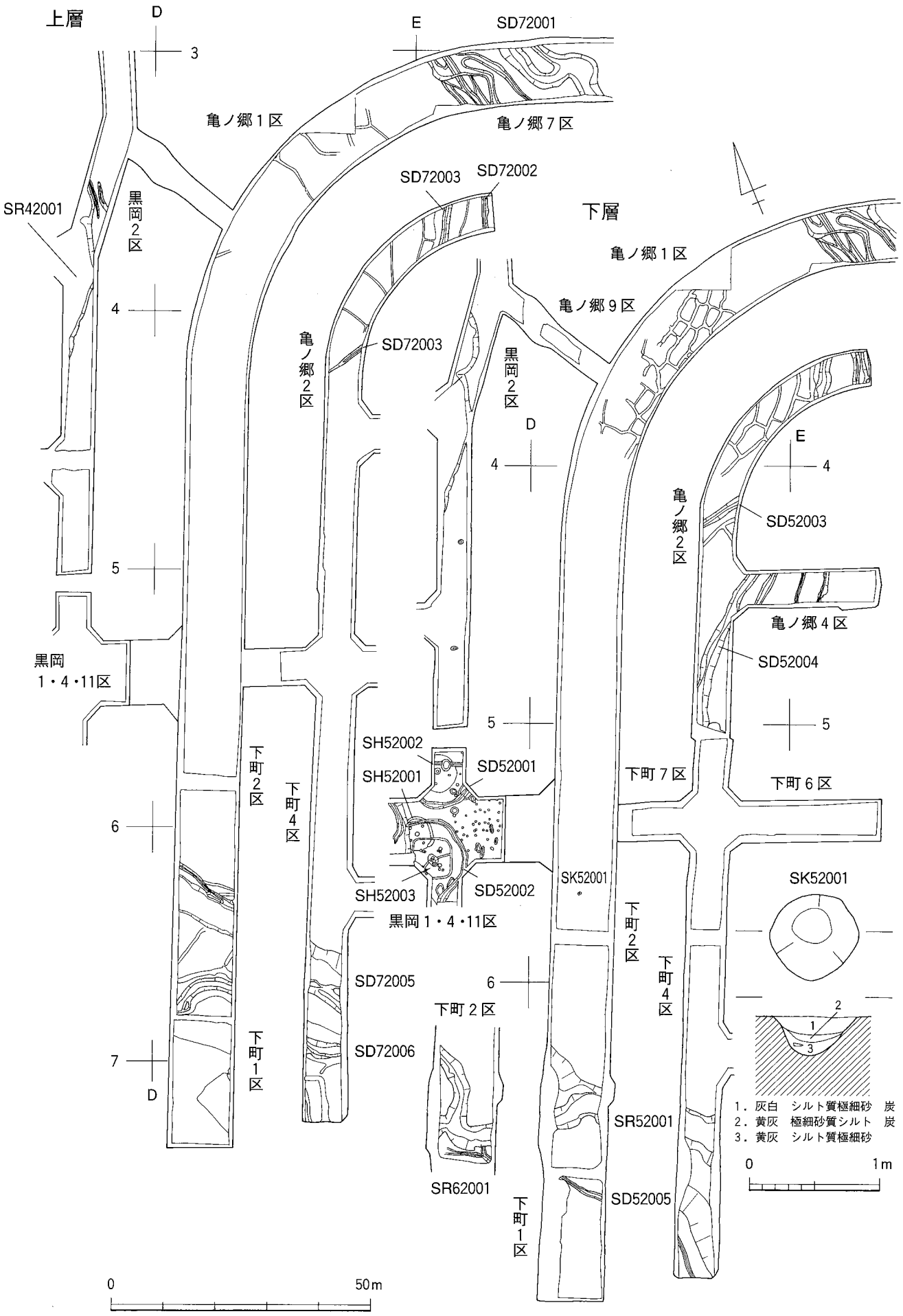


図版 4

黒岡・亀ノ郷・下町地区　遺構配置図 その2

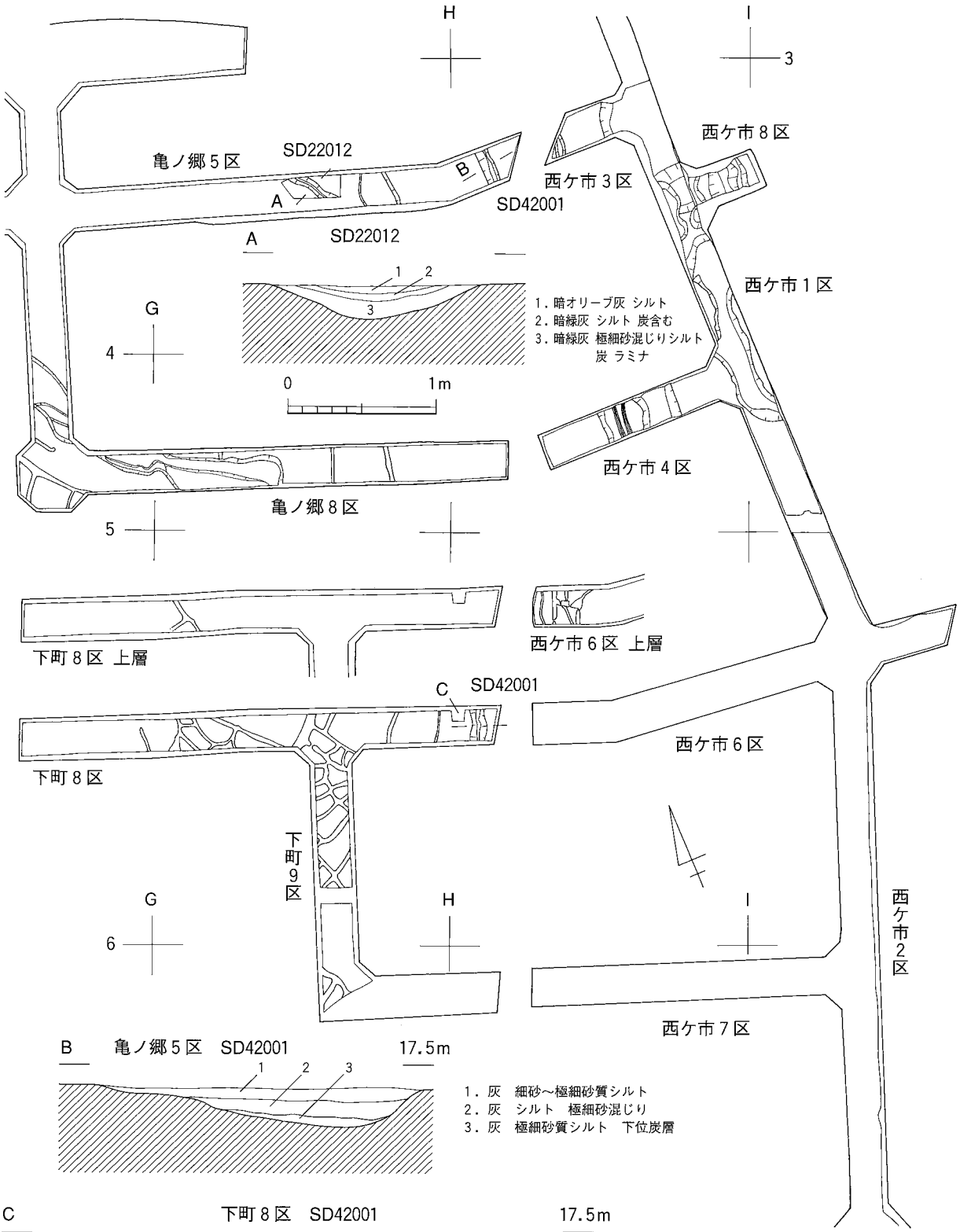


黒岡・亀ノ郷・下町地区　遺構配置図 その3・4

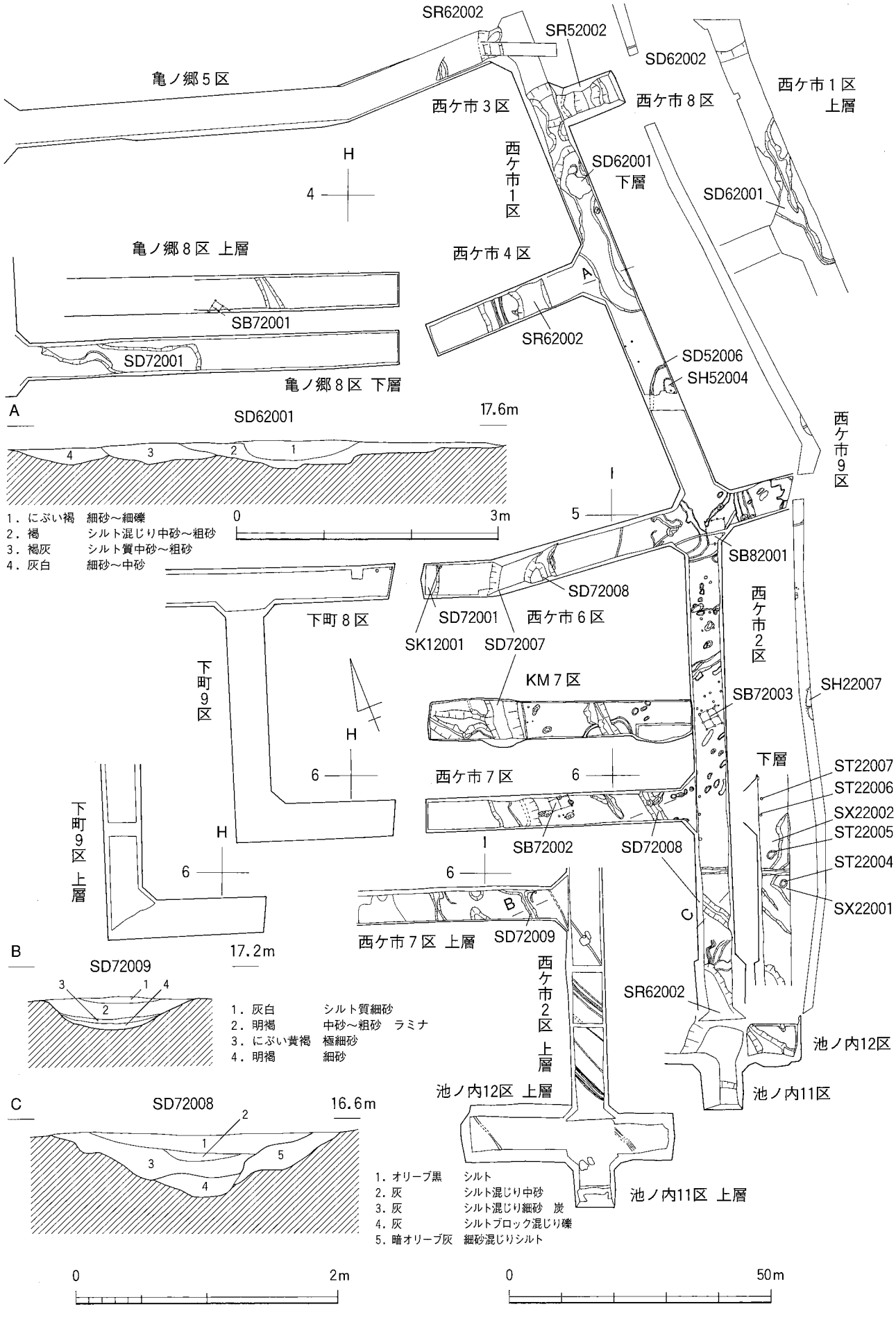


図版 6

亀ノ郷・下町・西ケ市地区　遺構配置図

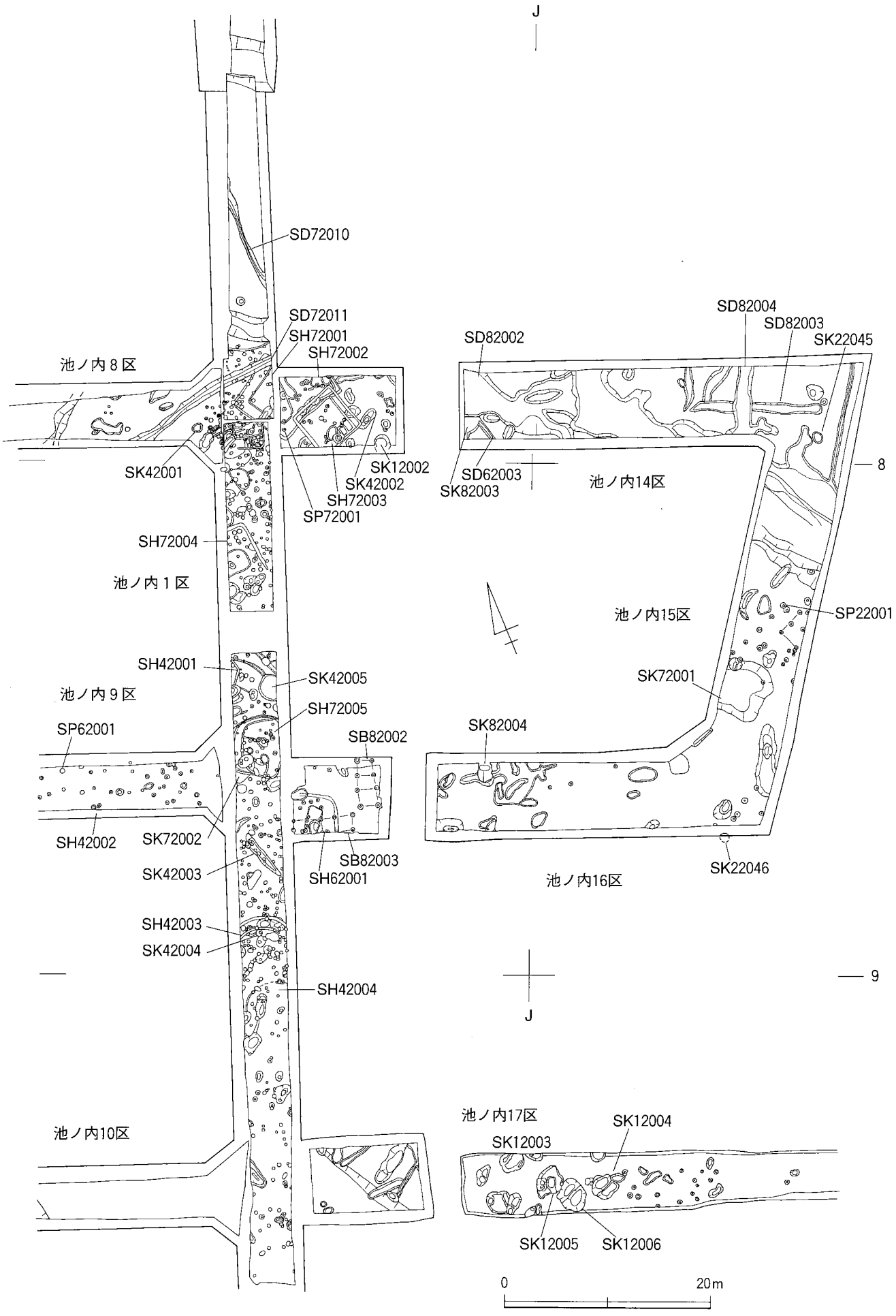


亀ノ郷・下町・西ケ市地区　遺構配置図 その 2



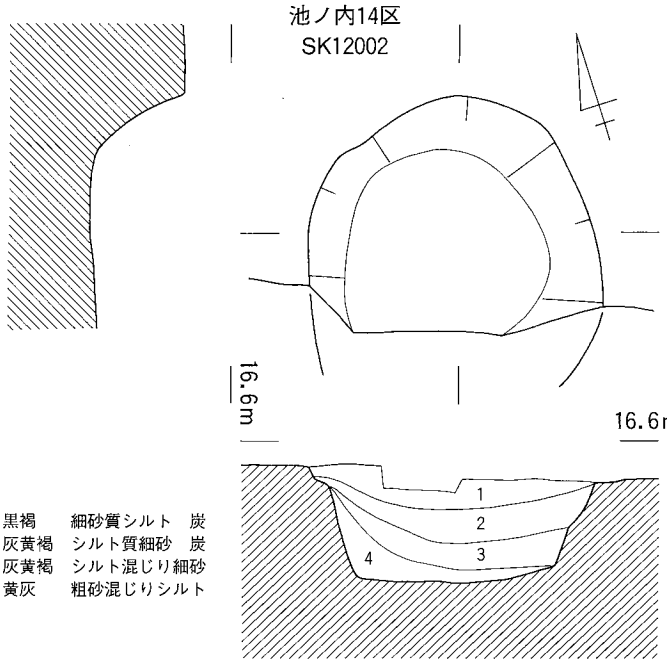
図版 8

池ノ内地区　遺構配置図



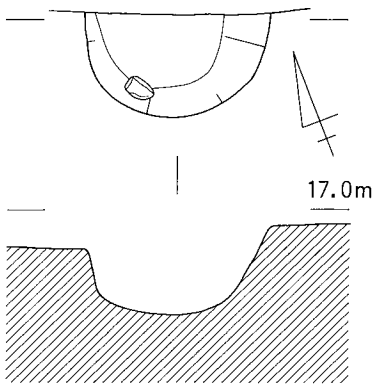
縄文時代　土坑 1

池ノ内14区
SK12002



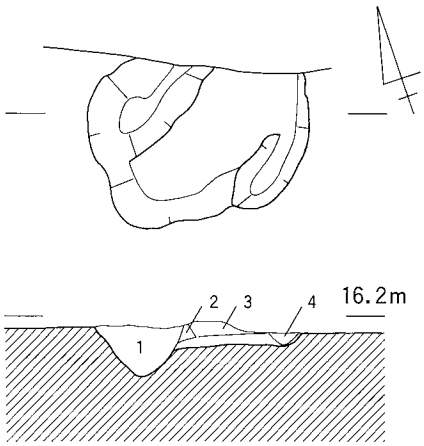
1．黒褐　細砂質シルト　炭
2．灰黄褐　シルト質細砂　炭
3．灰黄褐　シルト混じり細砂
4．黄灰　粗砂混じりシルト

西ケ市 6 区
SK12001



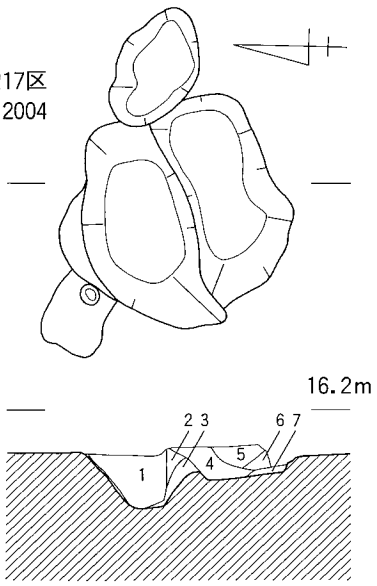
0　2m

池ノ内17区
SK12003



1．黒　シルト質細砂
2．黄灰　細砂
3．灰　シルト質細砂
4．黒褐　シルト質細砂

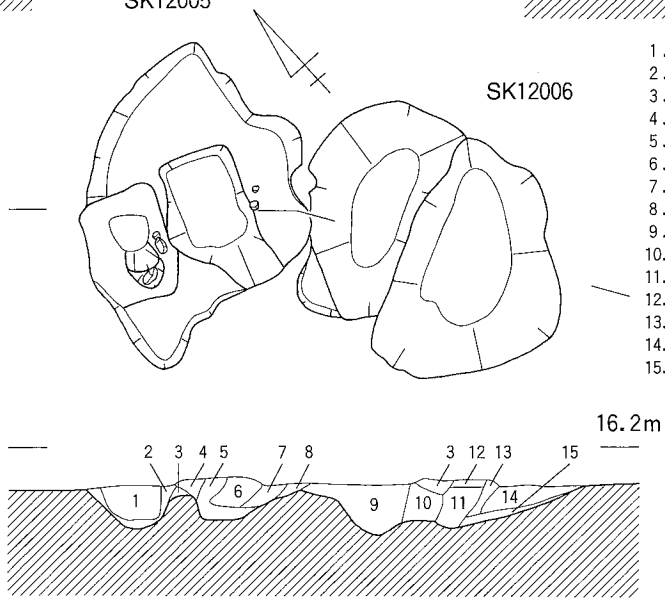
池ノ内17区
SK12004



1．黒　シルト質細砂
2．黒褐　細砂
3．暗灰黄　細砂
4．オリーブ灰　シルト質極細砂
5．灰　シルト質細砂
6．黒　シルト質細砂
7．黄灰　シルト質細砂

池ノ内17区
SK12005

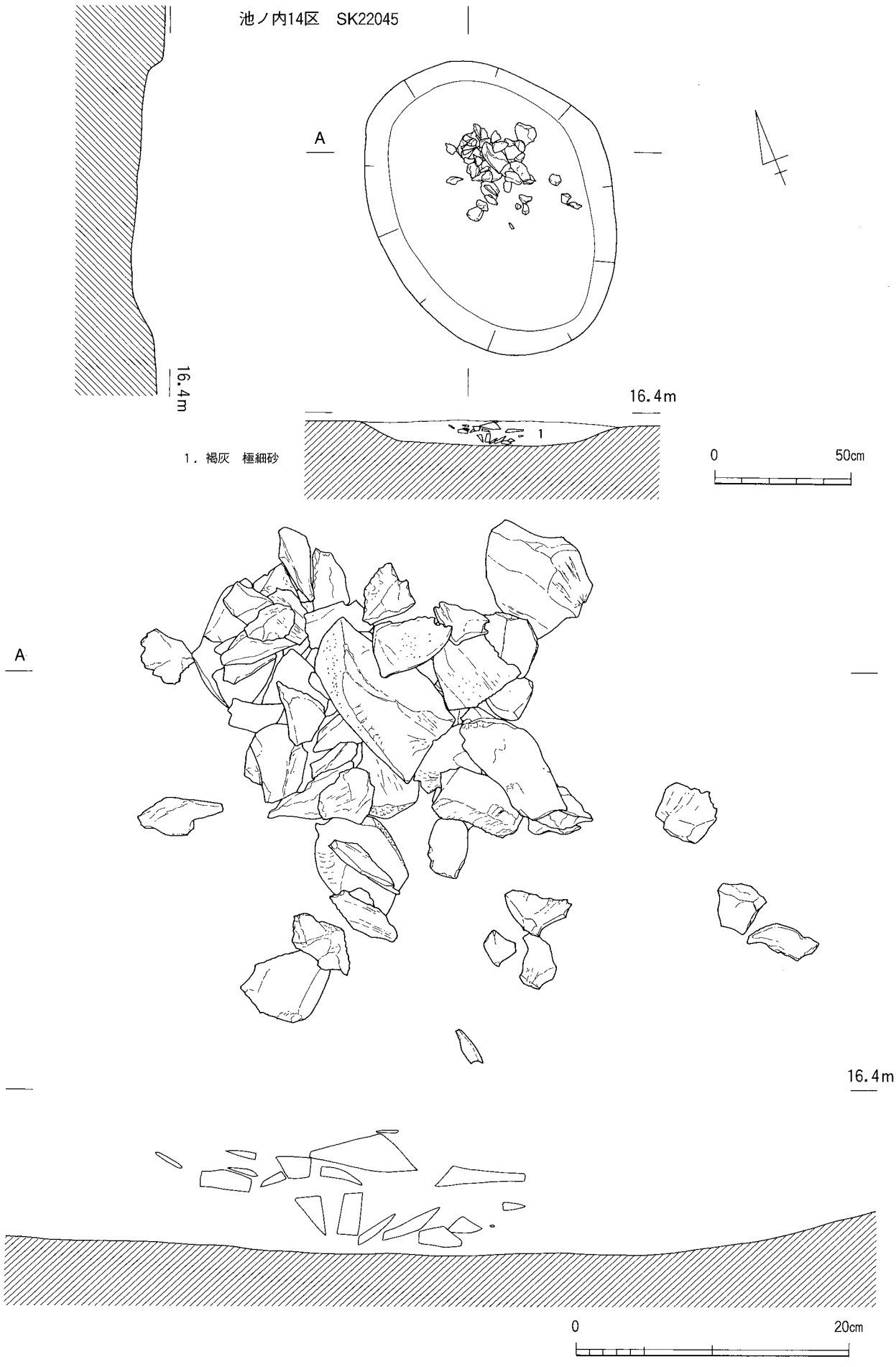
SK12006



1．黒　シルト質細砂
2．暗オリーブ灰　シルト質細砂
3．暗灰黄　細砂
4．黄灰　シルト質細砂
5．灰　シルト質極細砂
6．灰　シルト質細砂
7．黒褐　細砂
8．黄灰　細砂
9．黒　シルト質極細砂
10．暗灰黄　細砂
11．灰　シルト質細砂
12．黄灰　細砂
13．灰　シルト質細砂
14．黒　細砂
15．黄灰　細砂

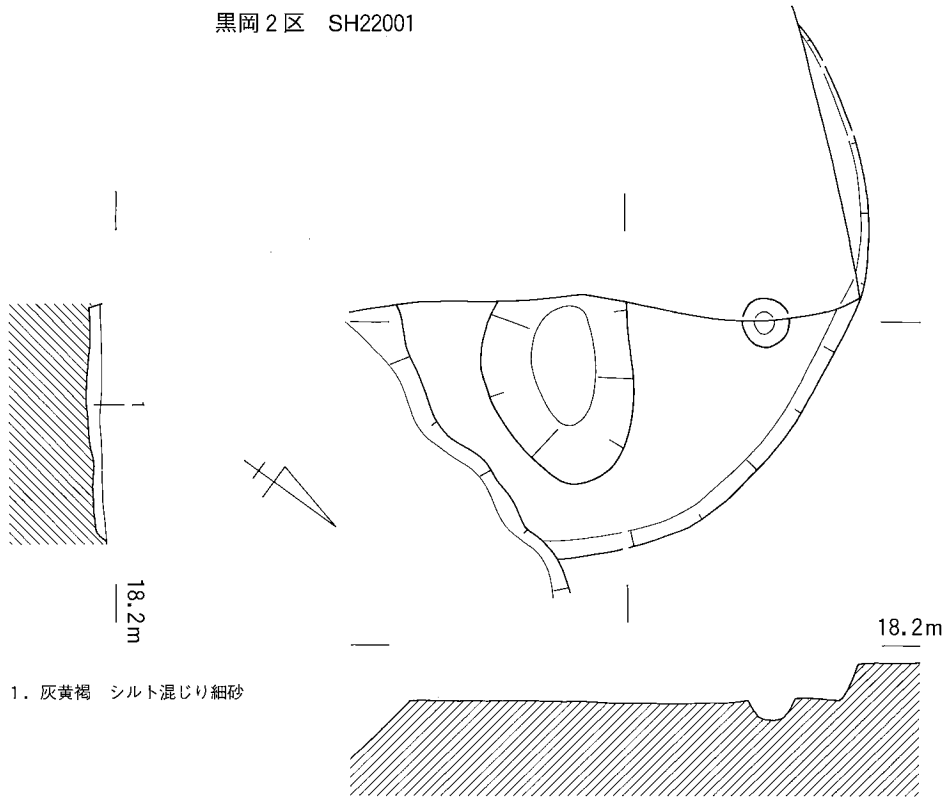
0　4m

縄文時代　土坑 2



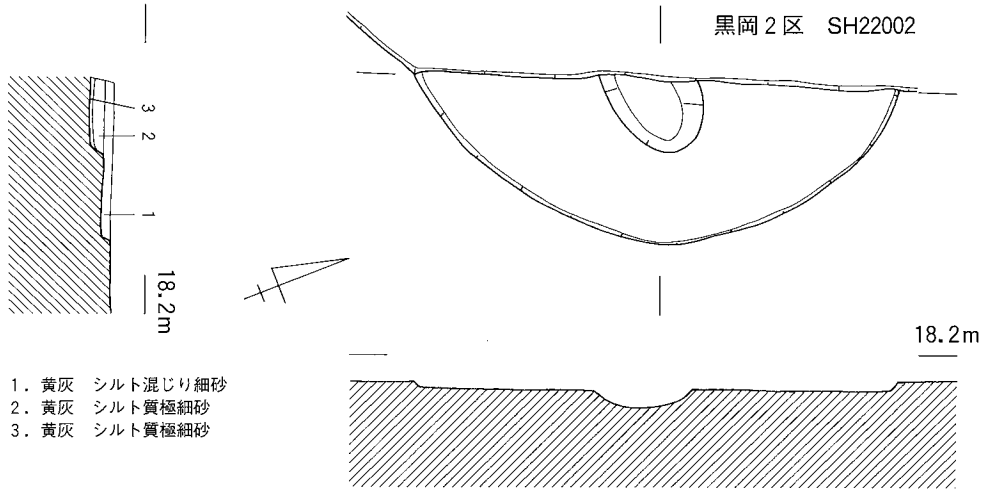
弥生時代前期　住居跡１

黒岡２区　SH22001



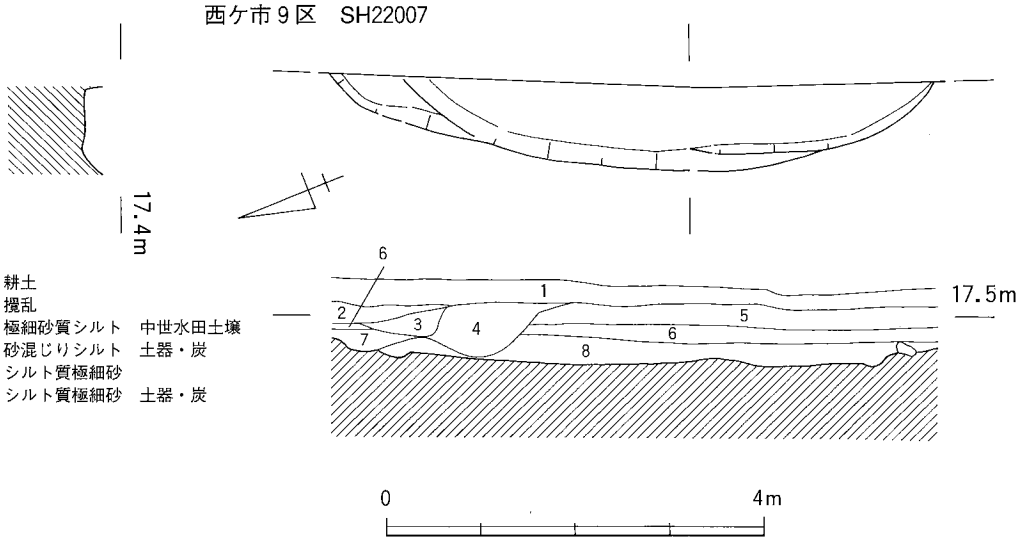
1．灰黄褐　シルト混じり細砂

黒岡２区　SH22002



1．黄灰　シルト混じり細砂
2．黄灰　シルト質極細砂
3．黄灰　シルト質極細砂

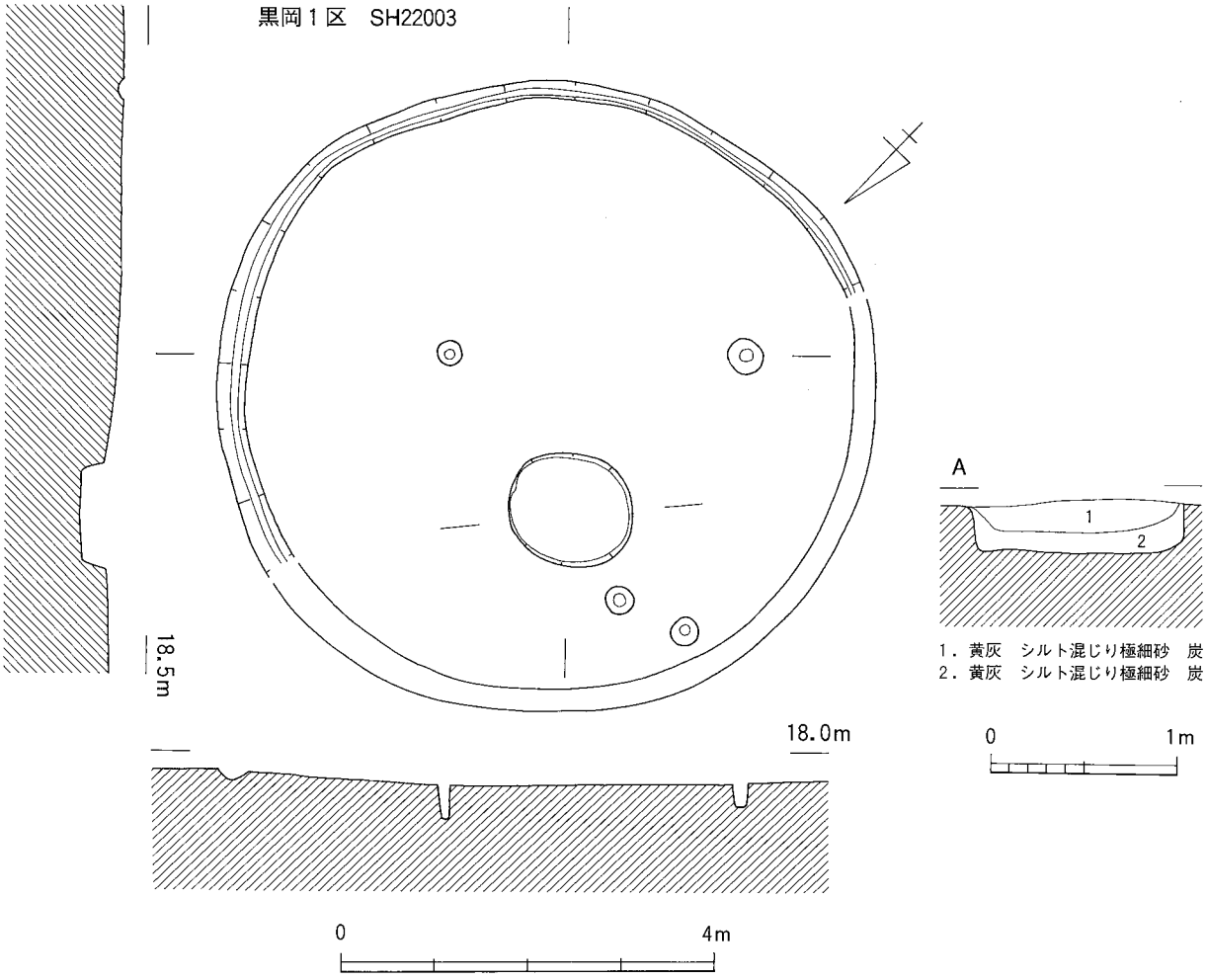
西ケ市９区　SH22007

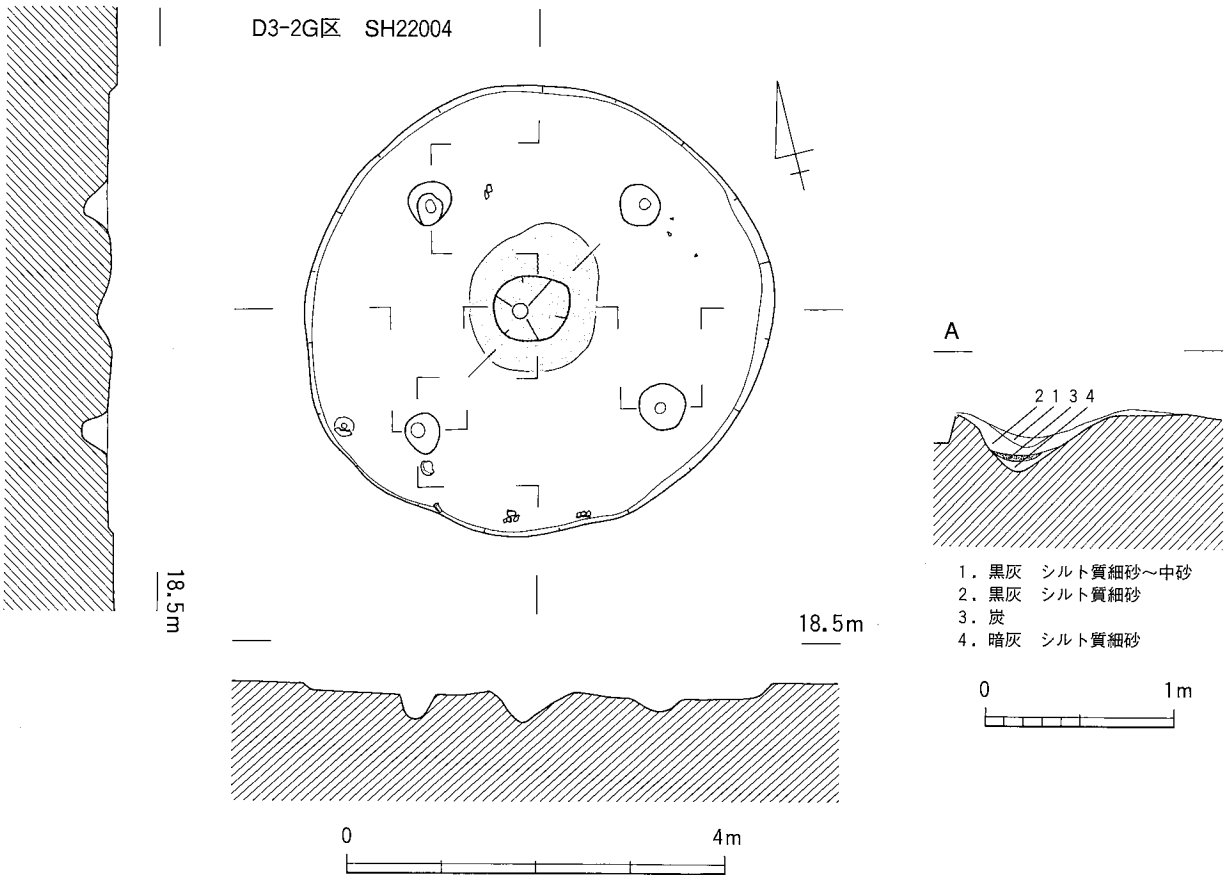


1．　　耕土
2～4．　攪乱
5．灰　　極細砂質シルト　中世水田土壌
6．暗青灰　砂混じりシルト　土器・炭
7．黒褐色　シルト質極細砂
8．紫黒　　シルト質極細砂　土器・炭

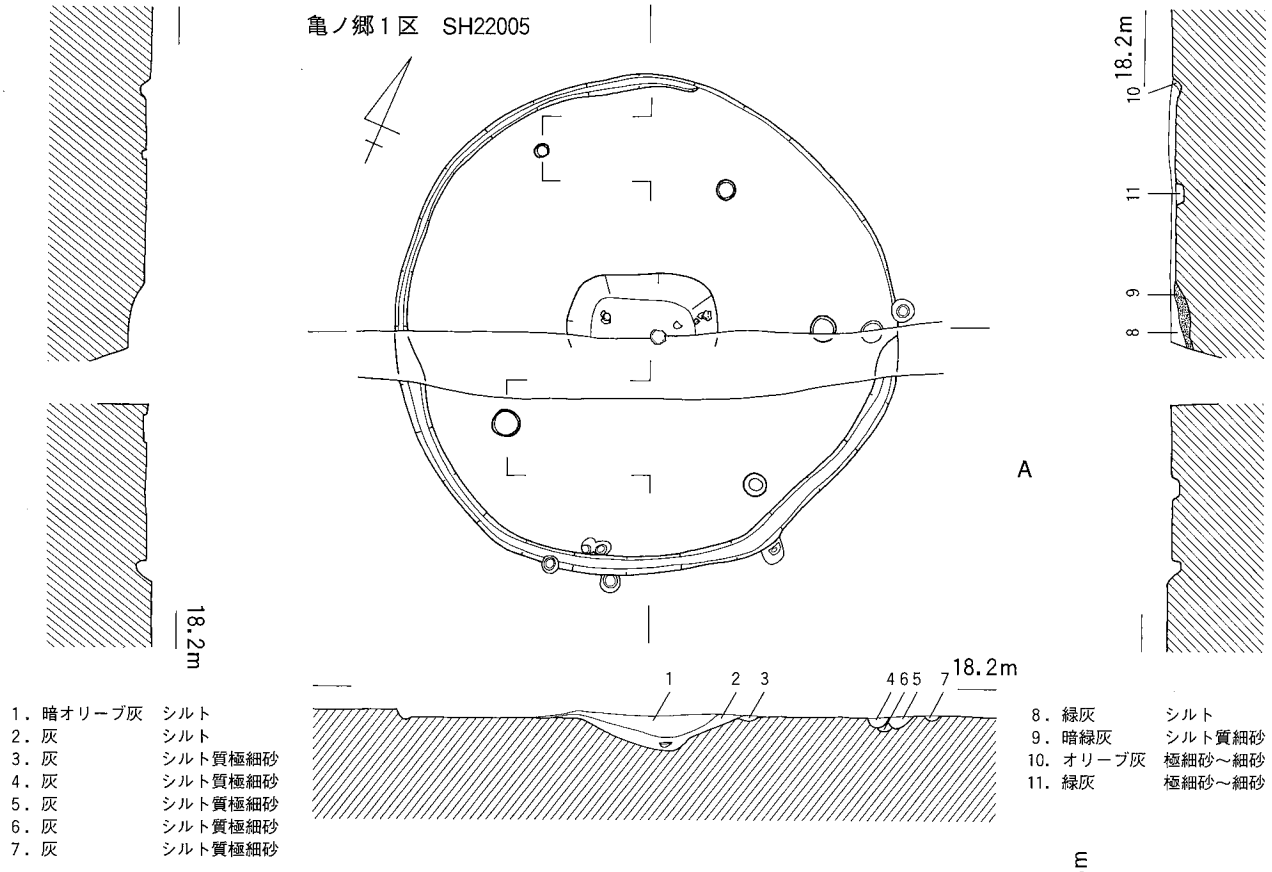
図版12
SH22003/22004

弥生時代前期　住居跡 2

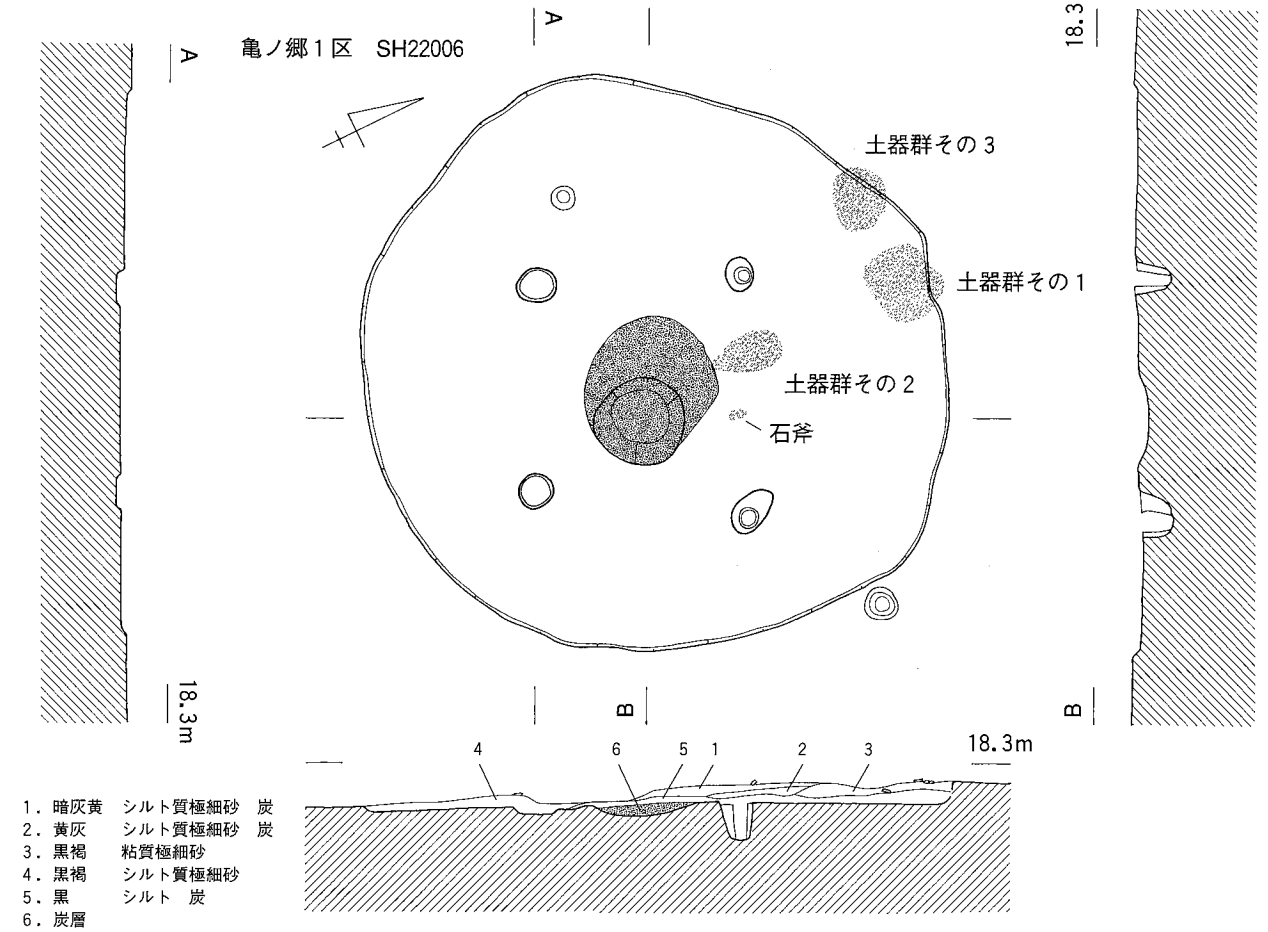




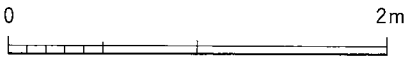
弥生時代前期　住居跡３



1．暗オリーブ灰　シルト
2．灰　シルト
3．灰　シルト質極細砂
4．灰　シルト質極細砂
5．灰　シルト質極細砂
6．灰　シルト質極細砂
7．灰　シルト質極細砂
8．緑灰　シルト
9．暗緑灰　シルト質細砂
10．オリーブ灰　極細砂～細砂
11．緑灰　極細砂～細砂

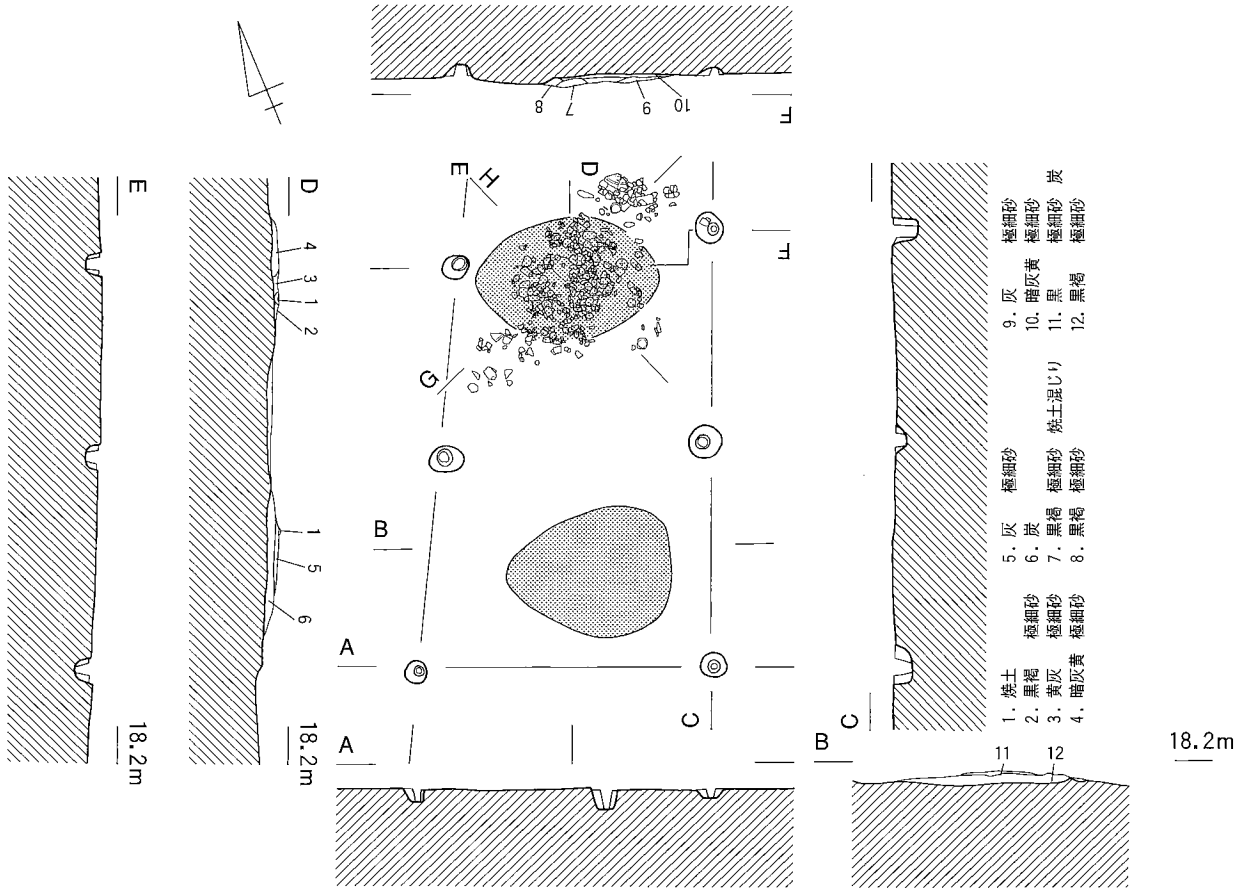


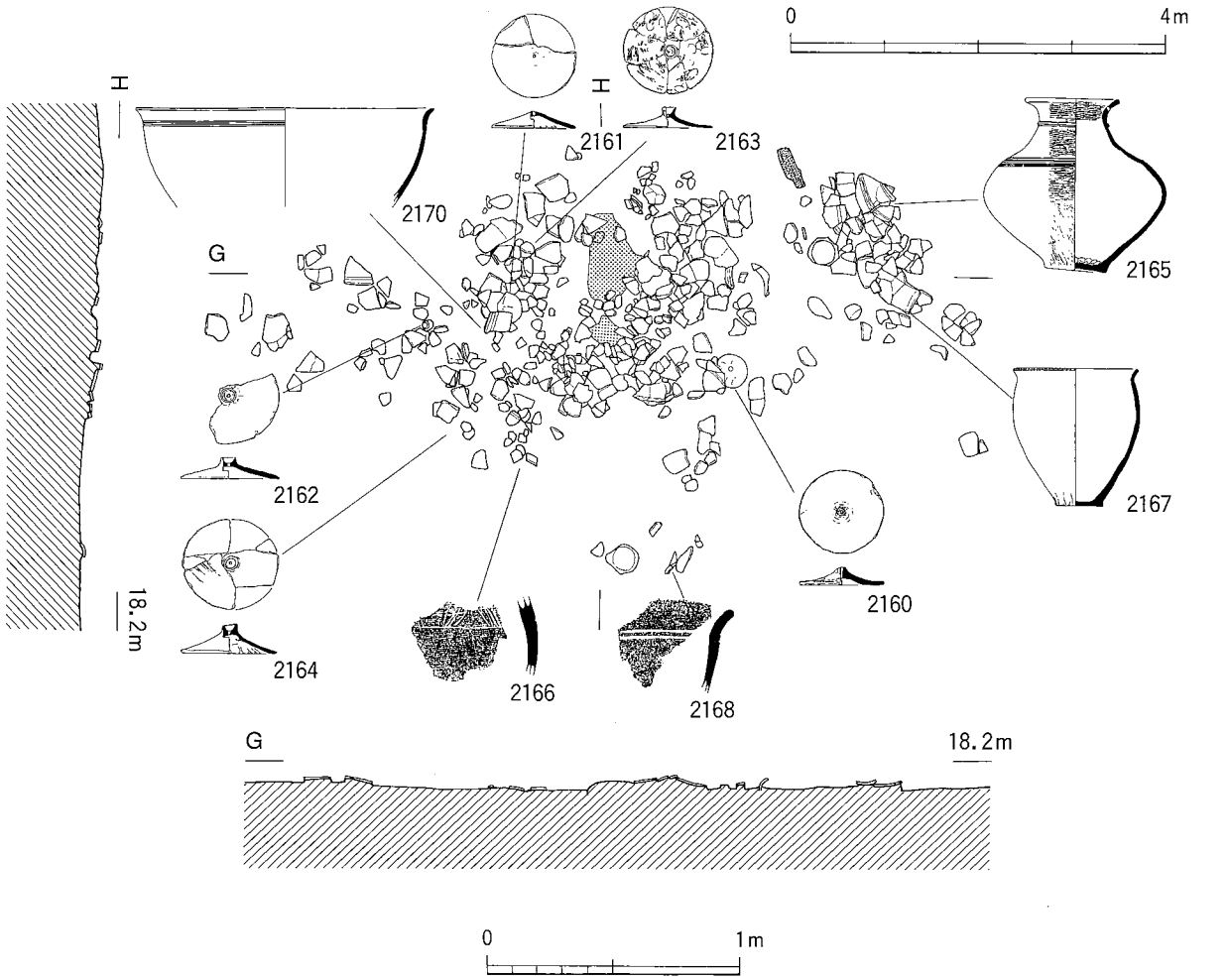
1．暗灰黄　シルト質極細砂　炭
2．黄灰　シルト質極細砂　炭
3．黒褐　粘質極細砂
4．黒褐　シルト質極細砂
5．黒　シルト　炭
6．炭層



図版14
SB22001

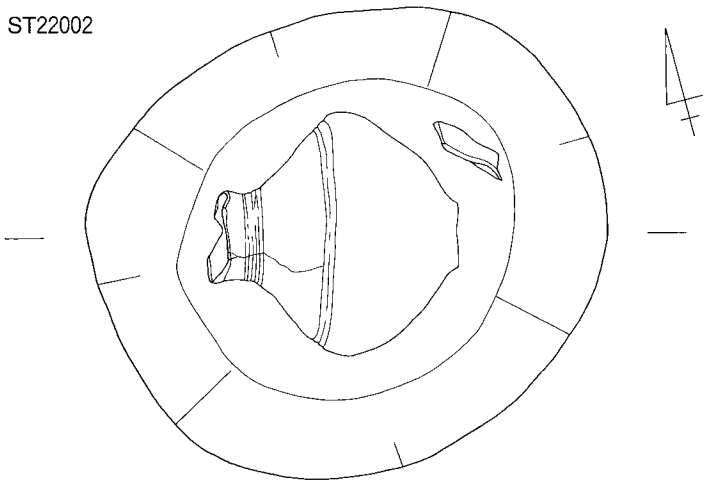
弥生時代前期　掘立柱建物



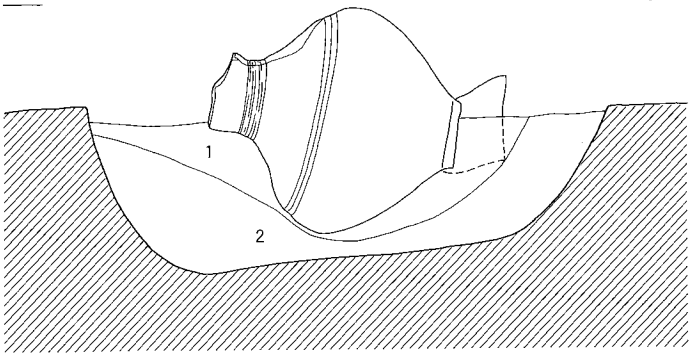


弥生時代前期　土器棺墓

黒岡１区　ST22002

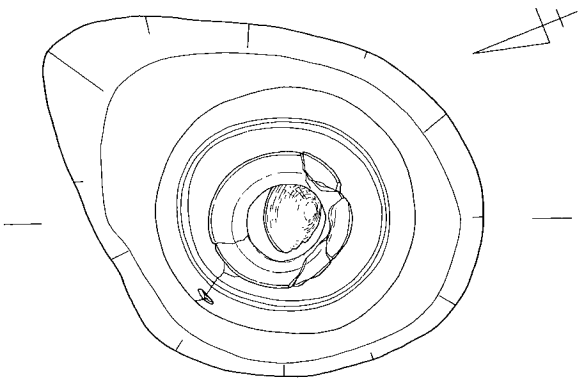


18.1m

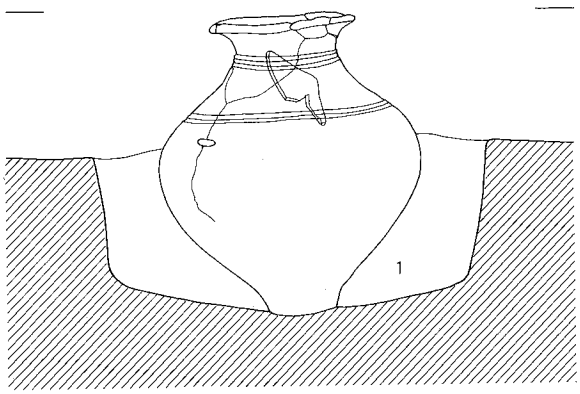


1．暗灰黄　シルト質極細砂
2．暗灰黄　極細砂

黒岡２区　ST22001



18.2m

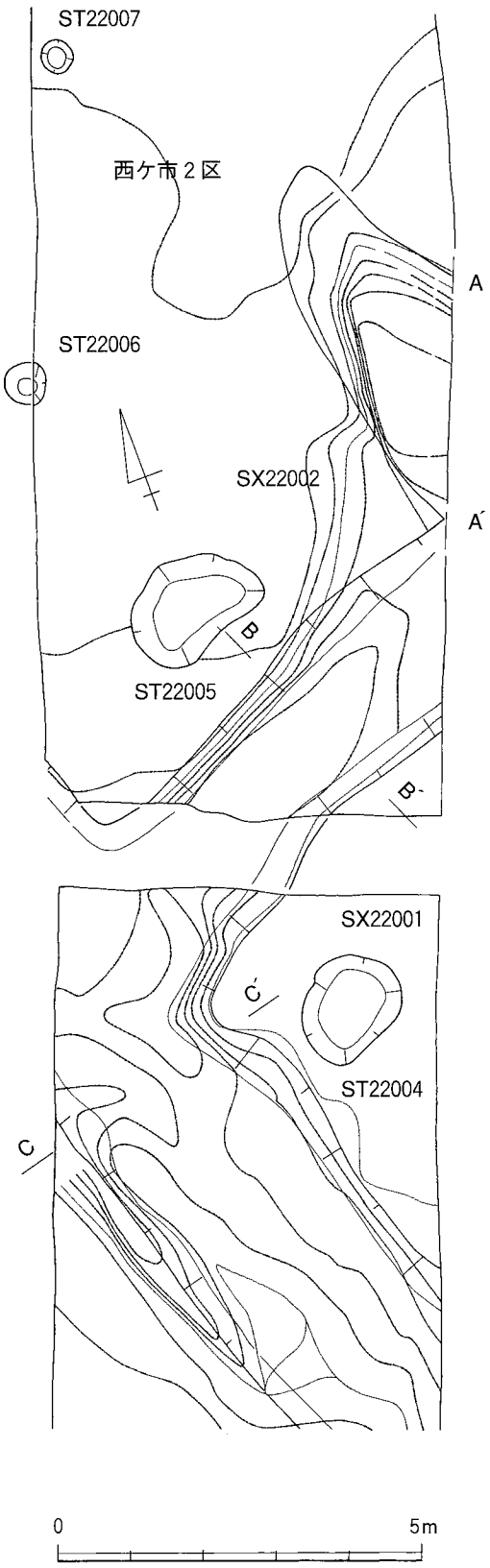


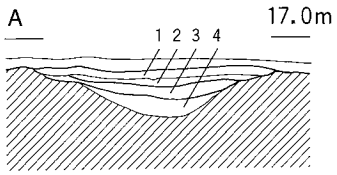
1．暗灰黄　シルト質極細砂

図版16

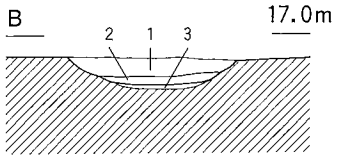
SX22001/22002/ST22007

弥生時代前期　方形周溝墓

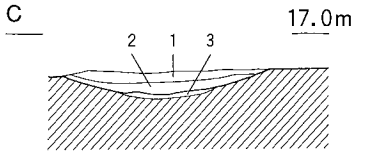




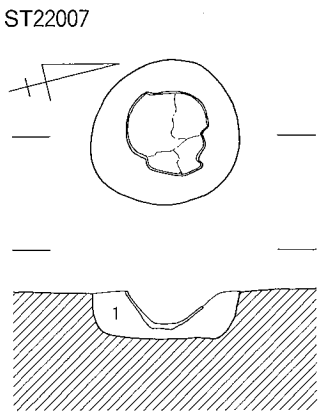
1．灰　シルト質極細砂
2．灰　シルト質細砂
3．灰　シルト質中砂
4．灰　中砂～粗砂　礫多い



1．灰　　極細砂
2．黄灰　極細砂
3．黒褐　礫混じり粗砂



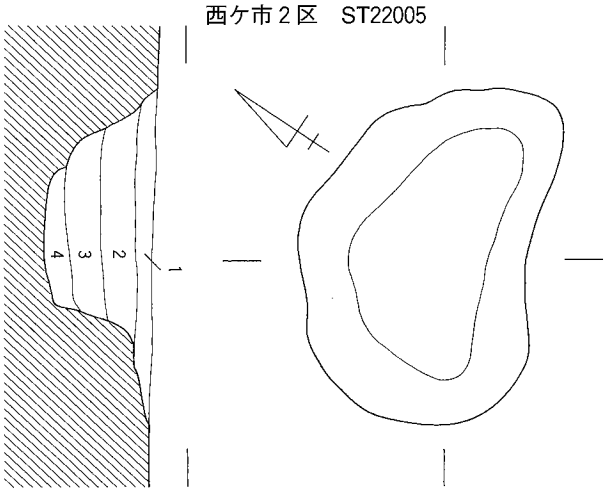
1．灰　　極細砂
2．黄灰　極細砂
3．黒褐　礫混じり粗砂

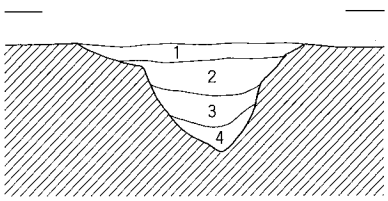


1．灰　7.5Y4/1　シルト質極細砂

弥生時代前期　土坑墓・木棺墓

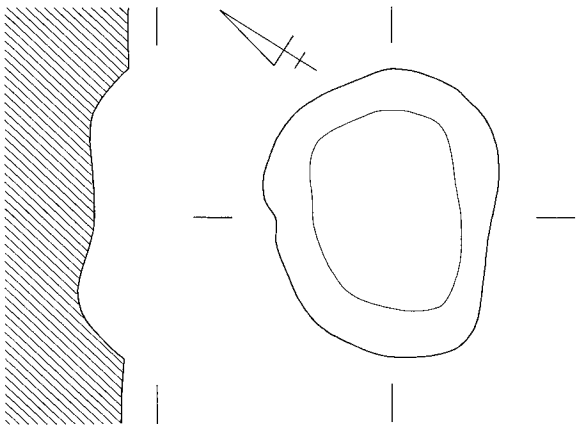
西ケ市２区　ST22005

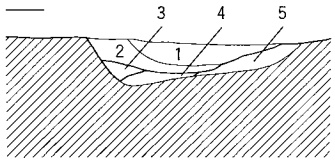




1．黒褐　極細砂
2．黒褐　礫混じり細砂
3．黒褐　極細砂
4．黒褐　細砂混じりシルト

西ケ市２区　ST22004

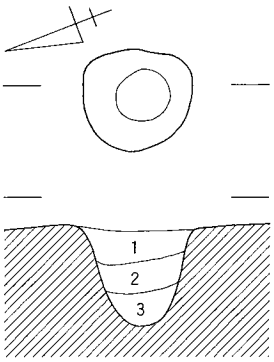




1．灰　シルト質極細砂～細砂
2．灰　中砂～シルト質極細砂
3．暗オリーブ灰　細砂～シルト質極細砂　炭
4．オリーブ灰　シルト質極細砂～中砂
5．灰　シルト質極細砂～細砂

0　2m

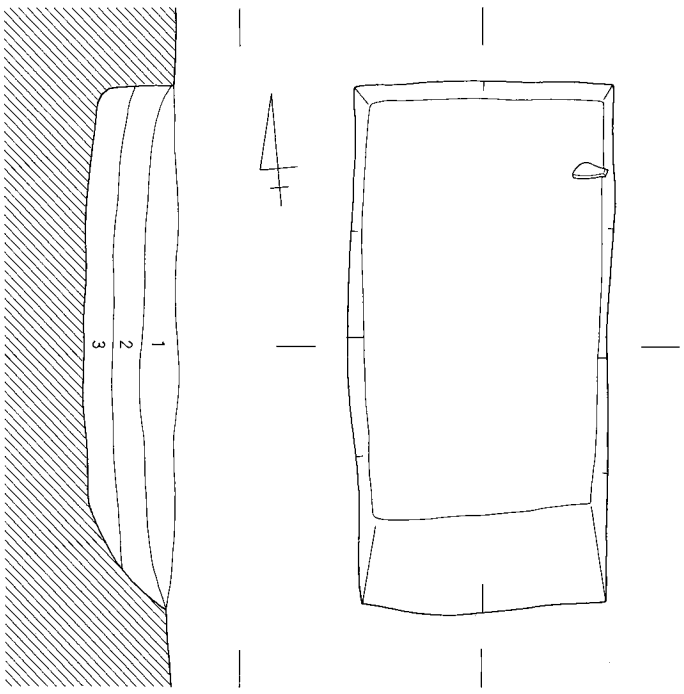
西ケ市２区　ST22006

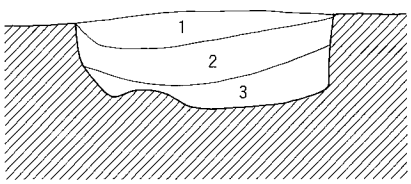


1．褐灰　シルト質細砂
2．灰　シルト質極細砂
3．灰　中砂～シルト質極細砂

0　1m

黒岡２区　ST22003





1．オリーブ黒　シルト質細砂
2．黒褐　シルト質極細砂
3．黒　シルト質極細砂～細砂

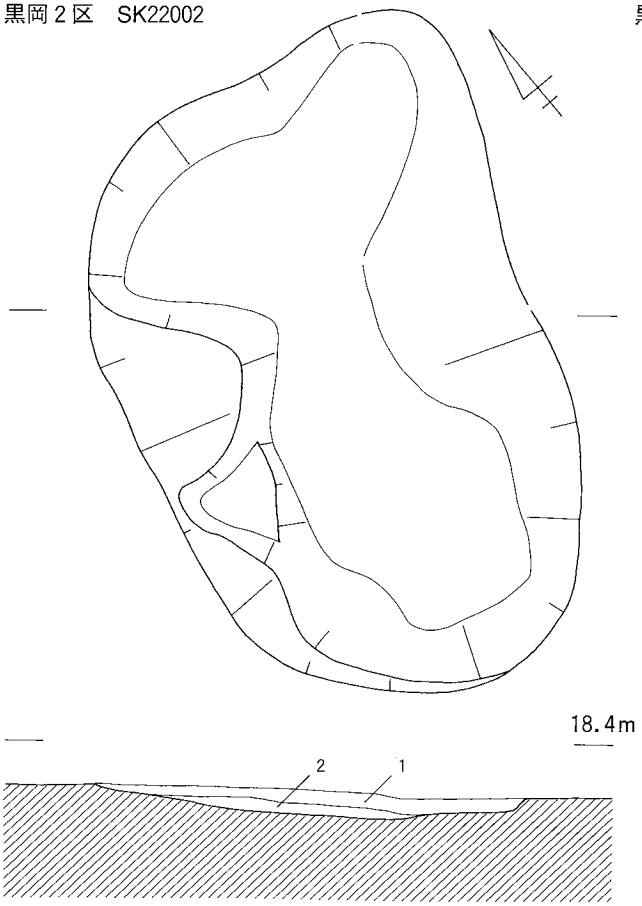
0　1m

図版18

SK22002/22004/22007/22010

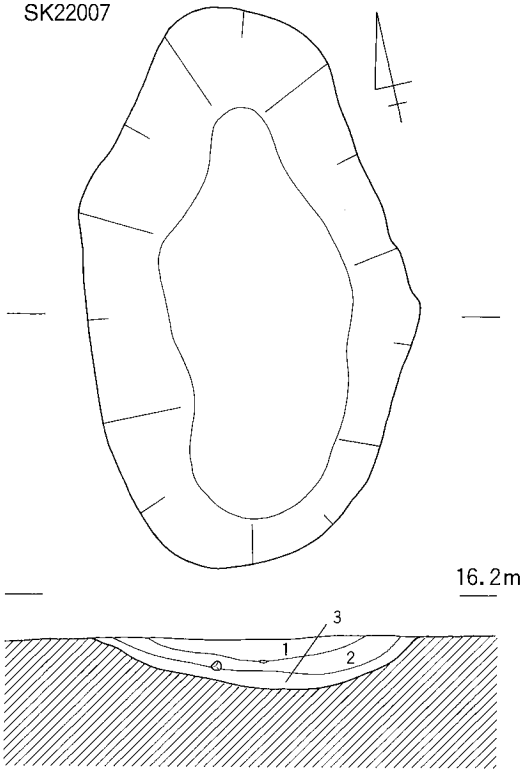
弥生時代前期　土坑1

黒岡2区　SK22002



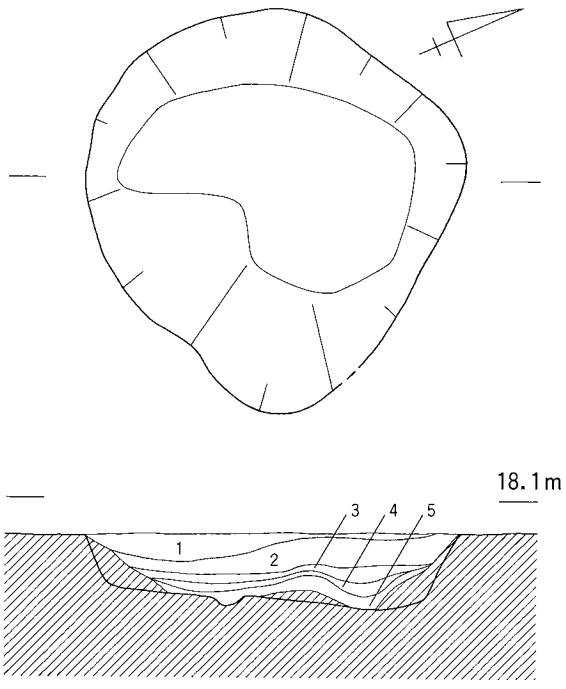
1．灰黄褐　シルト極細砂
2．黄灰　　シルト混じり極細砂

黒岡2区　SK22007



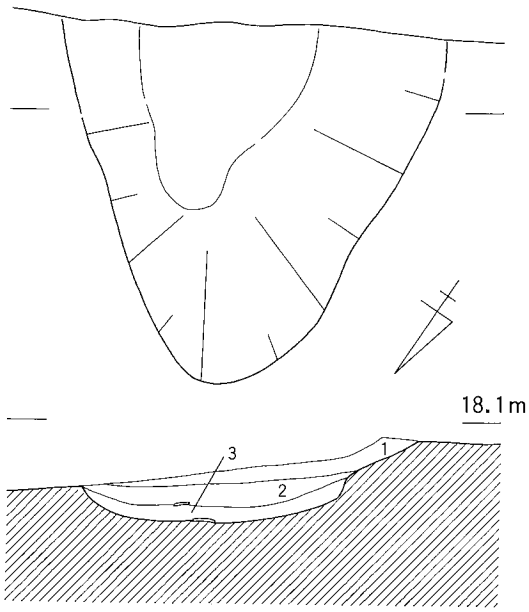
1．黄灰　シルト混じり極細砂
2．黄灰　シルト質極細砂　土器・炭
3．灰　　シルト混じり極細砂　土器

黒岡2区　SK22010

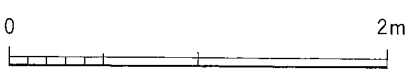


1．暗灰黄　シルト
2．暗灰黄　シルト質極細砂
3．黄灰　　シルト
4．暗灰黄　シルト質極細砂　炭層
5．暗灰黄　シルト質極細砂　焼土

黒岡2区　SK22004



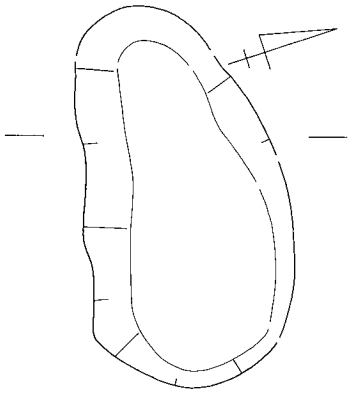
1．黒褐　シルト
2．灰　　細砂質シルト
3．黄灰　中砂質シルト



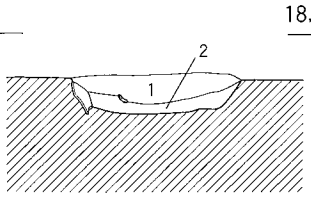
弥生時代前期　土坑 2

SK22001/22003/22005/22006/22008/22009/22011/22017

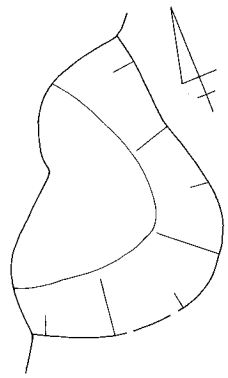
SD22002



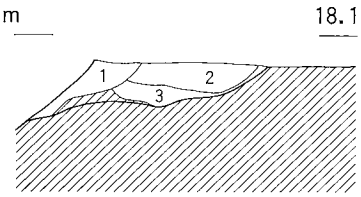
黒岡 2 区　SK22001



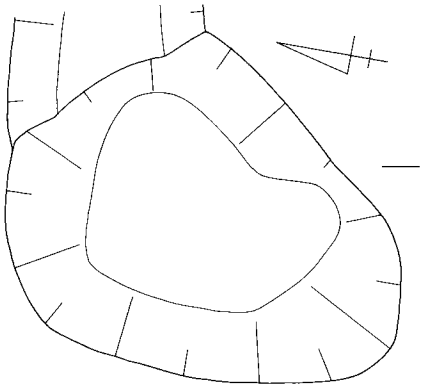
1．灰　　シルト質細砂　炭
2．黒褐　シルト質極細砂



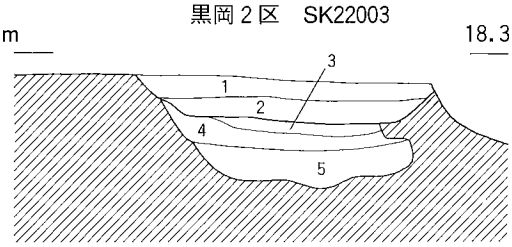
黒岡 2 区　SK22005



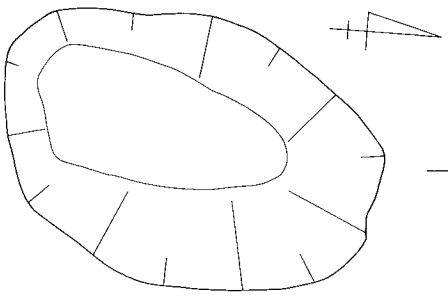
1．黄灰　シルト質極細砂
2．黄灰　シルト混じり極細砂
3．黄灰　シルト質極細砂



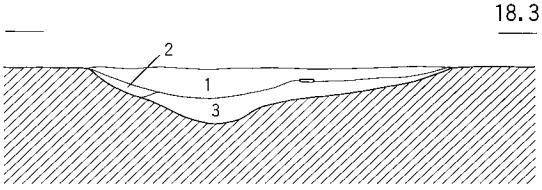
黒岡 2 区　SK22003



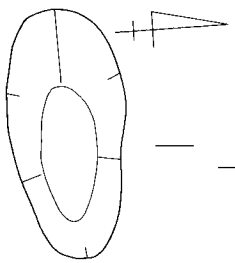
1．黄灰　極細砂質シルト
2．黄灰　シルト質極細砂　炭
3．黄灰　細砂　シルト混じり　炭
4．灰　　細砂　シルト混じり　炭　} SD22002
5．灰　　細砂　炭



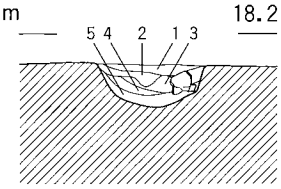
黒岡 2 区　SK22009



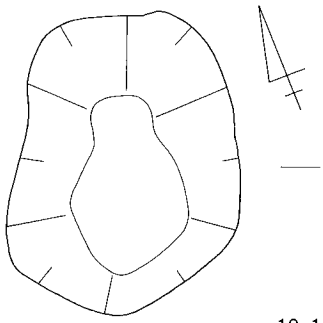
1．灰　シルト質細砂　炭
2．灰　シルト質細砂　炭
3．灰　細砂　炭



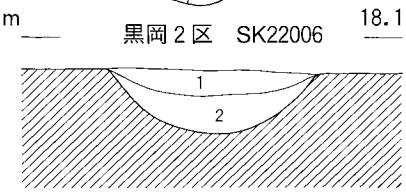
黒岡 2 区　SK22011



1．暗灰黄　シルト質極細砂　ドングリ
2．黒褐　　シルト　　ドングリ
3．暗灰黄　シルト質極細砂　ドングリ
4．暗灰黄　シルト～シルト質極細砂　ドングリ
5．黄褐　　シルト極細砂　ドングリ

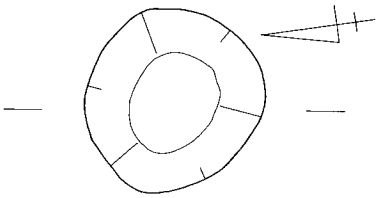


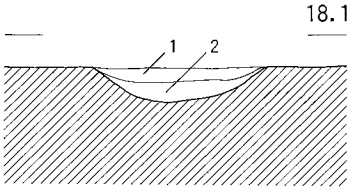
黒岡 2 区　SK22006



1．黄灰　シルト質細砂
2．黄灰　シルト混じり細砂

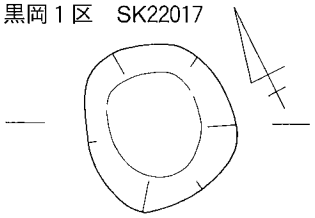
黒岡 2 区　SK22008

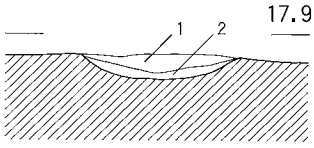




1．暗灰黄　シルト質細砂
2．暗灰黄　シルト質極細砂

黒岡 1 区　SK22017





1．黄灰　シルト質極細砂
2．灰黄　極細砂

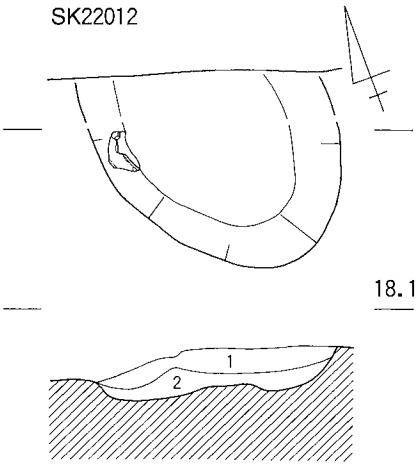
図版20

SK22012～22016/22018～22020

（黒岡１区）

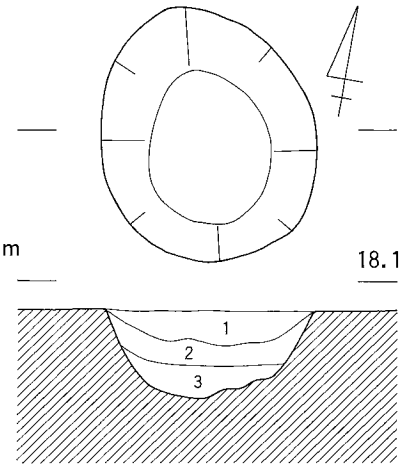
弥生時代前期　土坑３

SK22012



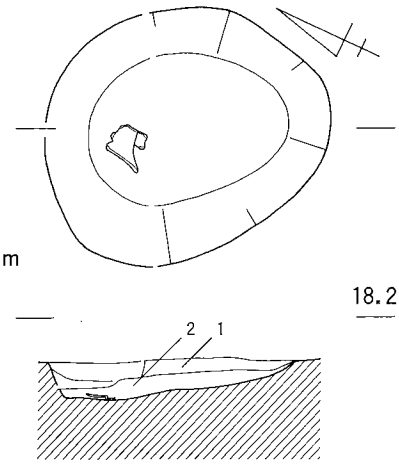
1．黄灰　シルト混じり極細砂～細砂
2．灰　　シルト混じり極細砂

SK22013



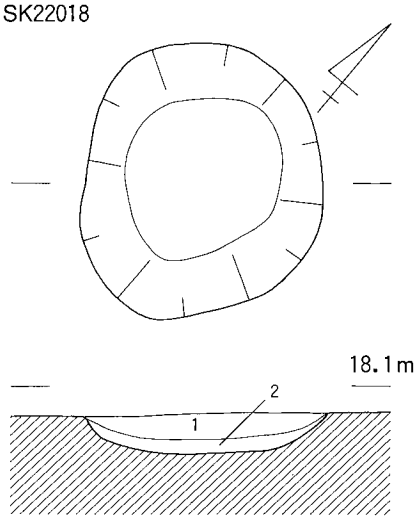
1．暗灰黄　シルト質極細砂
2．暗灰黄　極細砂
3．暗灰黄　極細砂混じりシルト　炭

SK22016



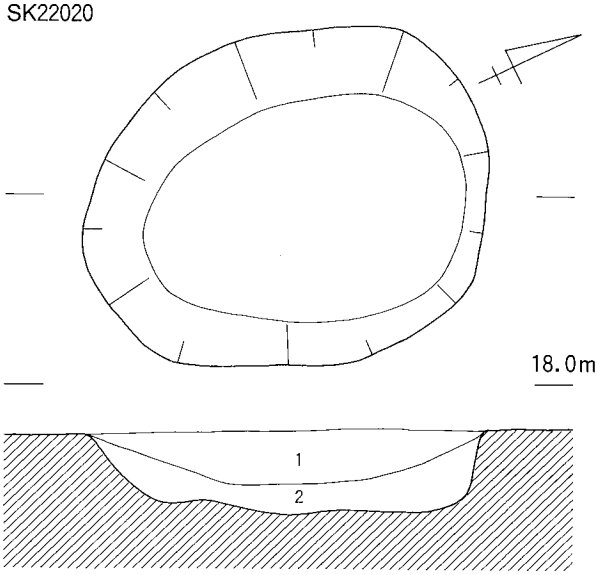
1．褐灰　シルト混じり細砂
2．褐灰　シルト混じり極細砂　炭

SK22018



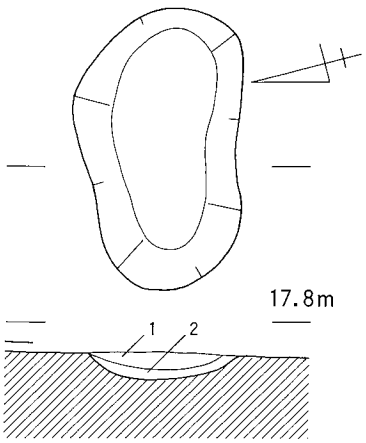
1．黄褐　　シルト質極細砂
2．暗灰灰　シルト

SK22020



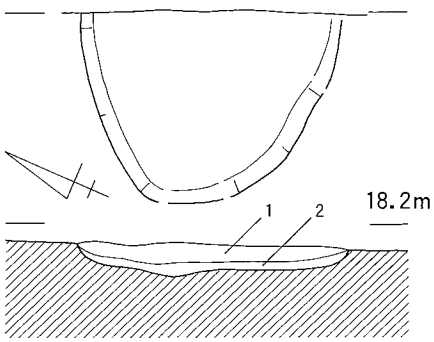
1．黒褐　シルト質細砂　土器多量・炭・焼土
2．黄灰　細砂　炭・焼土

SK22019



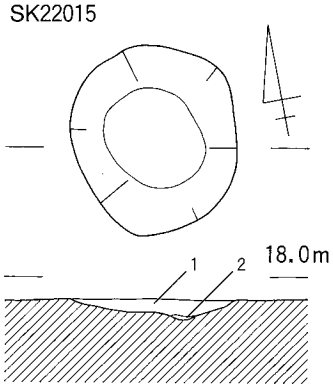
1．暗灰黄　シルト質極細砂　炭
2．黄灰　　極細砂

SK22014

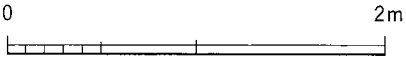


1．褐灰　シルト混じり細砂　炭
2．黄灰　シルト混じり極細砂

SK22015



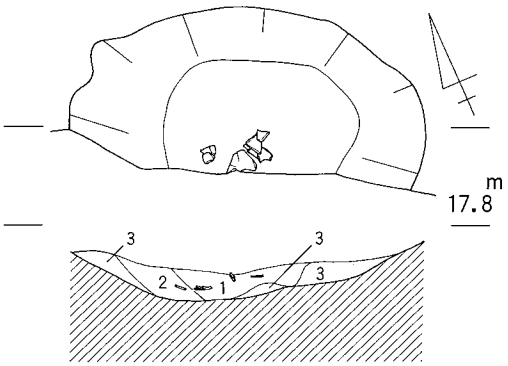
1．暗灰黄　シルト質極細砂
2．黄灰黄　シルト質極細砂　炭



弥生時代前期　土坑４

SK22021/22025～22027/22030/22034

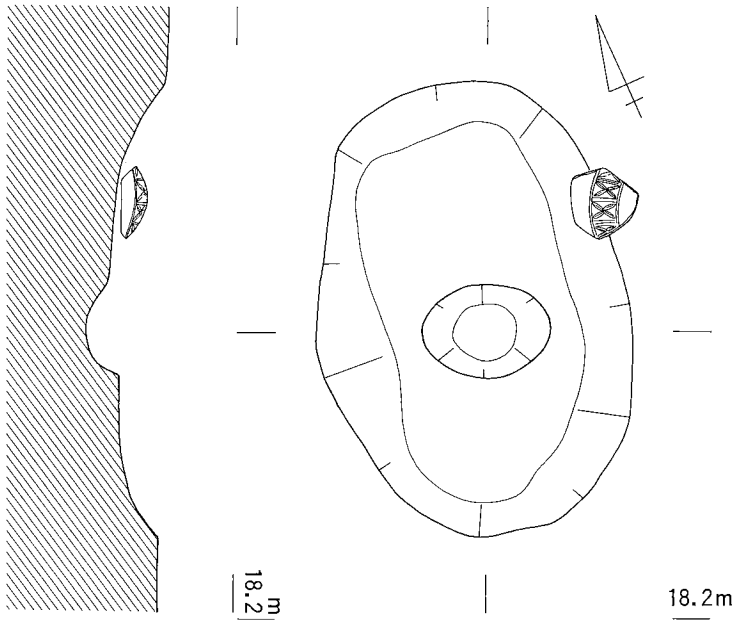
KM７区　SK22021



1．褐灰　シルト質極細砂　炭・焼土
2．淡黄灰　極細砂　炭
3．淡黄灰　極細砂

0　4m

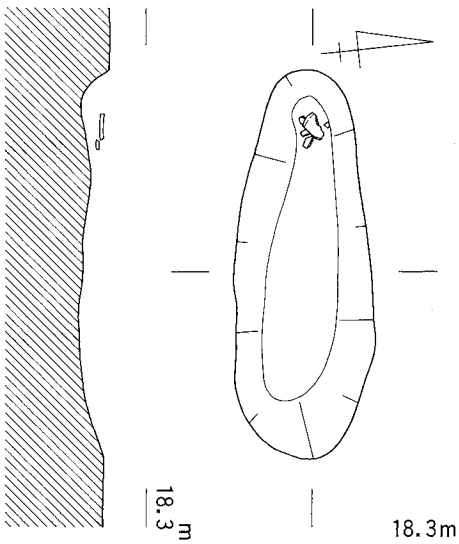
亀ノ郷１区　SK22034



1．黒褐　シルト質極細砂
2．灰　細砂混じり極細砂
3．灰　シルト質極細砂　炭
4．オリーブ黒　シルト質極細砂

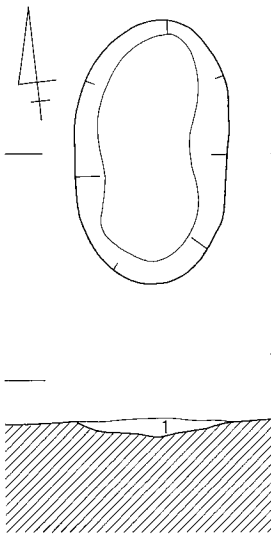
0　1m

D3-2G区　SK22025



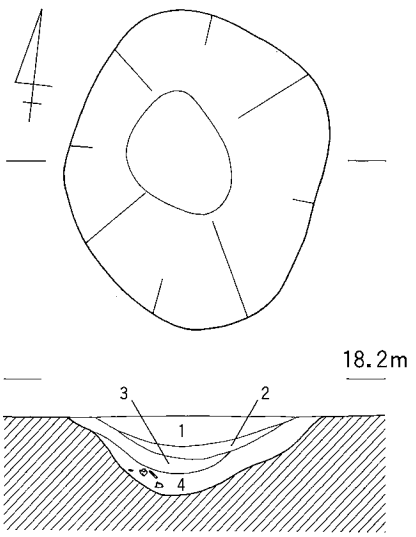
1．暗褐　シルト混じり細砂～中砂
2．黒灰　シルト混じり細砂～中砂
3．暗青灰　細砂～中砂

D3-2G区　SK22030



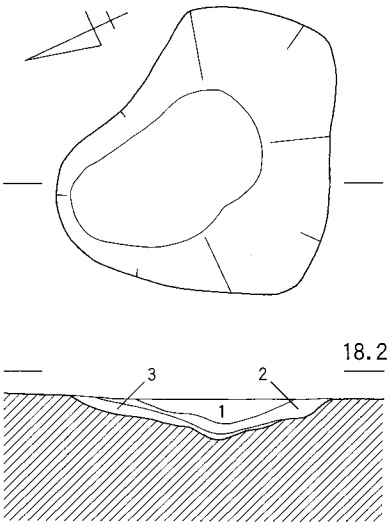
1．黒灰　細砂～中砂　炭

D3-2G区　SK22026



1．黒灰　中砂混じりシルト
2．暗灰　シルト
3．黒灰　中砂
4．黒灰　中砂～細礫

D3-2G区　SK22027



1．暗灰　シルト
2．黒灰　細砂～極細砂質シルト　炭
3．暗青灰　シルト混じり細砂

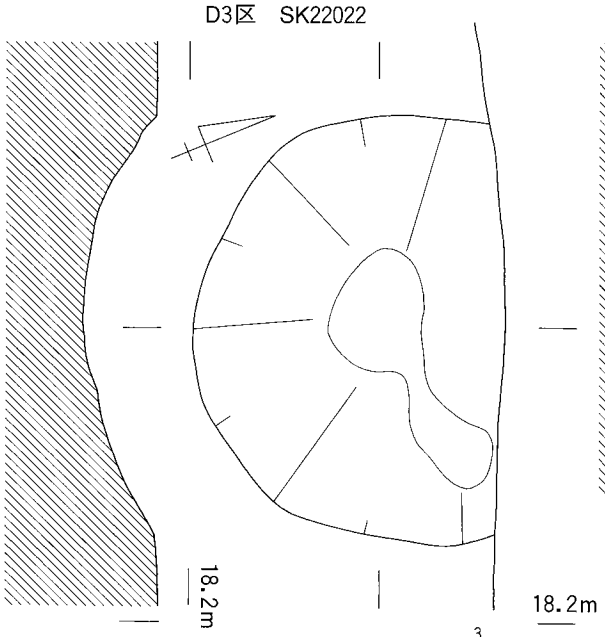
0　2m

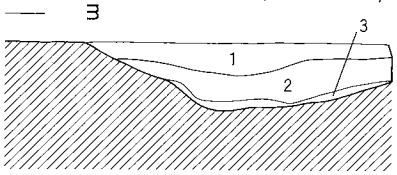
図版22

SK22022～22024/22028/22029/22032

弥生時代前期　土坑5

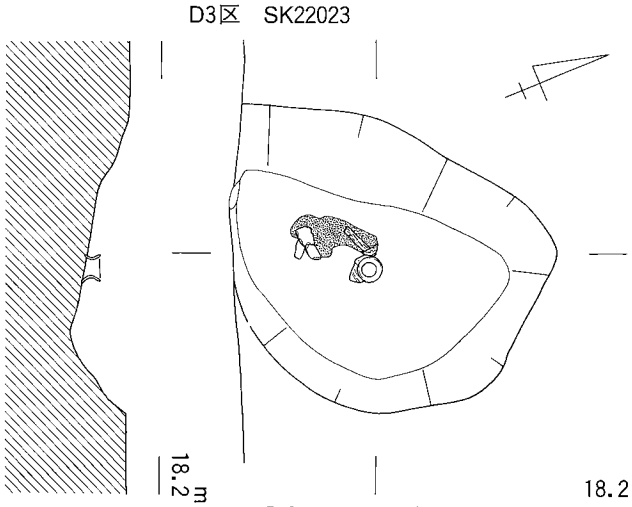
D3区　SK22022

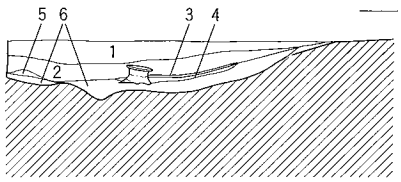




1．暗灰
　細砂～中砂混じりシルト
2．黒灰
　シルト質細砂～極細砂
3．暗青灰
　シルト混じり細砂

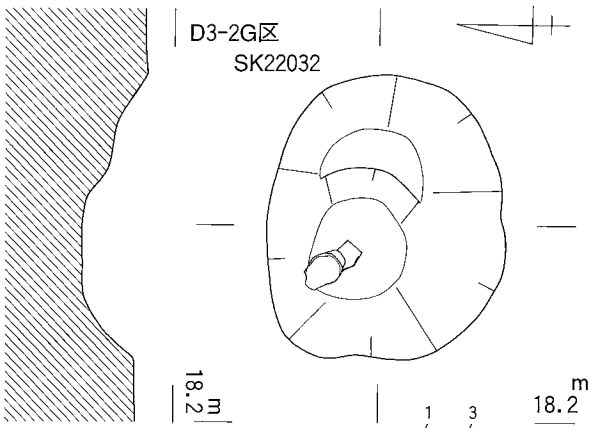
D3区　SK22023

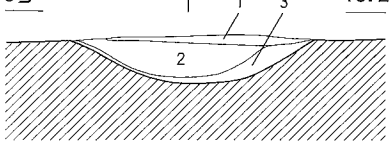




1．暗灰　極細砂質シルト
2．黒灰　極細砂混じりシルト
3．炭層
4．暗黒灰
　極細砂混じりシルト　炭
5．青灰　シルト混じり細砂
6．青灰　シルト混じり細砂　炭

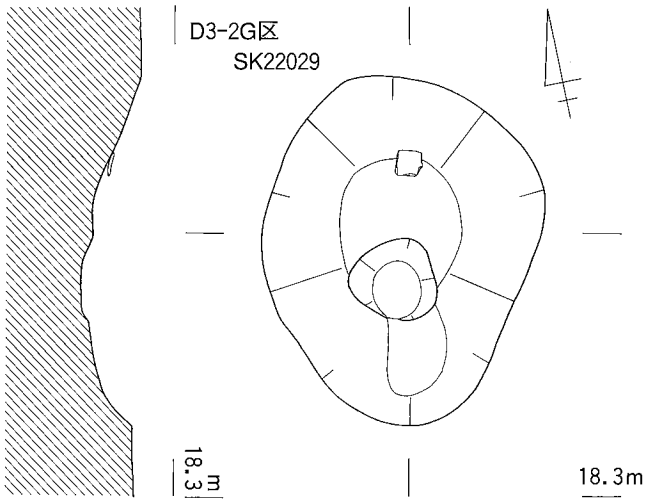
D3-2G区
SK22032

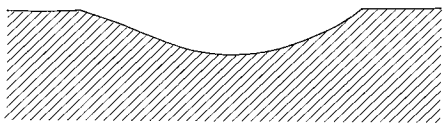




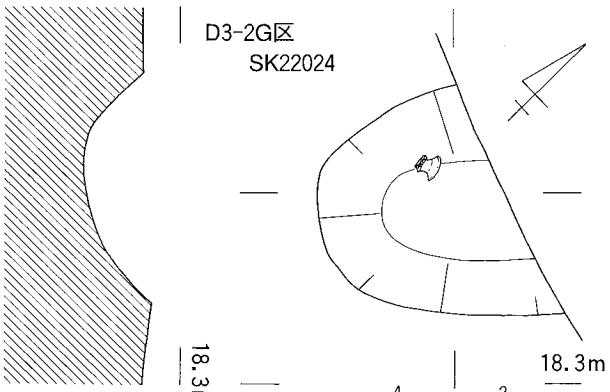
1．暗灰褐　シルト質中砂
2．淡青灰　シルト質細砂
3．黒灰　　シルト質細砂～中砂　炭
4．暗灰褐　シルト質中砂

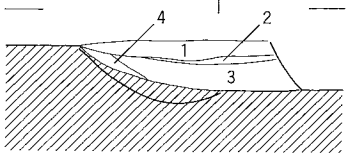
D3-2G区
SK22029





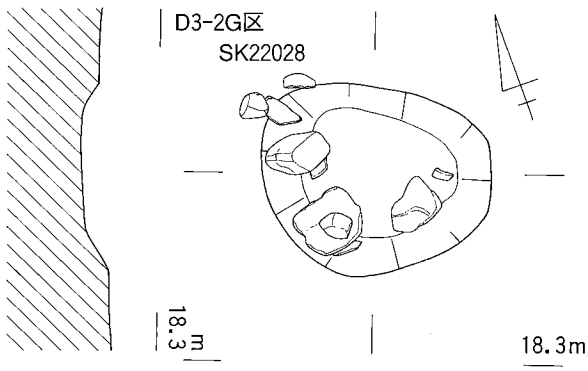
D3-2G区
SK22024

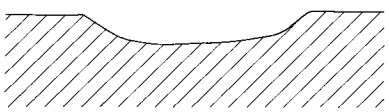




1．暗灰褐　シルト質中砂
2．淡青灰　シルト質細砂
3．黒灰　　シルト質細砂～中砂　炭
4．暗灰褐　シルト質中砂

D3-2G区
SK22028

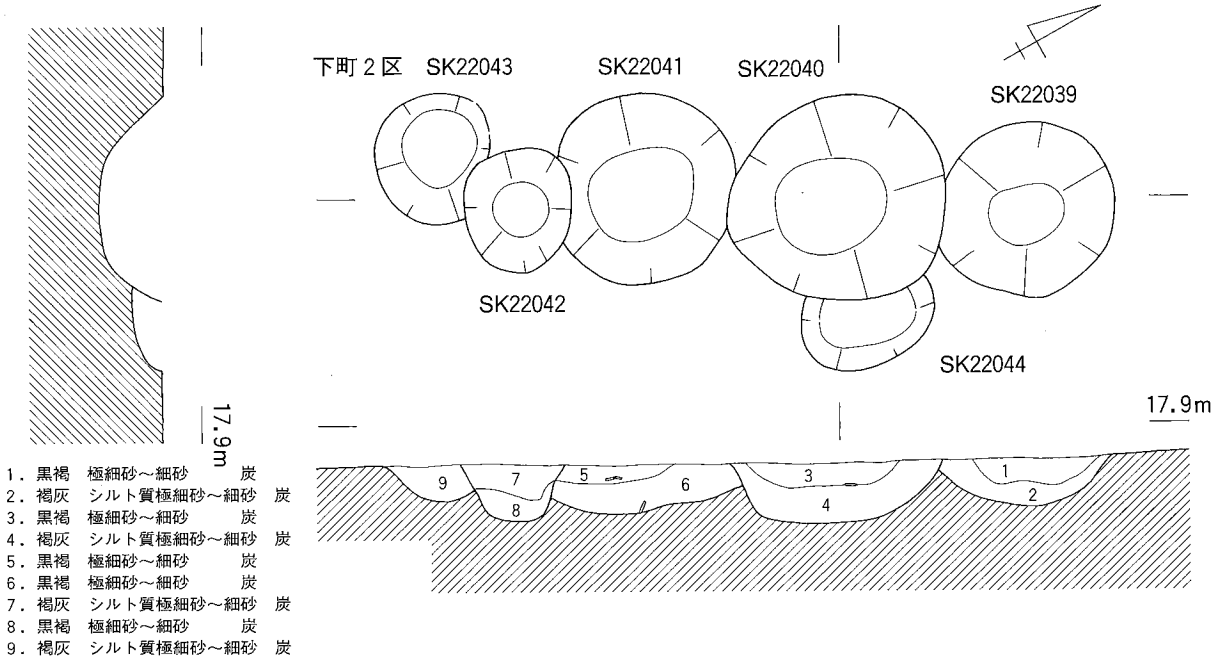


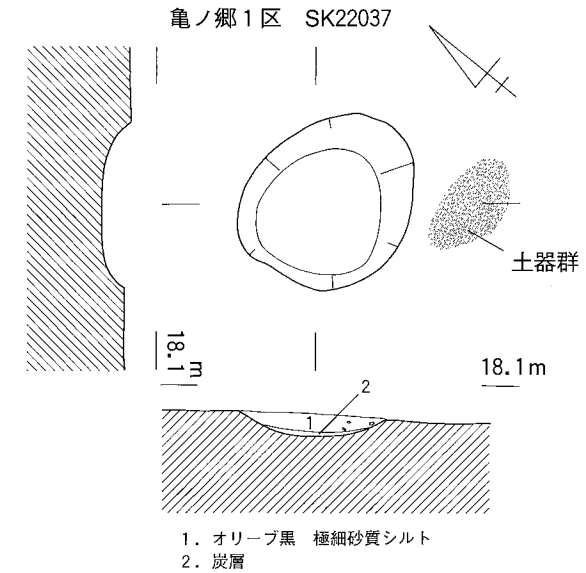


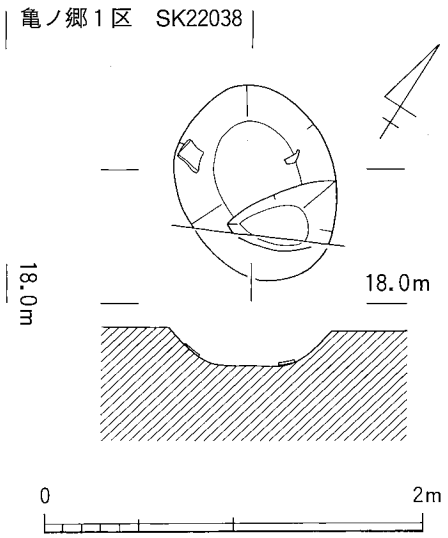
0　2m

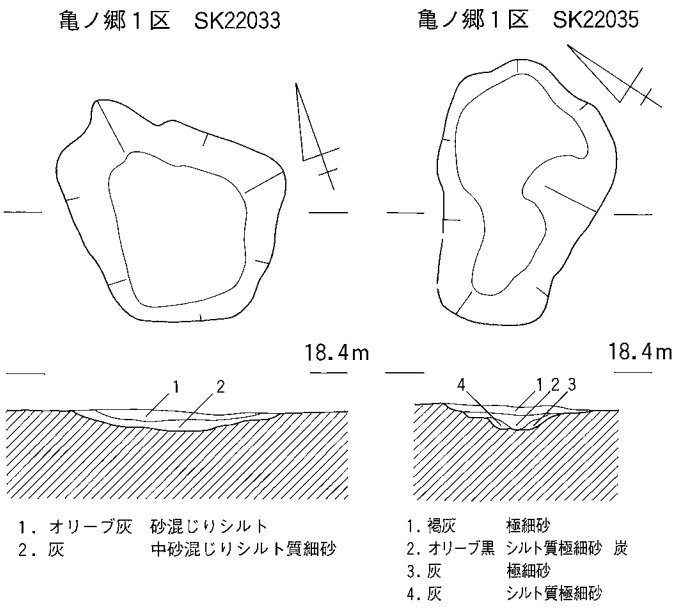
0　1m

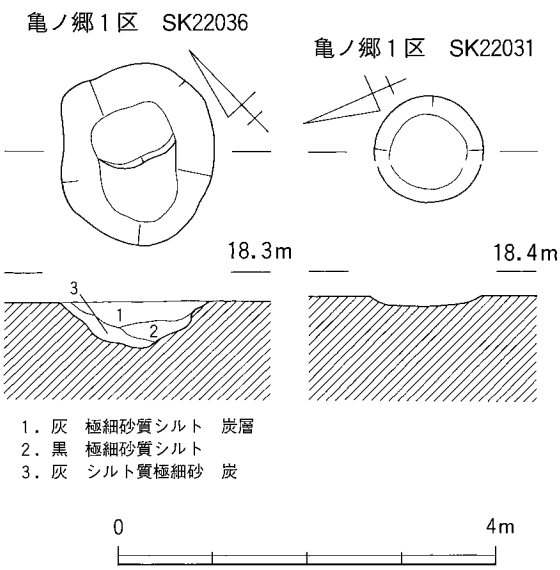
弥生時代前期　土坑６


下町２区　SK22043
SK22041
SK22040
SK22039
SK22042
SK22044
17.9m
17.9m
1．黒褐　極細砂～細砂　炭
2．褐灰　シルト質極細砂～細砂　炭
3．黒褐　極細砂～細砂　炭
4．褐灰　シルト質極細砂～細砂　炭
5．黒褐　極細砂～細砂　炭
6．黒褐　極細砂～細砂　炭
7．褐灰　シルト質極細砂～細砂　炭
8．黒褐　極細砂～細砂　炭
9．褐灰　シルト質極細砂～細砂　炭

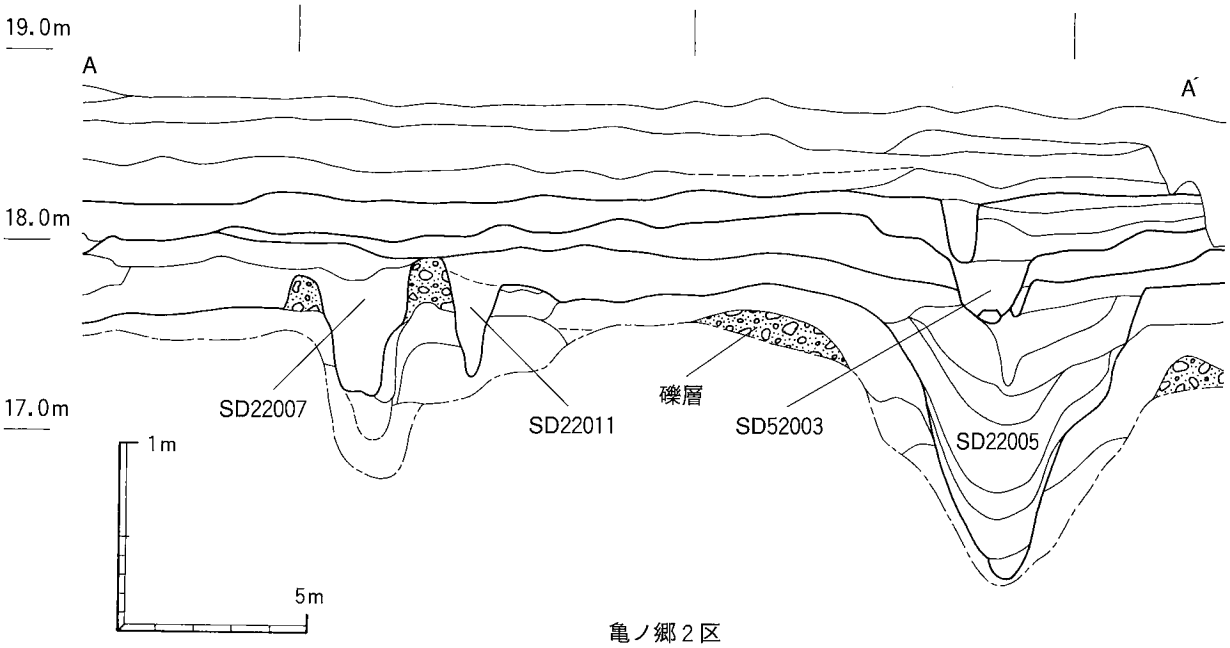

亀ノ郷１区　SK22037
土器群
18.1m
18.1m
1．オリーブ黒　極細砂質シルト
2．炭層


亀ノ郷１区　SK22038
18.0m
18.0m
0
2m

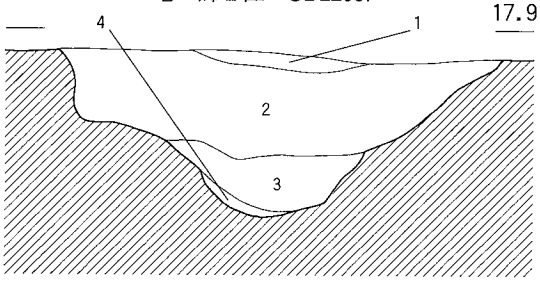

亀ノ郷１区　SK22033
亀ノ郷１区　SK22035
18.4m
18.4m
1．オリーブ灰　砂混じりシルト
2．灰　中砂混じりシルト質細砂
1．褐灰　極細砂
2．オリーブ黒　シルト質極細砂　炭
3．灰　極細砂
4．灰　シルト質極細砂


亀ノ郷１区　SK22036
亀ノ郷１区　SK22031
18.3m
18.4m
1．灰　極細砂質シルト　炭層
2．黒　極細砂質シルト
3．灰　シルト質極細砂　炭
0
4m

弥生時代前期　溝

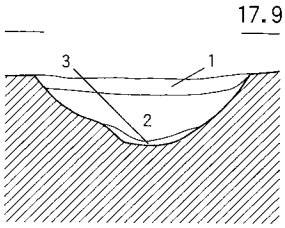


亀ノ郷２区　SD22007



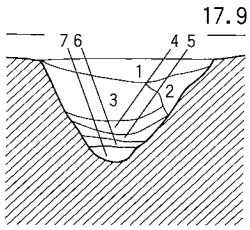
1．灰黄　細砂～中砂
2．オリーブ黄　極細砂～細砂　ラミナ
3．灰オリーブ　極細砂～中砂　ラミナ
4．緑灰　細砂～中砂

亀ノ郷２区
SD22007・SD22011 間溝



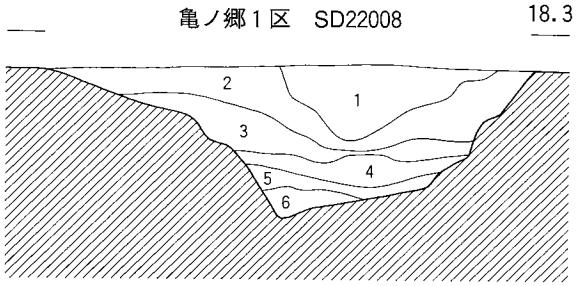
1．灰オリーブ　シルト混じり極細砂
2．灰オリーブ　極細砂～細砂　ラミナ
3．黒　シルト　炭

亀ノ郷２区　SD22011



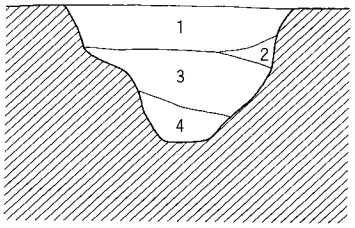
1．灰　シルト混じり極細砂
2．灰　シルト質極細砂
3．オリーブ灰　細砂　ラミナ
4．オリーブ灰　細砂質シルト
5．暗オリーブ灰　シルト混じり中砂
6．灰オリーブ　細砂
7．オリーブ黒　細砂質シルト

亀ノ郷１区　SD22008

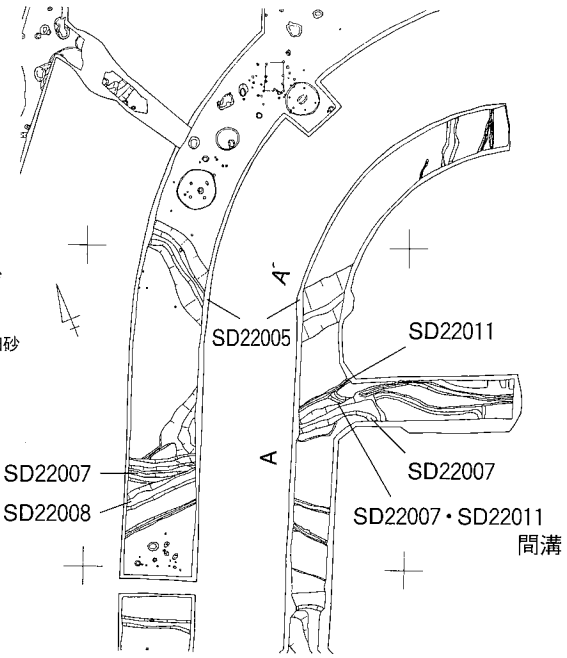


1．暗灰黄　シルト質極細砂
2．灰黄　シルト
3．暗灰黄　細砂
4．灰オリーブ　砂質シルト～細砂
5．灰オリーブ　シルト
6．灰オリーブ　中砂

亀ノ郷１区　SD22007



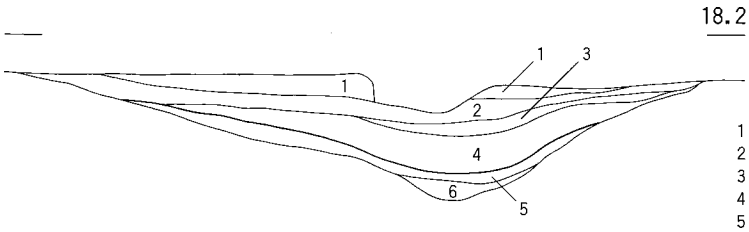
1．灰白　細砂
2．灰白　細砂
3．灰　中砂
4．オリーブ灰　極細砂～粗砂



弥生時代前期　溝・柱穴

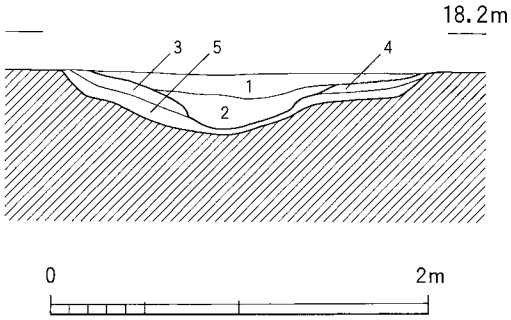
SD22001/22002/22004/22005/22009/22010/SP22001

亀ノ郷２区　SD22005



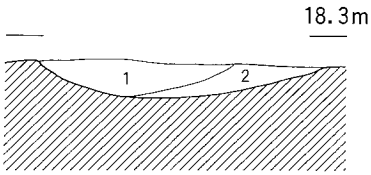
1．褐灰　白色砂混じりシルト　ラミナ
2．灰オリーブ　シルト　ラミナ　炭化物含む
3．緑灰　細砂混じりシルト　ラミナ
4．緑灰　シルト～細砂　ラミナ　炭
5．暗オリーブ灰　シルト　炭化物多い
6．オリーブ　シルト　礫・炭化物含む

亀ノ郷１区　SD22005



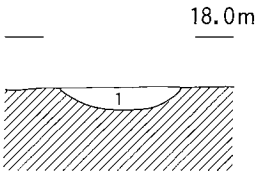
1．緑灰　シルト質極細砂
2．暗緑灰　シルト～細砂　ラミナ
3．暗オリーブ灰　細砂
4．暗オリーブ灰　シルト
5．暗緑灰　シルト質極細砂～中砂
（下位に有機物）

黒岡２区　SD22001



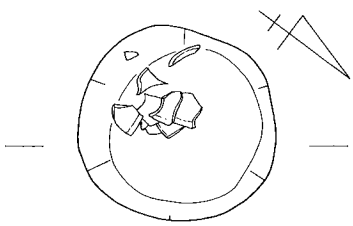
1．黒褐　シルト質極細砂
2．灰黄　シルト混じり細砂

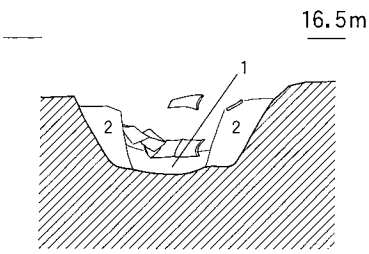
黒岡２区　SD22002



1．黄灰　極細砂

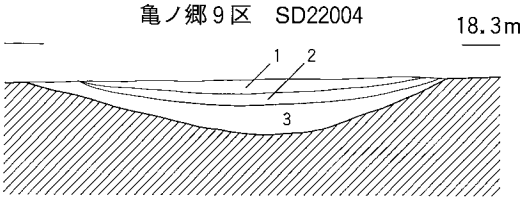
池ノ内15区　SP22001





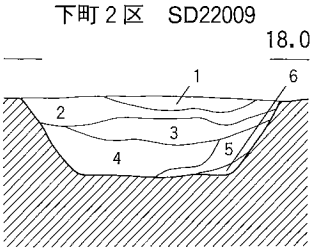
1．暗青灰　砂質シルト
2．黒褐　極細砂質シルト

亀ノ郷９区　SD22004



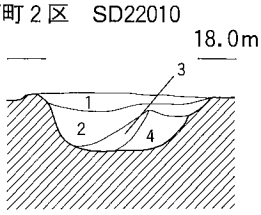
1．暗褐　シルト質極細砂
2．黄褐　シルト質極細砂
3．灰褐　シルト質極細砂　炭

下町２区　SD22009



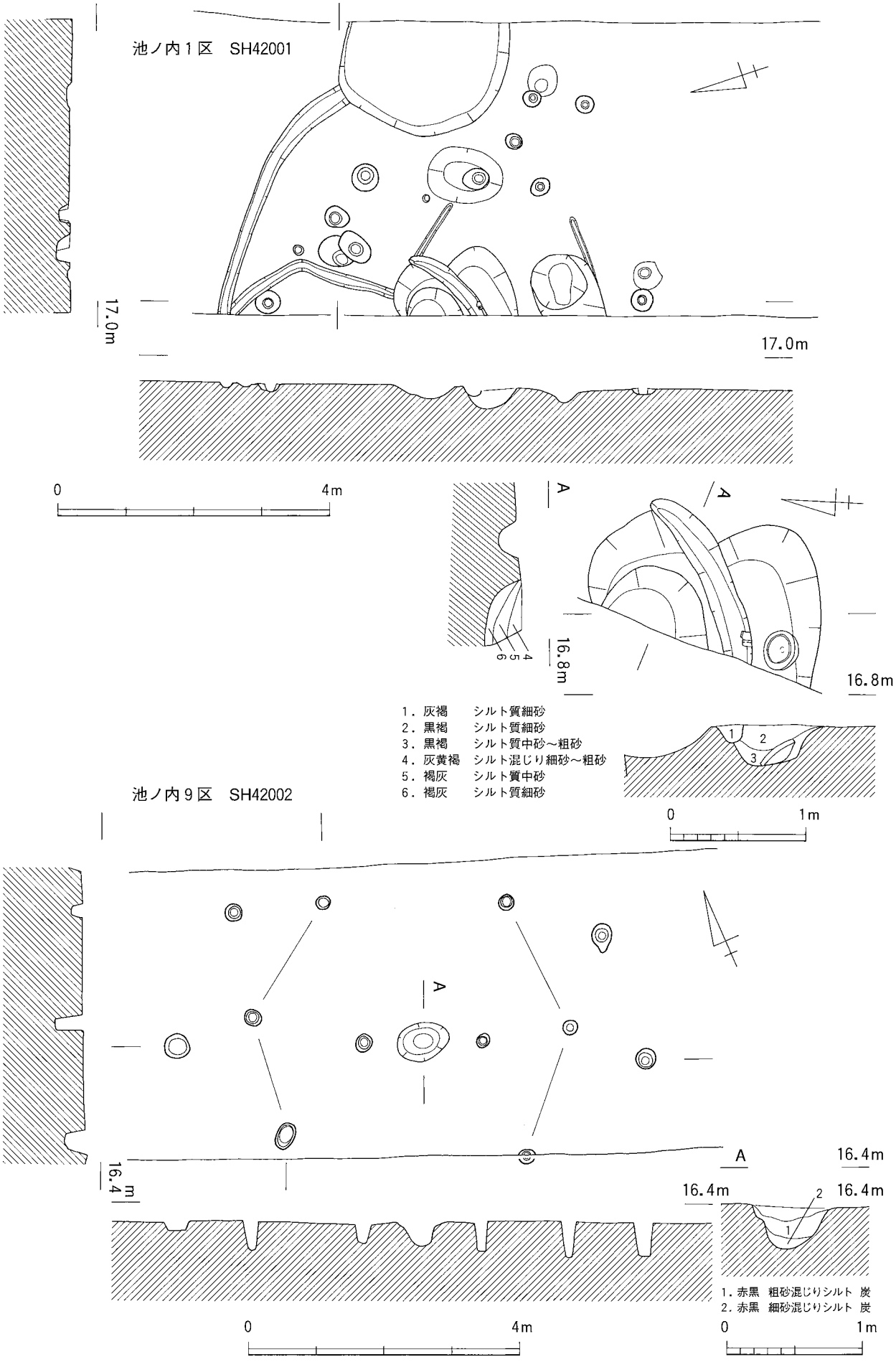
1．灰白　極細砂
2．灰　極細砂
3．灰白　シルト質極細砂
4．灰　極細砂　ラミナ
5．灰　シルト
6．灰　極細砂質シルト

下町２区　SD22010



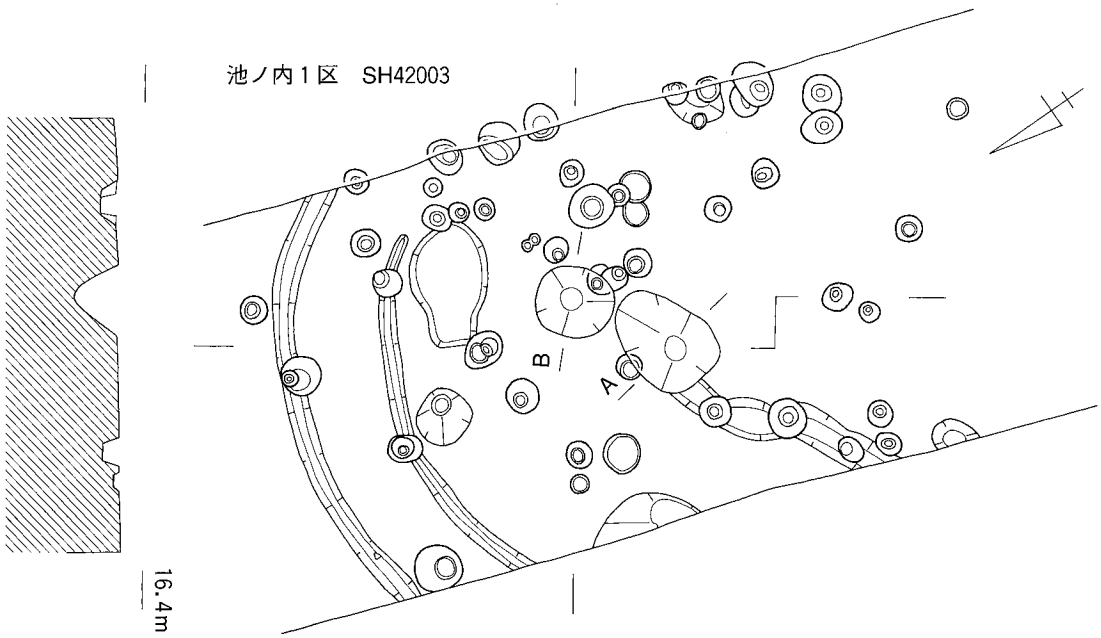
1．灰白　極細砂
2．灰　シルト質極細砂
3．灰　シルト質極細砂
4．灰オリーブ　シルト質極細砂

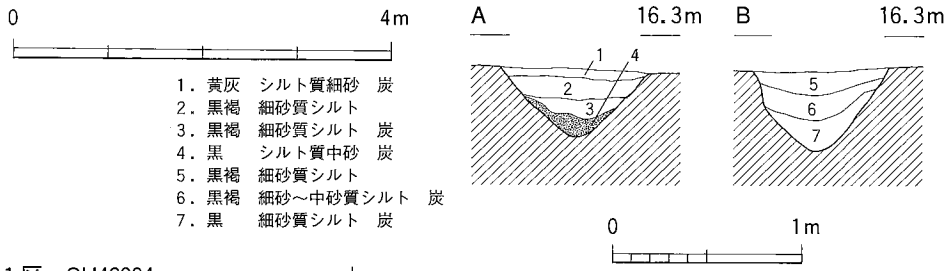
弥生時代中期　住居跡1


池ノ内1区　SH42001
17.0m
17.0m
0
4m
A
A
16.8m
16.8m
4
5
6
1．灰褐　シルト質細砂
2．黒褐　シルト質細砂
3．黒褐　シルト質中砂～粗砂
4．灰黄褐　シルト混じり細砂～粗砂
5．褐灰　シルト質中砂
6．褐灰　シルト質細砂
1
2
3
0
1m
池ノ内9区　SH42002
A
A
16.4m
16.4m
16.4m
16.4m
2
1
1．赤黒　粗砂混じりシルト　炭
2．赤黒　細砂混じりシルト　炭
0
4m
0
1m

弥生時代中期　住居跡 2

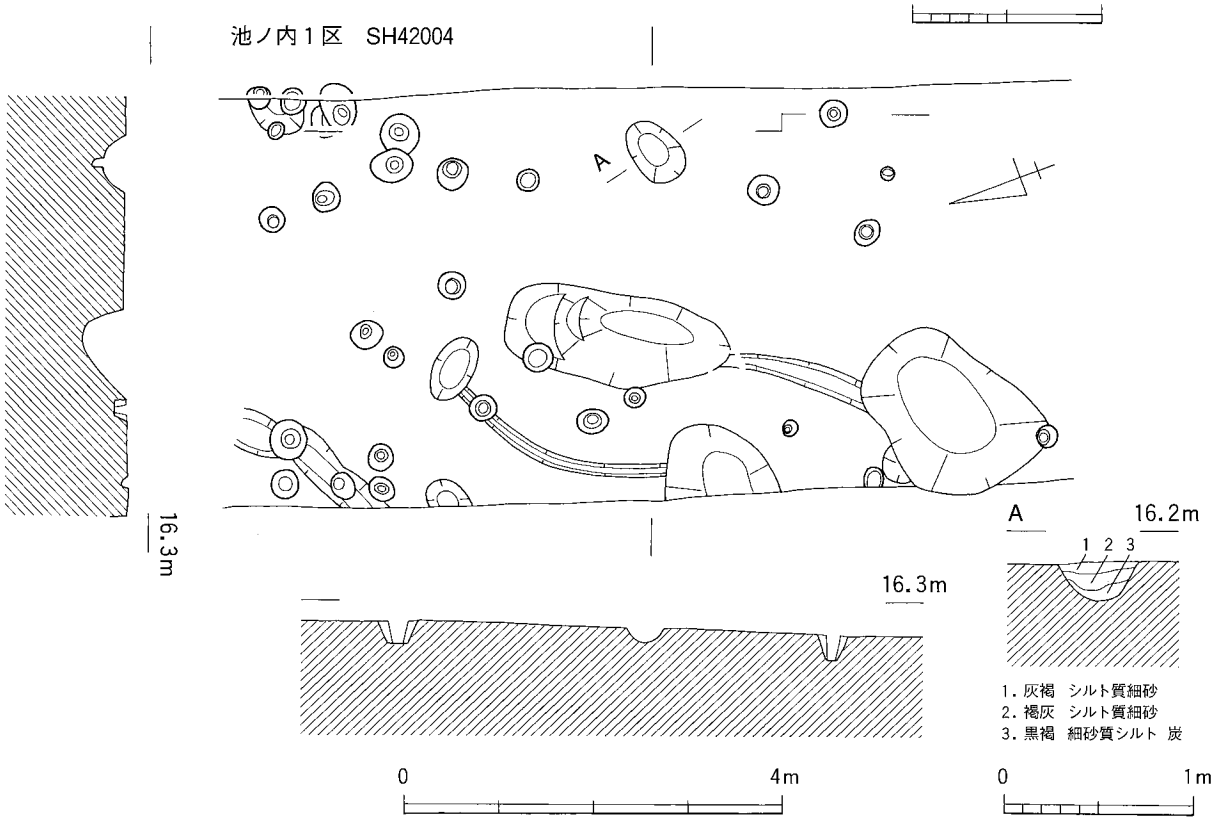
池ノ内１区　SH42003





1．黄灰　シルト質細砂　炭
2．黒褐　細砂質シルト
3．黒褐　細砂質シルト　炭
4．黒　　シルト質中砂　炭
5．黒褐　細砂質シルト
6．黒褐　細砂～中砂質シルト　炭
7．黒　　細砂質シルト　炭

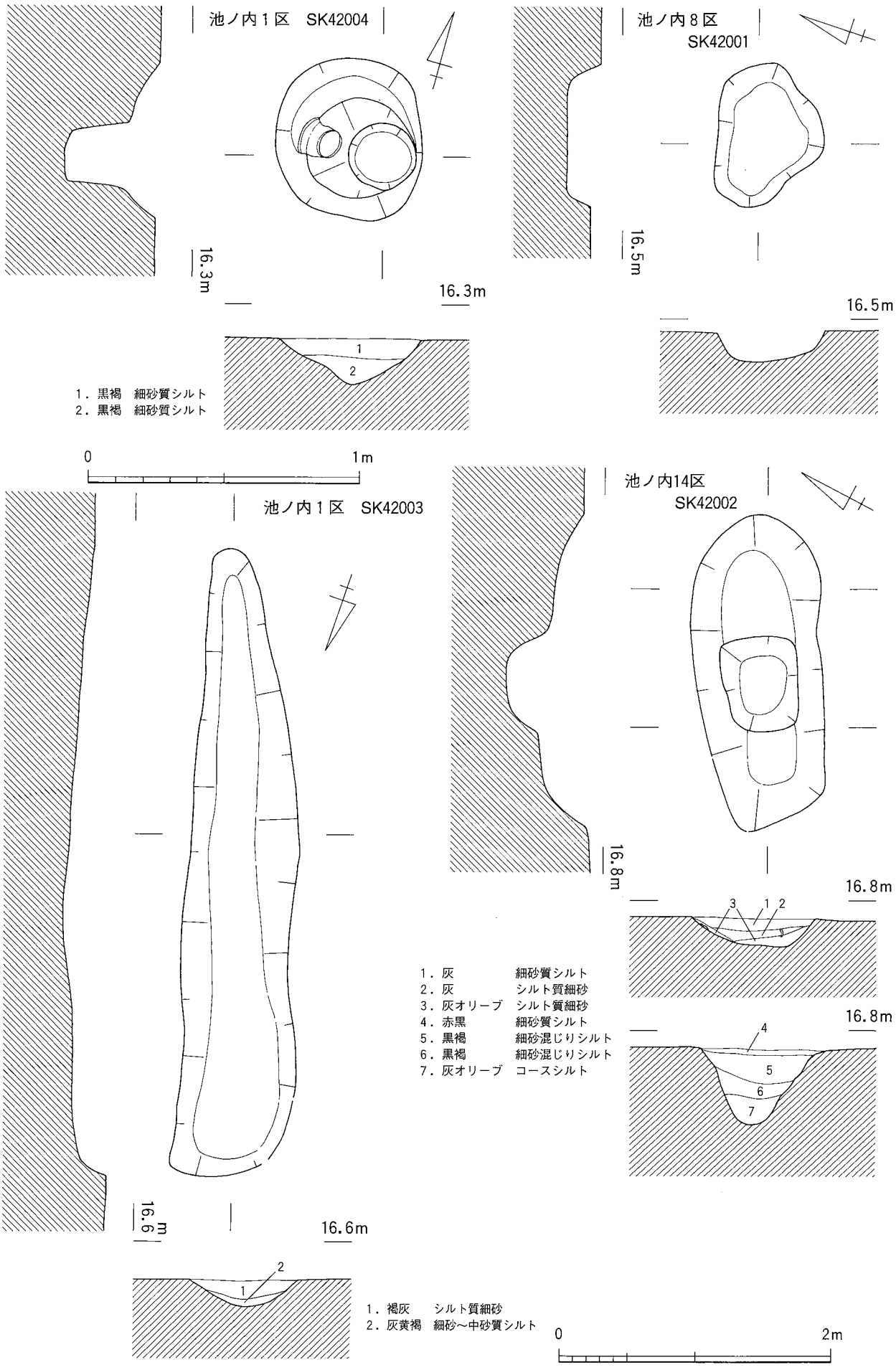
池ノ内１区　SH42004



1．灰褐　シルト質細砂
2．褐灰　シルト質細砂
3．黒褐　細砂質シルト　炭

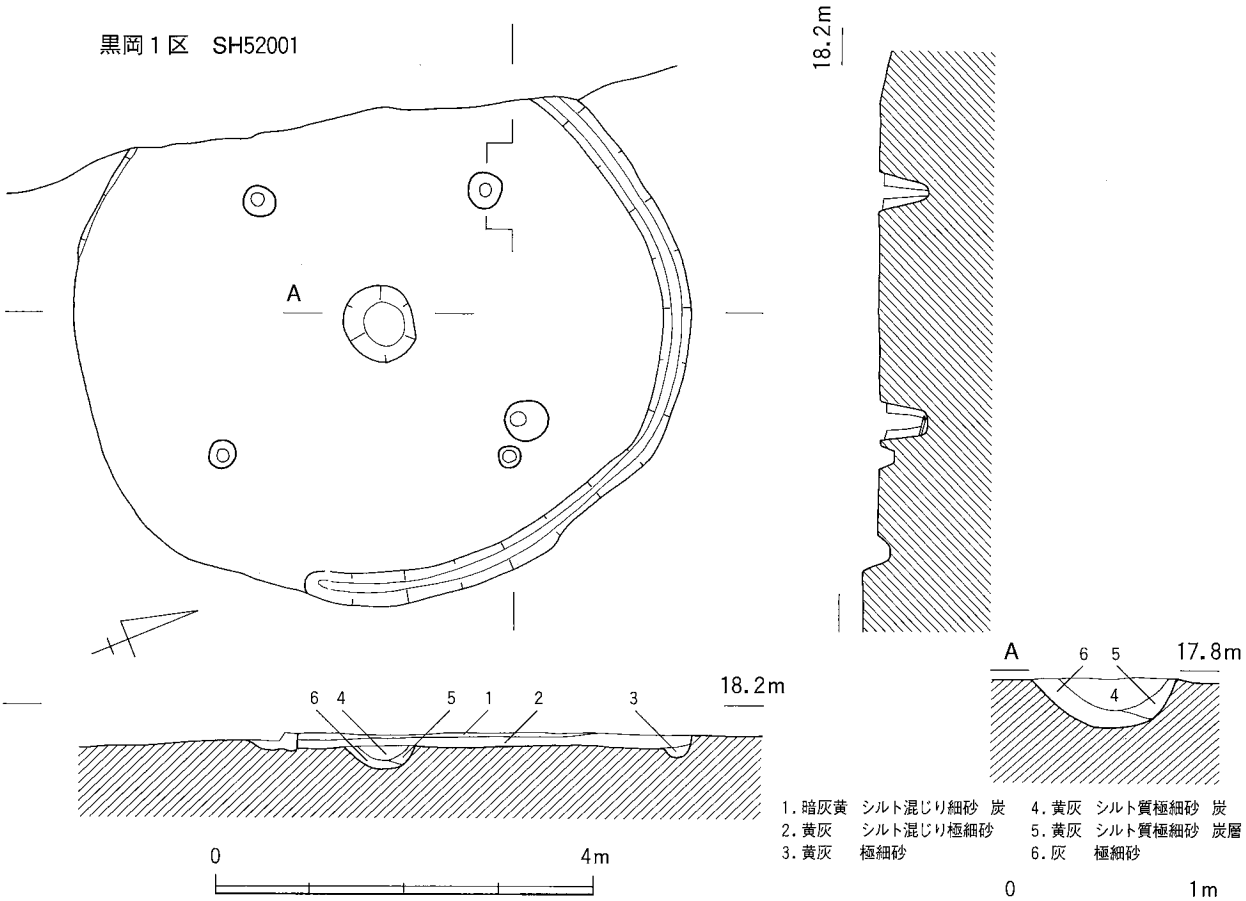
図版28
SK42001～42004

弥生時代中期　土坑1



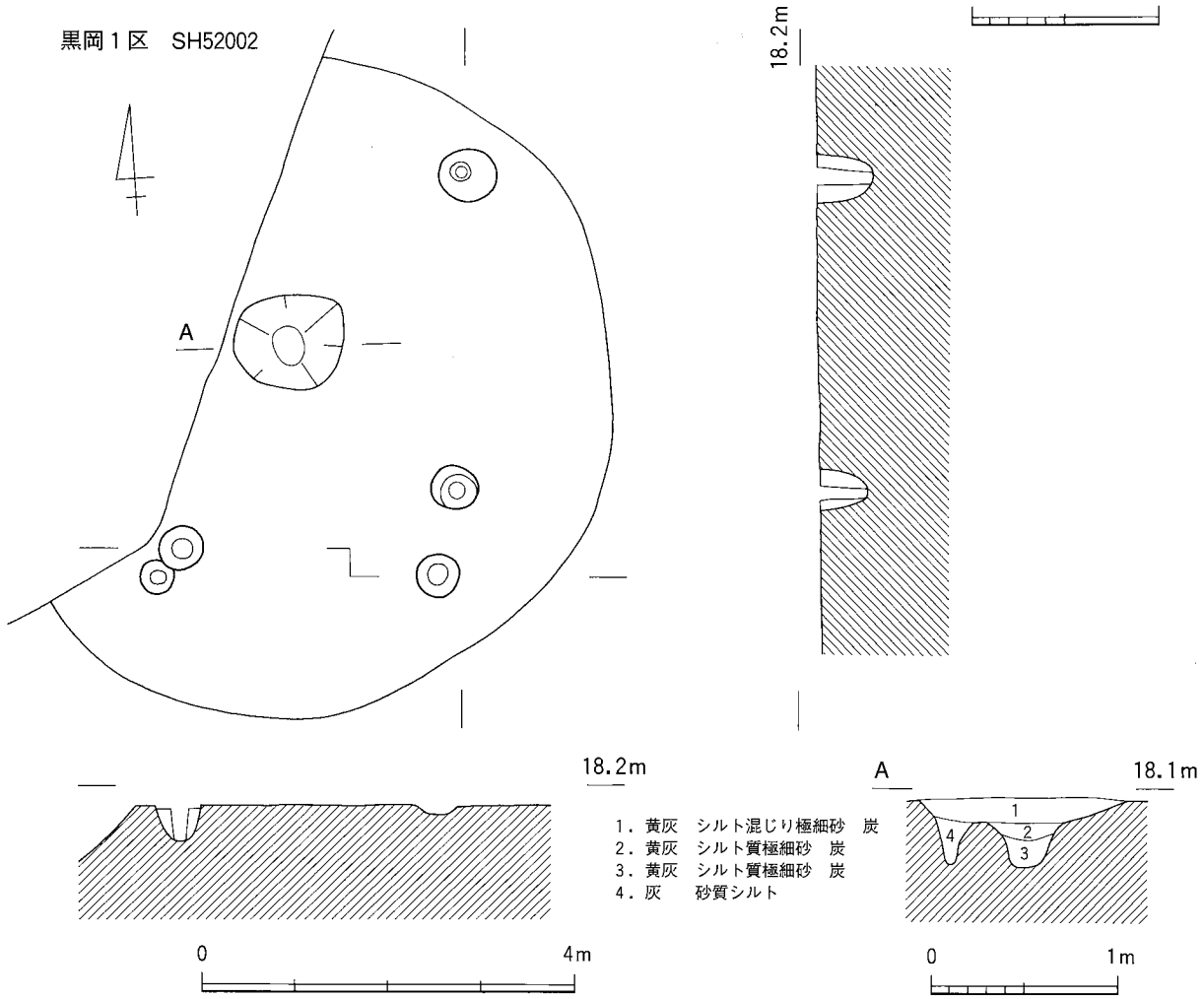
弥生時代後期　住居跡１

黒岡１区　SH52001



1. 暗灰黄　シルト混じり細砂　炭
2. 黄灰　シルト混じり極細砂
3. 黄灰　極細砂
4. 黄灰　シルト質極細砂　炭
5. 黄灰　シルト質極細砂　炭層
6. 灰　極細砂

黒岡１区　SH52002

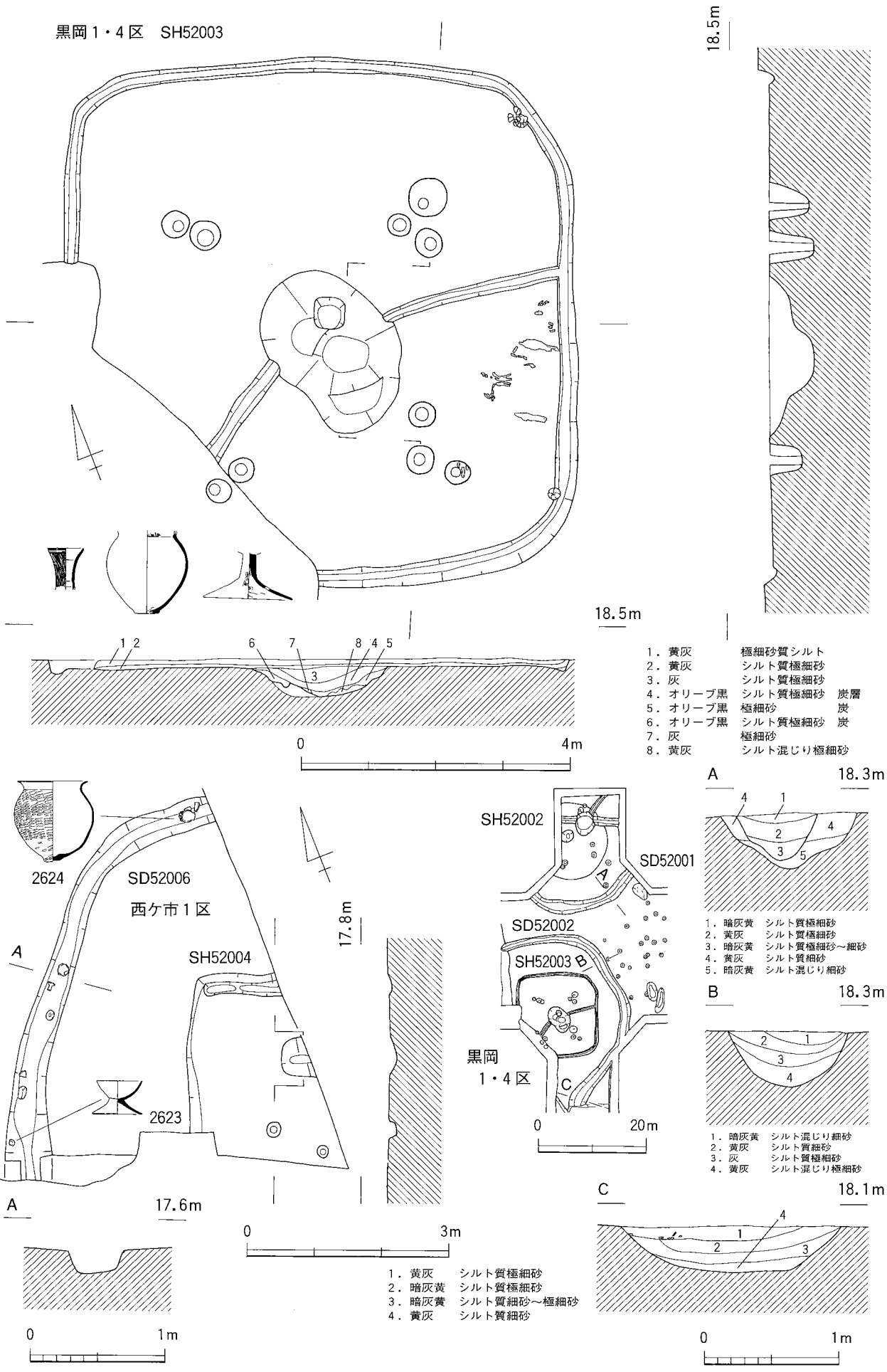


1. 黄灰　シルト混じり極細砂　炭
2. 黄灰　シルト質極細砂　炭
3. 黄灰　シルト質極細砂　炭
4. 灰　砂質シルト

図版30

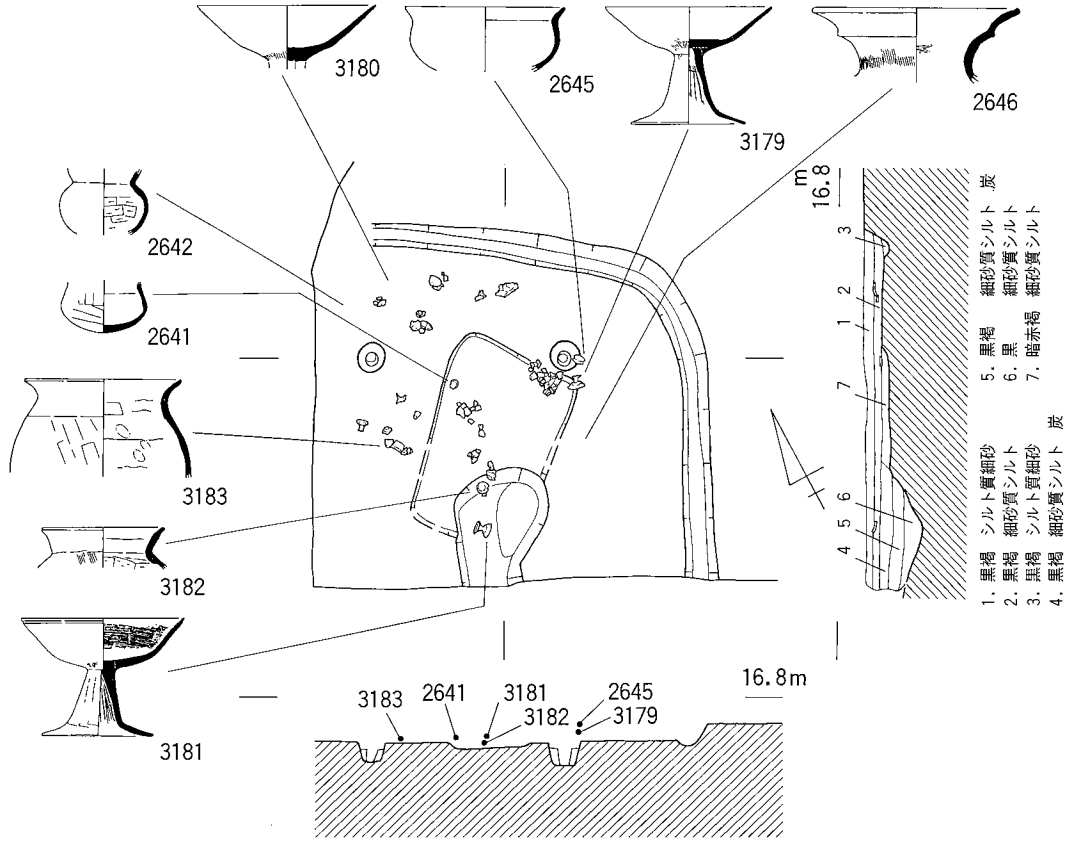
SH52003/52004

弥生時代後期　住居跡 2

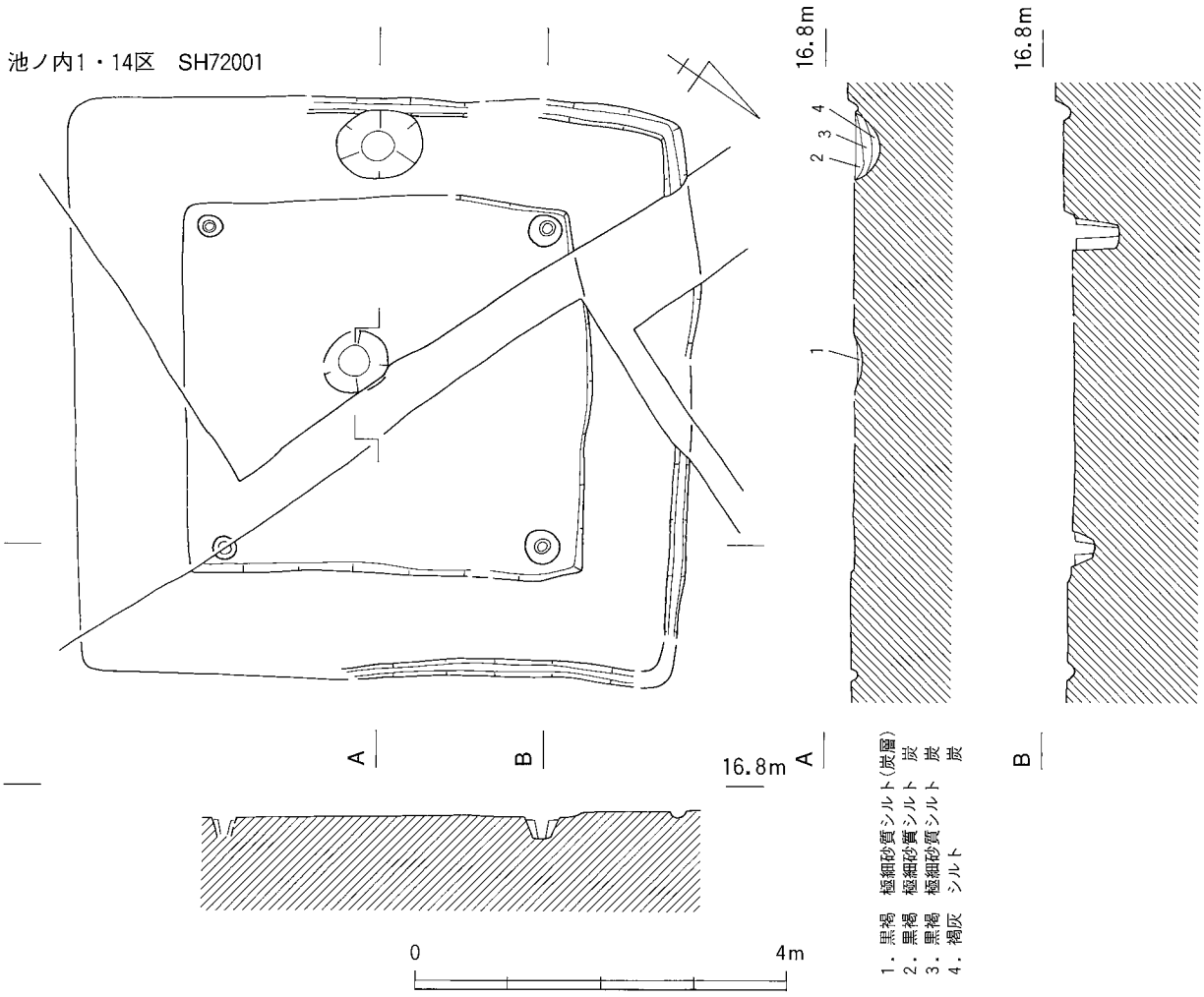


古墳時代　住居跡 1

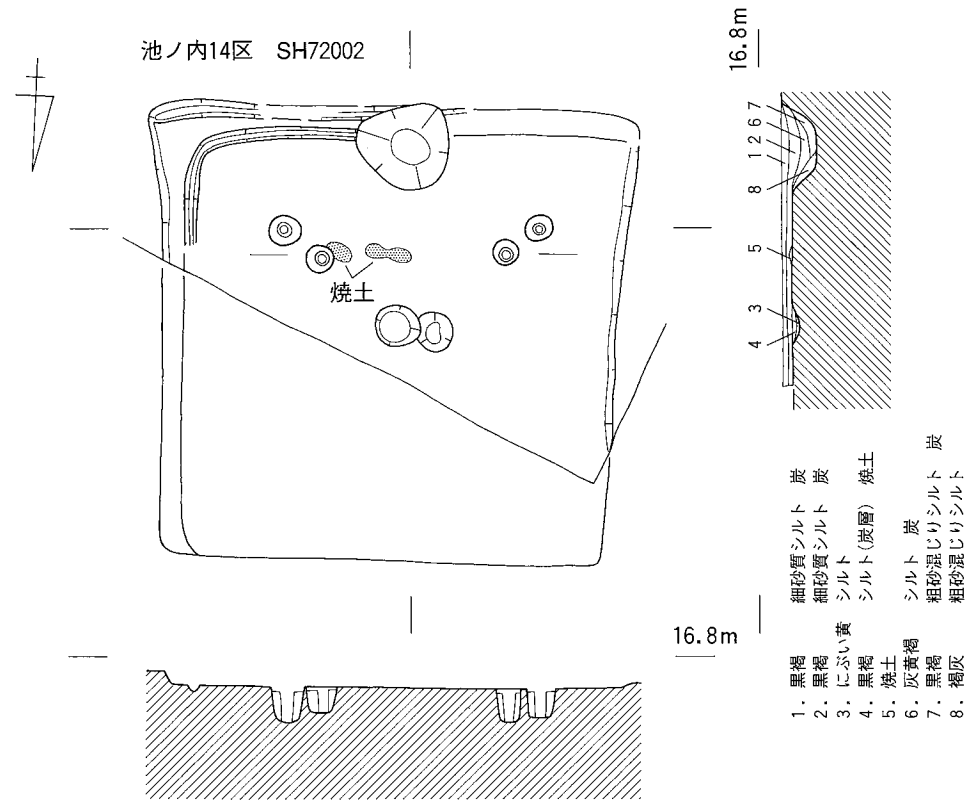
池ノ内16区　SH62001

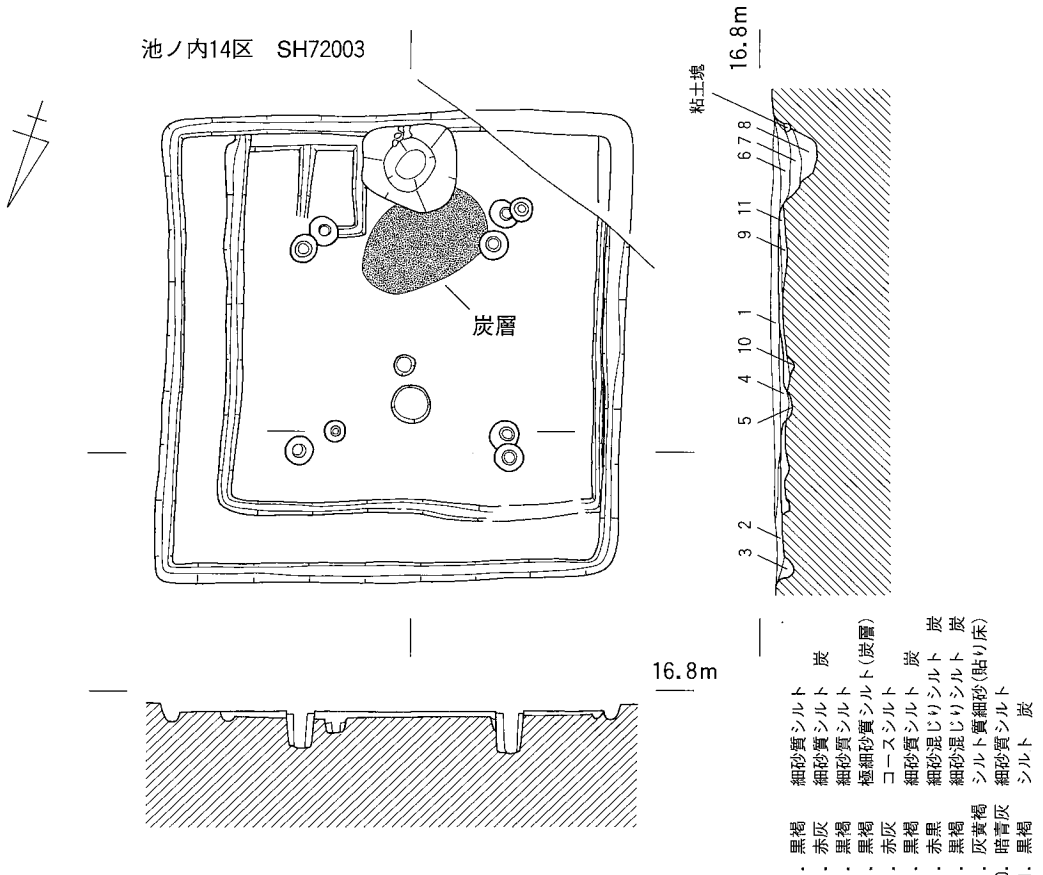


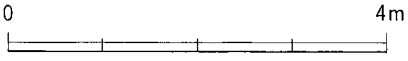
池ノ内1・14区　SH72001



古墳時代　住居跡 2

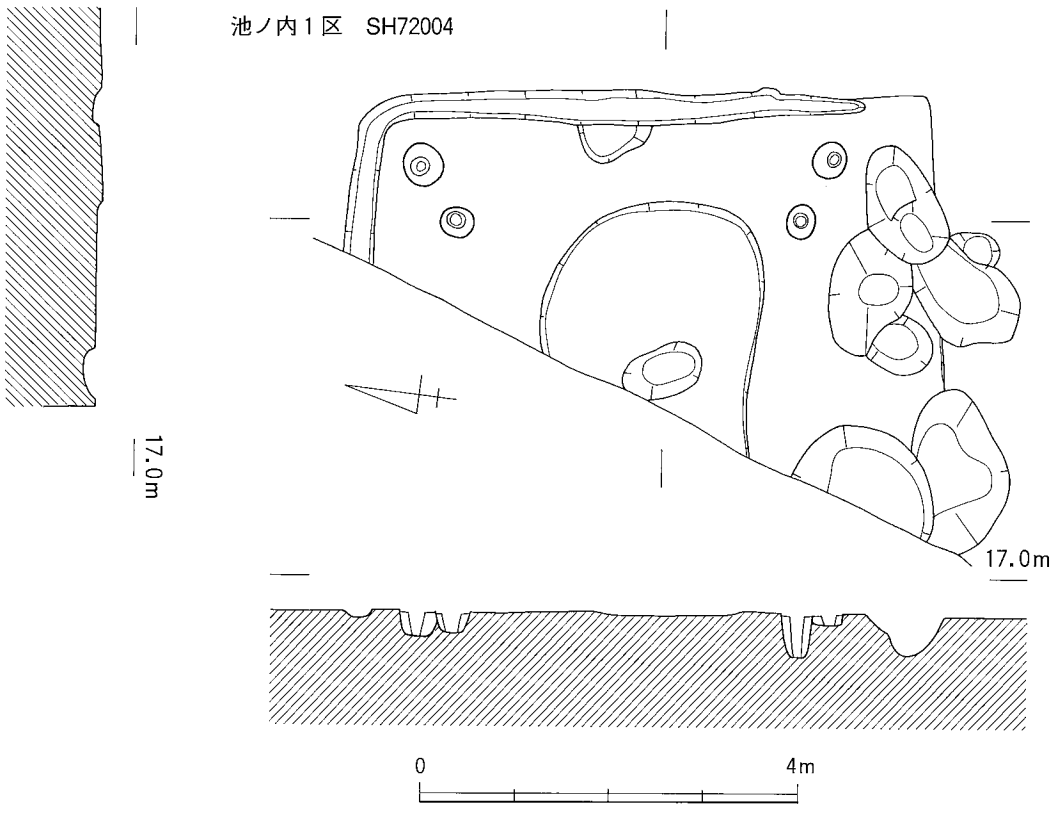

池ノ内14区　SH72002
焼土
16.8m
16.8m
1．黒褐　細砂質シルト　炭
2．黒褐　細砂質シルト　炭
3．にぶい黄　シルト
4．黒褐　シルト(炭層)　焼土
5．焼土
6．灰黄褐　シルト　炭
7．黒褐　粗砂混じりシルト　炭
8．褐灰　粗砂混じりシルト


池ノ内14区　SH72003
粘土塊
炭層
16.8m
16.8m
1．黒褐　細砂質シルト
2．赤灰　細砂質シルト　炭
3．黒褐　細砂質シルト
4．黒褐　極細砂質シルト(炭層)
5．赤灰　コースシルト
6．黒褐　細砂質シルト　炭
7．赤黒　細砂混じりシルト　炭
8．黒褐　細砂混じりシルト　炭
9．灰黄褐　シルト質細砂(貼り床)
10．暗青灰　細砂質シルト
11．黒褐　シルト　炭

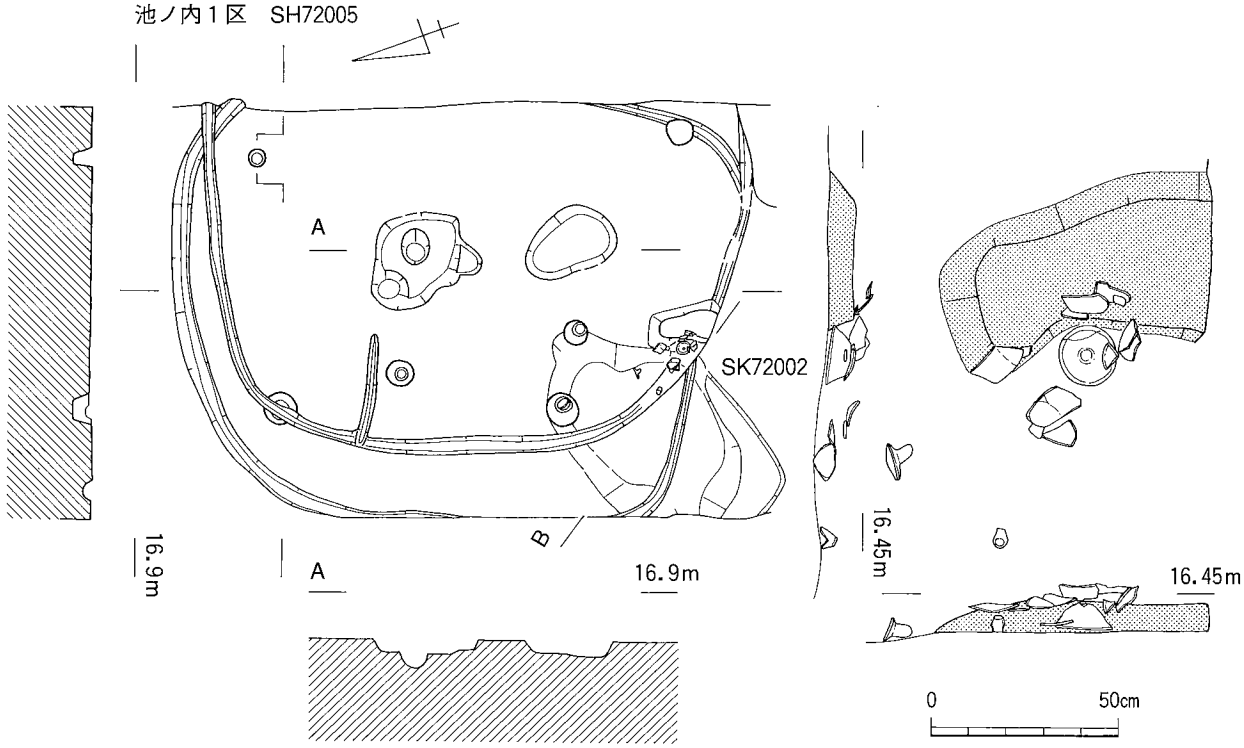

0
4m

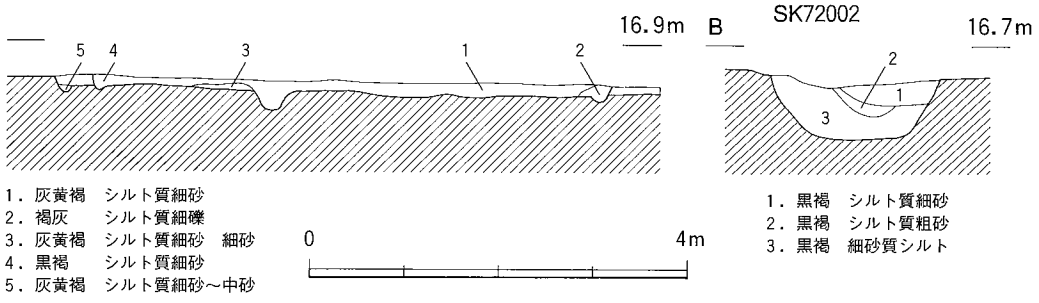
古墳時代　住居跡 3

池ノ内１区　SH72004



池ノ内１区　SH72005



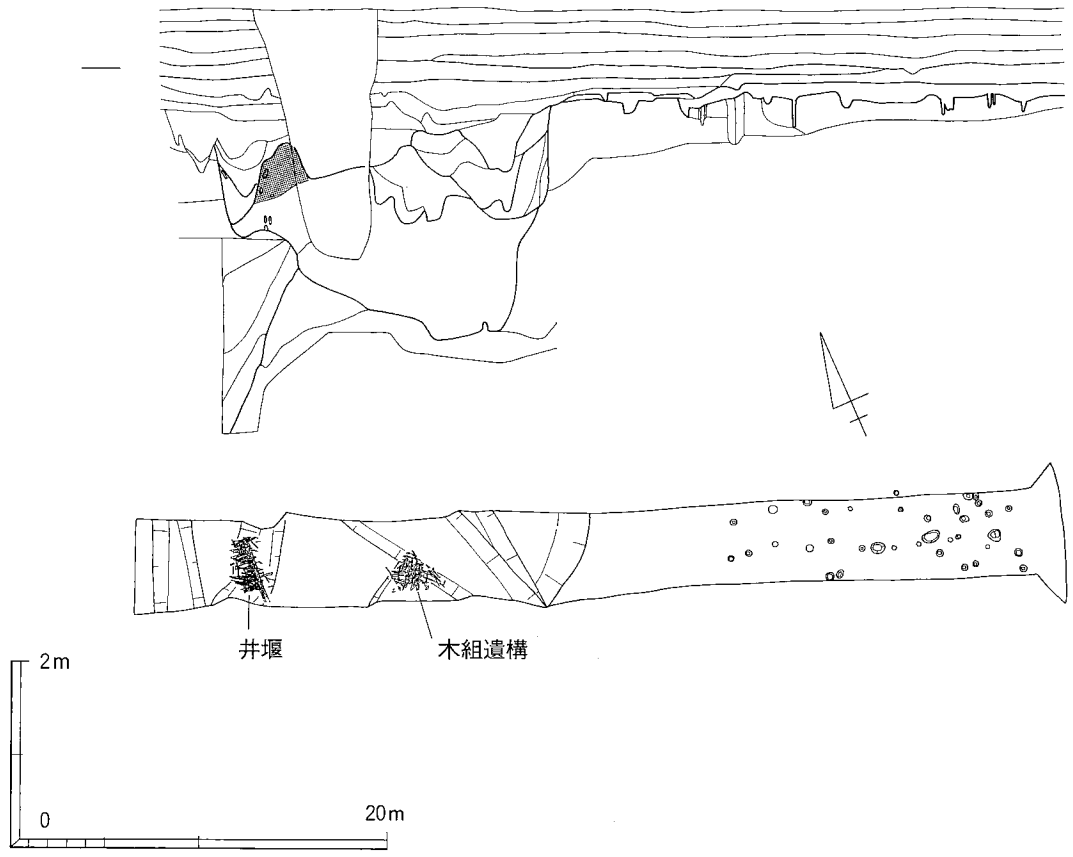


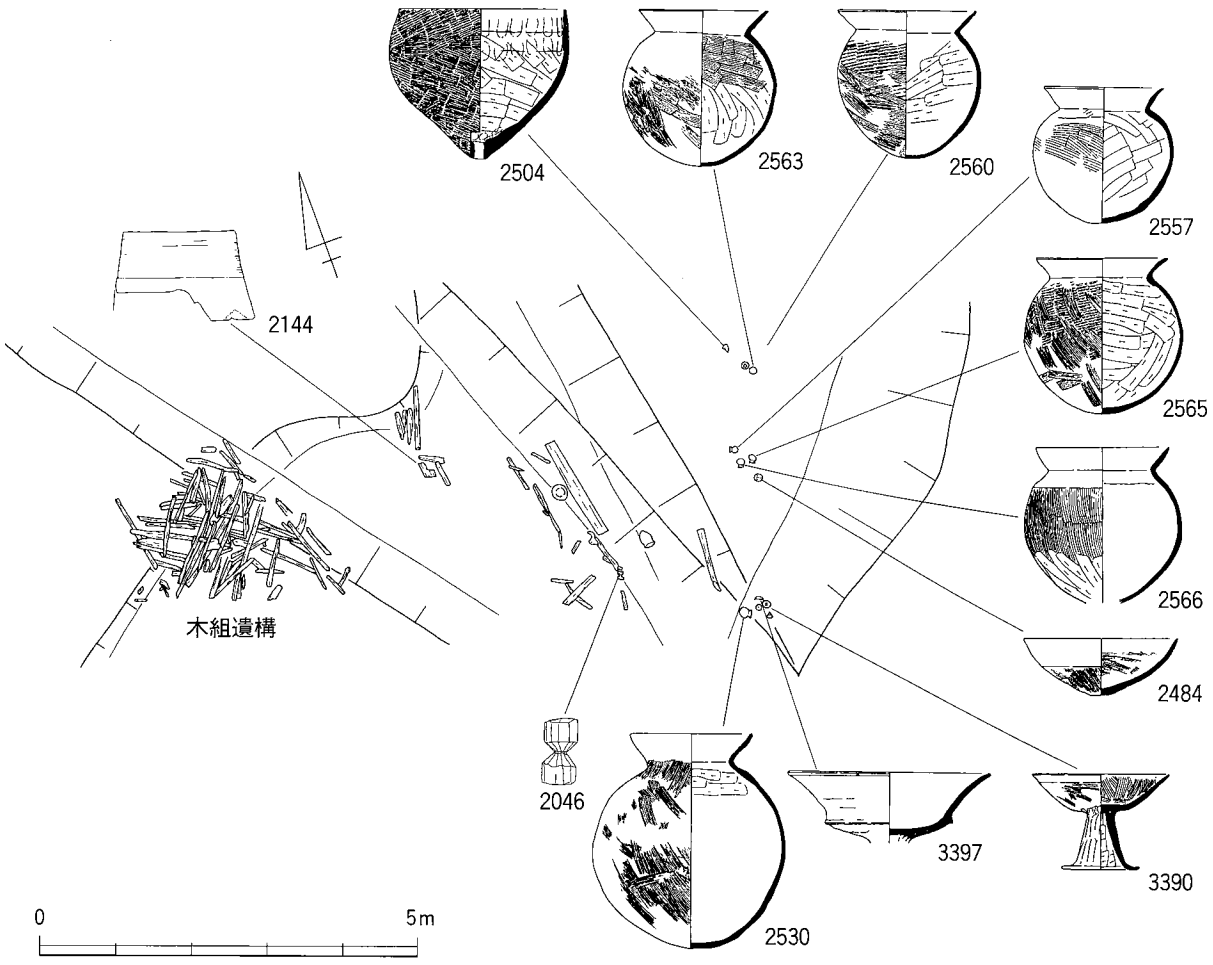
1．灰黄褐　シルト質細砂
2．褐灰　　シルト質細礫
3．灰黄褐　シルト質細砂　細砂
4．黒褐　　シルト質細砂
5．灰黄褐　シルト質細砂～中砂

1．黒褐　シルト質細砂
2．黒褐　シルト質粗砂
3．黒褐　細砂質シルト

図版34
SR62002

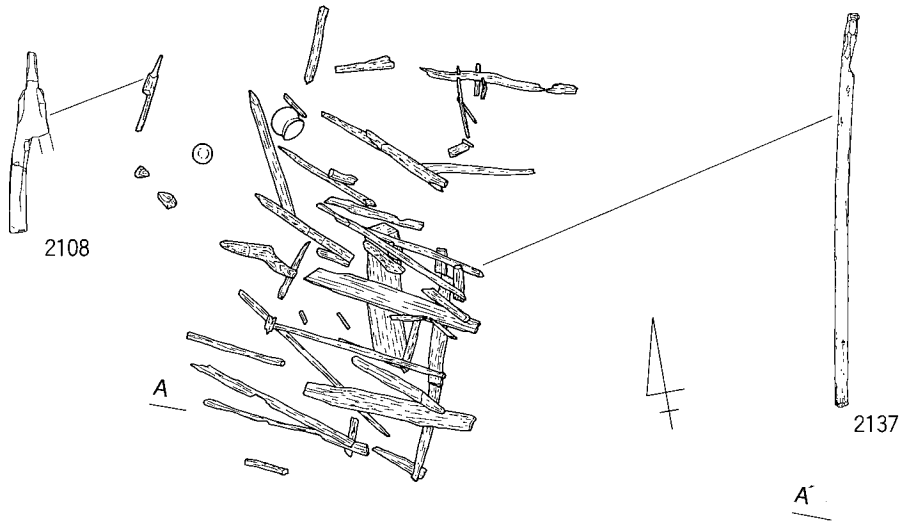
池ノ内９区　旧河道



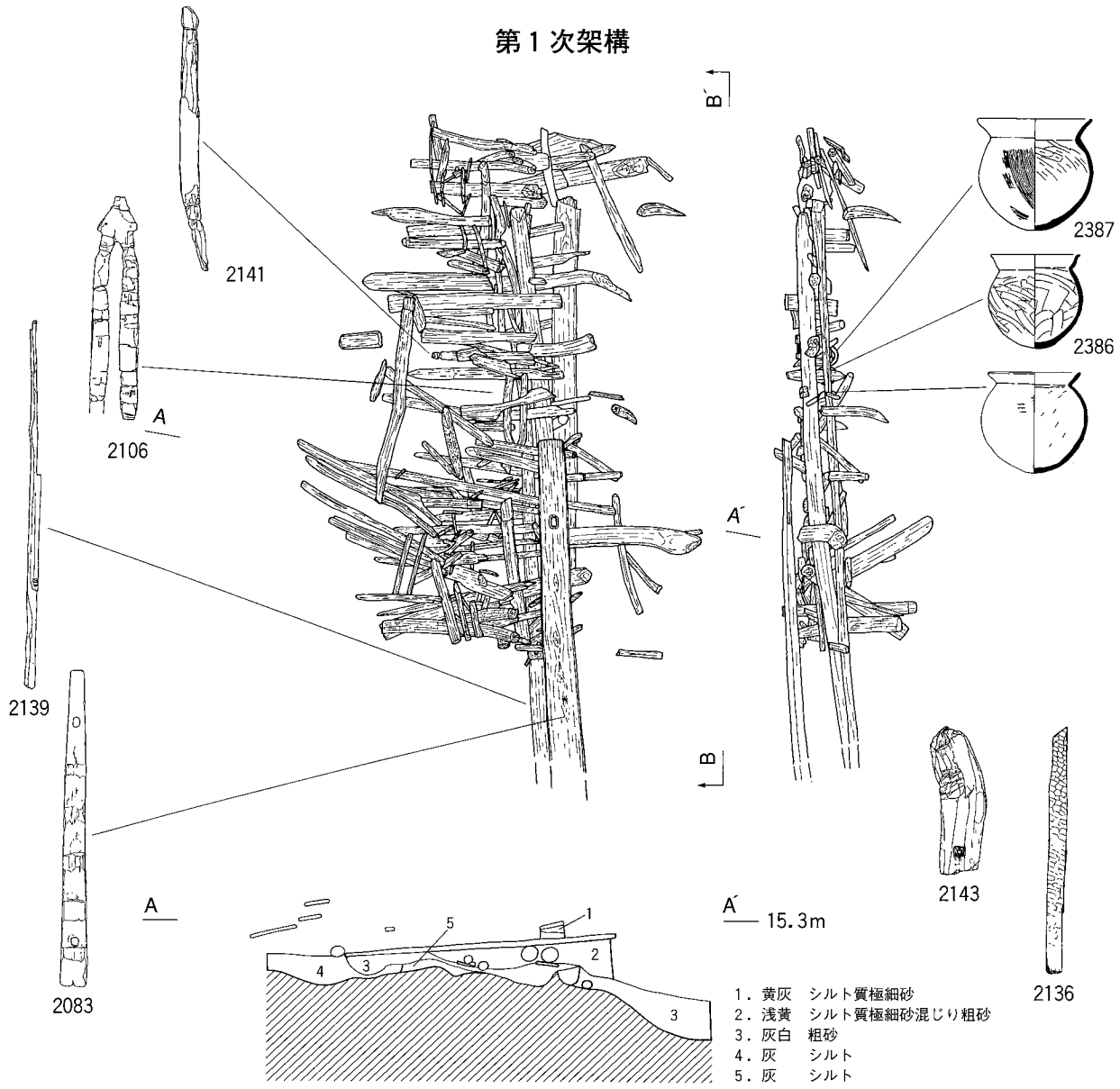


池ノ内９区　井堰

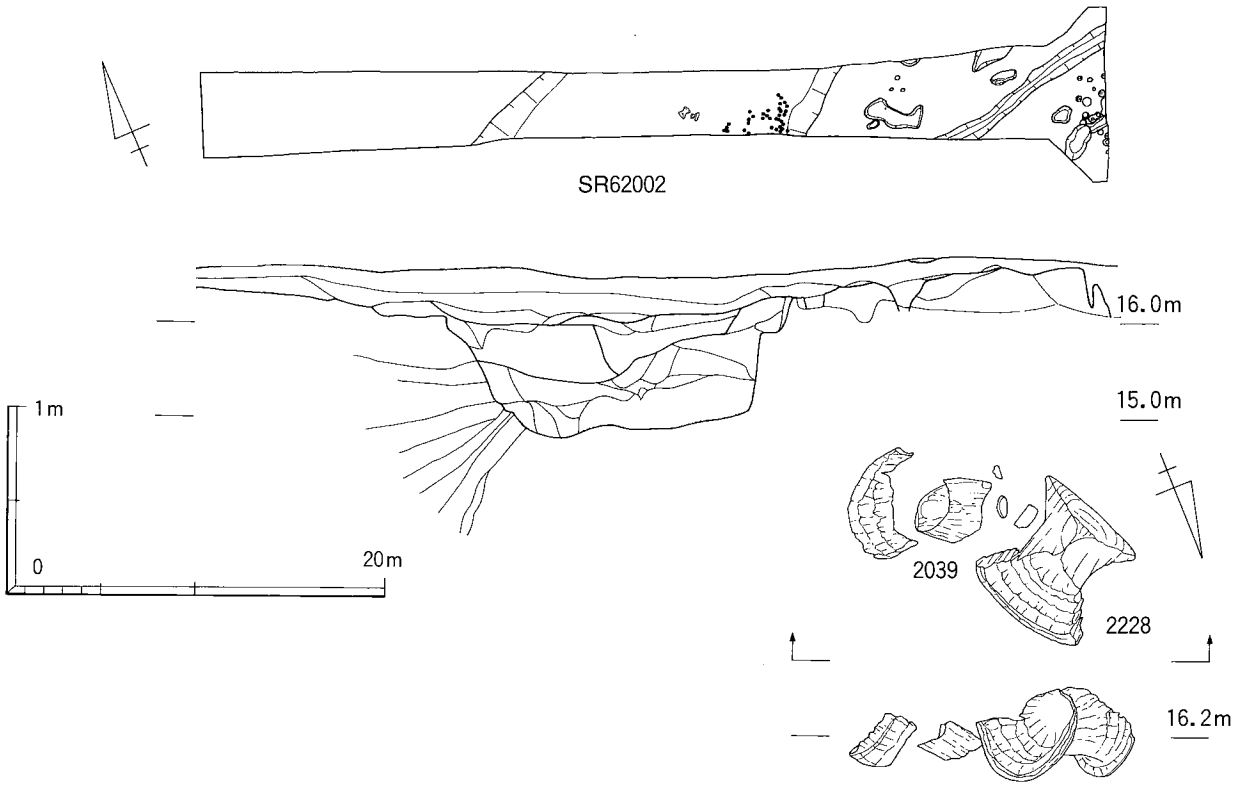
第２次架構



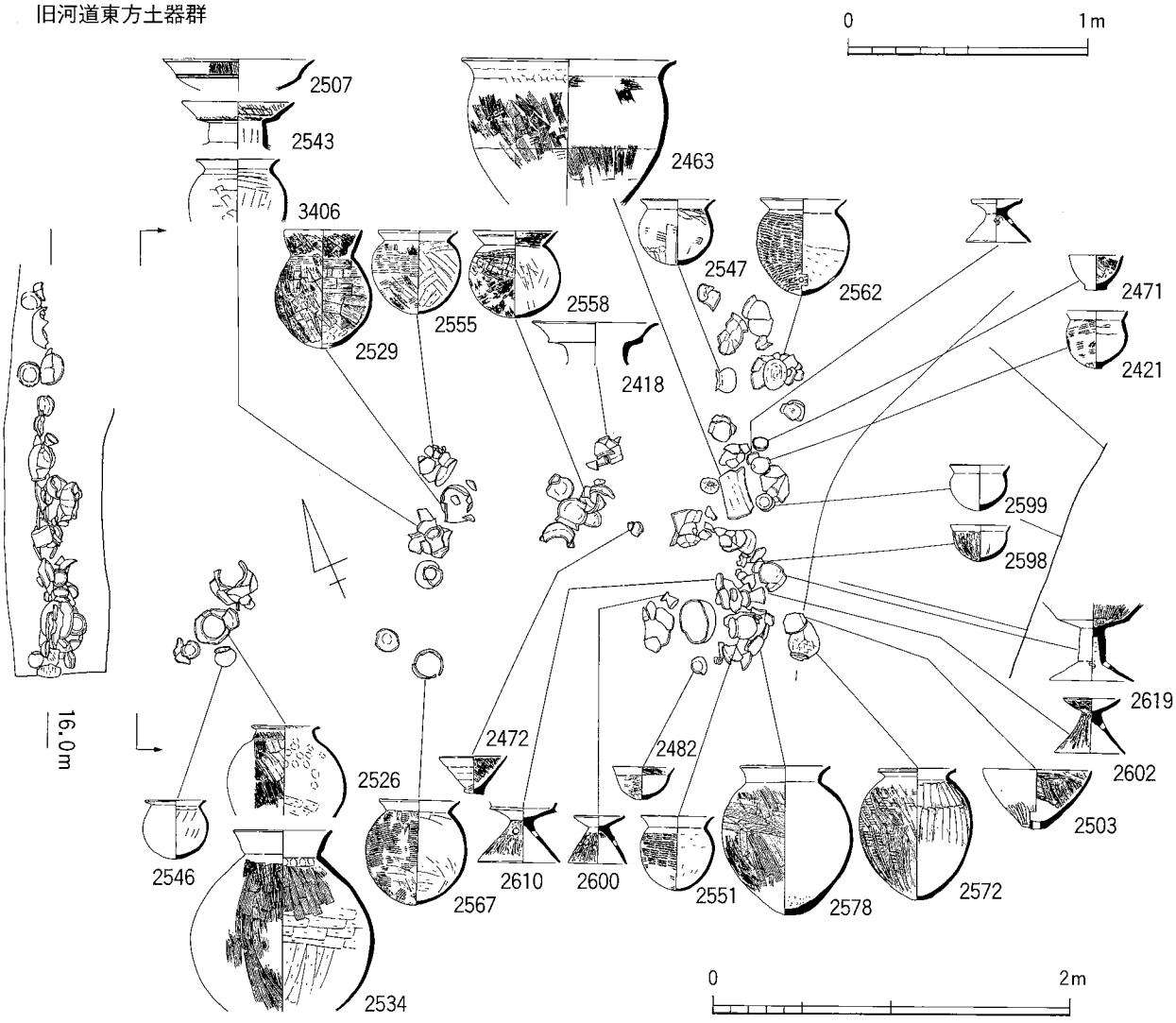
第１次架構



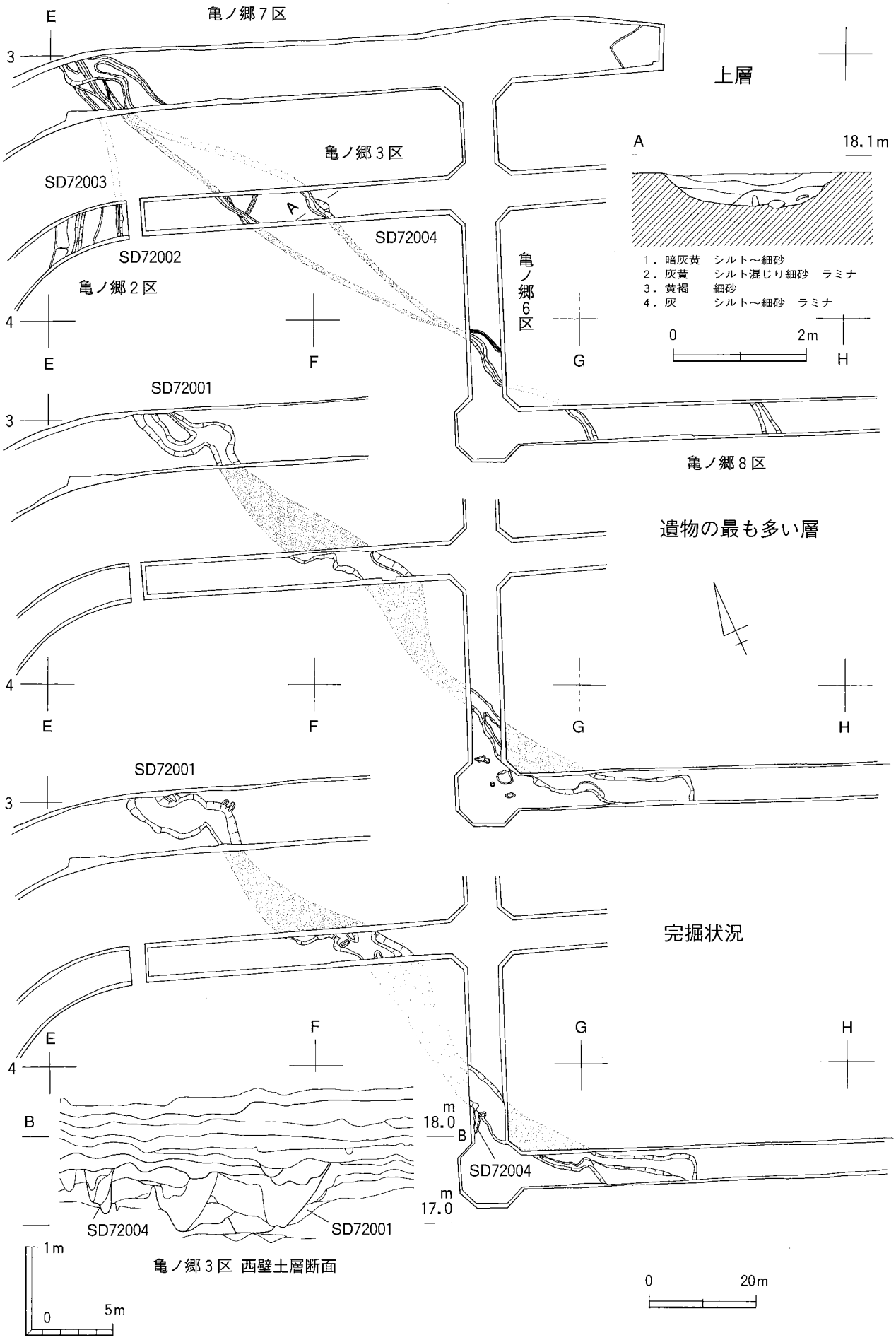
池ノ内8区　旧河道



旧河道東方土器群

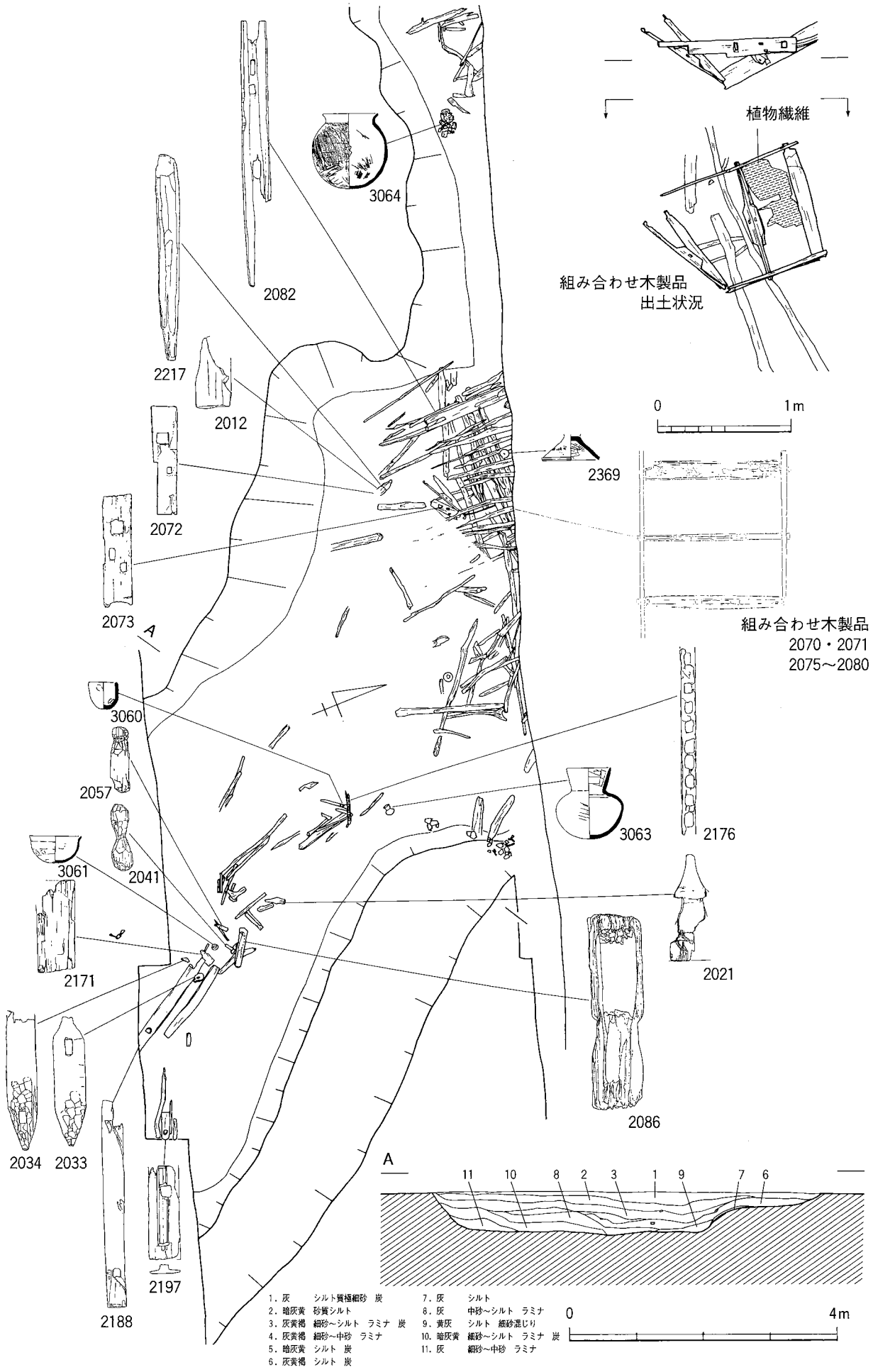


亀ノ郷地区　水路・溝 変遷図

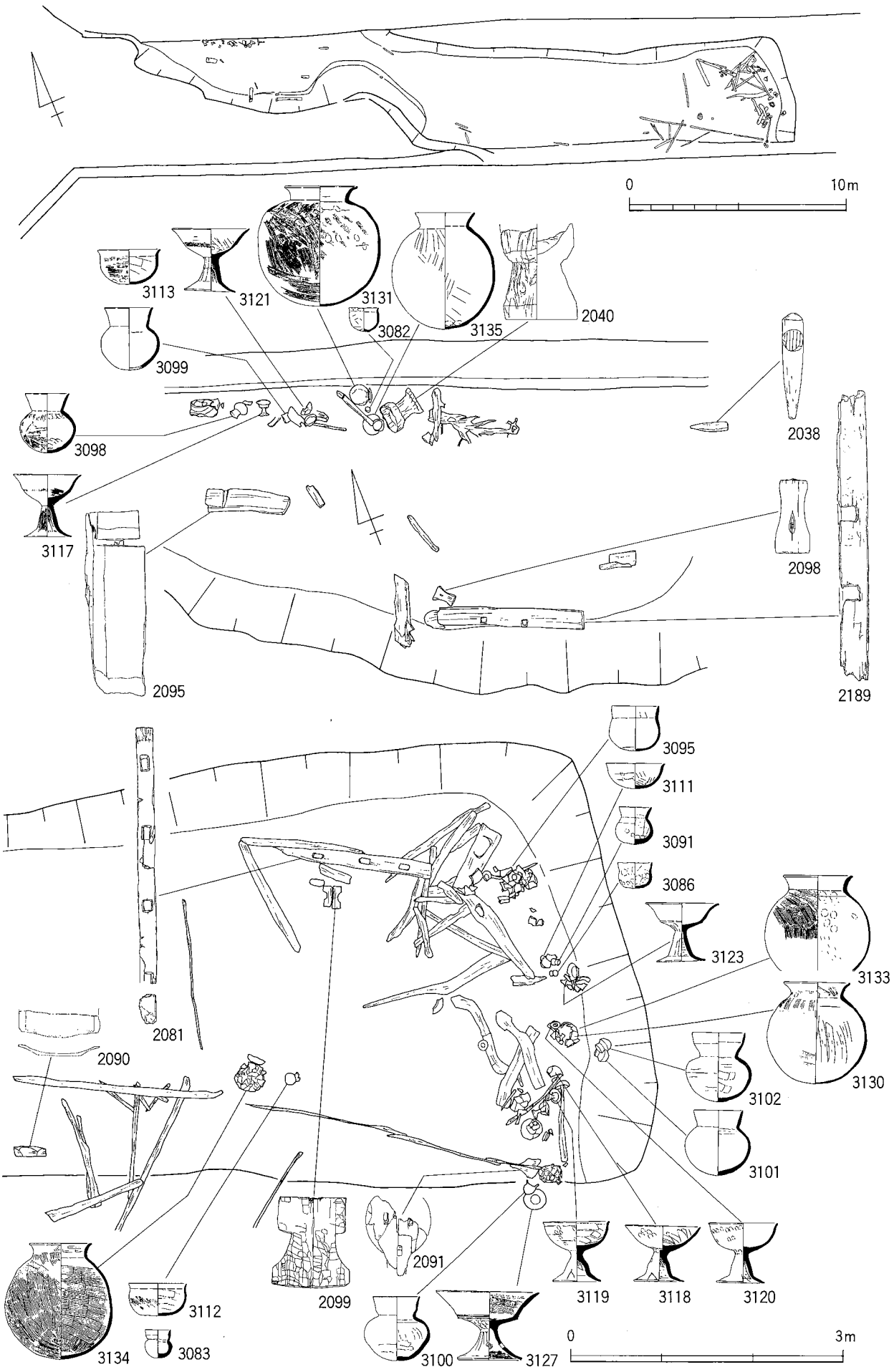


図版38
SD72001

亀ノ郷３区　水路 遺物出土状況図

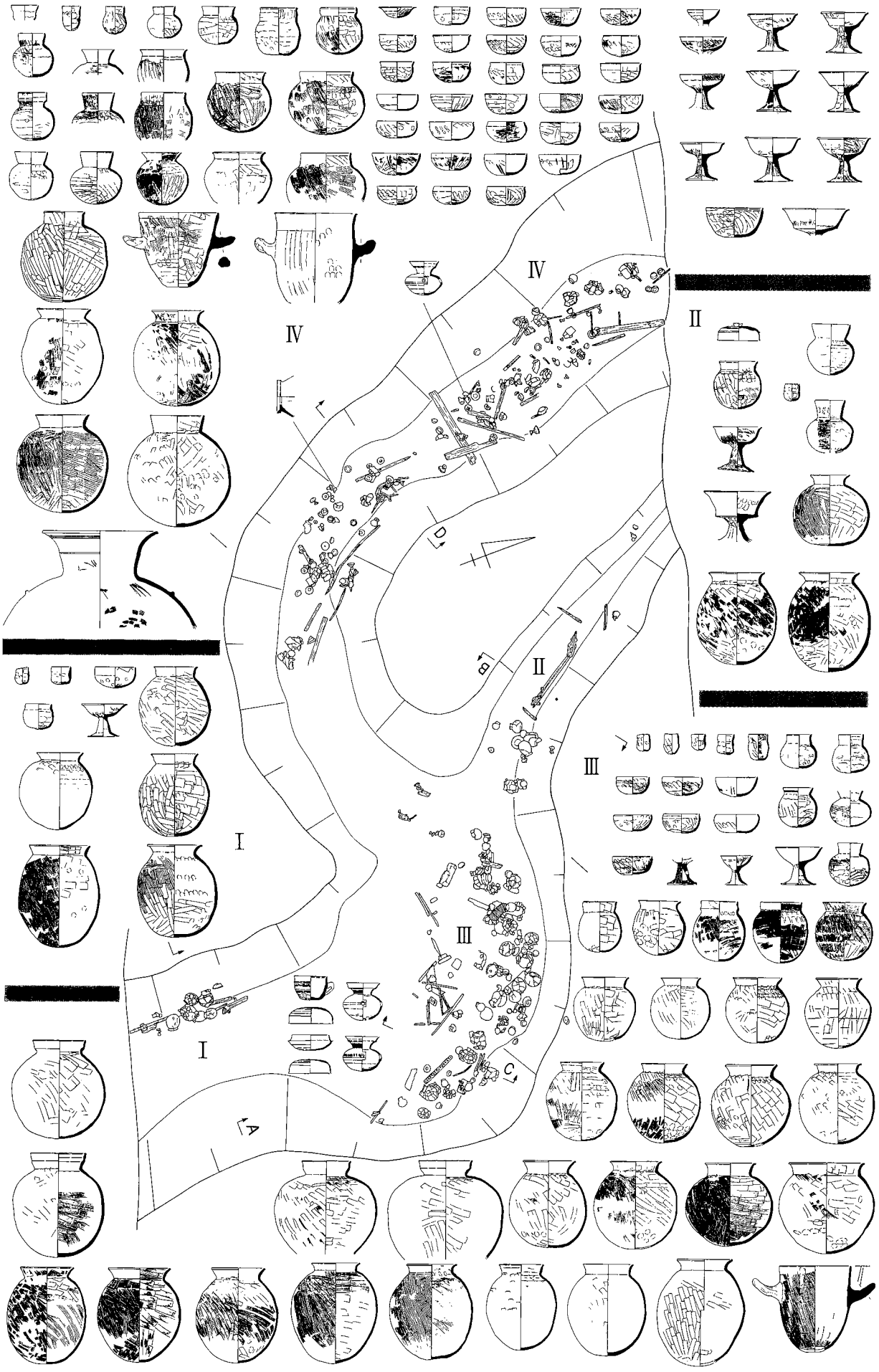


亀ノ郷8区　水路 遺物出土状況図



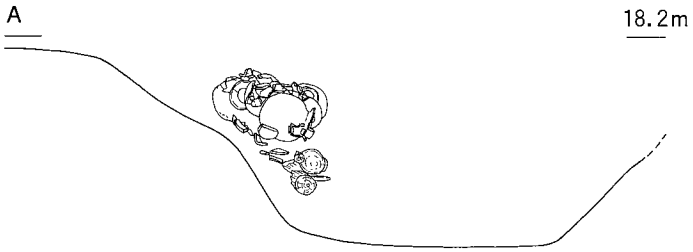
図版40
SD72001

亀ノ郷７区　水路 遺物出土状況

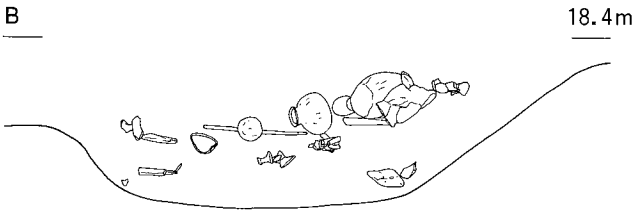


亀ノ郷７区　水路 断面図

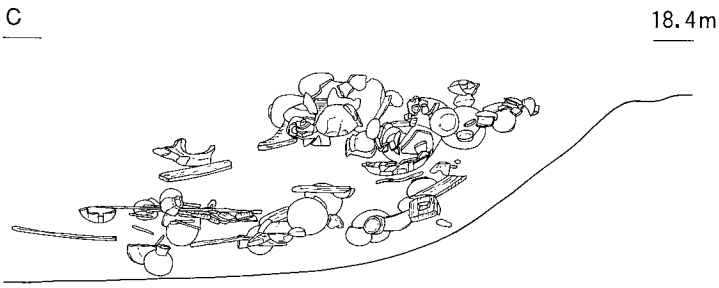
土器群 Ⅰ



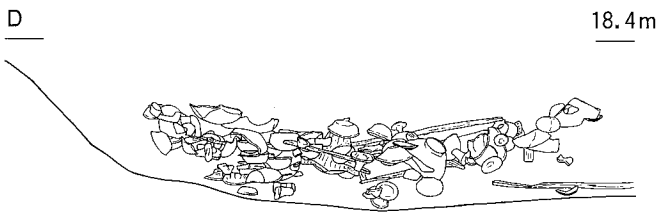
土器群 Ⅱ

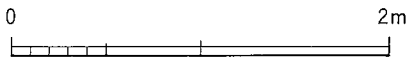


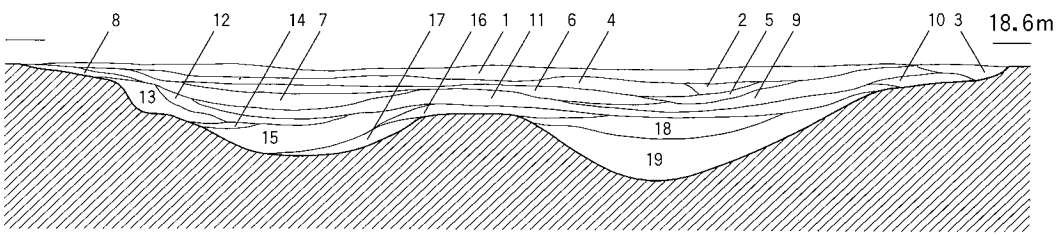
土器群 Ⅲ



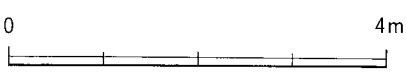
土器群 Ⅳ





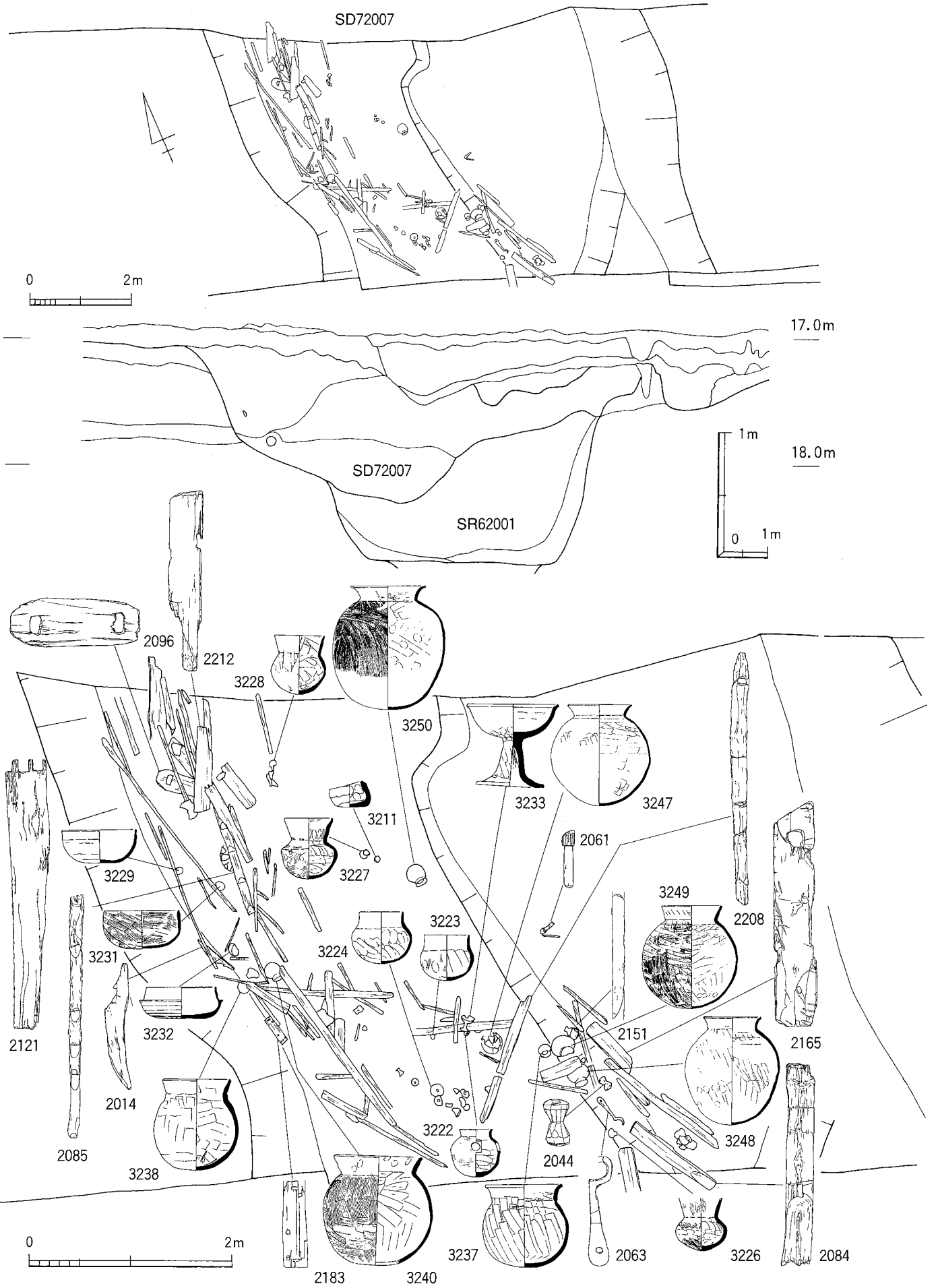


1．灰白	細砂～中砂	6．灰黄褐	極細砂　炭	11．暗緑灰	シルト　炭	16．灰	シルト　炭
2．オリーブ黒	シルト質極細砂	7．灰	シルト質極細砂　炭	12．暗緑灰	シルト質極細砂　炭	17．暗青灰	シルト
3．暗緑灰	シルト質極細砂	8．灰	極細砂	13．暗緑灰	シルト質極細砂	18．暗青灰	シルト
4．黄灰	シルト質極細砂	9．暗青灰	シルト　炭	14．暗オリーブ灰	シルト　炭　炭層	19．暗青灰	シルト　ラミナ
5．暗青灰	シルト質極細砂	10．緑灰	シルト質極細砂	15．オリーブ灰	シルト		

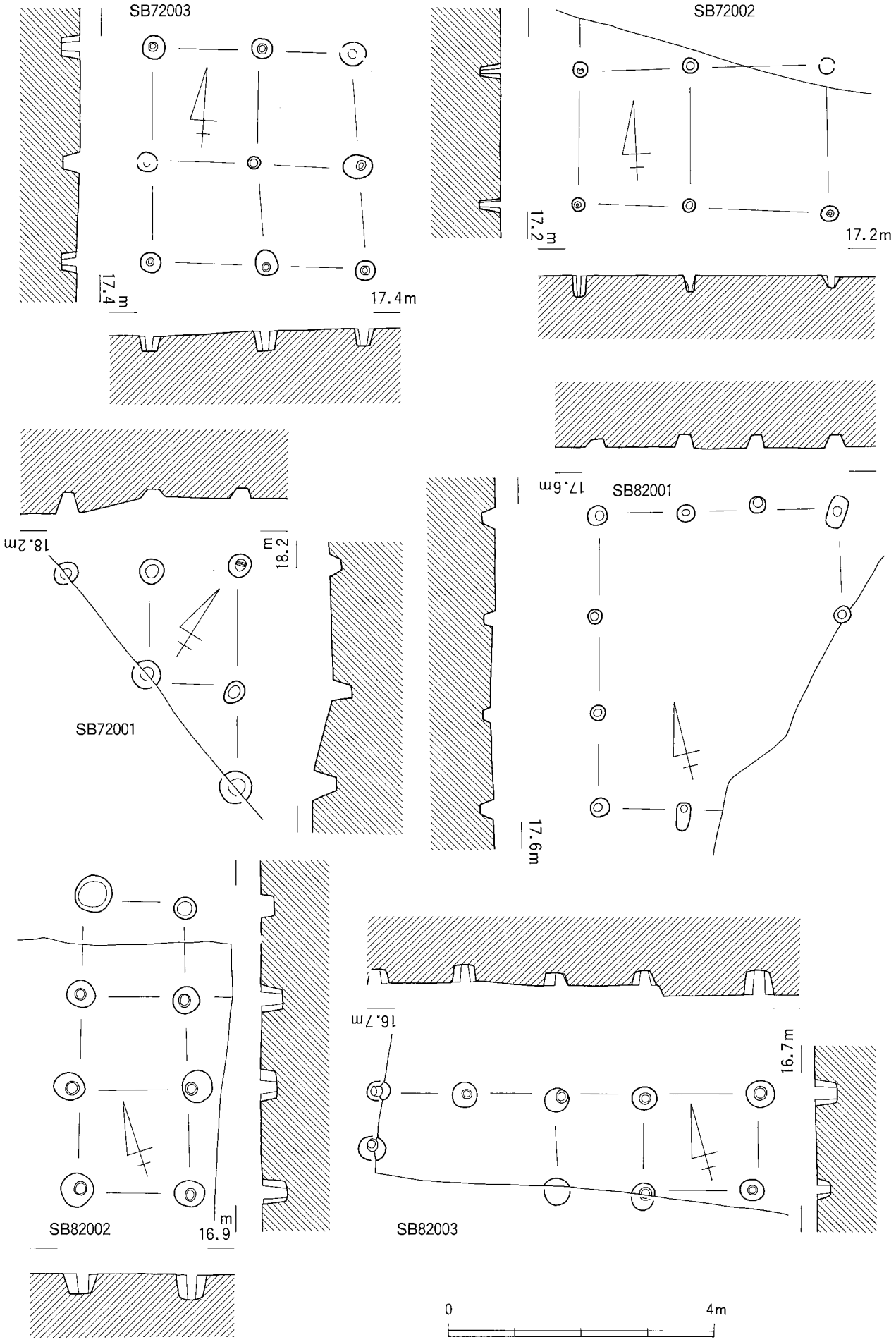


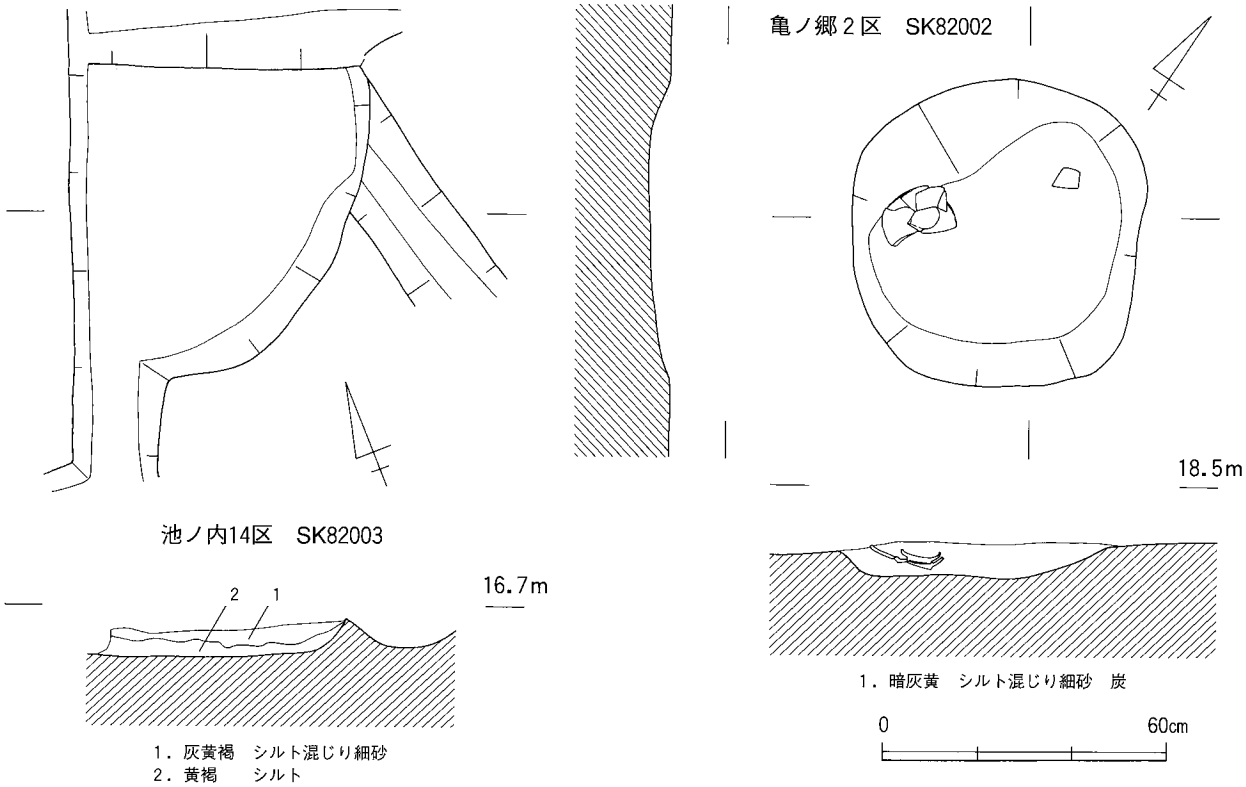
図版42
SD72007

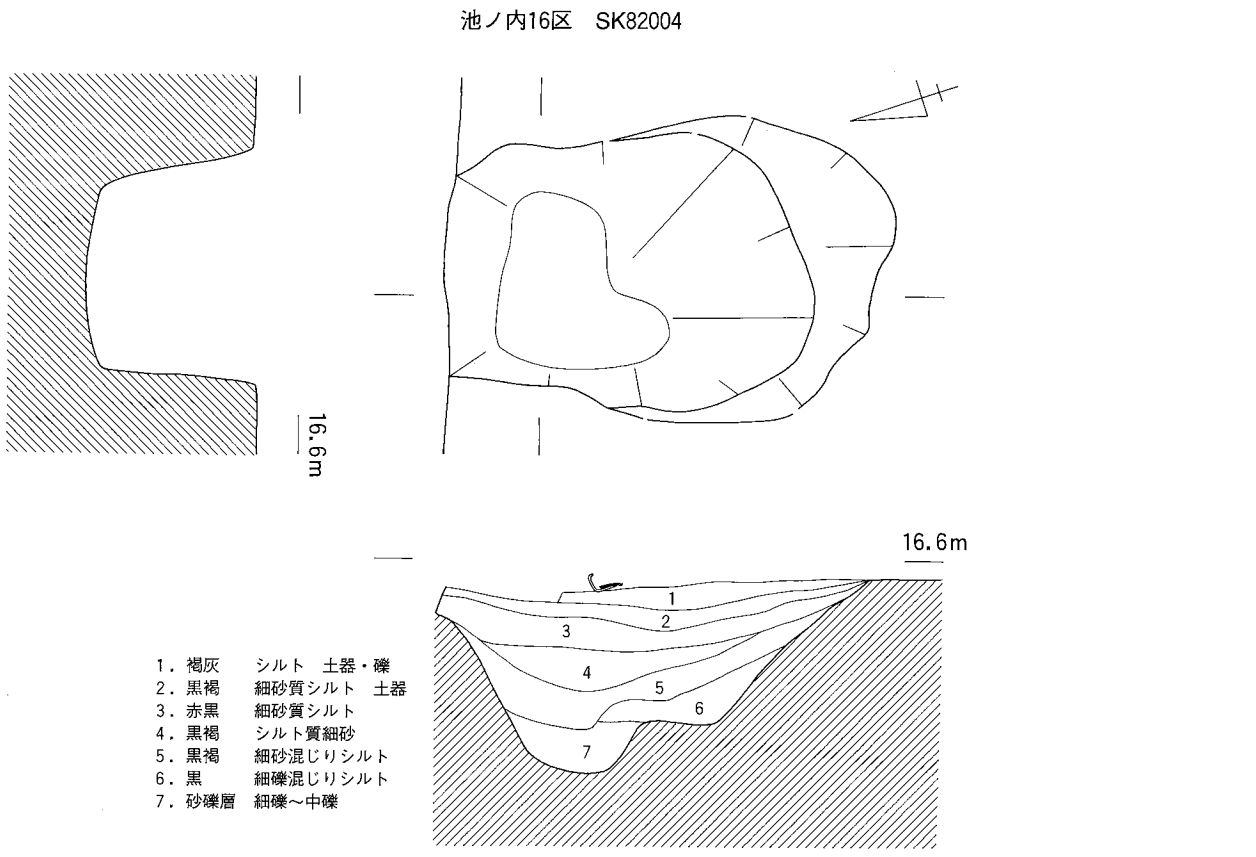
西ケ市７区　水路 遺物出土状況



掘立柱建物


SB72003
17.4m
17.4m
SB72002
17.2m
17.2m
SB72001
18.2m
18.2m
SB82001
17.6m
17.6m
SB82002
16.9m
SB82003
16.7m
16.7m
0
4m

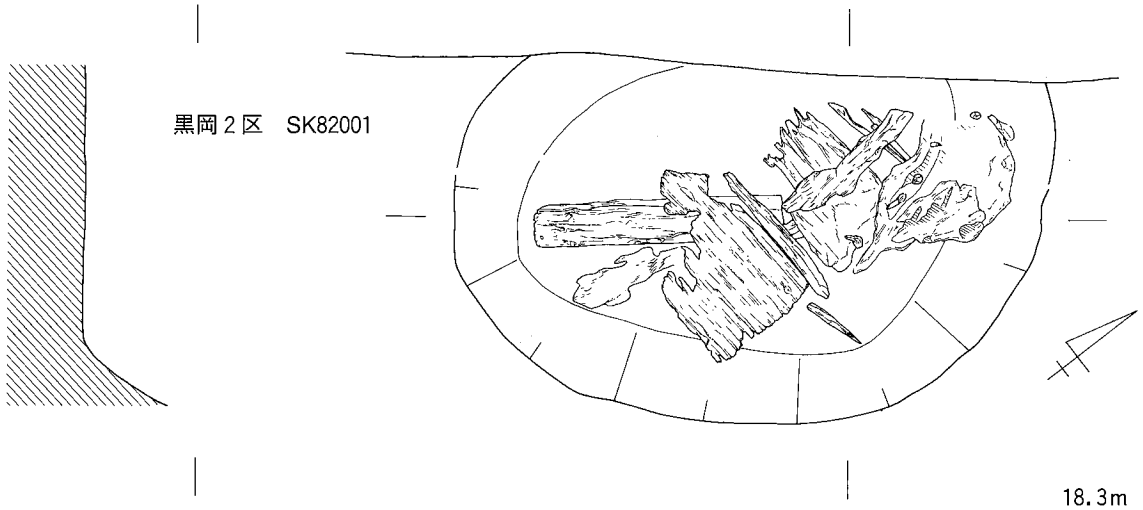

亀ノ郷2区　SK82002
18.5m
池ノ内14区　SK82003
16.7m
2
1
1．灰黄褐　シルト混じり細砂
2．黄褐　　シルト
1．暗灰黄　シルト混じり細砂　炭
0
60cm


池ノ内16区　SK82004
16.6m
16.6m
1．褐灰　　シルト　土器・礫
2．黒褐　　細砂質シルト　土器
3．赤黒　　細砂質シルト
4．黒褐　　シルト質細砂
5．黒褐　　細砂混じりシルト
6．黒　　細礫混じりシルト
7．砂礫層　細礫～中礫
0
2m

古代・中世　土坑２・溝

（SK82001/SD82001～82004）

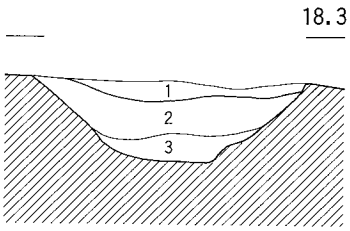
黒岡２区　SK82001



18.3m

1．暗灰黄　シルト質極細砂　ラミナ
2．暗灰黄　シルト・中礫混じり細砂～中砂
3．砂礫層　中砂～中礫
4．灰　　細砂～シルト　板材・礫
5．暗緑灰　シルト混じり極粗砂～細礫　ラミナ
6．砂礫層　中砂～中礫　ラミナ
7．砂礫層　細礫～中礫
8．黒褐　　シルト～細砂　ラミナ

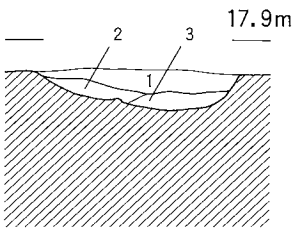
下町７区　SD82001



18.3m

1．にぶい黄　細砂～中砂
2．灰黄　　シルト混じり細砂　ラミナ
3．にぶい黄　細砂～中砂　ラミナ

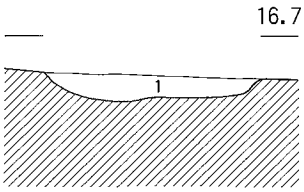
下町４区　SD82001



17.9m

1．灰黄　　シルト質極細砂
2．にぶい黄　極細砂　ラミナ
3．灰白　　細砂

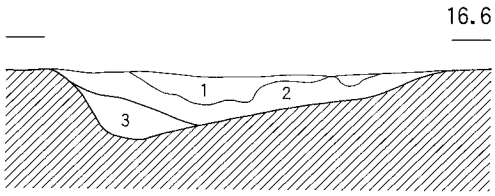
池ノ内14区　SD82003



16.7m

1．黄灰　シルト質極細砂

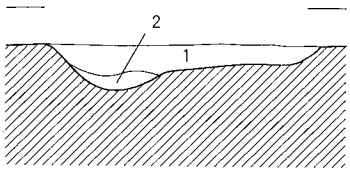
池ノ内14区　SD82002 (A)



16.6m

1．黄灰　　シルト　炭
2．オリーブ灰　細砂～中砂　ラミナ炭
3．灰オリーブ　砂礫混じりシルト

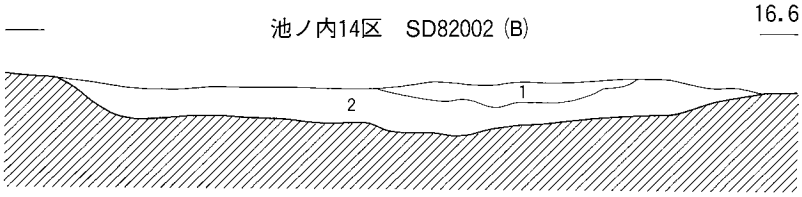
池ノ内14区　SD82004



16.7m

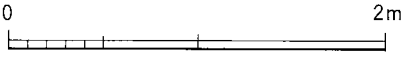
1．灰黄褐　細砂～中砂　粘質
2．暗灰黄　中砂　　粘質

池ノ内14区　SD82002 (B)



16.6m

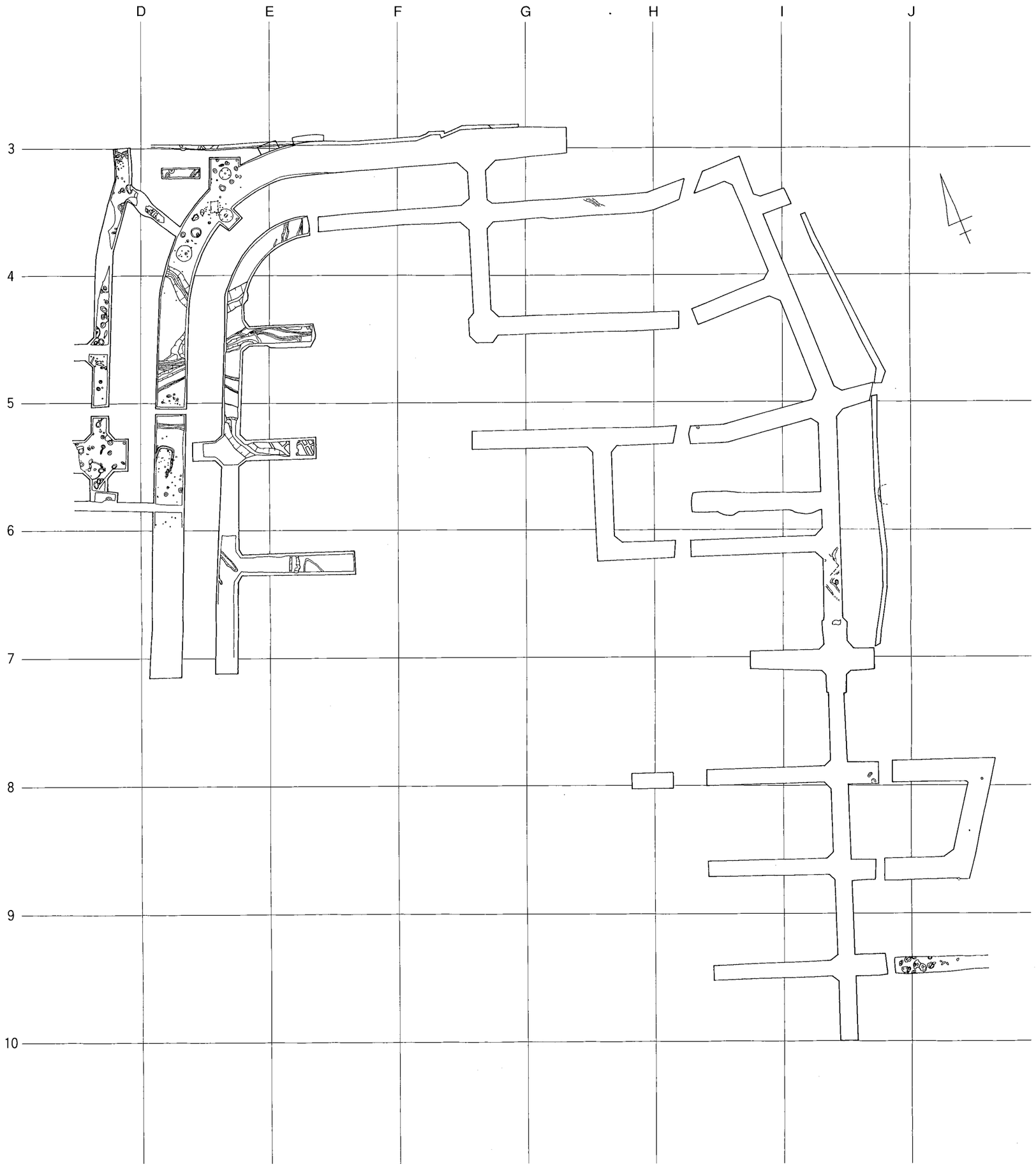
1．黄灰　　細砂混じりシルト
2．オリーブ灰　細砂～中砂　ラミナ



0　　2m

図版46

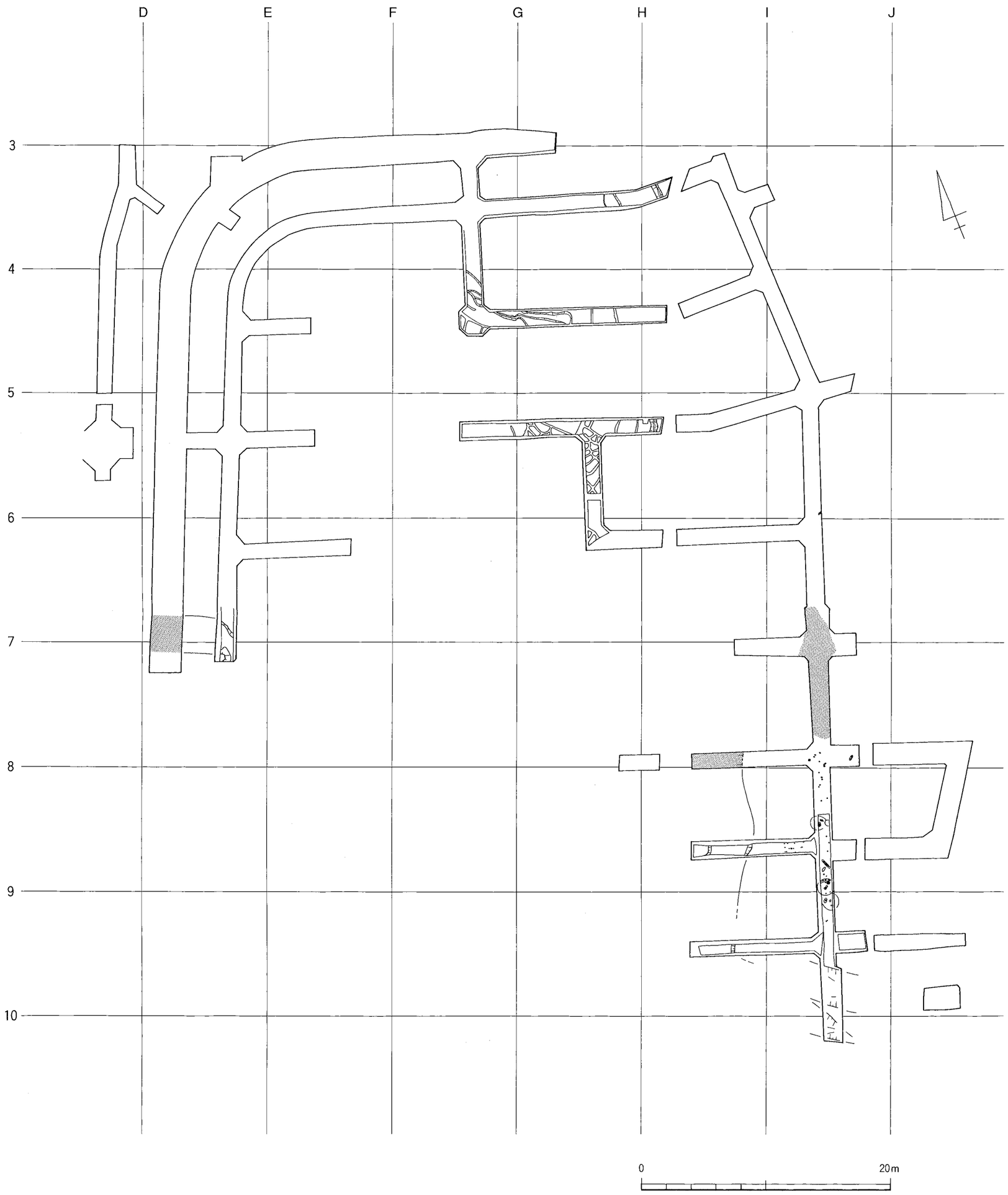
弥生時代前期　全体図



※縄文時代の遺構を含む

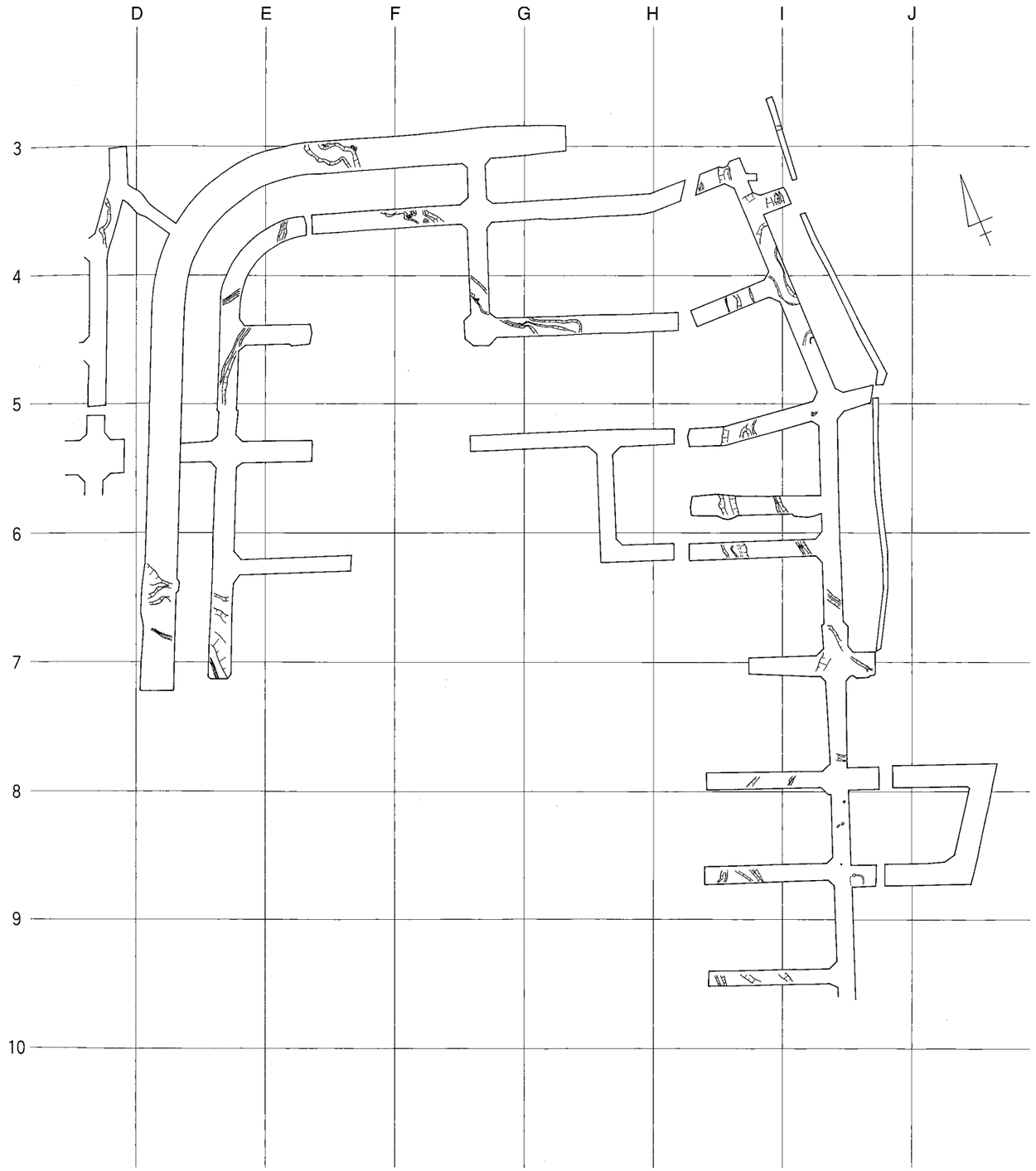
図版47

弥生時代中期　全体図

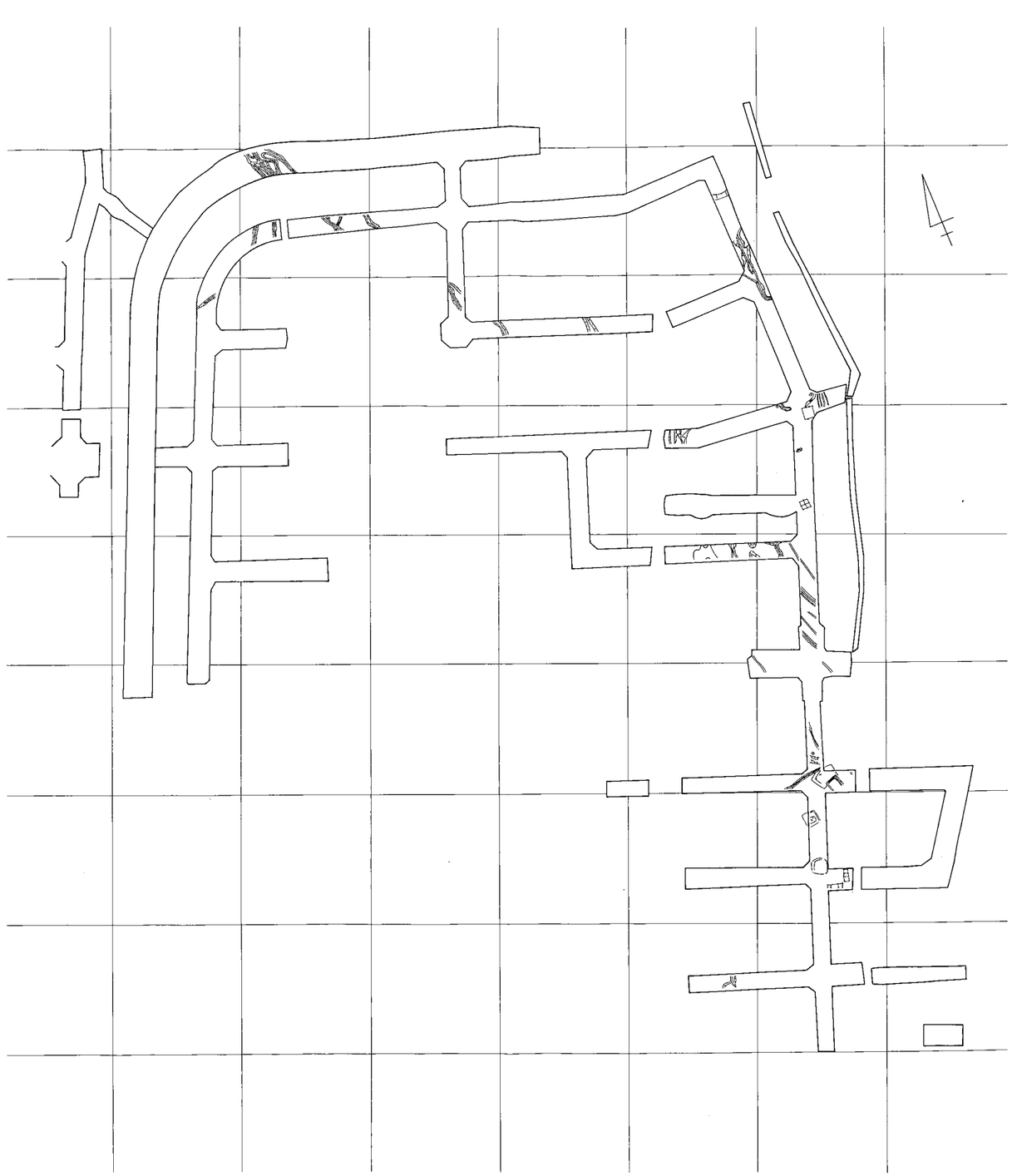


図版48

弥生時代後期～古墳時代前期　全体図



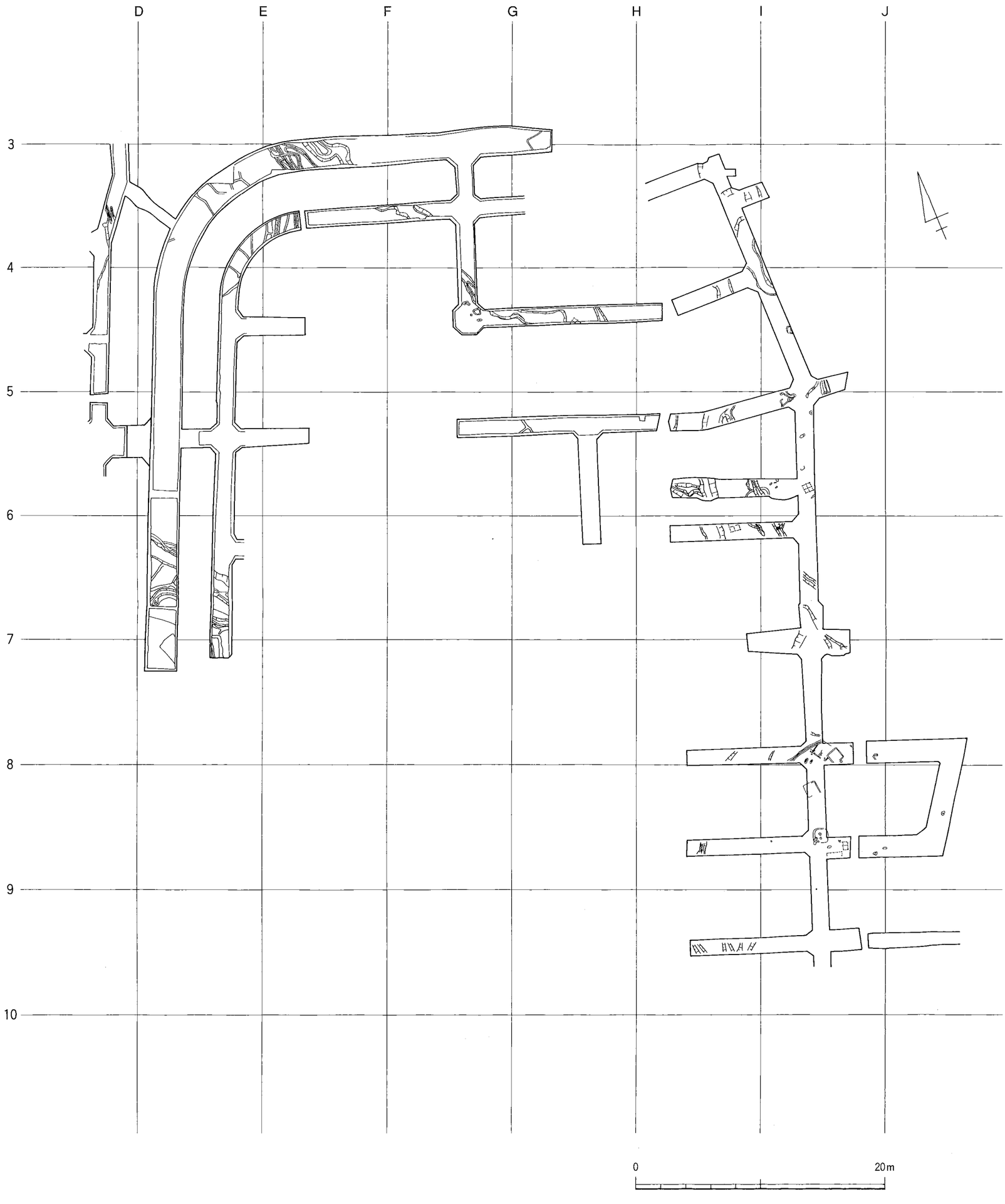
下層



上層

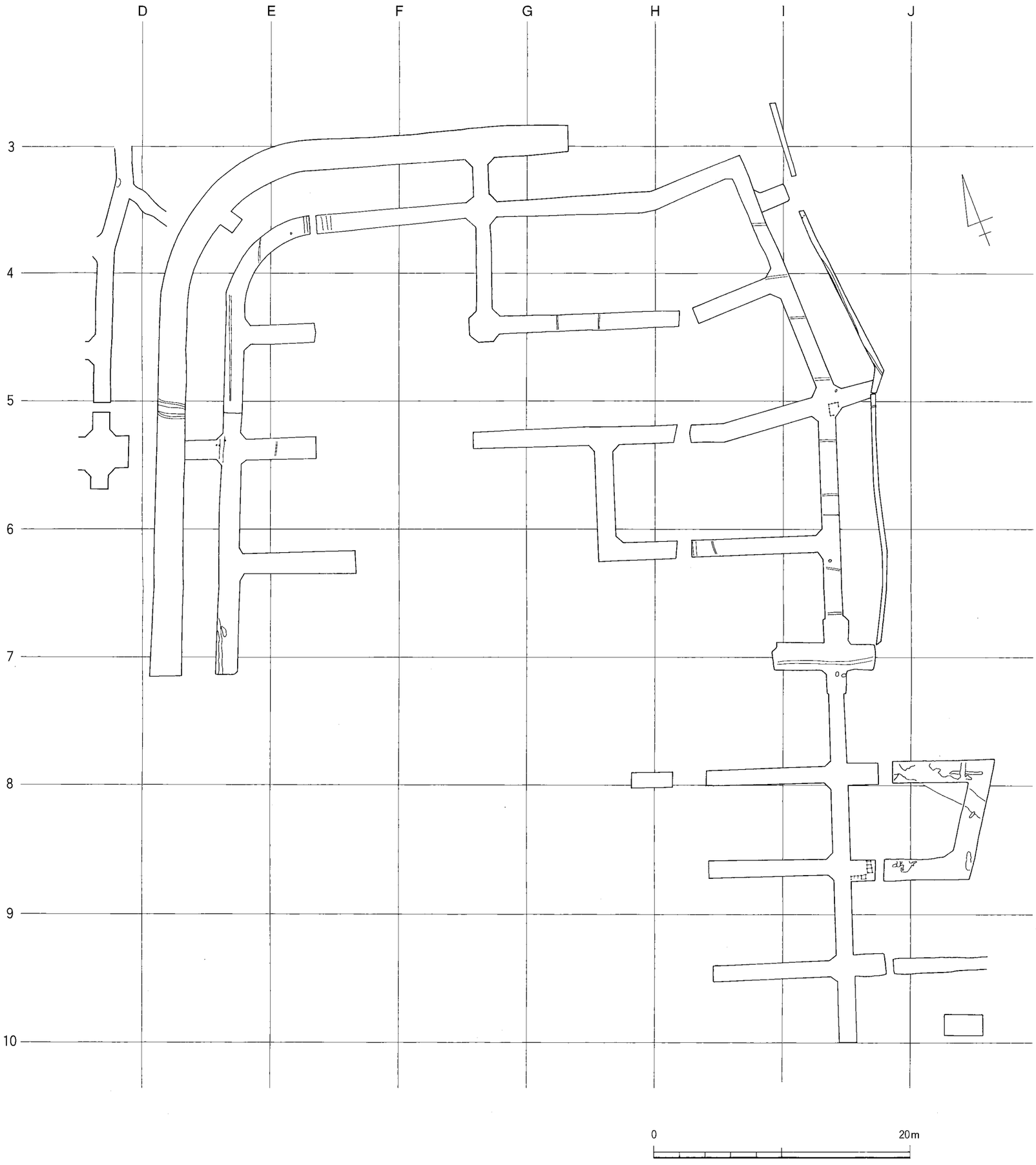
図版49

古墳時代中期　全体図

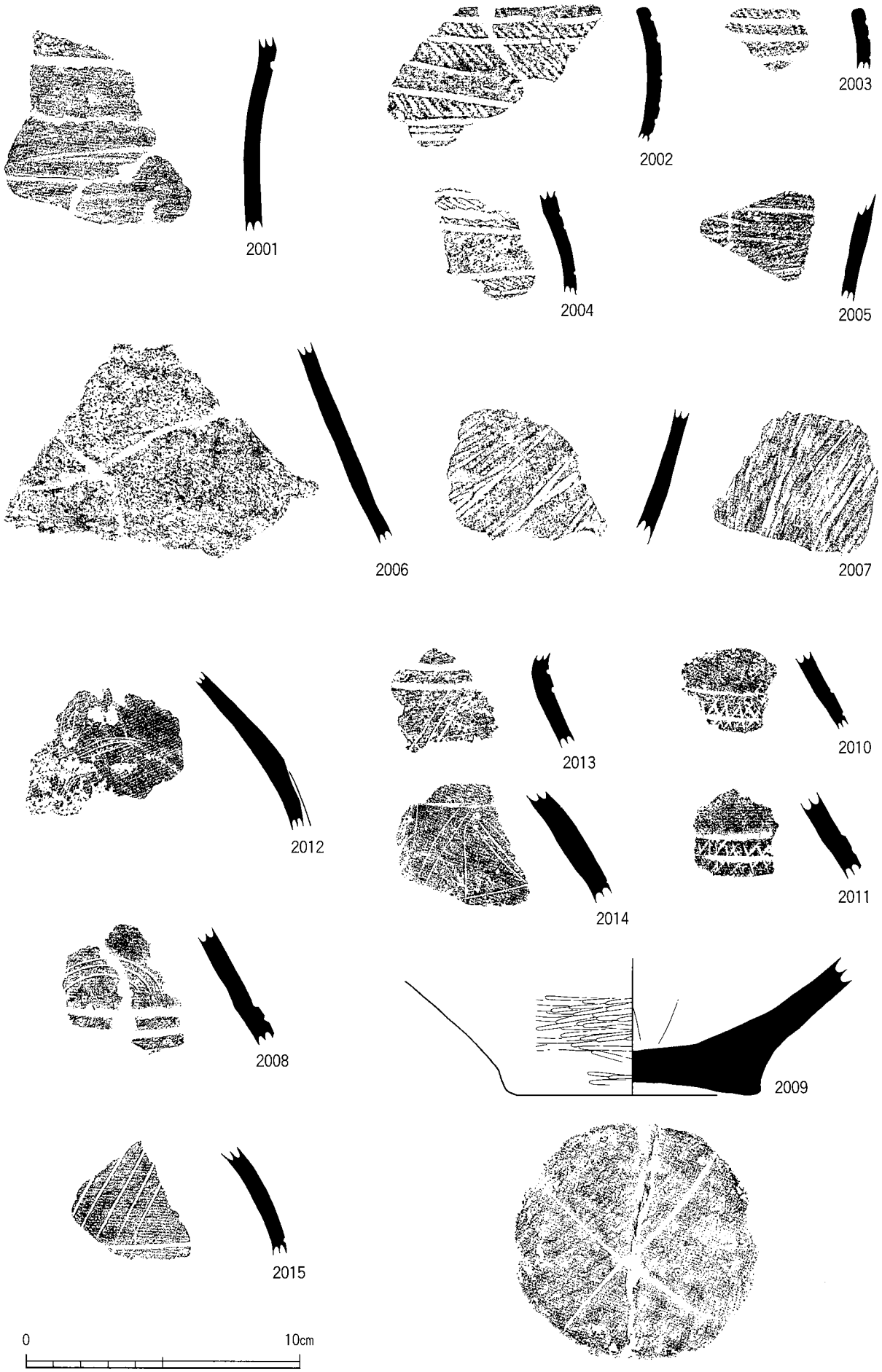


図版50

古代・中世　全体図



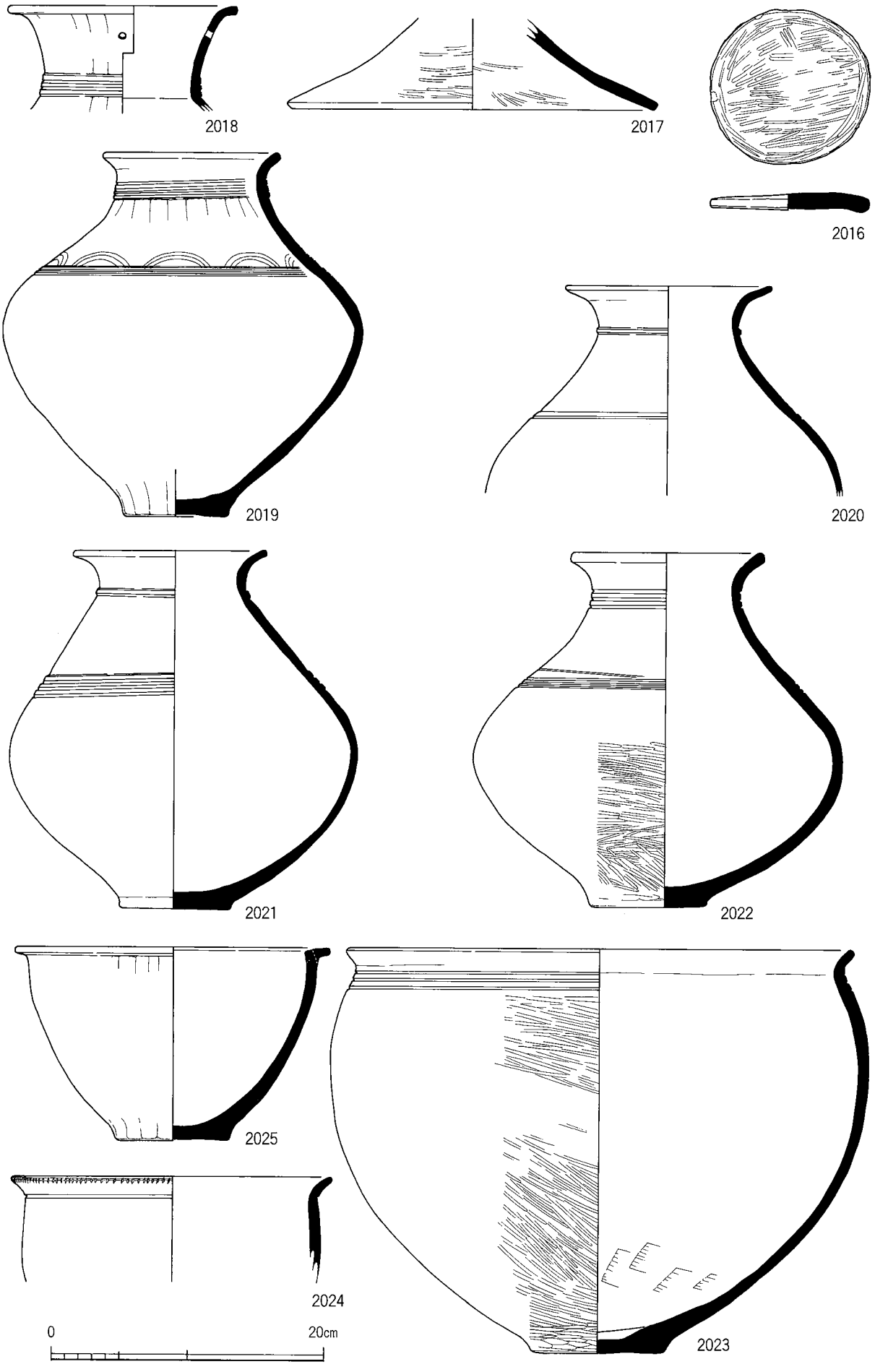
縄文土器・弥生前期の土器1



黒岡1区SK22018(2009)　SK22014(2010)　包含層(2008)　2区包含層(2011～2015)
西ケ市6区SK12001(2004～2007)　池ノ内1区SR42002(2001)　14区SK12002(2002･2003)

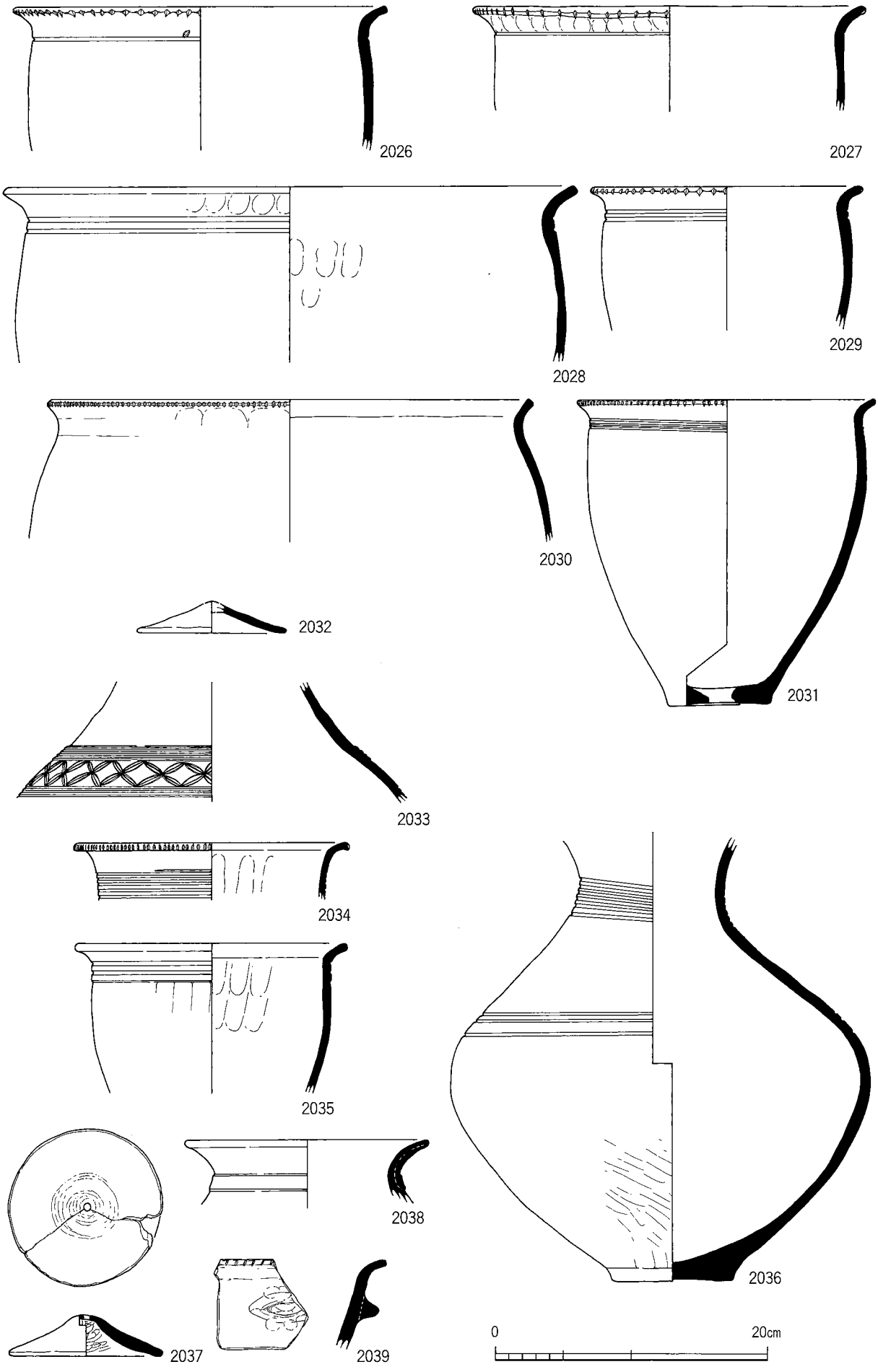
図版52
2016～2025

弥生時代前期の土器２　黒岡１区出土



SK22020

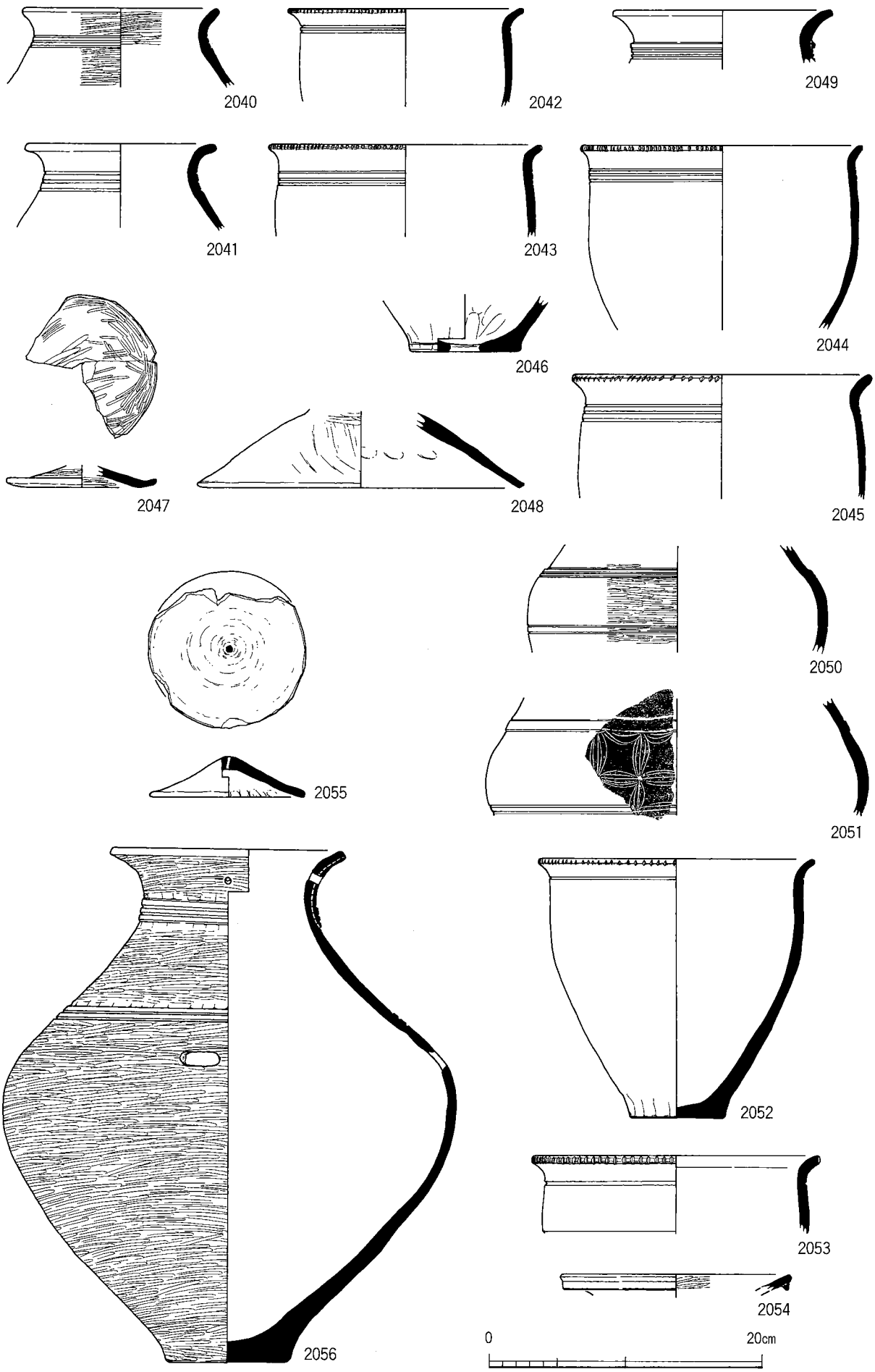
弥生時代前期の土器３　黒岡１区出土



SK22020(2026～2029)　SK22019(2030･2031)　SK22014(2032～2034)
SK22017(2035)　ST22002(2036)　包含層(2037～2039)

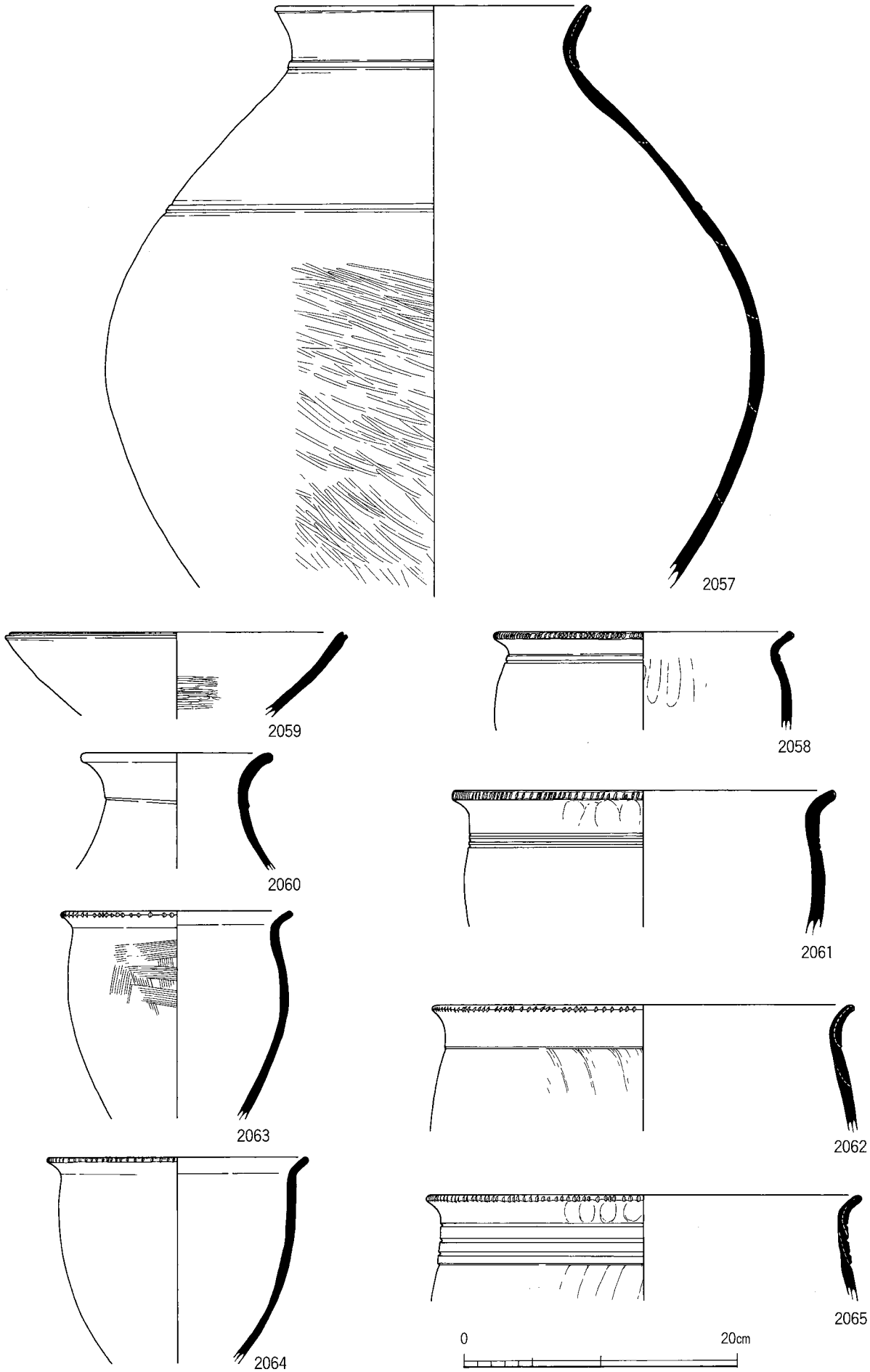
図版54
2040～2056

弥生時代前期の土器 4　黒岡 2 区出土



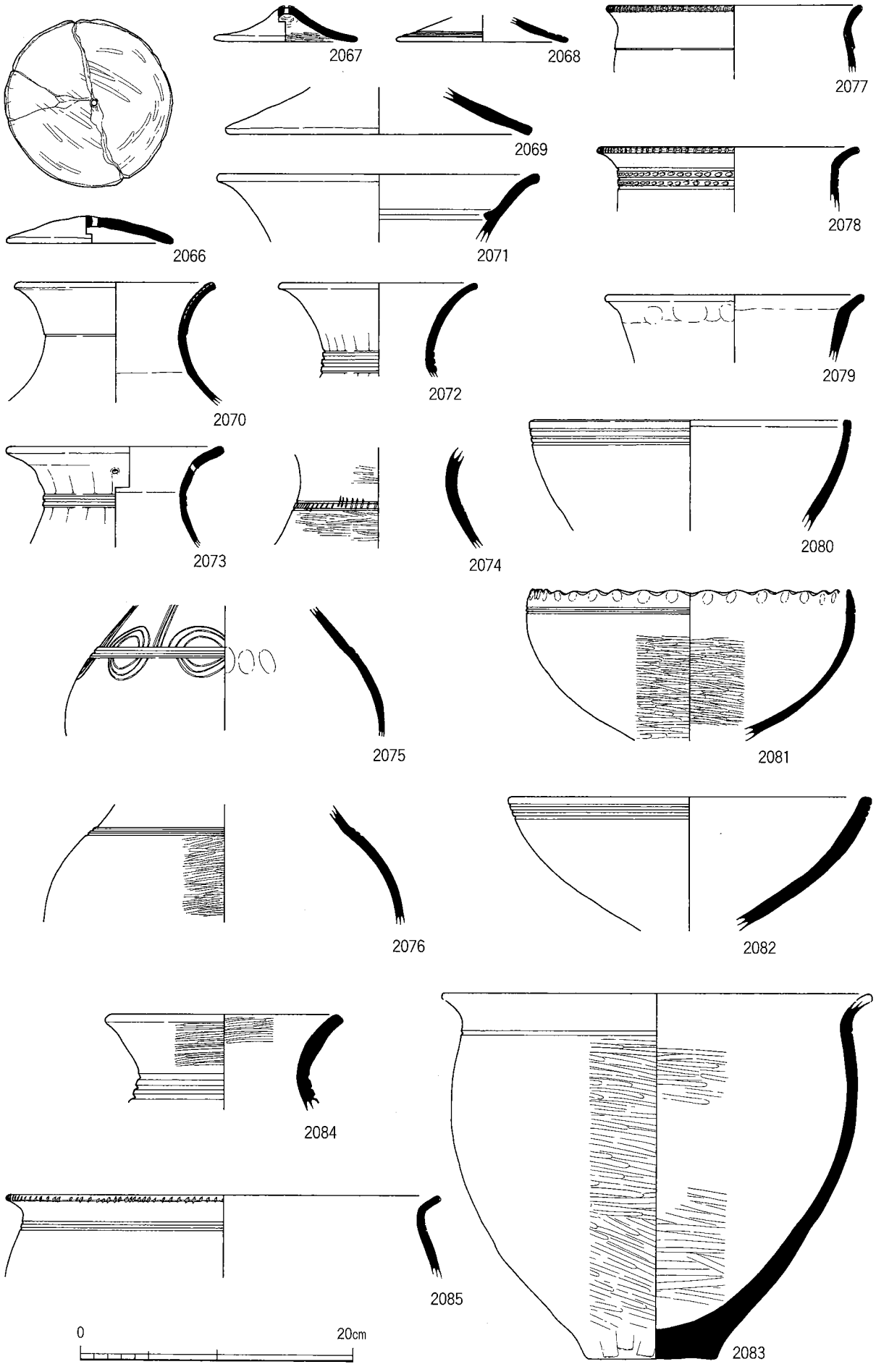
SK22002(2040～2048)　SH22002(2049)　SK22006(2050)　SK22005(2051)
SK22008(2052)　SK22009(2053)　SK22010(2054)　ST22001(2055・2056)

弥生時代前期の土器５　黒岡２区出土



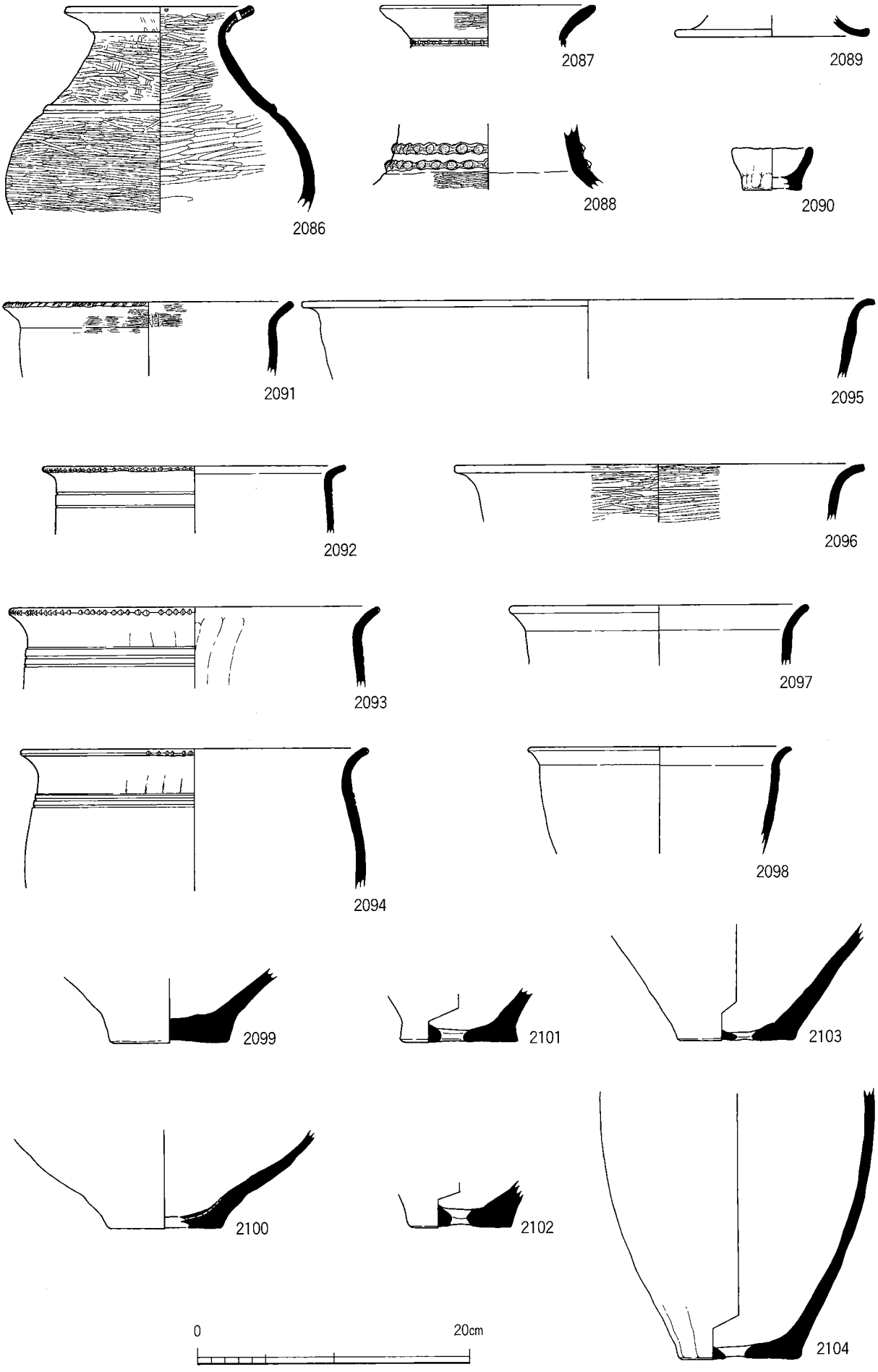
SK22011(2057)　SK22007(2058・2059)　SK22003(2060・2061)
SK22001(2062・2063)　SD22002(2064)　SD22001(2065)

弥生時代前期の土器6　黒岡地区出土



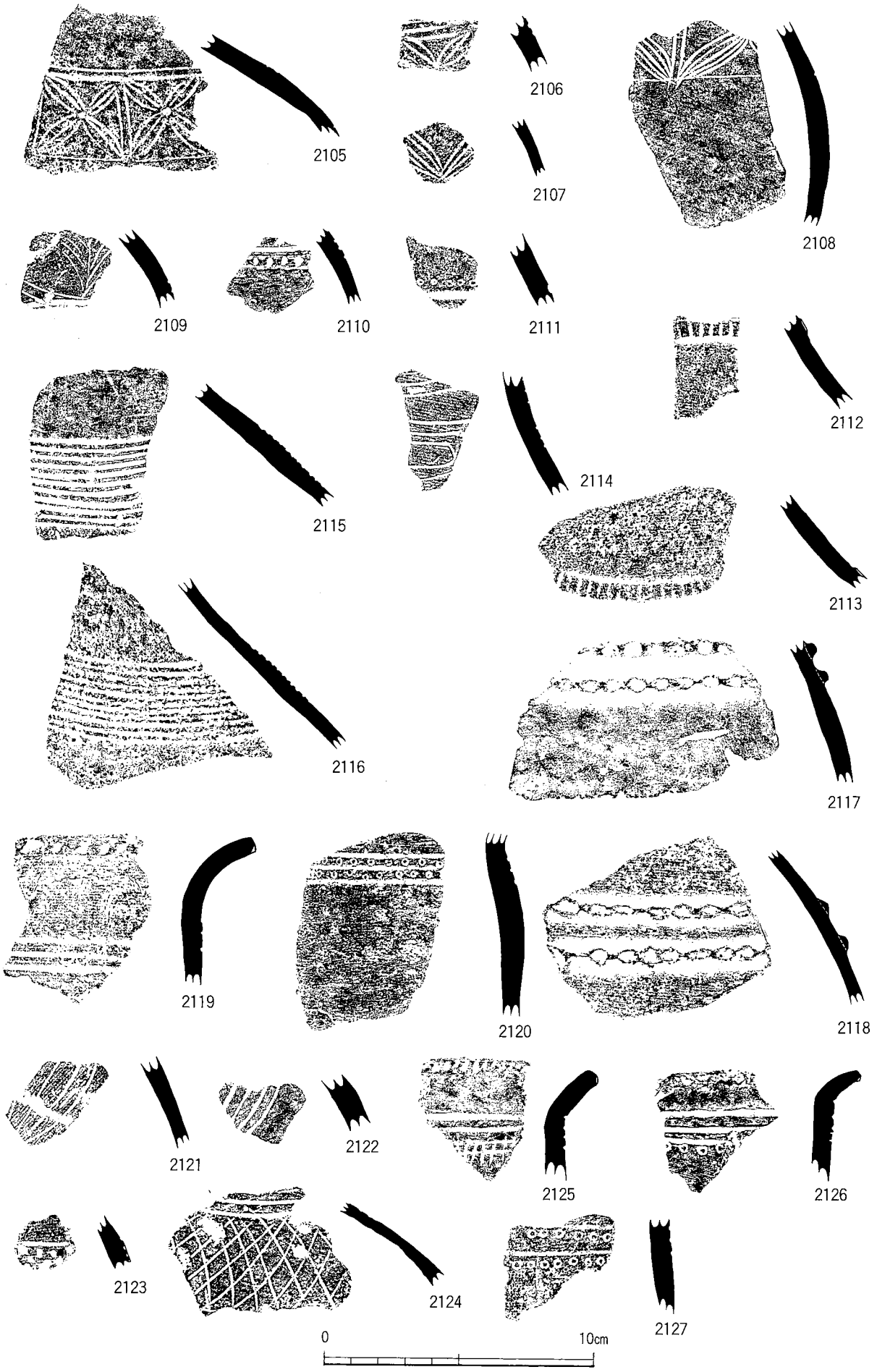
2区SD22003(2074)　包含層(2066～2073・2075～2082)
4区SK22012(2083)　11区SK22015(2084)　SK22016(2085)

弥生時代前期の土器７　亀ノ郷地区出土



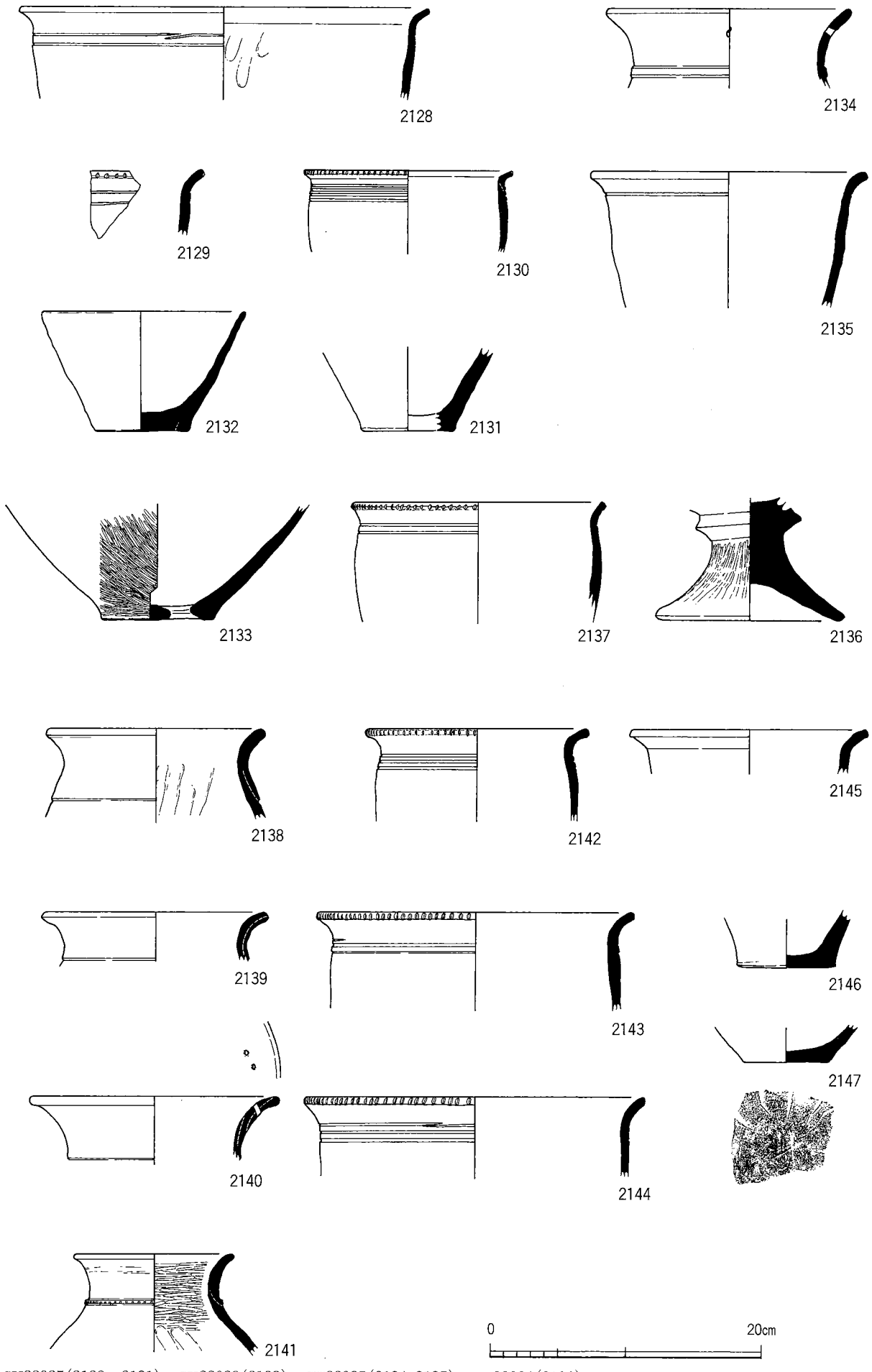
D３区SK22023(2086)　SK22022(2091)　SD22004(2095･2099)　包含層(2087～2090･2092～2094･2097･2098･2100～2104)
D３－２G区SK22024(2096)

弥生時代前期の土器 8　亀ノ郷地区出土



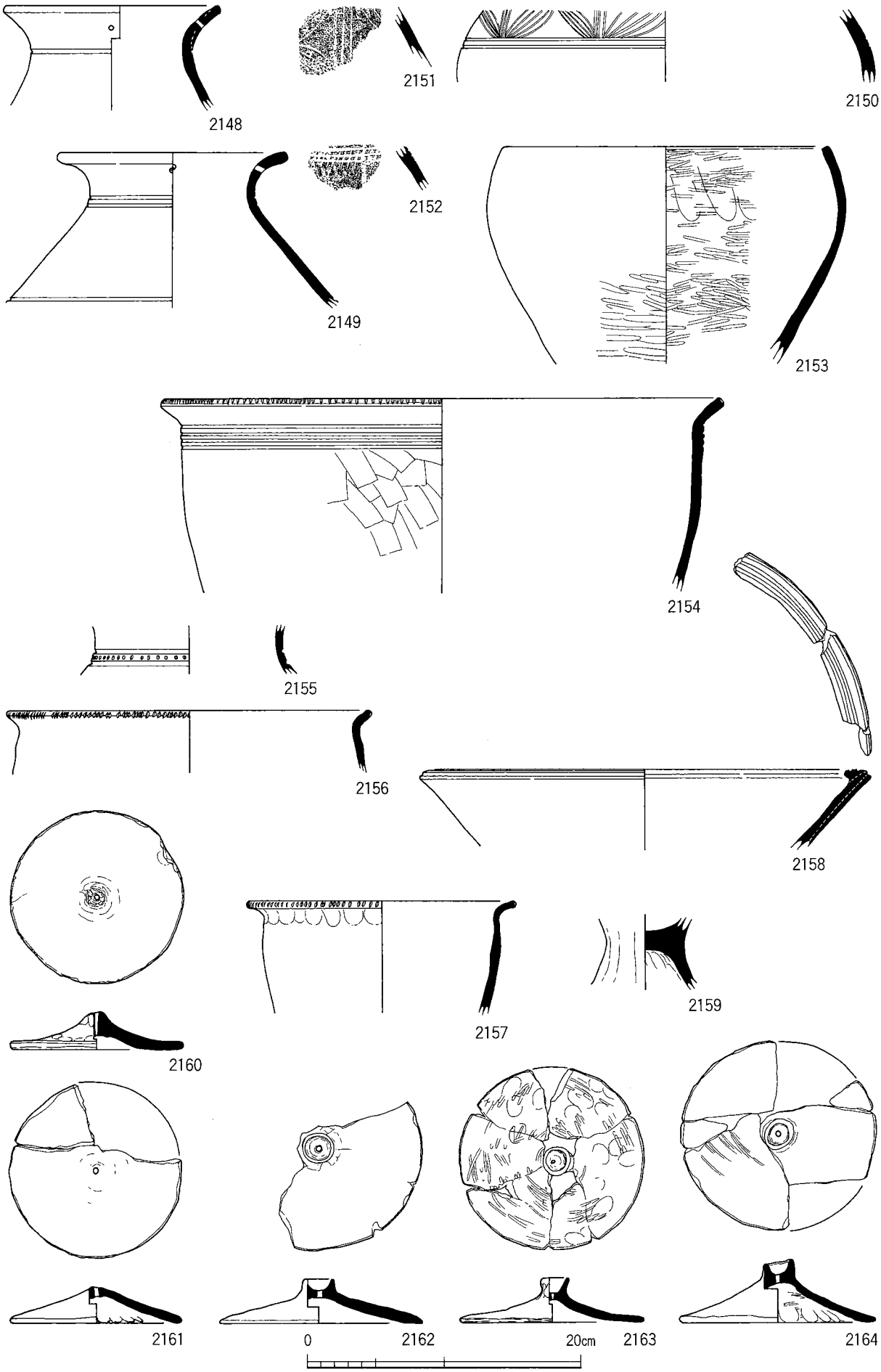
D３区SK22022(2108)　SK22023(2110・2111)　SD22004(2114)　D３－２G区SH22004(2122)　SK22024(2123)　SK22025(2126)
D３区包含層(2105～2107・2109・2112・2113・2115～2120)　D３－２G区包含層(2121・2124・2125・2127)

弥生時代前期の土器９　亀ノ郷地区Ｄ３－２Ｇ区出土



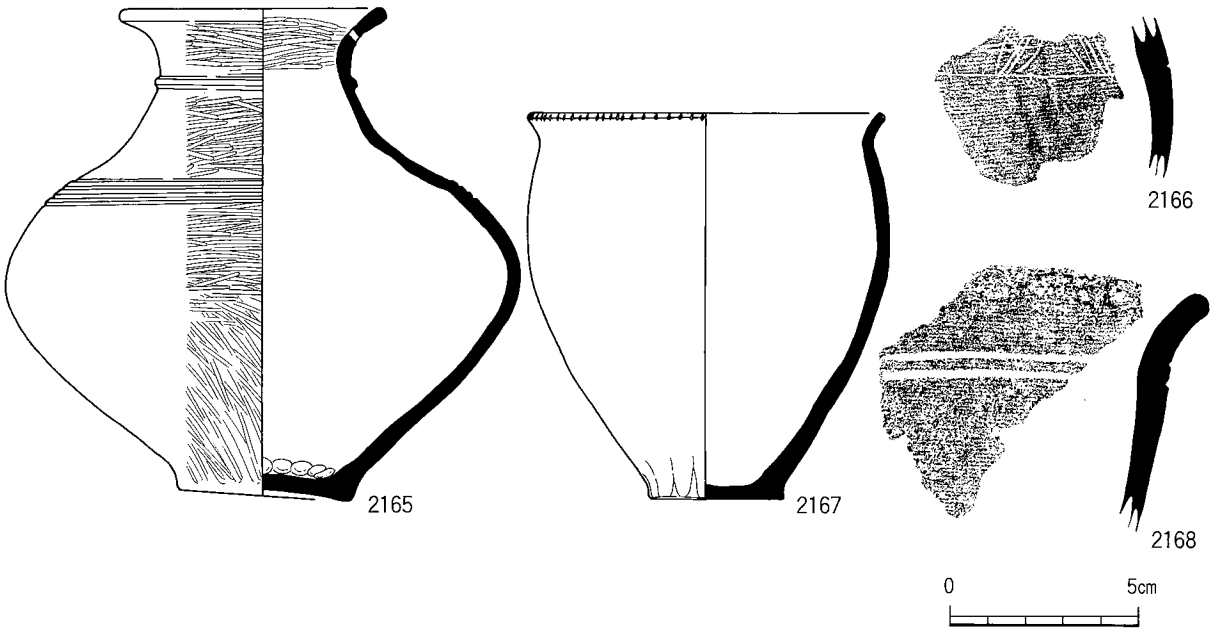
SH22025(2128～2131)　SK22028(2133)　SK22025(2134･2135)　SK22024(2136)
包含層(2137～2147)　亀ノ郷１区SB22001(2132)

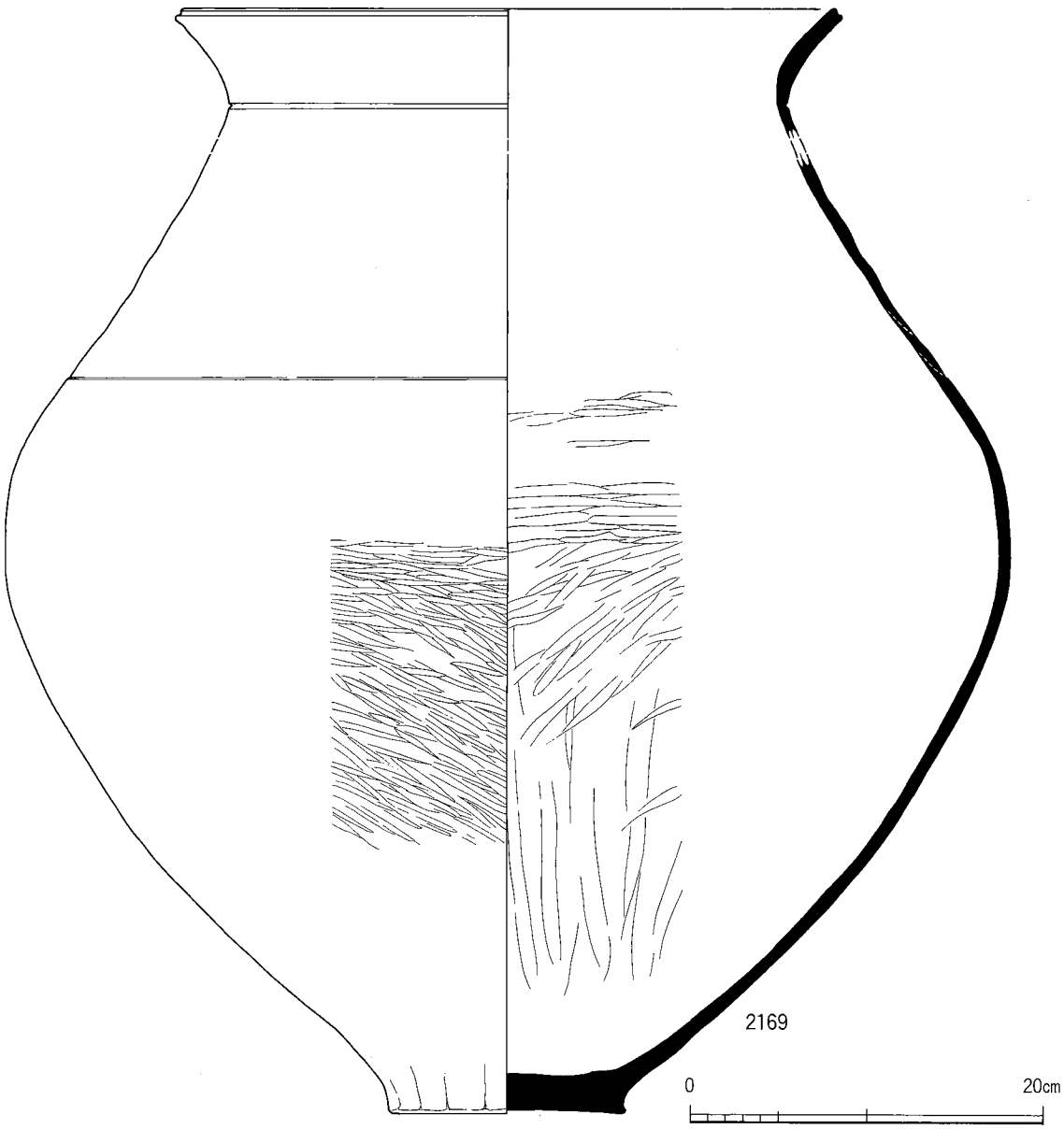
弥生時代前期の土器10　亀ノ郷１区出土



SH22006（2148～2153）　SH22002（2154）　SH22005（2155～2159）
SB22001上層（2160～2164）

弥生時代前期の土器11　亀ノ郷１区出土

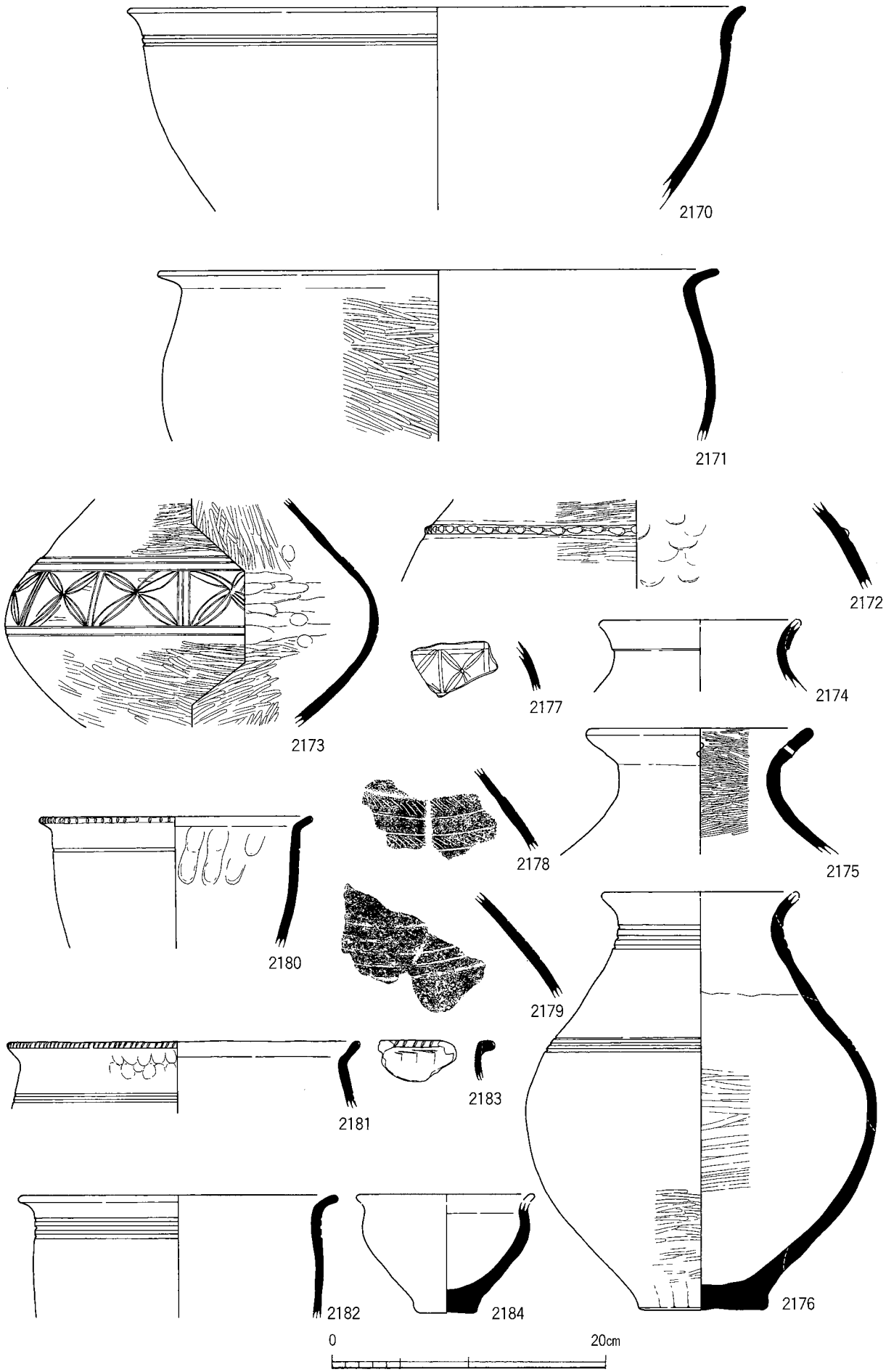




SB22001上層

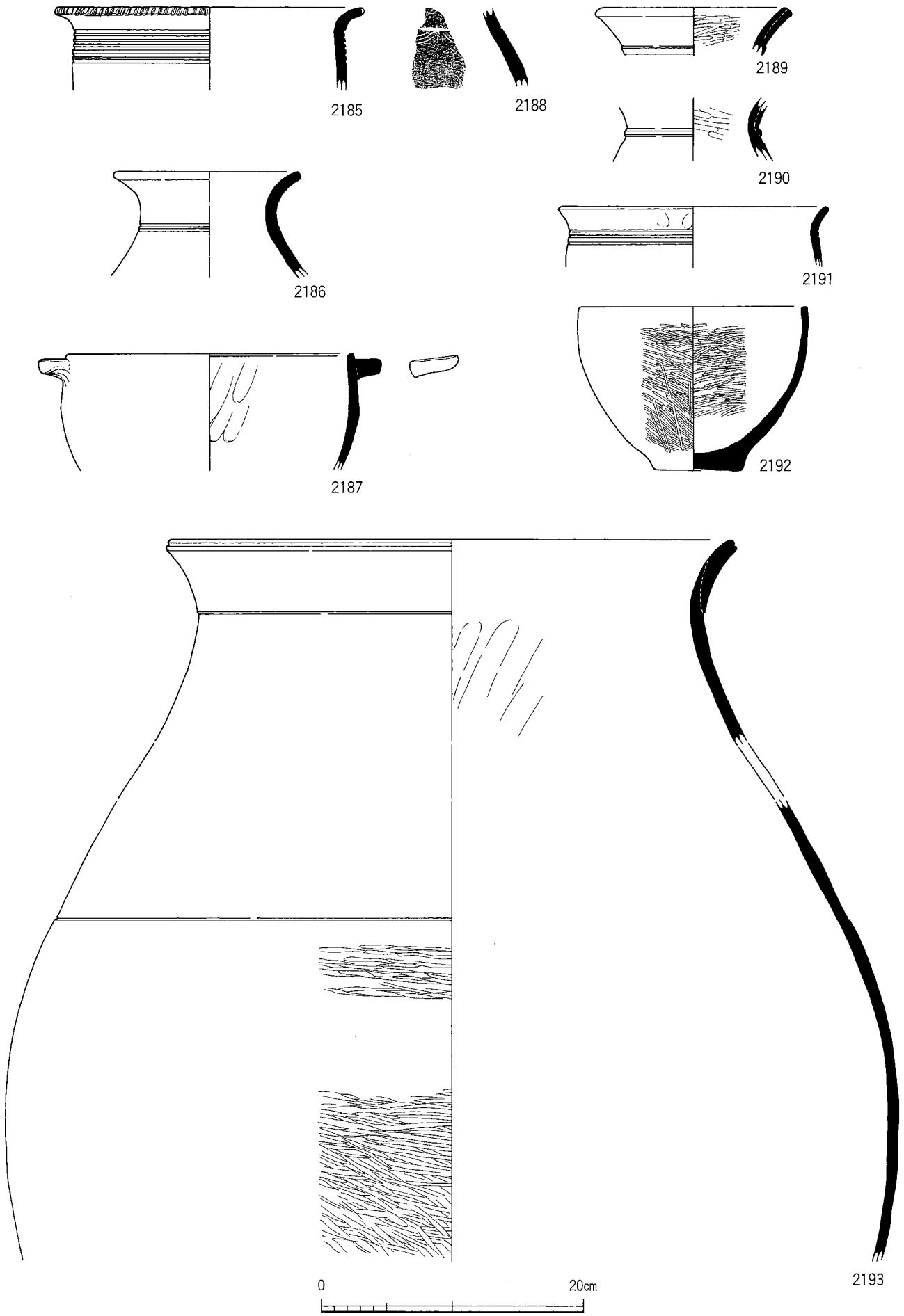
図版62
2170～2184

弥生時代前期の土器12　亀ノ郷1区出土



SB22001上層(2170)　SK22038(2171)　SK22036(2172)　SK22034(2173)
SD22008(2179)　包含層(2174～2178・2180～2184)

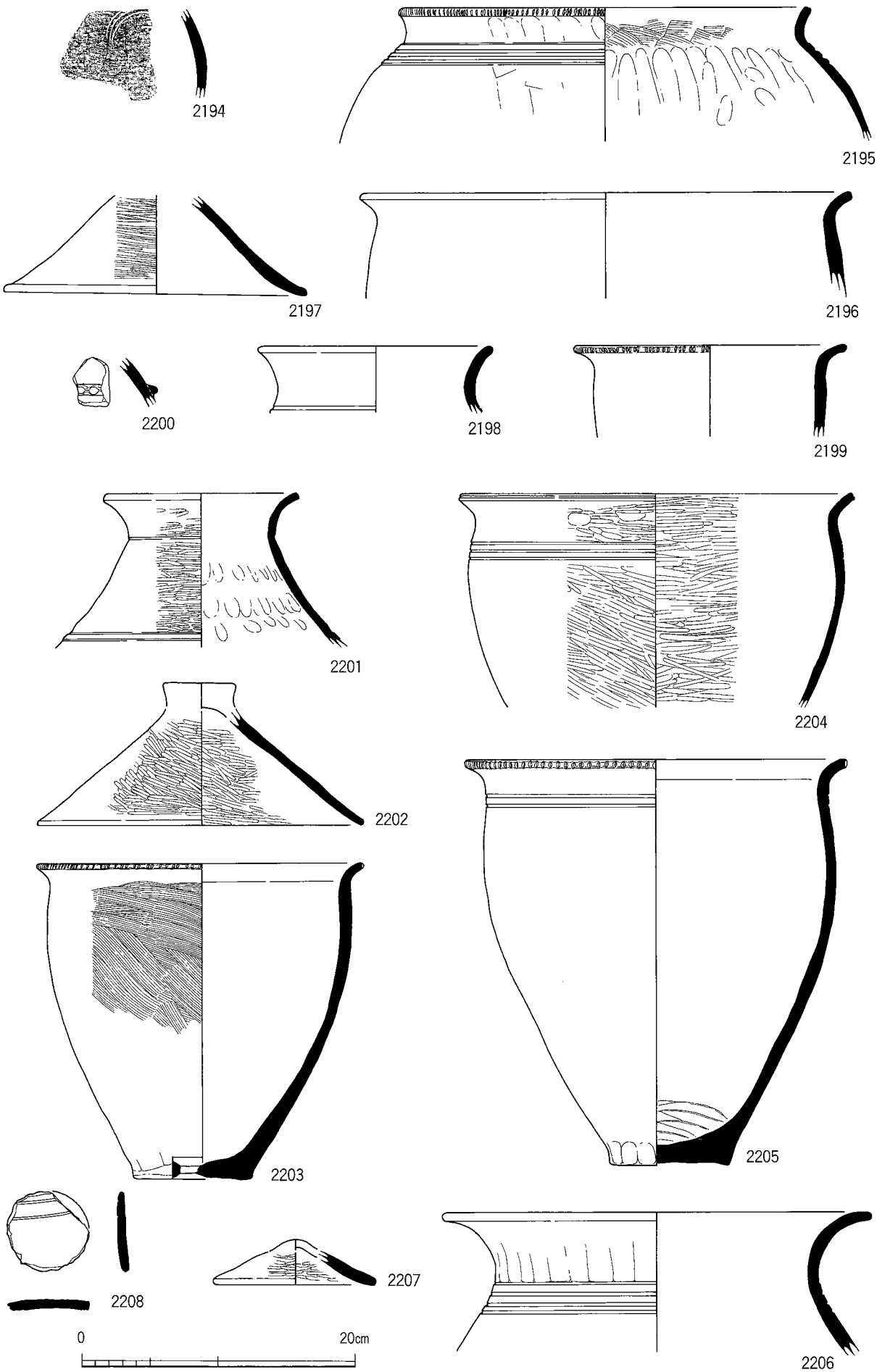
弥生時代前期の土器13　亀ノ郷地区出土



9区SK22004(2186・2187)　SH22001(2188～2192)　SD22004(2193)
7区包含層(2185)

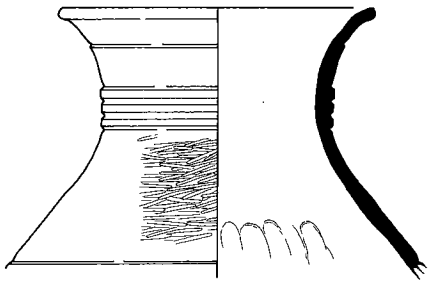
図版64
2194～2208

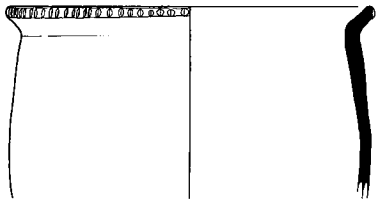
弥生時代前期の土器14　亀ノ郷地区出土

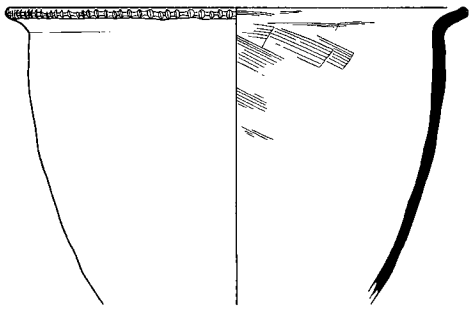


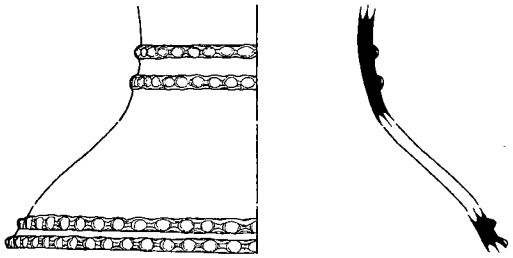
9区SD22004(2194～2197)　包含層(2198･2199)　11区包含層(2200)
12区土坑(2201～2205)　包含層(2206～2208)

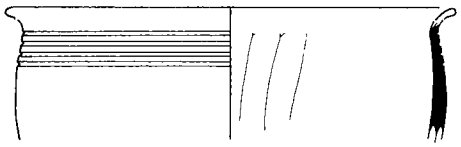
弥生時代前期の土器15　下町地区出土

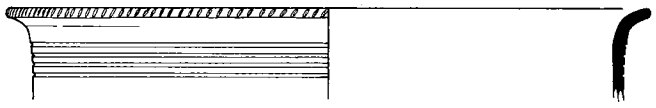

2209

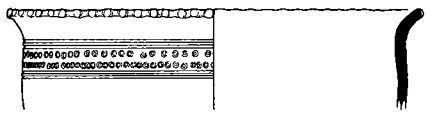

2210

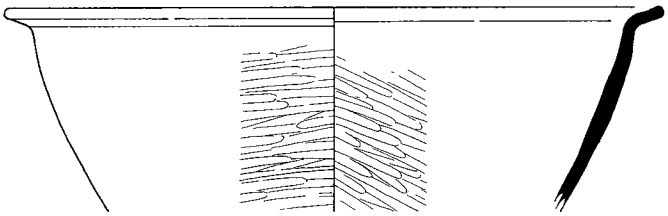

2211

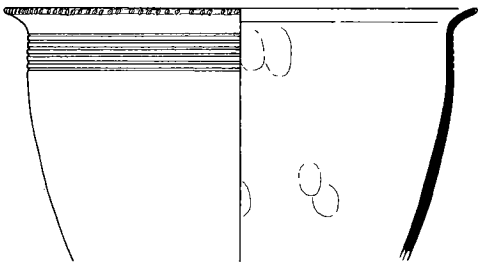

2214

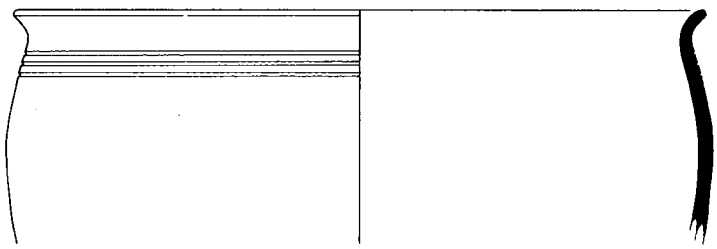

2212


2216


2213


2217


2215

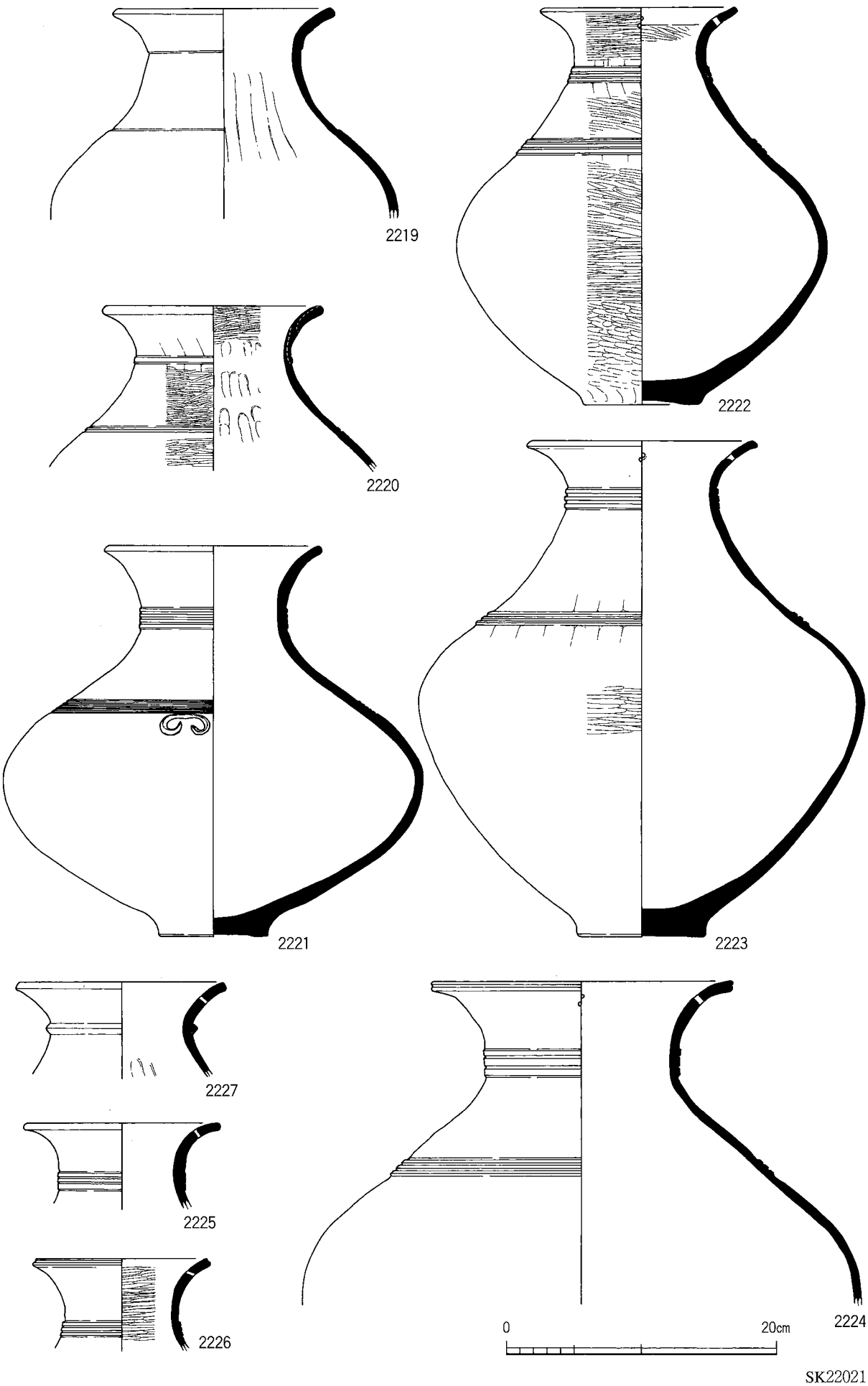

2218

0　20cm

2区SD22009(2209)　SK22040(2210～2212)　包含層(2213～2217)
6区包含層(2218)

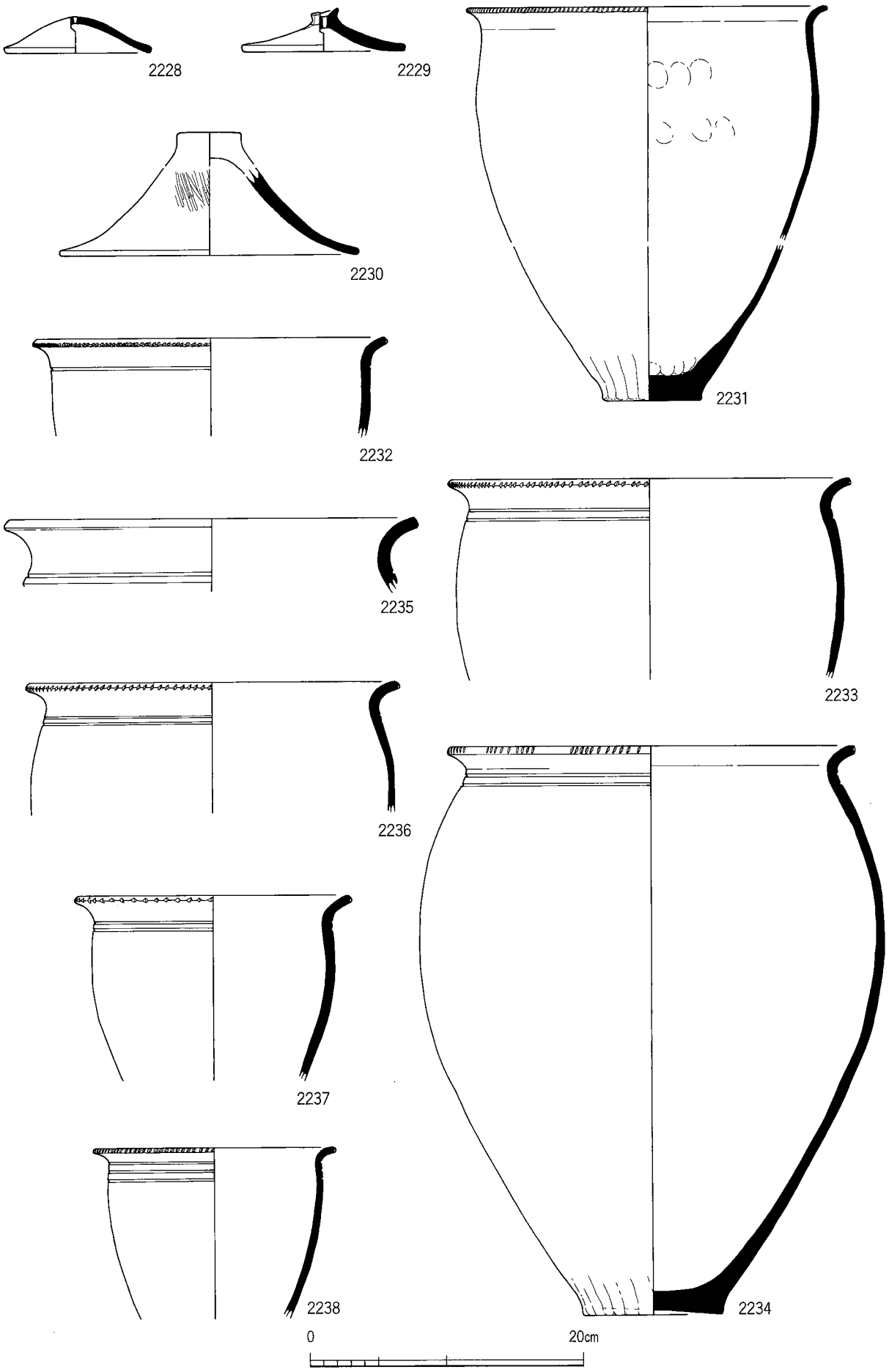
図版66
2219～2227

弥生時代前期の土器16　西ケ市地区KM７区出土



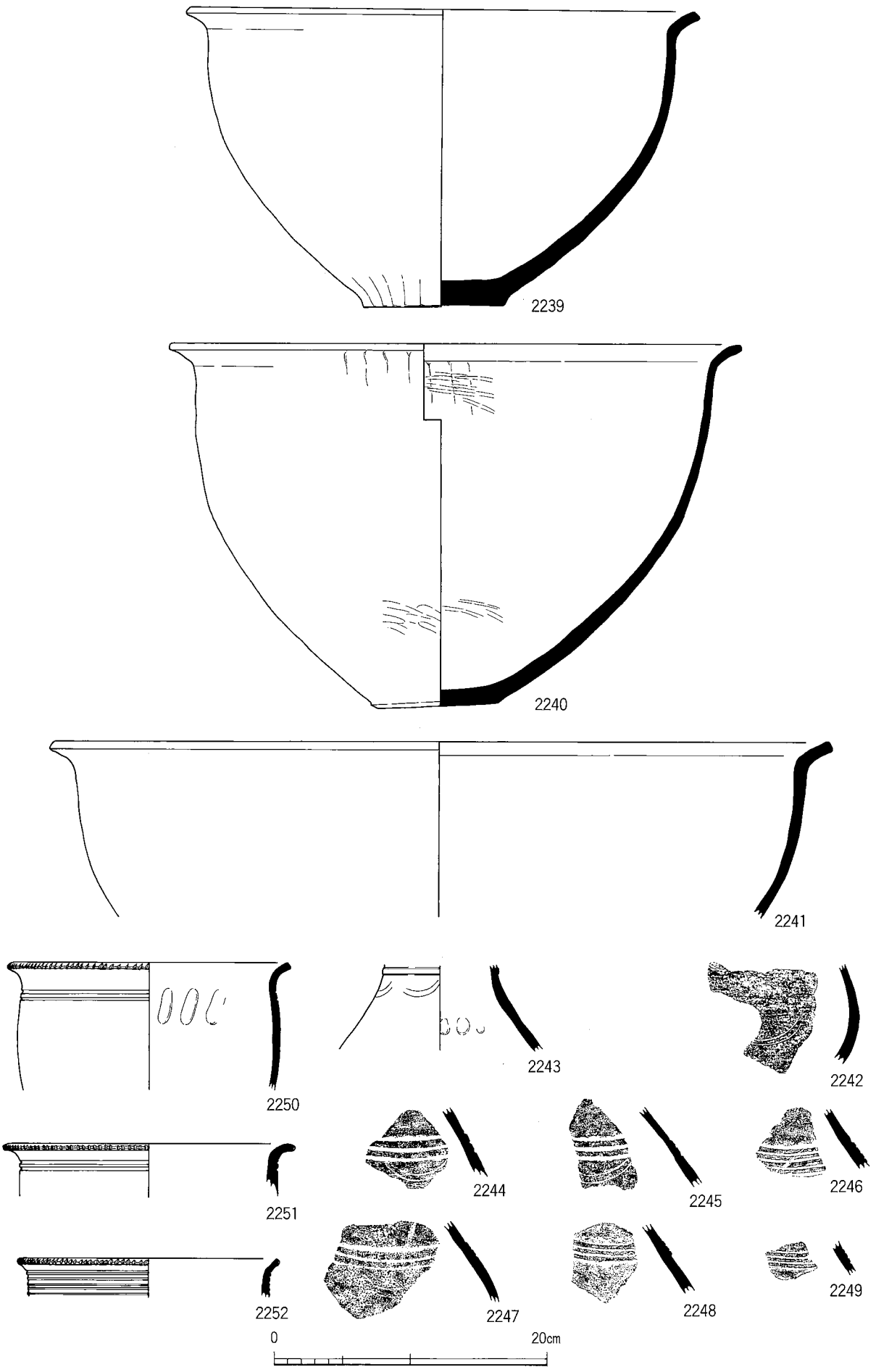
SK22021

弥生時代前期の土器17　西ケ市地区KM７区出土



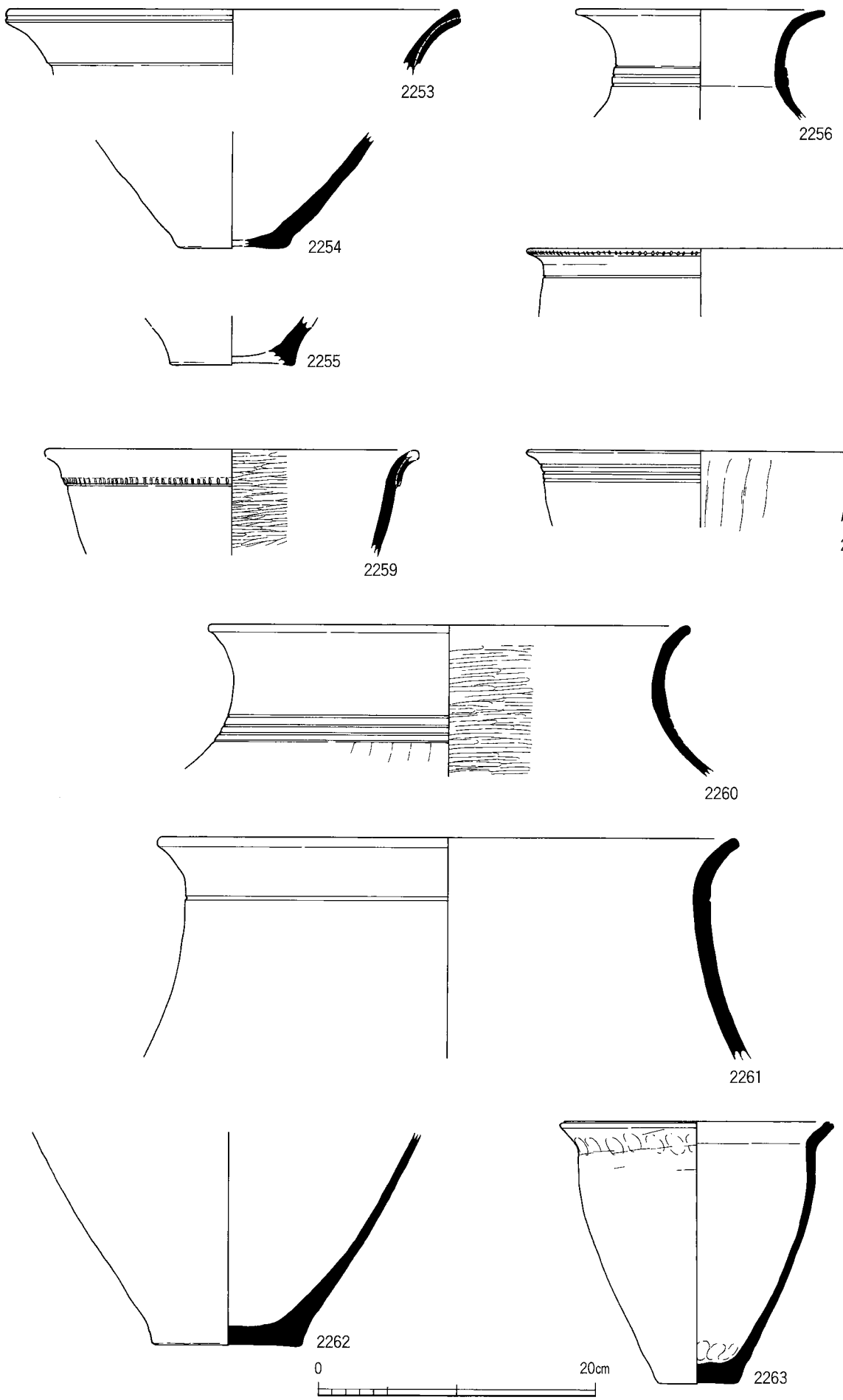
SK22021

弥生時代前期の土器18　KM調査区出土



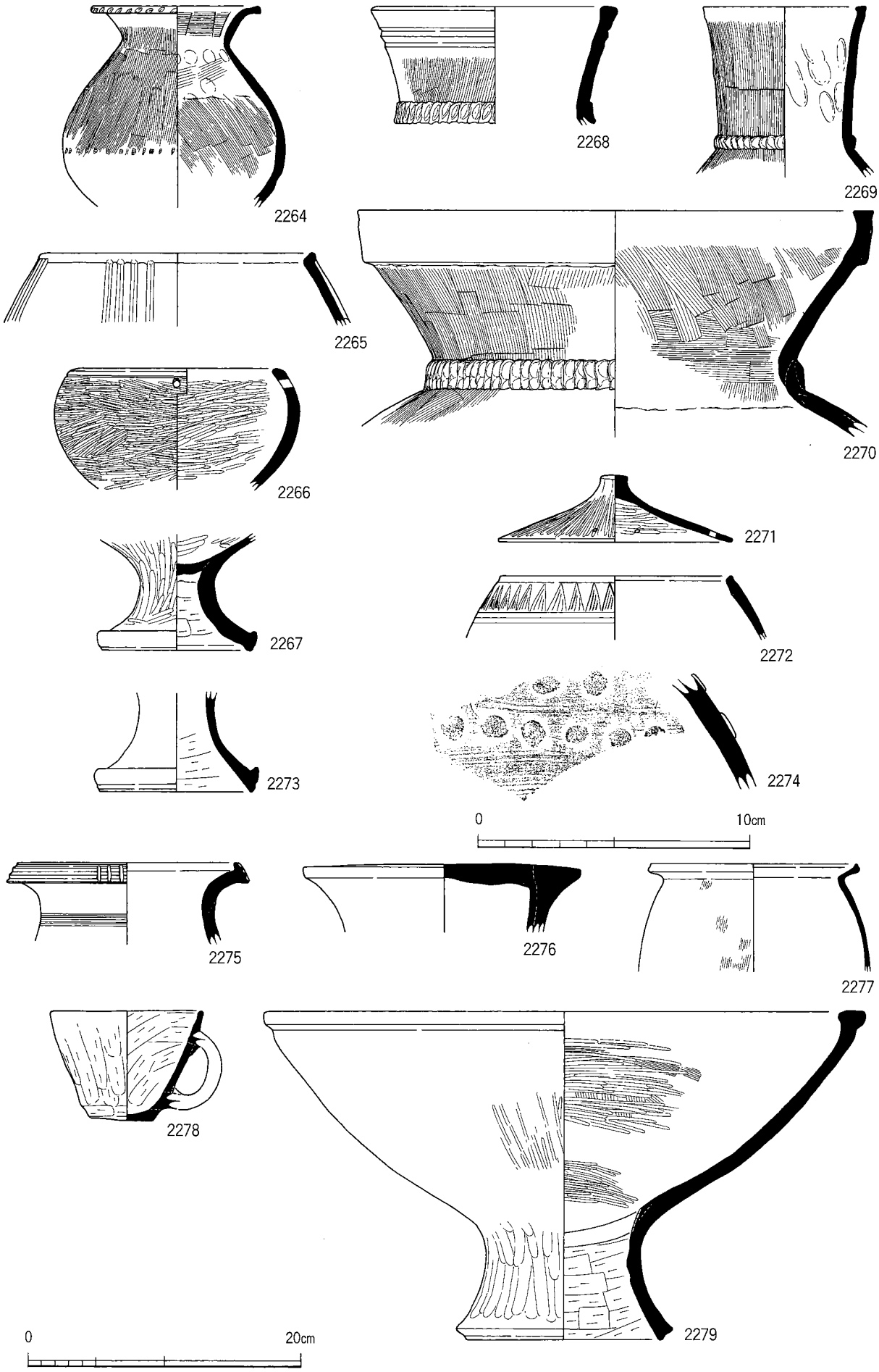
7区SK22021(2239～2242)　包含層(2243～2250)　1区土坑(2251)　3区包含層(2252)

弥生時代前期の土器19　西ケ市・池ノ内地区出土



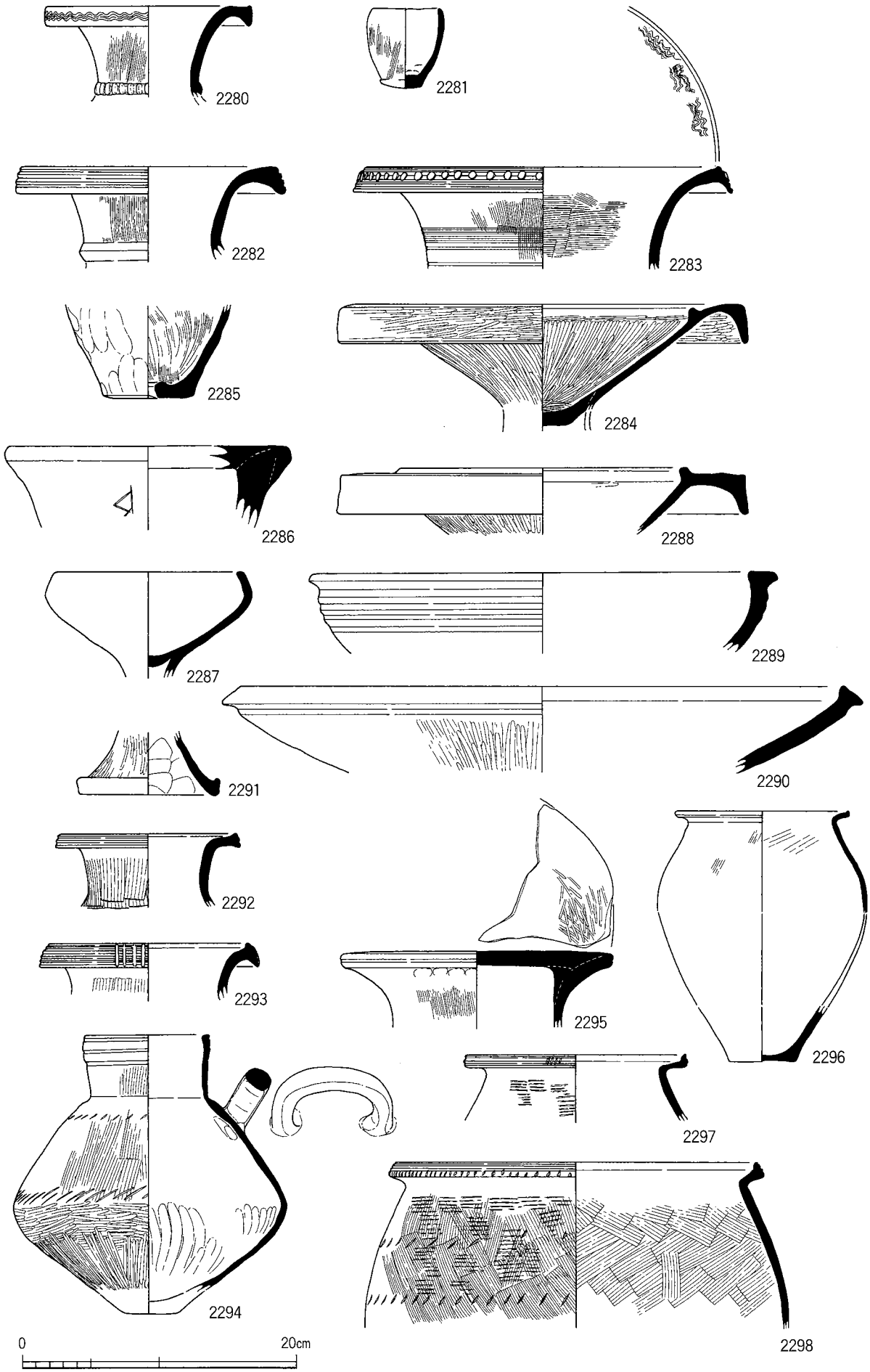
西ケ市２区SX22001・2002間周溝（2253・2255）　ST22007（2254）　９区SH22007（2256・2257）　包含層（2258）
池ノ内10区SR42002（2259・2260）　15区SK22046（2261・2262）　SP22001（2263）

弥生時代中期の土器1



黒岡2区旧河道(2266・2267)　下町地区SR42001(2264・2265)
池ノ内地区SR42002(2268～2274)　1区包含層(2276)　9区包含層(2275・2277～2279)

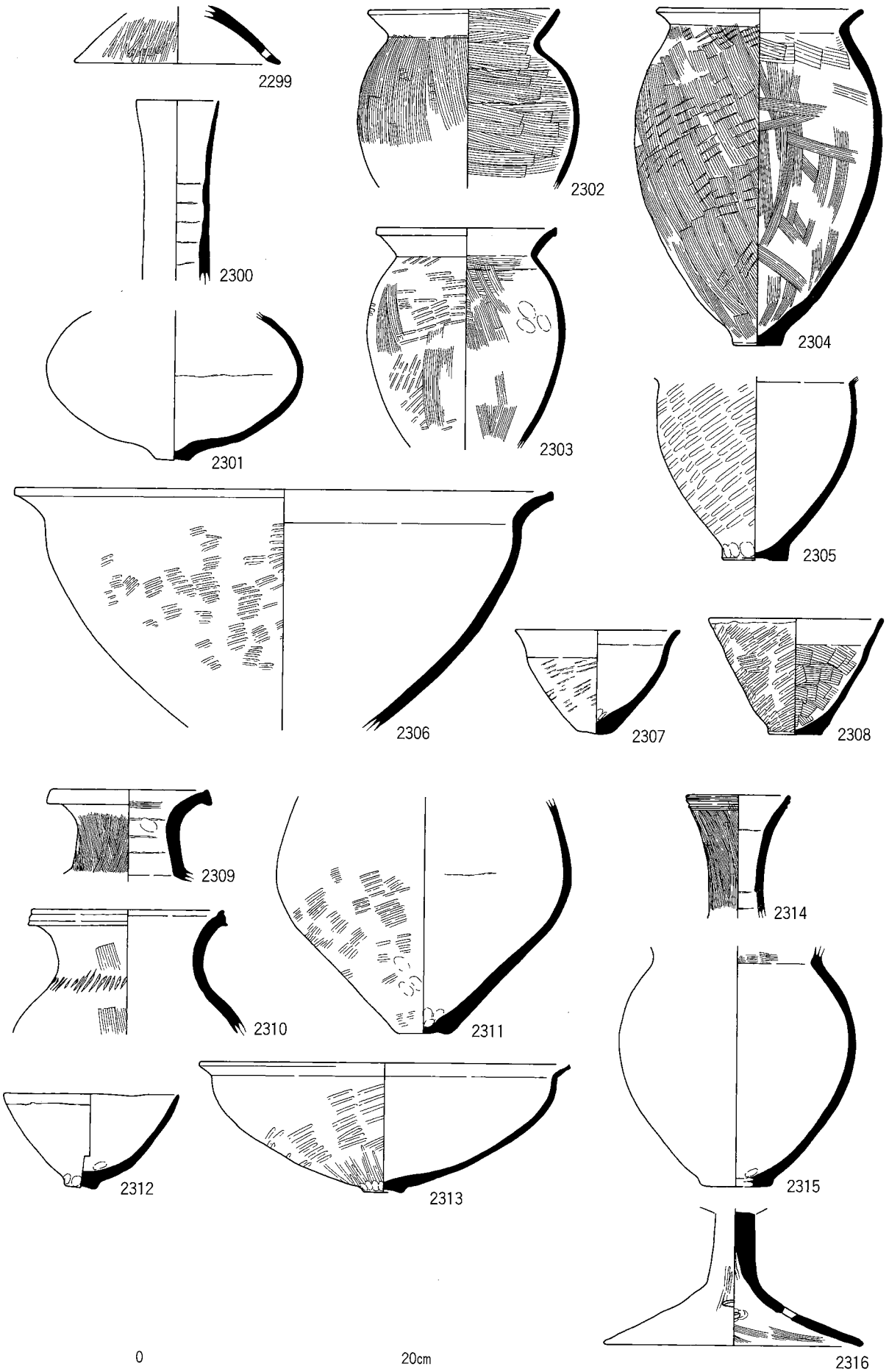
弥生時代中期の土器 2



下町 8 区SD42001(2296)　亀ノ郷 5 区SD42001(2297・2298)
池ノ内 1 区SH42001(2283～2286)　SH42003(2280・2281)　SH42004(2287)
SK42003(2292～2295)　SK42004(2282)　8 区SK42001(2288～2291)

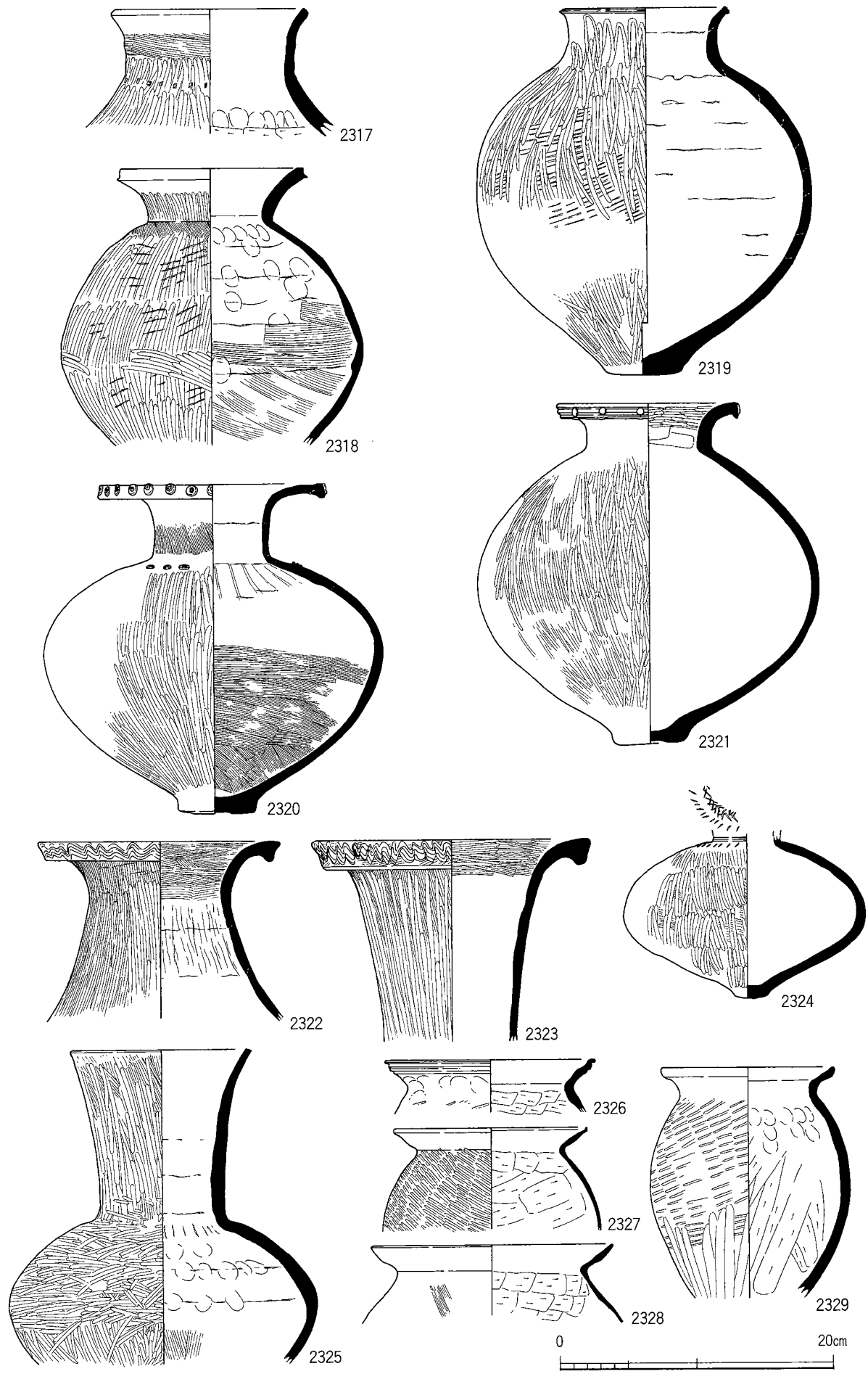
図版72
2299～2316

弥生時代後期～古墳時代前期の土器１　黒岡１区出土



SD52001（2299～2308）　SD52002（2309～2313）　SH52003（2314～2316）

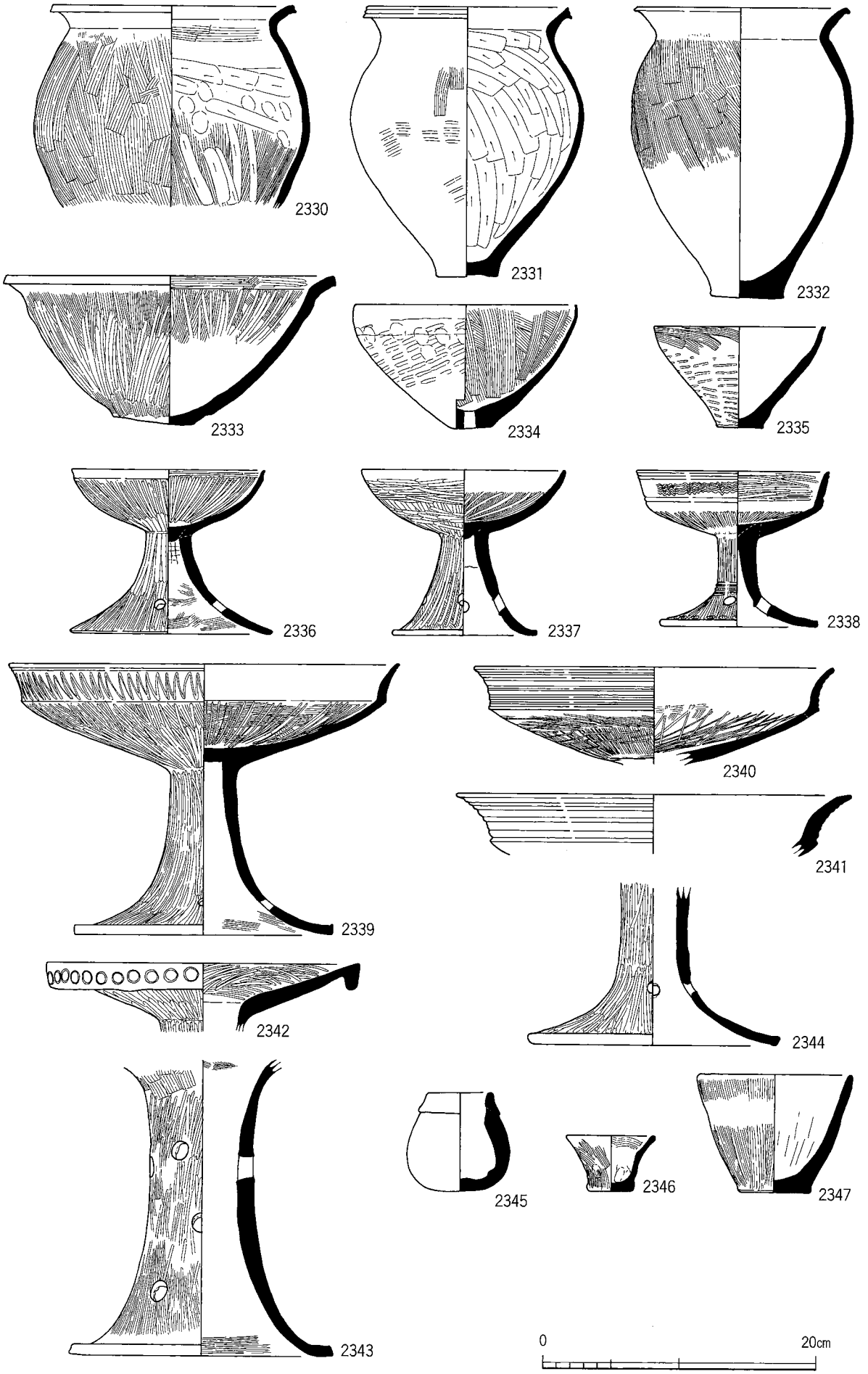
弥生時代後期～古墳時代前期の土器２　下町地区出土



SR52001　２区(2317～2325･2327～2329)　４区(2326)

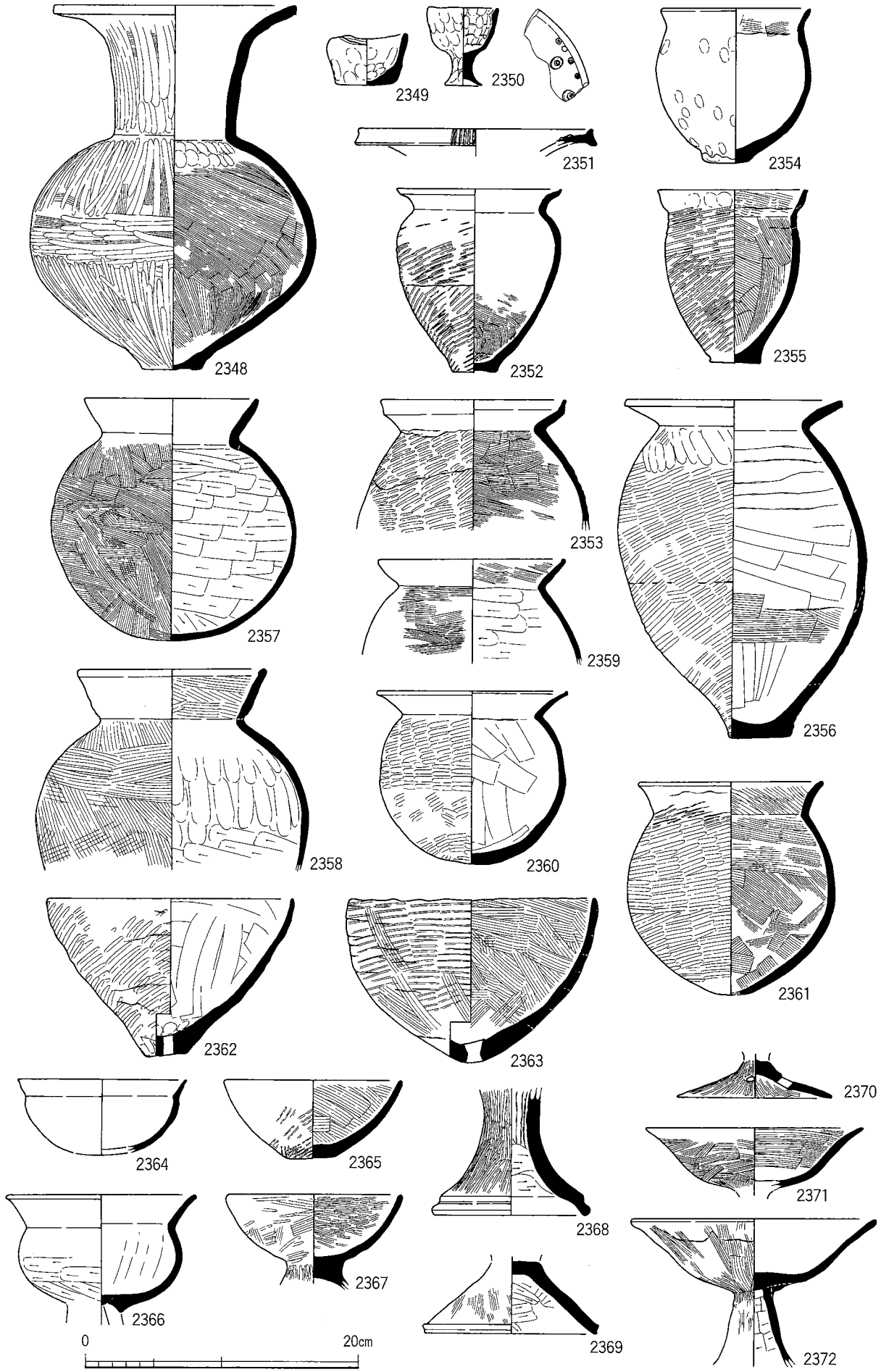
図版74
2330～2347

弥生時代後期～古墳時代前期の土器 3　下町地区出土



SR52001　2区(2330・2332～2347)　4区(2331)

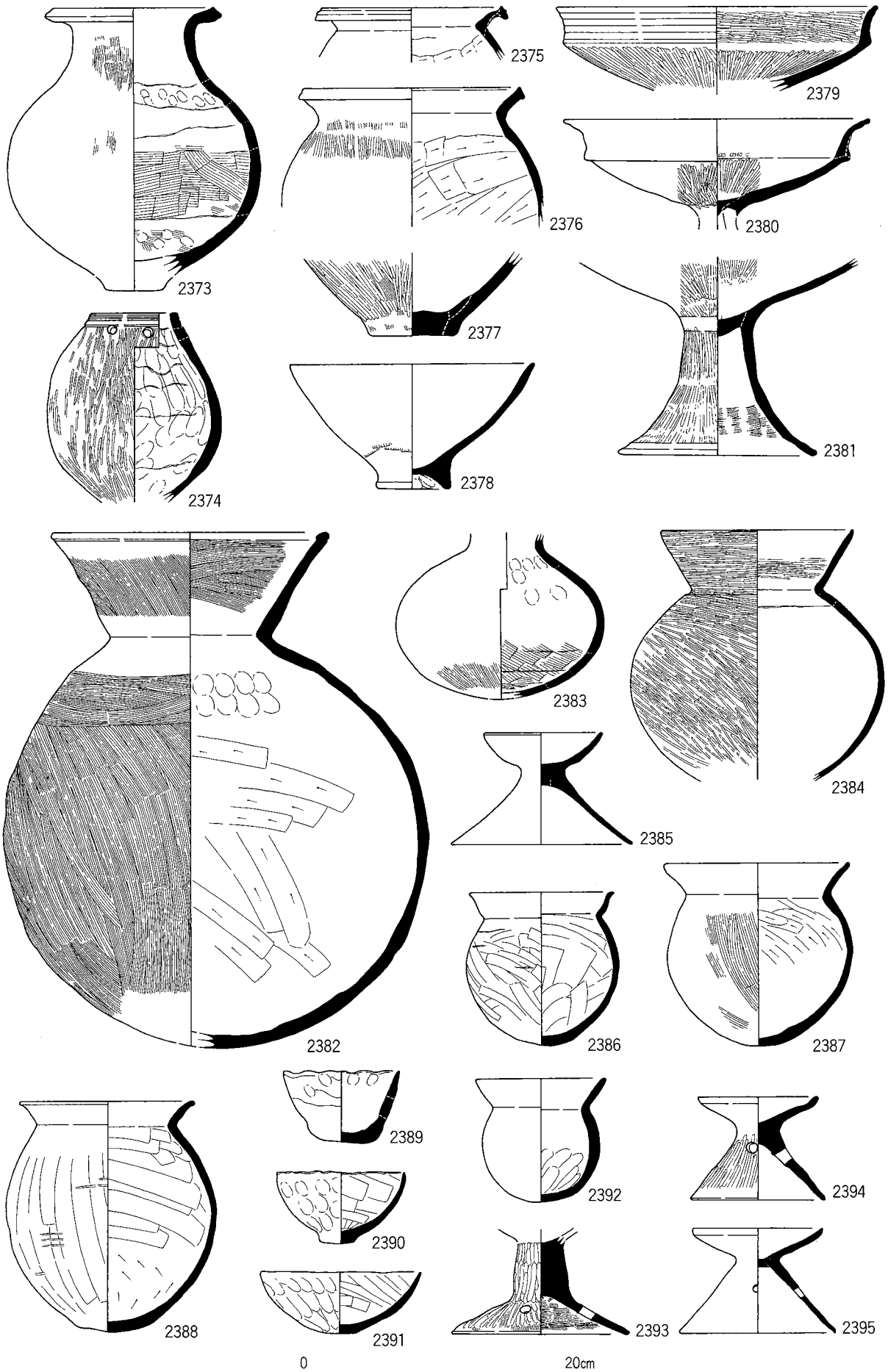
弥生時代後期～古墳時代前期の土器 4　亀ノ郷・池ノ内地区出土



池ノ内 1 区SR72001下層(2348～2351・2353～2360・2362・2363・2365～2367・2369～2372)
SD72001下層　亀ノ郷 7 区(2352・2361)　亀ノ郷 3 区(2368)　KM 1 区(2364)

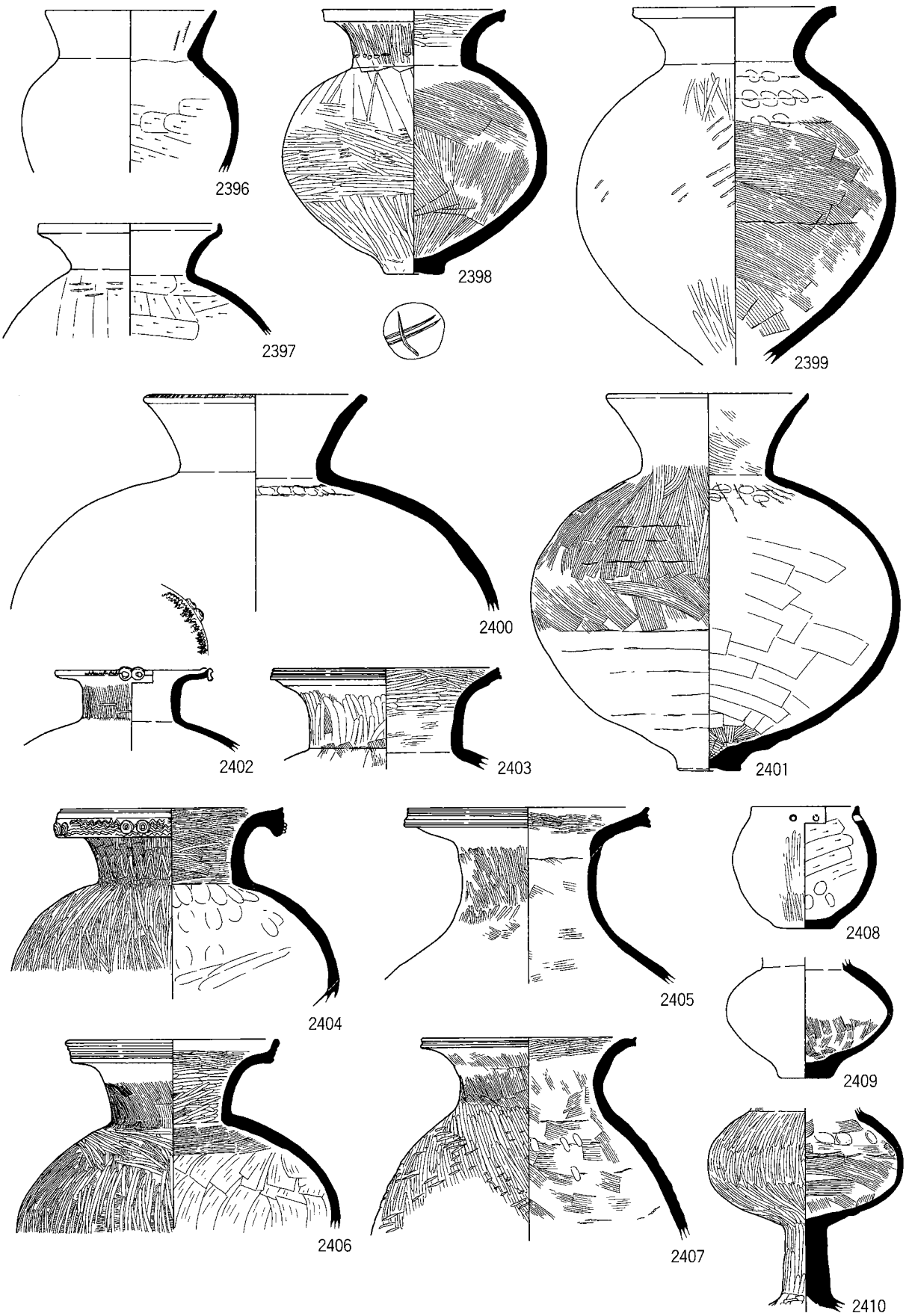
図版76
2373～2395

弥生時代後期～古墳時代前期の土器５　西ケ市・池ノ内地区出土



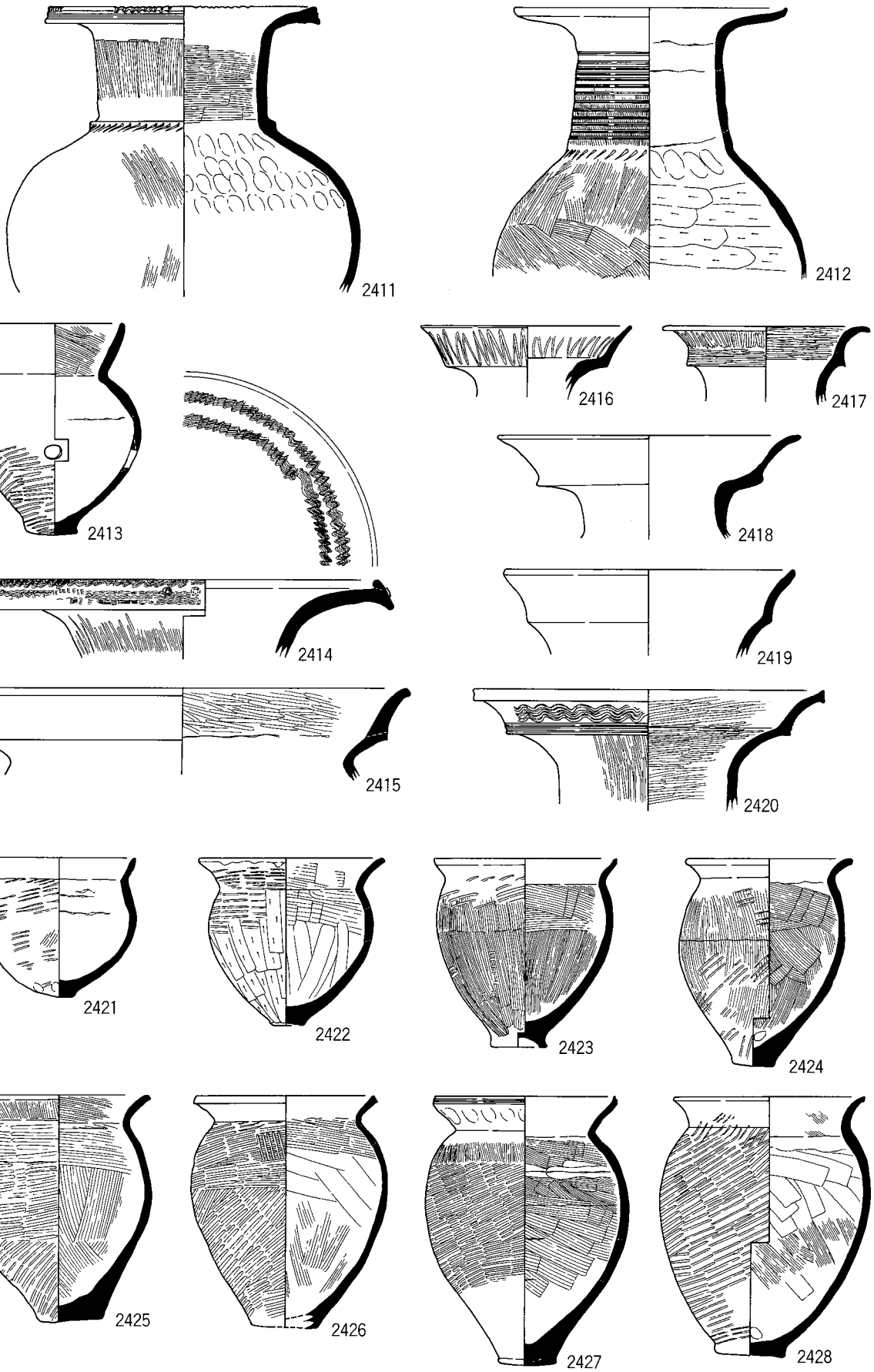
西ケ市地区KM３区SR62002下層（2373～2381）　西ケ市３区SR62002最上層（2382～2385）
池ノ内９区SR62002井堰周辺（2386～2395）

弥生時代後期～古墳時代前期の土器 6　SR62002出土

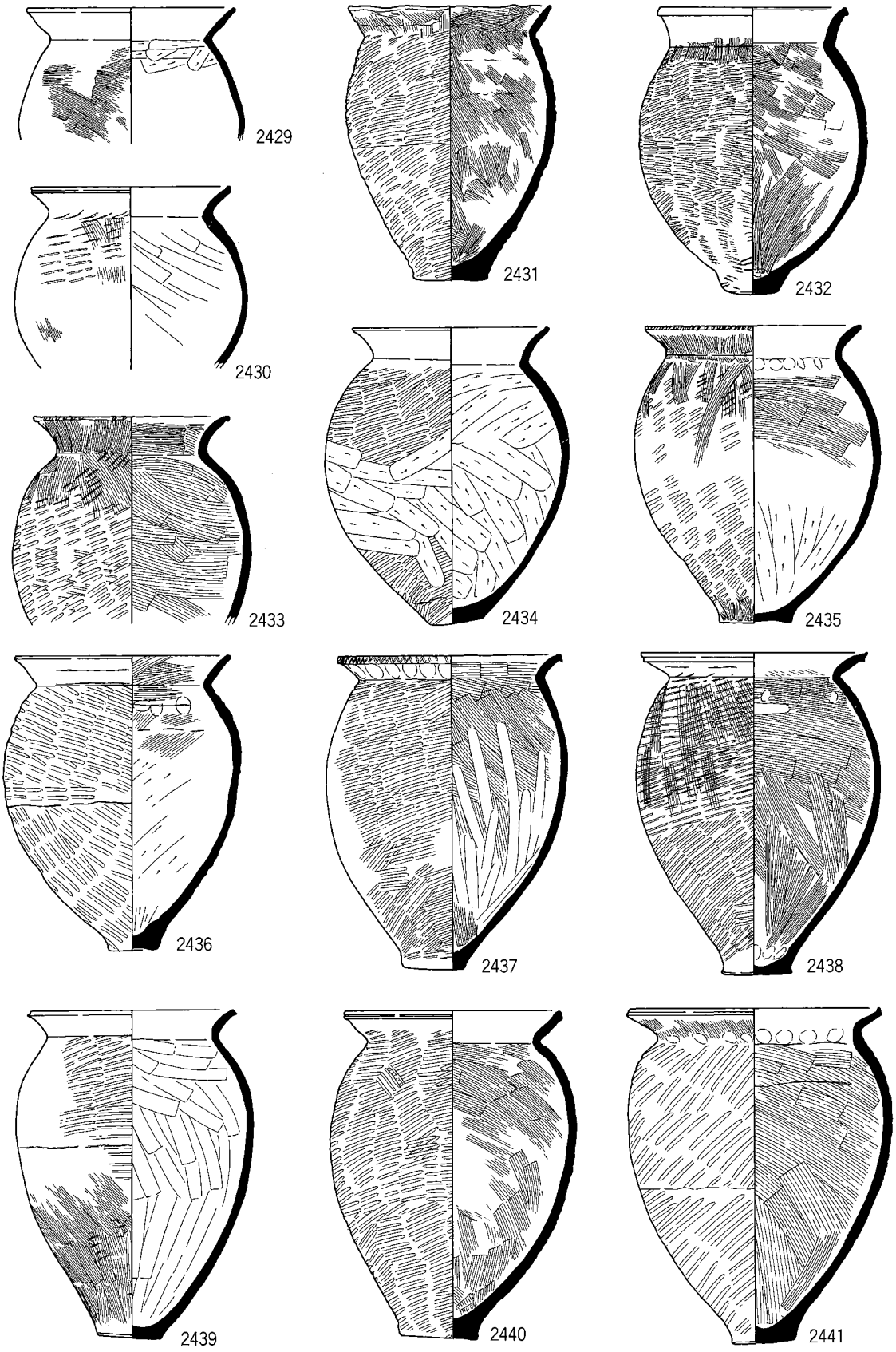


図版78
2411～2428

弥生時代後期～古墳時代前期の土器 7　SR62002出土

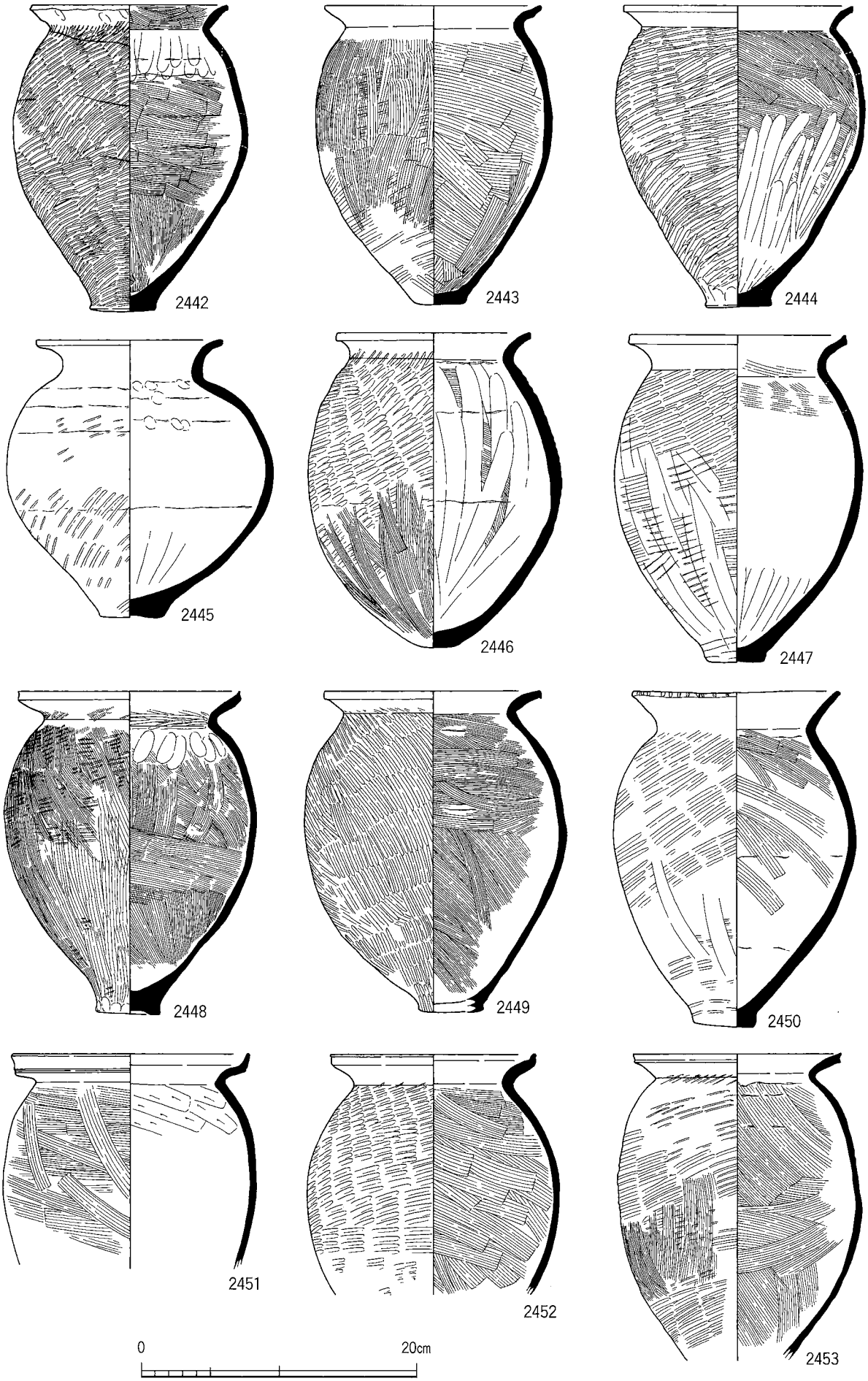


弥生時代後期～古墳時代前期の土器 8　SR62002出土

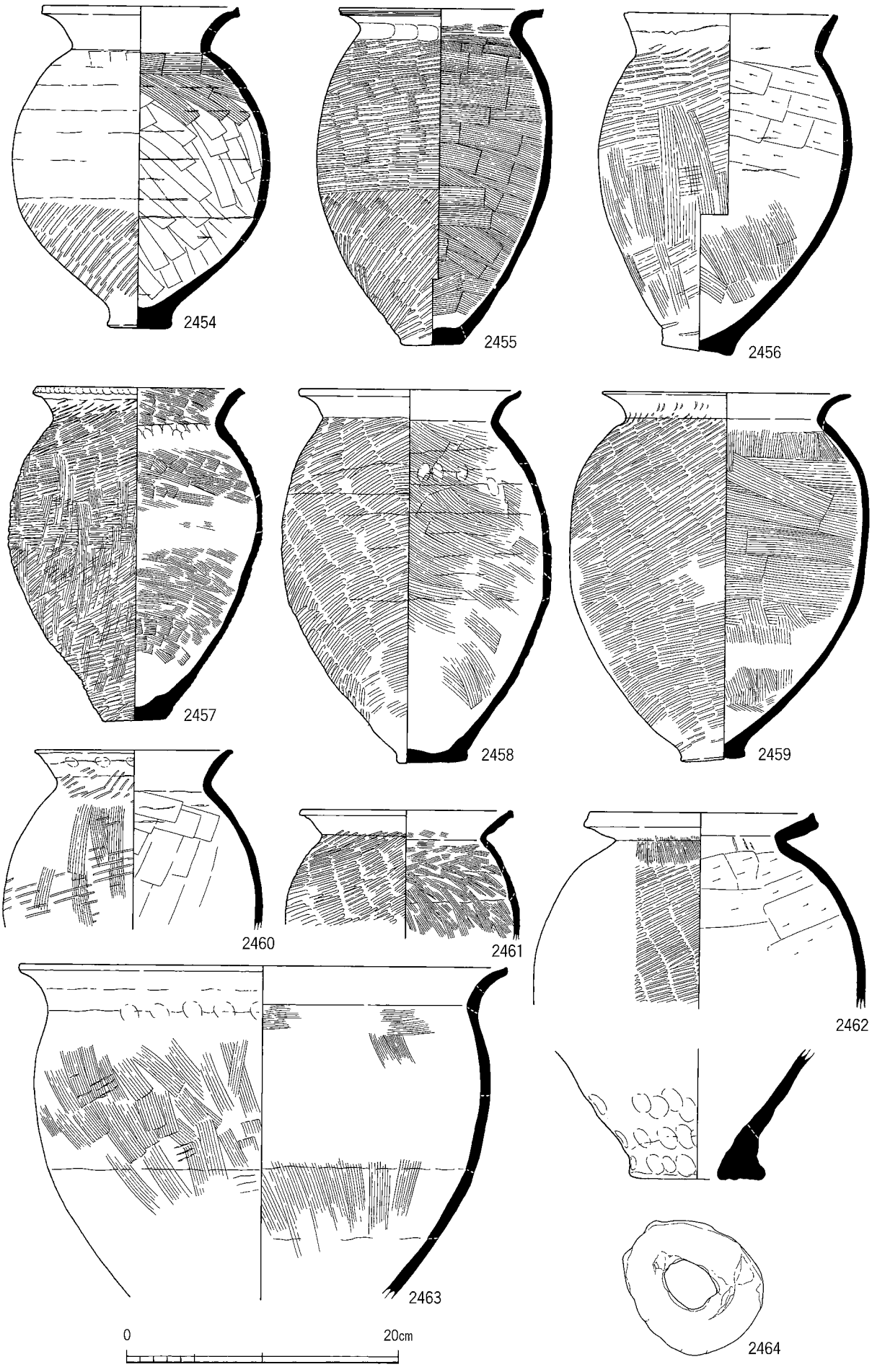


図版80
2442～2453

弥生時代後期～古墳時代前期の土器 9　SR62002出土

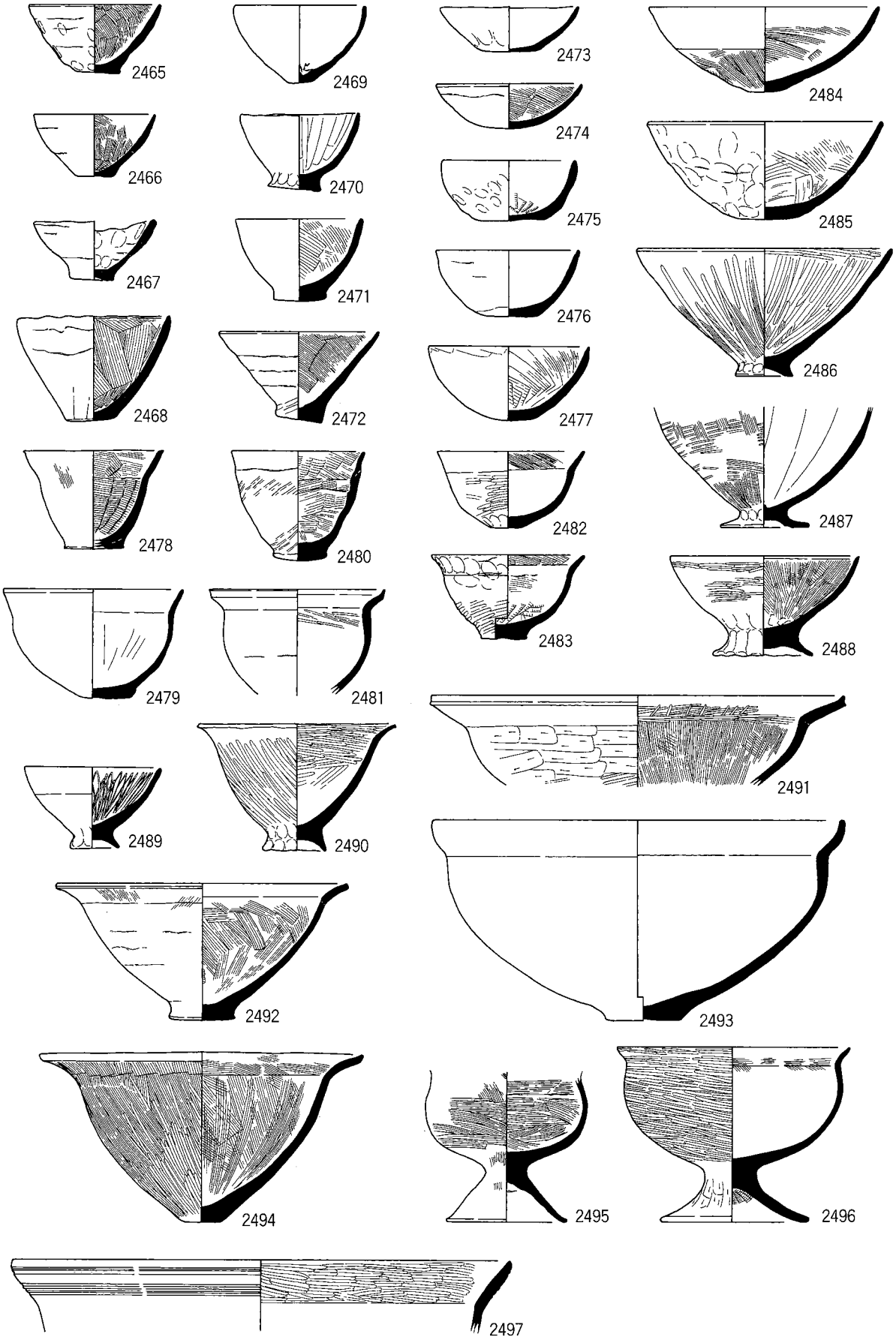


弥生時代後期～古墳時代前期の土器10　SR62002出土

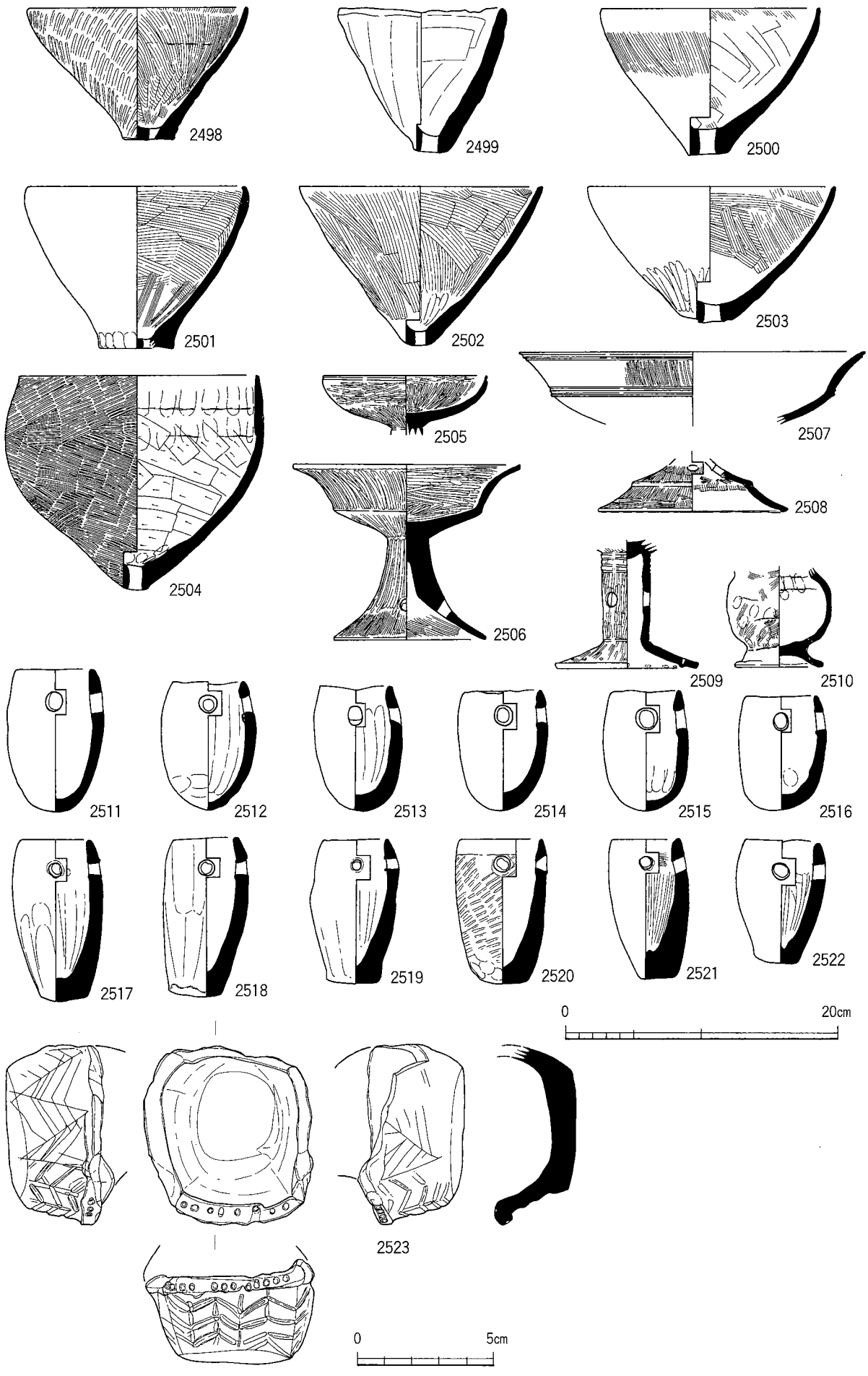


図版82
2465～2497

弥生時代後期～古墳時代前期の土器11　SR62002出土

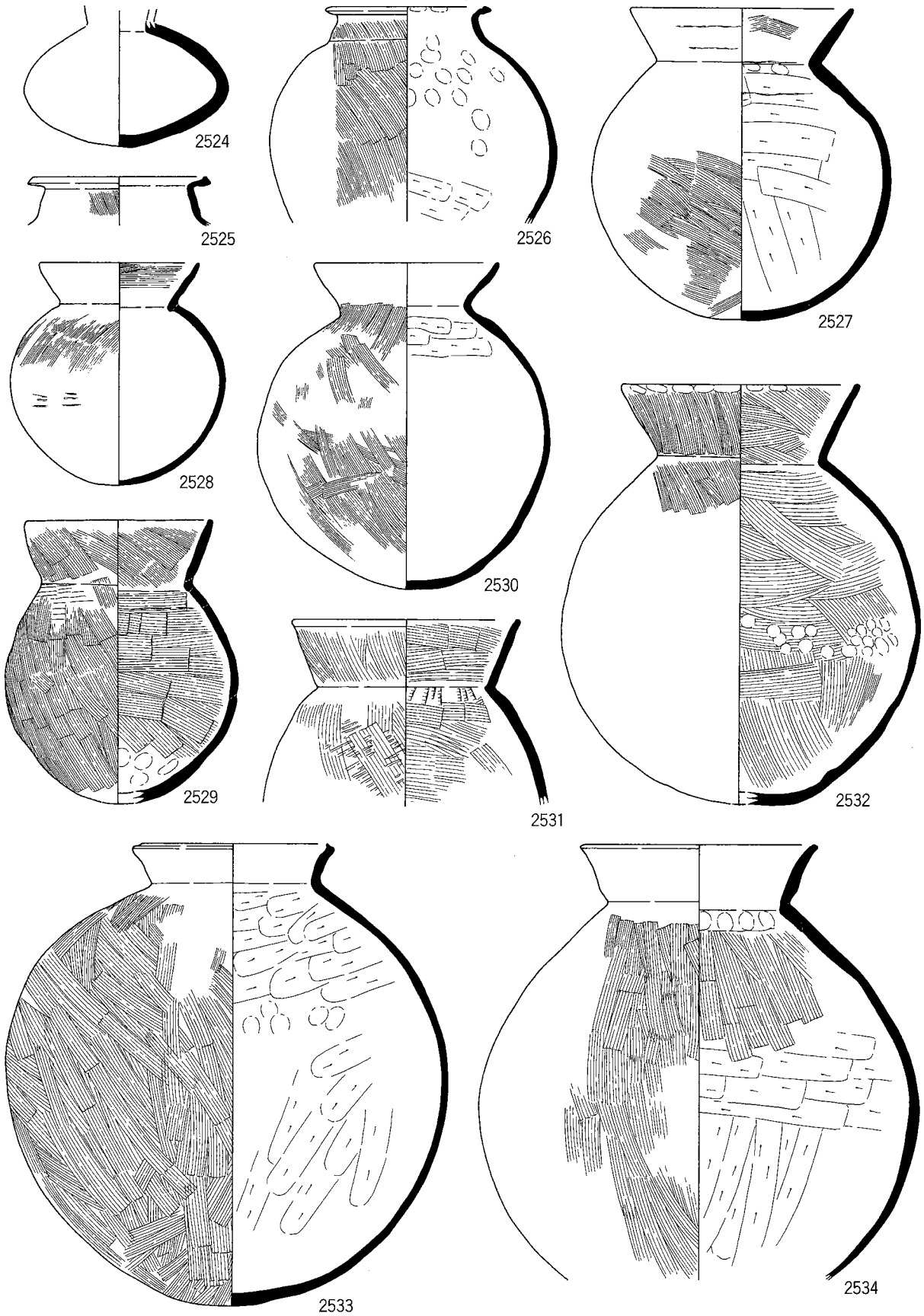


弥生時代後期～古墳時代前期の土器12　SR62002出土

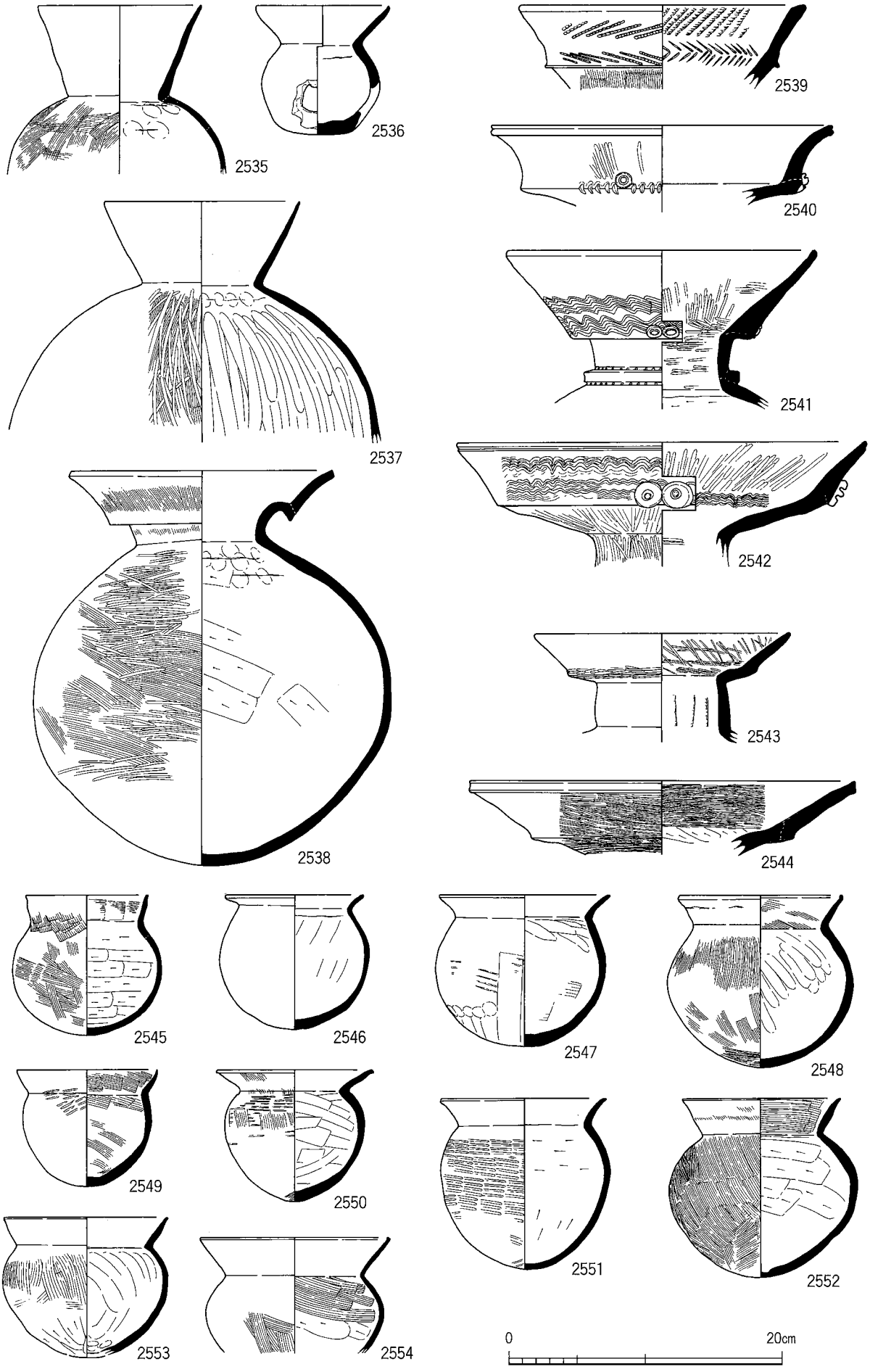


図版84
2524～2534

弥生時代後期～古墳時代前期の土器13　SR62002出土

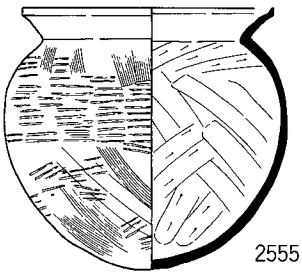


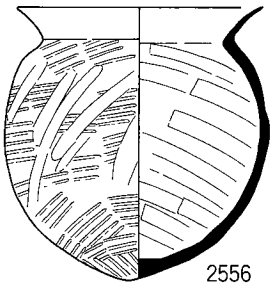
弥生時代後期～古墳時代前期の土器14　SR62002出土

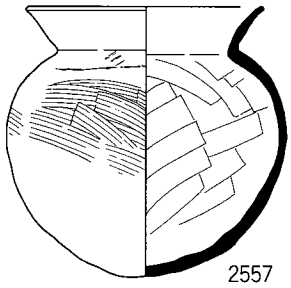


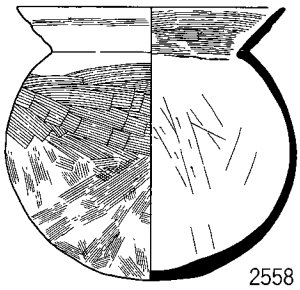
図版86
2555～2569

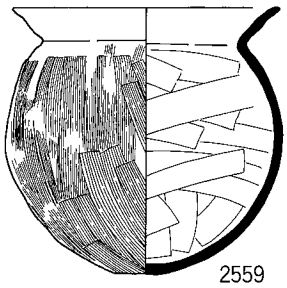
弥生時代後期～古墳時代前期の土器15　SR62002出土

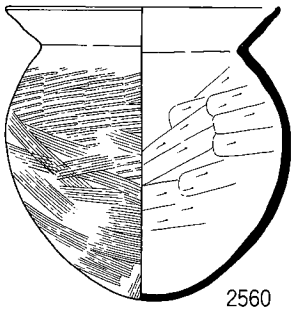

2555

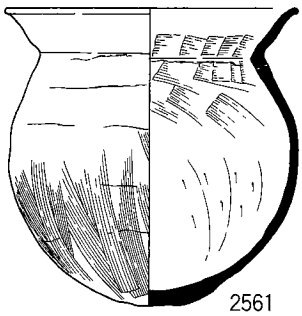

2556

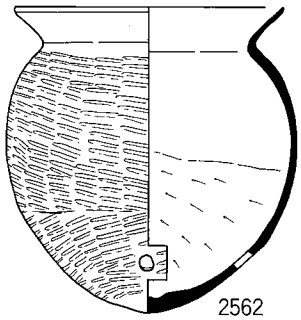

2557

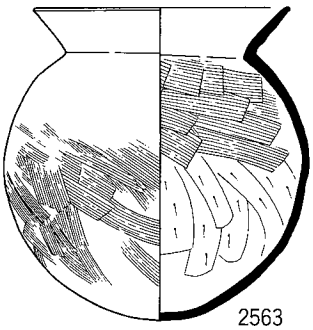

2558

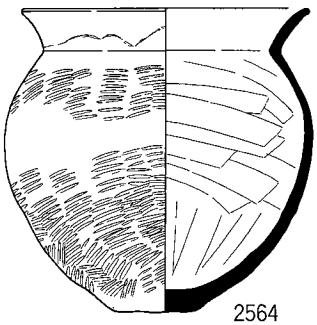

2559

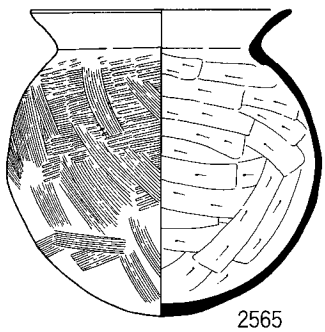

2560

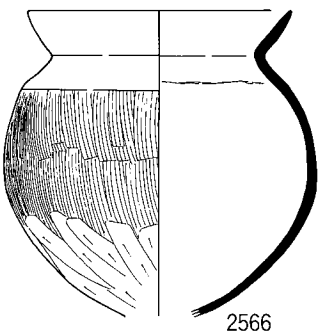

2561

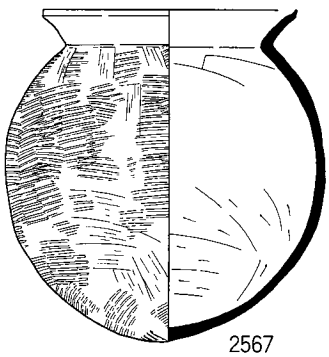

2562

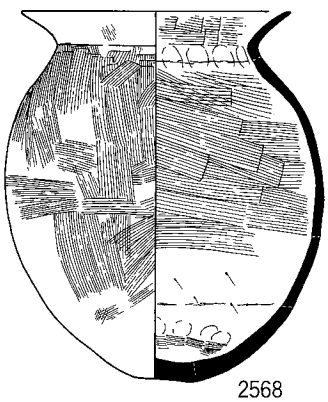

2563

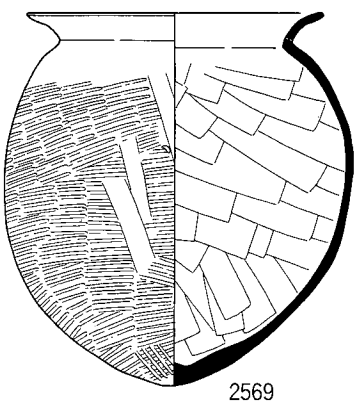

2564

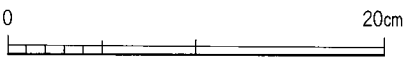

2565


2566

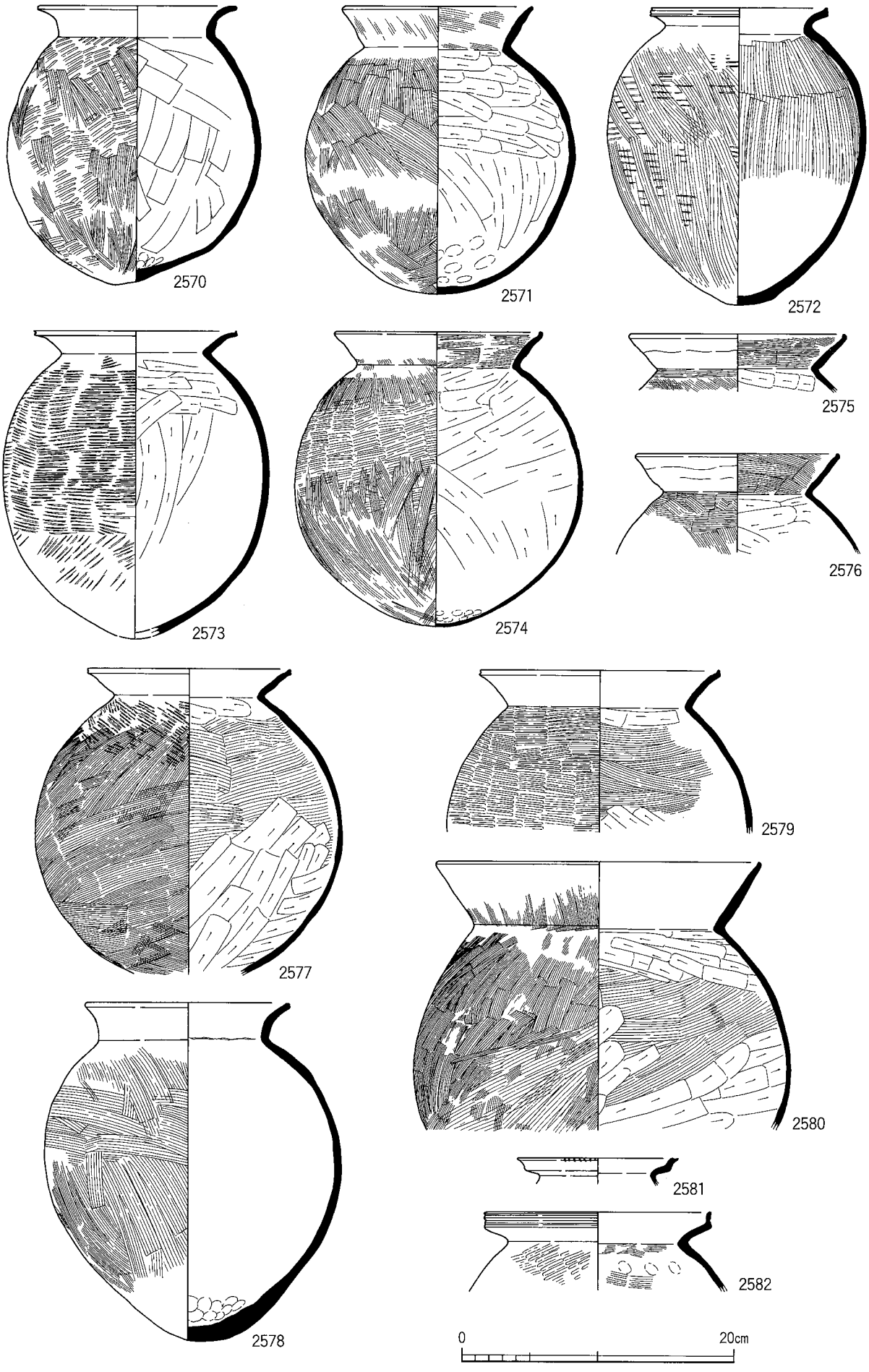

2567


2568


2569

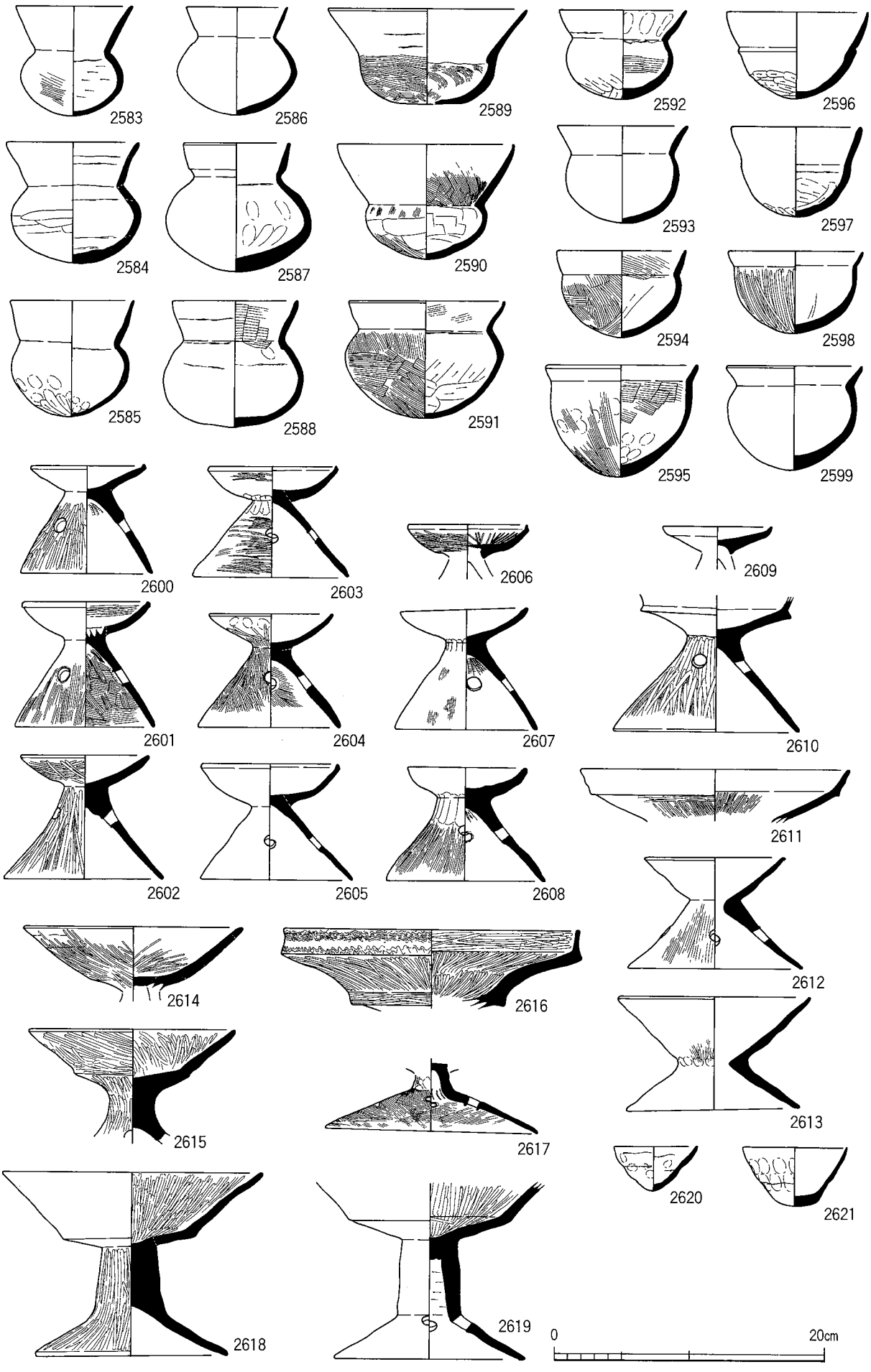


弥生時代後期～古墳時代前期の土器16　SR62002出土

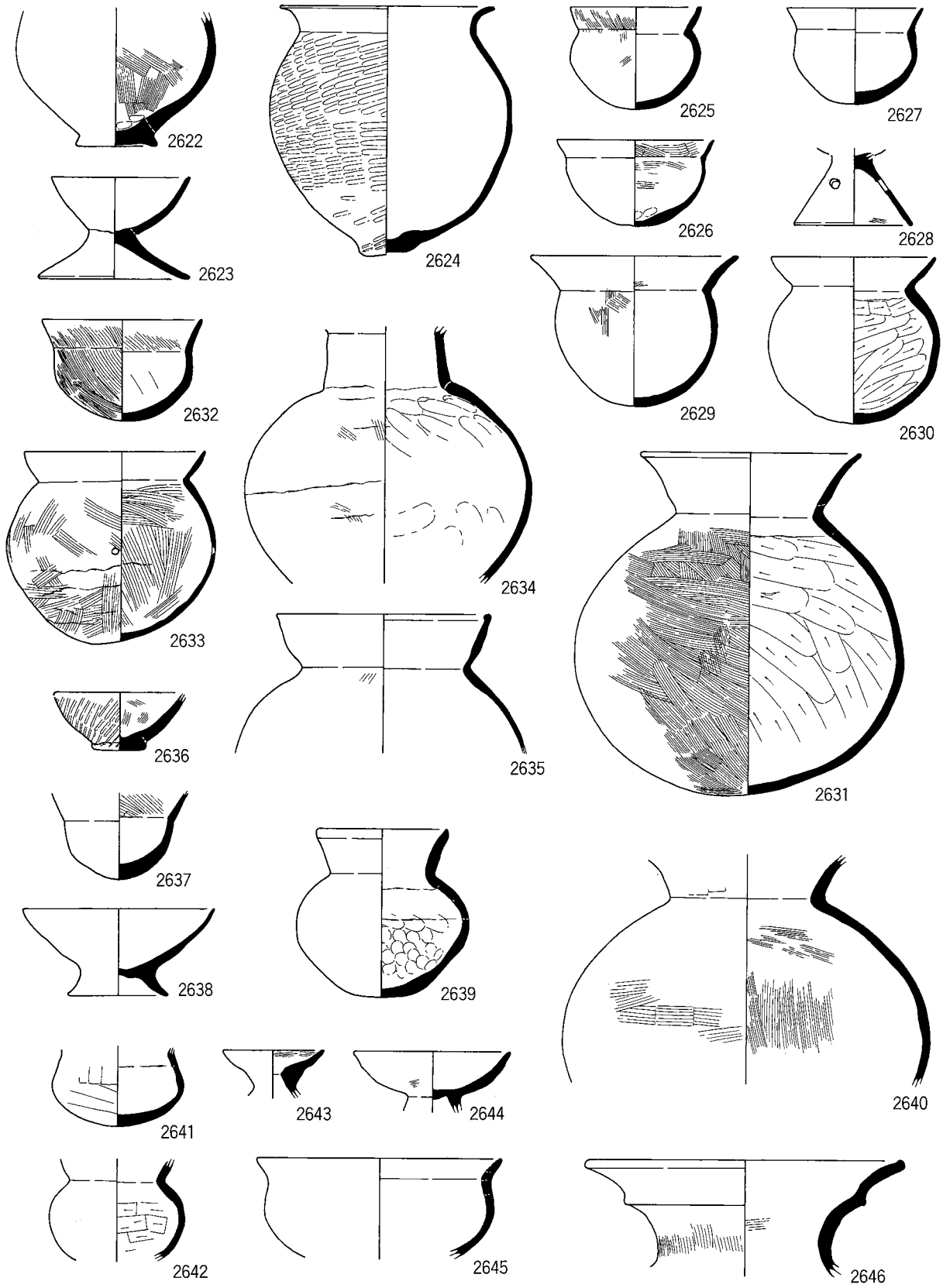


図版88
2583～2621

弥生時代後期～古墳時代前期の土器17　SR62002出土



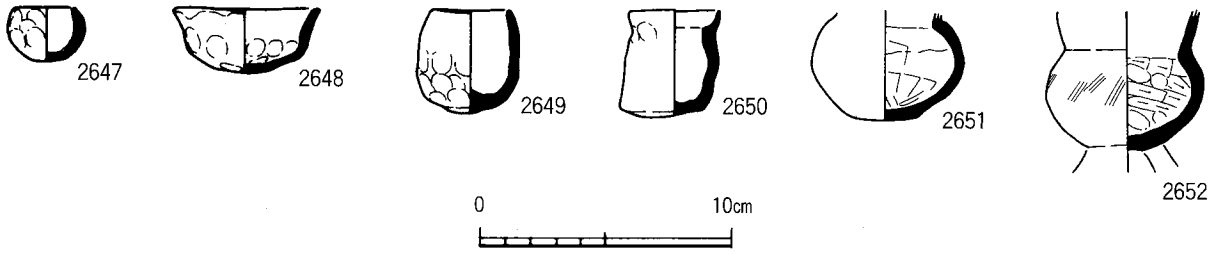
弥生時代後期～古墳時代前期の土器18

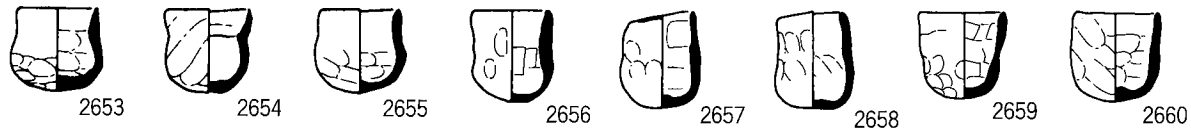


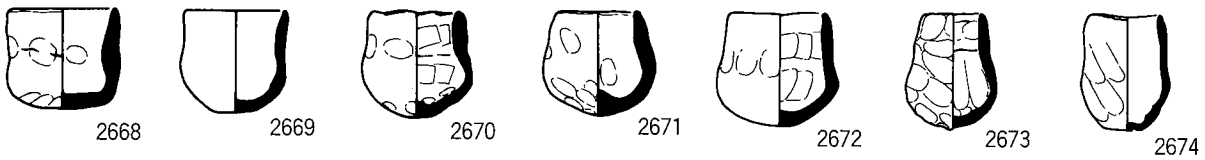
亀ノ郷2区SD52003(2622)　西ケ市1区SD52006(2623・2624)　SD62001(2625～2631)
9区SD62002(2632～2635)　1区包含層(2636)　池ノ内9区SP62001(2637・2638)
14区SD62003(2639)　SH72002(2640)　16区SH62001(2641～2646)

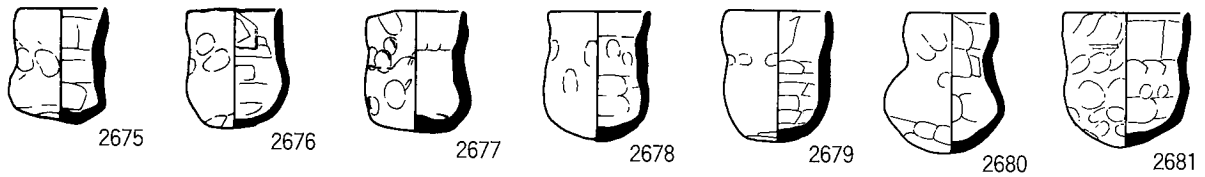
図版90
2647～2698

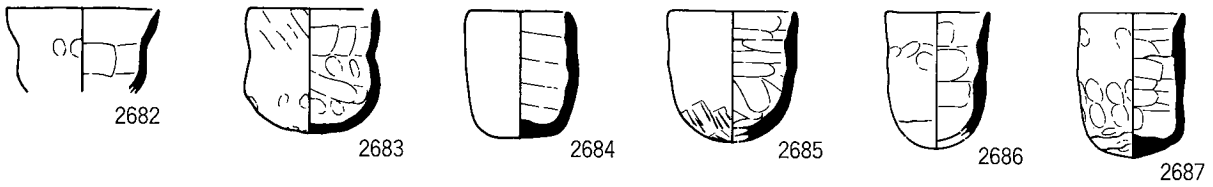
古墳時代中期の土器1　亀ノ郷7区SD72001出土

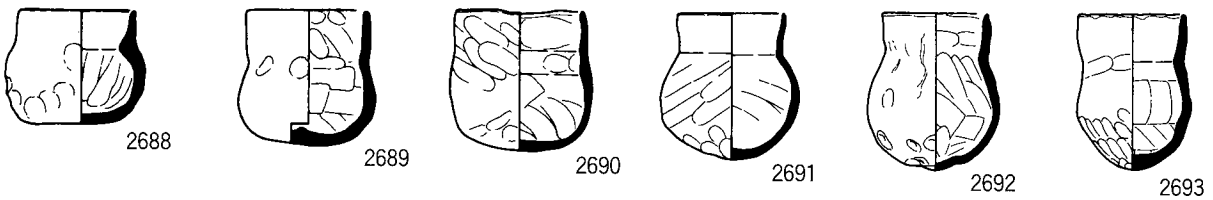


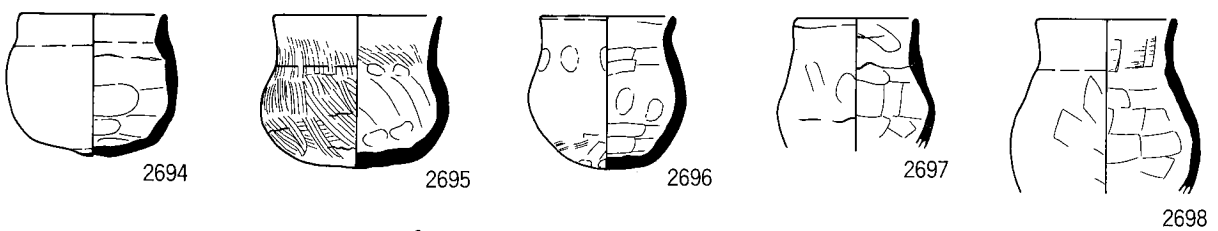




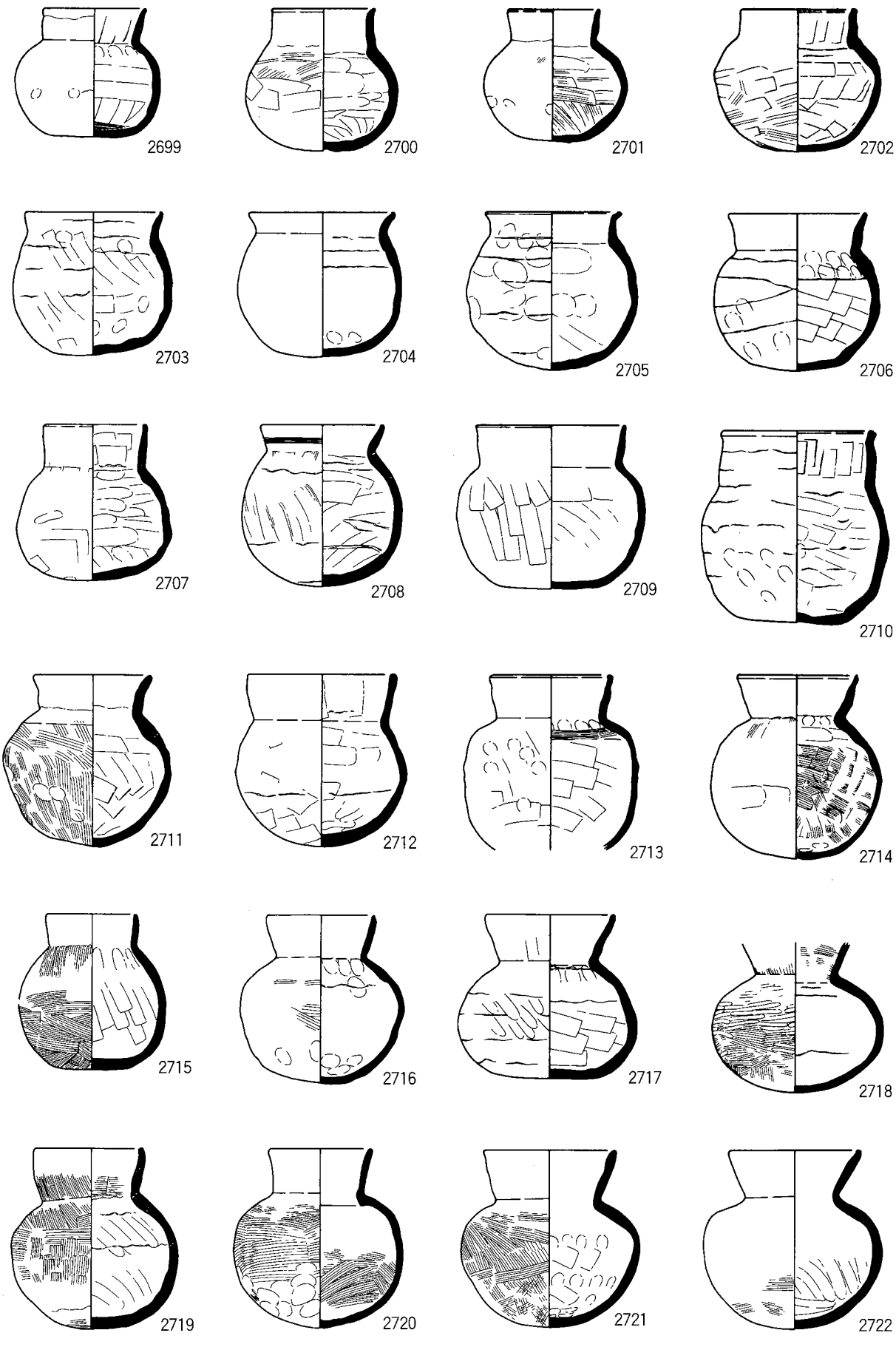






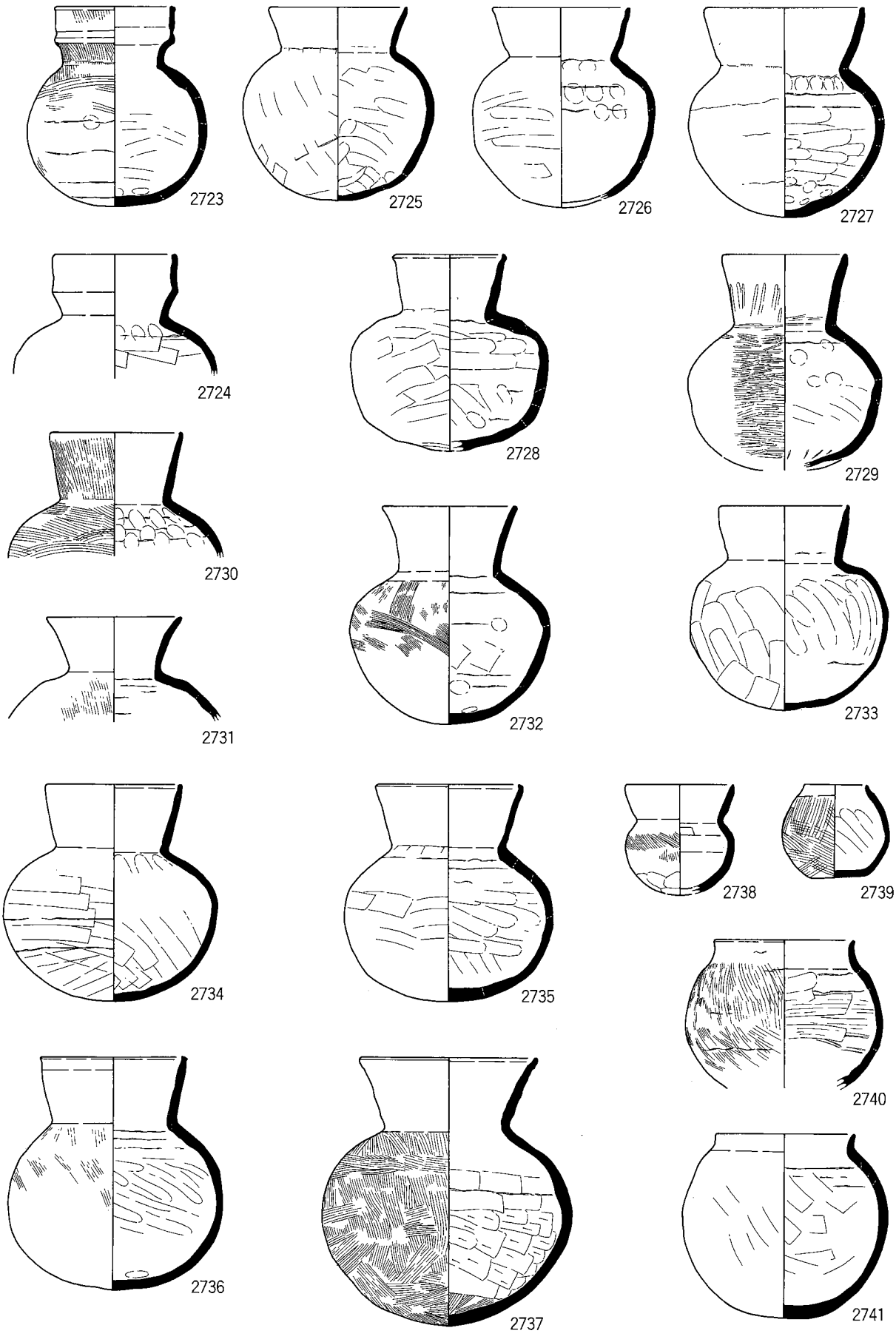


古墳時代中期の土器 2　亀ノ郷 7 区SD72001出土

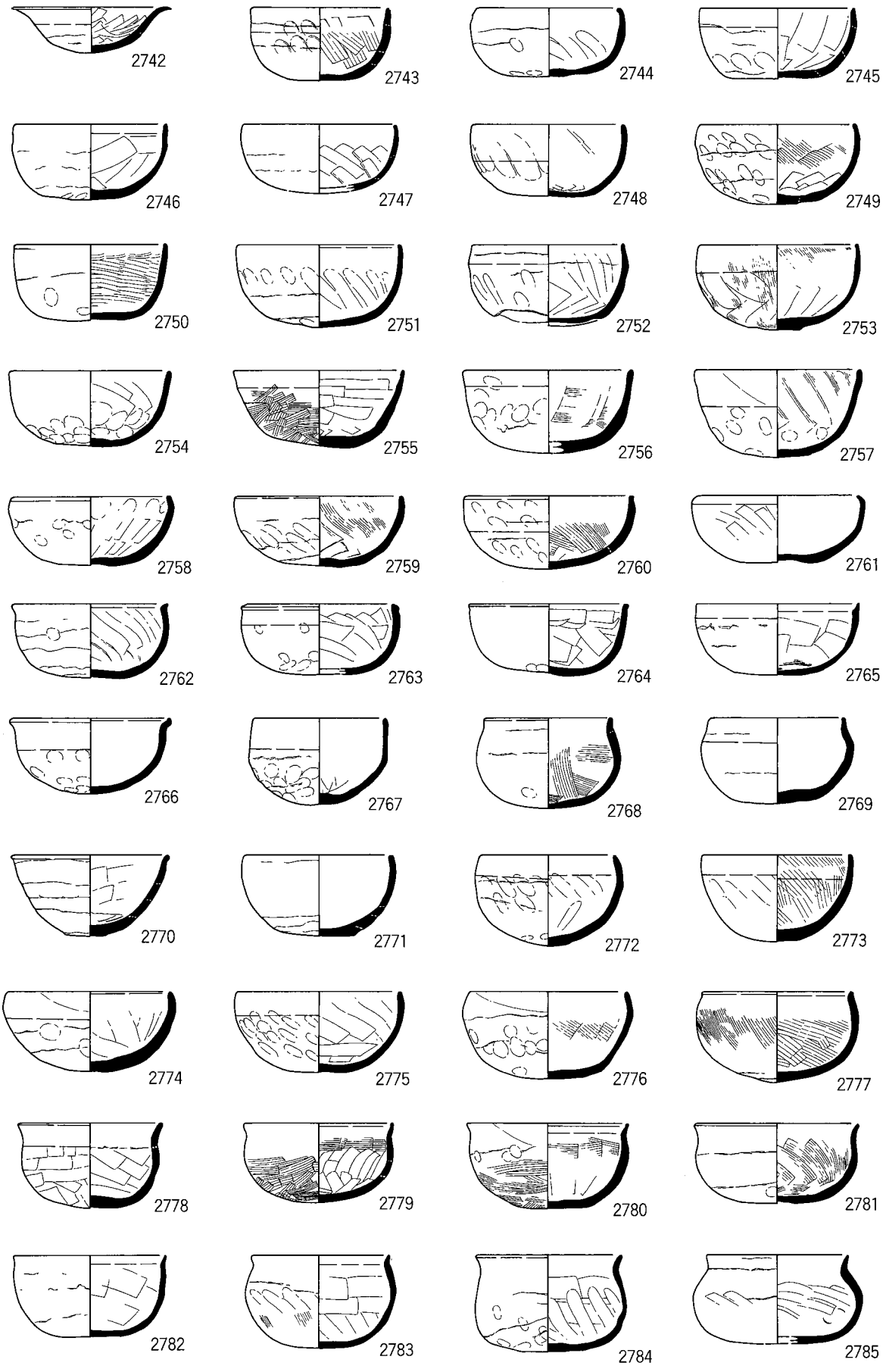


図版92
2723～2741

古墳時代中期の土器3　亀ノ郷7区SD72001出土

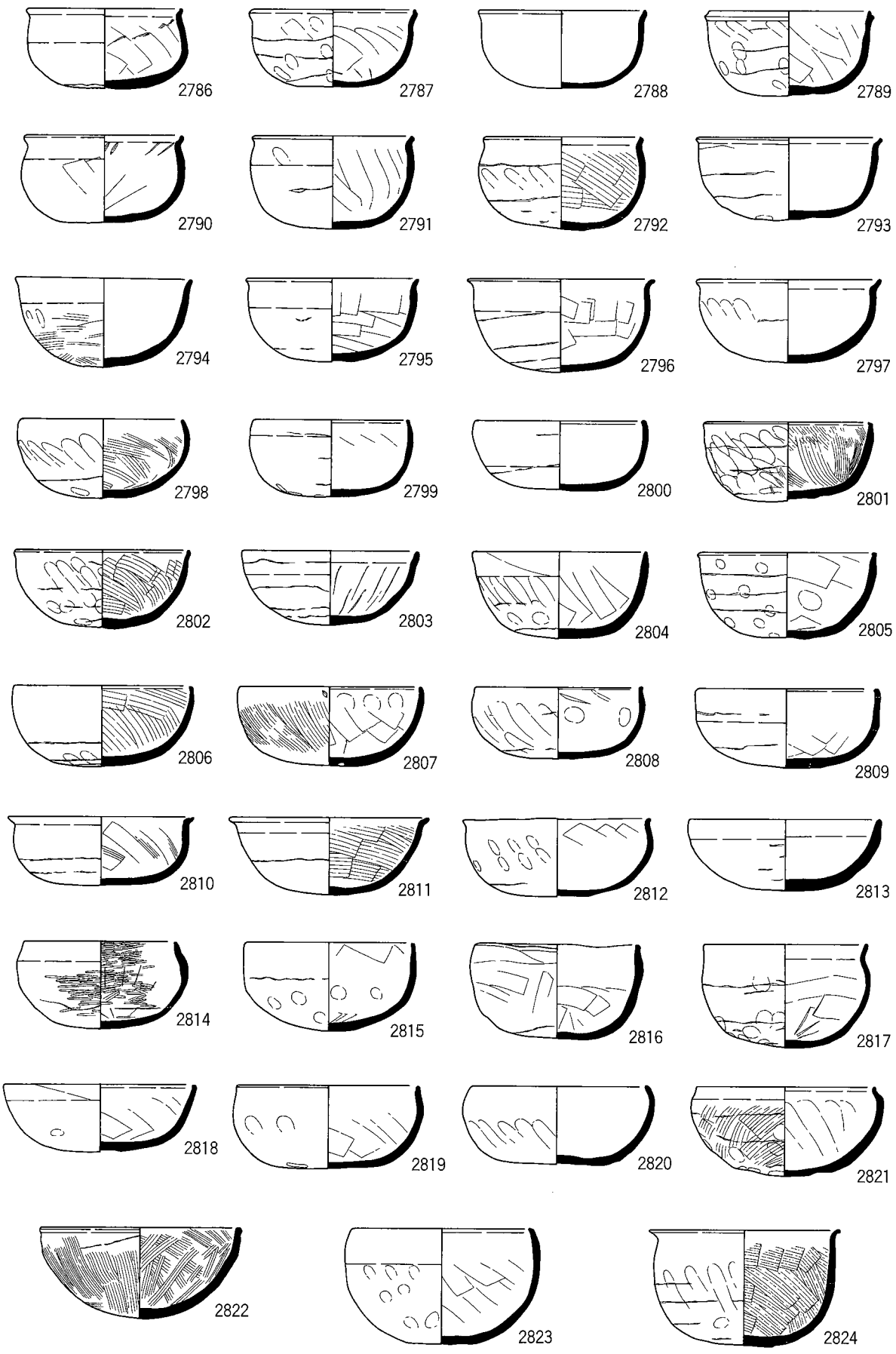


古墳時代中期の土器４　亀ノ郷７区SD72001出土

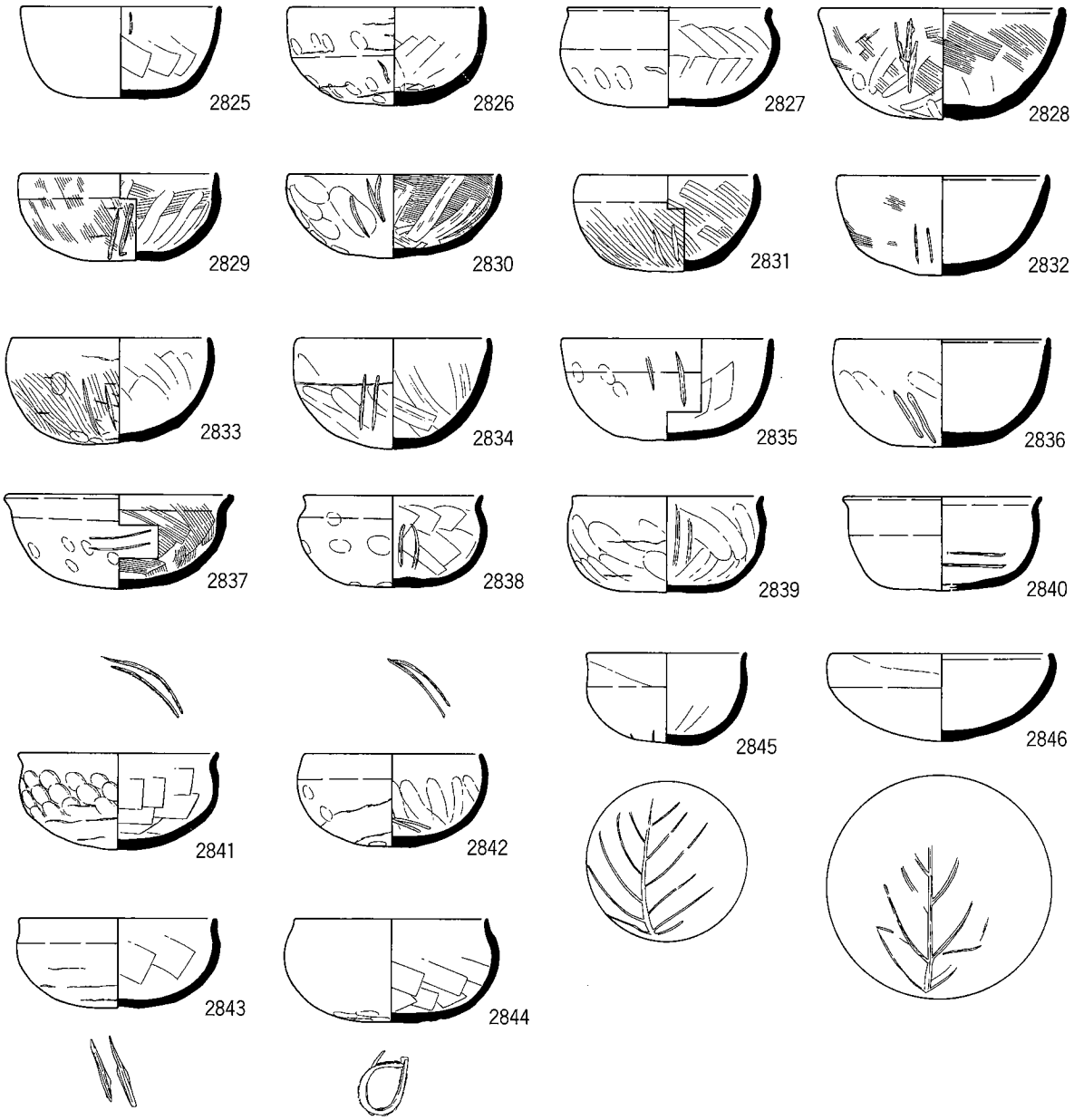


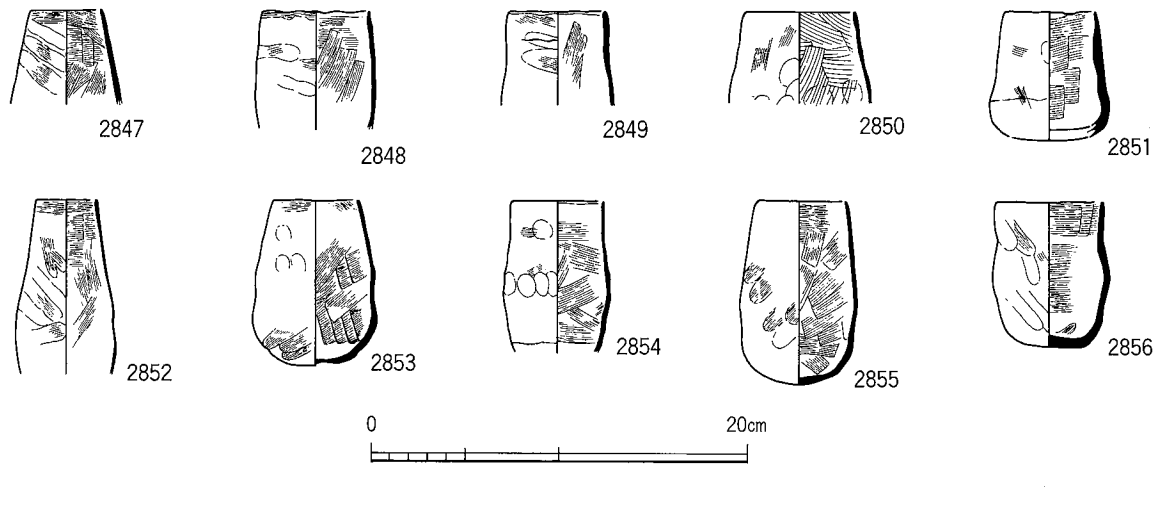
図版94
2786～2824

古墳時代中期の土器5　亀ノ郷7区SD72001出土



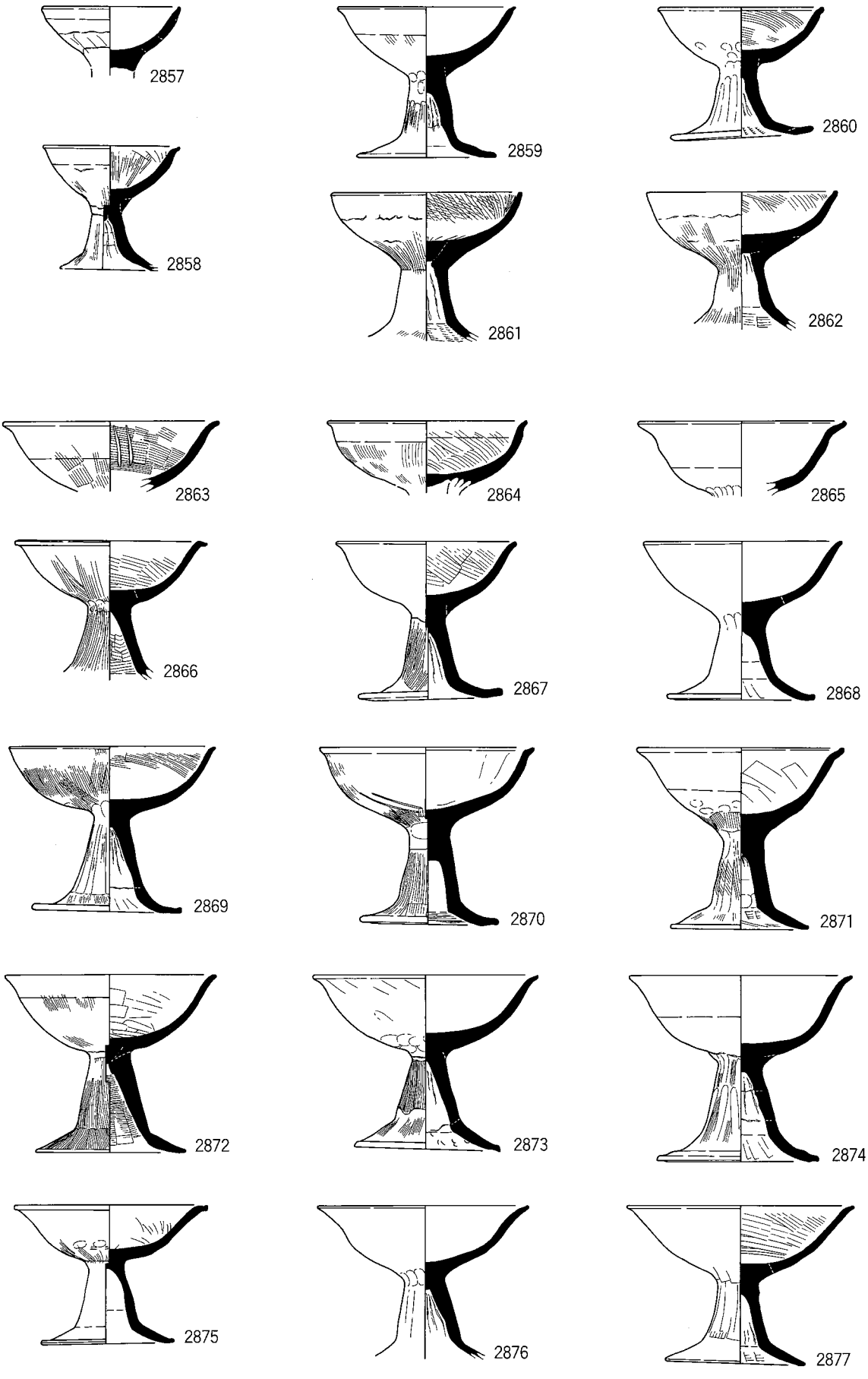
古墳時代中期の土器6　亀ノ郷7区SD72001出土



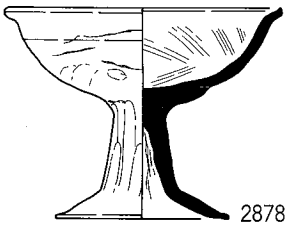


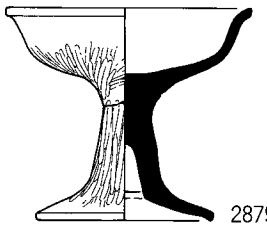
図版96
2857～2877

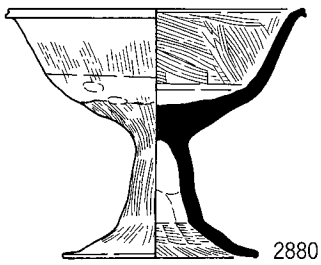
古墳時代中期の土器7　亀ノ郷7区SD72001出土

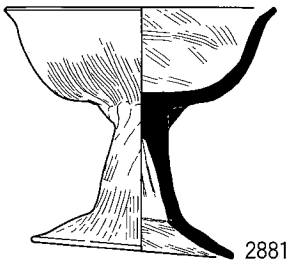


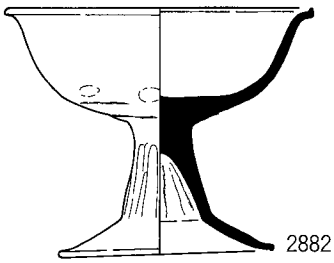
古墳時代中期の土器 8　亀ノ郷 7 区SD72001出土

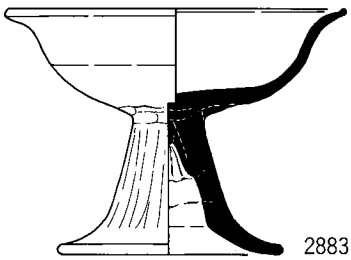

2878

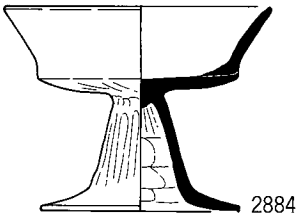

2879

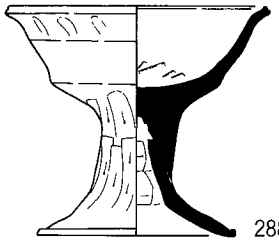

2880

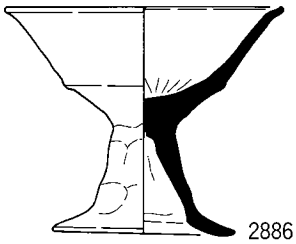

2881

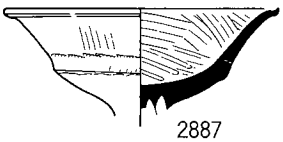

2882

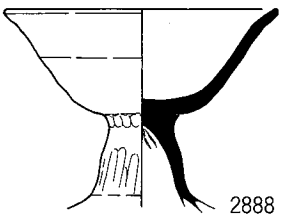

2883

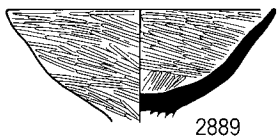

2884

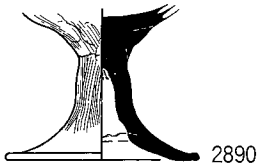

2885

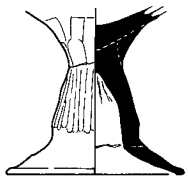

2886

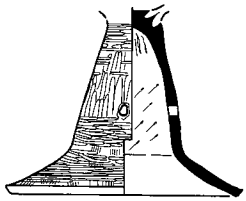

2887

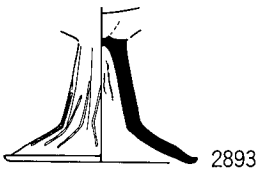

2888

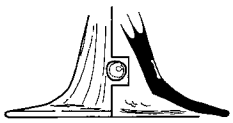

2889

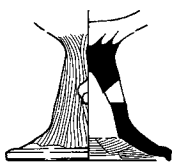

2890

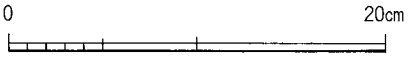

2891


2892


2893

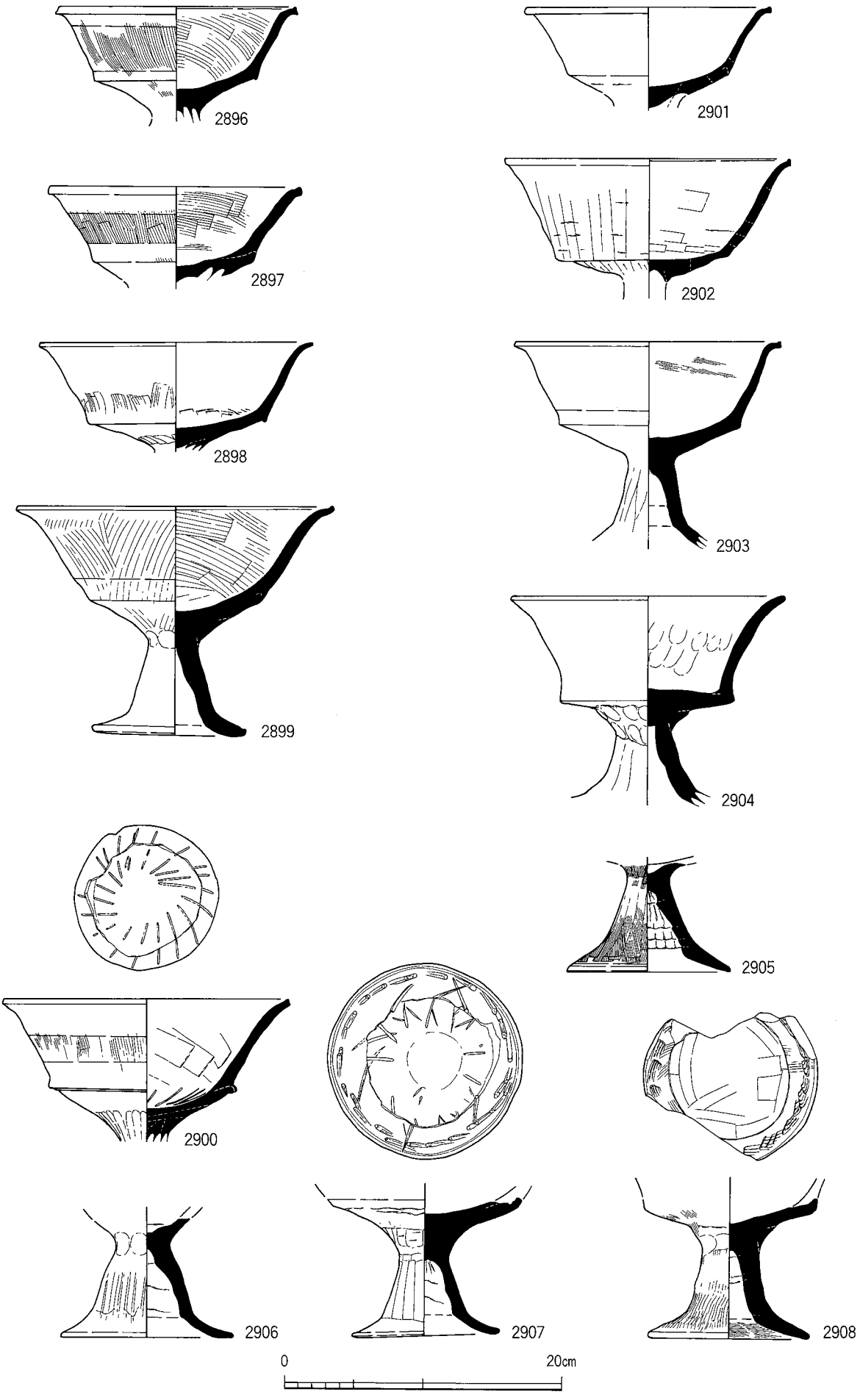

2894


2895

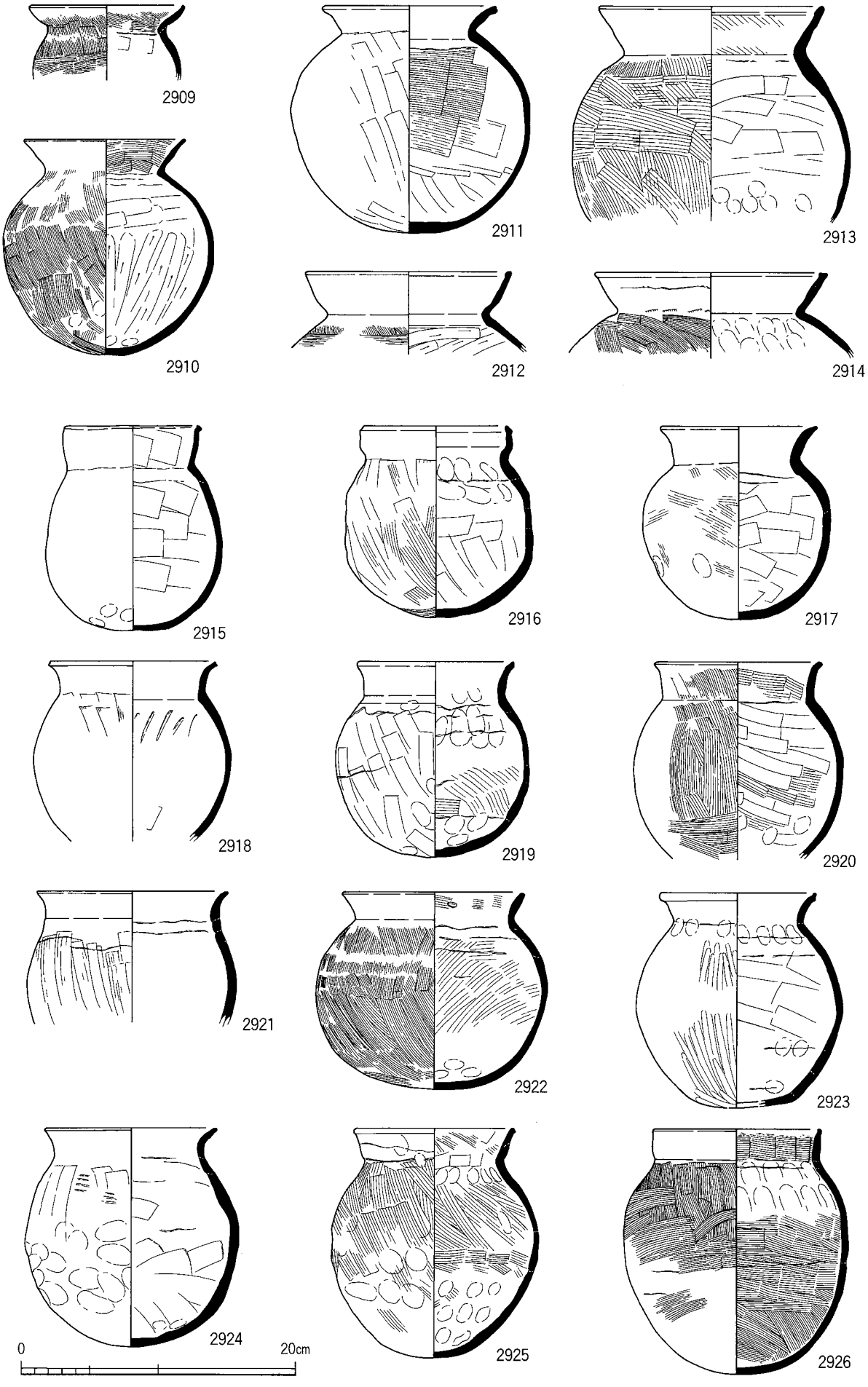


図版98
2896～2908

古墳時代中期の土器 9　亀ノ郷 7 区SD72001出土

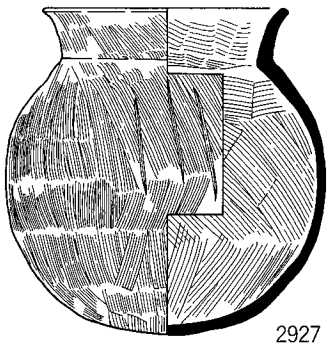


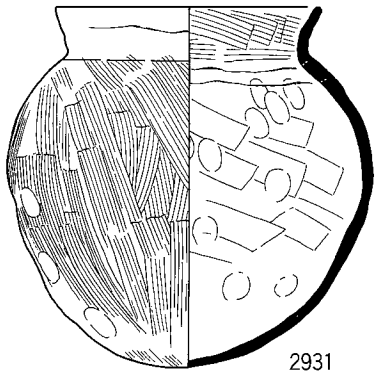
古墳時代中期の土器10　亀ノ郷７区SD72001出土

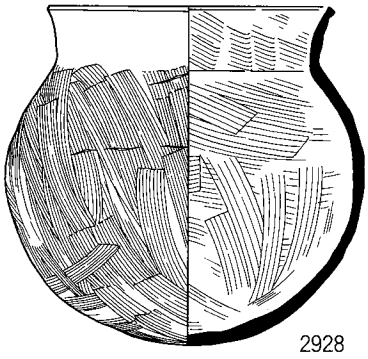


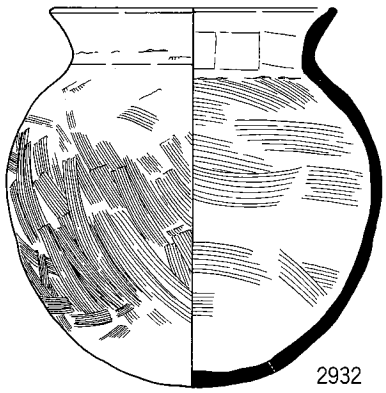
図版100
2927～2934

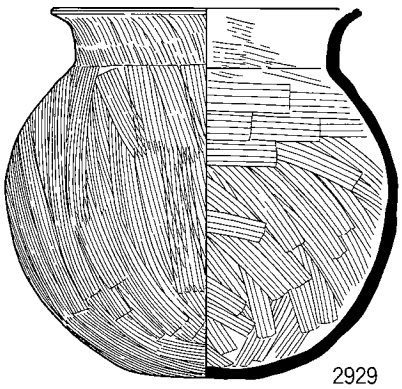
古墳時代中期の土器11　亀ノ郷7区SD72001出土

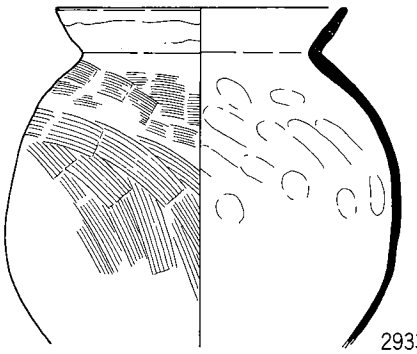

2927

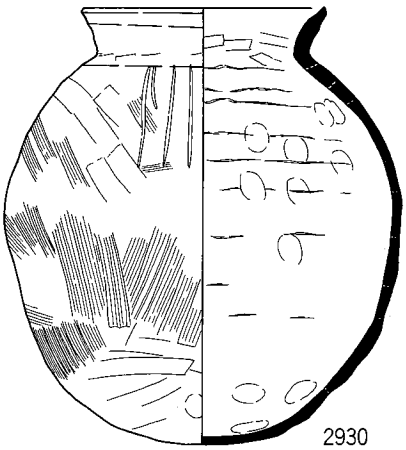

2931

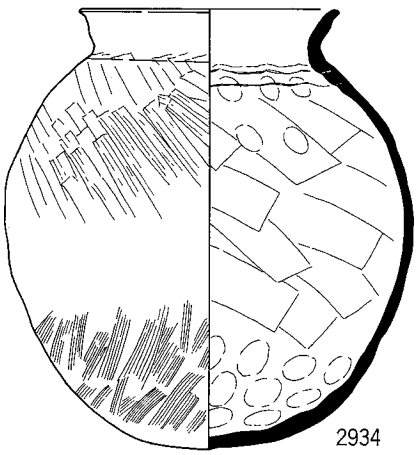

2928

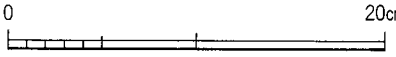

2932


2929

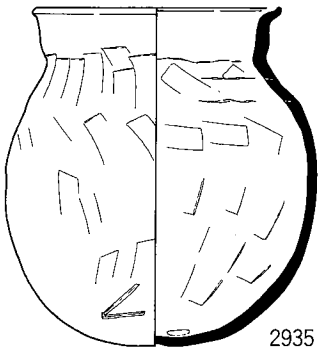

2933

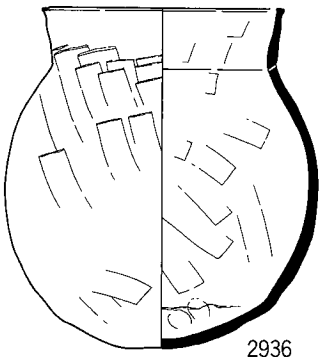

2930

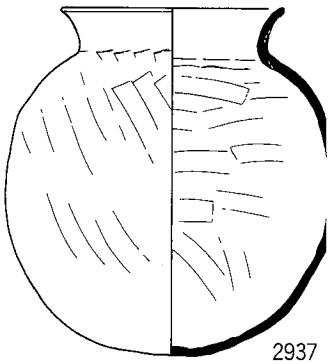

2934

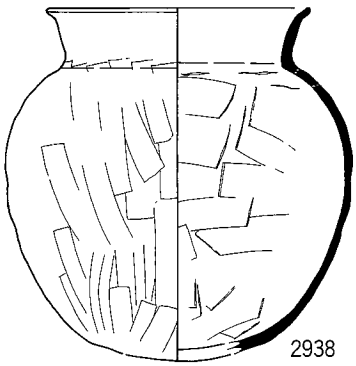


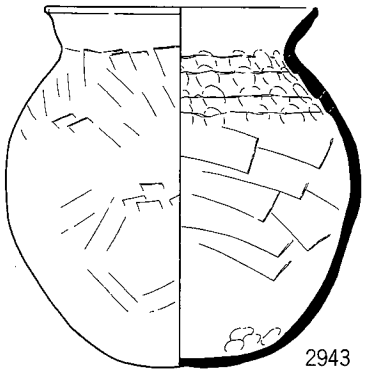
古墳時代中期の土器12　亀ノ郷７区SD72001出土

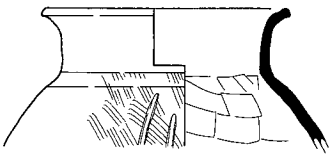

2935

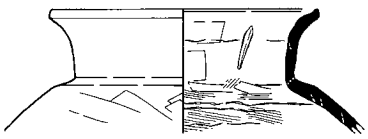

2936

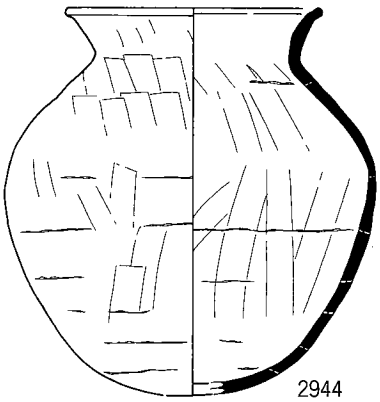

2937

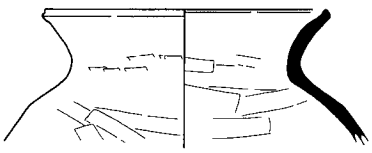

2938

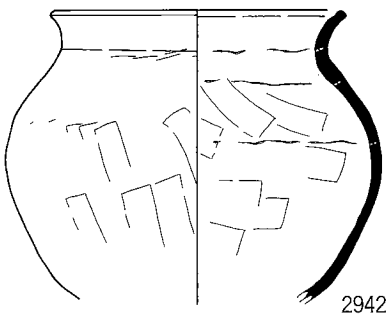

2943

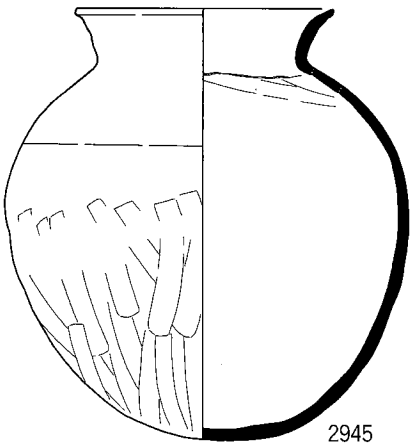

2939

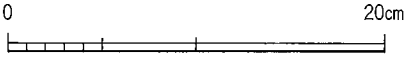

2940


2944


2941

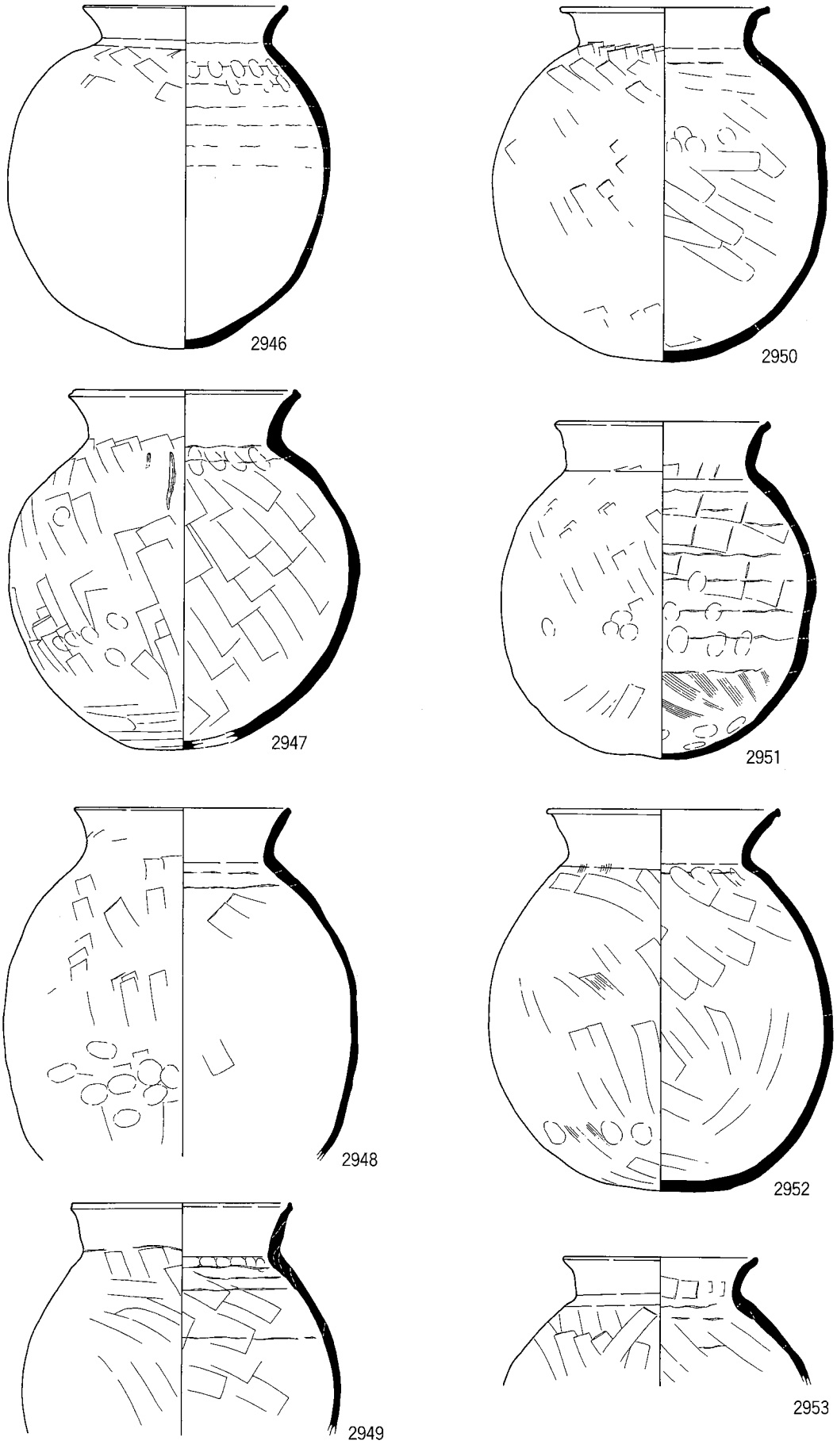

2942


2945

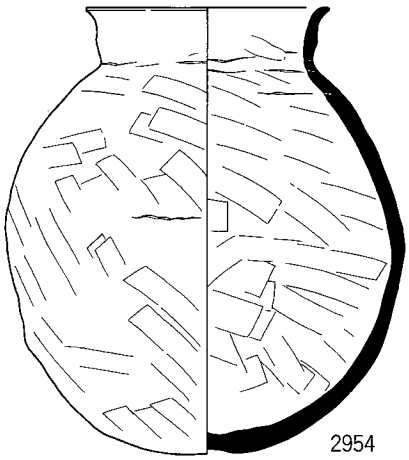


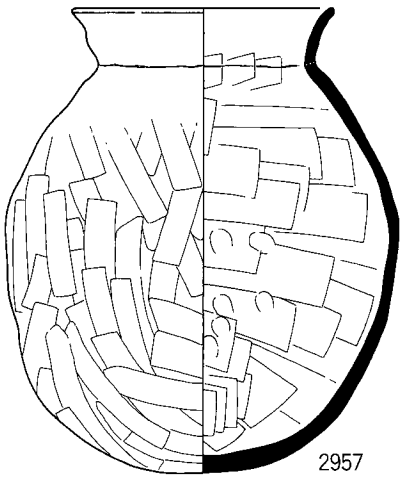
図版102
2946～2953

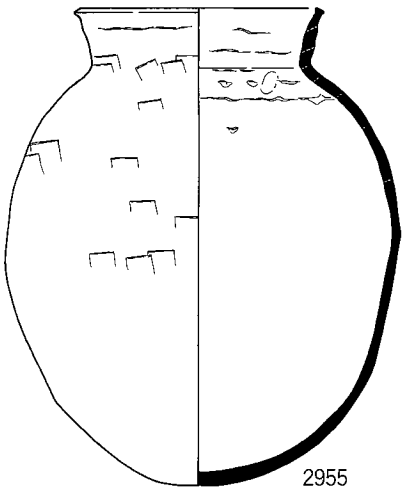
古墳時代中期の土器13　亀ノ郷７区SD72001出土

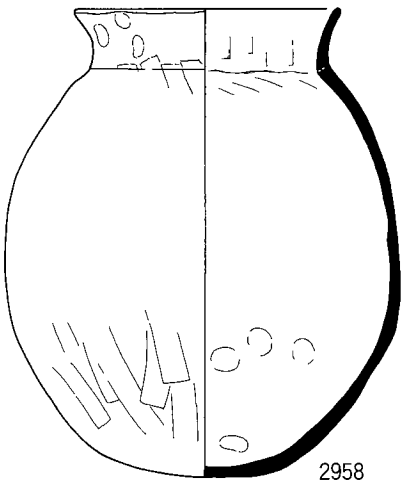


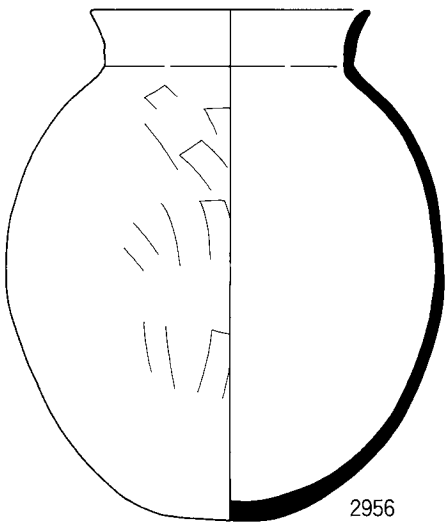
古墳時代中期の土器14　亀ノ郷７区SD72001出土

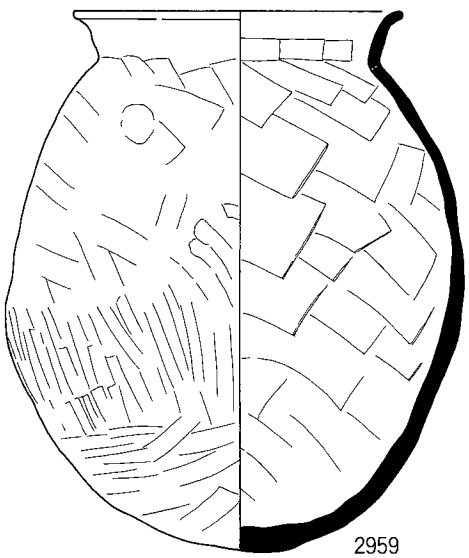

2954


2957


2955


2958

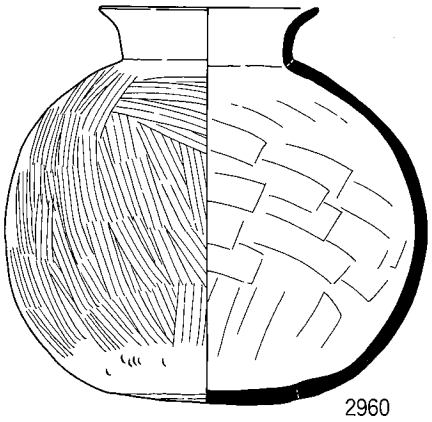

2956

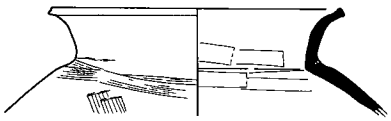

2959

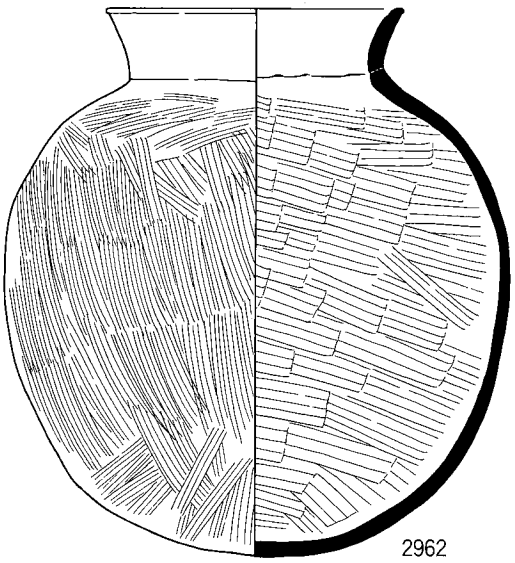
0　20cm

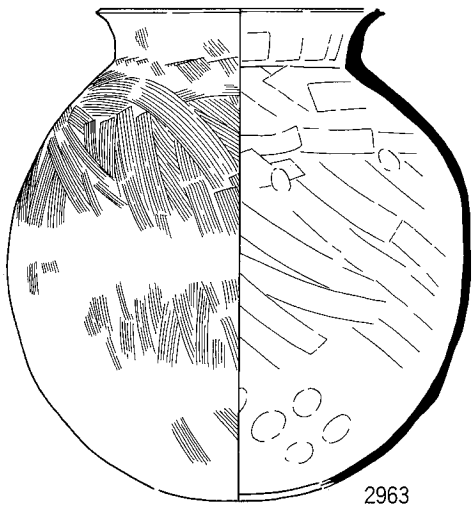
図版104
2960～2966

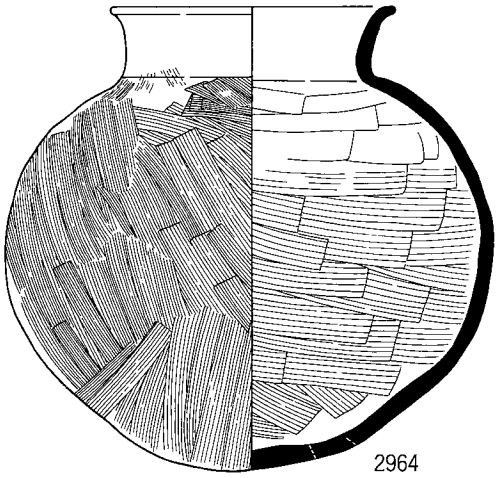
古墳時代中期の土器15　亀ノ郷７区SD72001出土

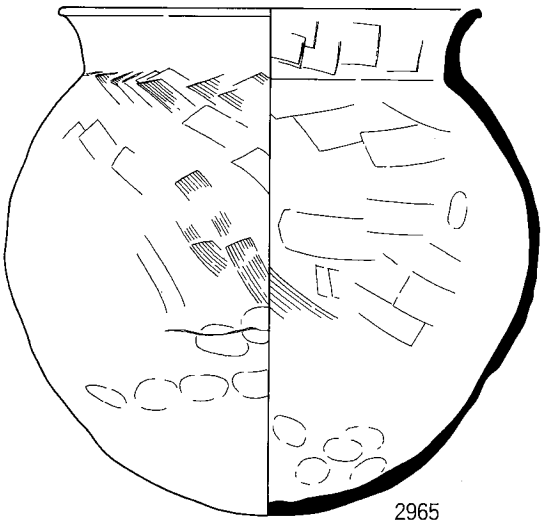

2960

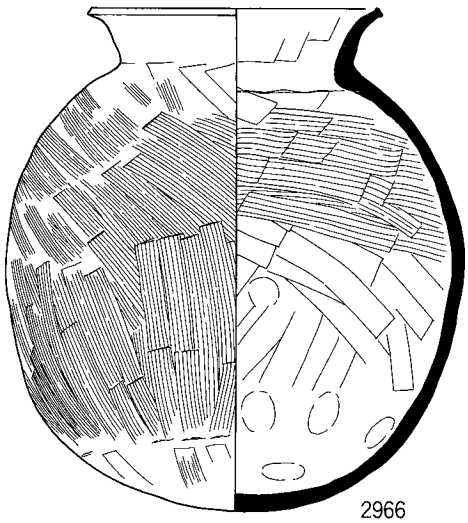

2961

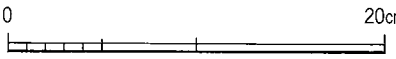

2962


2963

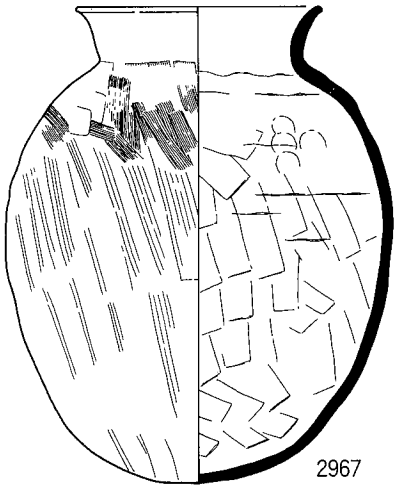

2964

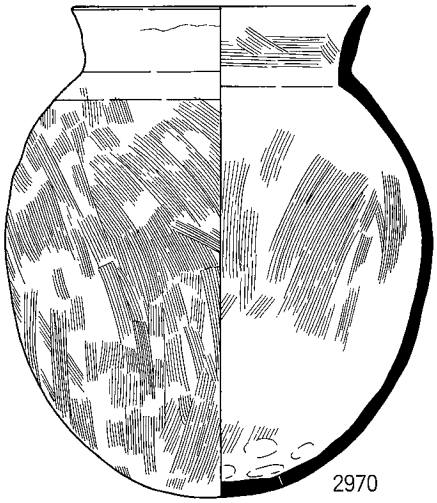

2965

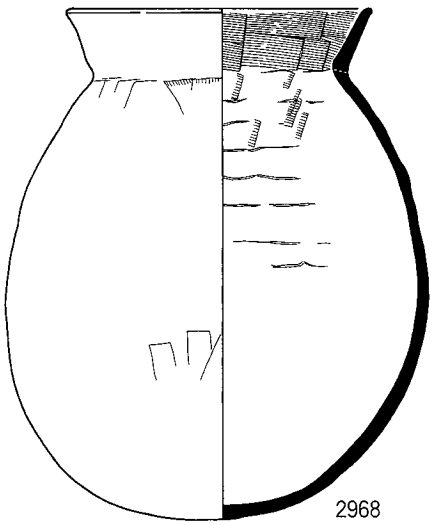

2966

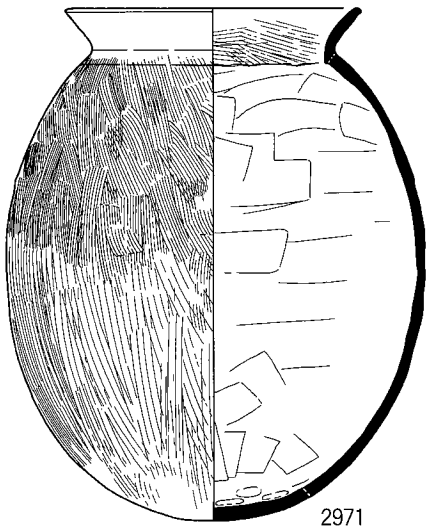


古墳時代中期の土器16　亀ノ郷７区SD72001出土

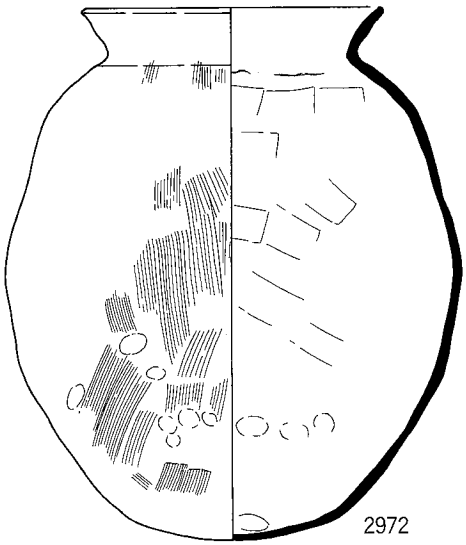

2967

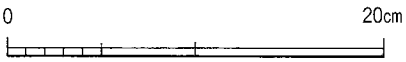

2970


2968


2971

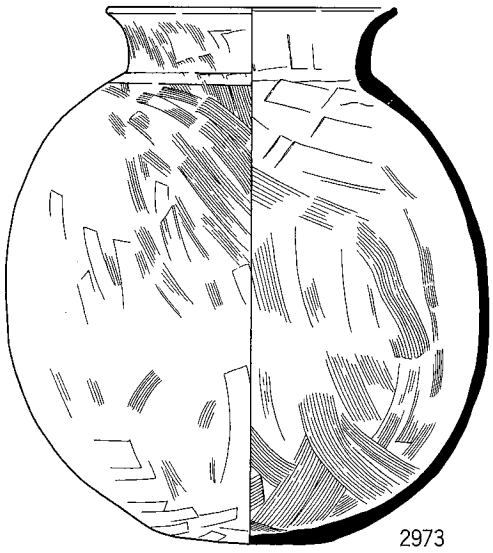
2969

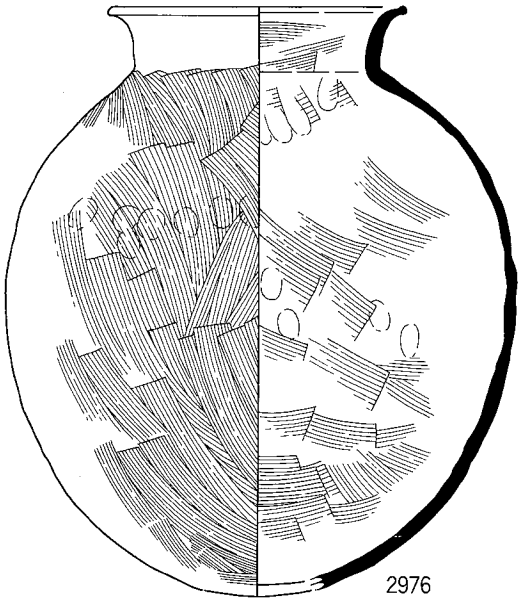

2972

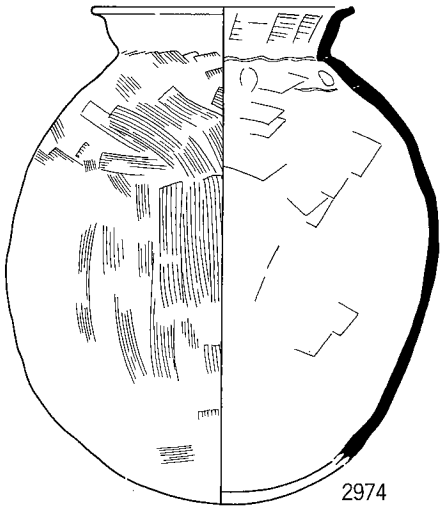


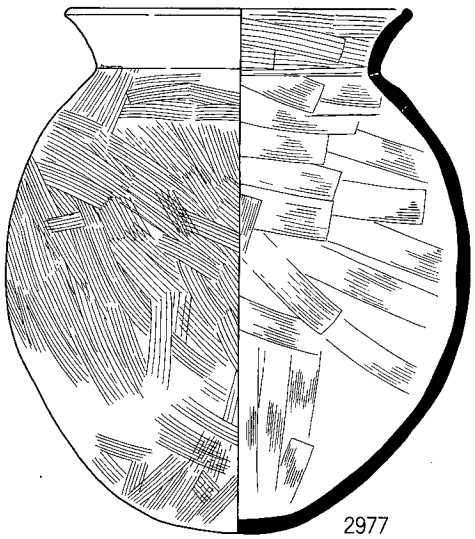
図版106
2973～2978

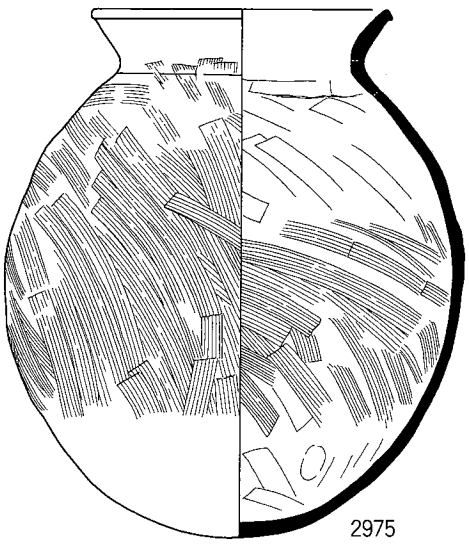
古墳時代中期の土器17　亀ノ郷７区SD72001出土

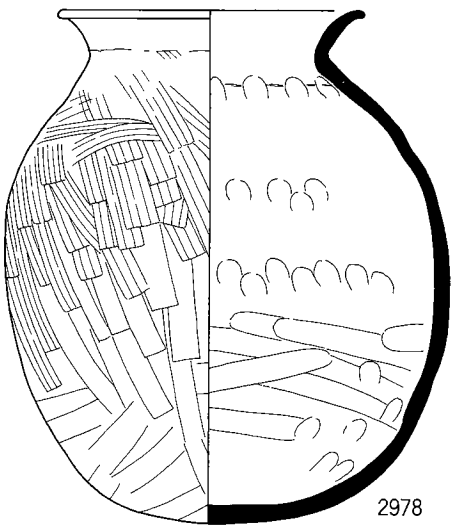

2973

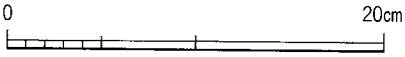

2976


2974

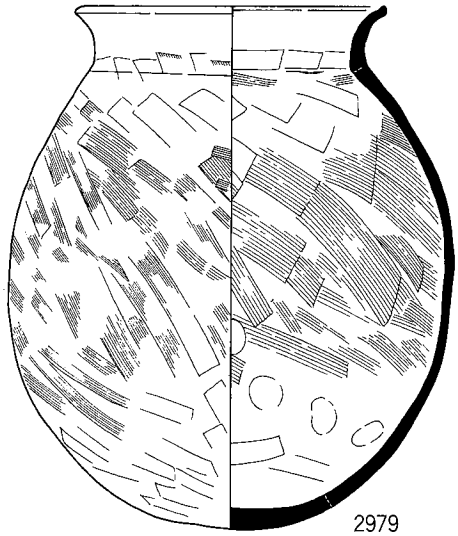

2977

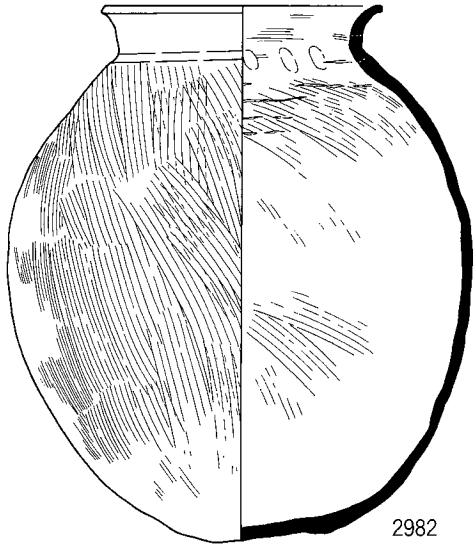

2975

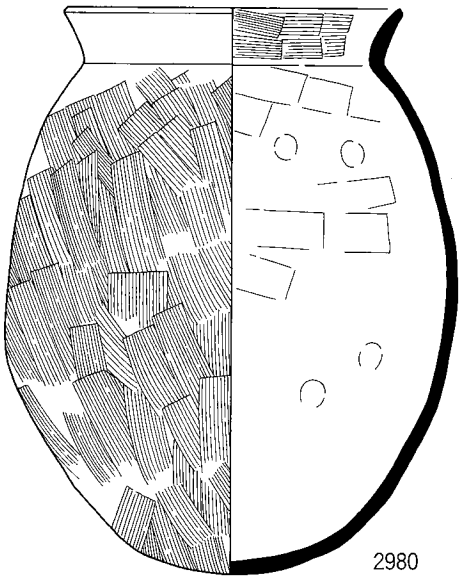

2978

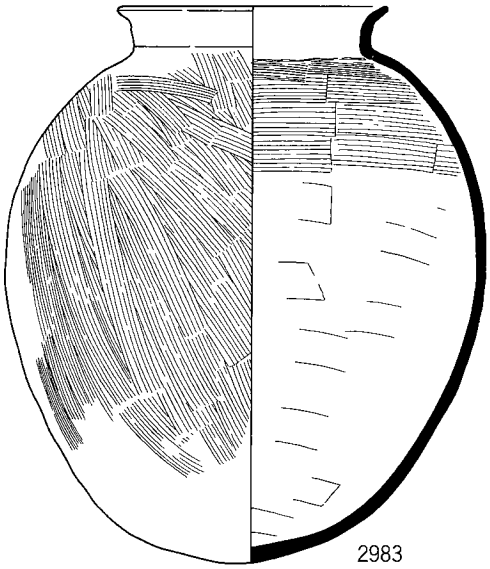


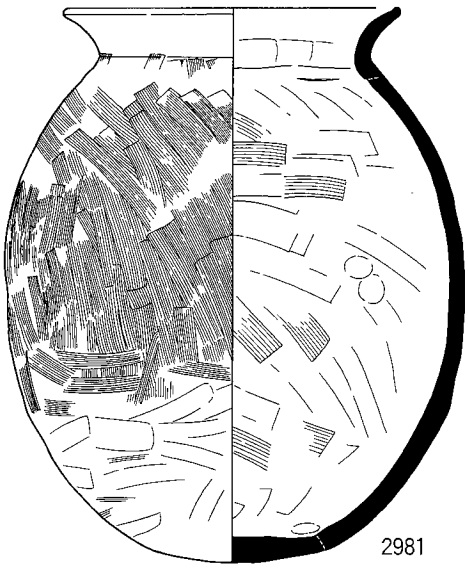
古墳時代中期の土器18　亀ノ郷７区SD72001出土

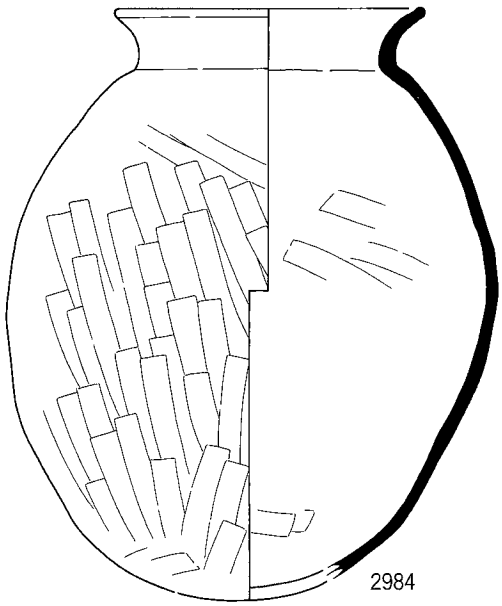

2979


2982


2980

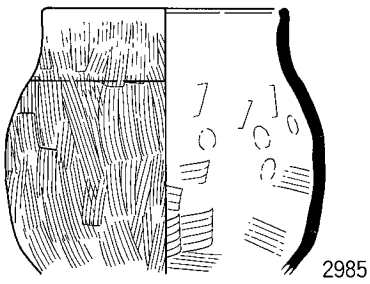

2983

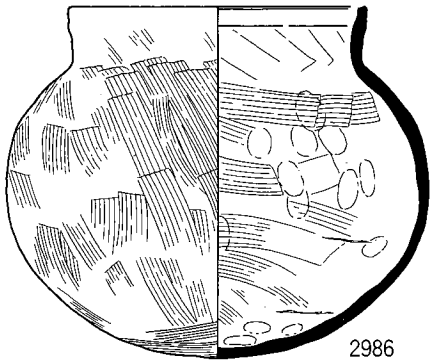

2981

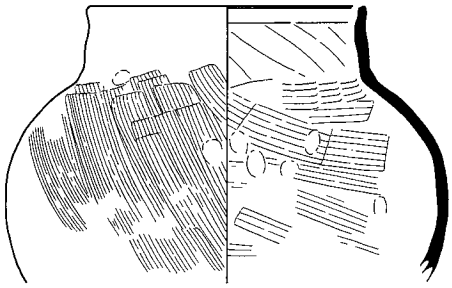

2984

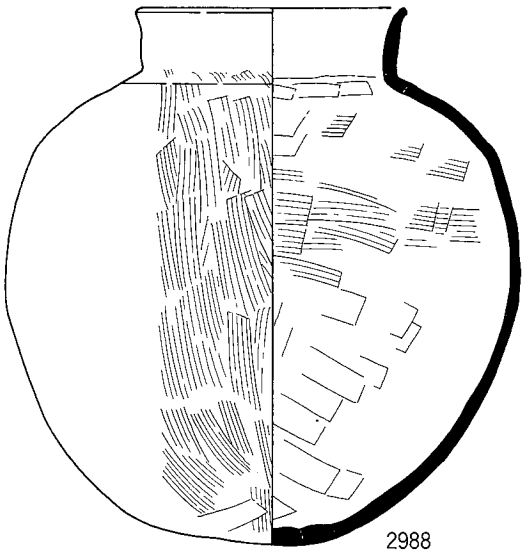
図版108
2985～2991

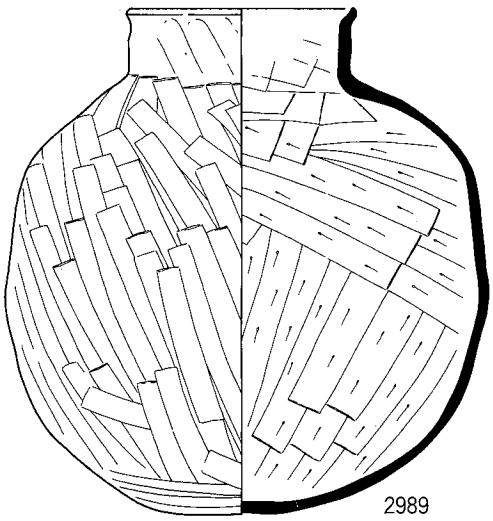
古墳時代中期の土器19　亀ノ郷７区SD72001出土

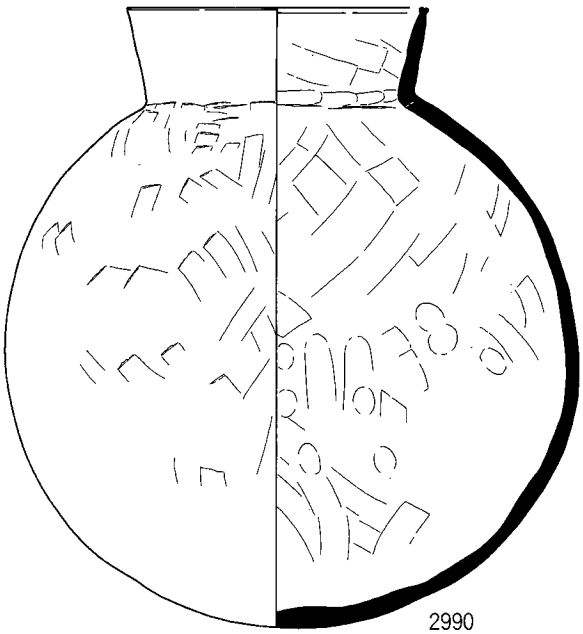

2985

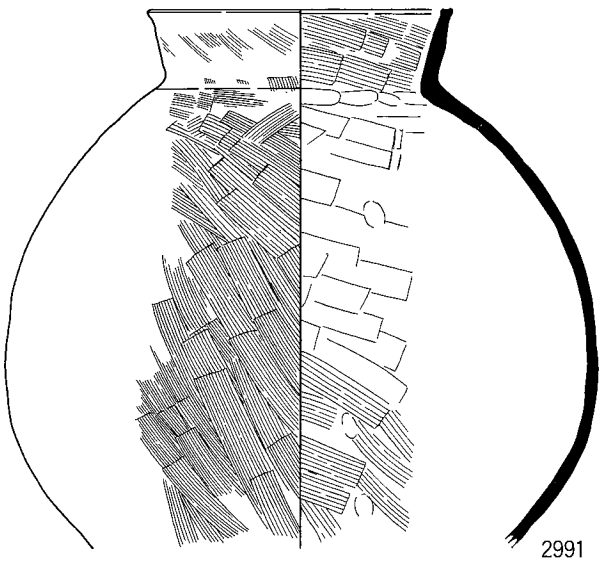

2986


2987

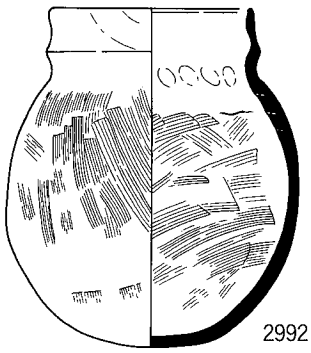

2988

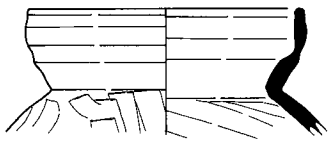

2989

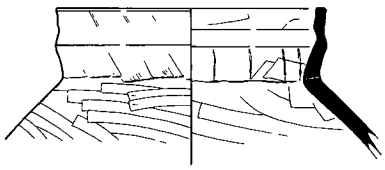

2990

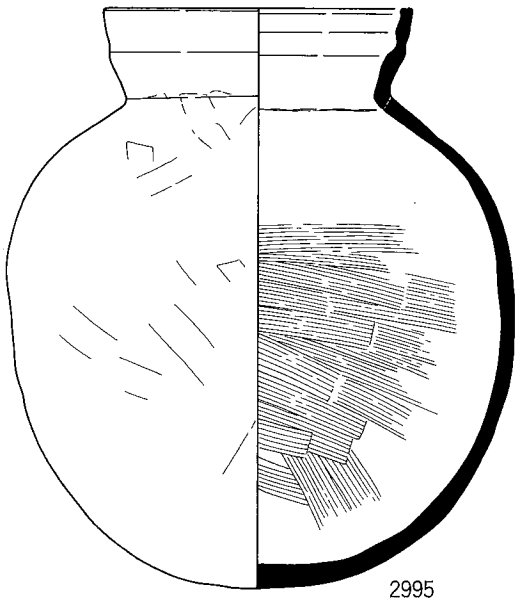

2991

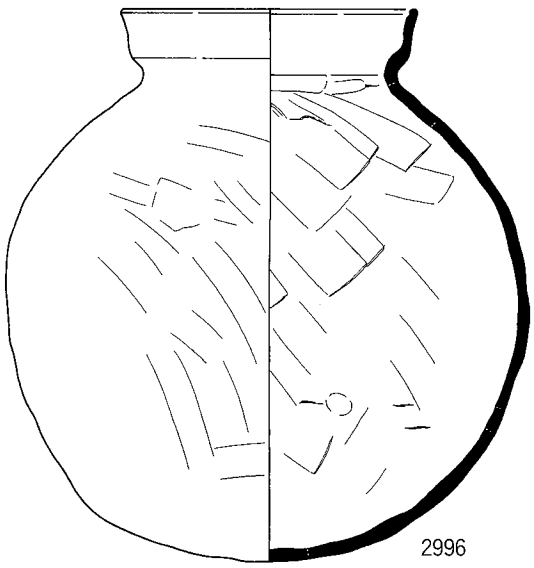
古墳時代中期の土器20　亀ノ郷７区SD72001出土

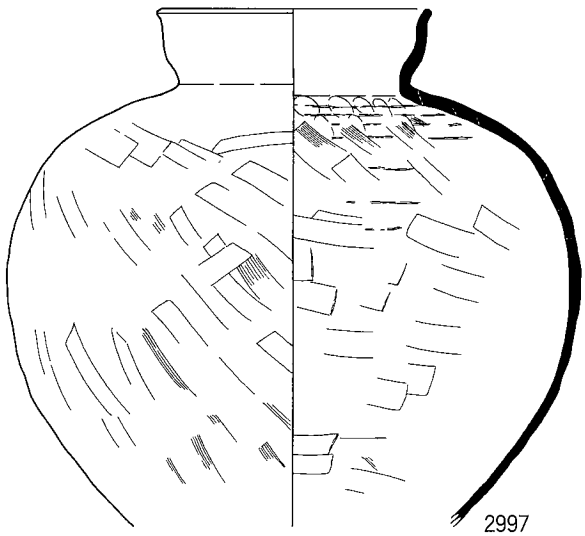

2992

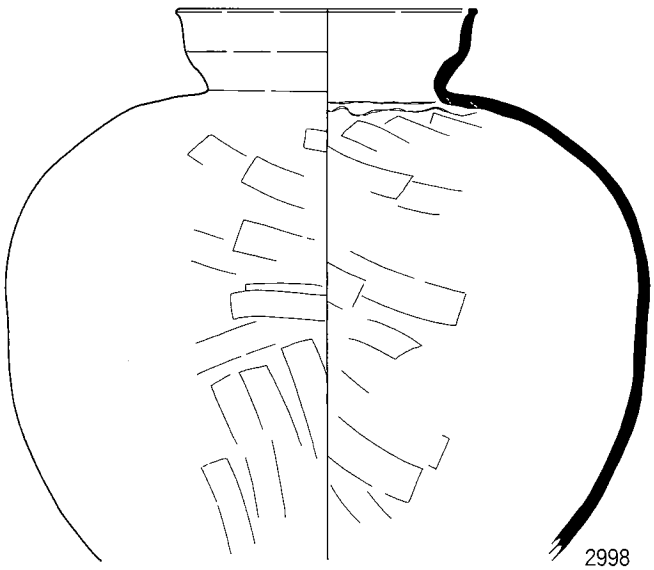

2993

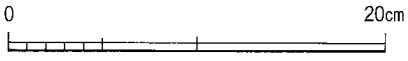

2994


2995


2996

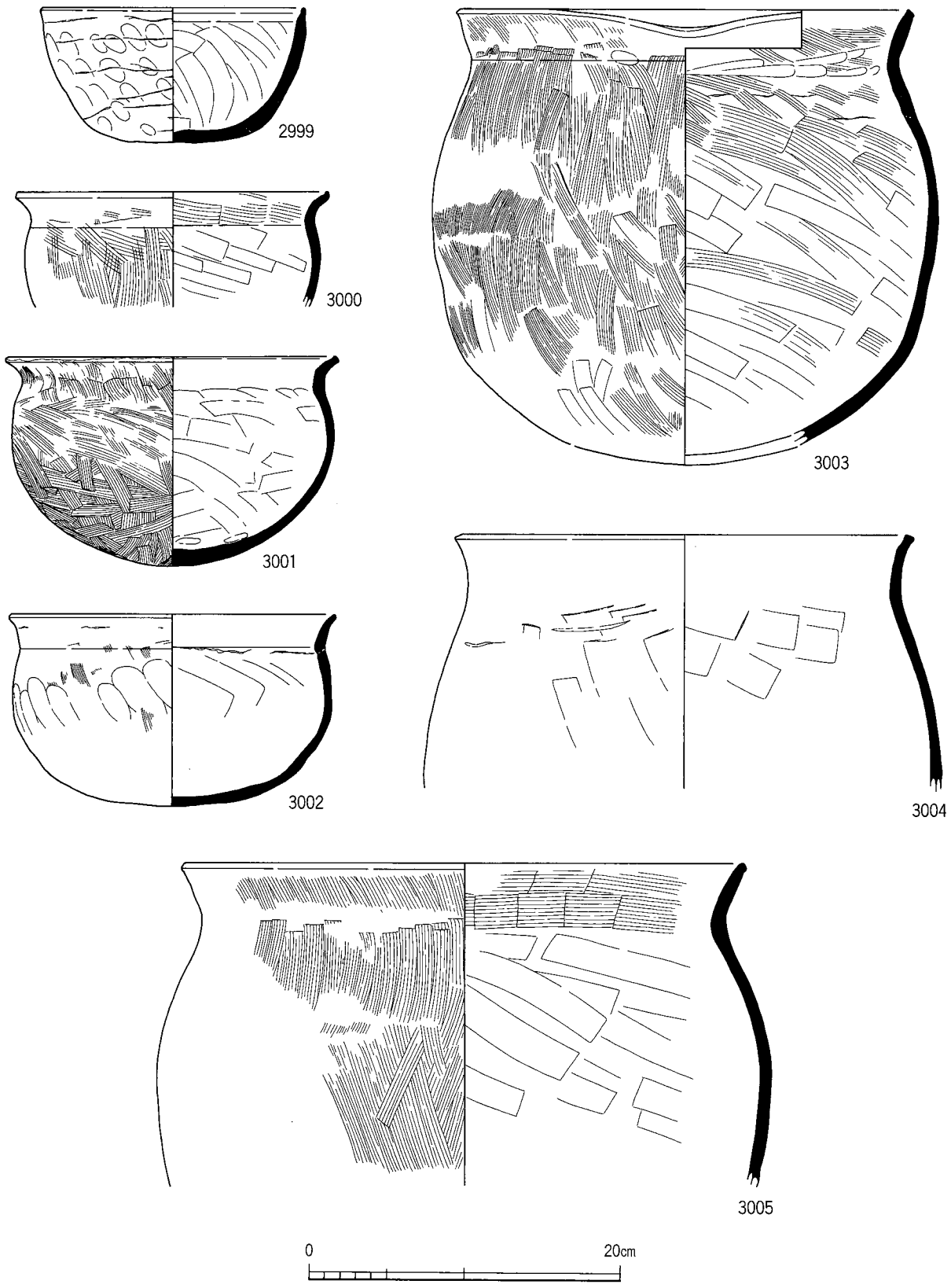

2997


2998

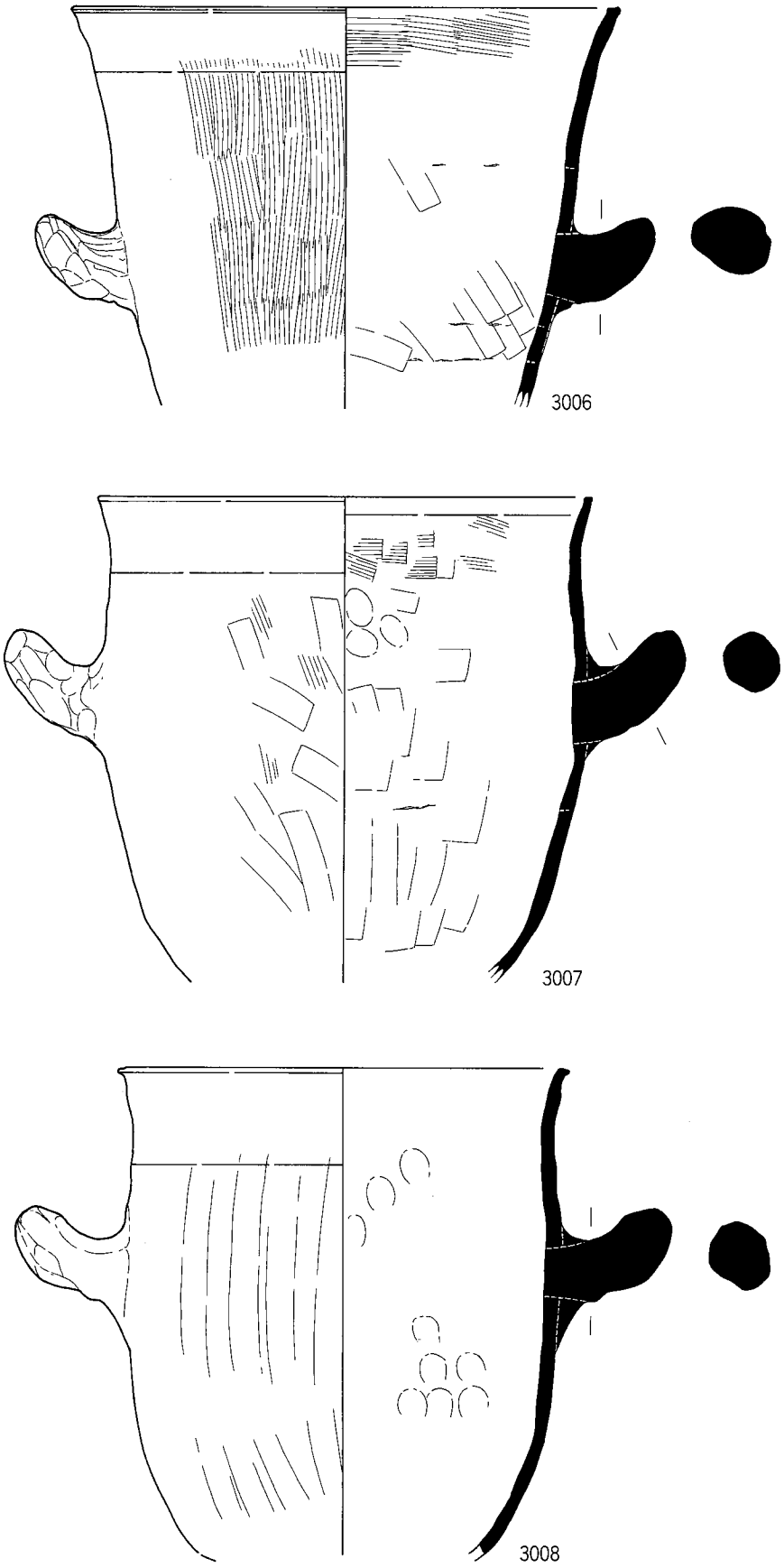


図版110
2999～3005

古墳時代中期の土器21　亀ノ郷７区SD72001出土

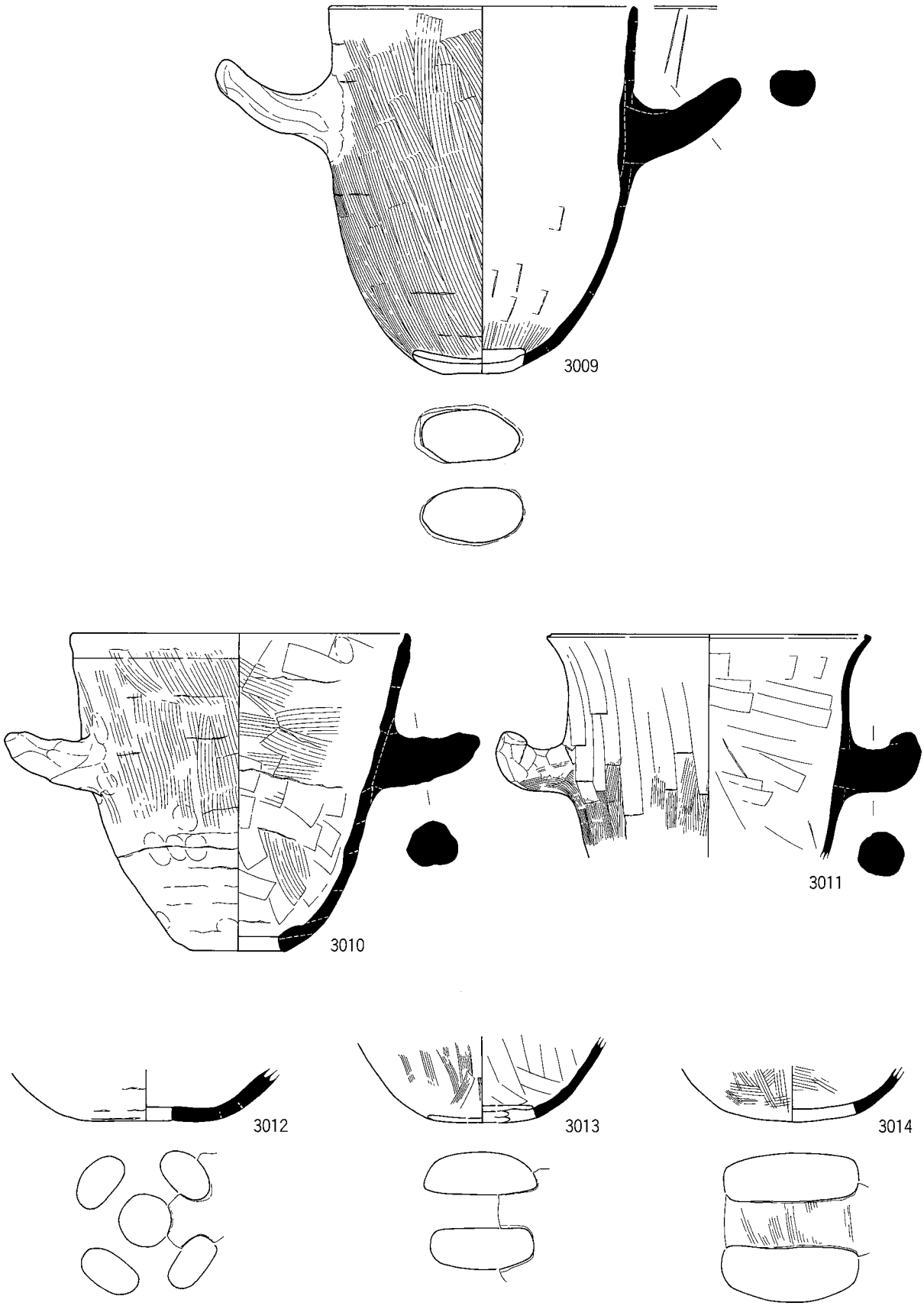


古墳時代中期の土器22　亀ノ郷７区SD72001出土

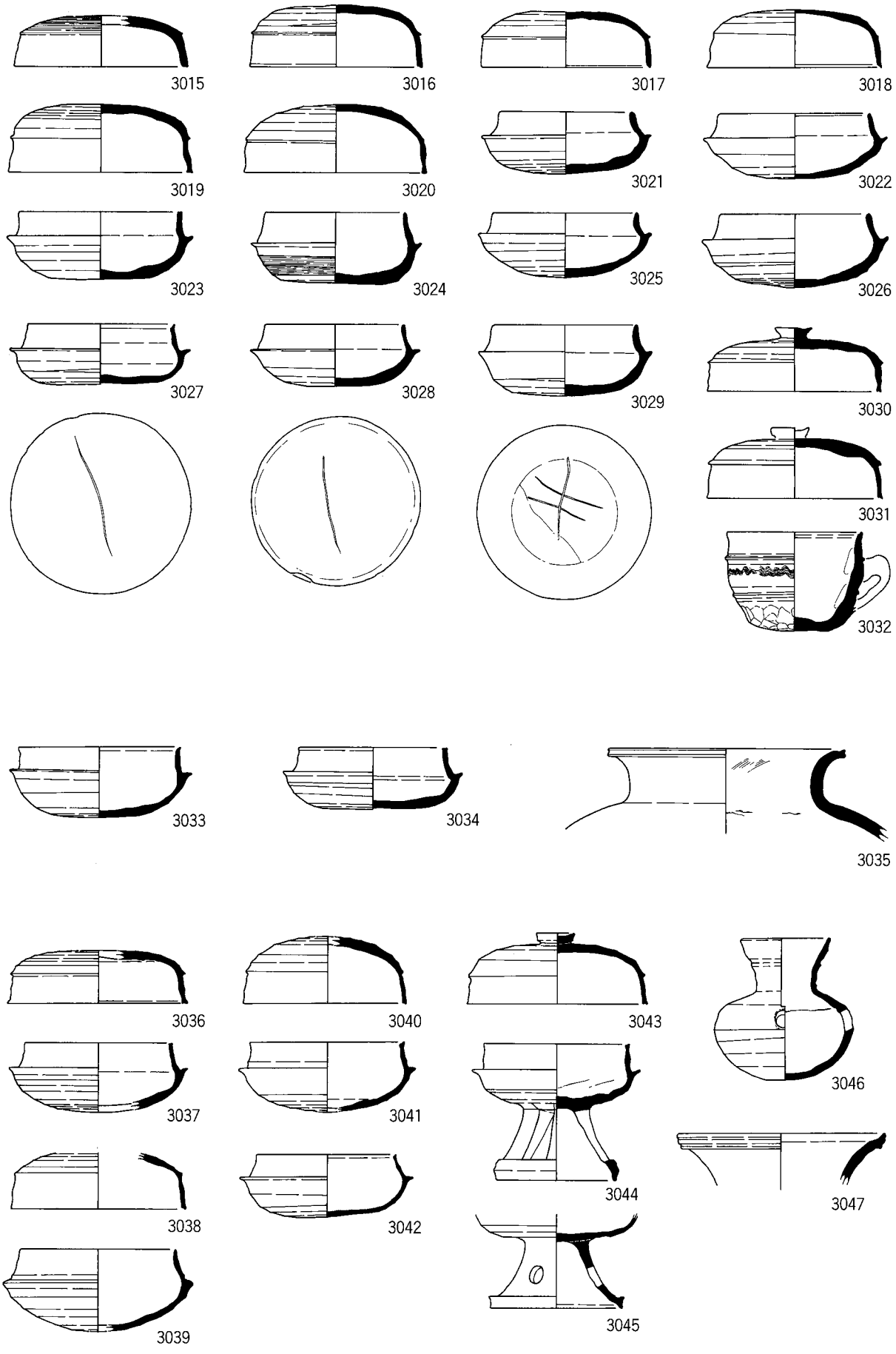


図版112
3009～3014

古墳時代中期の土器23　亀ノ郷７区SD72001出土



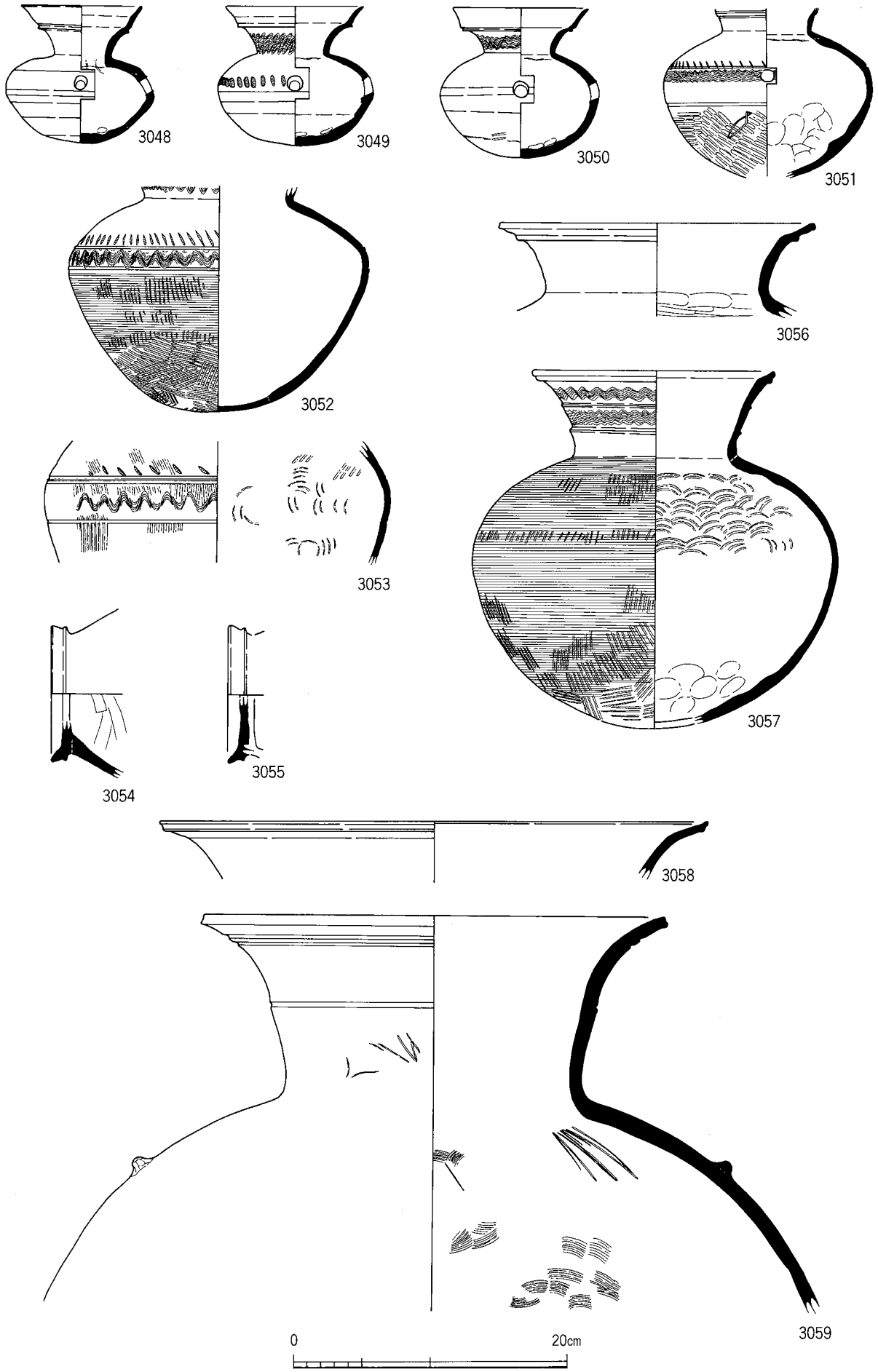
古墳時代中期の土器24　亀ノ郷地区出土



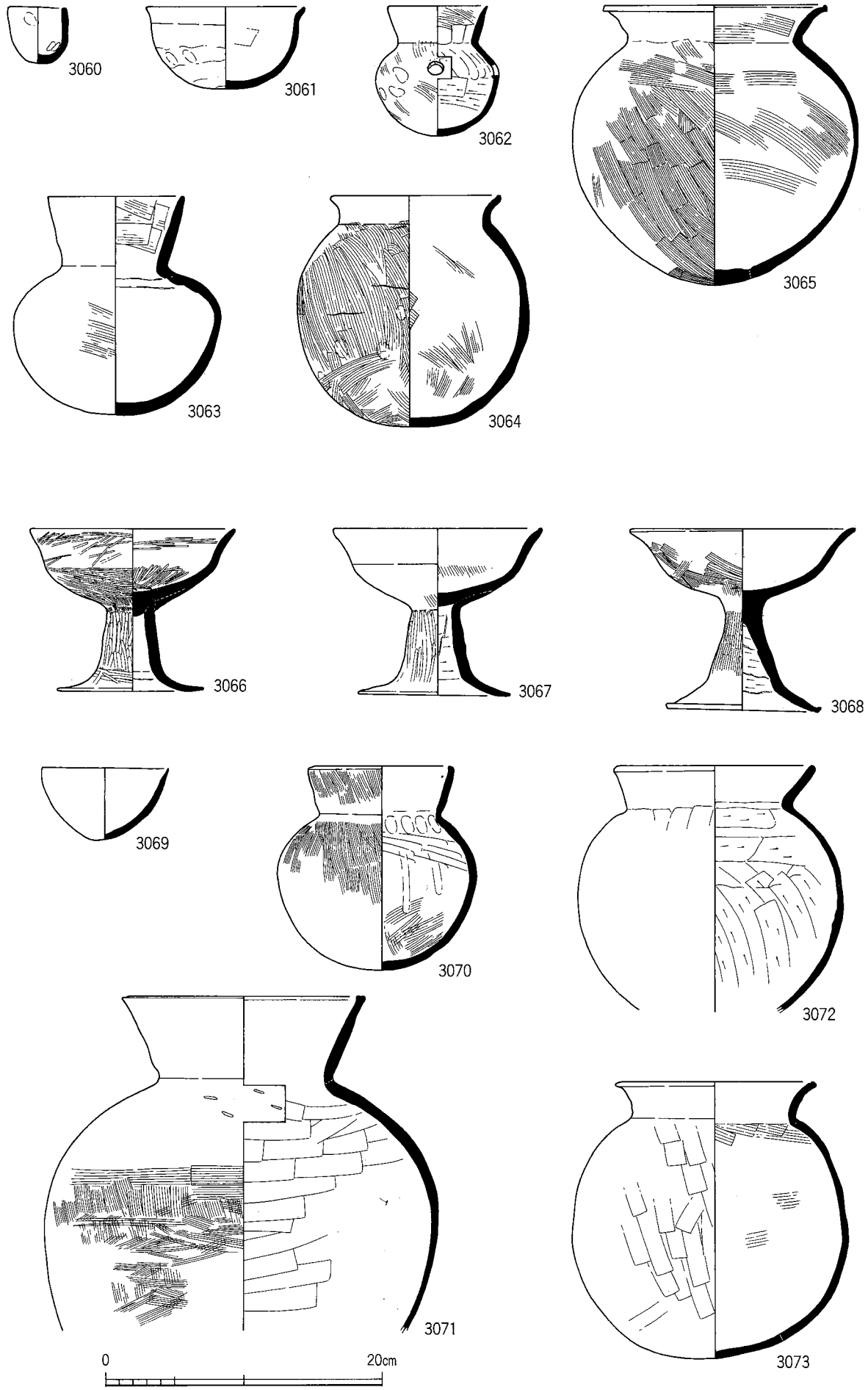
SD72001　7区(3015～3032)　3区上層(3033)　8区(3034)　KM1区(3036～3033)
8区包含層(3035)

図版114
3048～3059

古墳時代中期の土器25　亀ノ郷７区SD72001出土

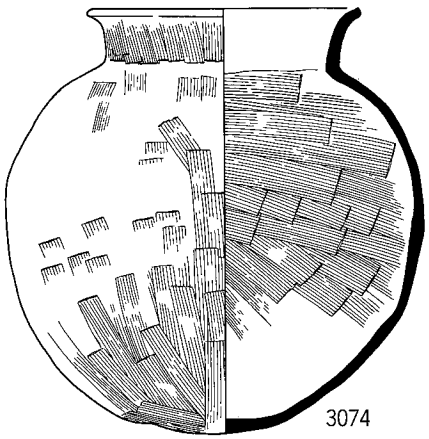


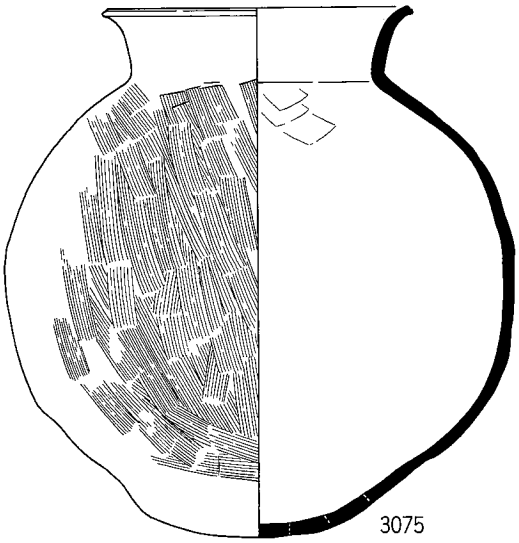
古墳時代中期の土器26　亀ノ郷地区SD72001出土

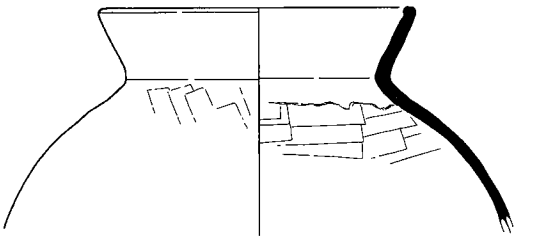


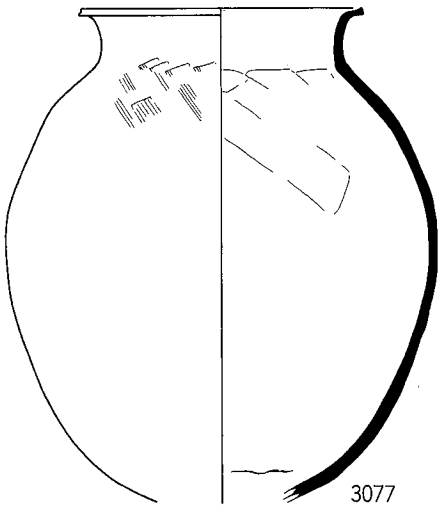
3区(3060～3065)　6区(3066～3073)

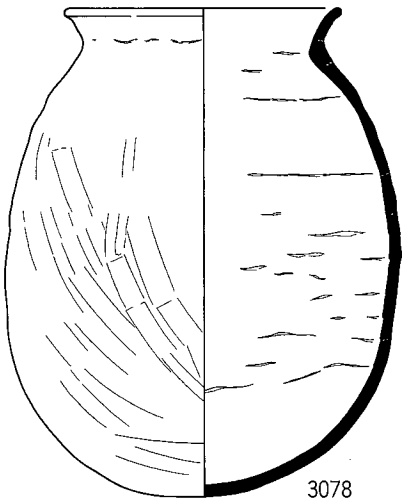
古墳時代中期の土器27　亀ノ郷6区出土

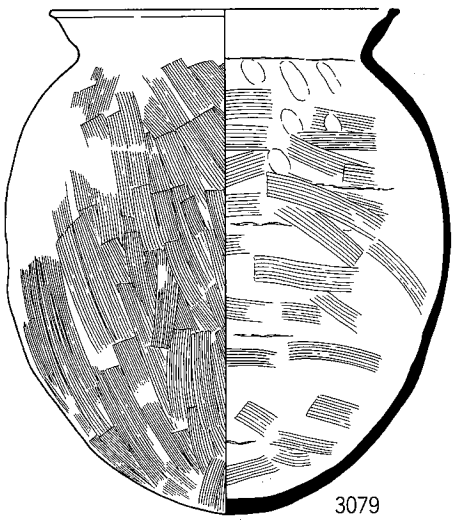

3074

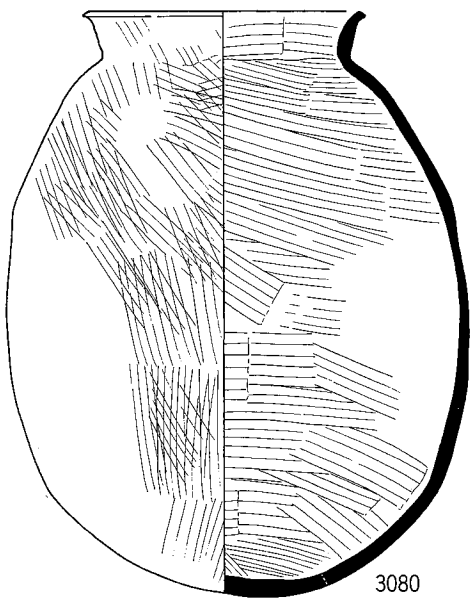

3075

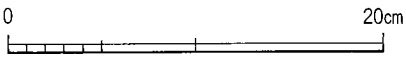

3076


3077


3078

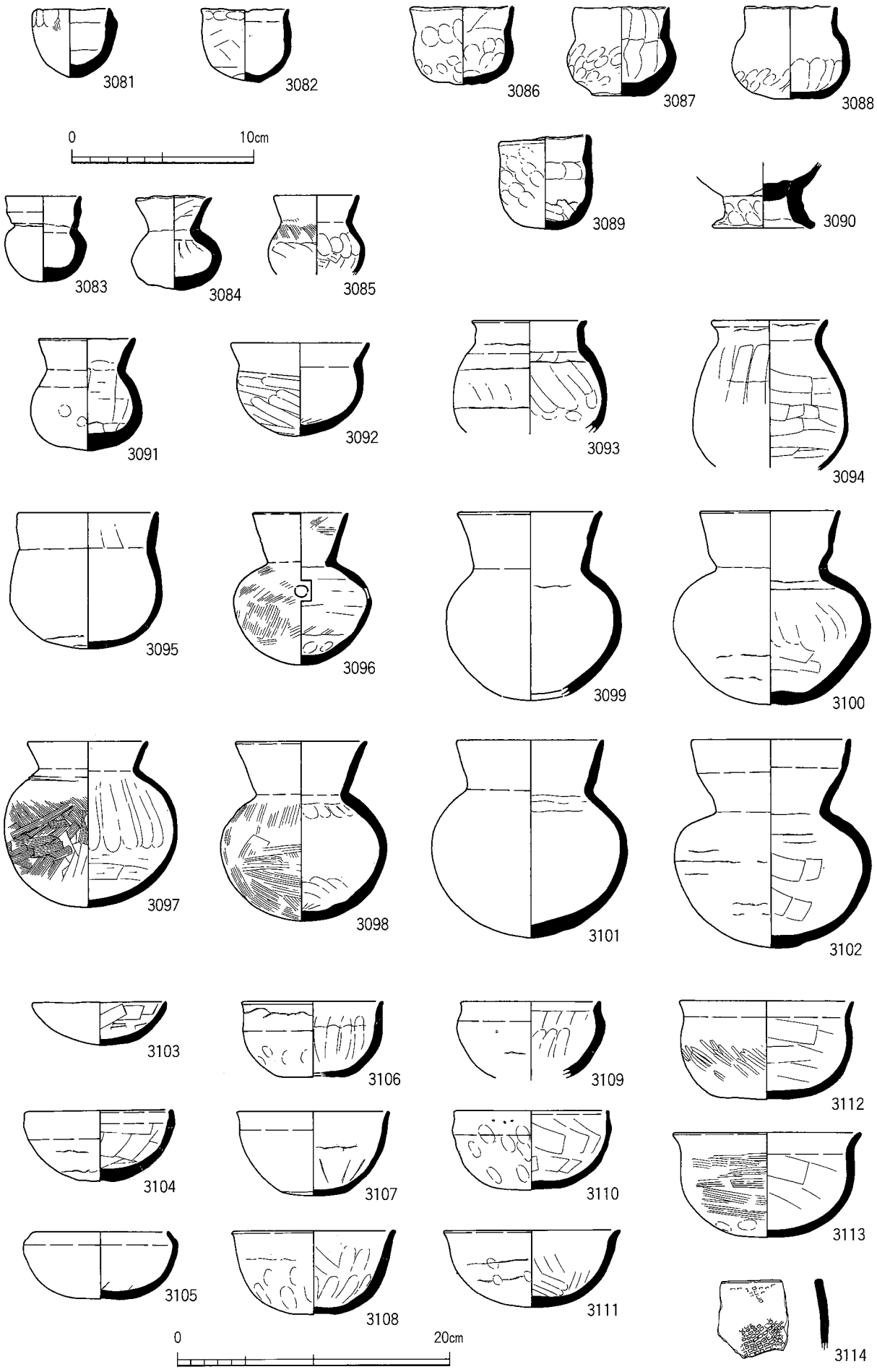

3079


3080



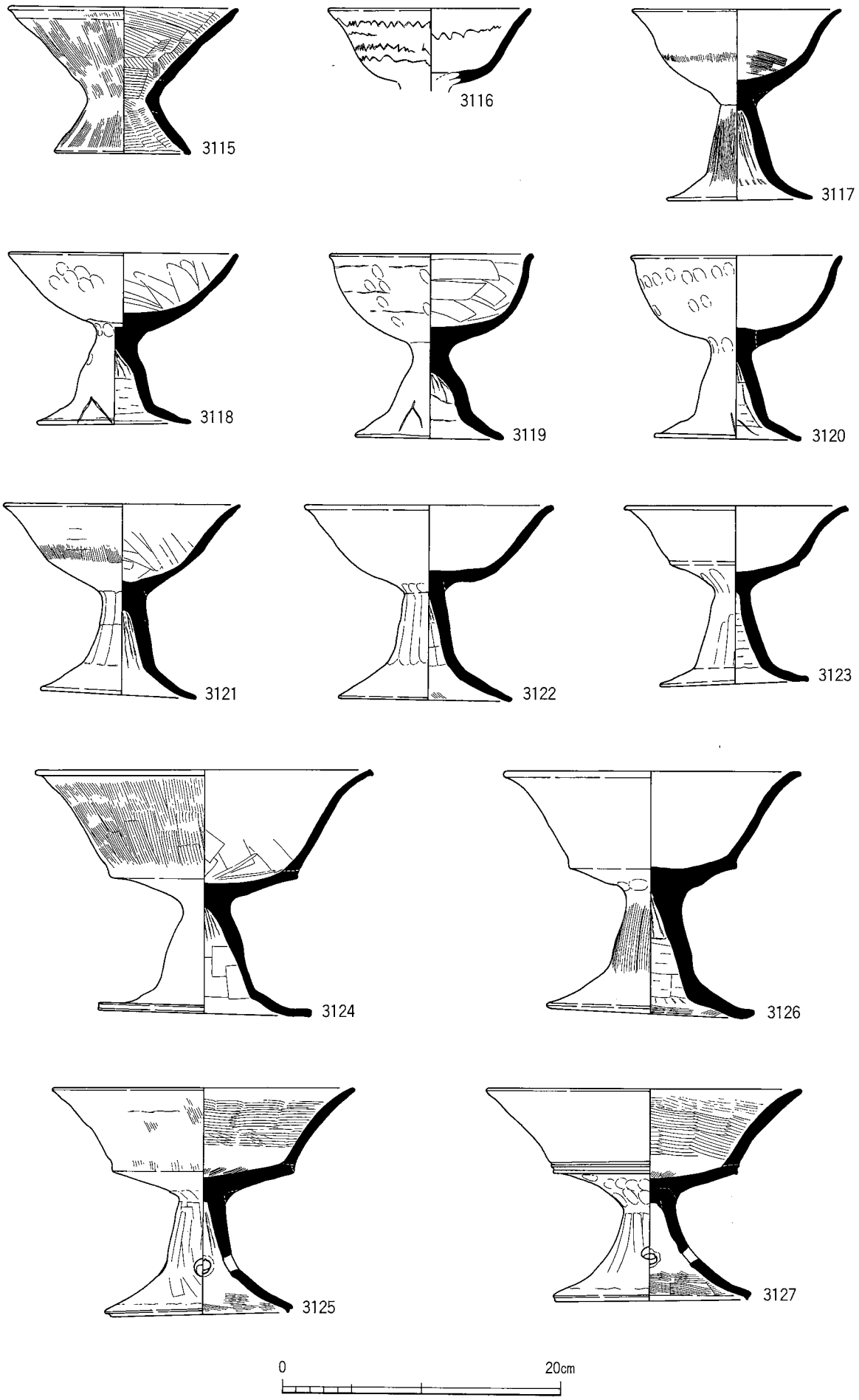
SD72004（3074・3076・3079）　SD72001上層（3077）　SD72001（3075・3078・3079）

古墳時代中期の土器28　亀ノ郷8区SD72001出土

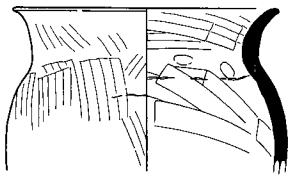


図版118
3115～3127

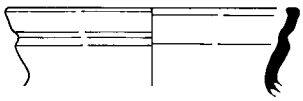
古墳時代中期の土器29　亀ノ郷8区SD72001出土



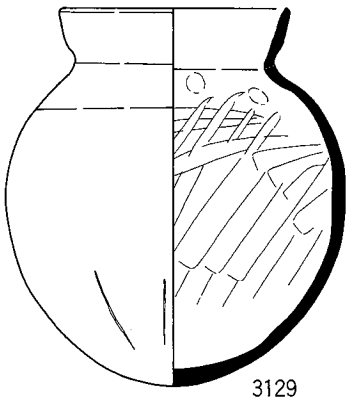
古墳時代中期の土器30　亀ノ郷8区SD72001出土



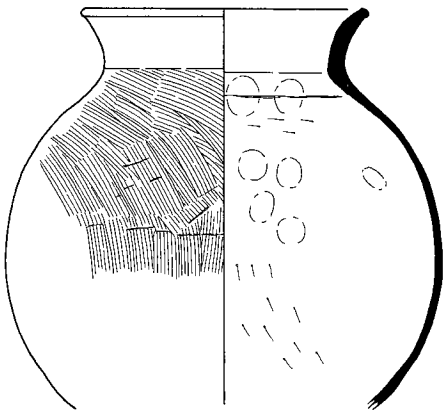
3128



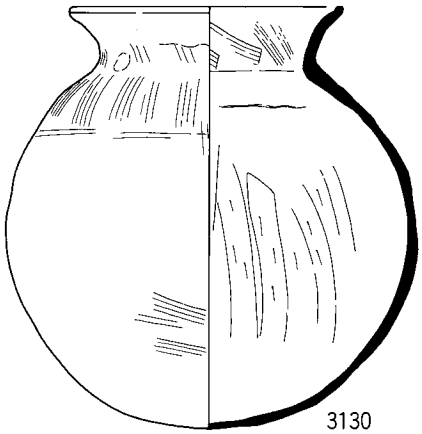
3132



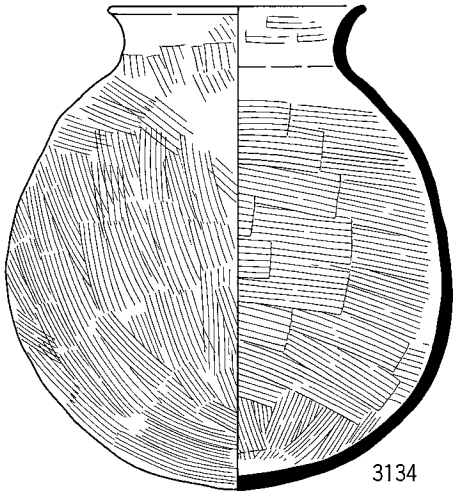
3129



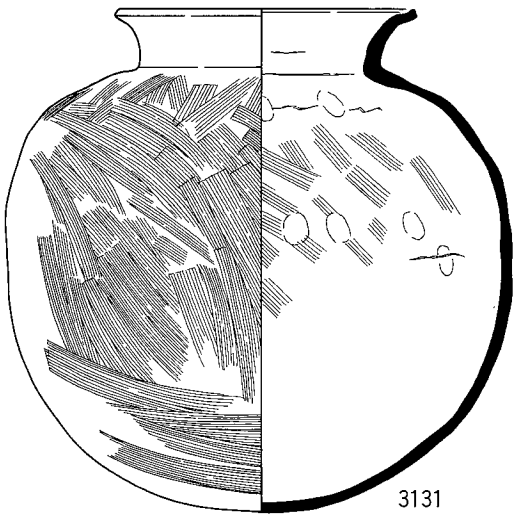
3133



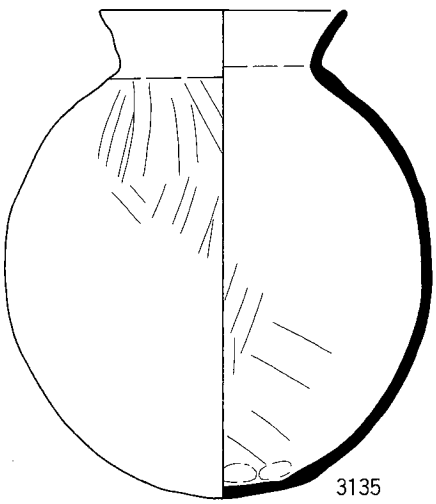
3130



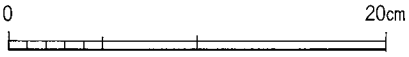
3134



3131

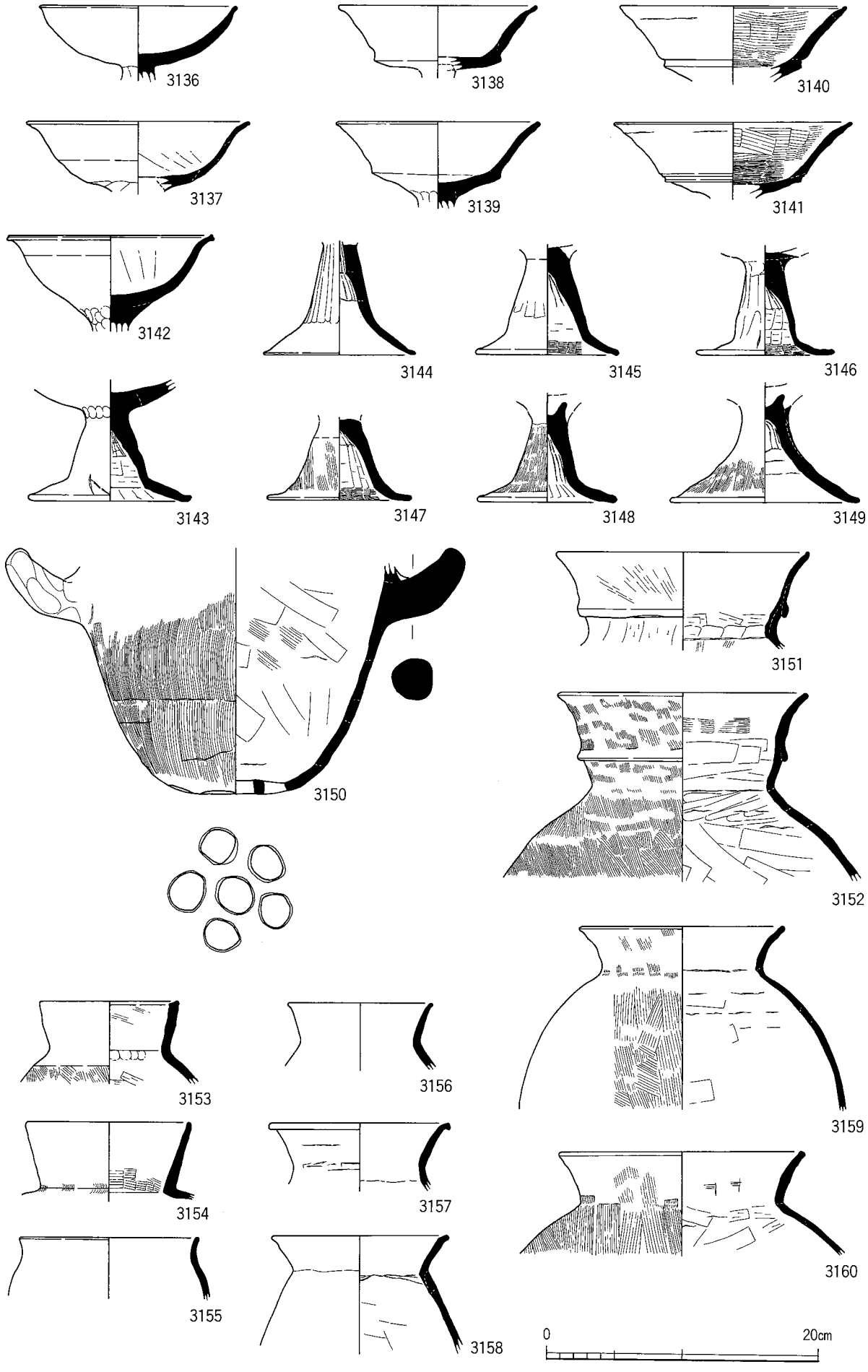


3135

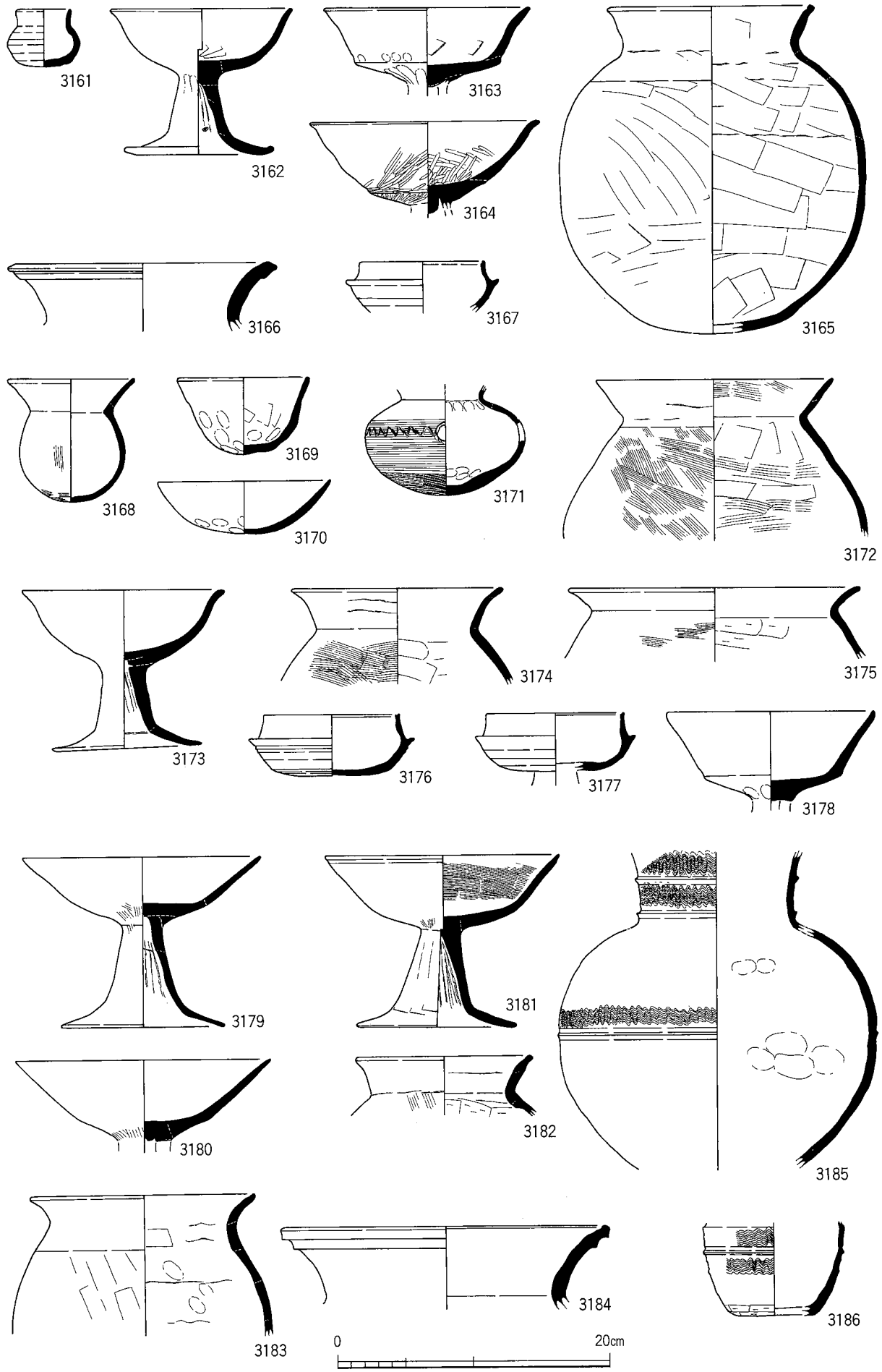


図版120
3136～3160

古墳時代中期の土器31　亀ノ郷地区KM１区SD72001出土

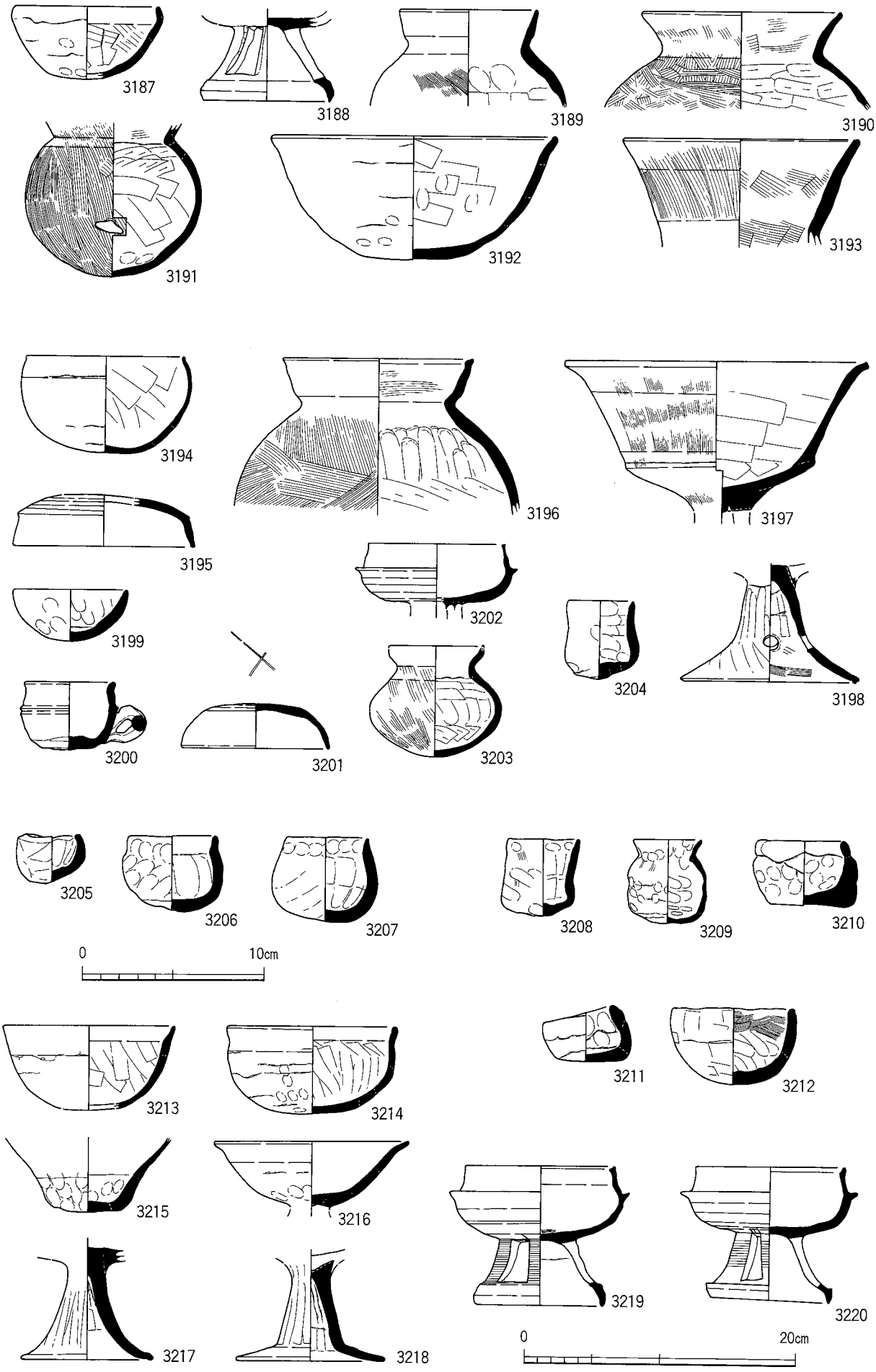


古墳時代中期の土器32



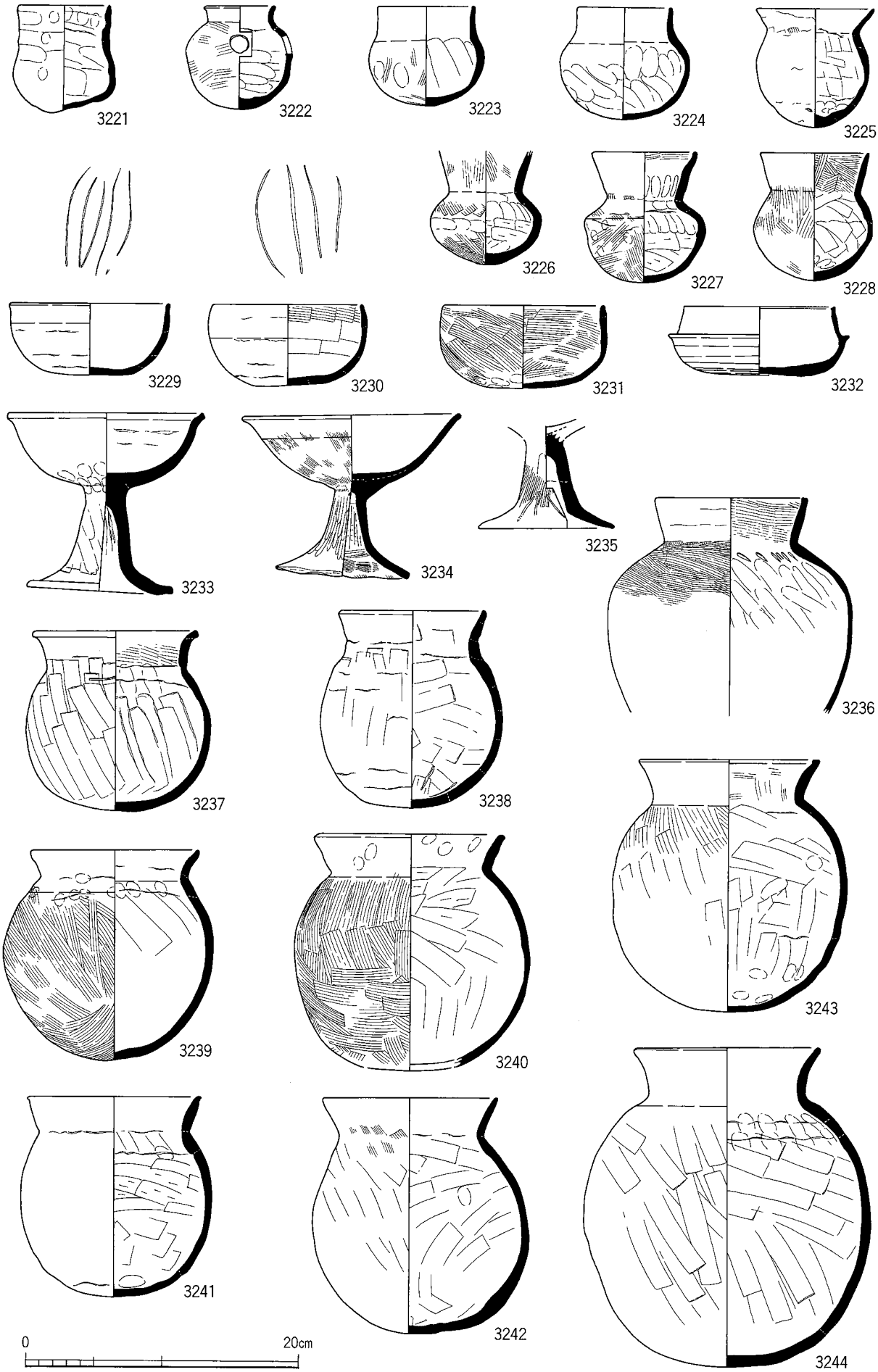
黒岡１区包含層(3161)　下町４区SD72006(3167)　２区SR62001(3162～3166)　西ケ市７区SD72009(3171)
９区SD62002(3172)　２区包含層(3185)　３区砂礫層(3168～3170)　池ノ内１区SH72005(3173)　SD72010(3174)
SH72004(3175)　SK72002(3176)　14区SP72001(3177)　SH72001(3178)　16区SH62001(3179～3183)
池ノ内地区包含層15区(3184)　16区(3186)

古墳時代中期の土器33　西ケ市地区出土



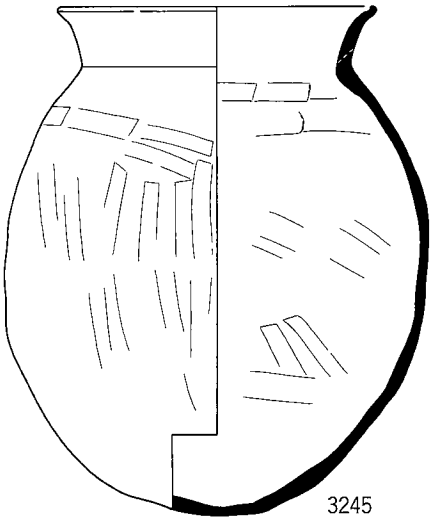
6区SD72007(3187～3193)　2・6・7区SD72008(3194～3204)
6区SD72001(3205～3210・3213～3220)　7区SD72007(3211・3212)

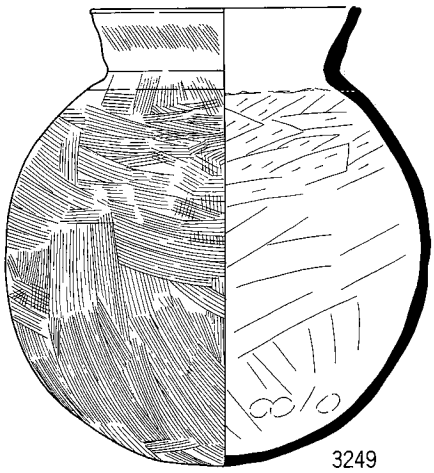
古墳時代中期の土器34　西ケ市６・７区出土

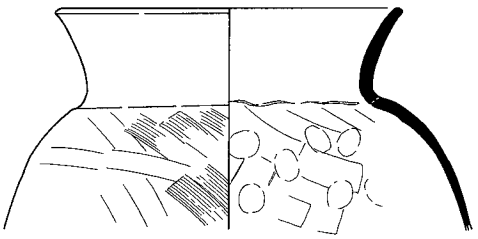


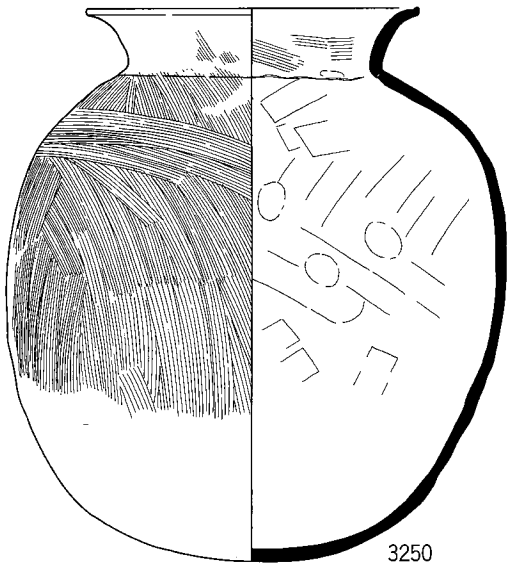
6区SD72001(3241～3244)　7区SD72007(3221～3243)

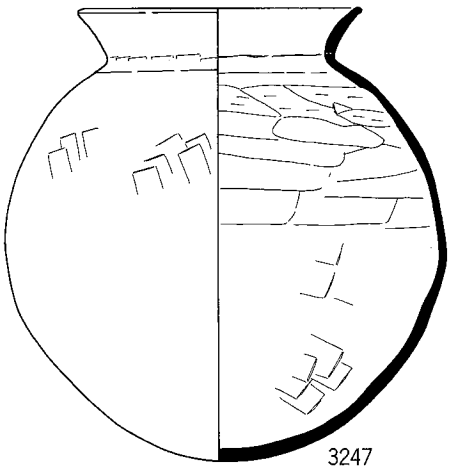
古墳時代中期の土器35　西ケ市6・7区出土

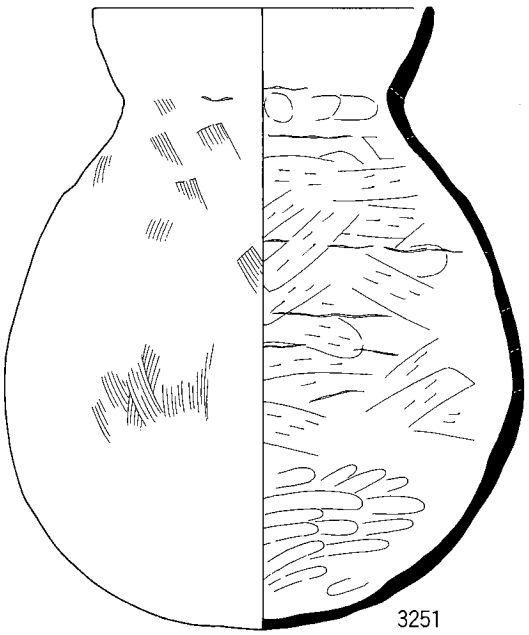

3245

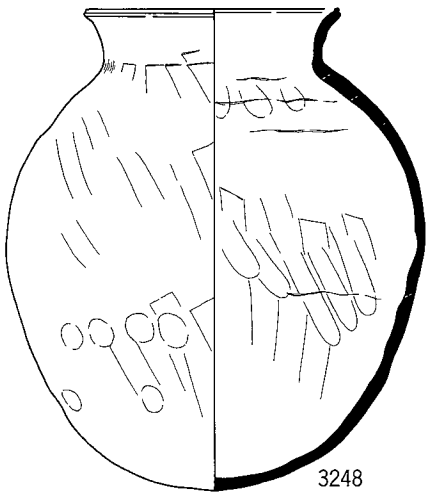

3249

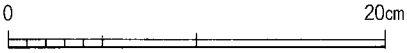

3246


3250


3247

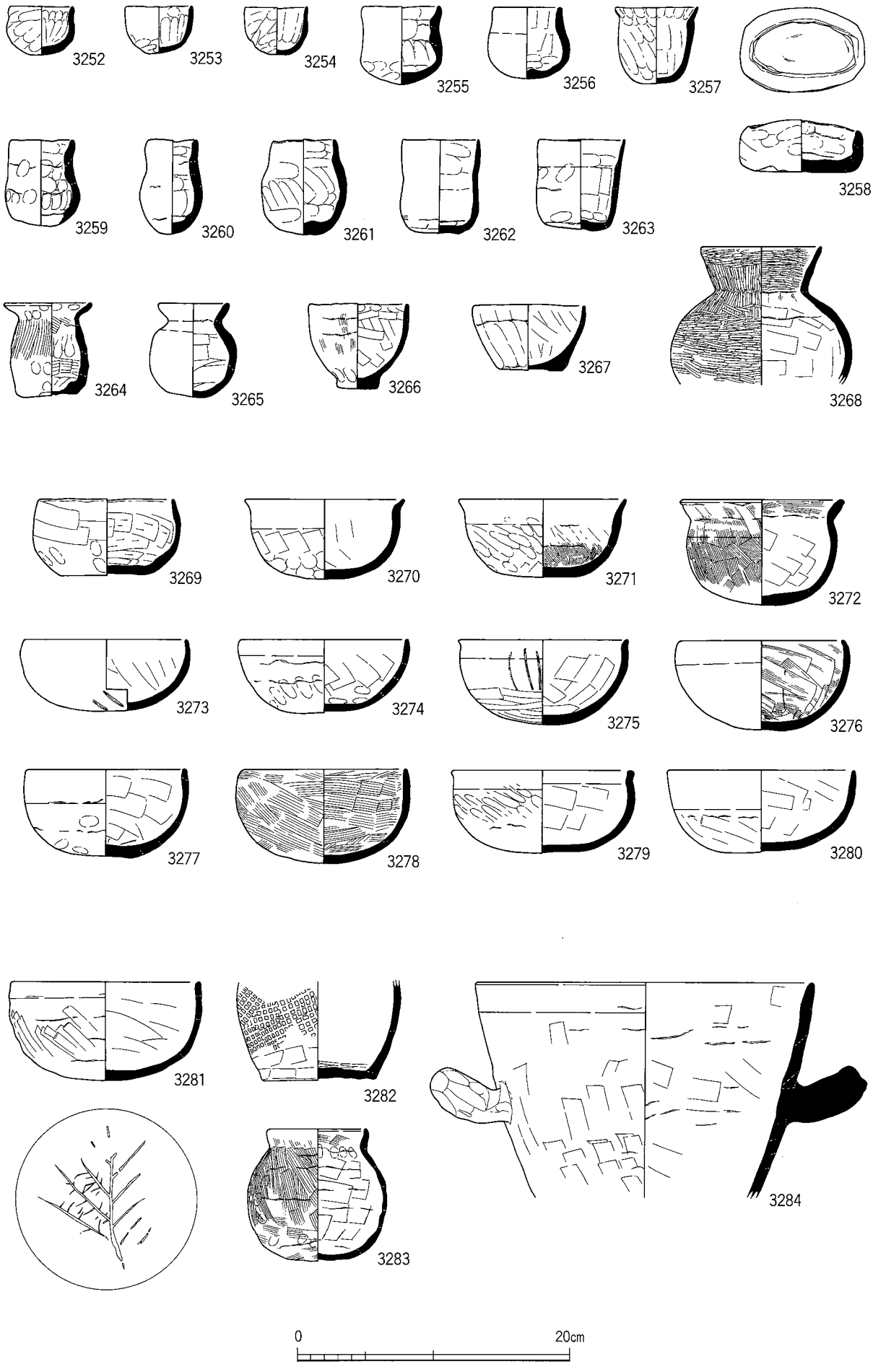

3251


3248



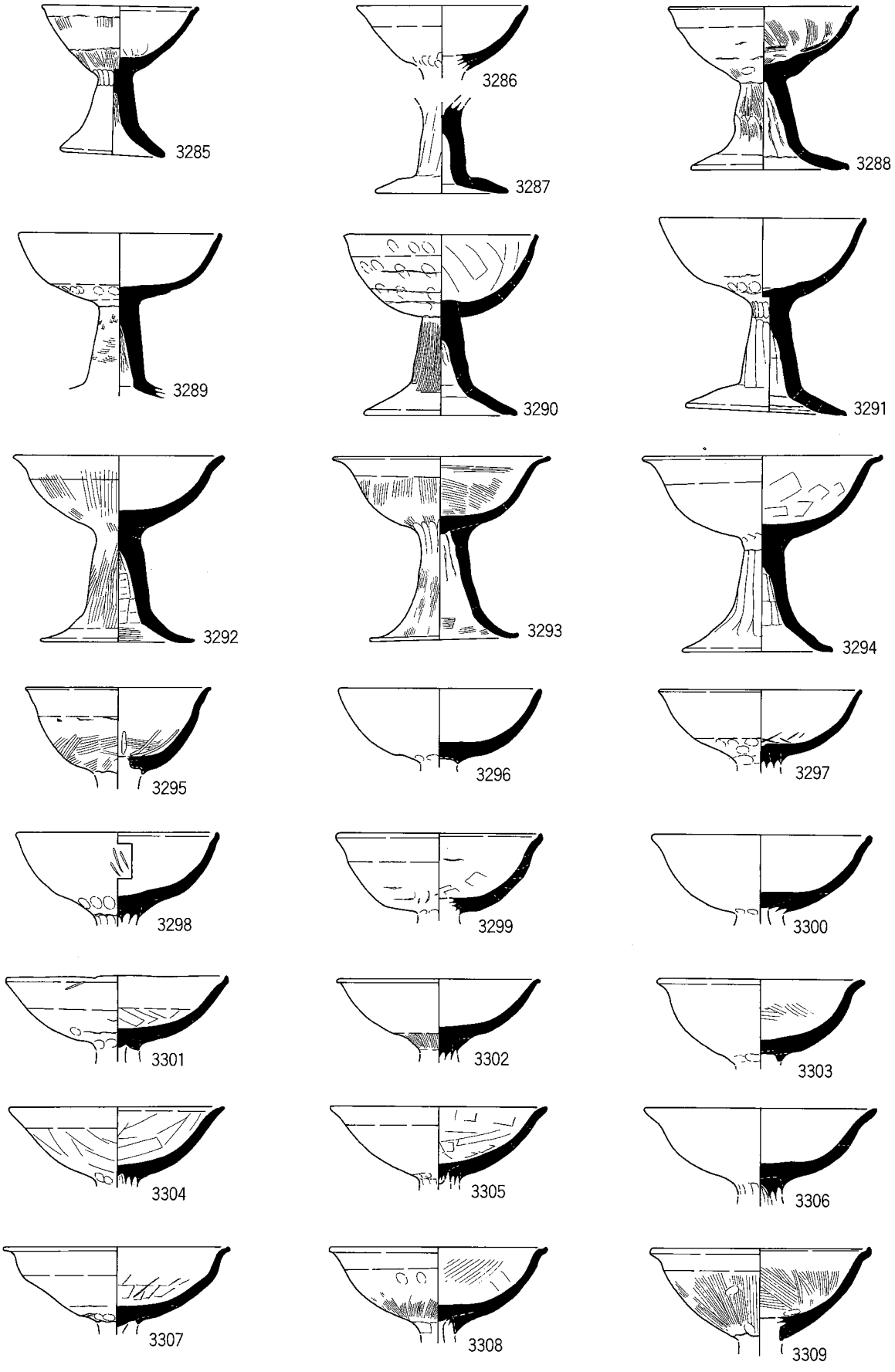
6区SD72001(3246・3248)　7区SD72007(3245・3247・3249～3251)

古墳時代中期の土器36　西ケ市地区KM７区SD72007出土

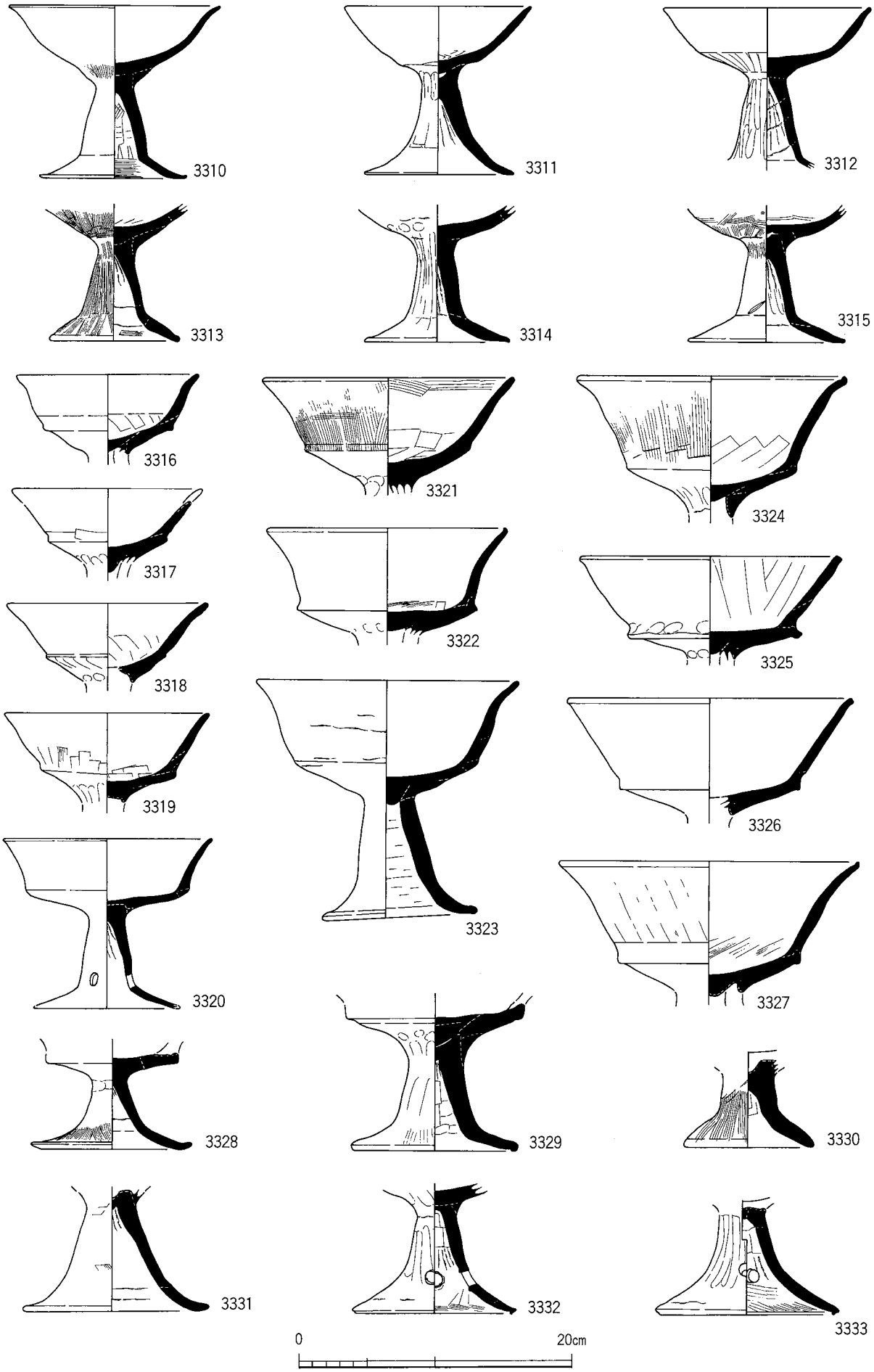


図版126
3285～3309

古墳時代中期の土器37　西ケ市地区KM 7 区SD72007出土

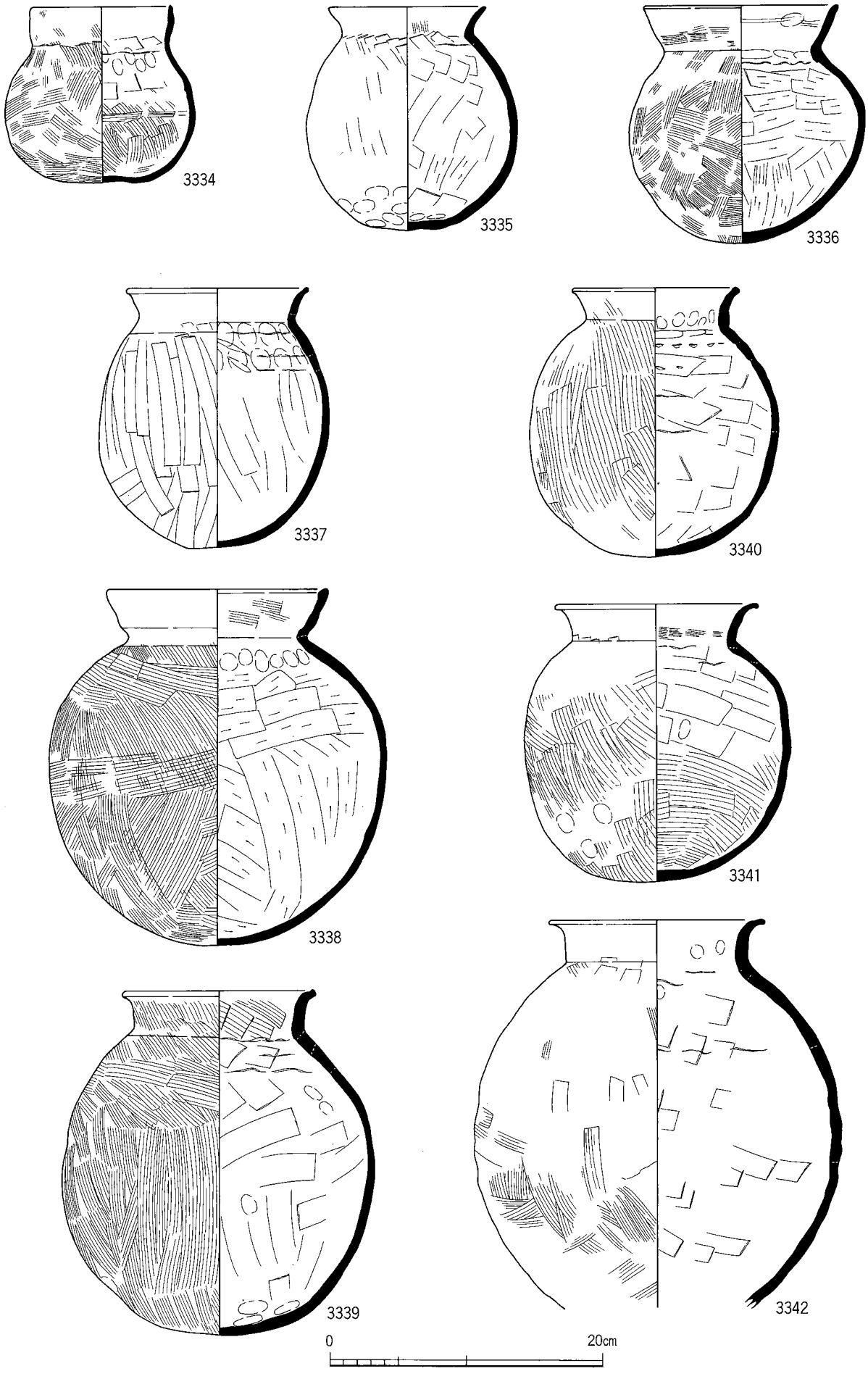


古墳時代中期の土器38　西ケ市地区KM７区SD72007出土

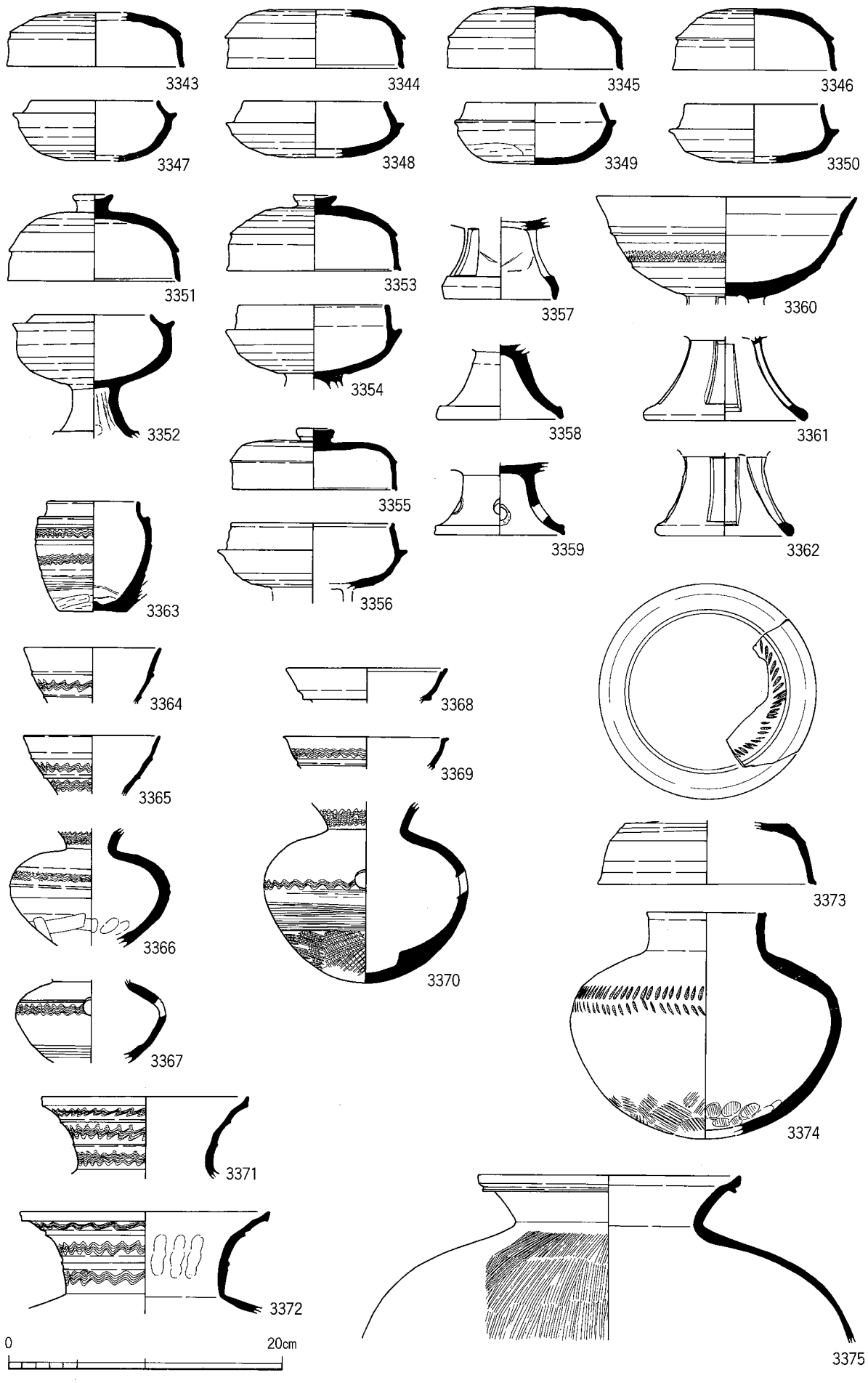


図版128
3334～3342

古墳時代中期の土器39　西ケ市地区KM 7 区SD72007出土

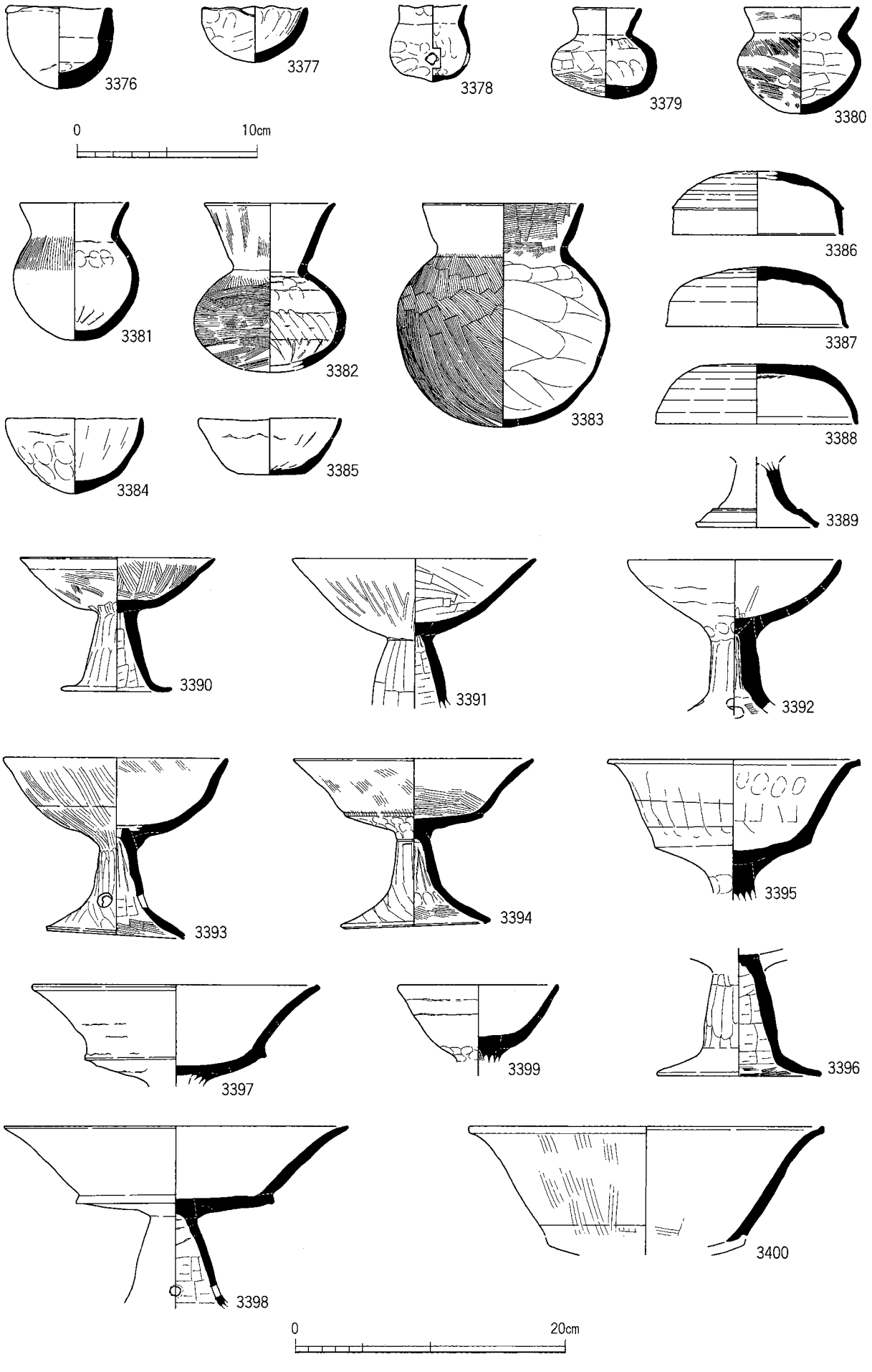


古墳時代中期の土器40　西ケ市地区KM７区SD72007出土

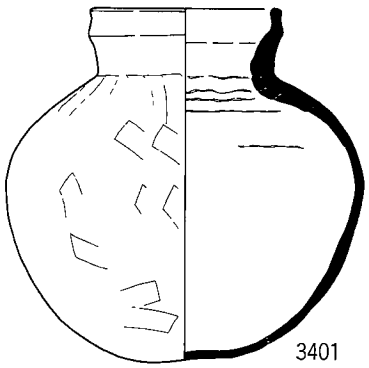


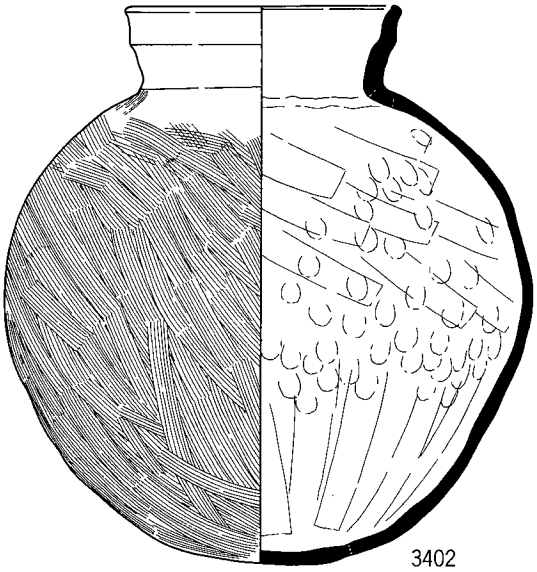
図版130
3376～3400

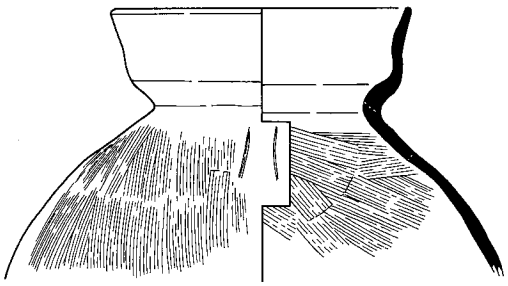
古墳時代中期の土器41　池ノ内1区SR72001出土

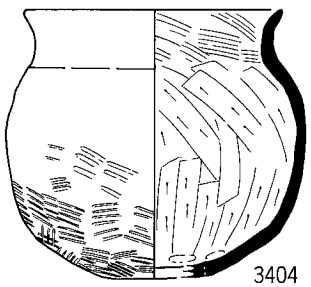


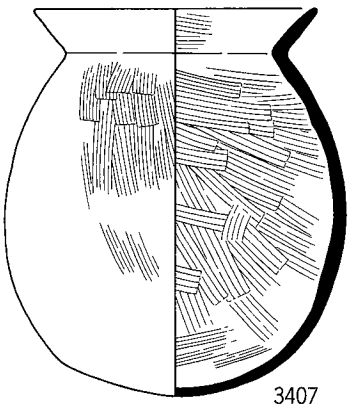
古墳時代中期の土器42　池ノ内1区SR72001出土

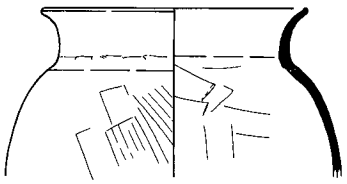

3401

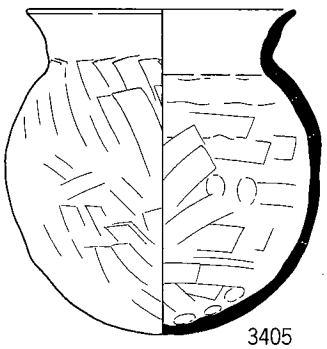

3402

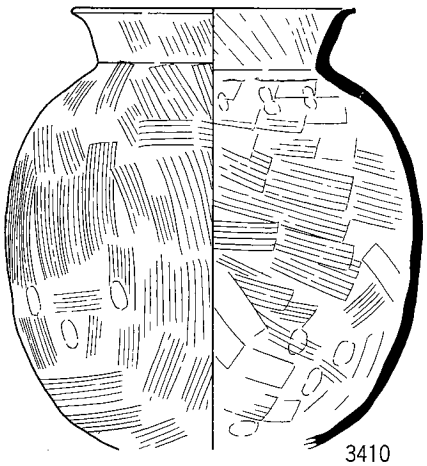

3403

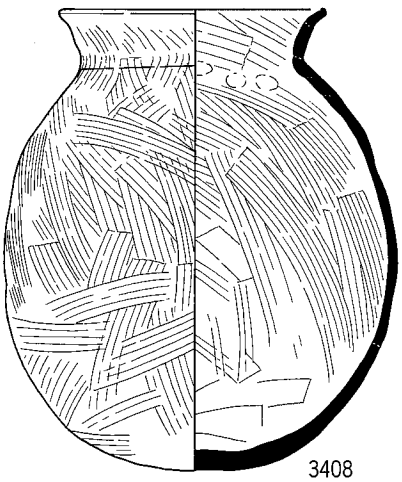

3404

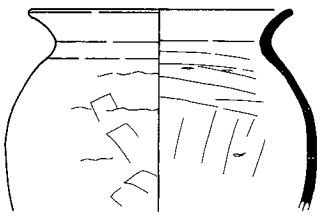

3407

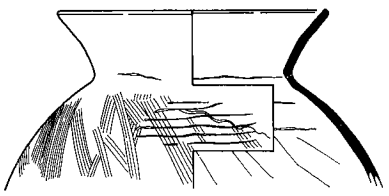

3409

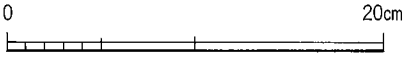

3405


3410


3408

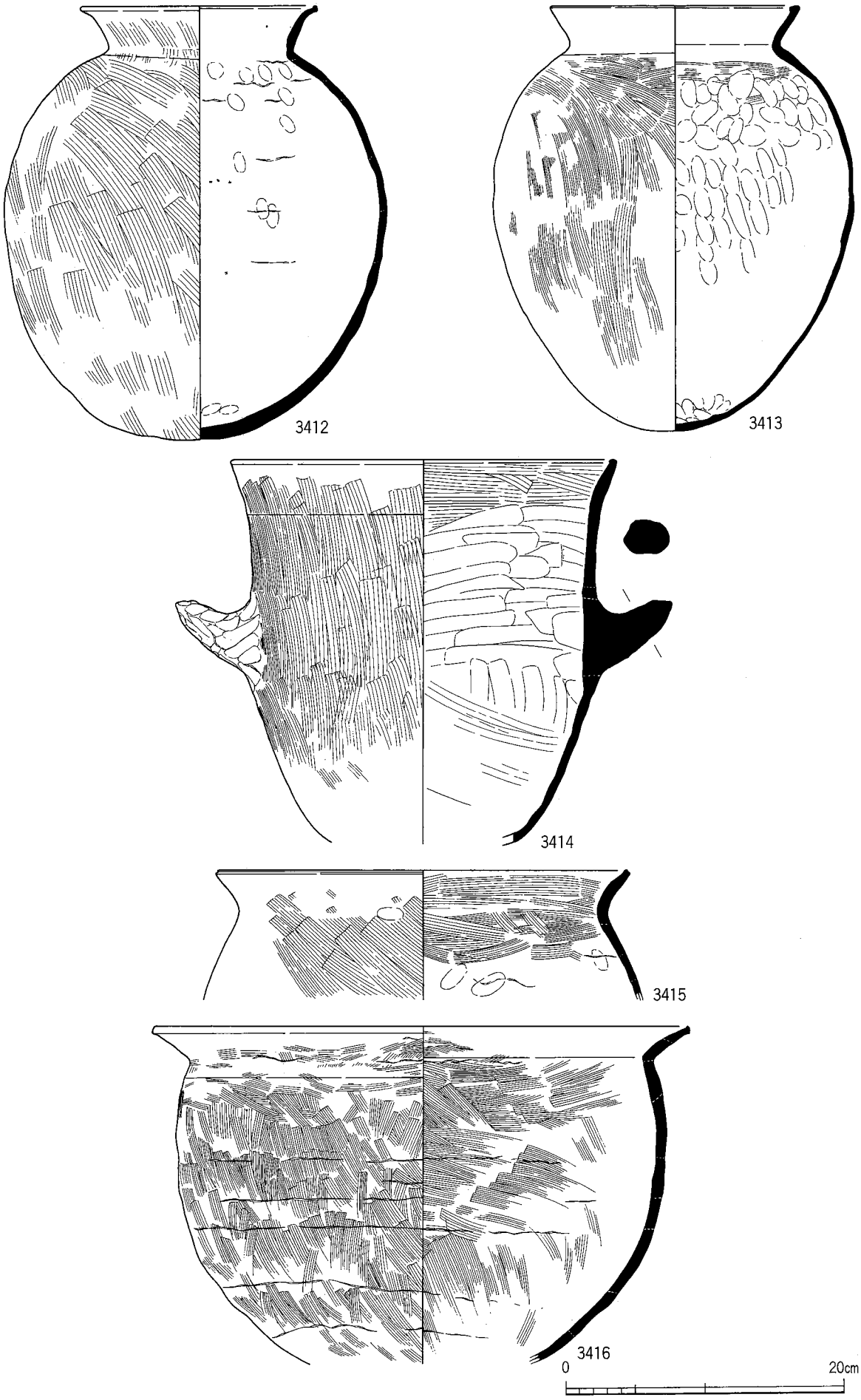

3406


3411

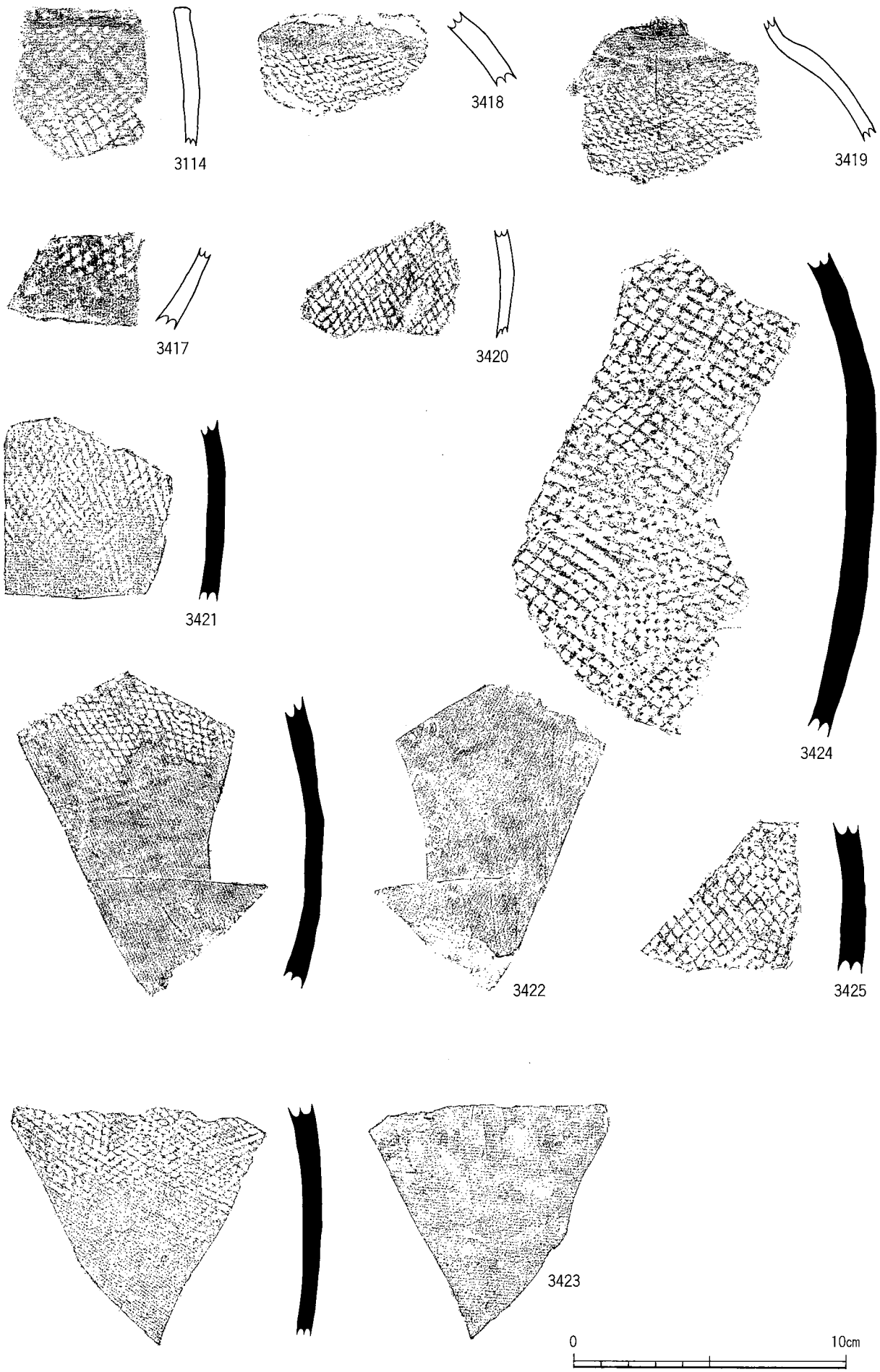


図版132
3412～3416

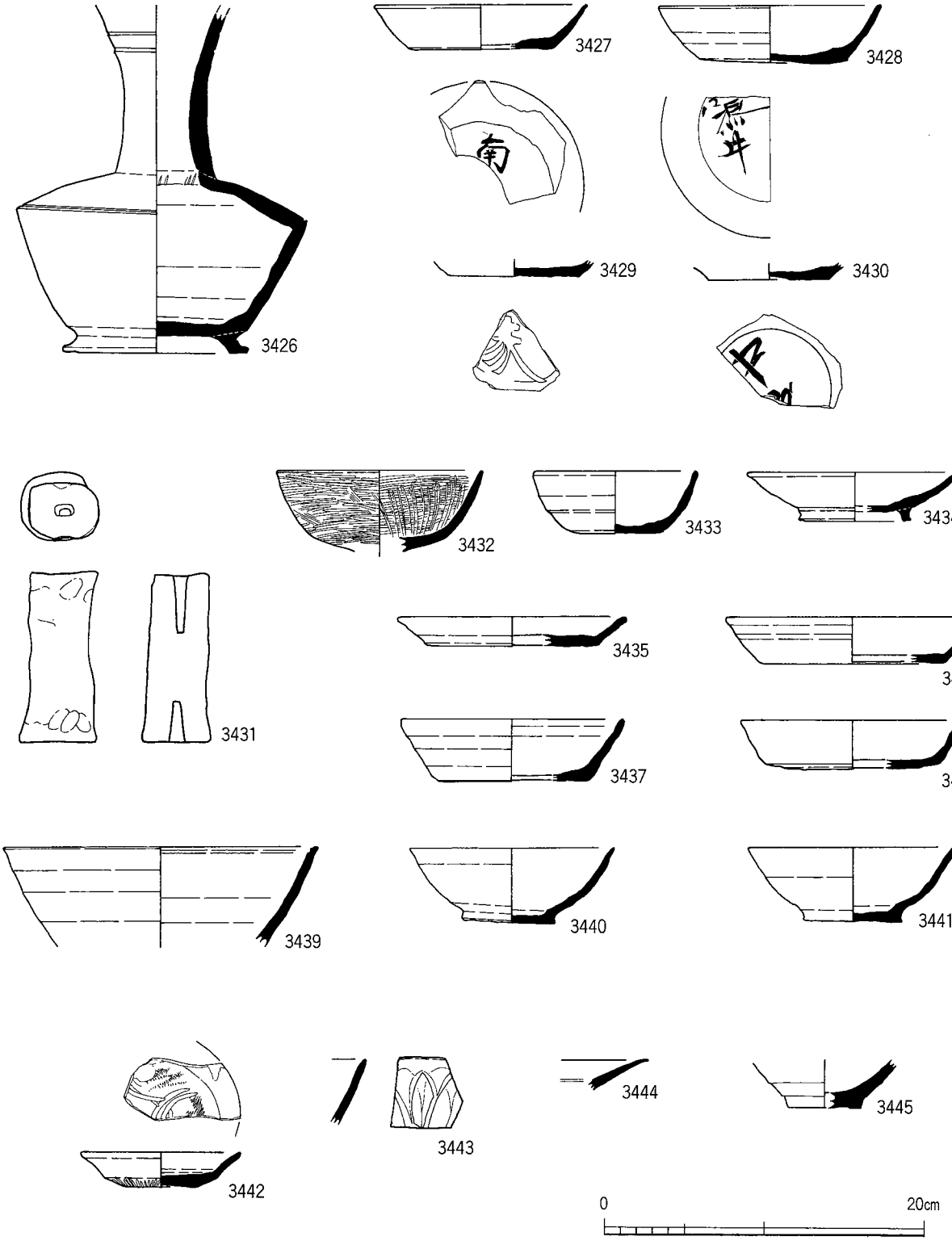
古墳時代中期の土器43　池ノ内１区SR72001出土



古墳時代中期の土器44　韓式土器

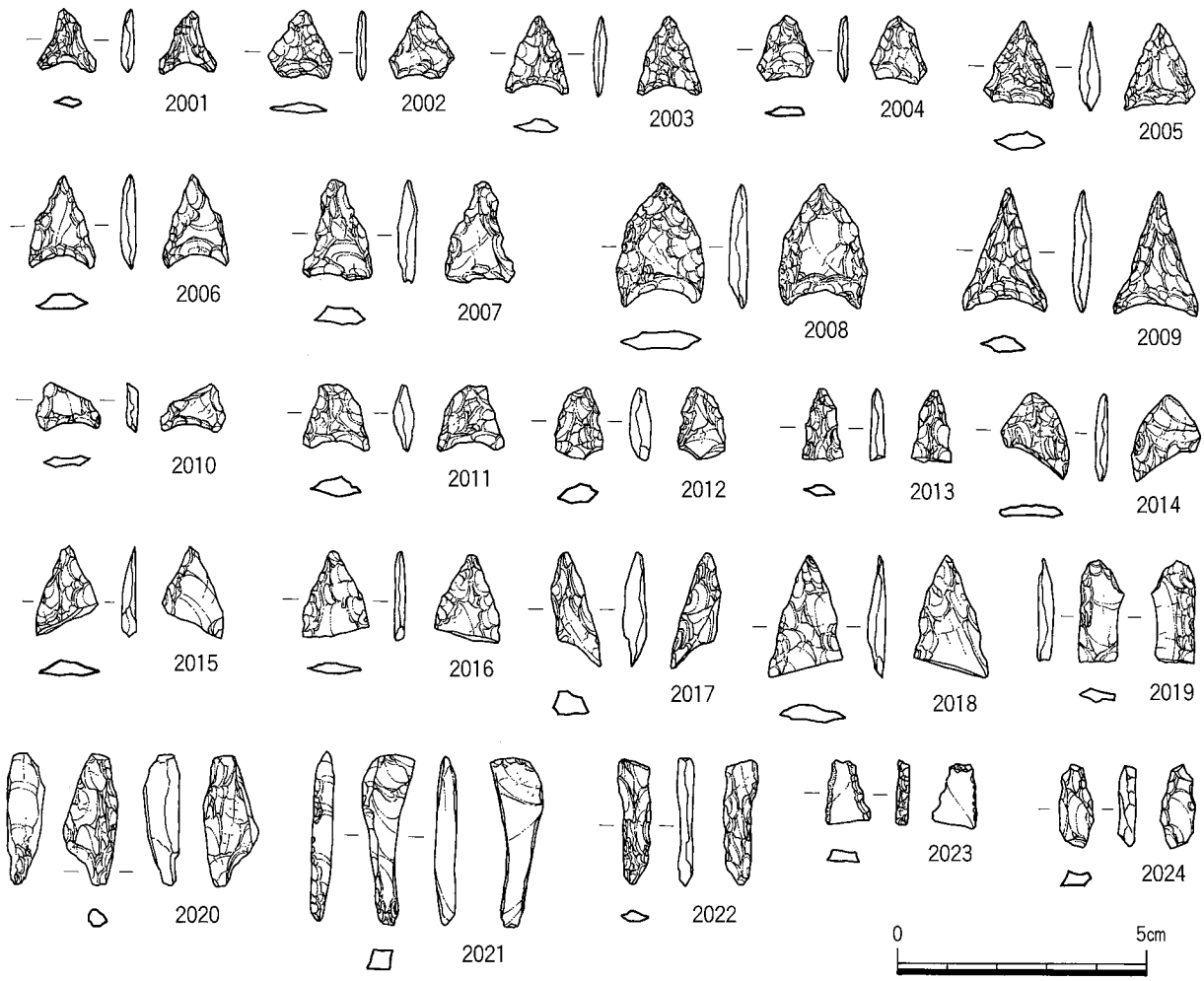


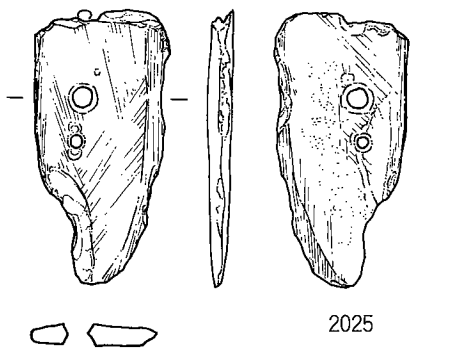
亀ノ郷８区SD72001(3114・3421・3422)　７区(3424)
西ケ市６区SD72008(3419)　KM７区SD72007(3417)
包含層　亀ノ郷地区KM１区(3418・3423)　西ケ市２区(3420・3425)

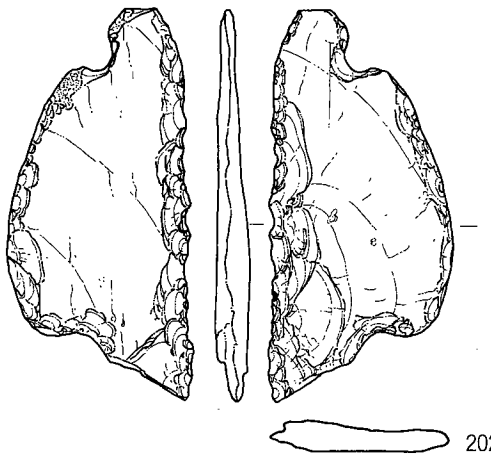


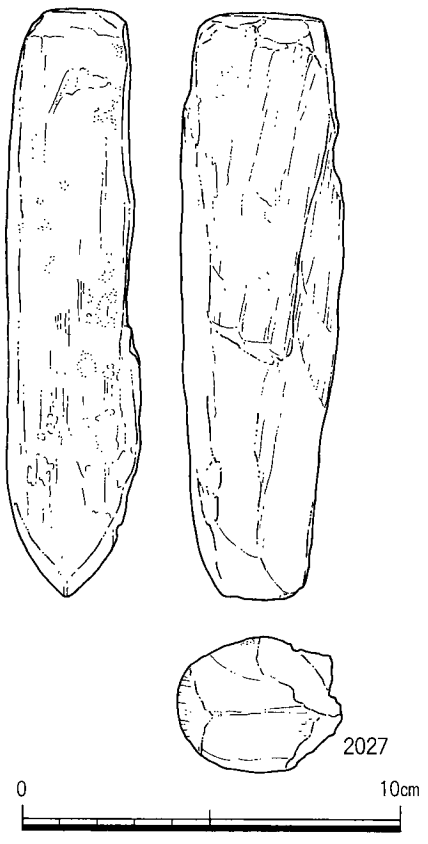
黒岡１区包含層(3434)　亀ノ郷２区SK82002(3440･3441)　包含層２区(3437･3443)　８区(3438)
下町４区包含層(3435)　西ケ市地区包含層２区(3444･3445)　４区(3427～3429･3439)　６区(3436)　７区(3430)
池ノ内９区SR62002(3432)　14区SD82012(3431)　SK82003(3433)　16区SK82004(3426)　包含層15区(3442)

石器1





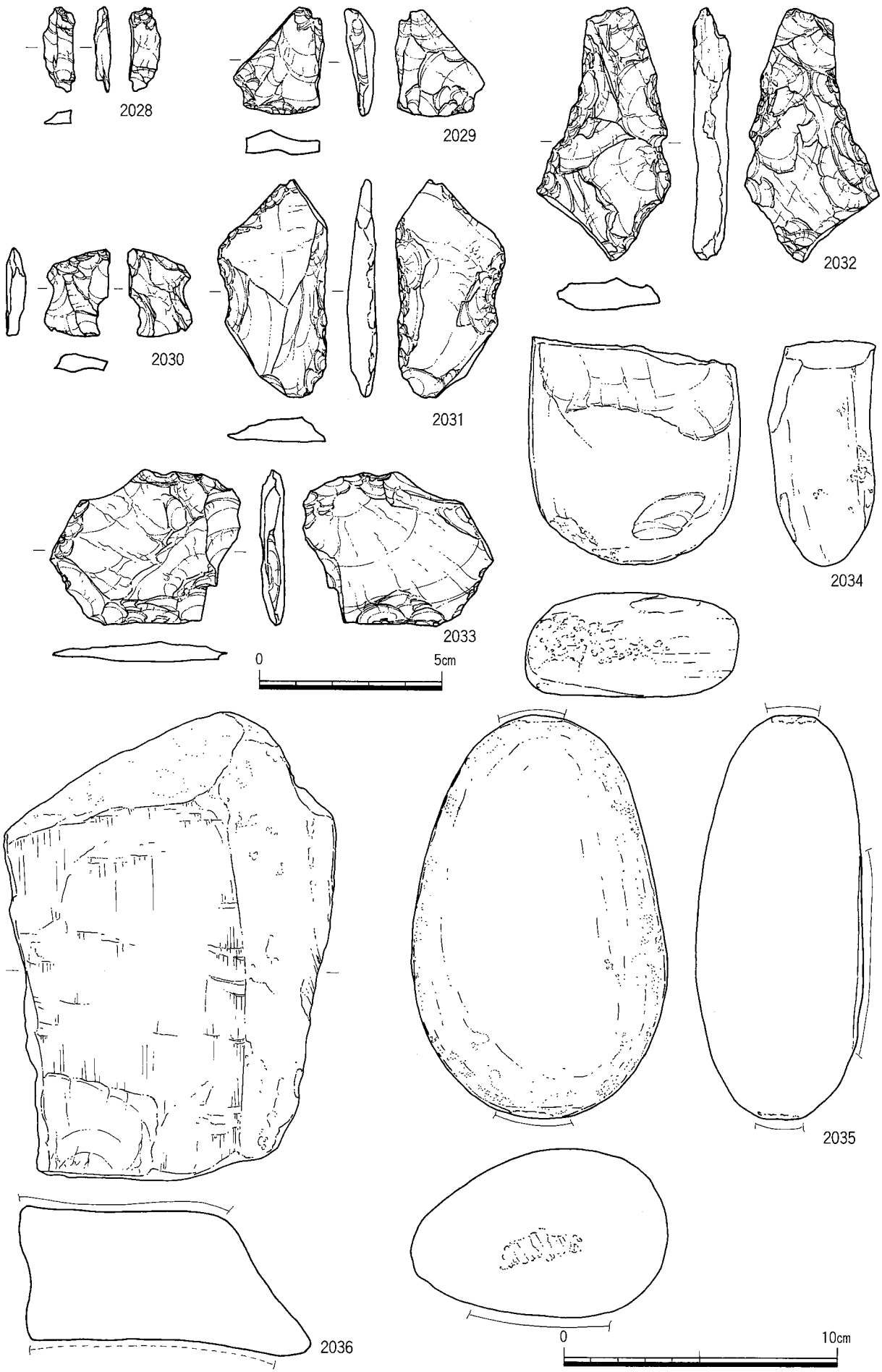




黒岡1区SK22018(2022)　2区ST22003(2026)　亀ノ郷1区SH22005(2008)　SH22006(2027)
D3－2G区SK22025(2002)　D3－2G区SK22030(2003)
D3－2G区SH22004(2001・2004～2006・2009～2017・2019・2020・2023～2025)
下町2区SD22010(2207)　SK22048(2018)　SK22047(2021)

図版136
2028～2036

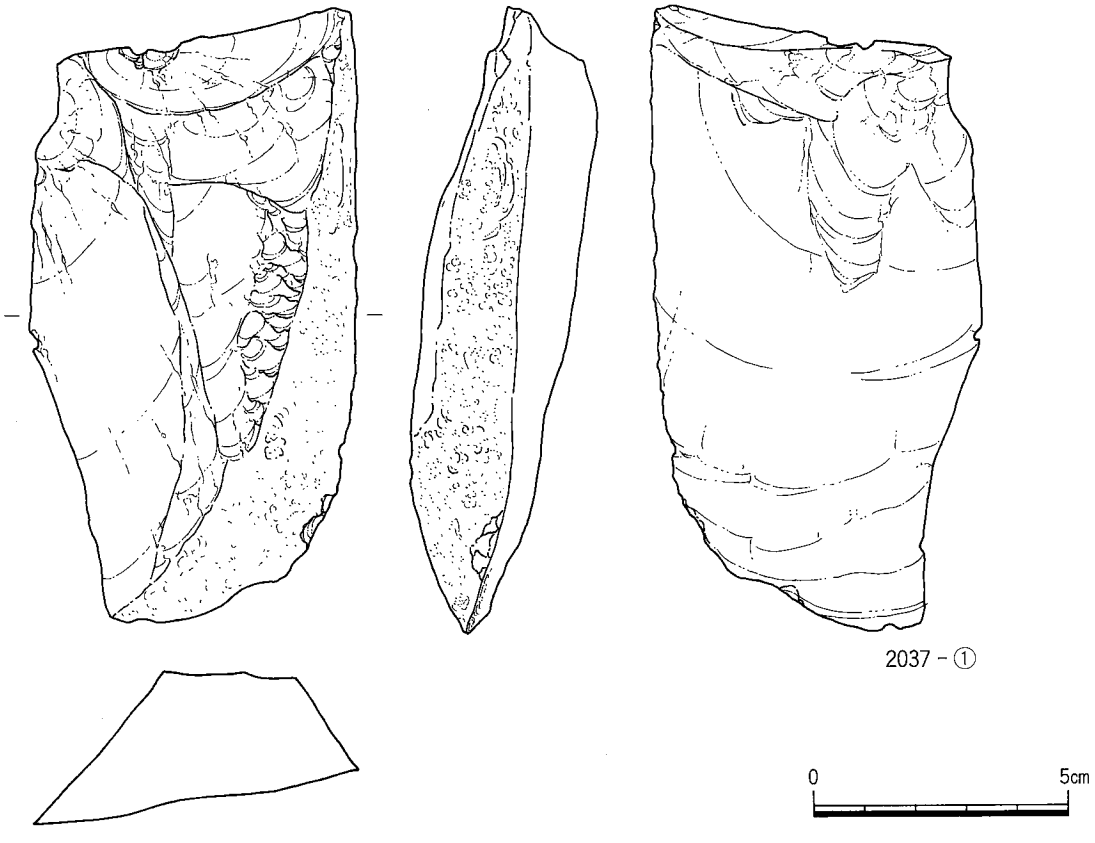
石器 2　黒岡地区出土



1区SH52003(2031・2035)　SK22001(2033)　SK22020(2034)　SH52001(2036)
2区SK22008(2028)　ST22003(2029)　SK22001付近(2030)　SK22049(2032)

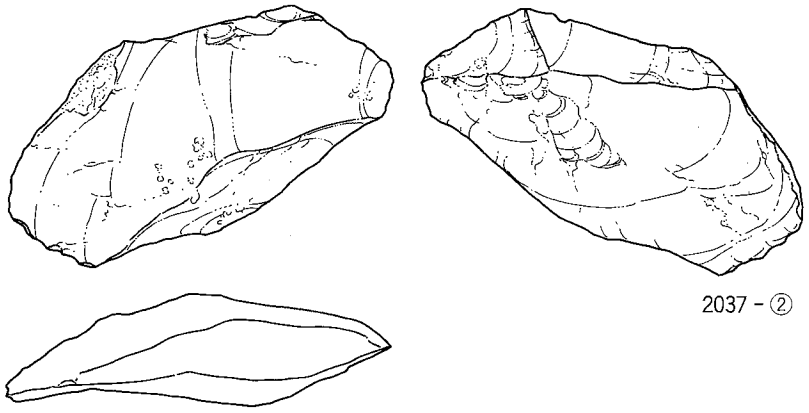
石器３　池ノ内14区SK22045出土

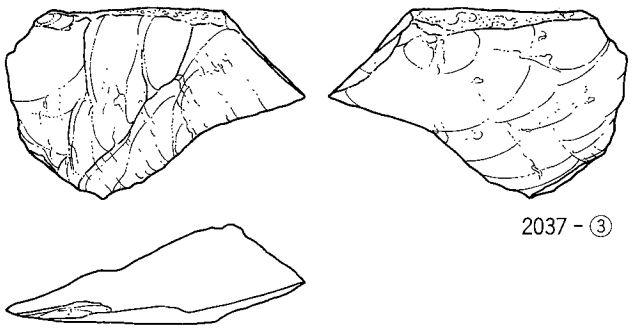
2037

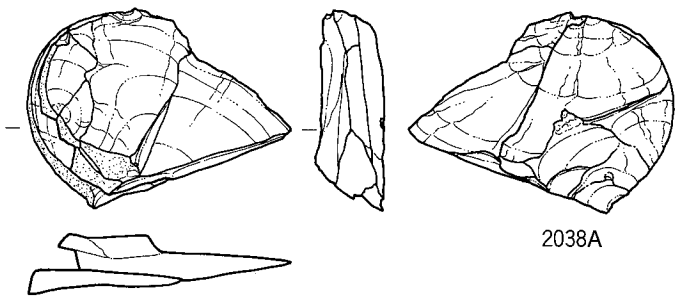


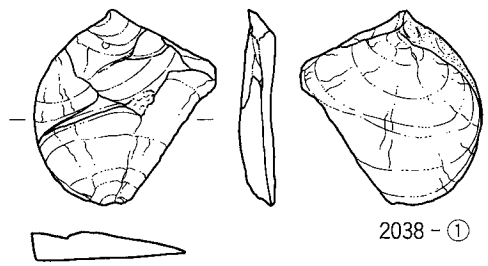
2037－①

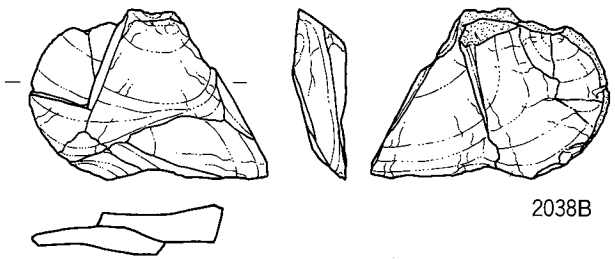
石器 4　池ノ内14区SK22045出土

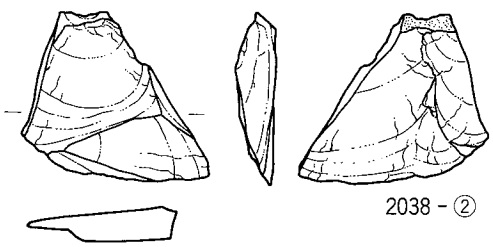


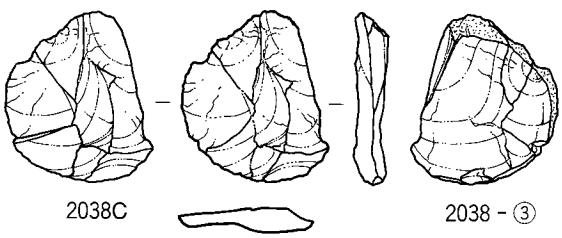


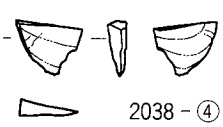


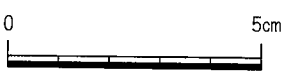




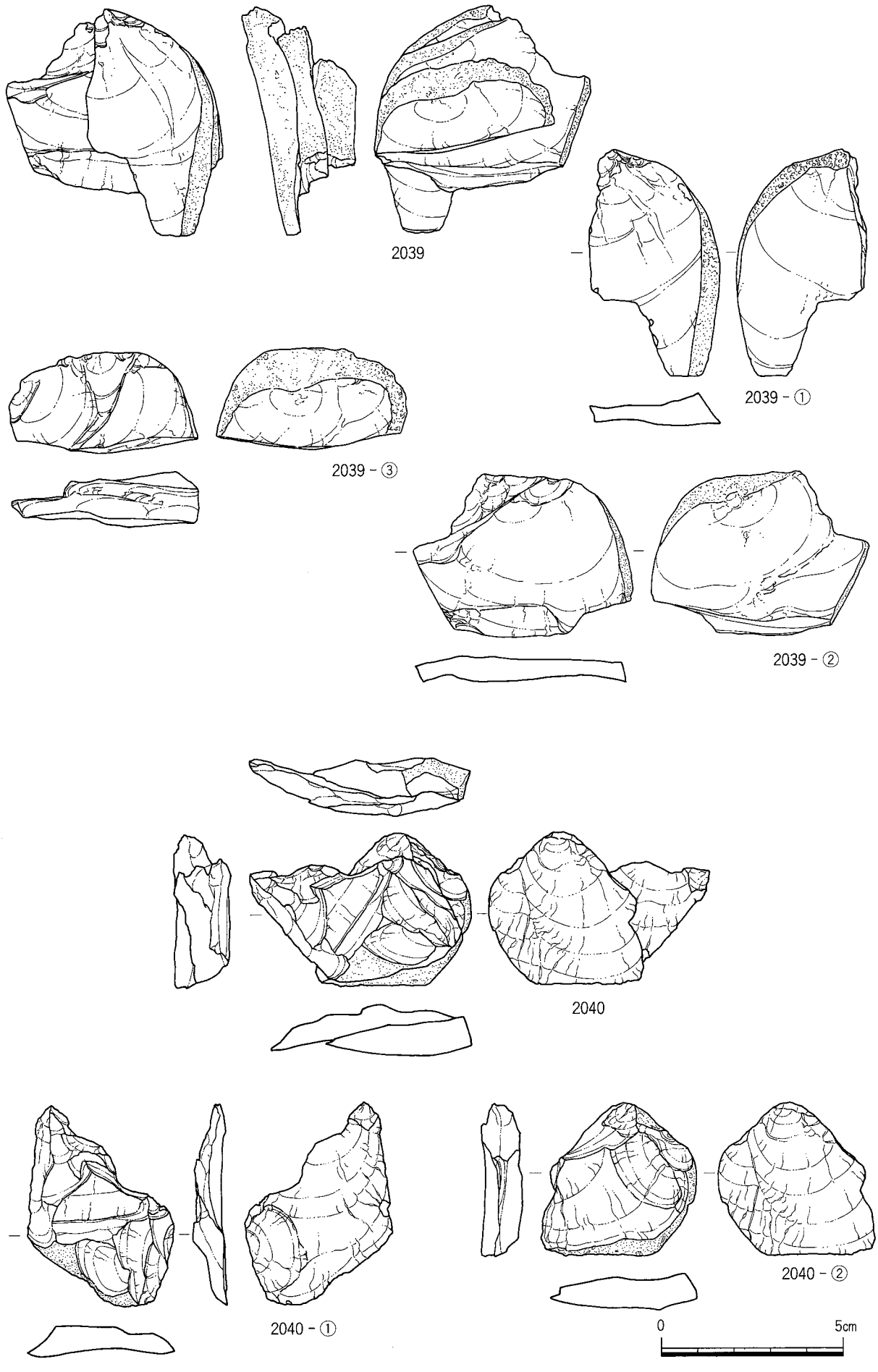






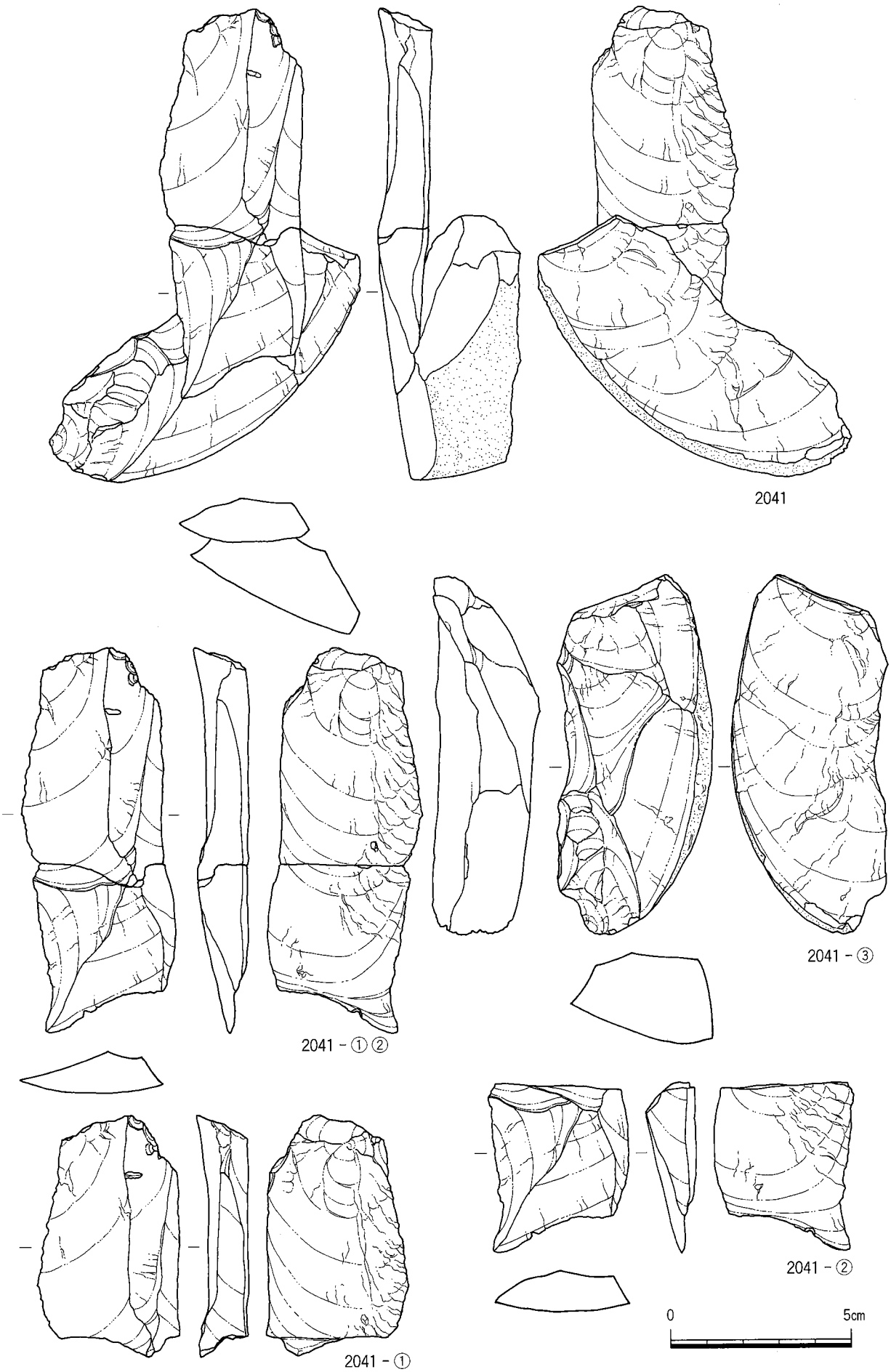


石器５　池ノ内14区SK22045出土

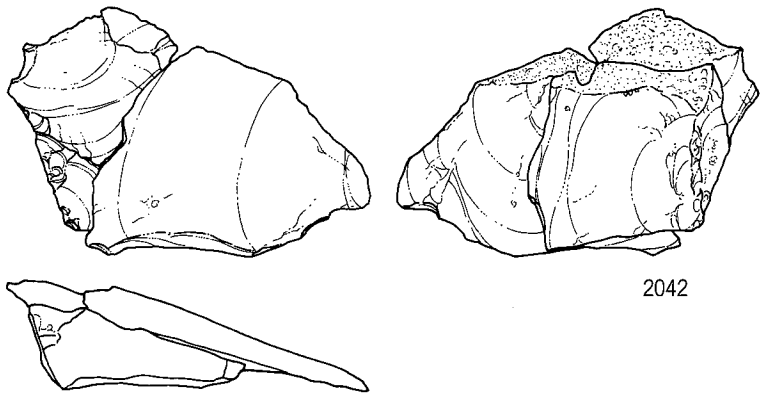


図版140
2041

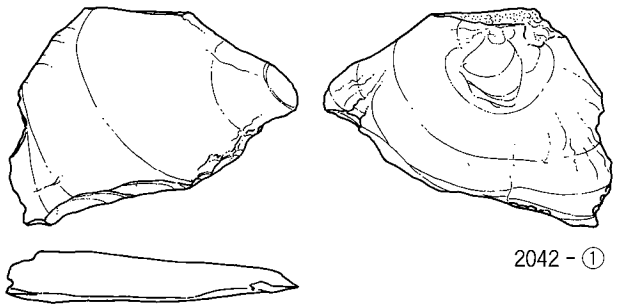
石器 6　池ノ内14区SK22045出土



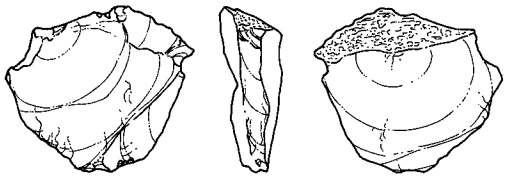
石器７　池ノ内14区SK22045出土



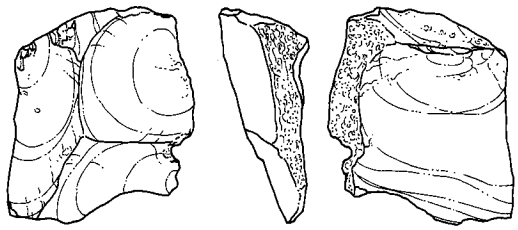
2042



2042－①



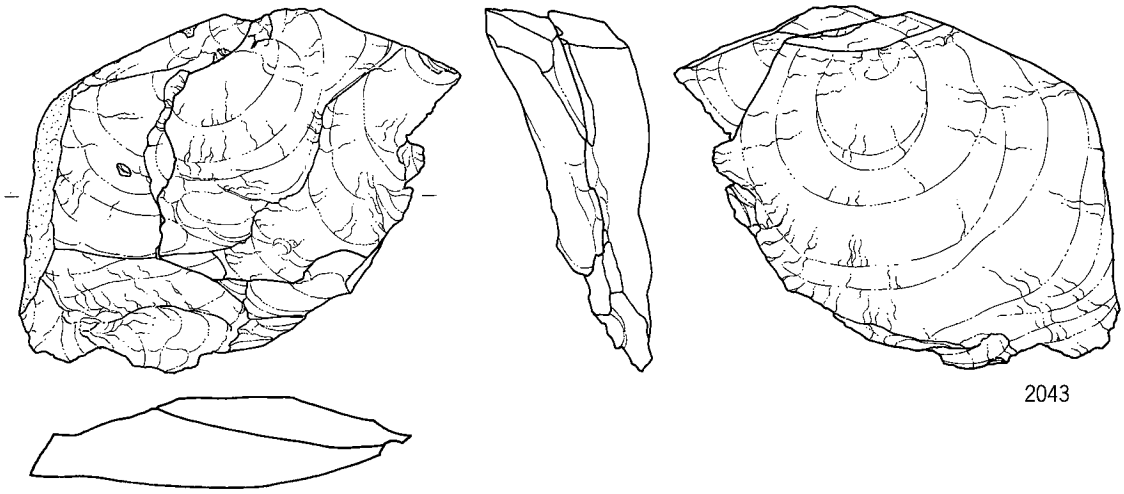
2042－②



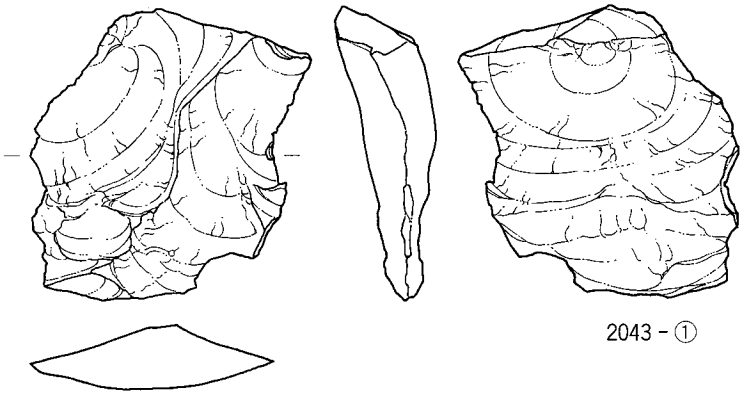
2042－③

0　5cm

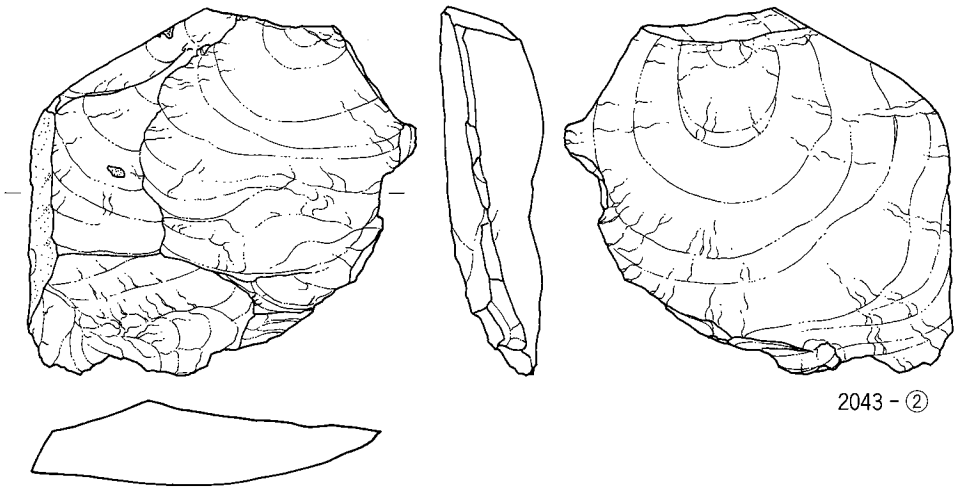
石器 8　池ノ内14区SK22045出土



2043



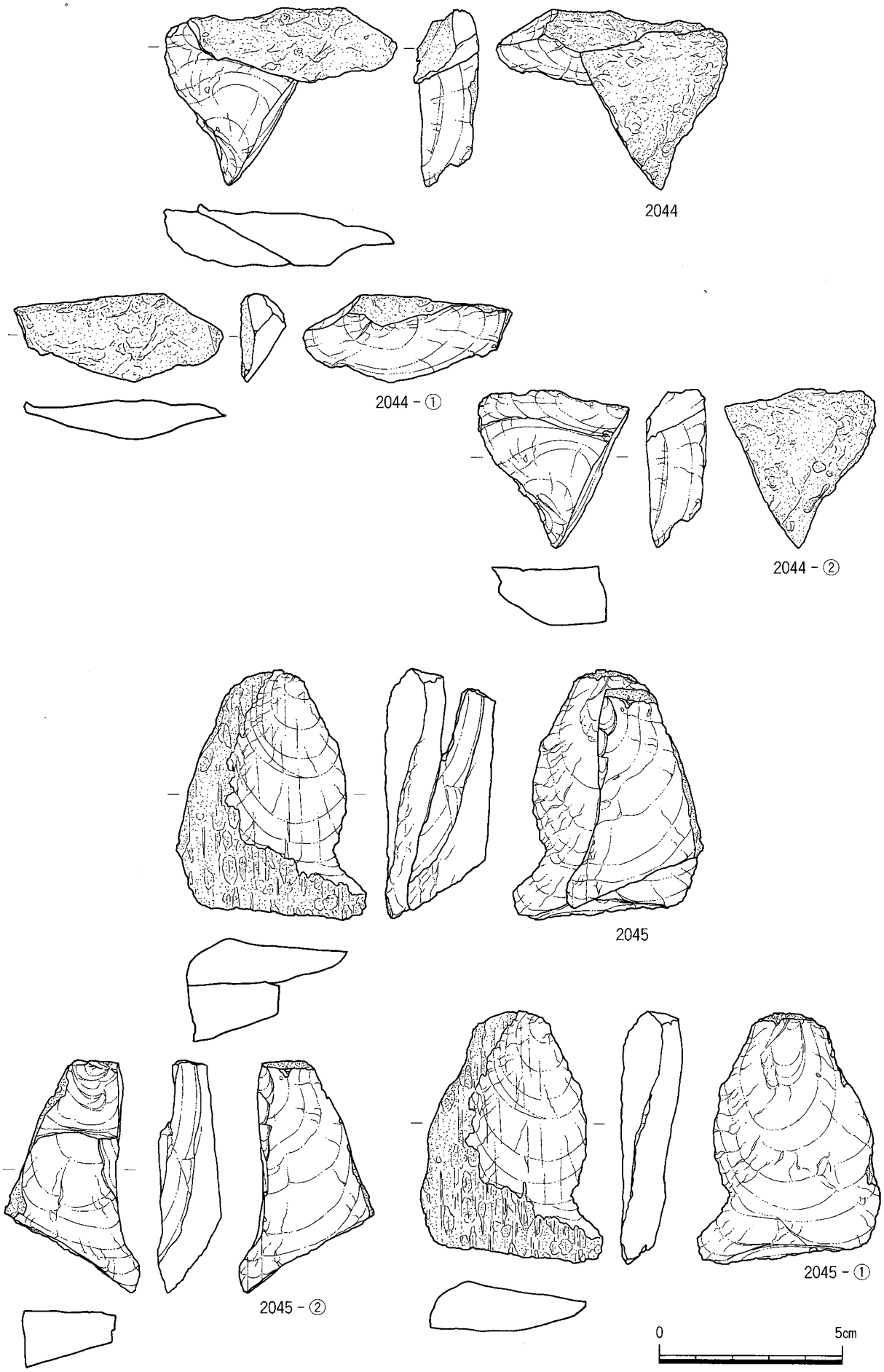
2043 - ①



2043 - ②

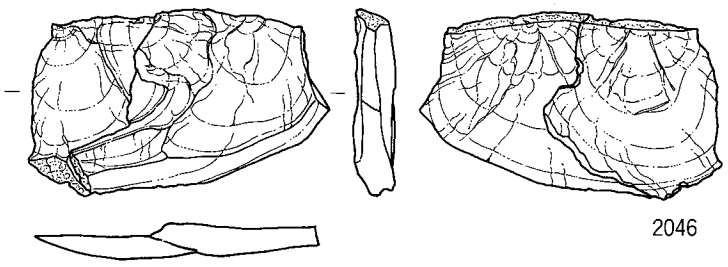
0　5cm

石器 9　池ノ内14区SK22045出土

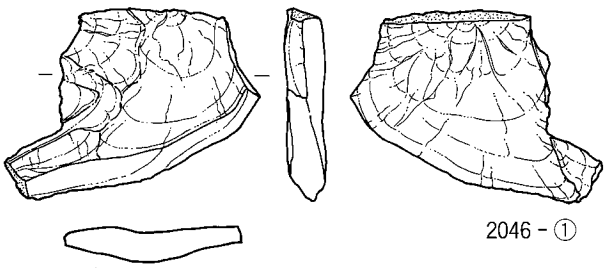


図版144
2046・2047

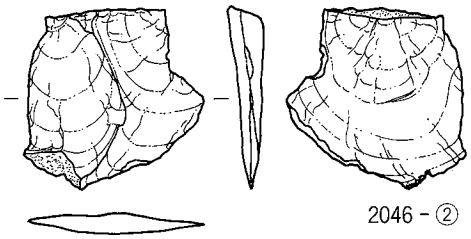
石器10　池ノ内14区SK22045出土



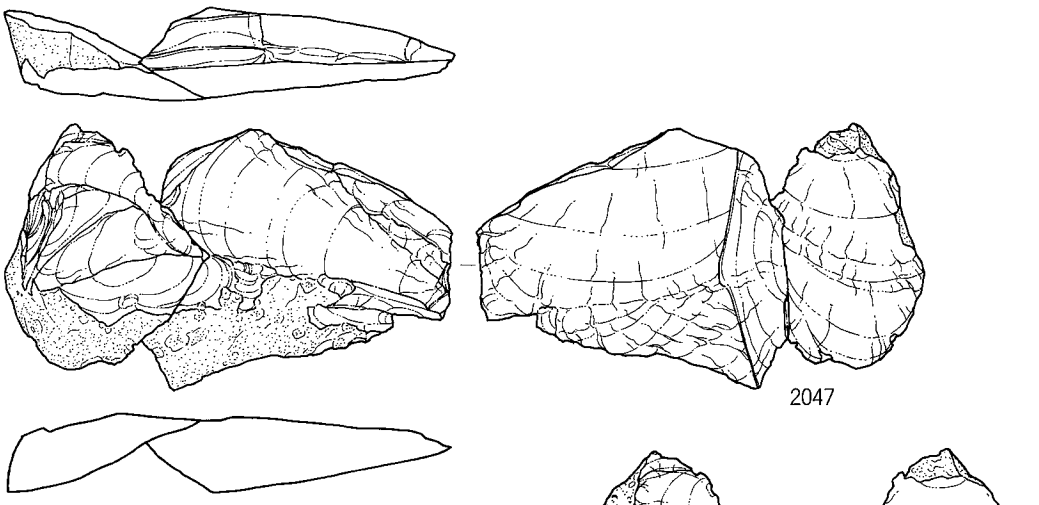
2046



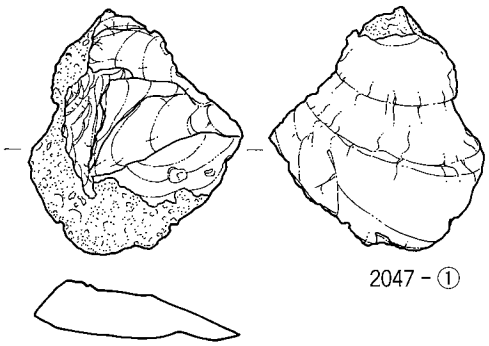
2046－①



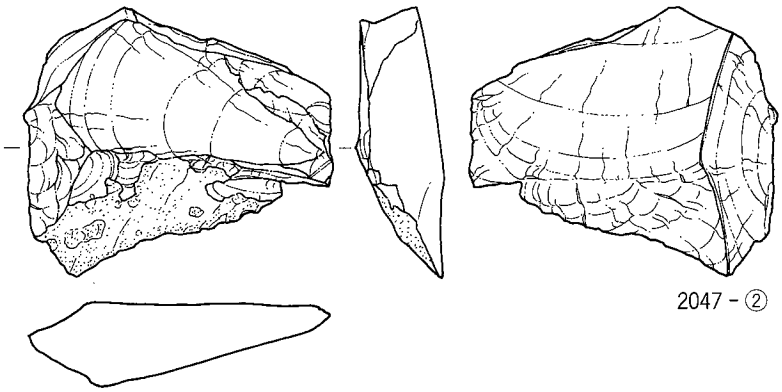
2046－②



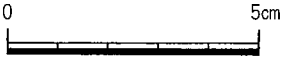
2047



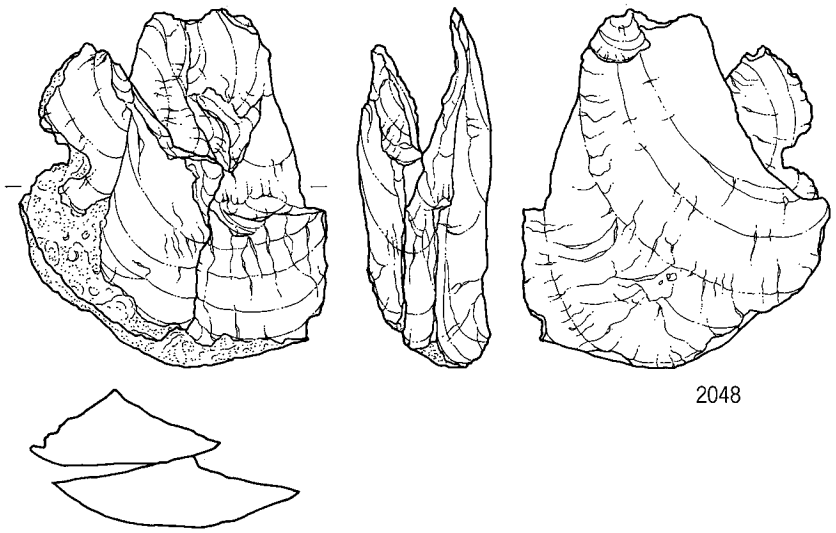
2047－①



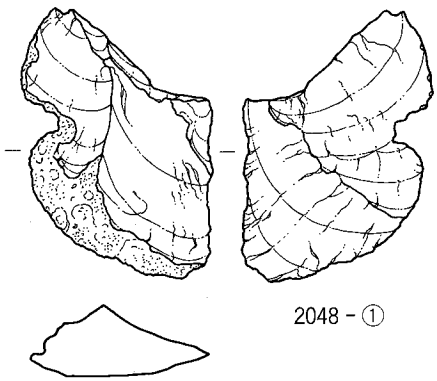
2047－②



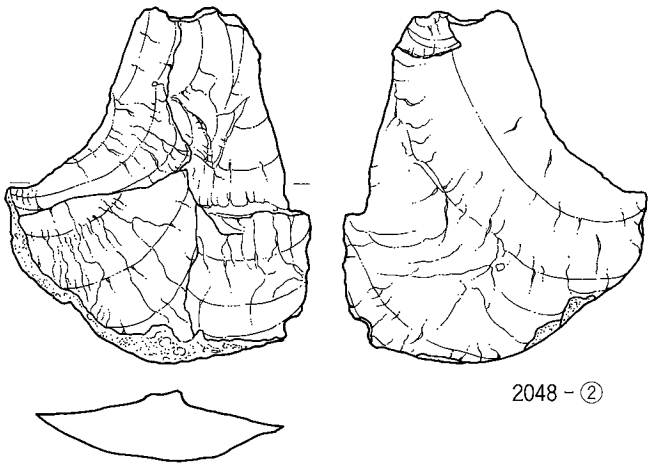
石器11　池ノ内14区SK22045出土



2048



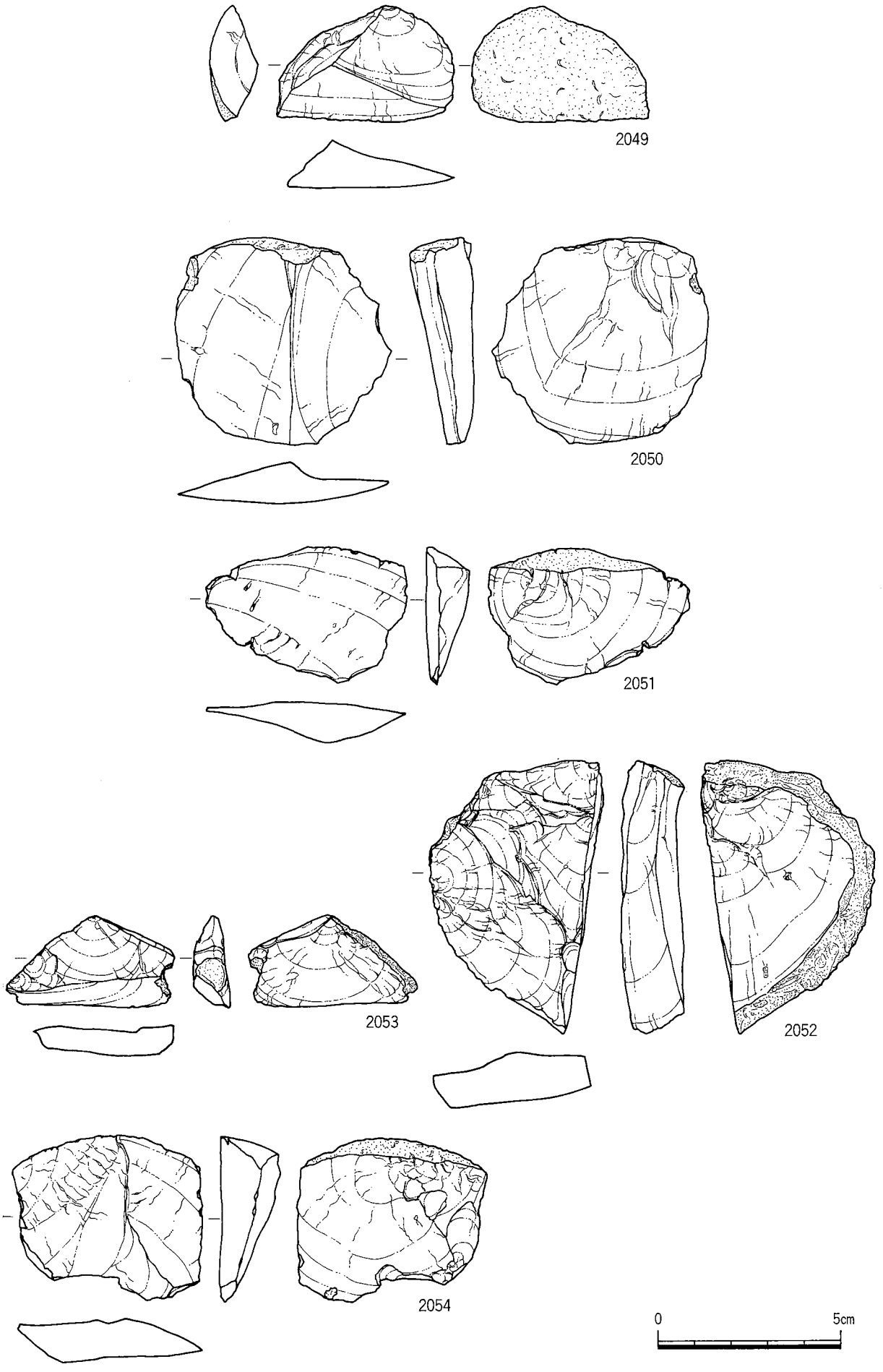
2048－①



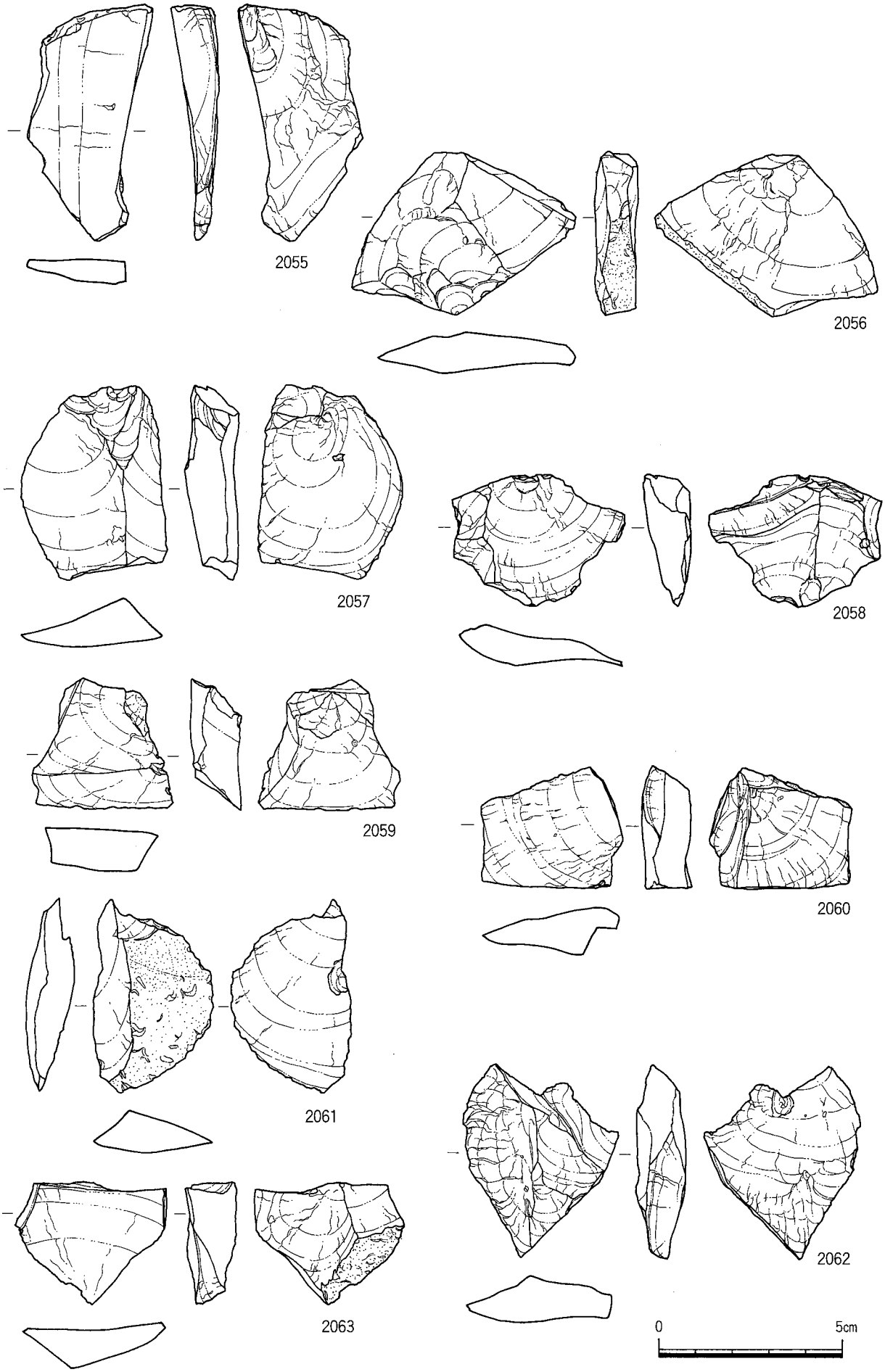
2048－②

図版146
2049～2054

石器12　池ノ内14区SK22045出土

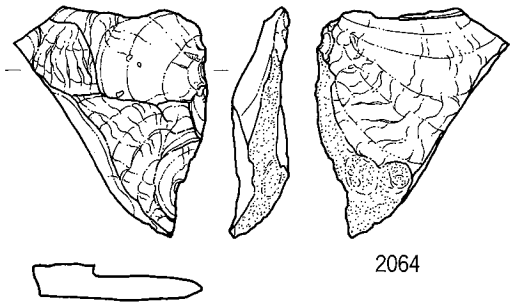


石器13　池ノ内14区SK22045出土

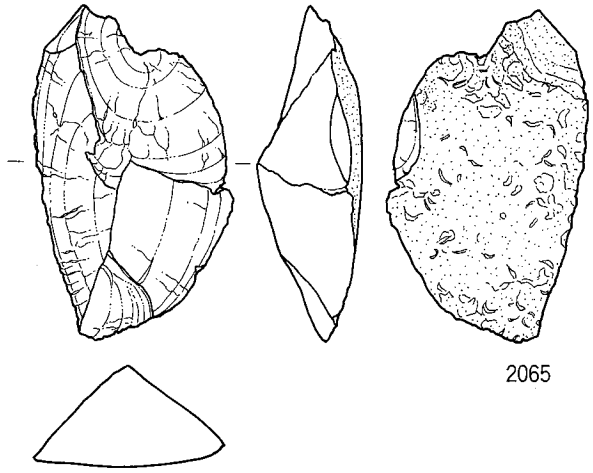


図版148
2064～2067

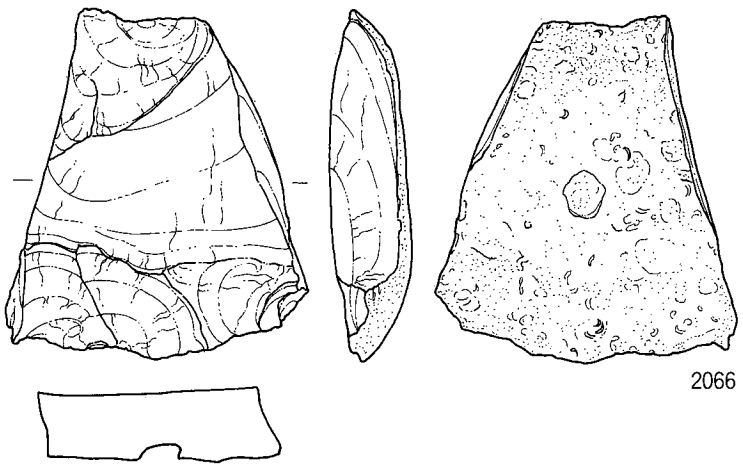
石器14　池ノ内14区SK22045出土



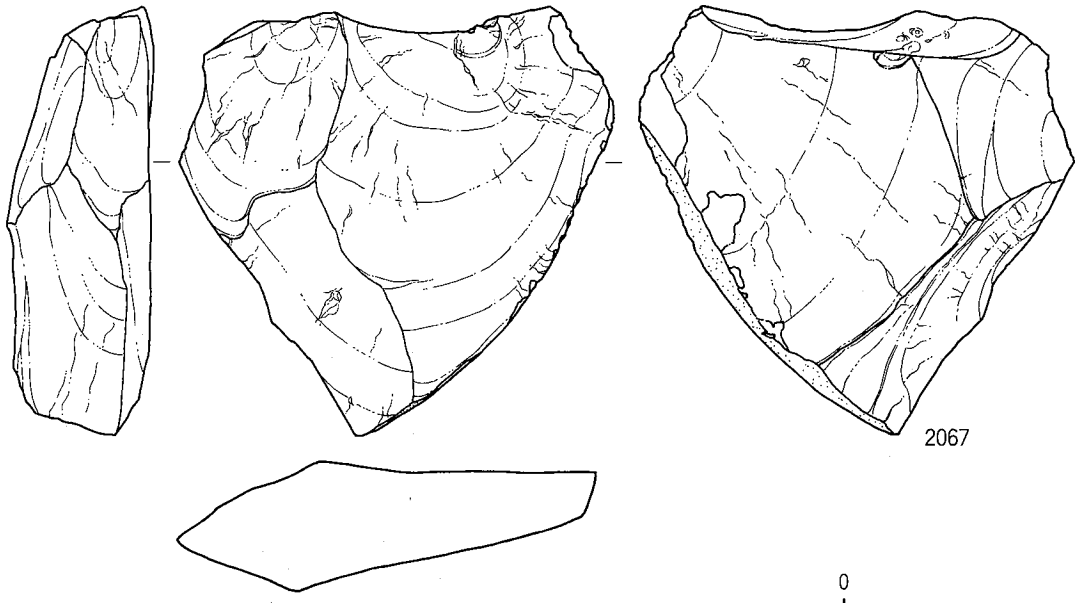
2064



2065



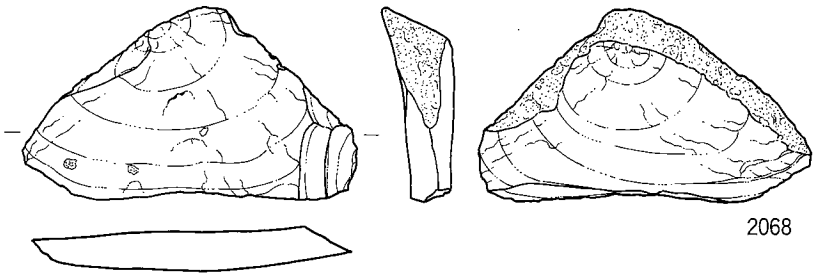
2066

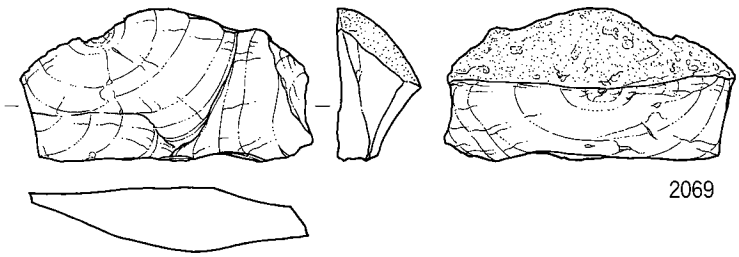


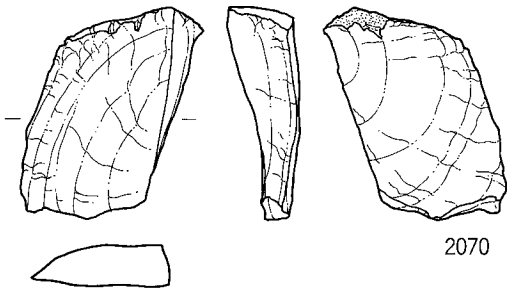
2067

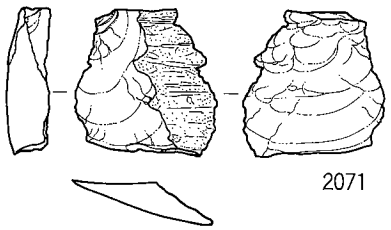
0　5cm

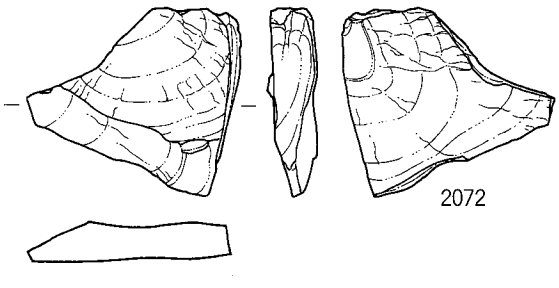
石器15　池ノ内14区SK22045出土

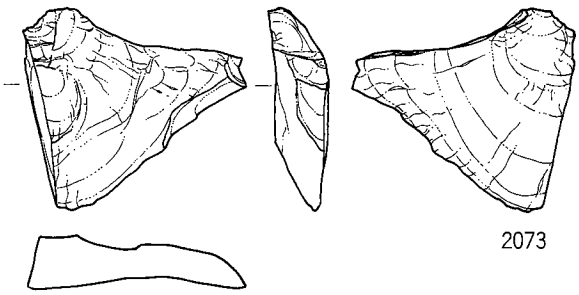


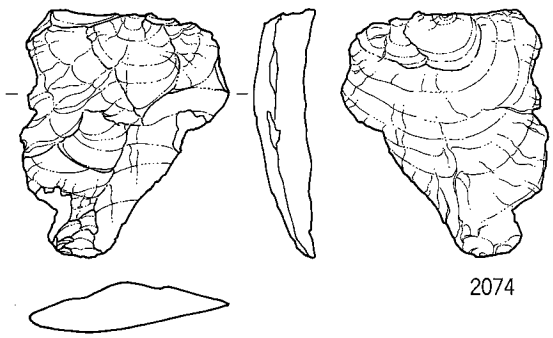


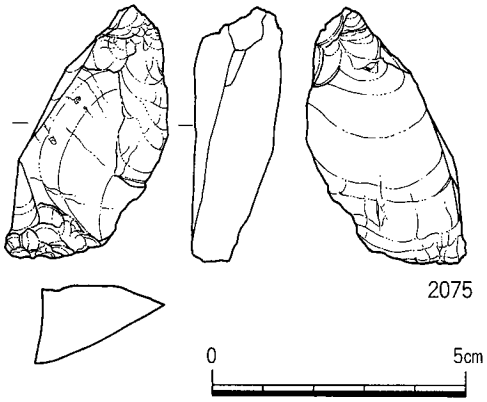






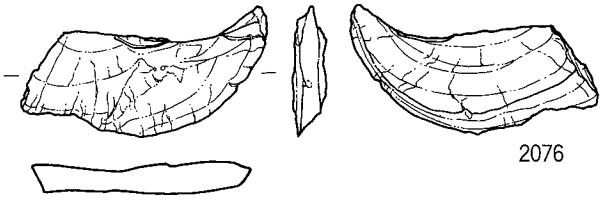


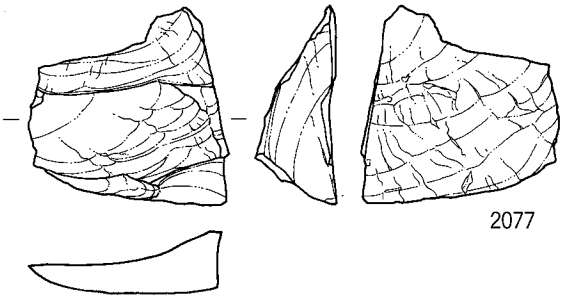


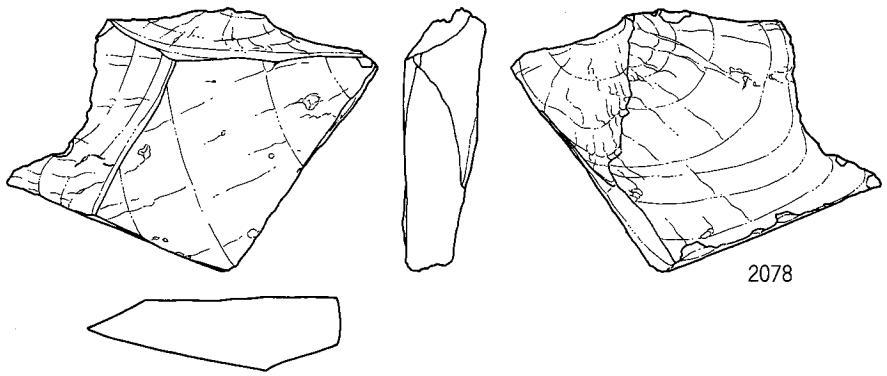


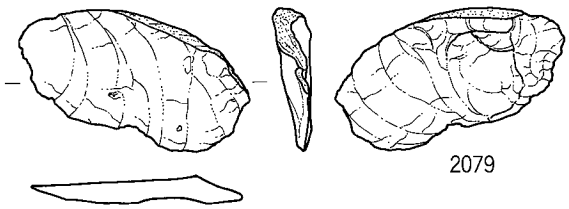
図版150
2076～2082

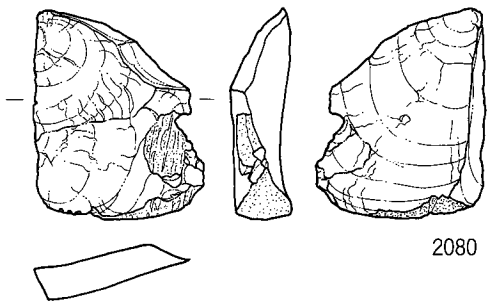
石器16　池ノ内14区SK22045出土

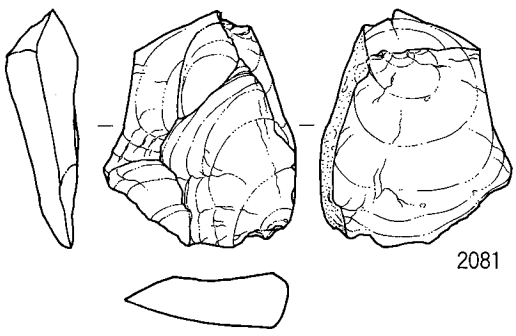

2076

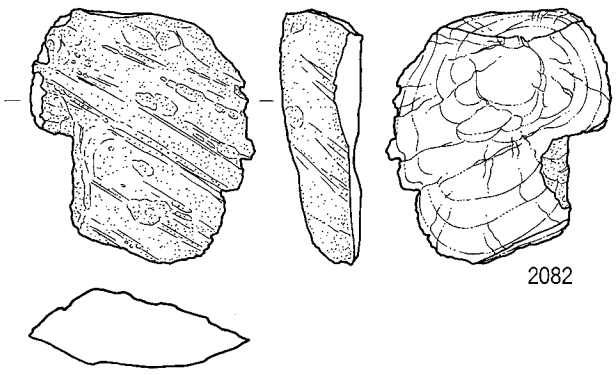

2077


2078

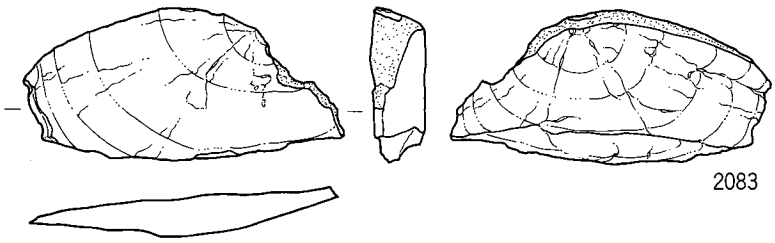

2079

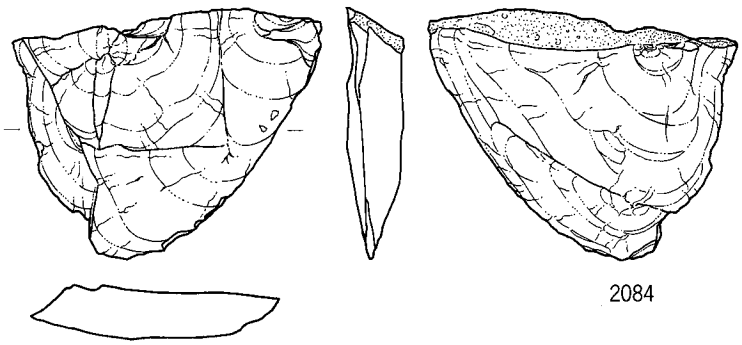

2080

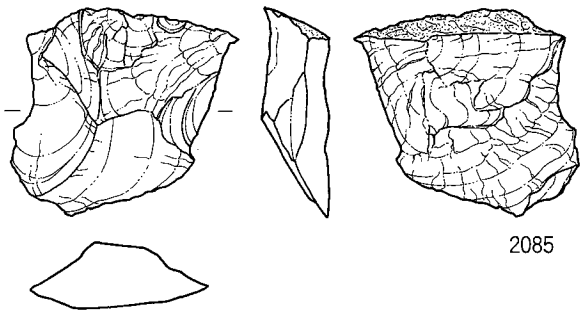

2081

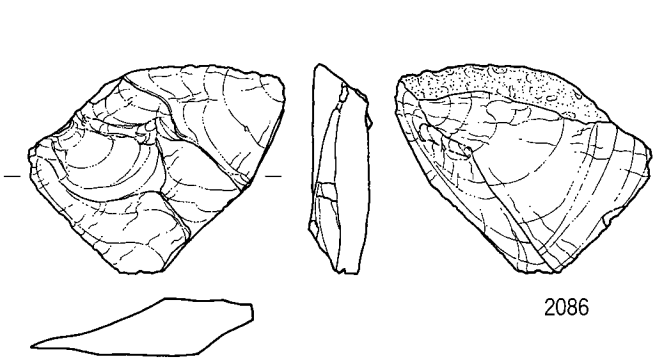

2082

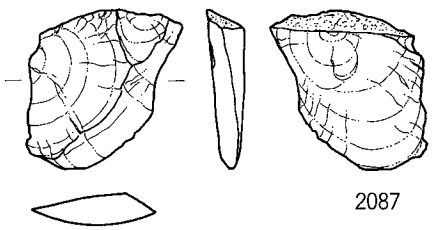
石器17　池ノ内14区SK22045出土

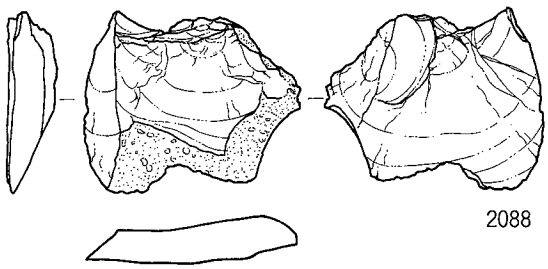

2083

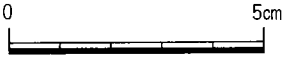

2084


2085

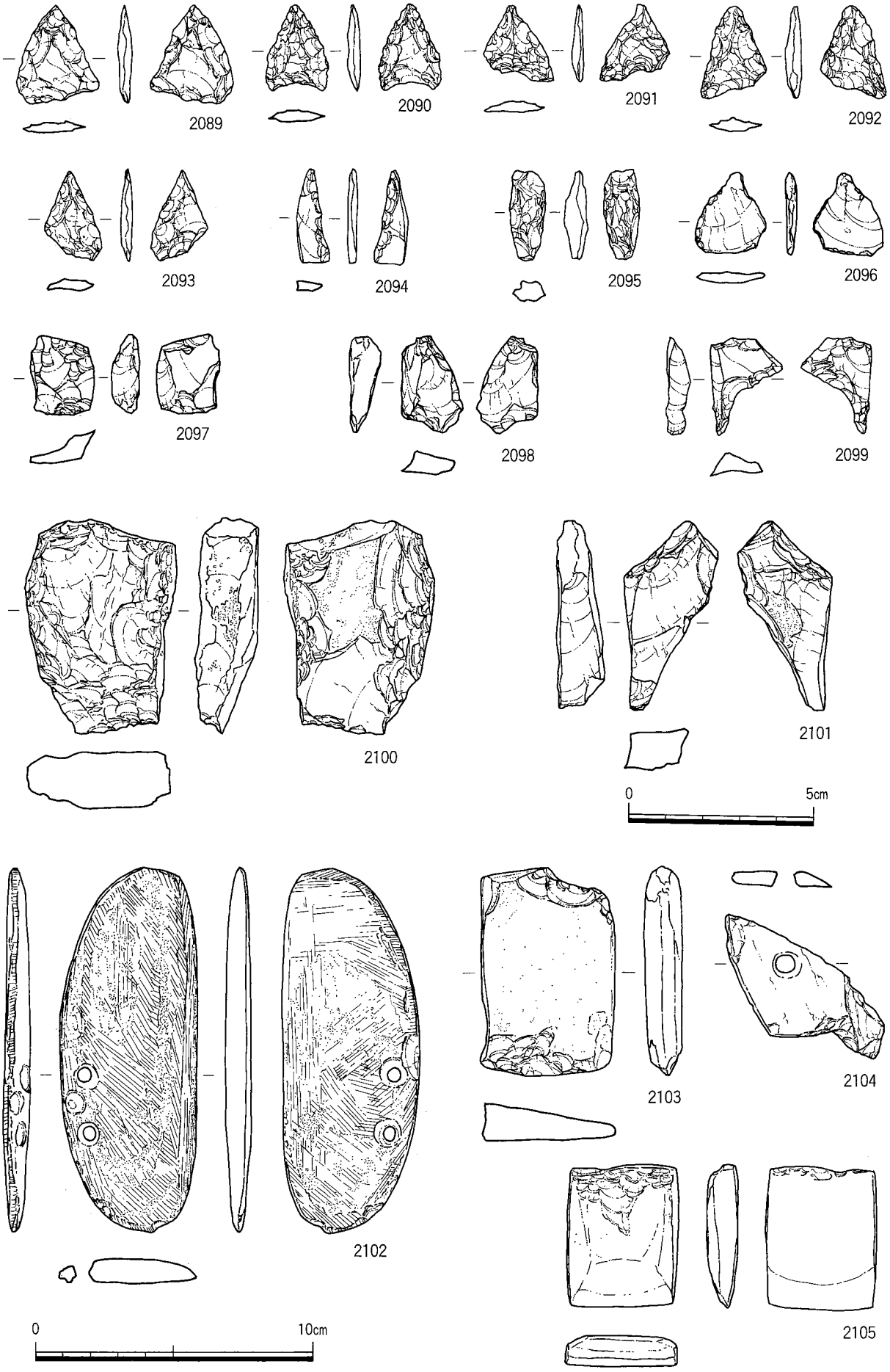

2086


2087

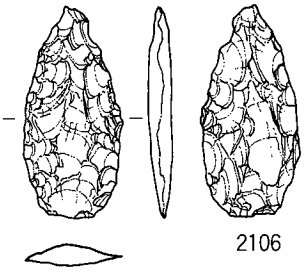

2088



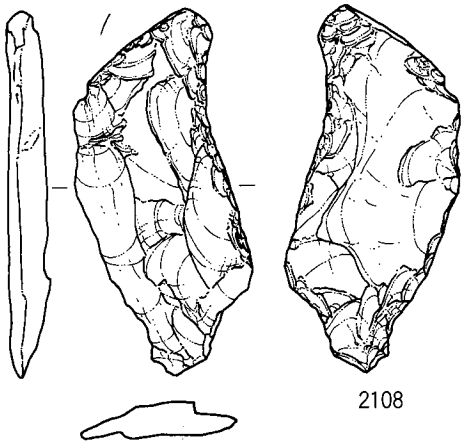
石器18　弥生時代前期包含層出土



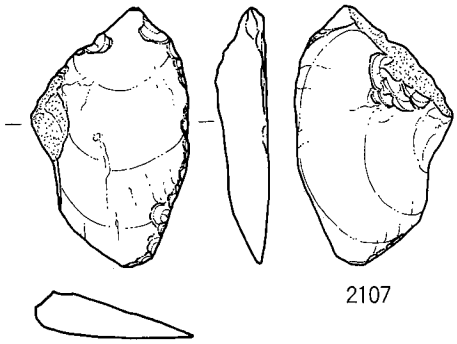
黒岡１区(2097・2104・2105)　黒岡２区(2089・2090・2092・2093・2095・2098・2100・2101)
黒岡５区(2099)　亀ノ郷１区(2103)　D３区(2091・2096・2102)　D３－２G区(2094)



2106

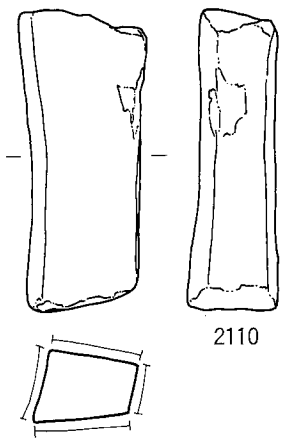


2108

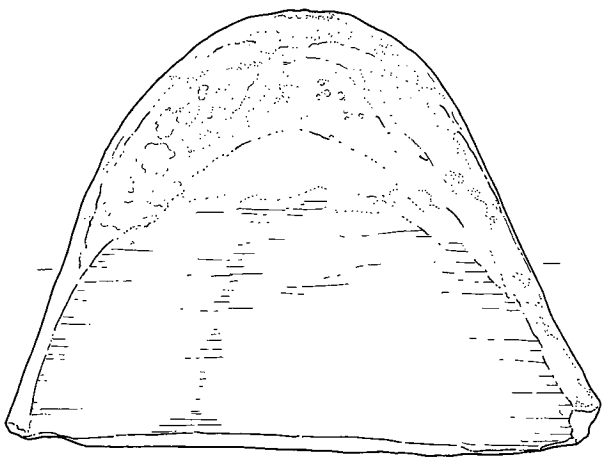


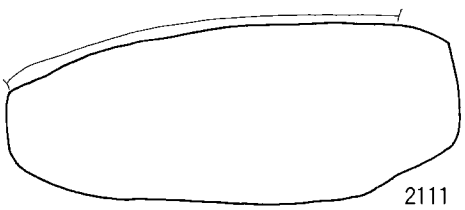
2107

0 5cm

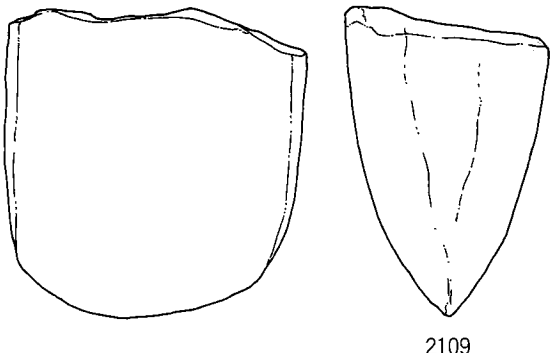


2110

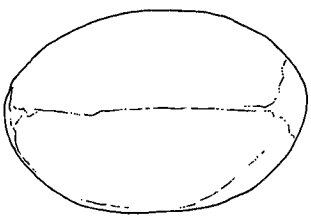




2111

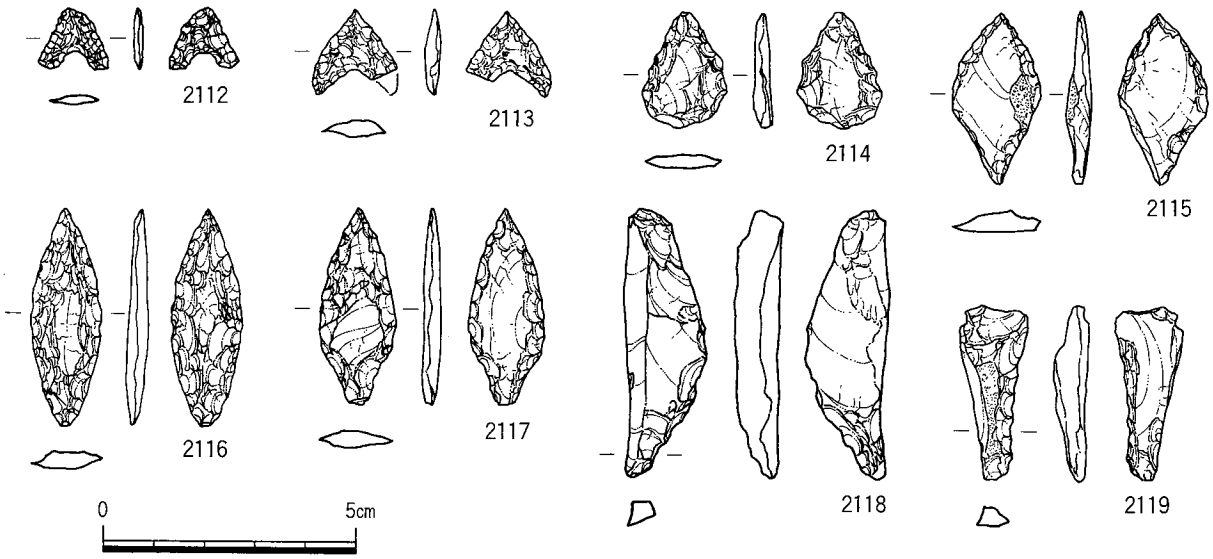


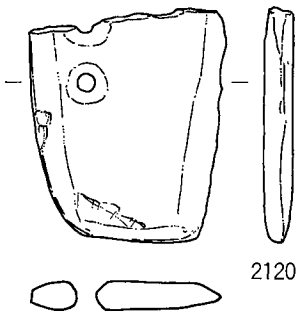
2109

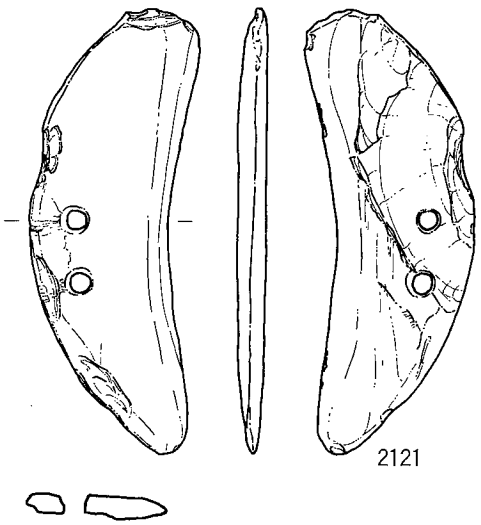


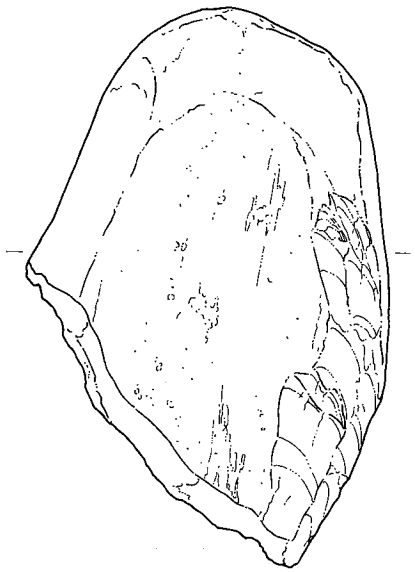
0 10cm

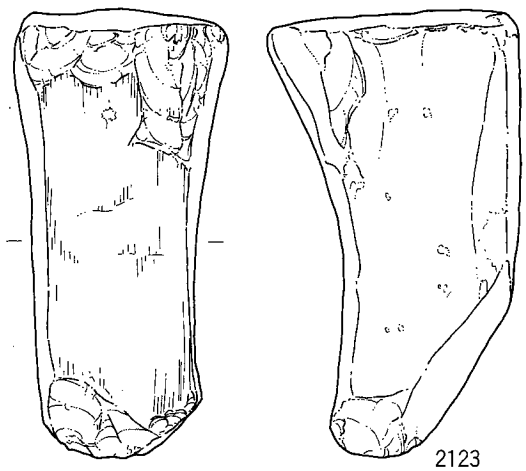
黒岡１区SD52002(2108)　西ケ市地区KM７区SD72007(2110)
池ノ内１区SR72001(2111)　SK42005(2106)　KM４区SR62002(2107)
池ノ内８区弥生時代中期後半包含層(2109)

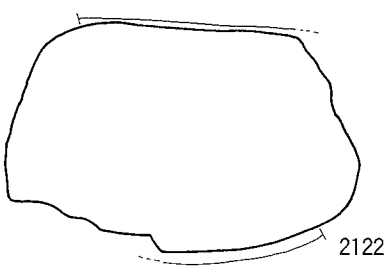


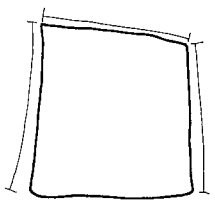


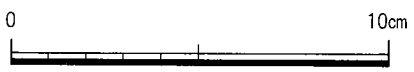




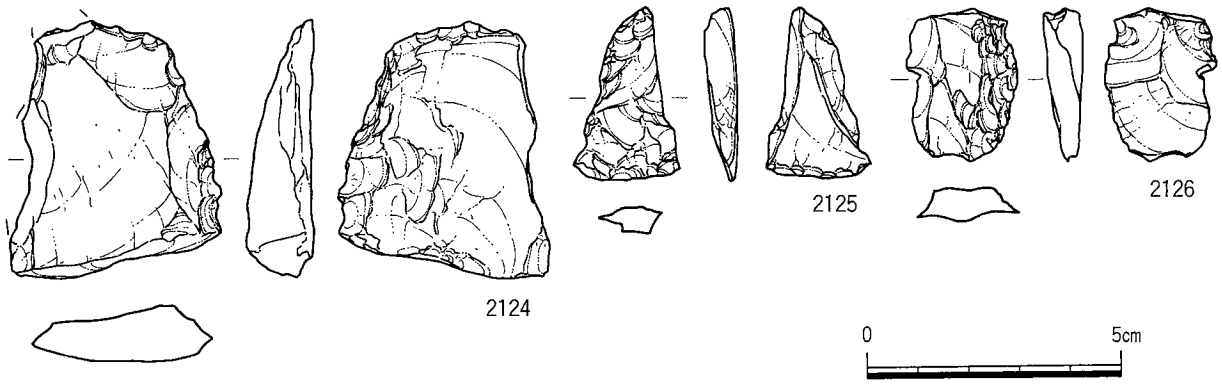


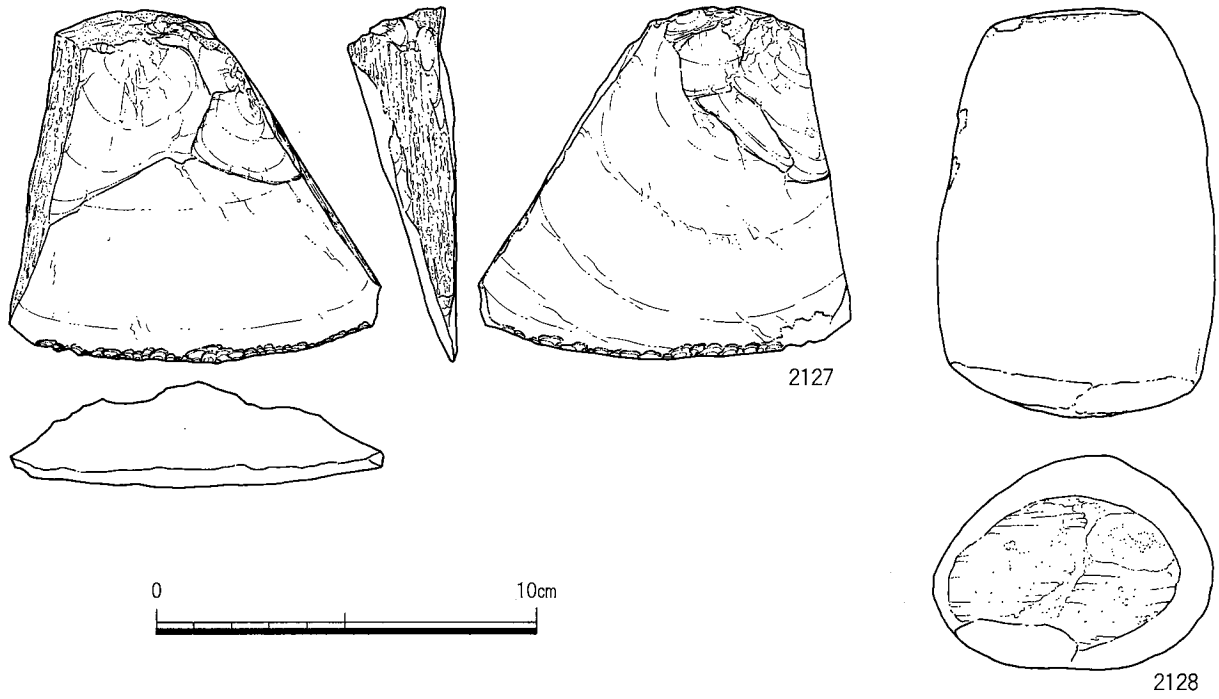


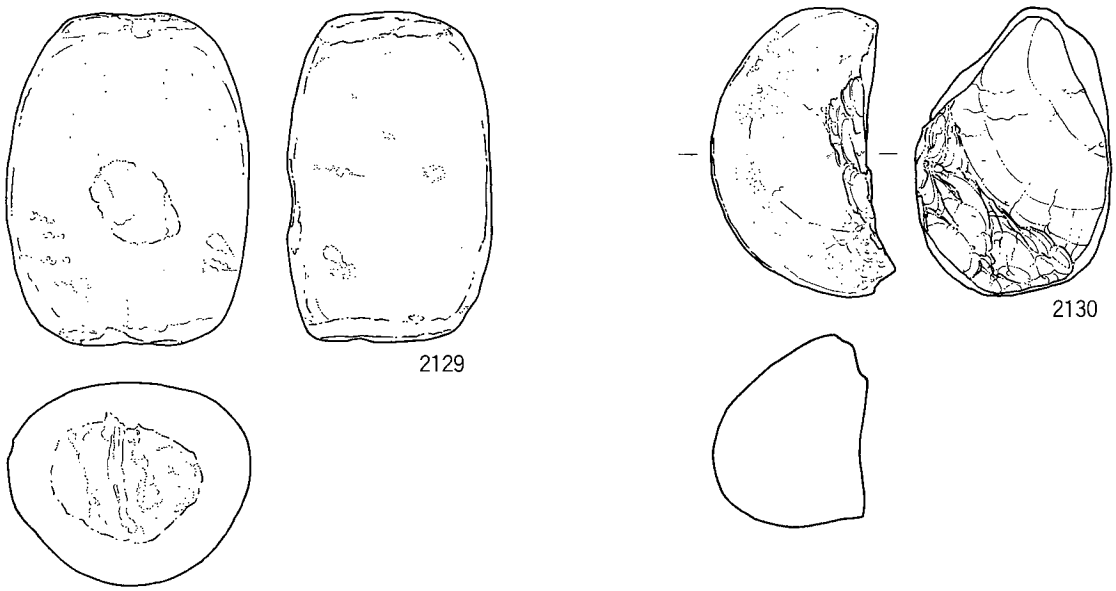




黒岡２区(2118･2119)　亀ノ郷１区(2114)　４区(2115)　７区SD72007(2120･2123)
D３－２G区(2116)　西ケ市地区KM７区SD72007(2117･2121)
池ノ内17区SK12004(2112)　９区(2113)　17区(2122)

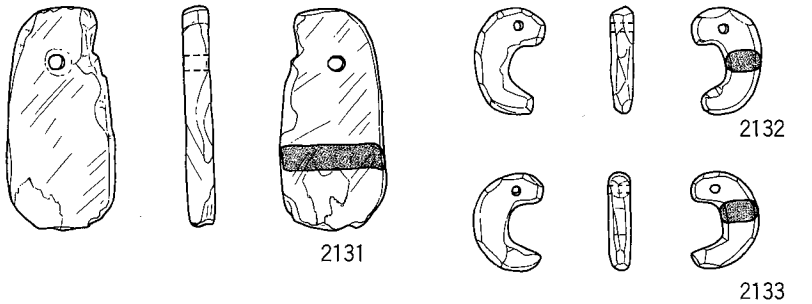






黒岡２区(2127)　亀ノ郷１区(2124)　下町２区(2125･2129)
池ノ内１区(2128)　10区(2126)　17区SK12005(2130)

玉類

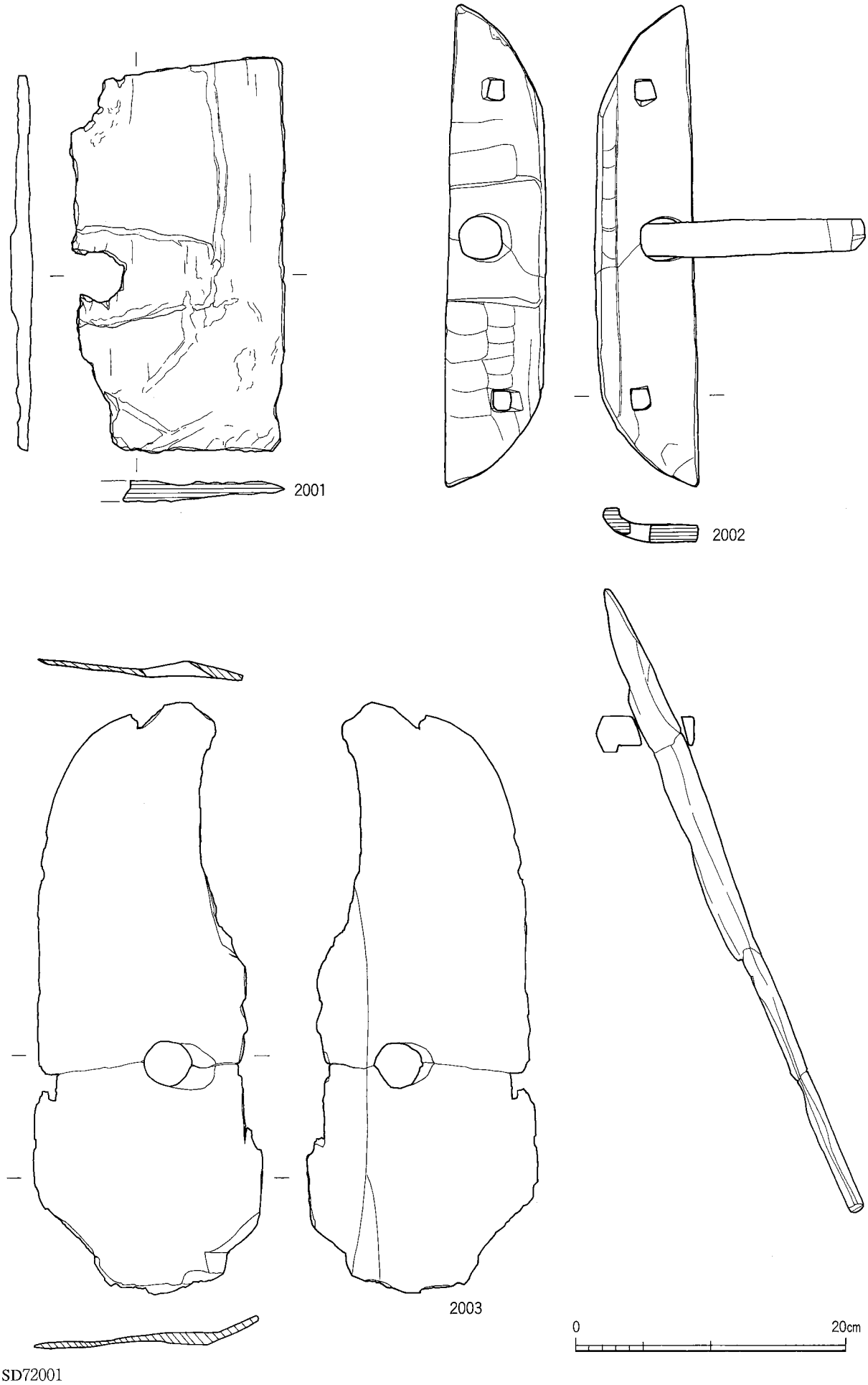


2134 2135 2136 2137
2138 2139 2140 2141
2142 2143 2144 2145 2146 2147 2148 2149 2150 2151 2152 2153
2154 2155 2156 2157 2158 2159 2160 2161 2162 2163 2164 2165
2166 2167 2168 2169 2170 2171 2172 2173 2174 2175 2176 2177
2178 2179 2180 2181 2182 2183 2184 2185 2186 2187 2188 2189
2190 2191 2192 2193 2194 2195 2196 2197 2198 2199 2200 2201
2202 2203 2204 2205 2206 2207 2208 2209 2210 2211 2212 2213
2214 2215 2216 2217 2218 2219 2220 2221 2222 2223 2224 2225
2226 2227 2228 2229 2230 2231 2232 2233 2234 2235 2236 2237
2238 2239 2240 2241 2242 2243 2244 2245 2246 2247

0 5cm

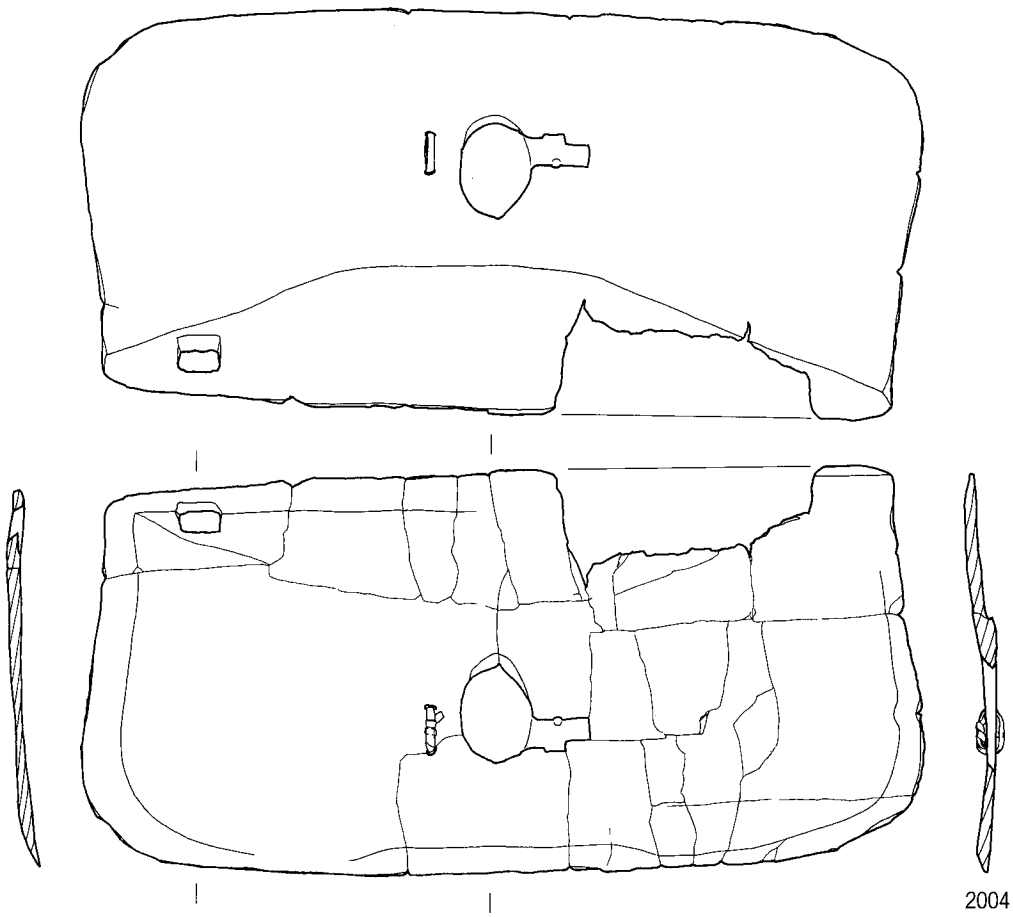
亀ノ郷7区SD72001出土

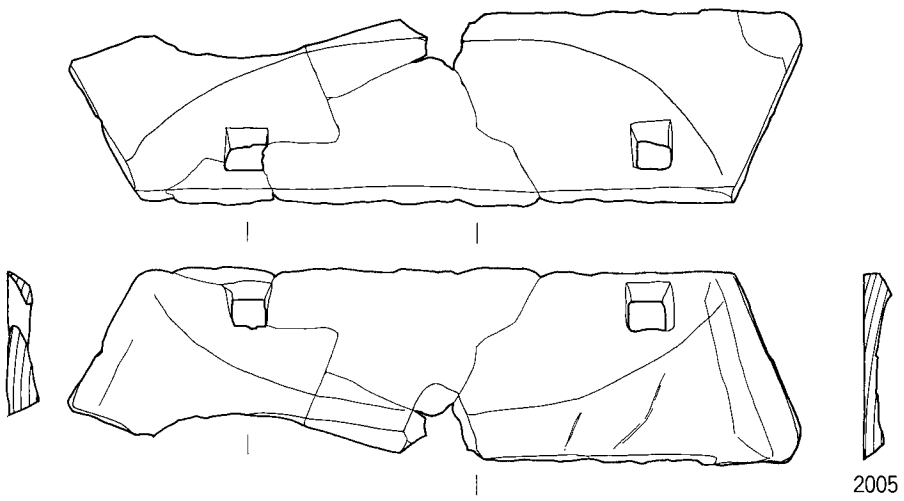
木器1

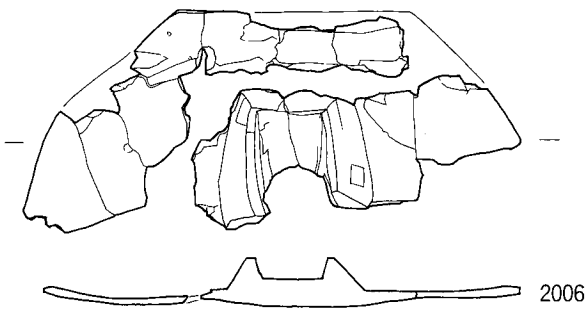


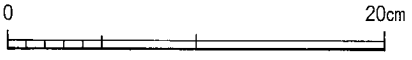
SD72001

木器 2



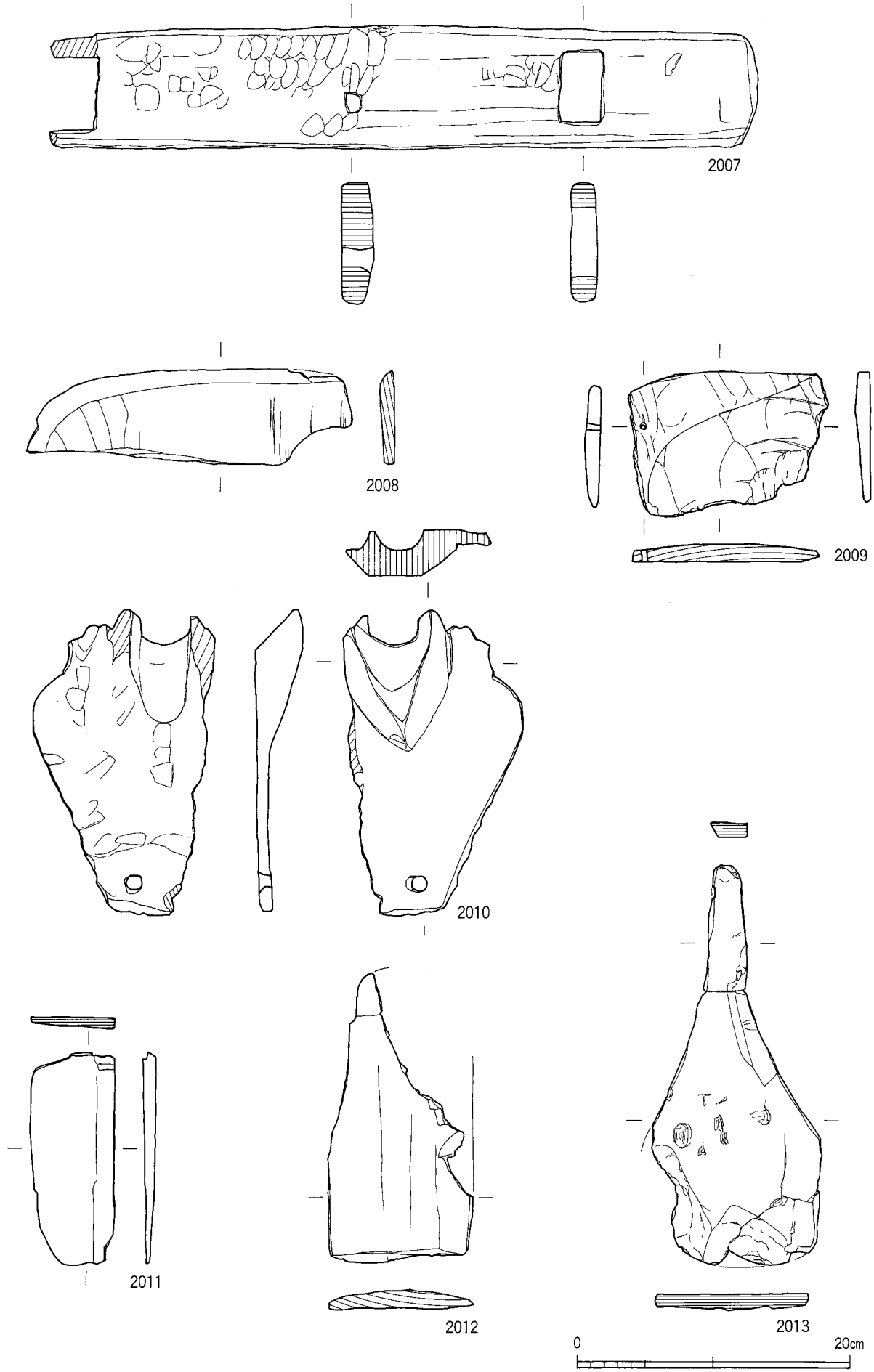




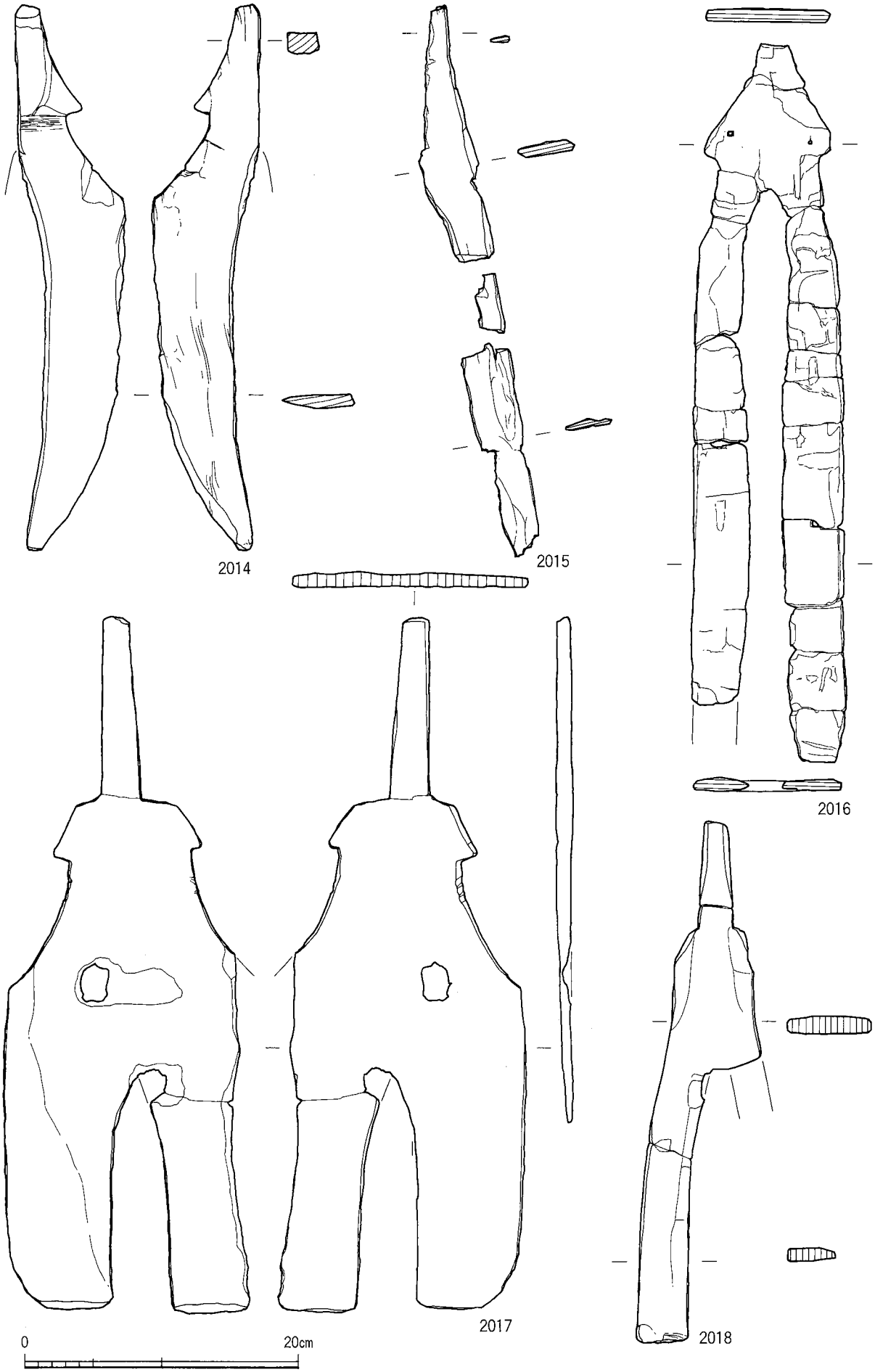


SD72001(2004・2005)　SR52001(2006)

木器 3

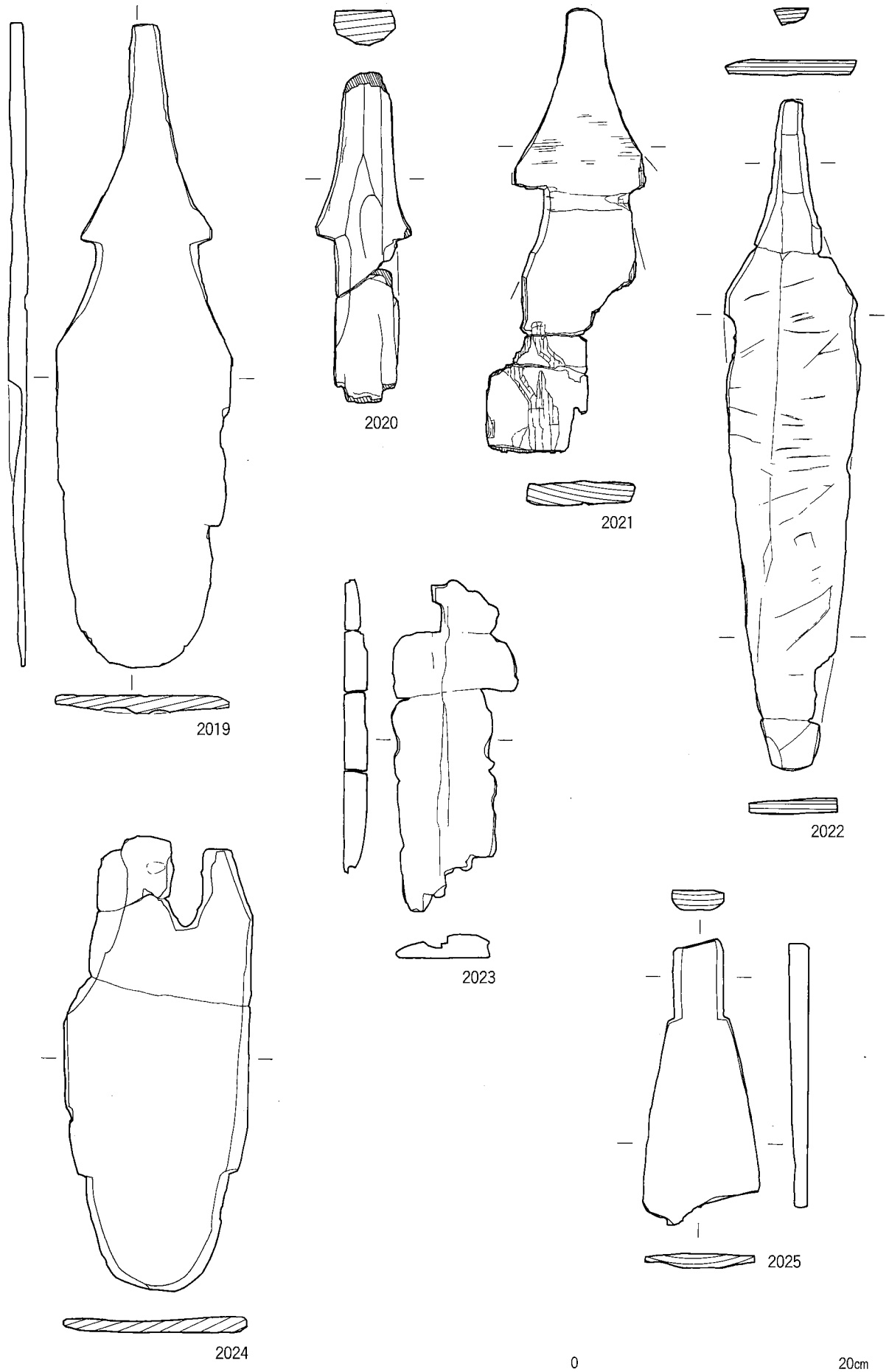


SD72001(2008・2009・2012・2013)　SD72007(2007・2010・2011)

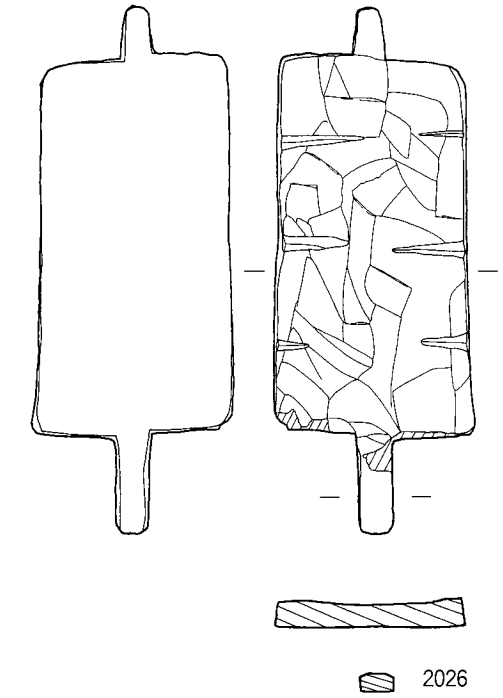


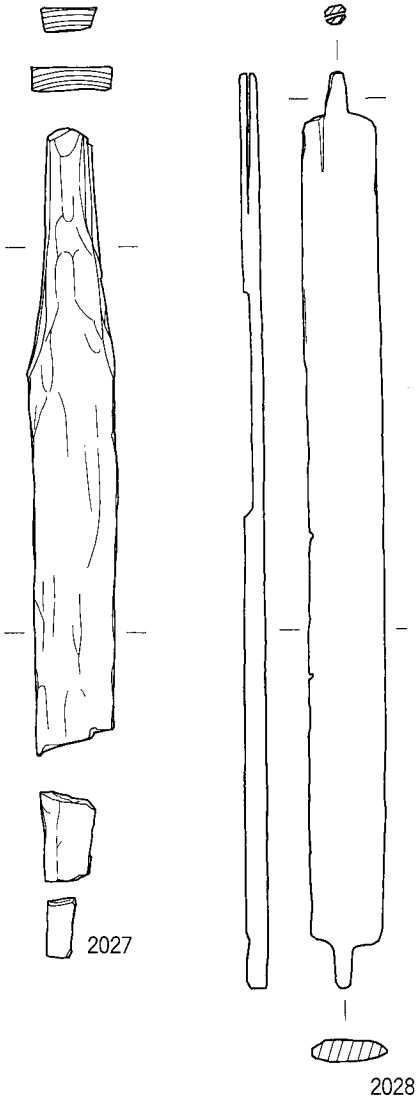
SD72007(2014)　SR72001(2015)　SR62002(2017)　SR62002井堰(2016・2018)

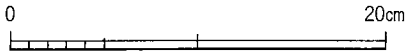
木器5

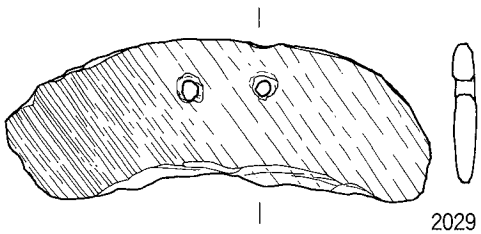


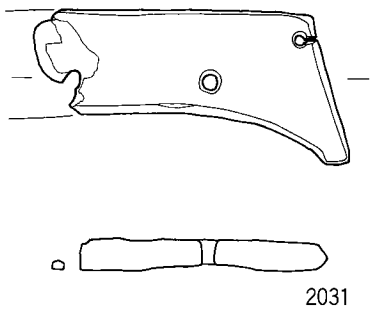
SD72001(2019・2021～2025)　SD72007(2020)

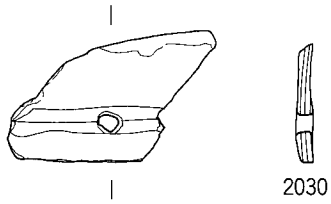


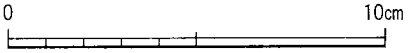






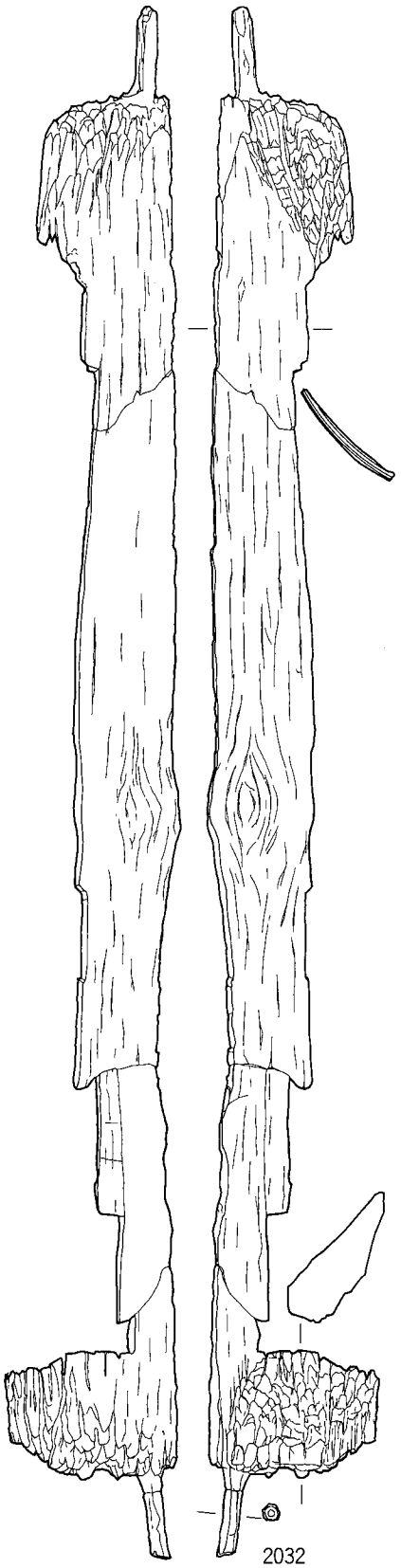


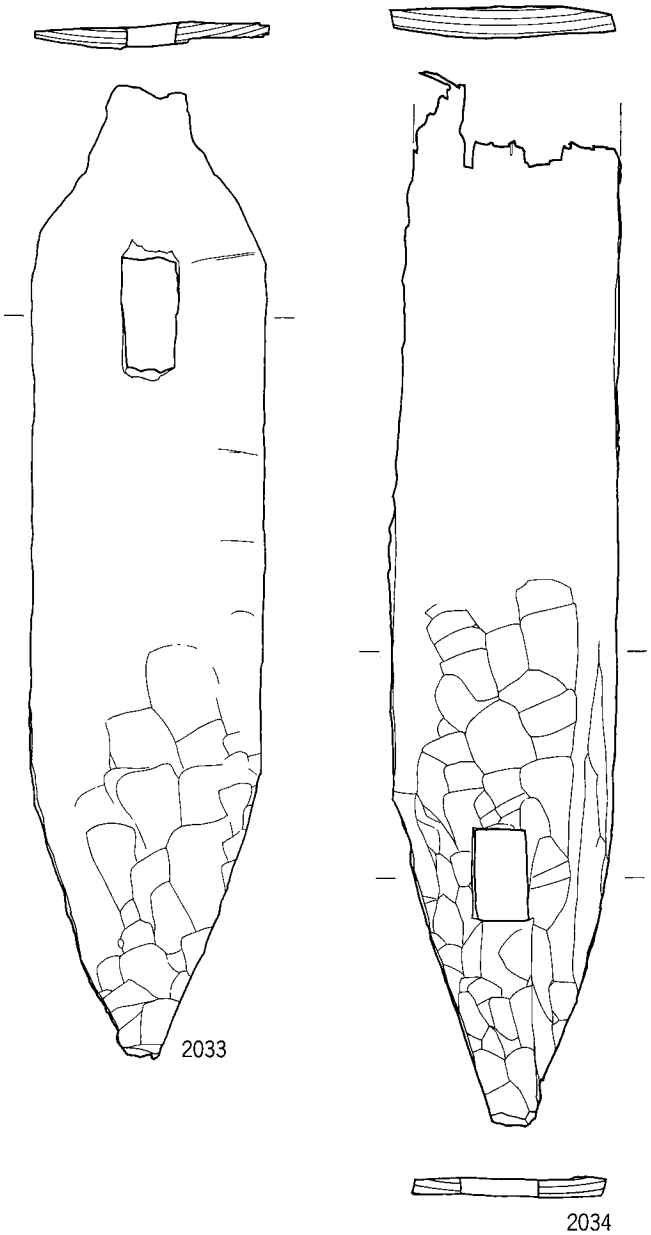




SD72001(2026～2028・2031)　SD72007(2029)　SR72001(2030)

木器 7

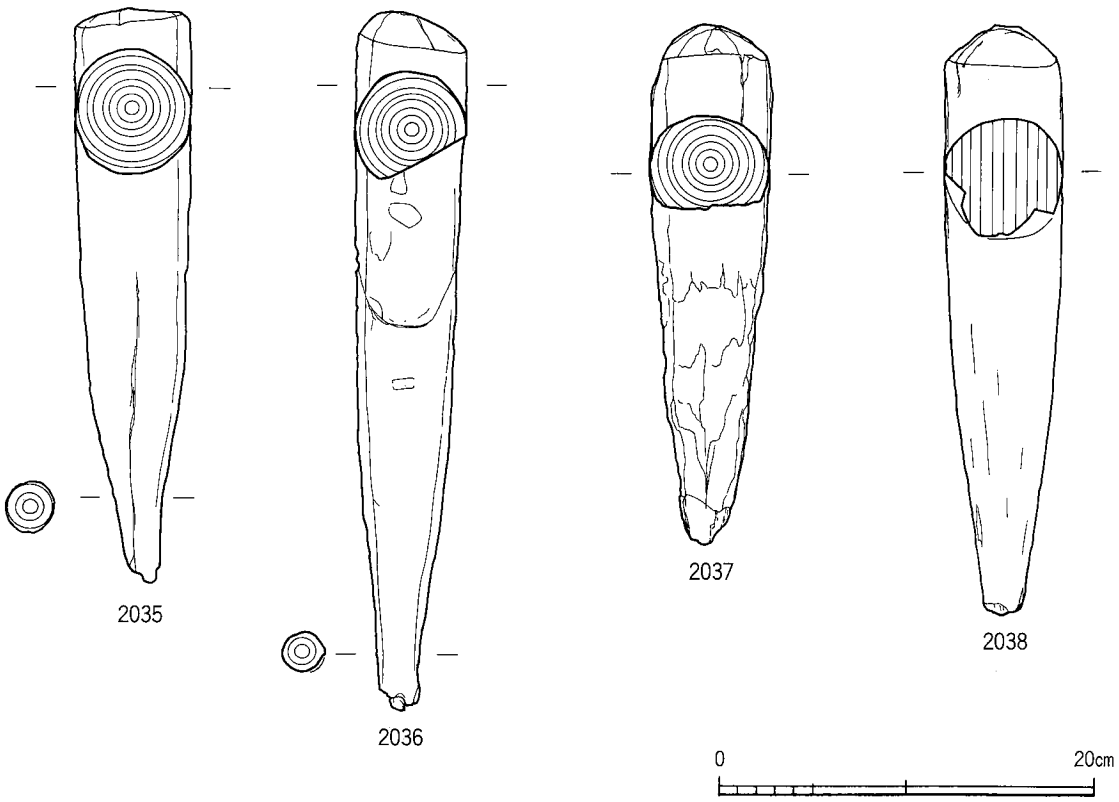


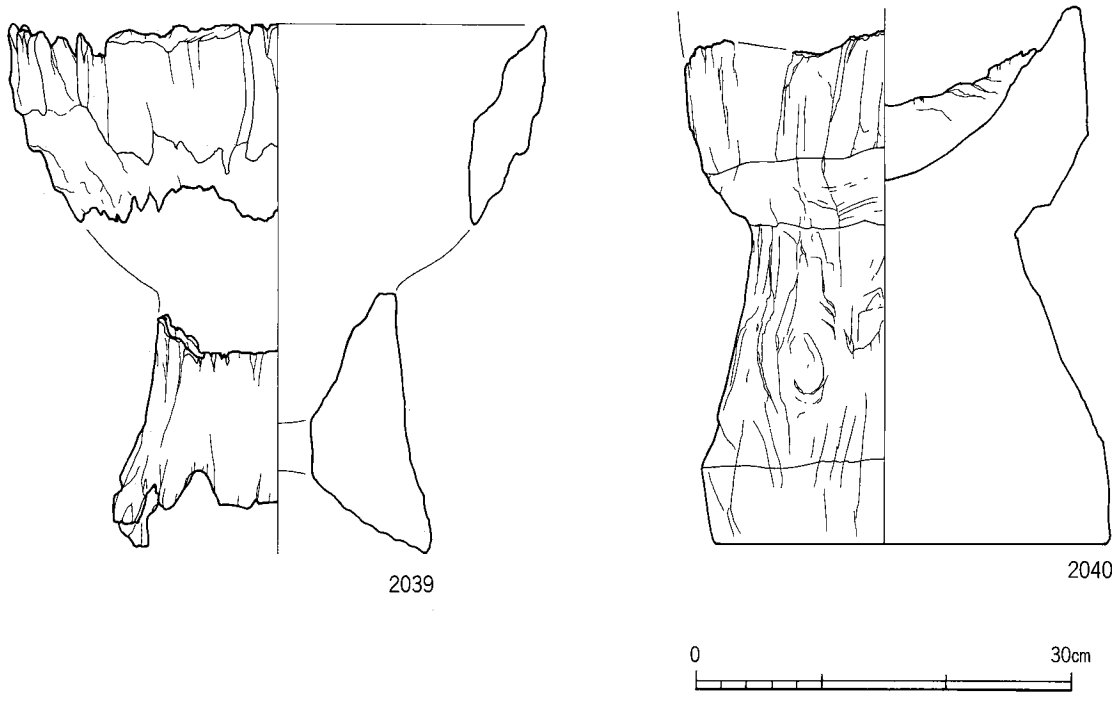


0 50cm

0 20cm

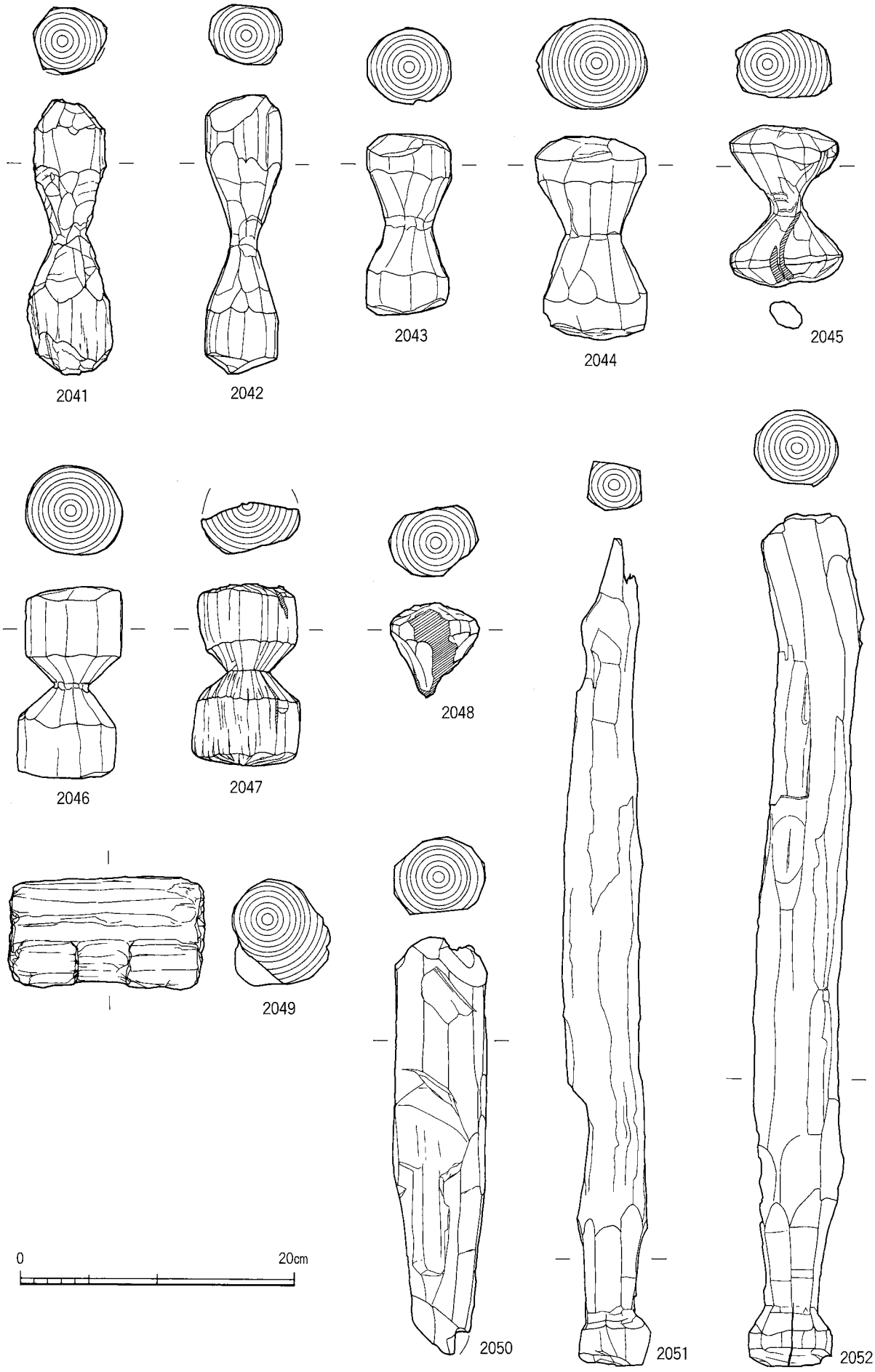
SD72001(2033・2034)　SD72007(2032)



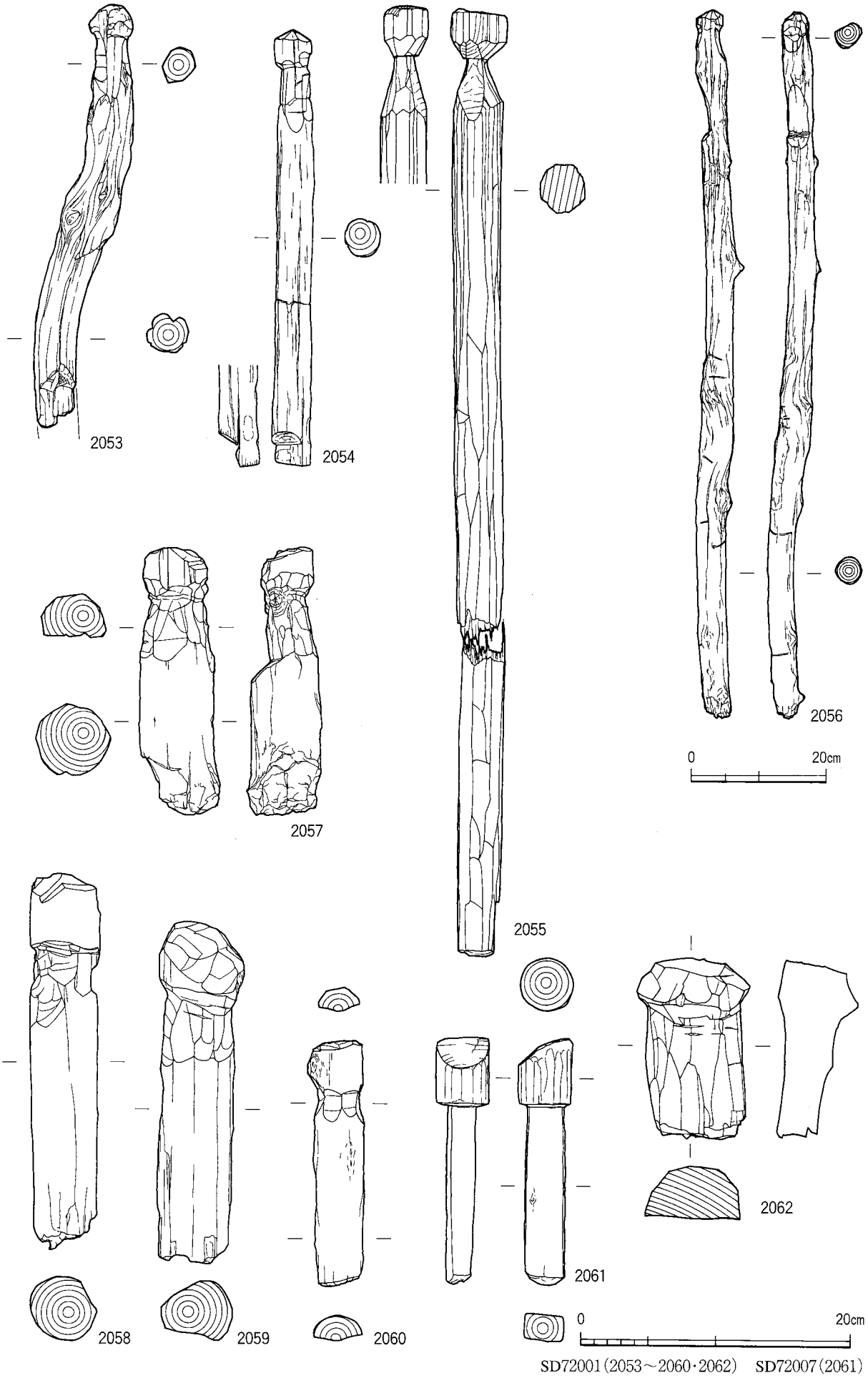


SD72001(2035・2037・2038・2040)　SR72001(2036)　SR62002上層(2039)

木器 9

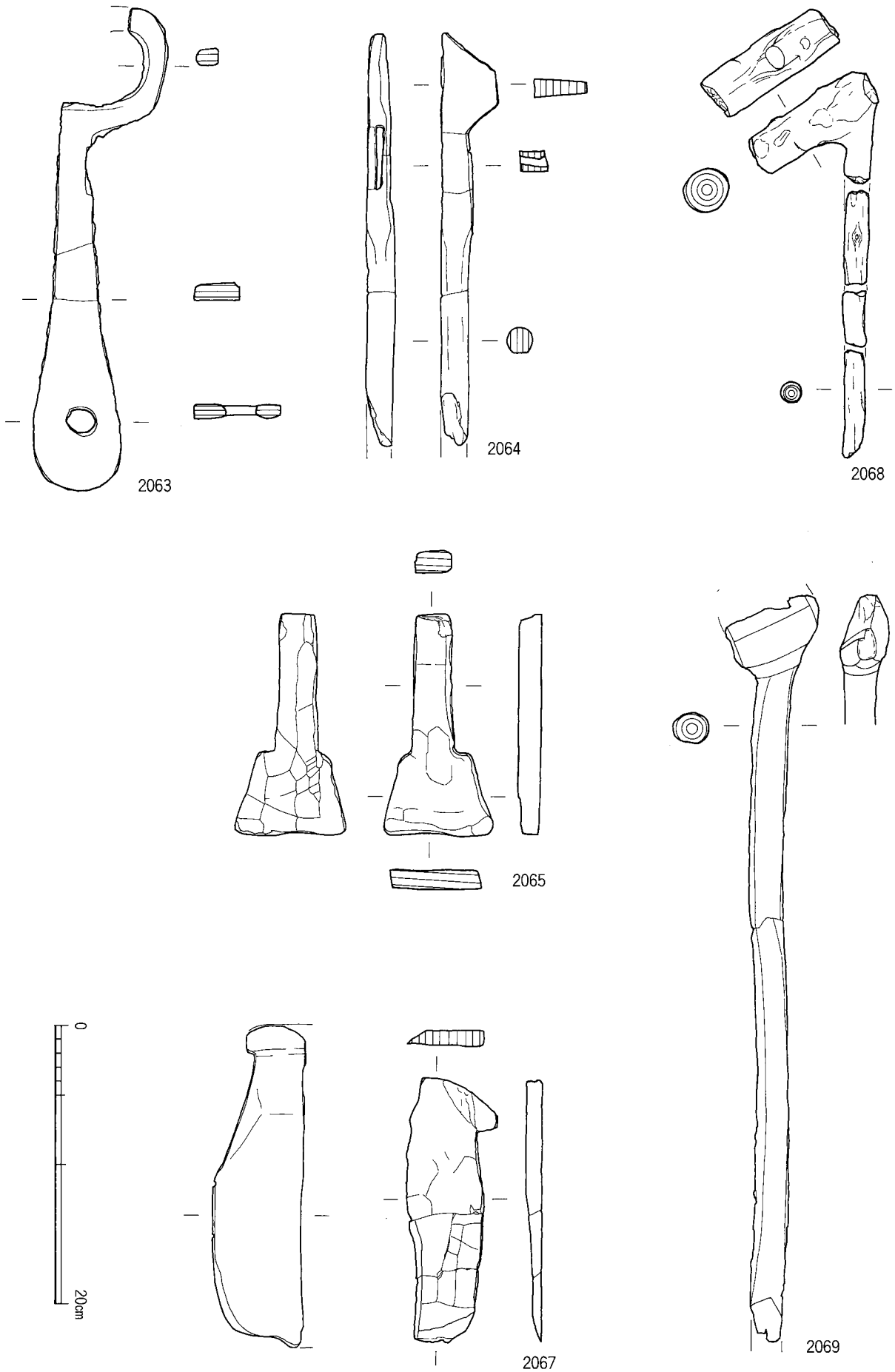


SD72001(2041・2042・2050)　SD72007(2044・2047)　SR72001(2048)
SD62001下層(2051)　SR62002(2043・2045・2046・2049・2052)

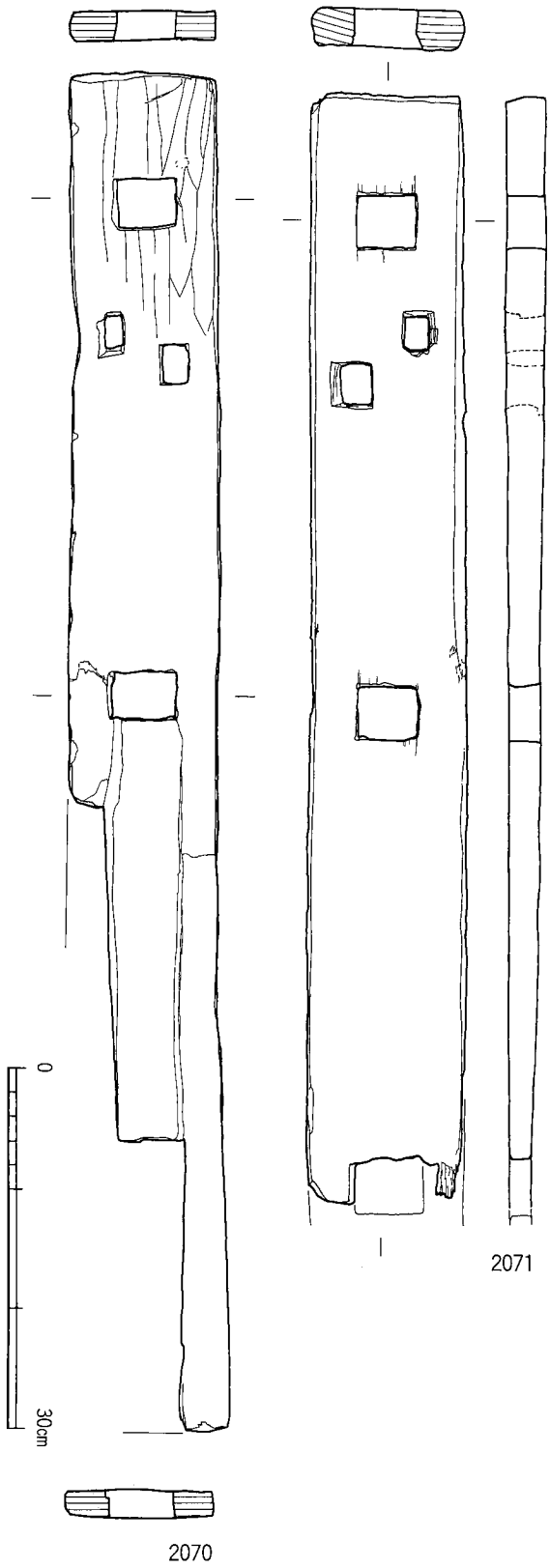


SD72001(2053～2060・2062)　SD72007(2061)

木器11

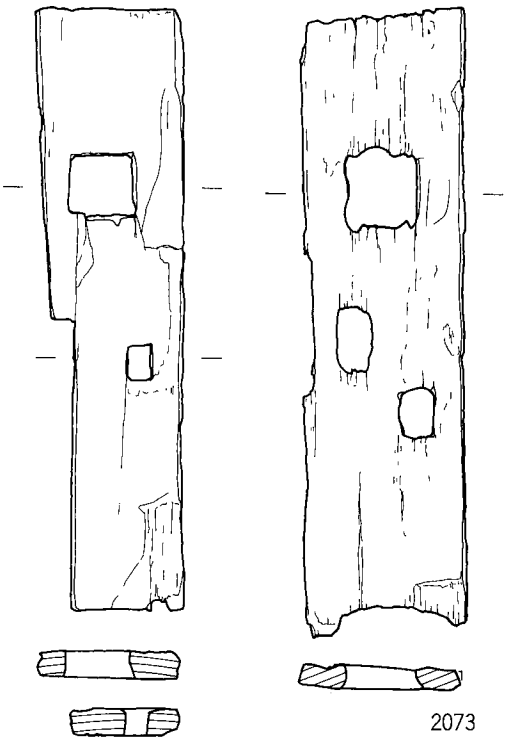


SD72001(2069)　SD72007(2063)　SR72001(2064～2066・2068)　SR62001(2067)



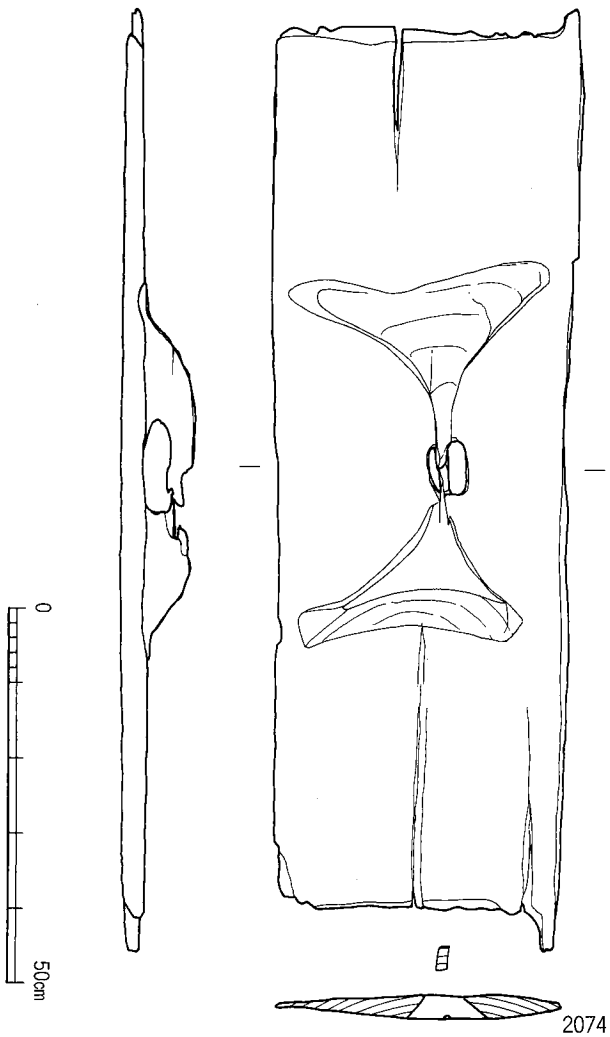
2070

2071



2072

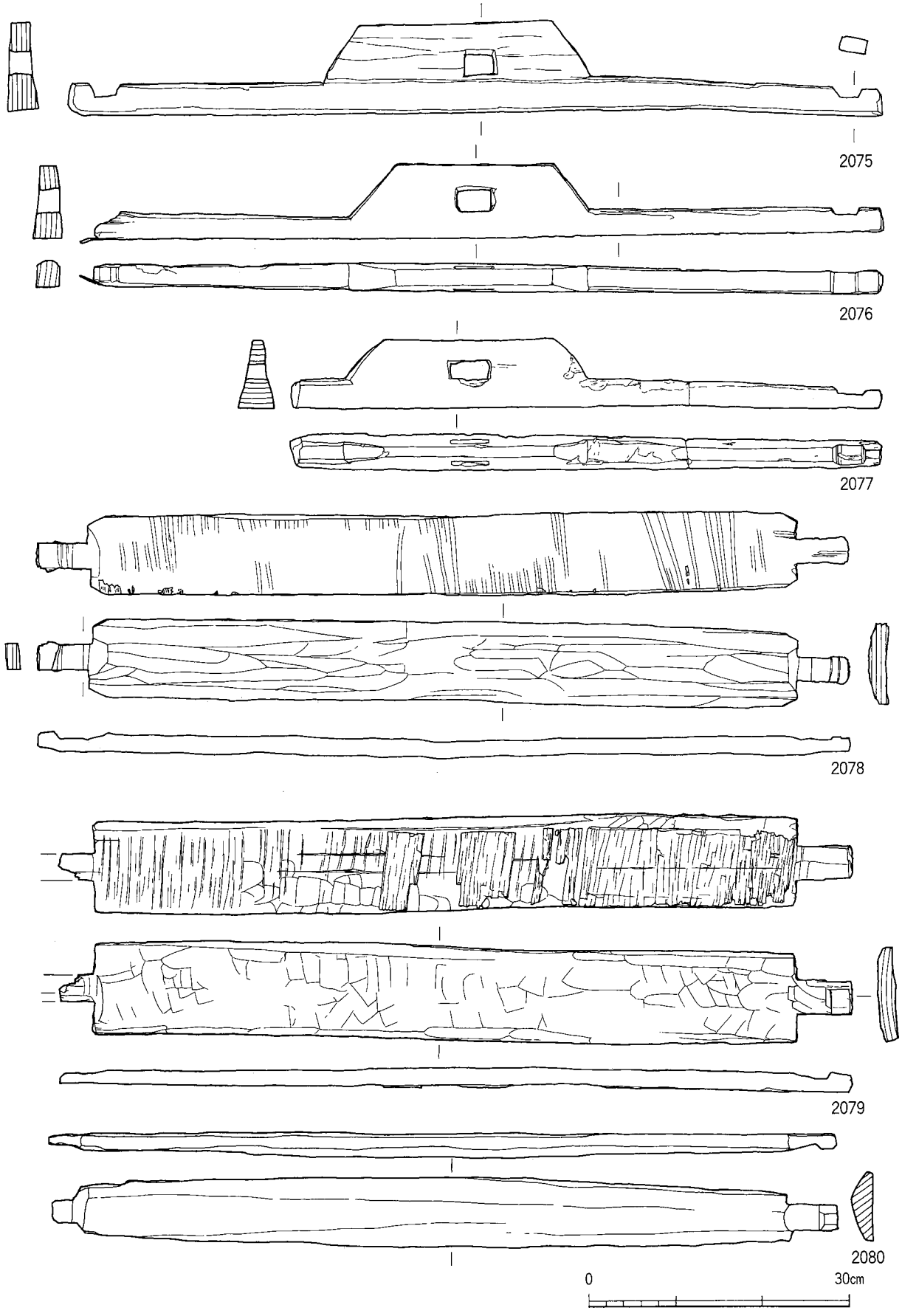
2073



2074

SD72001(2070～2073)　SR72001(2074)

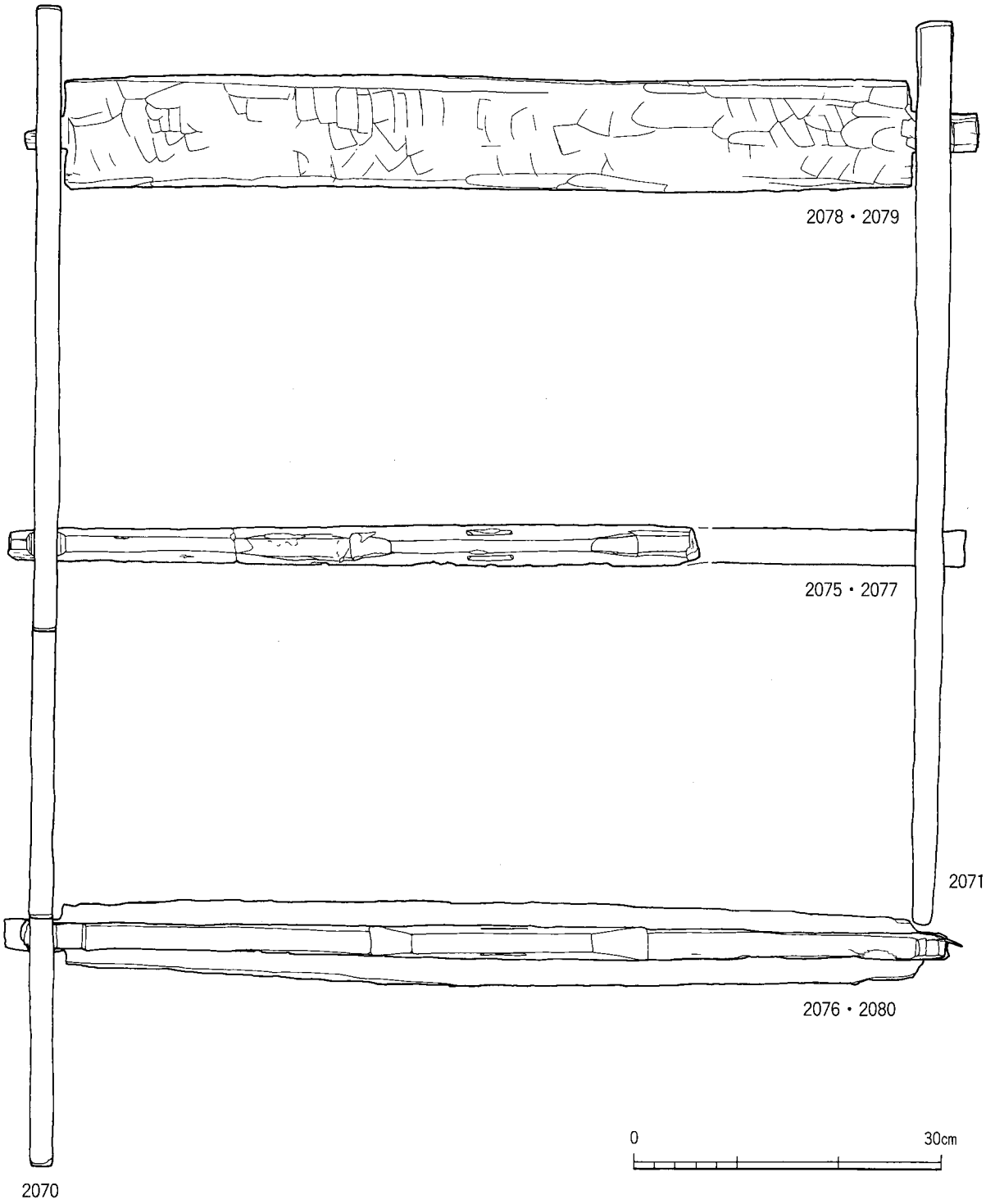
木器13



亀ノ郷3区SD72001

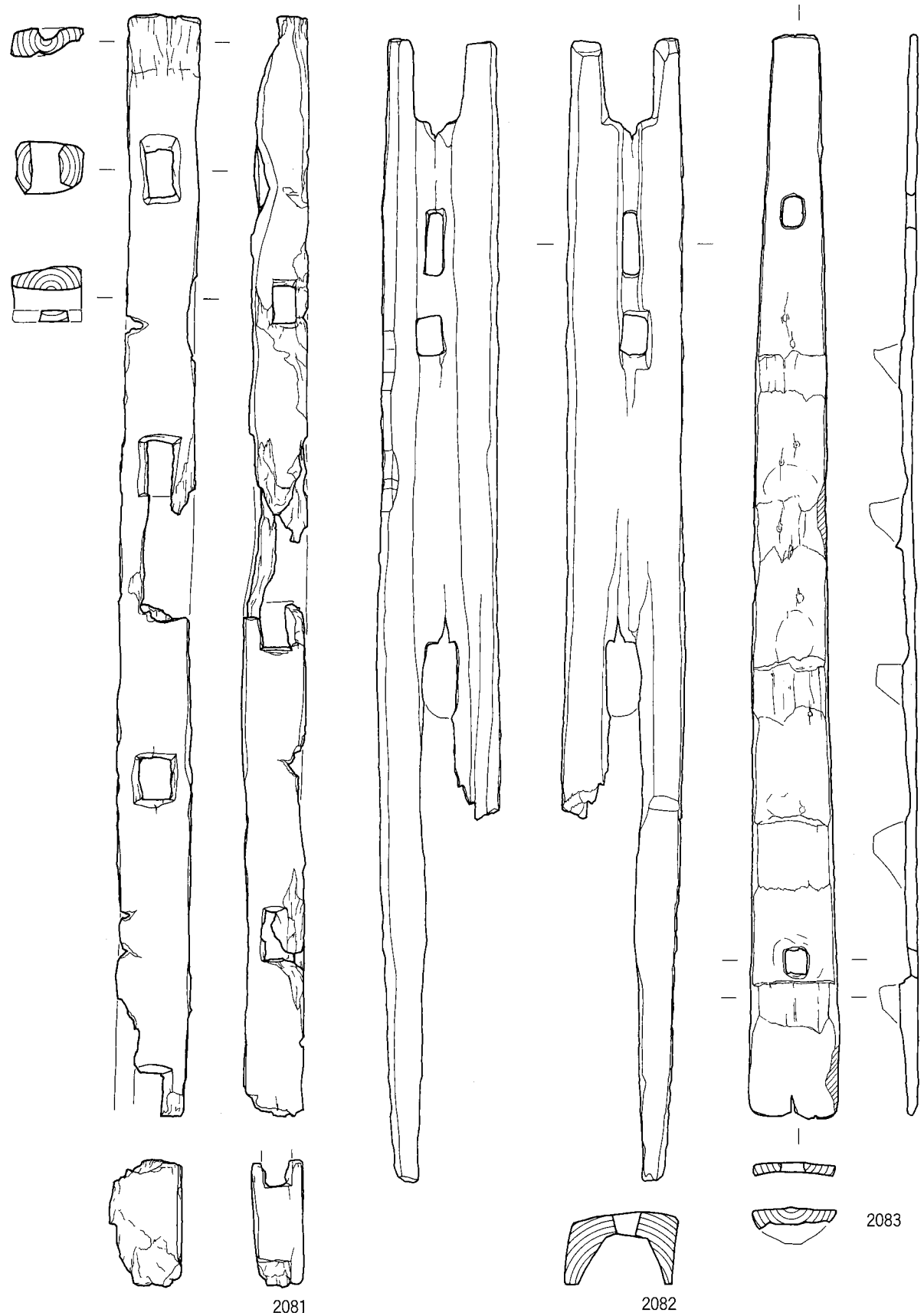
図版170

2070・2071・2075～2080



亀ノ郷3区SD72001

木器15

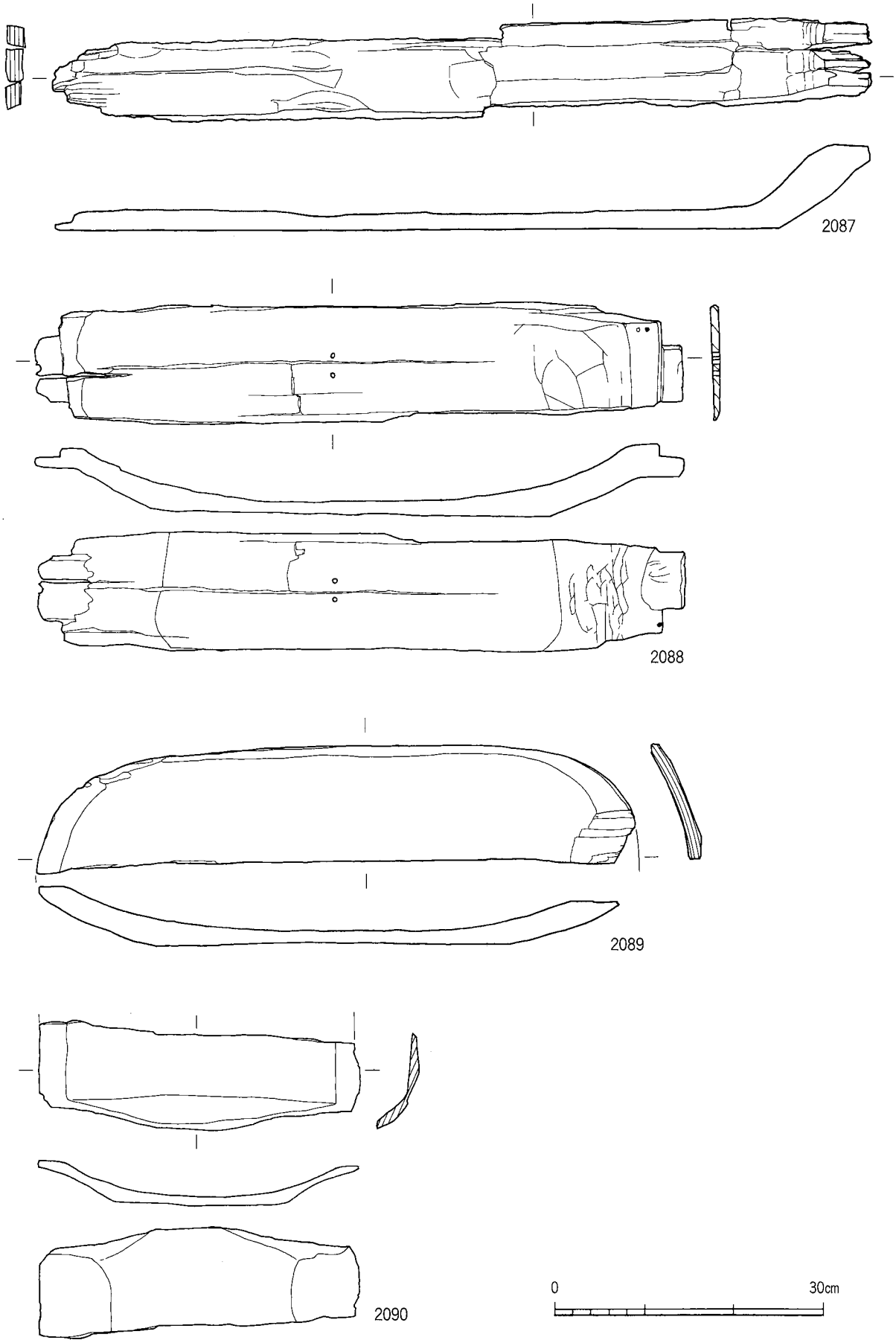


SD72001(2081・2082)　SR62002井堰(2083)

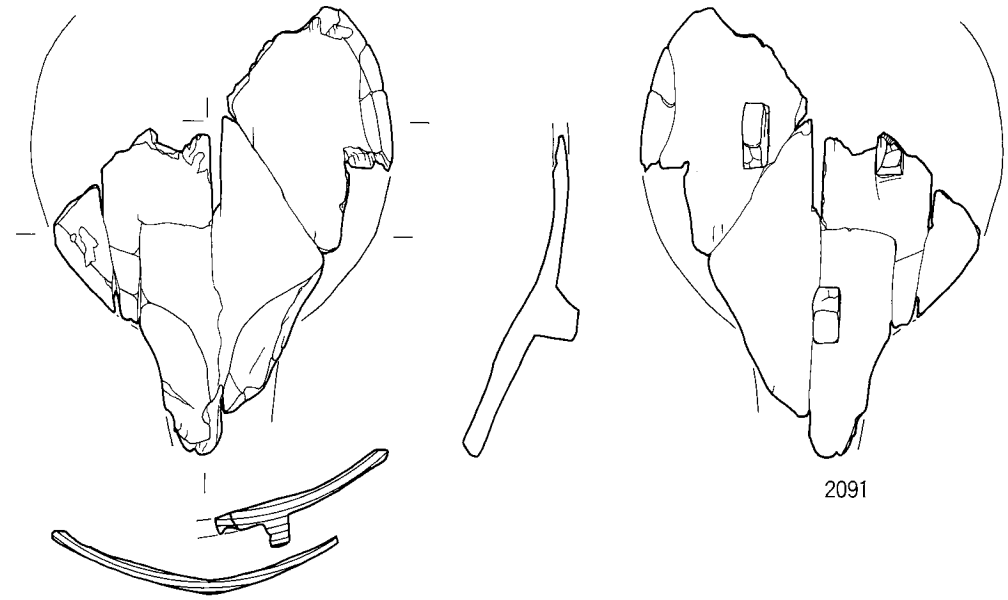
0 30cm

0 20cm

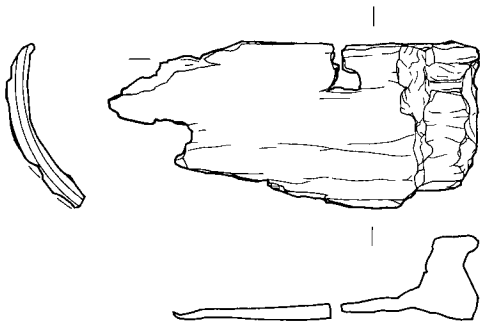
SD72001(2086)　SD72007(2084・2085)



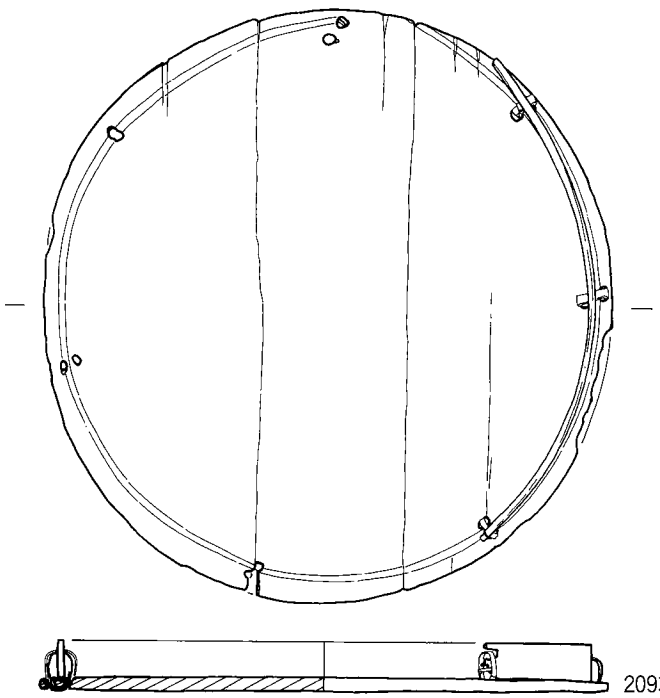
SD72001(2087・2090)　SR62002(2088・2089)



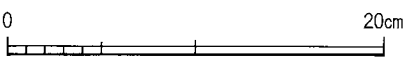
2091



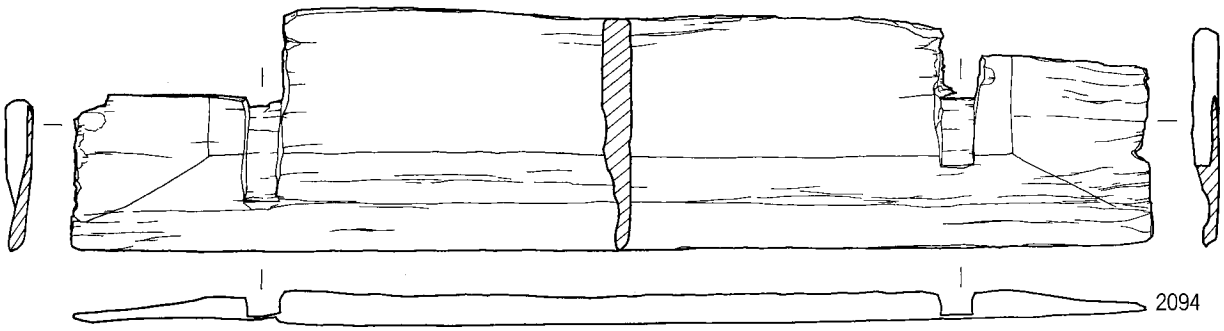
2092

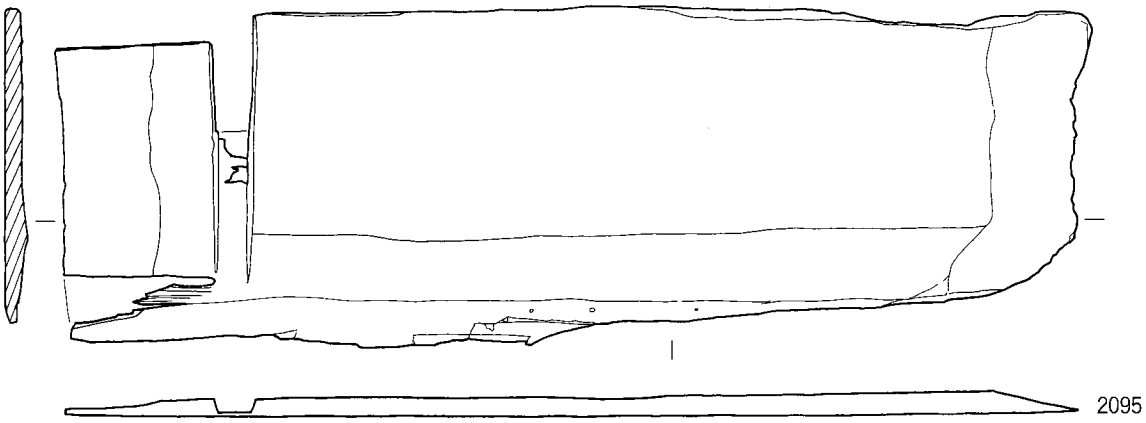


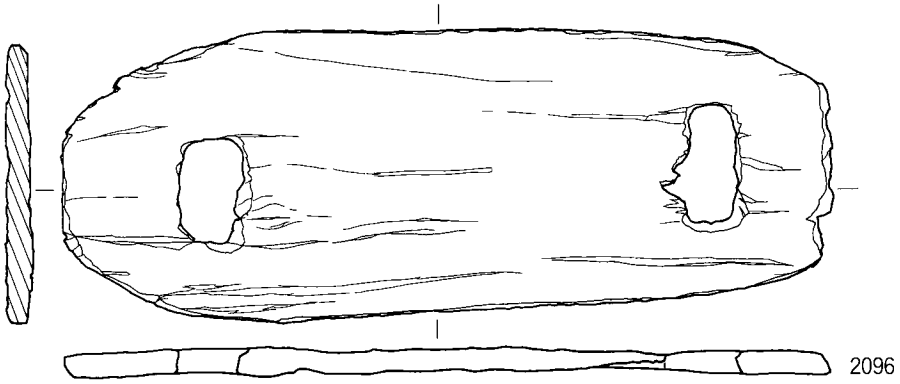
2093

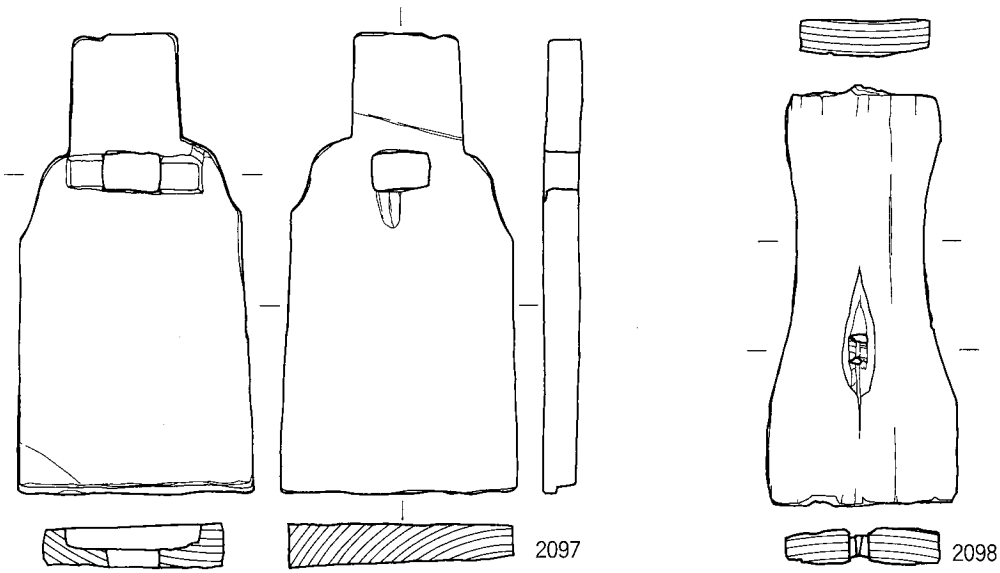


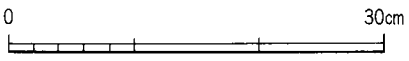
SD72001(2091)　SD72007(2092)　SR72005(2093)



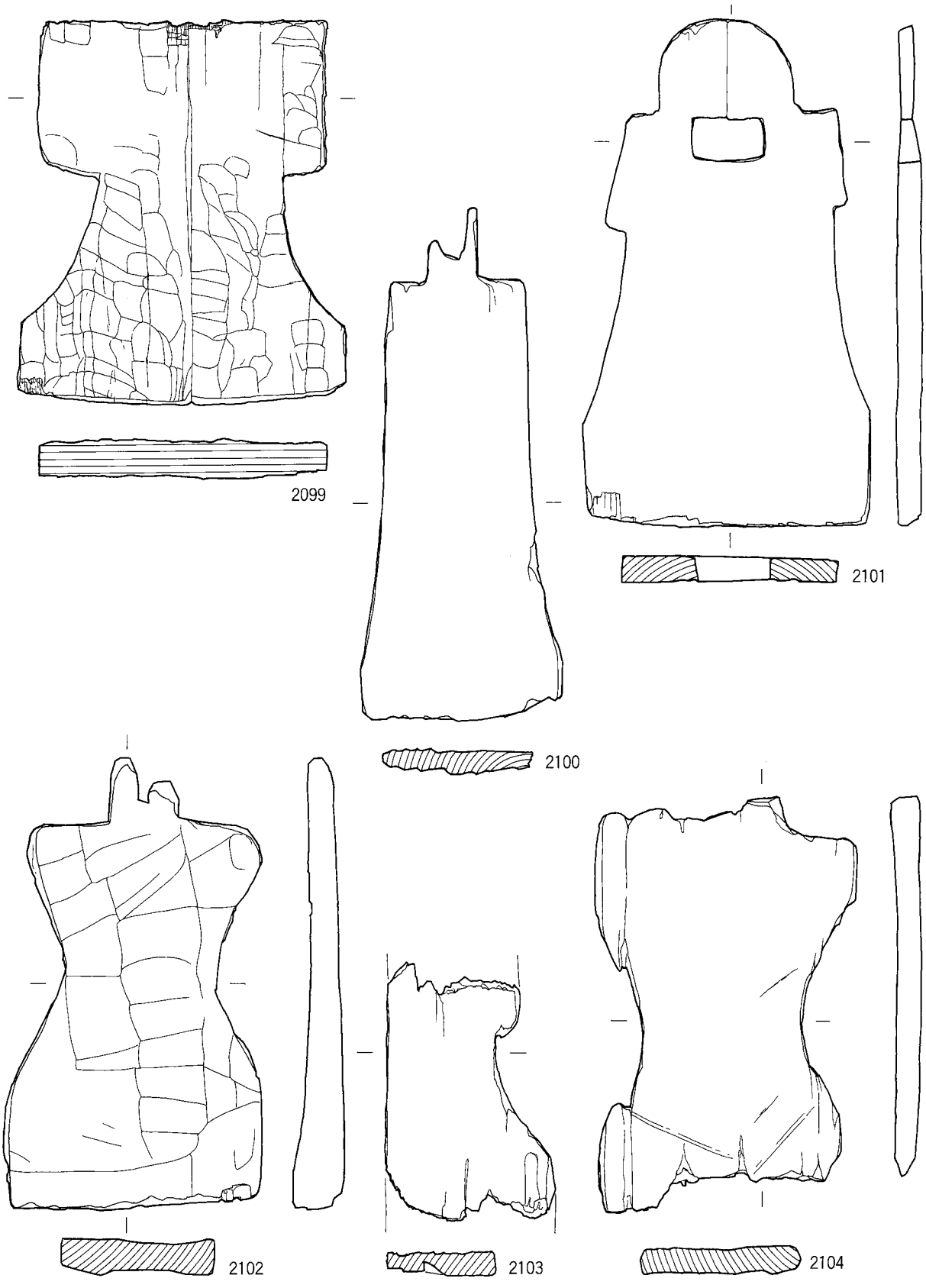






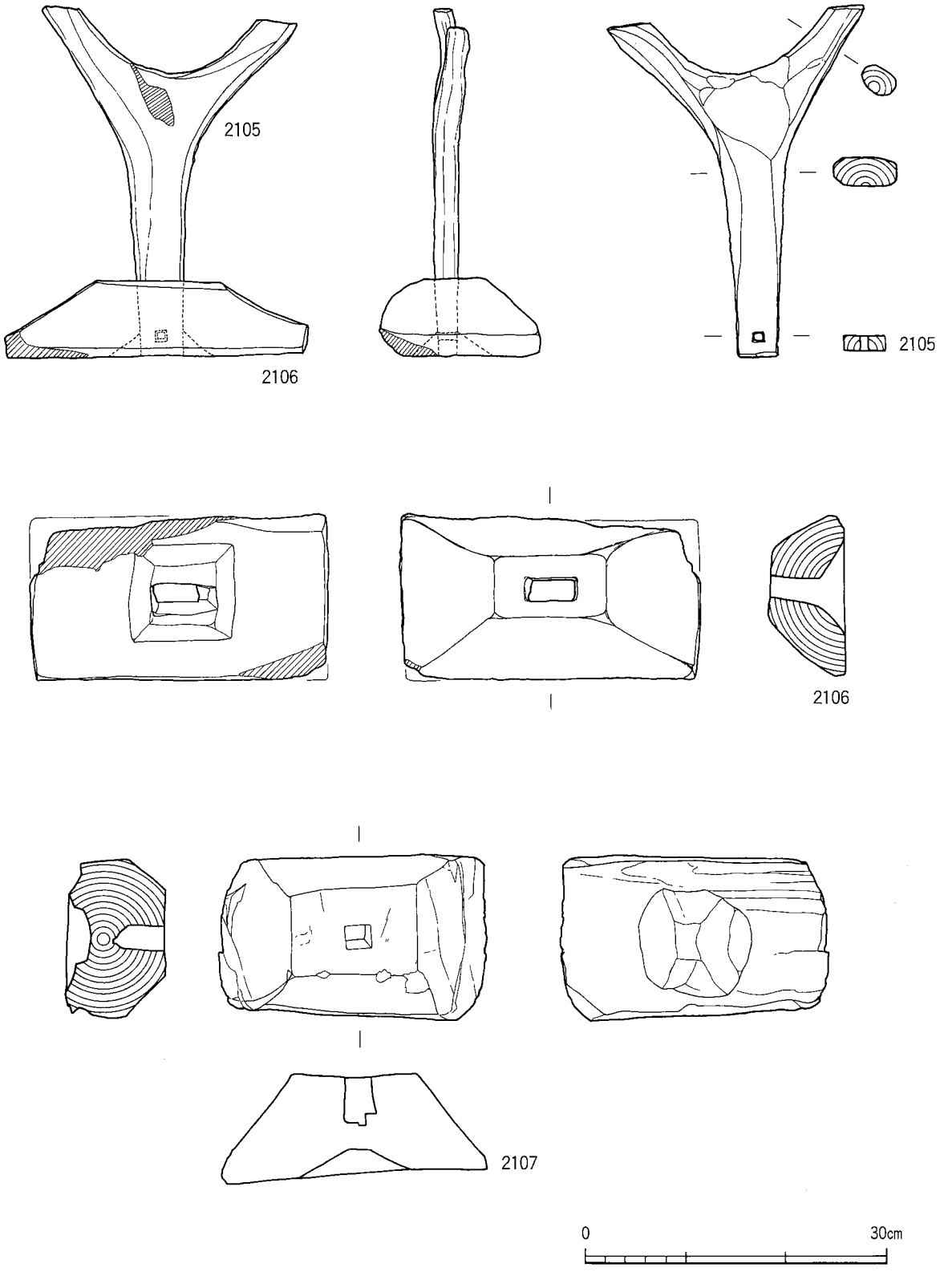


SD72001(2095・2098)　SD72007(2096)　SR72001(2094・2097)

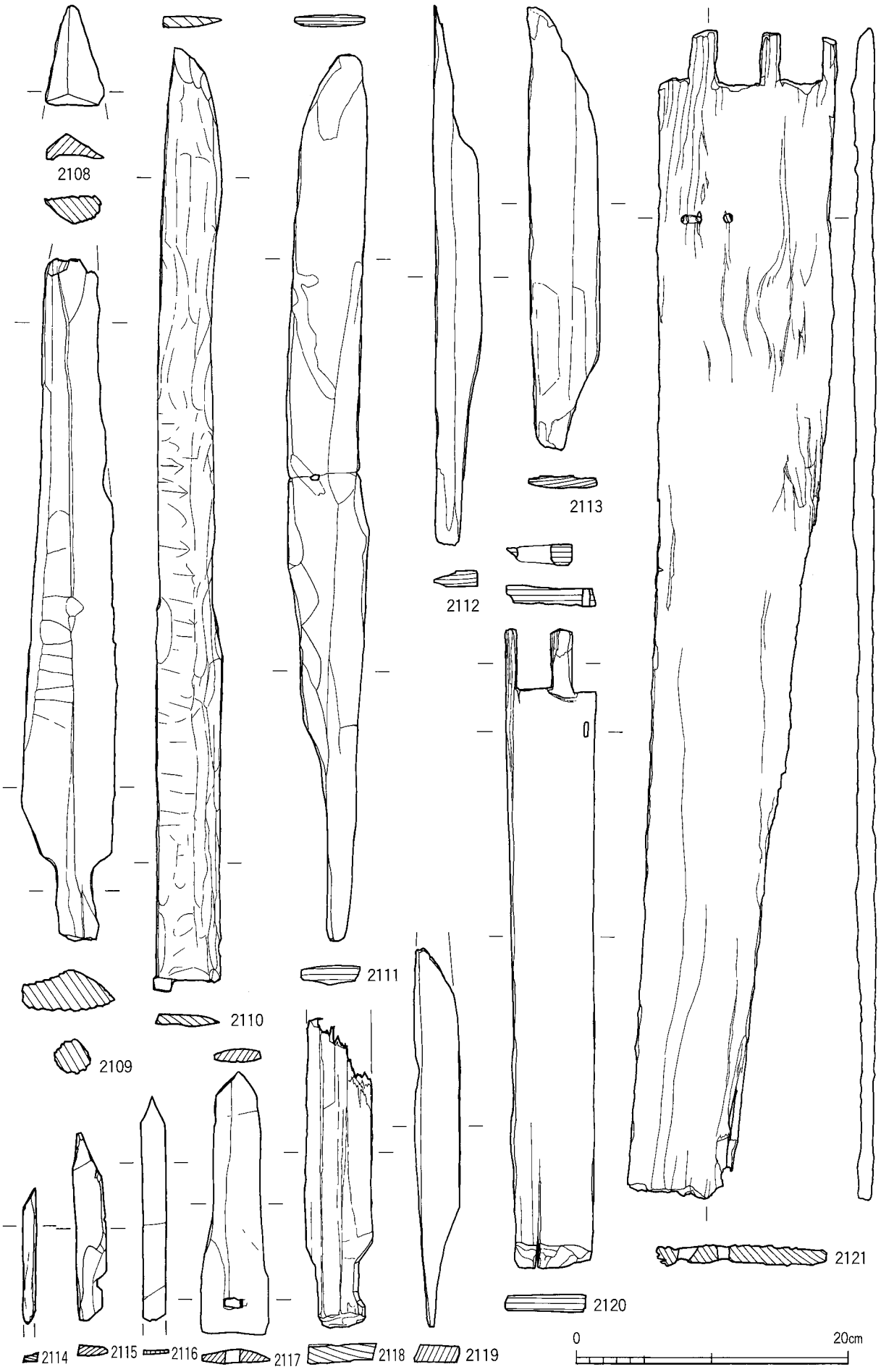


SD72001(2099～2102・2104)　SD72007(2103)

木器21

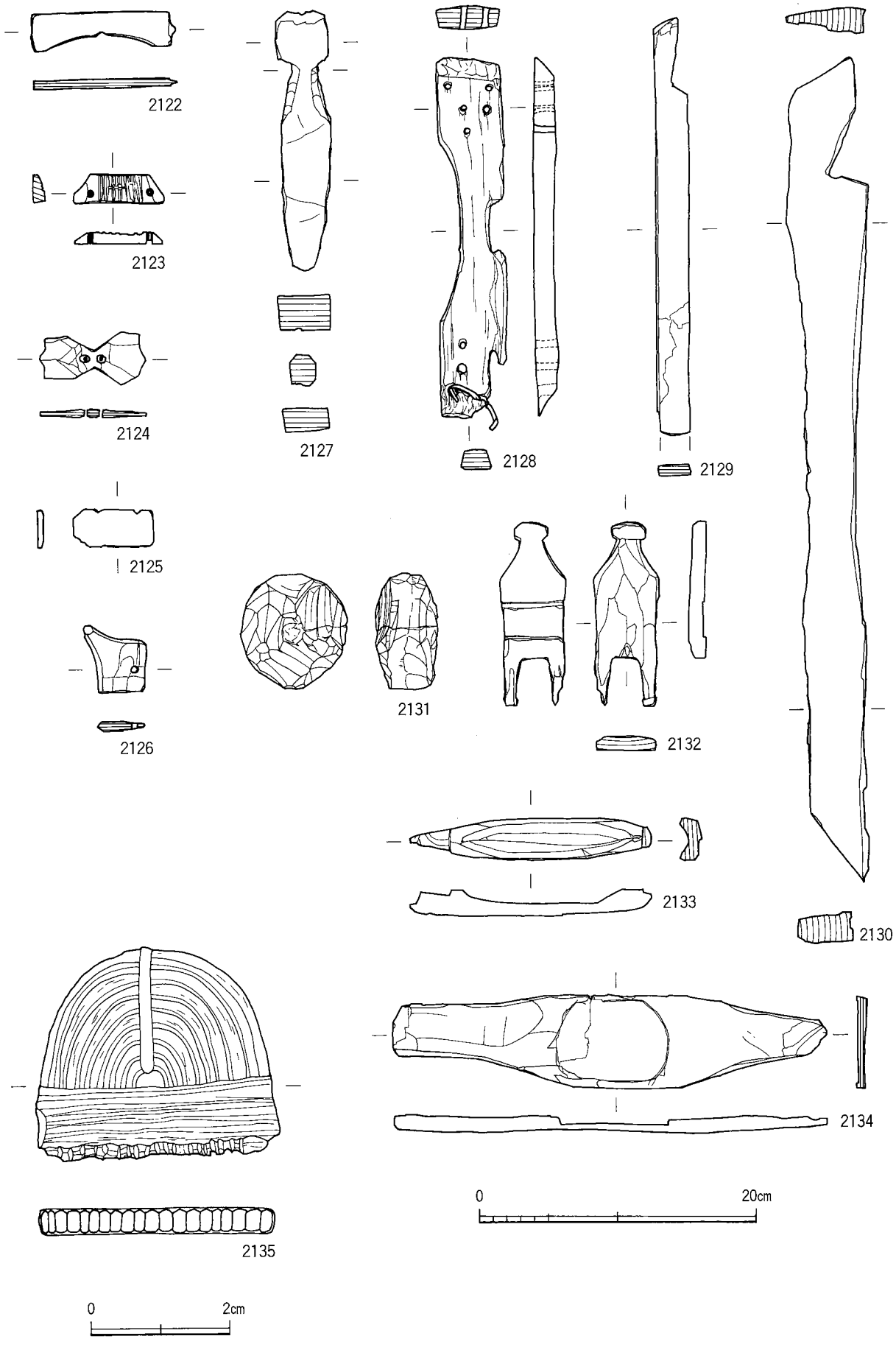


SD72001(2107)　SD72007(2105・2106)

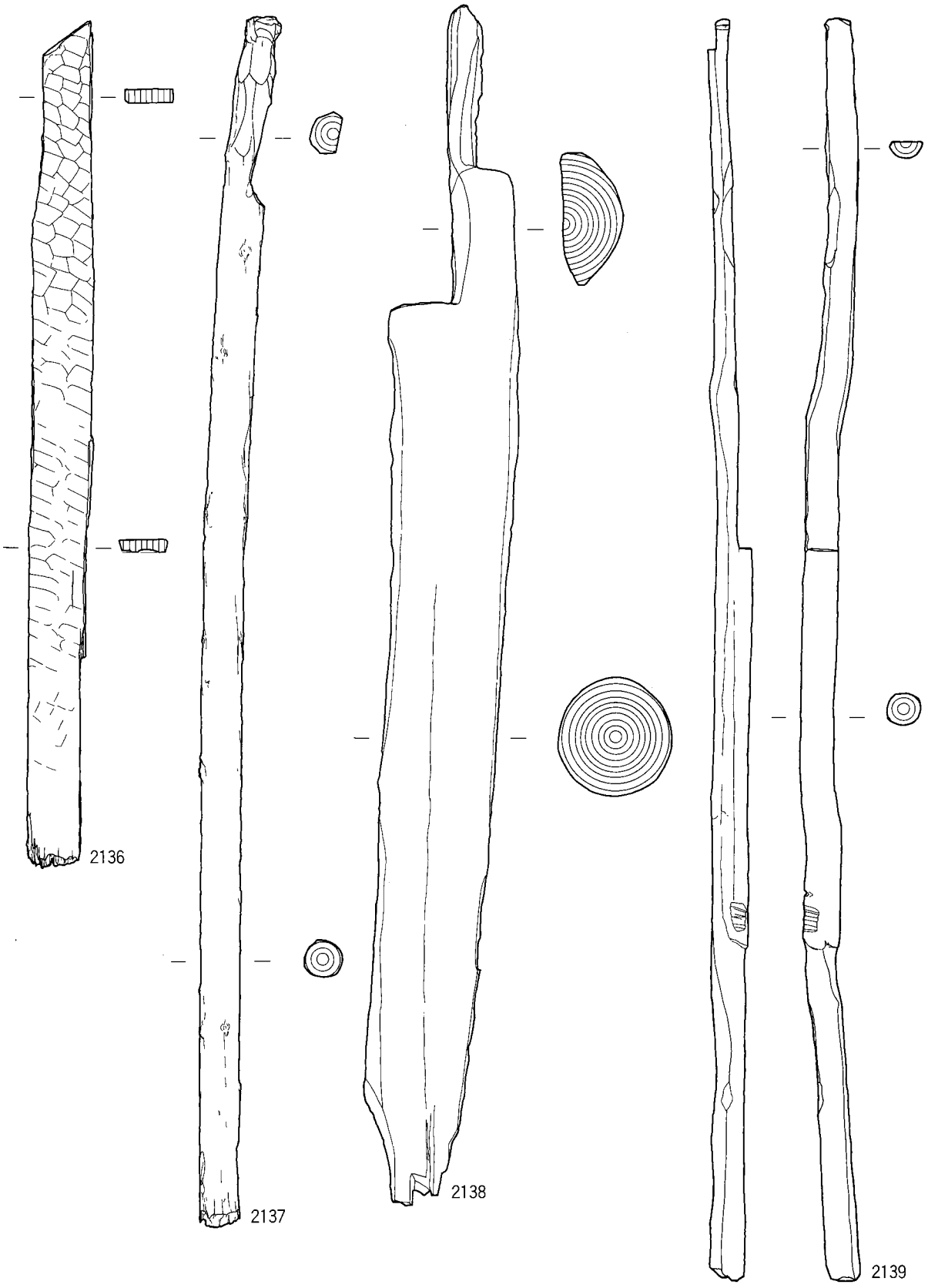


SD72001(2110・2112～2120)　SD72007(2108・2109・2121)　SR72001(2111)

木器23

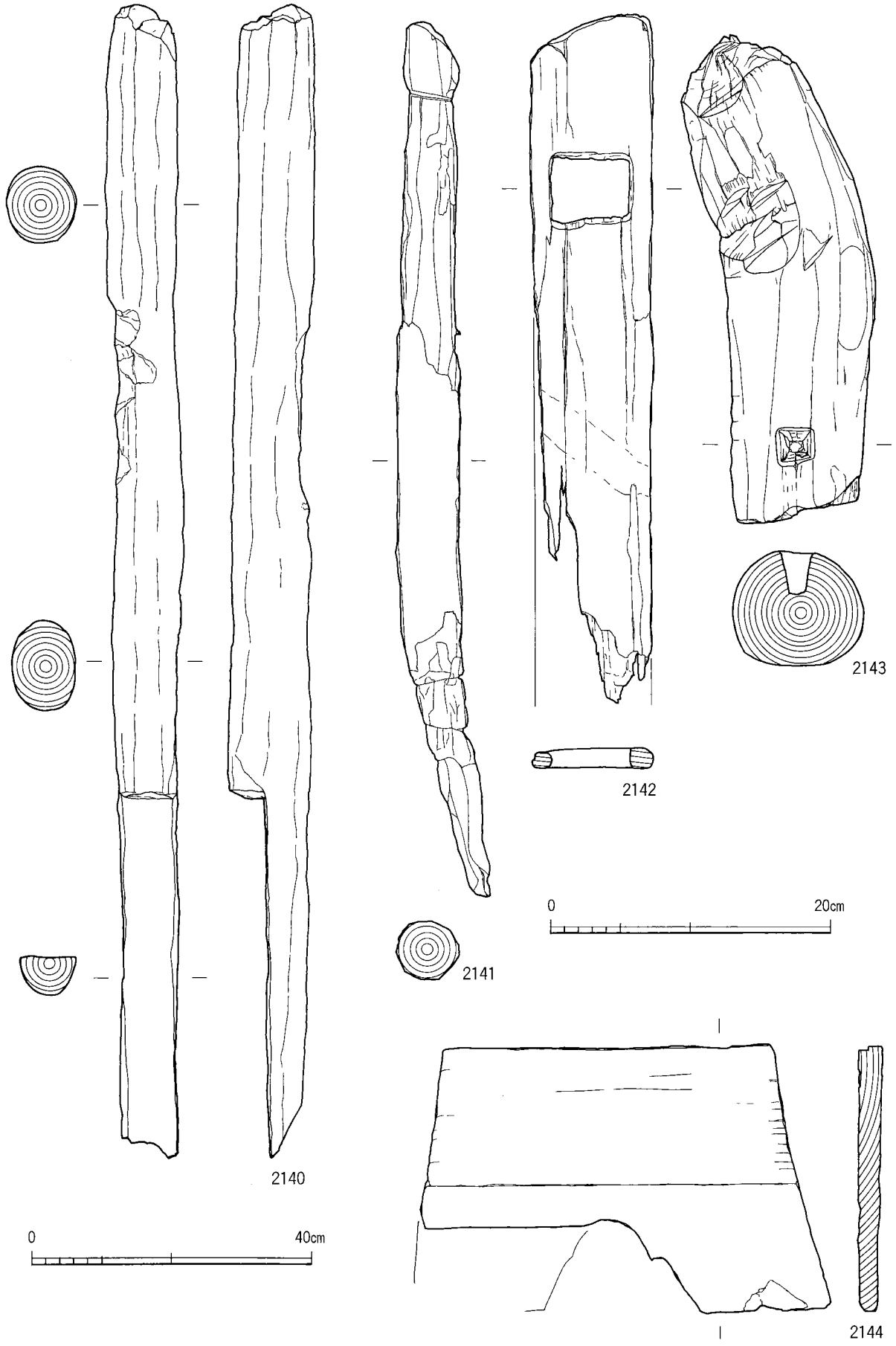


SD72007(2122～2126・2128～2133・2135)　SR72001(2127)　SR52001(2134)

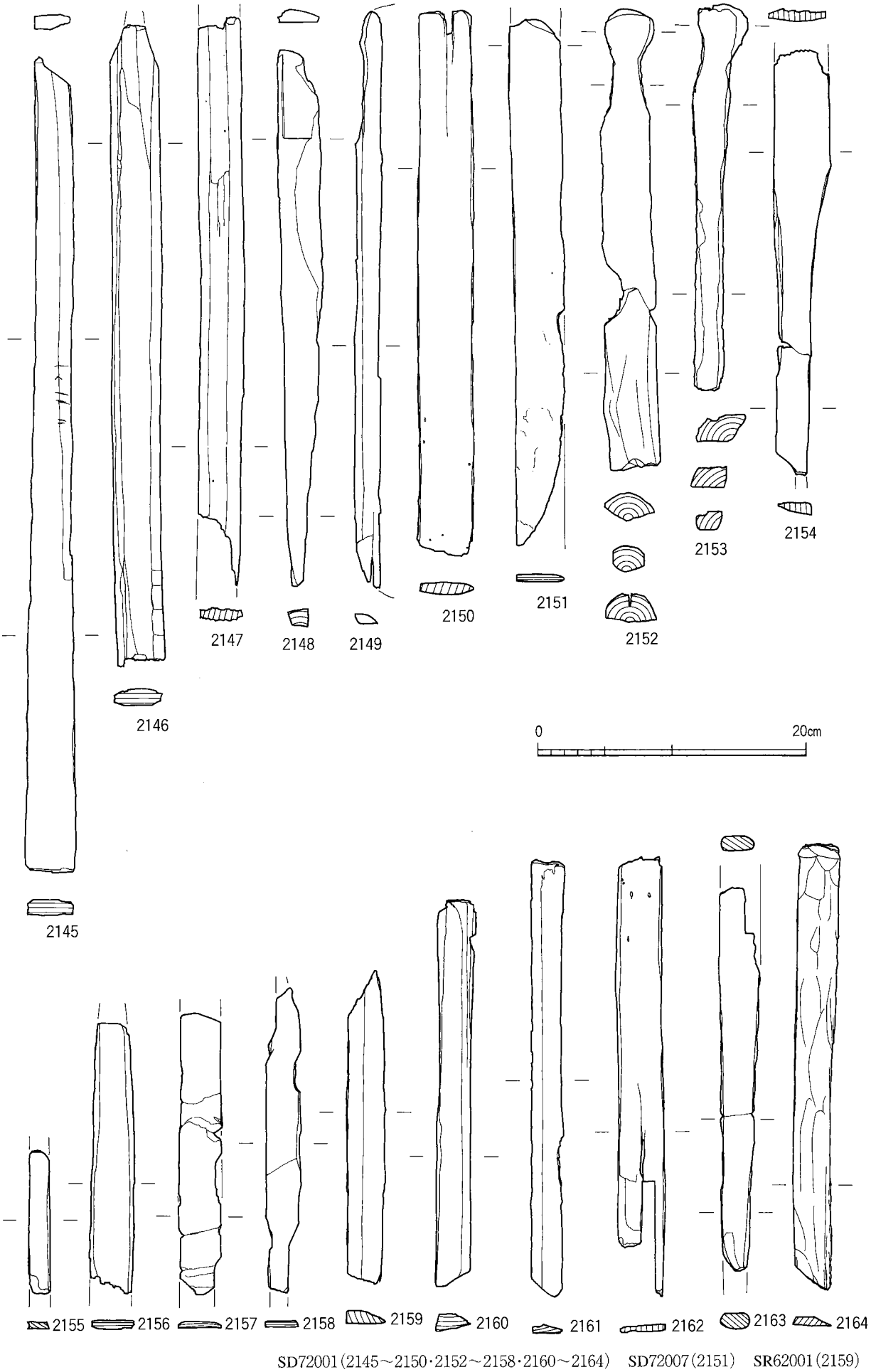


池ノ内9区SR62002井堰

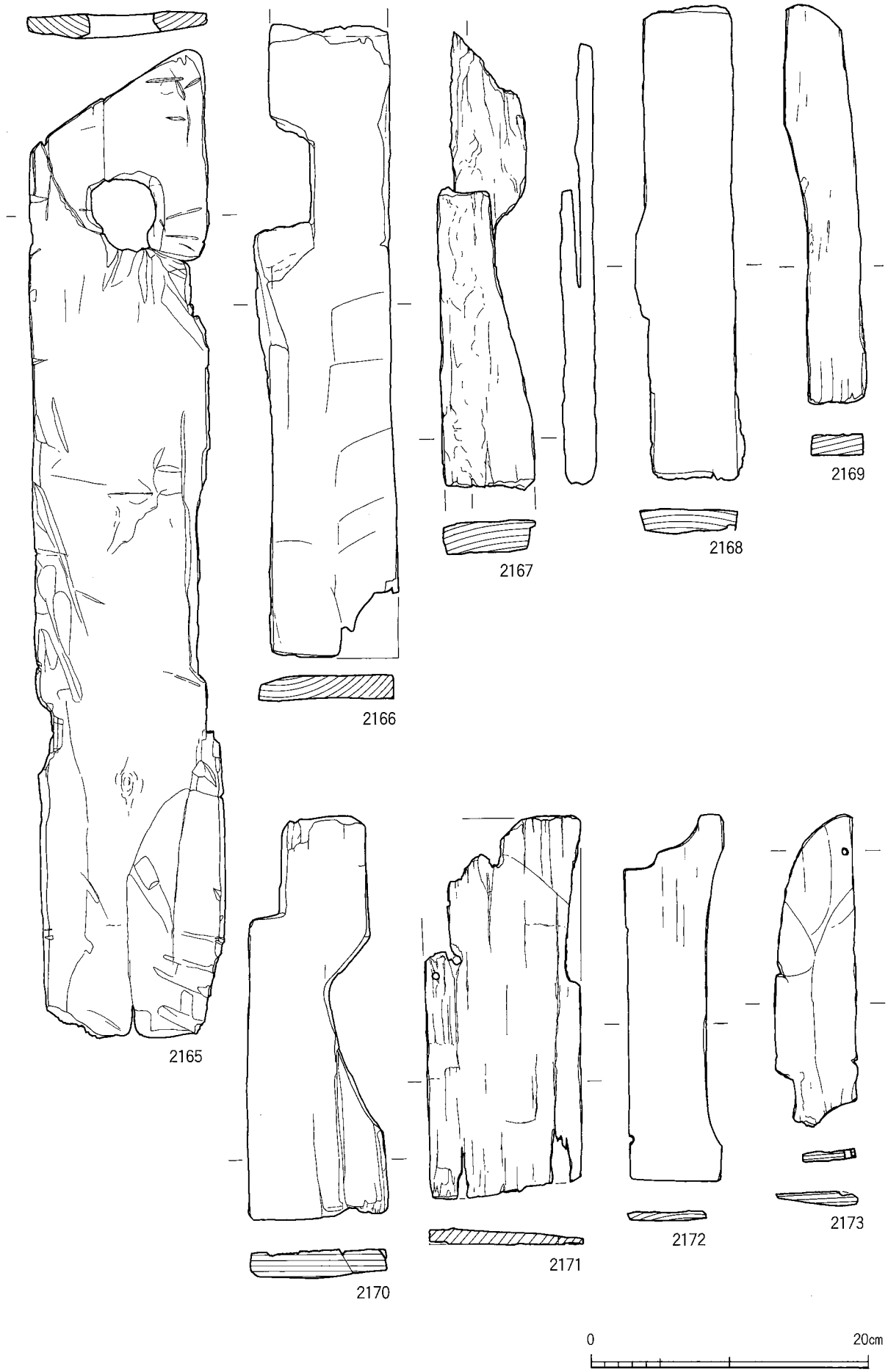
木器25



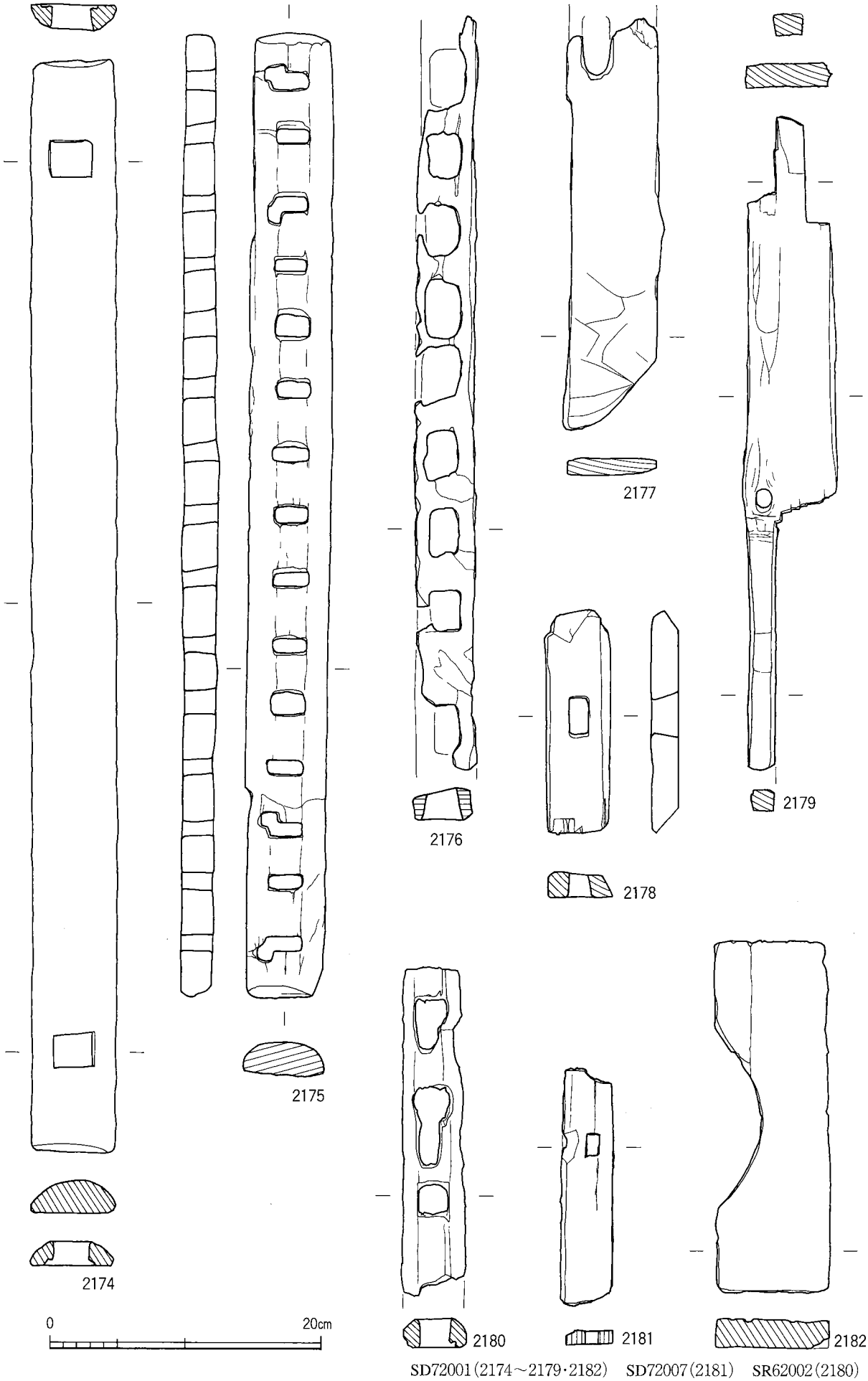
池ノ内９区SR62002井堰



SD72001(2145～2150・2152～2158・2160～2164)　SD72007(2151)　SR62001(2159)

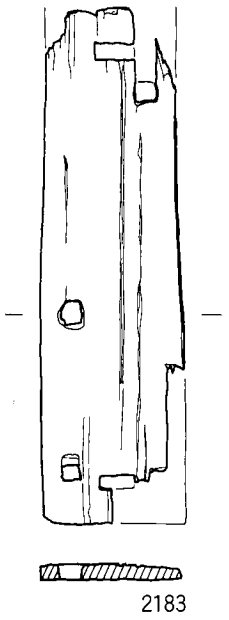


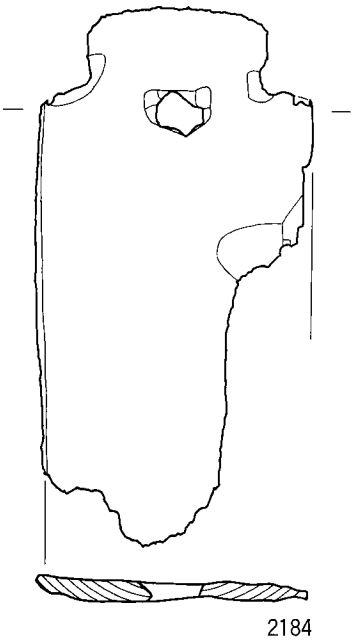
SD72001(2166・2168～2171・2173)　SD72007(2165)　SR72001(2172)　SR62002(2167)

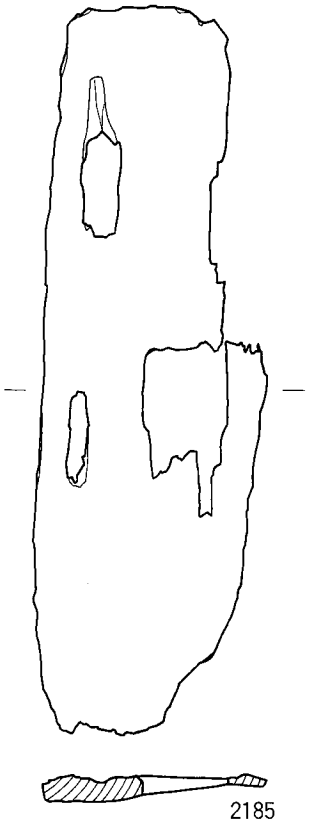


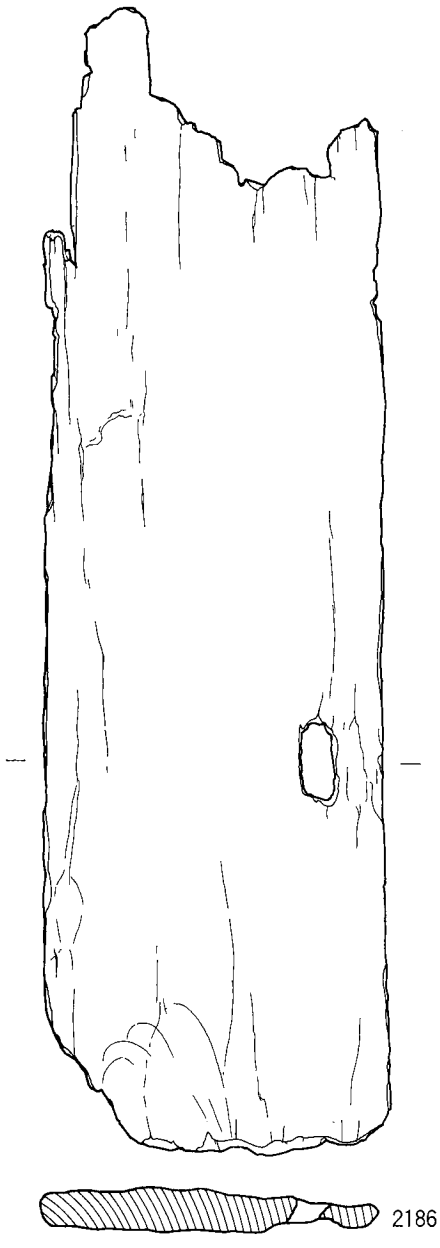
SD72001(2174～2179・2182)　SD72007(2181)　SR62002(2180)

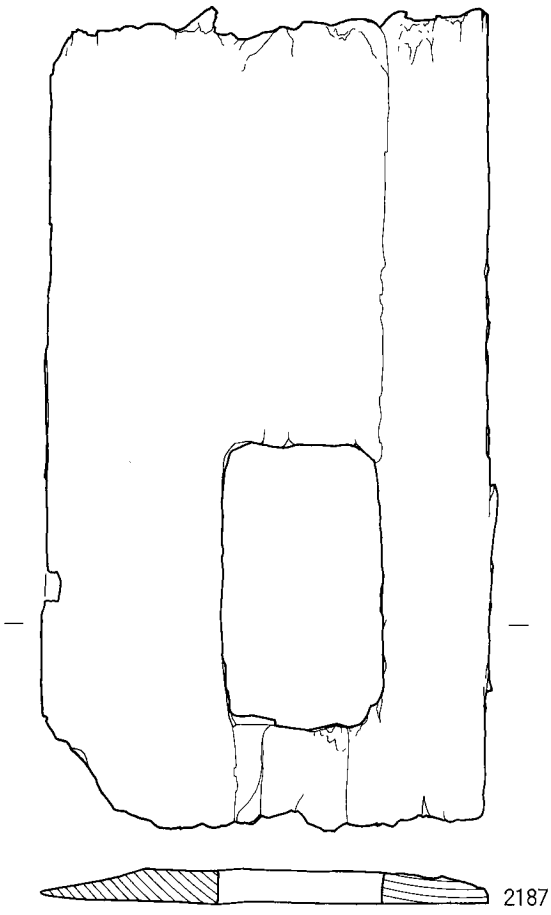
木器29


2183


2184

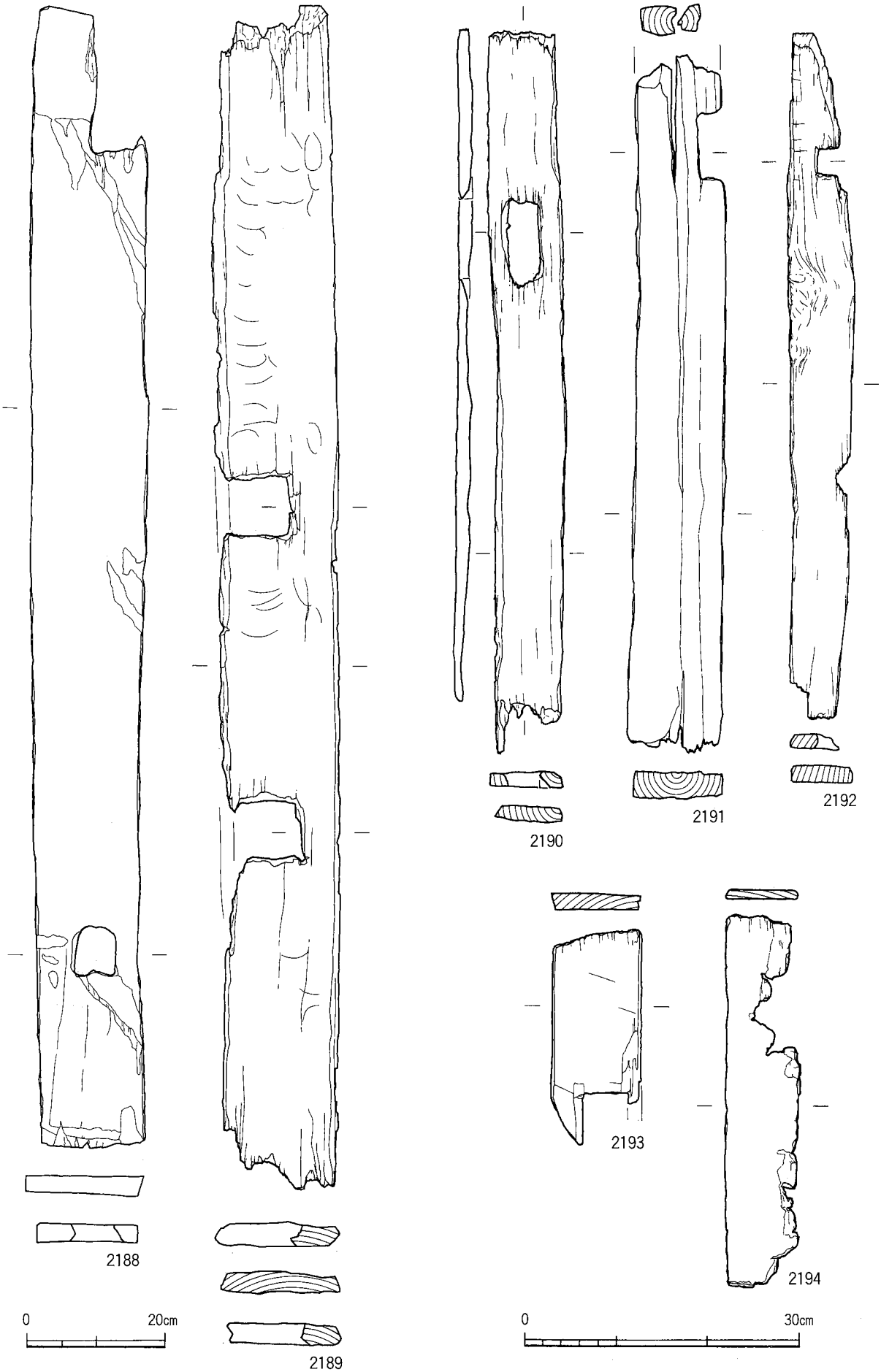

2185


2186


2187

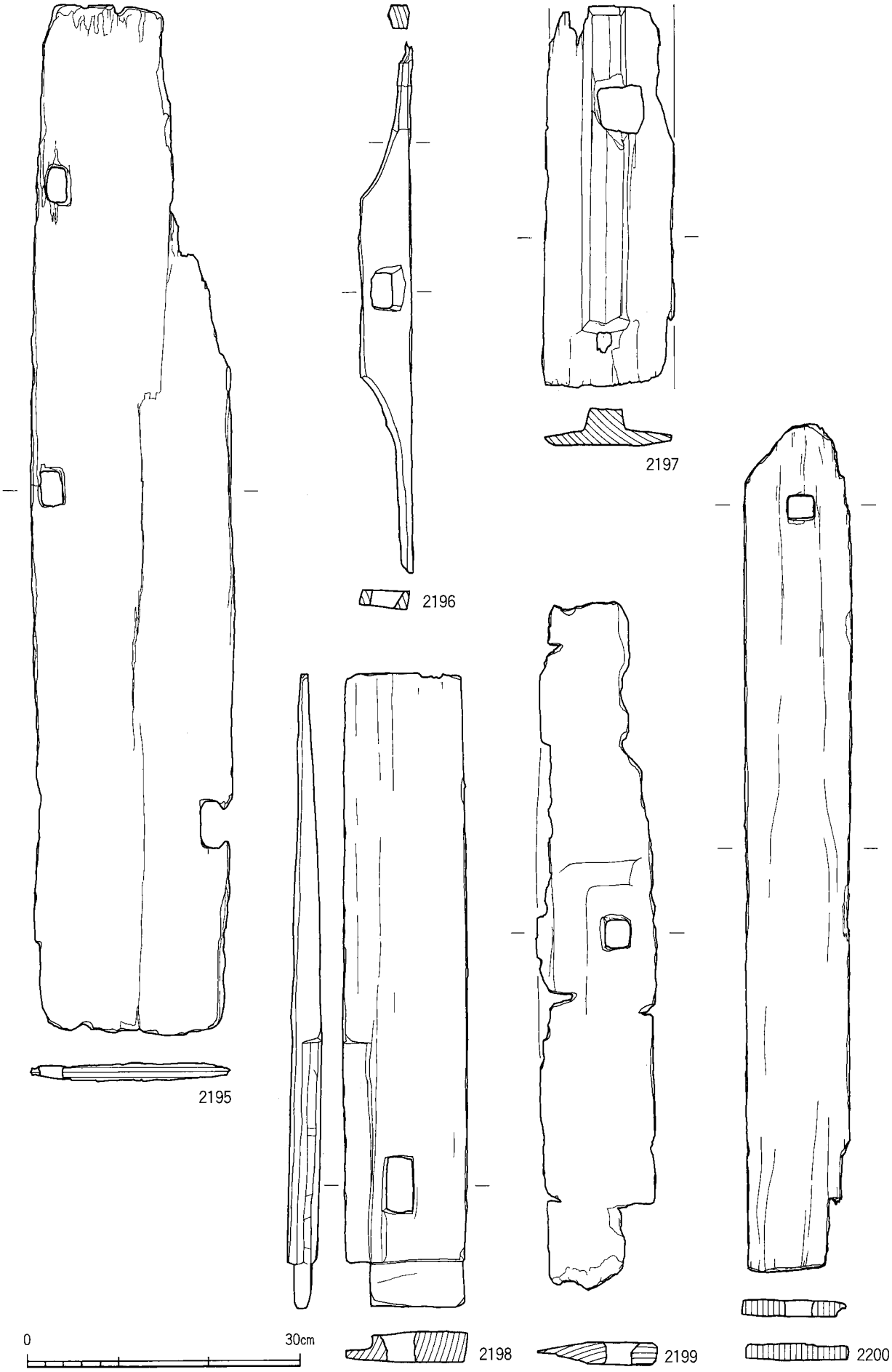
0 20cm

SD72001(2185)　SD72007(2183・2184)　SR72001(2187)　SR62002(2186)



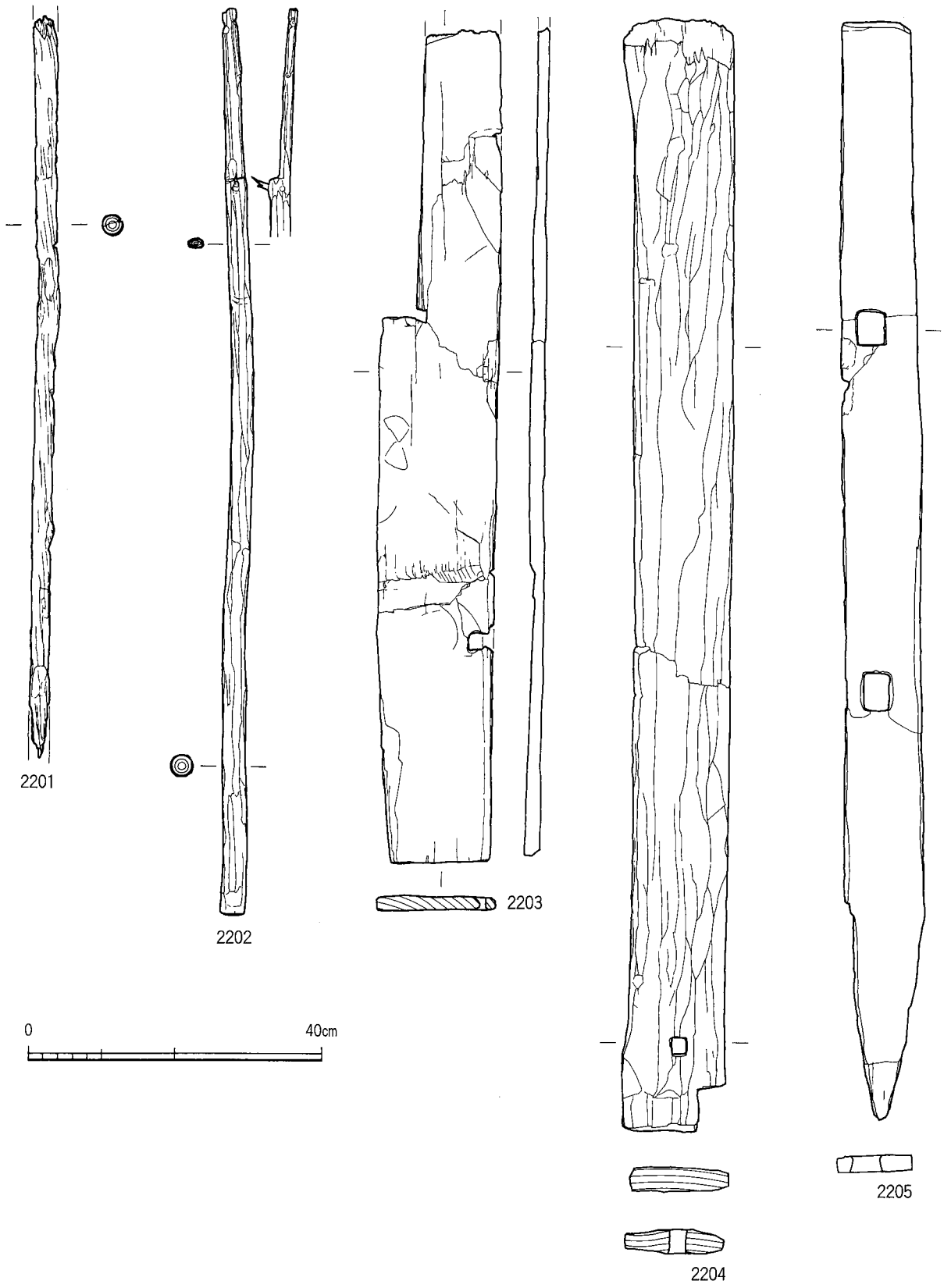
SD72001(2188・2189・2193)　SD72007(2190・2194)　SR72001(2191)　KM 1 区(2192)

木器31



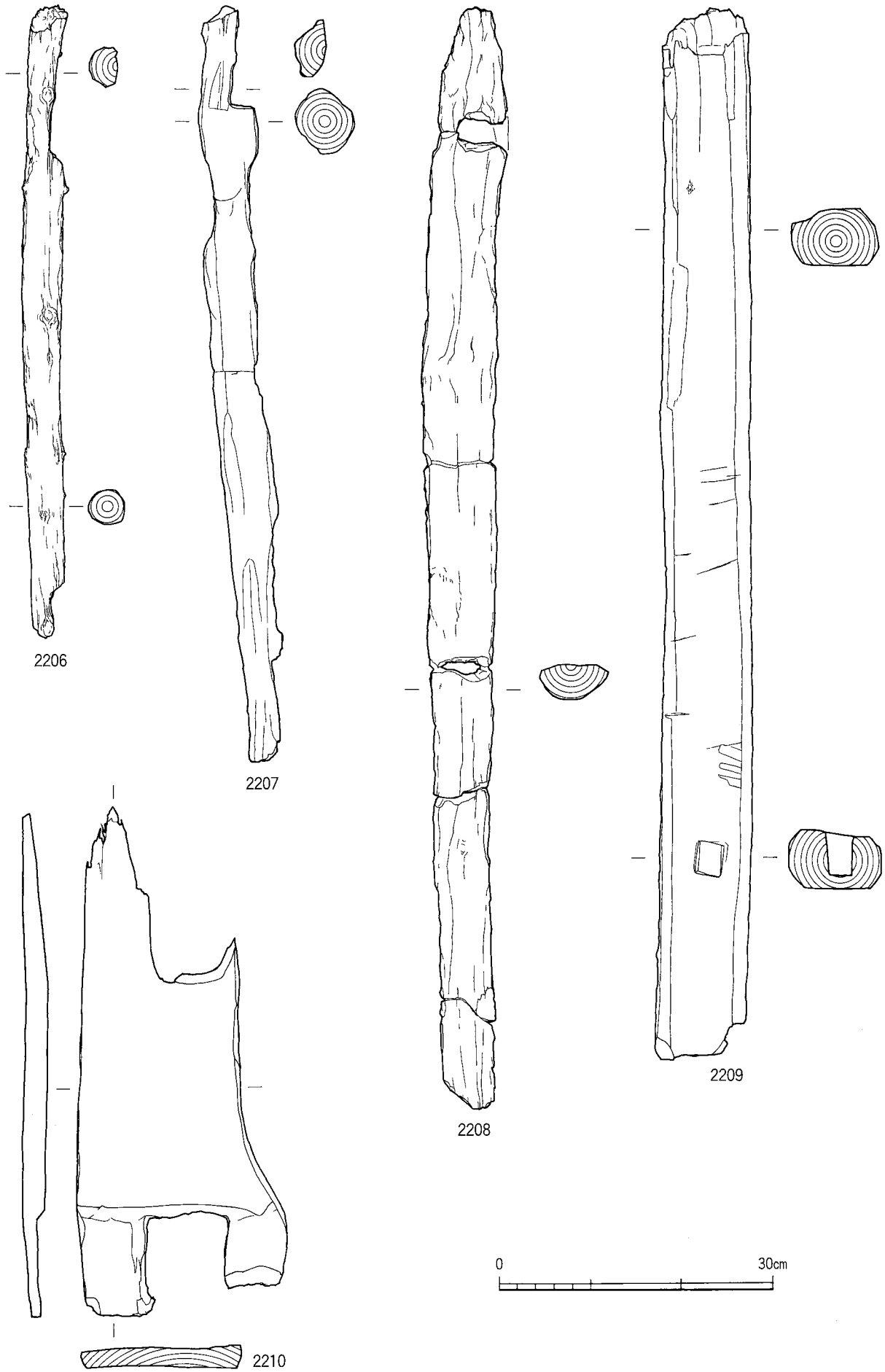
SD72001(2197)　SD72007(2200)　SR72001(2195・2198)　SR62001(2199)
SR62002(2196)

図版188
2201～2205

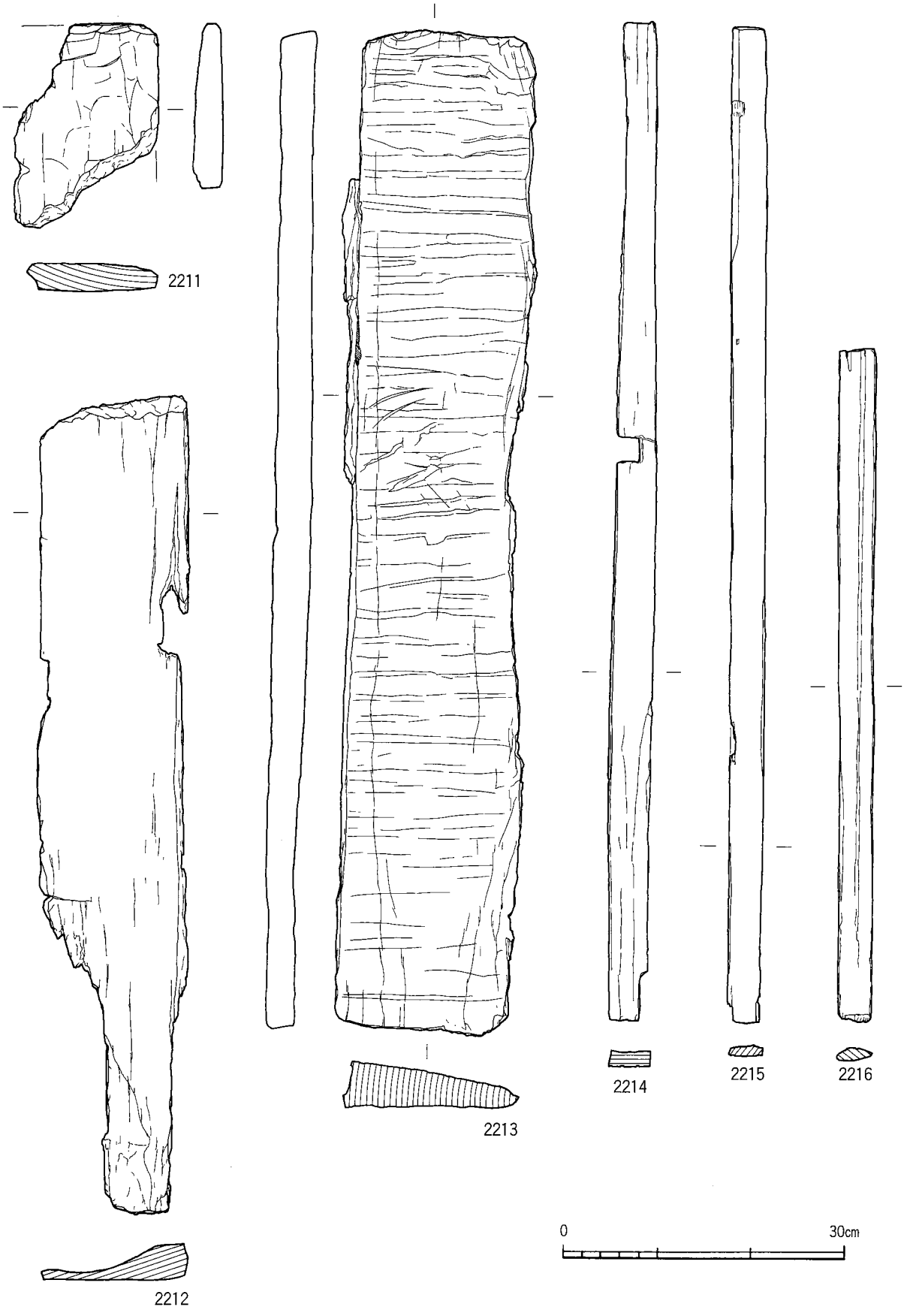


SD72001(2201～2204)　SR72001(2205)

木器33



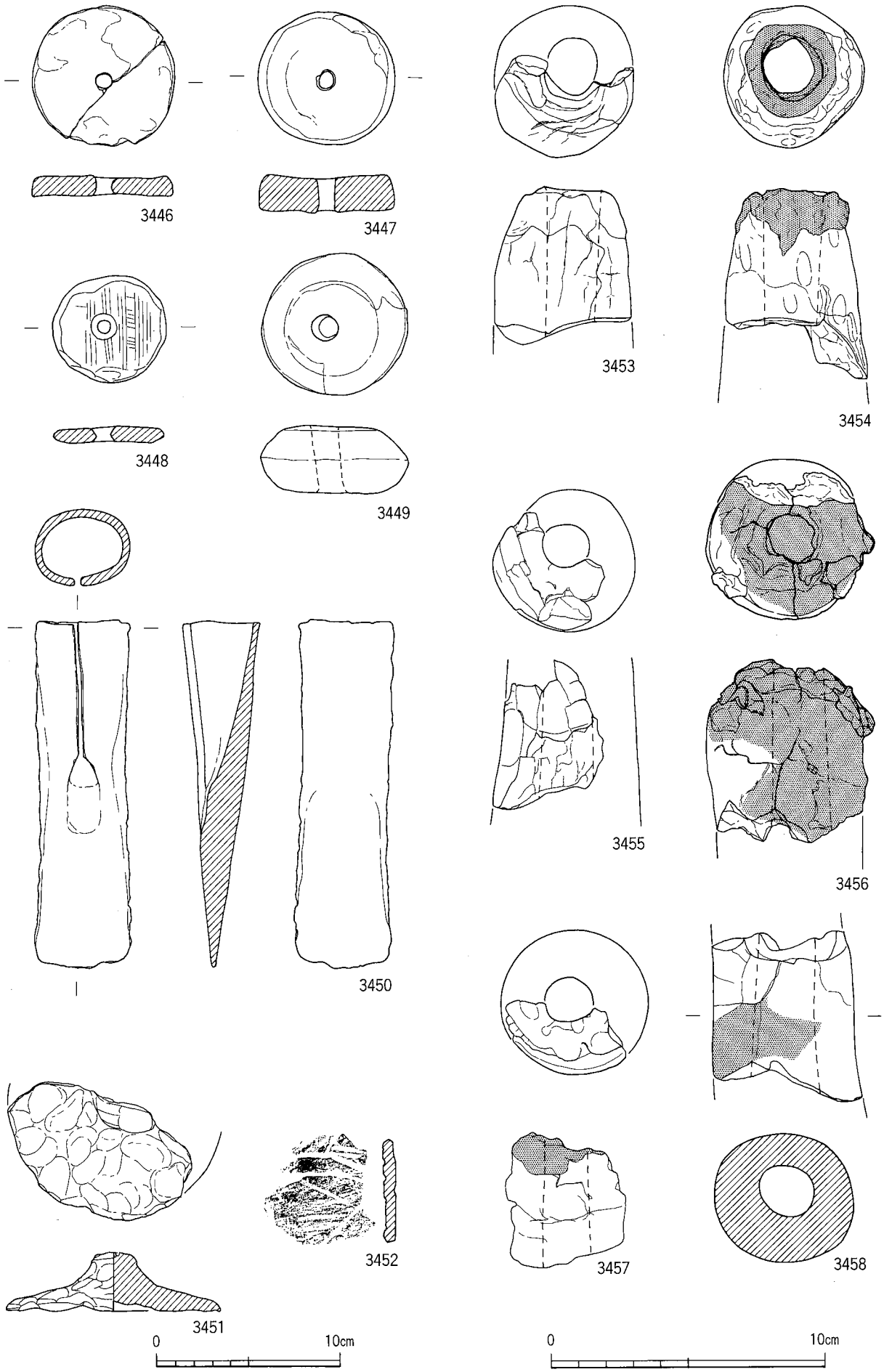
SD72007(2206・2208・2209)　SD62001下層(2210)　SR62002(2207)



SD72001(2214～2216)　SD72007(2212・2213)　SH22007(2211)

木器35

SD72001(2217)　SR72001(2220・2221)　SR62002(2218)　SD42001(2219)



黒岡１区SK22020(3446)　黒岡２区SK22013(3447)
SD72001　亀ノ郷７区(3449･3451･3452)　亀ノ郷８区(3450)　西ケ市６区(3455)
SD72007　西ケ市７区(3456)　西ケ市地区KM７区(3457･3458)
池ノ内１区SR72001(3453･3454)　池ノ内10区SR62002(3448)